

ワールドウィッチーズ  
転生記 1944~1967

すたーりん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある3人の軍人が転生!?

アニメとはまた違う世界線を作り上げてゆく

※ 八章以降3人が出てくることはほぼなくなります。その所を気をつけてね

# 目次

## 第一章 ブリタニア戦役

転生	1
ぷろろーぐ	8
新しい家族	12
第4話	17
戦争そのいち	22
戦争話その二	28
再開	35
8話模擬戦	52
9話 夜間哨戒	62
10話再開②	71
11話 パーソナルデータ	77

12話はい、すごい、やわらかあい  
83

13話いつしよだよ  
92

14話 密談、強盗、空襲、防空、魔女、

子供  
116

15話 君を忘れない  
163

16話 守りたいもの  
185

17話 信じて欲しい  
205

18話 空へ  
227

19話 ストライクウィッチーズ

248

ズ 第一・五章 説明 ブレイブウィッチー

20話	その後	265	29話	離着艦訓練	431
第21話	—	275	二章	ローマーニヤ戦役	—
22話	会議	305	30話	ローマーニヤ戦役	443
22・5話	機体紹介	325	31話	ジェットストライカーは技術	—
23話	初飛行と新人くん?	331	が必要	—	499
24話	サトゥルヌス(クリスマス)の	350	32話	愛は勝つ	522
お届け物	—	350	33話	扶桑新型ジェットストライ	—
25話	クリスマスは例年通り付いて	365	カー	—	531
ないお二人	—	365	34話	ペリーヌ回?知りませんね、	—
26話	食事会?	371	マルセイユ大尉参上!	—	569
27話	整備 帰還	379	35話	欧州の新たな光	—
27・7話	年越し	394	パンテレリア会談	—	610
28話	スクランブル発進	422	番外編・空戦	実はやっていたマル	—

セイユトの空戦	614	4 2 話	クロマイト作戦	737
番外編・雑談 不発?の爆弾	621	第六章 平和		
番外編 とある建築画家の話	633	4 3 話	新軍管区長とゴタゴタと国際	
第三章 偶然の戦闘		演習		
3 6 話 休み?	637	4 4 話	新技術・パイロット見習いの	771
3 7 話 船旅	655	初訪問		
3 8 話 欧州での戦闘	678	4 5 話	問題児との対談	818
第四章 ベルリン解放戦役		4 6 話	家出	822
3 9 話 ベルリン奪還	689	4 7 話	再会	830
4 0 話 大戦の終わり	698	第七章 ヴェトナム戦争		
設定集(ネタバレあり)	707	4 8 話	ヴェトナム	879
第五章 高麗戦争 1950		4 9 話	墜落	890
新たな戦争	720	5 0 話	エピソード	896

砂漠の魔女達

51話 砂漠の魔女達のプロローグ

砂漠の魔女達 着任

お手紙

1064 941 904

# 第一章 ブリタニア戦役 転生

2020年

神「どうも 神でえくすく」

神「あのね女神とのジャンケンに負けたからね

安田悠太くんをねストライクウィッチーズの世界に送る」

悠太「は？は？」

神「ごめんね」

悠太「え？え？なぜ？」

神「ゆうたやんじやんけんに負けたって」

悠太「・・・あ、ふーん（ダメだこいつなんとかしないと…）」

神「うんしゃ…行ってこーい」

びろびろーん

悠太「（え？おちてるうううう）」

ざっぼーん

芳佳 「え？リーネちゃんなんか人が落ちきてたよ」

リーネ 「芳佳ちゃん！助けに行かないと！」

芳佳 「うん！行かないと！」

悠太 「（ああ…記憶が遠のいていく…）」

パタ

タツタツタツタツタツタ

芳佳 「大丈夫で…た、倒れた！」

リーネ 「医務室に連れて行こう！」

芳佳 「そ、そうだね！」

リーネ 「え？これユニット？」

芳佳 「そうみたいだね」

く 医務室く

芳佳 「大丈夫なんですか？」

看護婦 「気絶してるだけ見たいね」

芳佳&リーネ 「よかったあ…」

く 天国く

神 「よっ、数分ぶりだな」



悠太「あのお…言語とかつてのは…」

神「あ、その点は大丈夫扶桑語、ブリタニア語はもちろんカールスラント語、ロマニーヤ語、スオムス語、オラーシヤ語、ガリア語を喋れるようになってるからもちろん読み書きもね」

神「あと所持品はナイフとグロック17とドッグタグ1個とスマ

ホだねスマホは君の魔法で充電できるしどこの

サーバーにも接続出来る様になってるよ」

神「あ、あと歳を若くしといた！15歳にね」

悠太「色々チートなんじゃ…」

神「気にしな…いい気にしな…いって事でいってら」

悠太「う…ん天井が白い…」

芳佳「起きたんですね！」

リーネ「私、先生呼んでくる！」

数時間後

ミーナ「この人がその落ちて来た人？」

芳佳「はいそうです」

ミーナ「私はミーナ・デートリンデ・ヴィルケだわ階級中佐、所属は第501統合



悠太「あと僕の所持品返してもらえますかね…」

ミーナ「ああ、この板みたいなのとドッグタグだけなら…」

悠太「ありがとうございます」

ミーナ「悠太さんウィッチなの？」

悠太「男ですけど…」

ミーナ「ならなんでストライカーがあつたのかしら…はっ、もしかして悠人さんウィッチ？」

悠太「ウィッチ？ウィッチャード？なんの話ですか？」

ミーナ「ちよつと待ってね」

ミーナ「やっぱり、悠太さんウィッチャードだわ」

悠太「つまり魔法使いなんですか…」

ミーナ「そうね…」

(以下スト魔女の世界説明後)

悠太「この世界でも戦争か(ボソ)」

ミーナ「？どう言う事かしら？」

悠太「自分の世界でも戦争をしてたんですよ…」

ミーナ「ネウロイと？」

悠太「違います人と人の戦争ですよ」

ミーナ「えっ……」

悠太「……」

ミーナ「……」

沈黙の数分後

美緒「入るぞ」

ガラガラ

ミーナ「美緒！この人が宮藤さんが助けた人よ」

悠太「えーつと……」

美緒「坂本美緒だよろしくな」

悠人「安田悠人ですよろしくお願いします？」

ミーナ「悠人さんこの部隊に入ってもらっていいかしら？ねえ美緒？」

美緒「ああ、問題はないと思うが……」

悠太「え？いいんですか？」

ミーナ「ええ問題ないと思うわ」

美緒「こいつの固有魔法は？」

ミーナ「まだ見てないわ」

悠太「固有魔法？」

ミーナ「ウィッチ、ウィザードには稀に固有の魔法があるのよ」

美緒「ああわかつたぞ」

ミーナ「なんだった？」

美緒「超回復だ」

ミーナ「え？超回復って宮藤さんとかと同じって事？」

美緒「そうみたいだがこいつは意識があれば自分のことも回復できるみたい」

美緒「使い魔は秋田犬だな」

悠太「その魔法はどうやるんですか？」

ミーナ「指先集中してみてもそれですわと思うわ」

びよっ、びよっ、

悠人「尻尾が生えた耳も生えた」

美緒「ミーナ」「うそ……」

美緒「宮藤より大きいぞ悠人……」

数分後

看護師「明日には歩けるようになるわ今日はゆっくりしない」

## ぶろろーぐ

注意 軽いネタバレ等々と適当な雑談してるから見たくないと思つたら見なくて  
もいいです

神「おひさ！ 神じやつて事で今回はなんか安田悠太くんがいた国の紹介だ」

日本国

2012年までは読者さんと同じそつからは唐突な2012年2月に北朝鮮による  
宣戦布告

半月後にはアメリカによる上陸作戦の未降伏

その後2013年に自衛隊の解体及び日本国防軍の成立

2014年4月に韓国が日本の軍国主義化したと言うことで宣戦布告

半年後には降伏

その後日本国防軍はいろいろありながらなんかこう頑張った（ヤケクソ）

第三次世界大戦編

2018年中華人民共和国がウラジオストクに宣戦布告なしで奇襲これを受けた口  
シア軍は遅延戦闘をしながら後退を開始

一時期はウラル付近まで撤退したがこの緊急事態を重く見たアメリカ合衆国はロシア連邦をNATOに招待

NATO準加盟国していたおかげがあっさり快諾

NATO主力軍は対ロシアを気にすることがなくなつたために即座に軍団を移動対中国戦線に加わり快進撃をしバイカル湖まで前進したが冬が来て停滞

ここから地獄が始まった：

つて感じまあ用は世界大戦だよね！

悠太「やあ僕の紹介だね！」

名前安田悠太

誕生日1989年9月13日31歳（元の世界だと）ストライクウィッチーズの世界では15歳となっている

所属 日本国防空軍

階級 防空軍大佐

使い魔 秋田犬

固有魔法 超回復（自己回復も可）（自己回復は意識がある場合のみ可）

愛称 デス・ファイター

ユニット F-16j（これは日朝戦争後に日本がアメリカのF-16を買ってライ

センス生産したものさ)

武装 JM61バルカン(20x82mm仕様にしたって神が言ってた)

撃墜数439機(航空機)

撃破数267両(地上艦艇合わせて)

所持品 スマホ、ナイフ、グローブ19、自分のドッグタグ、幼馴染のドッグタグ

趣味 料理

苦手 片付け

戦歴

日朝戦争

日韓戦争

第三次世界大戦(北大西洋条約機VS中国あとその辺のアフリカ諸国)

NATOは日露印加盟済み

撃墜理由 北京市上空での空戦

転生理由 神が女神とのジャンケンに負けた為

ユニット説明

フアアアアアイティイイイイイイング・フアアアアルコン説明不要!

ウィッチーズ面々はたいして変わらないのでまたそこんところはよろしく



ヒロインを誰にするか悩むよなあ：

中の人の推しはリーネなんだが、リーネにすると英国系のことをもう一度調べないといけないしでいろいろ悩んでるんですよ。

あとはサーニヤエイラかなあ悩んでおります。

これって1000文字まで書かないといけないんだね（

初めて知った

だからあと書きに書くようなこと書いてるんですけどね!!

えつと話題が：ああ、そう言えばこれが投稿される日の深夜にはワールドウィッチーズ発進しますっ！の3話ですね楽しみですわ

あ、ちなみにこれ書いてるのは朝の7時だったりします

今日は仕事ないからね仕方ないねって事で1000文字行ったので終わりまーす！  
じゃの

## 新しい家族

悠太「ふあああよく寝た今の時間は…5時か…」

美緒「ハッハッハッハ」

悠太「なんだあれ（美緒を見ながら）」

テクテクテクテク

悠太「おはようございます坂本少佐」

美緒「ああ、おはよう悠人」

悠太「何してるんです？」

美緒「見てわからんのか素振りだと素振り」

悠太「は、はあ…」

美緒「そういえば階級を聞くのを忘れてたな階級は？」

悠太「元の世界では大佐でした」

美緒「はっ、これは失礼いたしました！」

ビシッ

悠人「ああ別に敬語とか入りませんよ堅苦しいのは苦手だね」

美緒「いいのですか？」

悠太「いいんですよこの世界だとまだ決まっていますし」

美緒「ああそういえばユニットなんなんだ？」

悠太「ユニット？」

美緒「現代の箒だよ」

悠太「なるほどそれで飛ぶわけか」

悠太「まだ現物を見てないので何もわかりません」

美緒「そ、そうか……」

く数分後く

ミーナ「皆さんブリーフィングルームに集まってください」

く更に数分後く

ミーナ「今日から家族が増えます！」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

バルクホルン「ミーナ！そんな話し聞いてないぞ！」

ミーナ「ごんね突然決まったの……」

ミーナ「来て」

テクテクテク

ざわざわざわざわ

リーネ「芳佳ちゃん昨日の人じゃない？」

芳佳「やっぱりそうだよねリーネちゃん」

ルツキーニ「うじゅ？男？」

ハルトマン「男だね」

エイラ「男ダナ」

イエーガー「男？」

バルクホルン「男じゃないか！」

ペリーヌ「あ、朝少佐と話していた！」

ミーナ「(手を叩く)」

ミーナ「自己紹介を」

悠太「安田悠太・階級は大佐、所属は日本国防空軍第501飛行隊15歳です」

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

美緒「こいつは別の世界から来たんだとさ」

「『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』」

ミーナ「そうね彼は2020年から来たらしいわ」

「『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』」

悠太「こつちでいう扶桑だよ」

悠太「あのミーナさん階級はどうすれば：国防空軍のままでよろしいのですか？

ミーナ「ああそれなら大佐のままでもいいわよ」

悠太「つまりミーナさんやよりも高いのか…」

ミーナ「そうねでも隊長だから従ってもらわよ」

悠太「はいわかりましたあと私には緩い感じでいいです堅苦しいの苦手なので…」

ミーナ「家族なもの」

ミーナ「解散！各自で自己紹介をしてね」

芳佳「宮藤芳佳です階級は軍曹です」

悠人「宮藤、昨日はありがとう」

芳佳「は、はい」

バルクホルン「ゲルトルート・バルクホルンだ階級は大尉だよろしく」

悠太「ああバルクホルンよろしく」

リーネ「リネット・ピシヨップ 軍曹です、よ、よろしく願います…」

悠太「リーネ昨日はありがとう、よろしく」

ペリーヌ「ペリーヌ・クロステルマンですわ中尉ですよろしくですわ」

悠太「ああよろしくペリーヌ」

エーリカ「エーリカ・ハルトマン中尉だよよろしく！」

悠太「エーリカよろしく」

イエーガー「シャーロット・E・イエーガーだよよろしくな」

悠太「イエーガーよろしく」

ルツキーニ「フランチェスカ・ルツキーニだよ少尉だよ」

悠太「ルツキーニよろくな」

サーニヤ「サーニヤ・V・リトヴィクです階級は中尉です」

悠太「サーニヤよろしく」

エイラ「エイラ・イルマタル・ユージェイライネン少尉だよロシクナ」

悠太「エイラよろしく」

## 第4話

ミーナ「宮藤さん基地の案内よろしくね」

宮藤「はい！」

宮藤「ここが食堂、キッチン、ブリーフィング室です、大体これで終わりですあとはハンガーがあります」

悠太「ああ、案内ありがとうございます」

宮藤「はい！」

宮藤「そういえば悠太さんが軍人になった理由ってなんですか？」

悠太「えつとだな：国を守りたいからかな」

宮藤「そうなんですかどんな国なんですか？」

悠太「扶桑と変わらないよ」

宮藤「そうなんです？」

悠太「料理も扶桑と同じ見たいだし」

宮藤「ならご飯は大丈夫ですね」

悠太「ん？どう言うこと？料理はシェフが作るんだろ？」

宮藤 「違いますよ」

悠太 「そうなのか？」

宮藤 「昔は軍の持ち回りで作ってたらしいんですけど美味しくないと今私かリーネちゃん故作ってます」

悠太 「美味しくない…ああ、ブリタニアは特にな」

宮藤 「(無言の頷き)」

美緒 「お前基地の案内終わったのか？」

宮藤 「はい終わりました」

美緒 「13時から訓練だからな」

宮藤、悠太 「はい！」

### 談話室

悠太 「ユニットでも見てみるか…」

イエーガー 「そういえばなんの機体なんだ？」

ルツキーニ 「気になるー」

悠太 「F-16jって言うジェット機だよ」

美緒 「ジェット？なんだそれは、私も見てもいいか？」

悠太 「あ、はい」



悠太「これがF-16jのユニット…」

美緒「なんだこれはジェットか？」

悠太「ユニット化する前のは速度はマッハ2.2と言ったところだがユニット化して生身が耐えられるのか…」

イエーガー「はあ？マッハ2.2？」

イエーガー「そんなに出せるのか！」

悠太「実際の機体はなこいつで出るかはわからない」

悠太「性能テストをやってもいいか美緒？」

美緒「別に構わないが…」

びよこん

悠太「武装は…これかJM61か…」

美緒「その銃の弾はなんなんだ？」

悠太「これは20x82mm弾を使えるよ」

美緒「そうかなら補給は安心だな」

悠太「ちよつくらテスト飛行をしてくる」

ゴゴゴゴゴゴ

悠太「懐かしいエンジン音だな…」

悠太「安田悠太テスト飛行に出る！」

悠太「これより高度10000mにおける最高速度試験を行う」

ペリーヌ「速度600, 50, 700, 50, 800, 50, 900, 50, 1000

0 km加速止まりません！」

ミーナ「悠太さん大丈夫？」

悠太「ああ問題ない」

ペリーヌ「速度1200 km超えました」

シャーリー「はあ！音速を超えたあ？」

悠太「魔法はすごいな音速を超えても体はびんびんしてる」

悠太「これより上昇試験を行う」

ペリーヌ「1500, 200, 2500, 3000, 3500, まだ登ります！」

30秒

悠太「高度15000mに到達」

ミーナ「すごいわね…」

悠太「これより運動性の試験を行う」

色々したー(割愛)

悠太「なんだこれは動きやすくて加速も良い最高だな…」

悠太「帰還する」

美緒「大丈夫だったか？」

悠太「ああ、問題なかったよ」

## 戦争そのいち

美緒「リーネ、宮藤、悠人は今から訓練だ」

リーネ「は、はい」

宮藤「はい！」

悠太「はい」

美緒「これから滑走路を20往復だ宮藤、リーネお前らないもな」

美緒「悠太お前は50往復だ」

「「は、いー」「」

ゼエハアゼエハア

悠太「訓練学校以来だこんなに走ったのは…」

悠太「芳佳達はまだ走ってるし…」

坂本「屁ぼるなく走れ」

坂本「お、悠人はまだいけそうだなもう20周だな」

悠太「は、はい」

リーネ「悠太さんなんであんなに走れるの…」

宮藤「どうして…」

坂本「訓練をすれば走れるさ」

悠太「(訓練バカだなあ)」

数分後

坂本「走り終わったな、休憩だ」

悠太「ああ、わかった、このあとは？」

坂本「今日はこれで終わりだな」

悠太「え？」

坂本「今からお前の世界の事を話してほしくてな」

悠太「は、はあ…わかった」

1時間後

悠太「全員集まったな？」

悠太「今日は自分の世界の事を話せと言われたから話す！」

悠太「まず歳と所属した軍、階級等々についてだが元の世界だと31歳だった」

ミーナ「え…？って事は31歳で大佐って事？」

悠太「まあそうだな」

ミーナ「どんな事したのよ…」

悠太「そこは今からだな」

悠太「自分は第501飛行隊隊長だったんだ、なぜ隊長になったかは『実戦経験が豊富で司令官としても知識がある』ので任命して大佐になったんだ」

悠太「まあ大佐になったおかげでデスクワークが多すぎて実践に殆ど出れなくなった事かな…」

悠太「まあ大佐になって24回目で落とされてここに居るんだかな（苦笑）」

ミーナ「今その部隊は？」

悠太「まあ副司令も優秀だし問題ないと思うよ多分」

ミーナ「多分なのね…」

悠太「まあ今どうなってるかは神のみぞ知るだな」（実際はスマホで見れてる）

悠太「今からは戦争の話になるが嫌な人は出て行ってもらって構わないぞ」

数秒の沈黙

悠太「（メンタルが強いのか怖いもの見たさなのか出て行こうとはしないな）」

悠太「よし始める」

悠太「自分の世界にはアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、ロシア、日本、イタリアと言った列強が居たこの世界で言うといベリオン、ブリタニア、カールスラント、ガリア、オラーシヤ、扶桑、ロマーニヤだな」

悠太「3度の世界大戦があつた、世界大戦と言つてもネウロイとじゃなくて人だ、1度目はとある国の皇太子が暗殺されたことから始まり…2度目は国家の侵攻から始まり、3度目の前に冷戦という冷たい戦いがあつたそこは第二次世界大戦後の分裂した陣営による睨み合いだ、戦争はしないけども軍拡をして『自分の国が強い!』つてのを見せびらかすだけけども…」

悠太「話は少し戻して第一次世界大戦はアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、日本VSDイツ、オーストリア、オスマン帝国で戦争をしてドイツ、オーストリア、オスマン帝国は負けた」

悠太「オーストリアはオストマルクでオスマンはオストマンだな」

悠太「それでドイツ、オーストリア、オスマンは敗戦して、ドイツはオーストリア、オスマンはイギリスのような民主国家になつた」

悠太「その後ロシアが『ソビエト連邦構成共和国』通称ソ連という国に変わりそして…世界恐慌という大不況に襲われた各国、ドイツは民主的に独裁者が選挙に勝ちドイツ第三帝国になりその後、隣国に攻め入りイタリアもドイツの味方となり戦争を始めたその後、日本もアメリカと戦争を始めた、ドイツイタリアは最初フランスを倒し、イギリスは島のおかげで生き延びたものの毎日のように来る爆撃に死にそうになっていた、その頃日本はアメリカと戦争をしていたが物量に着実と敗北していった」

悠太「その後ドイツはソ連にも戦争を仕掛け、1945年10月にはドイツ、イタリ  
ア、日本降伏：ドイツ、ソ連の戦争で約2500万人が亡くなっているんだ」

ミーナ「2500万人：」

ペリーヌ「うそ：」

坂本「2500万人：」

宮藤「そんなに多くの人が：」

悠太「その後ドイツはソ連とアメリカにより分割されその後西ドイツ、東ドイツと  
なったその頃から冷戦が始まった」

悠太「その冷戦も長くは続かず1991年末ソ連崩壊と同時に終焉したその後中国と  
いう国が力を増していったの、まあこの世界で言うところの扶桑の上にある大きな砂漠あたり  
だね、自分たちの世界だと山脈ならある所だったかな」

悠太「んで自分が死んだ戦争はアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、日本、イタ  
リア、ロシアの同盟による戦争でたかが1国なのにすっごく苦戦してたのさ、最初はウ  
ラジオストクコッチで言う浦島だねに宣戦布告なしで奇襲、その後、正式にロシアに宣  
戦布告それを見たアメリカ率いるNATOにロシアを誘うそれに納得したロシアはア  
メリカによる支援を受けつつ撤退

ある程度撤退したらNATO主力軍による反抗作戦、その後冬が到来シベリアの極寒



の中の進軍は不可能になり停滞……これが2018年ごろだったかな……」

## 戦争話その二

悠太「2018年の春になるとNATO軍は進軍を開始、この辺りから自分が第501飛行隊隊長になったね」

悠太「2018年はクラスノヤルスクからバイカル湖付近まで進軍しまた冬が来た、その頃になると大連に上陸、こっちで言うところ…説明しづらいな…」

悠太「ミーナさん地図ありますか？」

ミーナ「ええあるわよ」

悠太「どうも」

悠太「大連はこの辺りだね、んでその中国の首都がここ、まあ近いところに上陸したな…この辺は元海軍大国の日本等々の力があつたからなのかなんのか、わからんが18年は大規模進軍と中規模上陸が成功した」

悠太「2019年ここからは激戦になってくるんだ、一つはアフリカ地域が中国側に立って参戦したり、シベリア地域が大寒波により前進が止まったりと、春になつても雪は降るし夏に近づいても気温が一桁だったらしい、501隊はその時は大連邦空隊として動いてたよ」

悠太「20年この年は戦争が終わるじゃないかとまで言われた年だね、NATO軍が渤海湾に上陸して天津を陥落させた、世界地図で言うところだね、北京が目と鼻の先だ」

悠太「シベリアにいるNATO軍も進軍を開始しバイカル湖を超え山々を越えなんとババロフスクまで到達したらしい」

サーニヤ「えっ、そんな進軍出来るんですか？」

エイラ「サーニヤどう言うことだ？」

悠太「サーニヤの言うとうり俺も思ったよ約2000kmも離れてるんだからな」

ミーナ「えっ…2000km?2000kmの間違えじゃないの？」

悠太「バイカル湖がこの辺りんでババロフスクがここ」

ミーナ「どうやったのかしら…」

悠太「機械化歩兵とヘリでの奇襲攻撃と夜間行軍でやってのけたみたい」

ミーナ「機械化歩兵はわかるけどヘリって何です？」

悠太「オートジャイロの進化系ですね」

ミーナ「要するにウィッチみたいなもの？」

悠太「ええそんな感じですね、空中機動兵とか呼ばれたりするのでその認識で間違い無いと思います」

ミーナ「が？」

悠太「1番違うのは簡単に量産できる、誰でも操作できるそして一度に数十トンの運べるですかね」

ミーナ「そんなに運べるのかしら？」

悠太「1番運べる物で56tですかね、NATOが使っている物だと10tですかね  
ほぼJu-52と同じですね、1番の利点は垂直離着陸できる事ですね」

ミーナ「1機欲しいわね…」

悠太「あつたらあげても良いんですけど無いですし…」

悠太「話を戻してババロフスクまで進軍したときには中国軍の抵抗も強くなかなか前進できずにいたみたい」

悠太「そして自分が死んだ年（微笑みながら）」

悠太「2020年我が501飛行隊は戦闘地域を大連から北京へと移し北京決戦への準備をしていた」

悠太「私が死んだのは確5月の暖かい日だった、その日NATO戦車隊と共に北京を陥落させるべく前進する中国もそれはまずいと何千機もの戦闘機を飛ばしてくるそこでそこで行われたのが北京決戦だ自分が弾切れして帰還するために帰還ルートに入った時突然左翼がなくなった…理由は地上からの攻撃だと思う」

美緒「だと思おう？どう言う事だ？」

悠太「多分なフレンドリーファイアだ」

ミーナ「えっ…」

悠太「比較的友軍基地に近かったから近づいてきた敵機と見間違えたのか敵味方識別装置があの乱戦でおかしくなったのかどう言う理由かは知らんがそのまま電気系がイカれてキャノピーが飛ばなくて落ちたのさ」

ミーナ「他人事みたいに言っけとまた貴方のお話でしょ？」

悠太「ハハッそうだなたしかに他人事みたいに言ってるな、まあ体も変わってるから他人事見たいなものだけだな」

ミーナ「貴方ねえ…」

悠太「なんか質問ある人居る？」

他のメンバー「(あ、逸らした)」

宮藤「はい！」

悠太「はい、宮藤君」

宮藤「え？君？」

悠太「気にすんな」

宮藤「えっと、その501航空隊はどんな人が居たんですか？」

シマパフ「気になる〜」

ハルトマン「たしかに」

悠太「うちの部隊は日本国国防軍唯一の在日外国人部隊なんだよね」

宮藤「と言うと此処見たいのですか？」

悠太「と言うよりかは日本に住んでる外国人の志願兵で作った部隊だね、501Jf  
wとの違いは権限を国防軍が持つてることだね、まあなぜかイギリス人1人フランス人  
1人ドイツ人1人イタリア人1人ロシア人1人アメリカ人1人日本人3人中国人1人  
居の合計10人だったね」

バルクホルン「む、敵対してる国の人がいるじゃないか！」

悠太「ああその子はね亡命してきた子だよ、わざわざうちの基地にめんどくさいもの  
を連れてね」

ミーナ「めんどくさい物？」

悠太「ああ、敵国の最新鋭戦闘機と共にね…」

ミーナ「えっ…」

バルクホルン「はああ！」

バルクホルン「そいつは祖国を裏切ったのか！」

悠太「そうカッカしないでください！」

バルクホルン「す、すまない」

悠太「まあ彼曰く半強制的に乗せられたらならそれ使って亡命してやるって感じであつたみたいよ、その機体はすぐさま分解分析に回されてたね」

ミーナ「その子は志願してパイロットになったのかしら？」

悠太「祖国の解放をしたいって事で志願したらしい」

宮藤「あの言葉とかがってどうしてるんです？その子は」

悠太「元々その子は日本が好きだつたらしくある程度話せてたから問題なかつたよあと部隊の言語は日本語だったし」

美緒「豪に入れば郷に従えってことか…」

悠太「うん？ま、まあそんな感じだったんじゃないかな」

悠太「あと質問は？」

ミーナ「部隊の書類とかは何方がやってたの気になるわ」

悠太「い、一樣自分と副司令がやりましたよ…」

ミーナ「あとで隊長室に来てくださいね（笑顔）」

悠太「（この人副司令と同じで怒らさしたらあかん人や）」

ミーナ「ゆうーうーたーさーん？返事は？」

悠太「サー・イエッサー」

悠太「質問は…ないな」

悠太「はい解散！」



## 再開

（1944年5月）

美緒「すまないなお前たち、特に悠太、パイロットととして同行してもらってすまない……」

ミーナ「少しはロンドンの観光をと思ったのだけど……」

宮藤「色々な軍人さんが居るんだなあって思いました」

悠太「いやあここまで人員が不足してるとは……」

美緒「悠太あとどれぐらいでつきそうだ？」

悠太「んー30分ぐらいですかね、あつ、」

ミーナ「どうしたのかしら」

悠太「いやサーニヤが来たなつて」

ミーナ「もうそこまで来てたのね」

悠太『こちらJ u - 52 応答をお願いします』

サーニヤ『こちら夜間哨戒中の501J f w 所属のサーニヤ・V・リトヴァク』

悠太『了解、誘導は可能か？』

サーニヤ『可能です』

悠太『誘導を願いたい』

サーニヤ『了解』

宮藤「へえ、悠太さんって飛行機の操縦出来るんですね」

悠太「一様元パイロットだよ？まあこんな古い機体は初めてだけどね」

宮藤「え？この機体前の世界にも居たんですか？」

悠太「居たよ何年ぐらい前だったからなあ多分90年ぐらい前かな」

宮藤「き、90年…」

サーニヤ『こちらサーニヤ 前方に反応あり』

悠太『こちらJ u - 5 2 どうする？』

サーニヤ『ネウロイじゃないみたいです』

悠太『ネウロイじゃない？なら何だ？民間機？』

サーニヤ『わかりません』

悠太『確認してきてくれるか？もしネウロイだった場合はすぐさまに避難してくれ、増援を呼ぶから』

サーニヤ『はい、わかりました』

美緒「どうした？」

悠太「前方に何か居たみたい、ただネウロイではないっぽい、今確認に向かわせるよ」  
ミーナ「この空域で飛ぶ予定であつたかしら？」

悠太「いや軍民どちらとも居ないはず、居るとしたらスクランブルかなんかです」

???『こちら日本国防軍だれか応答せよ（繰り返し）』

悠太「えっ、この声は」

悠太『こちら501Jfw 応答せよ』

???『あ、やつと応答だ：こちら日本国防軍空軍』

悠太『よう、お久しぶりだな凜』

凜『えっ、悠太：』

悠太『取り敢えずJ u r 52についてこい基地に連れて行ってやる』

凜『了解、速度性能があるがどうする？』

悠太『取り敢えずグルグル回ってでとある程度ついてこれば基地まで誘導してくれる』

『よ』

凜『してくれる？』

悠太『近くに女の子が飛んでないか？』

凜『リーダーだと見えんけど：あつ、目視で視認』

悠太『サーニャ聞いてたか？』

サーニヤ『は、はい』

悠太『すまんが基地に誘導してやってくれ、こっちは自力で帰る』

サーニヤ『了解しました』

坂本「誰なんだ？」

悠太「第501航空隊の副司令だ、つまり私の部下だな」

坂本「こうなることを知ってたのか？」

悠太「実は…全く知らなかった」

ミーナ「さっきの会議でもし同じ世界の人が来たら501jfwに入隊するって言ったのは何でなの？」

悠太「自分が来たから他の人も来るんじゃないかって思ってたんだ」

ミーナ「それが当たって来たと…」

悠太「もしかして…怒ってらっしゃる？」

ミーナ「まあ半分正解残りは戦力が増えて嬉しいことね」

悠太「まあ首相がそれでいいって言ってくれたことが幸いかな、あのマロニーやら拒否ってただろうしあと首相の好意である程度予算が増えたね」

ミーナ「ええ予算が増えたことが一番嬉しいわ」

悠太「もうすぐ着陸致しますので着席しシートベルトをお付けください」

ミーナ「なんかそれぼいわね」

悠太『こちらJ u—52管制塔着陸許可を求む』

管制『こちら管制塔着陸を許可する あとさっきの機体は何だ？』

悠太『許可感謝する それは俺と同じ未来の人だ』

管制『おかえりなさいJ u—52 それはそれは賑やかになりそうだな』

悠太『ただいま管制官さんよ まあそうかもしれない』

悠太「よしついたぞ、自分があの機体の梯子を下ろしてくる」

凜「降りれん！あ、悠太が来た、おーいハシゴは主脚の中にある」

悠太「ああわかつてるさ…」

凜「うわあああん悠太おおお（梯子を降り抱きついてくる）」

悠太「はいはい一人にしてすまん」

凜「ひつくひつくずっと寂しかったんだから…」

悠太「このまま後ろ向いてみ」

凜「うん？（振り向く）え、私の愛機は？え？」

悠太「そこにあるじゃんユニットとして…」

凜「はあああああ？」

凜「なしてやなんでわてのスポーイ27はなんかちっちゃい奴になつとるんや」

悠太「まあお前も本当の魔女になったってことだな」

凜「いやいやいや意味わからんし」

悠太「そうだよなわからんよなこんな小さくなってるし…」

凜「ああもういいや諦めよう…」

ミーナ「お二人さんは何で抱きついてるのかしら？（笑顔）」

悠太「いやこれはその…後で話しますんでどうか今は…」

ミーナ「まあ多分あなたの奥さんか彼女さんといったところでしようね」

悠太「んあ、なんでわかるんだ…」

ミーナ「女の感よ」

凜「うん？誰ですか？」

ミーナ「ええ挨拶がまだでしたね、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ隊長ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケです階級は中佐だわ」

坂本「ストライクウィッチーズで戦闘隊長をしている坂本美緒だ階級は少佐」

宮藤「ええつとストライクウィッチーズの宮藤芳佳です階級は軍曹です」

凜「第501航空隊副司令の安田凜です階級は中佐、よろしく」

悠太「んで挨拶は終わったがどうする？このままどつか放浪の旅にできる？それでも501jfwに入る？」

凜「まあ入るけど……と言うか何なの？」

悠太「まあ今は一樣戦争中だね、相手は人間ではなくネウロイとか言う化け物かなそれに対抗するのが彼女らウィッチーズだね」

凜「んであれだあれを履いて飛ぶわけかと言うかさっきの銀髪の子は？」

悠太「多分夜間哨戒に戻ったと思うよ」

ミーナ「飲み込みがどつかの誰かさんと違って早いわね」

悠太「うっせうっせ、んでだどうする？もう紹介する？」

ミーナ「まあ今しましょうか、消灯時間あるわけだし」

20分後

ミーナ「ここに集まってもらったのは新しい家族が増えます」

バルクホルン「またか！また新兵じゃないだろうな？」

ミーナ「大丈夫だわ」

ミーナ「安田凜さん入って来なさい」

ガチャリ

シマパフ「女の人だ」

リーネ「本当だ」

ペリーヌ「本当ですわね」

エイラ「女の人ナンダナ」

バルクホルン「む？」

エーリカ「女の人だね」

凜「ご紹介に預かりました、安田凜です階級は中佐ですよろしくお願いします」

エーリカ「安田？」

凜「安田よ？」

ミーナ「あとは各自でやってちょうだい解散！」

リーネ「あの悠太さん」(小声)

悠太「ん？何だリーネ」(小声)

リーネ「もしかして奥さんですか？」(小声)

悠太「お、よくわかったね」(小声)

リーネ「いや似たような指輪付けているので…」

(小声)

悠太「まあいい言っても問題ないし言うよ」(小声)

以下挨拶等々が終わり

ルツキーニ「おりゃ！(胸を)」



凜「あらどうしたのかしら？」

ルツキーニ「うじゆ残念賞」

凜「あら揉みたかったのね？」

バルクホルン「苗木は安田と言ったが悠太と関係あるのか？」

凜「まあねえ〜 一緒同じ世界の住人だしそして彼の妻だしね」

「はああああ」(宮藤坂本ミーナリーネ以外)

ペリーヌ「あ、貴方け、結婚してらっしゃったの?!」

悠太「いやまあしてるよ？」

シャーリー「つてことは同じユニットなのか!？」

凜「悠太今何乗ってたっけ？」

悠太「16だよと言うかそれ以外はほぼ乗れなかったじゃん覚えてないのか？」

凜「そういやそうだな」

悠太「お前さんは27やろ？」

凜「そうだけどスホイ社がリーダーを強化したやつをくれてね」

悠太「え？イルクートとかの製造者が渡してきたんじゃないやなくて設計側が？」

凜「そうそうあとエンジンに据え置きだけど西側製の部品を使えるようにして貰った

おかげで速度が2・7まで行けるようになったぞい」

シャーリー「2・7？」

凜「そマツハ2・7よ」

シャーリー「ズゴイなあ」

凜「というか私魔法使えるん？」

悠太「はい、手のひらをこつちに向けて、指先に力を入れると……」

凜「本当だ出来たあとなんか生えたナニコレ」

悠太「使い魔は何だこれイリオモテヤマネコ？」

凜「イリオモテヤマネコとかみたことないんすけど……」

悠太「美緒さんやい固有魔法はわかるかい？」

坂本「ああこれは『中規模リーダー』？だそうだ」

悠太「中規模リーダー……扶桑語で言えば中規模電探だな」

坂本「つてことはサーニャ達と同じか？」

悠太「どちらかといえればサーニャとミーナ隊長の固有魔法を足した感じかな、索敵範

囲も100kmそこらあるはずだし」

ミーナ「100km……」

凜「残念ながら100kmではなく250kmになったんだなこれが」

悠太「あーリーダー強化してるからか」

凜「そそと言つても爆撃機相手でこれだからネウロイ？ ってのはわからん」

ミーナ「そうね次戦闘があつたら二人とも出撃よ」

悠太「了解」

ミーナ「あと最近は夜間哨戒が足りてないから出来れば来週にも出てほしいわ」

悠太「まあ夜間紹介なら大丈夫よ」

凜「夜間哨戒が？ 慣れっこよ、と言うかまだユニット？ っての飛ばしてないから飛行

訓練をされてくれ…」

悠太「いや普通の飛行機と変わらんよ」

凜「それなら楽そうだな」

ミーナ「夜間哨戒には悠太さんにも加わってもらおうわよ？」

悠太「これまた何で？」

ミーナ「二人ともロツテとかは組んだことあるでしょ？」

悠太「まあ昼間を出てる時は二人で組んでたな」

ミーナ「そう言うことよ」

悠太「了解中佐殿」

翌日

宮藤「凜さんおはようございます」

凜「んー芳佳おはよー」

凜「あいつは？」

宮藤「悠太さんなら料理してますよ」

凜「久しぶりの悠太の飯食えるんか」

宮藤「悠太さんのご飯つてすっごい美味しんですよね！」

凜「なんでか悠太は料理上手だからなあ」

宮藤「男性が台所に立つんですね」

凜「まあ自分の居た世界は男女平等だったしなあ」

悠太「あ、凜おはよう」

凜「ん、おはよ」

悠太「さてそろそろ集まるから並べるか、凜も手伝えよ」

凜「え、」

悠太「来たんだから、ね？」

数分後

「頂きます」（全員）

シャーリー「やっぱり悠太のご飯は美味しいな！」

ミーナ「ほんとに美味しいわ」

悠太「こりやどうも」

数分後

「ごちそうさまでした」（悠太を除く全員）

悠太「お粗末様でした、よし洗うかするか」

凜「洗濯とかあるの？あるならやるけど…」

悠太「あるよ、流石に俺はやってないけど、宮藤リーネがやってるはずだから聞いてね」

凜「あ、芳佳ちゃん居た洗濯物手伝いよ」

宮藤「え、良いんですか？」

凜「こんな子が頑張って動いてるのにじっとしてられんよ」

宮藤「えへへ」

凜「あ、リーネちゃんだー」

リーネ「安田中佐どうしたんですか？」

凜「中佐とか付けないで凜でいいよ、ああ洗濯物干すのを手伝いに来たのよ」

リーネ「わかりました凜さん、はいこれが洗濯物です」

凜「うひょー人が多いがから多いねえ、これをいつもの二人で？」

宮リ「はい！」

凜「ふう終わったね」

宮藤「いつもより早くおわりました！」

リーネ「ありがとうございます！」

凜「久しぶりにできて楽しかったわ」

キッチン

悠太「そういやここにまだ出撃してないな、腕も鈍ってるから練習でもするかあ」

司令室

コンコン

悠太「入ってもよろしいでしょうか？」

ミーナ「ええ良いわよ」

悠太「飛行訓練をしてもよろしいですか？」

ミーナ「ええ良いわよここにサインして」

悠太「了解です」

カキカキ

ミーナ「そういえば凜さんって強いのかしら？」

悠太「どうなんすかね」

ミーナ「どうなんすかねってまた他人事だわね」

悠太「まあ最後に模擬戦したのが1年以上前ですし…」

ミーナ「ならしてみる？」

悠太「え？」

ミーナ「するの？しないの？」

悠太「ならしますよ」

ミーナ「なら凜さんに伝えておいてね」

悠太「わかりました」

悠太「おーいりーん」

凜「ん？ーなにー」

悠太「飛行訓練と模擬戦すんぞー」

凜「えーわかっただー」

悠太「ヒトサンマルマル格納庫ね」

凜「了」

ヒトフタサンマル格納庫

悠太「ひさしぶりに模擬戦すんなあ」

凜「あつちの世界だと書類と格闘戦したもんねw」

悠太「こつちでも対して変わらんけどな」

凜「そーいや悠太撃墜数いくつだっけ？」

悠太「439機どまりだったかなあ」

凜「も、もう少しだったのか：撃破数は？」

悠太「267両ぐらい？だったかな」

凜「合計706かよ…」

悠太「凜も同じくらいでしょ」

凜「422機の278両よ」

ミーナ「なんの話してるのかしら？」

凜「撃墜数の話をね」

ミーナ「どのぐらいなのかしら？」

凜「悠太は439機で私は422機よ」

ミーナ「フラウより上なのね…」

悠太「フラウ？」

ミーナ「エーリカの事よ」



悠太「渾名みたいなものか、あと一つ気になったのだがエーリカの名前ってハルトマンだよな？」

ミーナ「ええそうよ」

悠太「も一つ良いかなバルクホルンの名前はバルクホルンだよな？」

凜「まさか…」

ミーナ「？そうだけど…まさかとは？」

悠太「いや前世の二時大戦の撃墜数トップと同じ名前なもんでな」

凜「どっちも撃墜数300超えだもん…」

ミーナ「そろそろ模擬戦の時間よ」

悠太「ウイッス」

## 8 話模擬戦

リーネ「凜さん、悠太さん準備はいいですか？」

悠太「いつでもどうぞ」

凜「こちらもいつでもどうぞ」

リーネ「了解です、3，2，1状況開始」(フレア弾を打ち上げる)

悠太「さて久しぶりの空戦だな」

凜「ええそうね今度こそは勝ってやる」

交差をしてお互いに上昇を開始

悠太「やっぱり追いつかないな」

凜「アタ坊よ」

悠太が凜の後ろにつくが発砲とほぼ同時に凜がコブラで悠太の後ろに着く

悠太「さすがSu-27だな」

降下しながらロールをして機関砲を回避

凜「クツソ当たらん」

悠太「口が悪いですねえ」

凜「昔からだわ」

悠太「追いつかれそうだな」

ここで悠太は体を立ち上げるようにして急激減速を行い凜の後ろに着く  
機関砲を撃つが予想していたのか急上昇をし回避

そんなことを10分ぐらい繰り返して最終的には弾切れで終了

凜「もう少しだったのに……」

悠太「腕鈍ってるなあ……」

宮藤「お二人ともすごいですね」

悠太「まあこのぐらいないと生きていけなかったからなあ」

凜「自然と身についたことよ」

バルクホルン「途中で足を動かさずに上を向いていたがなんなのだ？」

凜「?……ああコブラの事かな」

凜「あれはねコブラと言って推力偏向を使った技よ」

悠太「推力偏向がまずわからんやろ、ジェットなんて生産どころか試験段階だろうし」

凜「確かにそうじゃん！見せるか」

凜「ユニット履いて、おっこいしよはい！注目！」

凜「ユニットのエンジン部分を見てご覧、エンジンが動いてるでしょ？それが推力偏

向よ、エンジンを動かして推力を違う方向に向けてやるのよそしたらあんな動きができるよ」

エーリカ「ウルスラが見たら喜んで食いついてくるな」

シャーリー「すっげえ」

バルクホルン「なるほど」

凜「実際の機体だと動翼に頼らずに姿勢制御が出来るわけよ」

シャーリー「動翼に頼らず!?!」

悠太「まあそんなもんさ」

悠太「ここで話すものなんだし部屋に戻るか」

凜「それもそうね」

廊下で

凜「夜間哨戒かあ」

悠太「そうなるならAWACS欲しいよなあ、できれば最新鋭のB737AEW&C  
くれるといいな、せめてE-3あたりでも…」

凜「すっごいわかる、うちのあいちゃんが居れば良いのになあ」

宮藤「あいちゃんって誰ですか?」

凜「501隊の時に新山愛(ニイヤマイ)って子が居たのよその子は主に早期警戒

機のレーダー士をしてたの指示が的確だからアイって読んでたのよね」

悠太「そういうえばあいつ空の愛だからスカイアイとか呼ばれてたな」

凜「それだとエスコンとか被るとかって言ってたわね」

宮藤「早期警戒機？」

凜「簡単に言えば大型レーダーを積んだ飛行機の事よその機体が戦闘機にどの辺に敵がいる、あと何分で接敵とかっておしえてくれるのよ」

宮藤「でも凜さんも中規模の電探？持ってるじゃないですか」

凜「確かにそうね、多少は早期警戒機的な事はできるけども本職ではないからAWA CSが居なかつたりしたらする事になってるわ、ウィッチになってからはわからないけどね」

ウウウウウウウウウ

凜「な、敵襲！」

タツタツタ

格納庫

悠太「ミーナ、上がったも良いか？」

ミーナ「ええ良いわよ」

悠太「了解、安田悠太出撃する」

凜「了解、安田凜同じく出撃する」

悠太「敵の数は？」

ミーナ「中型1小型4機よ」

悠太「目的地はわかるか？」

凜「レーダーキャッチ、報告どうり敵機は5機確認、ルートは…ロンドンだわ…」

凜「敵速度は？」

凜「敵速度320kt、高度3万フィート」

悠太「クソ、ウィッチ達だと無理だ、おい凜、A/B炊いて登るぞ」

凜「了解」

悠太「接敵まで約4分か…」

悠太「敵機は今どの辺だ？」

凜「ちようどブライトンあたり」

悠太「わかった、接敵まであと2分だ気を引き締めるよ」

凜「了解」

悠太「クソ、奴さんが付きやがった、ブレイクブレイク」

凜「ケツにいるやつ落とすからタイミング良く避けるよお、3、2、1、」

悠太「おらあ！」

凜「一機撃墜」

悠太「おいおい、真ん中にいる中型はB―29ぽくないか？」

凜「クソ、ロンドンを爆撃に来たのか」

悠太「よし1機目だ」

凜「あと3機」

悠太「凜はB―29を落とせ、雑魚は俺がやる」

凜「了解」

悠太「おらもう1機落ちろ、あと2機」

凜「30mm機関砲を食いやがれ」

凜「あれがコアか、喰らえ」

パーン

凜「中型ネウロイ撃破」

悠太「こちらも最後の小型を落とした」

凜「危なかったもう少しでロンドンだったな…」

悠太「任務終了RTB」

帰還後

ミーナ「初の撃墜おめでとうあと途中で言っていたB-29? っつのはなんなの?」

悠太「ああ、自分達の世界で昔、日本を均した爆撃機だよそれにそっくりだったな」

ミーナ「均した?」

凜「そう、均したね」

ミーナ「性能はどのぐらいなのかしら?」

悠太「うる覚えだけど、開発国はアメリカ、こっちのイベリオンだね最高速度は約650km、航続距離は約5000km、実用上昇限度約12400m、防護機銃は12.7mmブローニングが上部の前後に2門2基、下部に2門2基、尾部に4門1基の合計12門、爆装は約9000kgだよ、運用自体は1960年ごろに終わってるはず」

ミーナ「最高高度を飛ばれたら上昇するだけで精一杯だわ…」

凜「防衛側は常に飛んでるわけじゃないから辛いわよねえ…」

凜「同じようにB-29が有ればその機内にウィッチを乗せて空中待機とか出来るんやろうけど居ないだろうし…」

ミーナ「ぎ、斬新な考えね…」

悠太「それかHIMADとかでもあれば良いんだな」

美緒「エイチアイエムエーデーとはなんだ?」

悠太「HIMADね、高・中高度防空ミサイルって言う簡単に言えば地上から高高度



を飛んでる大型爆撃を落とすための兵器よ、ま、そんなもの無いだろうけど……」

ミーナ「ウルスラさんなら似たようなの作りそうなのだけどね」

凜「ウルスラ？」

ミーナ「エーリカの妹よ、今はノイエ・カールスラント技術省にいるわ」

悠太「科学者か……科学者には良い思いがないな……」

凜「そうだねえ……」(苦笑)

ミーナ「良い思いがないと言うのは？」

悠太「まあ、色々あったよあの人には」

ミーナ「聞かないでおくわ」

凜「それが正しいな」

ミーナ「これで解散よ」

くく翌日

ネウロイからロンドンを救った二人の魔女は誰だ？

What are the two witches who saved London from Neurii?

悠太「うげえ、自分のこと書かれてる……と言うかネウロイからロンドンを救ったって

いつものとこなんじゃ」

宮藤 「悠太さんおはようございます!」

悠太 「ああ、宮藤、おはよう」

宮藤 「悠太さんは何読んでるんですか?」

悠太 「新聞だよ、新聞」

宮藤 「どんな内容なんですか?」

悠太 「昨日落としたネウロイのことさ」

宮藤 「新聞に載ったんですか!」

悠太 「んー、まあそう言うことじゃない?」

宮藤 「すごいじゃないですか!」

悠太 「すごいのか?あとマスコミって嫌いなよね…」

宮藤 「どうしてですか?」

悠太 「自分が国で一番の撃墜数になった時に人殺しだの色々言われてからねえ…」

宮藤 「国を守ってるのに…」

悠太 「自分も殺したくるところしてるわけじゃないさ、国、家族を守る為に殺してるさ、  
なのになぜなん何も言われなといけないかと何度も思った」

悠太 「多分、死んだら地獄行きだろうな」

宮藤「そんな！そんなことありませんよ！」

悠太「いいや宮藤、自分が殺しなくなっても殺してるそれは事実だ、事実は認めなくちやいけないのさ」

悠太「ま、この辺で話は終わりよ飯作ろうか」

宮藤「は、はい！」

## 9話 夜間哨戒

司令室

カキカキカキ

ミーナ「ふう、終わったわ」

悠太「こつちも終わったよ」

ミーナ「悠太さんが居てくれるからすぐ終わるわ」

悠太「ここは書類がこんなに多いのな」

ミーナ「本当に多いわ」

悠太「まあ、本来なら一緒に手伝うであろう坂本があれだもんな」

ミーナ「そうね」

悠太「ウィツチの寿命がこれば教育者になるんだらうな」

ミーナ「美緒が先生……大丈夫かしら……」

悠太「さあ人を見抜く事は出来るみたいだが教育できるかは分からん」

ミーナ「そうそう夜間哨戒についてなんだけど……」

悠太「今日の夜でもいいけど」

ミーナ「今日!?!」

悠太「徹夜の3〜4日程度なら出来るし…」

ミーナ「せめて明後日とかにしてほしいわ」

悠太「詰所とかは?」

ミーナ「サーニヤさんのところが詰所だけど…」

悠太「女性の部屋を使うのは不味いだろう」

ミーナ「ダメよ」

悠太「自室を使うかなあ」

ミーナ「わかったわ」

悠太「ならあとで凜にサーニヤのところが詰所だつて言つとくよ」

ミーナ「お願いね」

悠太「と言うかもうこんな時間なのか」

ミーナ「そろそろお昼ご飯ね」

悠太「今日はなんだろうか」

コンコン

ミーナ「誰かしら?」

ガチャ

宮藤「ミーナさんお昼ご飯です」

悠太「噂といえばんんどやらだな」

宮藤「あれ？悠太さんも居たんですね」

悠太「まあ書類仕事をな」

宮藤「どうします？ここに持って来ます？」

ミーナ「終わったから行くわ」

悠太「どっこいしょ、行くか」

くダイニングく

悠太「あ、凜明後日頃から夜間だつてサーニヤの所が詰所だから自分で言つてといてね」

凜「んーわかったー、悠太は？」

悠太「わしはカーテンで自室を暗くするわ」

凜「了」

『頂きます』

『ごちそうさまでした』

悠太自室

悠太「うへえ、書類仕事はいつやっても疲れるなあ」

悠太「そういや凜ってアレ持ってるん？」

凜「アレ？」

悠太「スマホよ、スマホ」

凜「一様持つてるけど使えるんか？」

悠太「メールぐらいは使えるじゃない？」

凜「やってみるか」

スツスツスツ

凜フォン「ピロン」

悠太フォン「ブーブー」

凜「使えるんだ」

悠太「ほんまや」

悠太凜フォン「ライイン」

悠凜『ん？』

???「一様電話も使えるよ」

悠太「誰だこいつ…」

凜「名前は…神様？だれ？」

悠太「もしかしてこっちの世界に送った神？」

神「そうだよ神だよ！ライン、電話、メール、インターネット全部使えるから使つてね、悠太、凜、秀太、神のラインは全員登録してるよ、軽いルー尔的なのとしては元世界のインターネットとかは開けるけどこっちから送信は出来ないからそこんところよろしく」

「↑これ内の会話はラインでの会話」

悠太「神とはラインで繋がってるって事でオケ？」

神「オッケイ」

凜「つまりは相手の情報は取れるけど相手からは取れないって事でしょ？」

神「そう言う事って事でわしは忙しいので仕事に戻りますわ」

悠太「あ、はい、行ってらっしゃい」

時が過ぎ夕食前の時間

悠太「飯作りに行ってくる」

凜「わかった、私も行くわ」

悠太「珍しいな」

凜「いや先にサーニヤちゃんが居たら話しとこうと思つてね」

悠太「なるほどな」



くキツチンく

トントントントントン

悠太「よし出来た配膳するか」

ガチャガチャガチャガチャ

悠太「よし配膳もわかったし人呼ぶかあー」

宮藤「あ、悠太さん」

悠太「ん? どうした宮藤」

宮藤「作り終わってたんですね」

悠太「まあ簡単なものだしなあ、そうだ宮藤みんなを呼んできてくれないか?」

宮藤「はい!」

く数十分後く

『頂きます』

『ごちそうさまでした』

悠太「お粗末様でしたツ!」

凜「そうそうサーニヤちゃん」

サーニヤ「はい?」

凜「明後日から私達も夜間哨戒にでるからルートを教えてね?」

サーニヤ「私…達？」

凜「悠太も出るからね、あ、安心して悠太は別室で寝るから」

サーニヤ「は、はい」

悠太「よろしくなサーニヤ、ほれ食器はキッチンに置いとけよ洗うから」

サーニヤ「よ、よろしくお願いします」

く明後日く

格納庫

タツタツタ

悠太「おりよ？誰も来てない？まあいいや機体の確認するか」

く数分後く

凜「あら来てたのね」

悠太「おうよ、あ、サーニヤも一緒に来たのか、今日は指導よろしくなサーニヤ」

サーニヤ「は、はい」

『↑内は無線

悠太『管制塔、離陸の許可を願いたい』

凜『同じく離陸許可を願いたい』

管制『こちら管制、離陸を許可する』

悠太『了解』

凜『りよーかい』

く離陸後く

サーニヤ『あの、なんで管制塔とやり取りするんですか？ウィッチは必要はすですが…』

凜「癖、かなあ」

サーニヤ『癖ですか？』

悠太『癖だな、10年ぐらいほぼ毎日飛んでるから離着陸の際はついやっちゃうんだよ』

サーニヤ『そうなんですか…』

凜『そうそう、10年は民間まだ副パイロットとしてしか出来ないけどそれでも民間と違って戦闘してるからねえ』

サーニヤ『10年…』

悠太『失礼だが今の歳は？』

サーニヤ『13歳…です…』

凜『へ？13？うせやろ？』

サーニヤ『ほんとうです』

凜『13かぁ…そんな少女が戦闘をしてるってのは心が痛くなるなあ…』

悠太『…ウイツチつてのは凄いものだな…20を超えると魔法が使えなくなると…』

サーニヤ『その話を聞く限り本当にウイツチは居なかつたんですね…』

悠太『本当にいなかったさ、まあいるとしても御伽噺の世界だな』

とこんな感じの話をして夜間哨戒を終えた…

## 10 話再開②

とある昼下がりに

凜「うげえあっちじい」

悠太「ねむい」

コンコン

ミーナ「悠太さん手紙が来たわよ」

悠太「おん？なんや？」

ガチャ

ミーナ「ノイエ・カールスラントだわ」

悠太「ノイエ・カールスラントって確かカールスラントの政府機関が置いてあるところだな……」

ミーナ「ええ、そうよ、あら凜さんも居たのね？」

手紙さん「うつつ、おれ、宛坂秀太」

悠太「この手紙捨てていいか？」

ミーナ「えっ、ちよっ……」

凜「誰から？もしかしてあいつも来てるんか？」

悠太「秀太も来てるみたいだ…」

ミーナ「秀太？」

悠太「そう宛坂あてさか 秀太しゅうた、自分の幼馴染だよ、前の世界では兵器の研究、開発をやった」

ミーナ「それでなんで破りたくなるのかしら？」

悠太「軍もびつくりするぐらいの問題児兼優等生だからかな」

ミーナ「??？」

悠太「神と天才は紙一重ってこった、それ一つで軍が変わるようなものを作ってる、いいもので言えば敵の攻撃が機体の重要部に被弾したら強制的にパイロットを打ち出すとか、悪いもので言えばパンジャンドラムの近代化改修型とか…」

ミーナ「…そ、それで手紙にはなんで書いてあったのかしら？」

手紙「うつつ、おれ、宛坂秀太、多分この手紙が届いてたから数時間後におめえさんの基地に着く、その時に渡したいものがあるのとミーナさんに言って欲しい事がある、つきあ…おっと違った『新型のユニットを4機持つて来るからその受け取り許可をお願い』」

悠太「もうすぐで基地に来るらしいのと新型のユニットが4機あるからその受け取

り許可をお願いしたいだそうだ」

ミーナ「ユニット？」

悠太「さあ、詳細は書いてない」

「格納庫」

悠太「んー？あれか？アレっぽいなと言うかプファイルを輸送機代わりにしてるやんけ……」

ミーナ「プファイル？」

凜「プファイル、二時大戦末期に作られたドイツの双発戦闘機D 0335の愛称だね」

ミーナ「双発？単発にしか見えないけど……」

悠太「エンジンが前の後ろに付いてるんだ」

「数分後」

悠太「ナイスランディング」

秀太「おっす、悠太元気しとったか？」

秀太「どうもミーナ隊長、ノイエ・カールスラントに居候している宛坂秀太技術少佐ですよろしく」

ミーナ「第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ司令のミーナ・デイトリ  
ンデ・ヴィルケだわよろしくね」

悠太「そして秀太んで荷物ってなに？」

秀太「おうよ、こいつだ、じゃジャーン」

悠太「み、ミサイル!？」

秀太「そうだ空対空ミサイルだ、性能としては速度M1.5、射程20km、誘導はレーザーと赤外線、弾頭は徹甲榴弾」

悠太「誘導の赤外線って意味あるんか？」

秀太「ネウロイのコアは装甲を無視して赤外線に反応するみたいだから問題なし」

悠太「と言うか我々の機体につくのか？」

秀太「それは問題ないと思う」

つけてみたー

悠太「本当に問題なくついたな…」

秀太「言つたろ？」

悠太「そーいやユニットってのは？」

秀太「そうそう忘れてた、「D0335F—RM」だ、性能は最高時速890km、武装は各ウツチ次第これが通常型のユニット「D0335」の場合なこれにF—RMが付くと色々変わる、1番の違いはミサイルが4発付くのとレーザー探知誘導用の搭載された事だな、探知距離は10kmと短いけども全周だからね」



悠太「Fはファイター、Rはレーダー、Mはミサイルか…」

秀太「そう言う事ー」

悠太「と言うかよく上からの許可降りたな」

秀太「空軍総司令官に直訴した結果さ」

悠太「…」

ミーナ「レーダーと言うのは管制室にあるようなのって事でいいのかしら？」

秀太「まあそんな感じよ、あとミサイルはそこまで運動性が高いわけじゃないから中型ぐらいにしか当たらんからそここのところは気をつけて、あとこの機体はアメ…イベリオンの娘の分も一機あるから欲しがってるならあげてあげて、音速を目指してるらしいからその助けにね」

ミーナ「いいのかしら？」

秀太「困ってる子がいれば助けるのが軍人よ！なあそう思うだろ？悠太、凜？」

悠太「ま、まあそ、そうだね」

凜「そうだね（目逸らし）」

秀太「そろそろ帰るわ後の詳しい内容はアレでねシノ」

悠太「シノ」

（離陸後）

悠太「はあ…」

ミーナ「すごい人だったわね」

凜「なんで黙ってたわしまで被弾してるんだ？」

ミーナ「でもいい機体がいたわね」

悠太「まあ、こつちもミサイルが入ったからいいんだけど…なんか疲れたな…  
寝ようかな…」

おわり

## 11話 パーソナルデータ

(↓は転生後)

氏名	安田悠太(ヤスタ ユウタ)
生年月日	1989年9月13日31歳↓15歳
身長	169cm↓151cm
体重	56kg↓55kg
階級	大佐
所属	日本国防空軍第501航空隊 司令官
戦歴	日朝戦争 日韓戦争 第三次世界大戦
撃墜 撃破数	439機267両
搭乗機	F-16J
その他	安田凜の旦那である
コールサイン	サーヴァント
理由	航空隊司令にも関わらずパシリに使われてる為
生涯	鹿児島県鹿屋市生まれ、親父が空自のパイロットだったためにパイ

ロットを目指して防衛大学校に行き（この時に大学で飯田凜と出会う）その後パイロット試験に難なく合格、パイロットになりすぐに日朝戦争が始まり国防軍になり国防軍所属となる、

その後は日韓戦争になり日本初の敵機撃墜

当時乗っていた機体はF-115J、敵機はF-115Kを撃墜、この頃からマスコミ嫌いになる（一部マスコミが殺人者だの言い始める）

F-115Kに撃墜されたが無事帰還、その後搭乗機を現在と同じF-116Jに乗り始める

第三次世界大戦では主に種子島及び馬毛島を拠点として活動して制空から対艦をしていた

2018年4月1日付で501飛行隊司令官となるなおこの時はまだ一人である

防衛部「取り敢えず飛んでいい人がいれば教えてケロ、主に外国人をな」

色々な地域を飛行中に撃墜された機体を発見し友軍に伝えるのと同時に彼女を501飛行隊副司令に誘う（拉致）防衛部に認められる4月21日付で副司令として飯田凜が副司令になる

その後 いろいろな人を集め他国から機体を取り寄せたりするなお本人曰く要求する機体が国家機密級するのはやめてほしい、1番楽だったのはドイツ人のA-110だつ

た

いろいろな戦線を渡り歩きエースパイロットになった  
死因 2020年5月5日北京決戦にて死亡

軍ではMIAとなっている

本人曰く友軍からの熱いお出迎え（対空砲火）だった  
親族について両親は父は戦死、母親は爆撃により死亡  
一人っ子の為本人のみ

性格

割ときっちりしてる風に見られるが割と雑、本人曰くこのぐらいでいいとのこと  
501ではみんなの兄貴分的なところあり父的な所もある

氏名 安田凜（ヤスタ リン）旧名 飯田（イイダ リン）

生年月日 1989年3月4日31歳↓15歳

身長 190cm↓175cm

体重 不明↓不明

階級 中佐

所属 日本国防空軍第501飛行隊 副司令

戦歴 日朝戦争 日韓戦争 第三次世界大戦

撃墜 撃破数 422機278両

搭乗機 Su-27 (レダー改良型)

その他 安田悠太の妻である

コールサイン フェアリー

理由 戦闘機を妖精のように飛んでいたため

生涯 宮崎県児湯郡新富町生まれ

小さい頃から空自の戦闘機を見て空自のパイロットになりたいと志願し防衛大学へ  
そしてパイロット試験をギリギリ合格(大学で安田悠太と出会う)

その後朝鮮戦争が始まり国防軍へ

日韓戦争時は後方輸送任務に居たため特に戦闘との関わりはなし

第三次世界大戦では春日基地で防空任務に就くが敵機を追いかけている途中に墜落、  
回収班が向かわされて拉致られる

その後501飛行隊副司令に任命され安田悠太氏によりピシバシ訓練されエースパイロットとなる

Su-27は格闘戦がしたいからの乗っている

安田悠太は大学であった時から好きだった(本人

談)

死因 2020年7月24日 重慶上空にてJ-20, 4機に追いかけられ逃げ回り3機を撃墜その後残り1機とやり合い相打ち

こちらも軍ではMIAとなっている

親族について

両親ともに爆撃により死亡

姉妹も居ないため一人

性格

大雑把、だがやる時はやるなお基本的には悠太について行く

501ではみんなのお母さん役である

氏名 宛坂秀太(アテサカ シュウタ)

生年月日 1989年1月4日31歳↓15歳

身長 178cm↓165cm

体重 72kg↓55kg

階級 技術少佐

所属 日本国防軍技術部第111独立試験小隊及び独立試験飛行小隊

司令

戦歴 日朝戦争 日韓戦争 第三次世界

撃墜撃破数

無し

搭乗機

セスナ スコーピオン

その他

安田悠太とは幼馴染である

コールサイン

前線パイロットではないので無し

理由

無し

生涯

中学の頃から物作りが好きでいろいろなものを作っていた、幼馴染

である悠太と同じ道を選ぼうとしたが体力が足りないことに気づき短大を出て防衛装備庁に入りその後国防軍技術部に引き抜かれる

良いものも作り悪いものも作り陸空混載試験部隊である国防軍技術部第111独立試験小隊及び独立試験航空隊司令に任命される

死因 2020年11月12日地对空パンジャンドラム擬きを作っている最中に

誤って爆破、死亡

親族について不明



## 12話はやい、すごい、やわらかあい

再開②の数日前

宮藤「え？海に行くんですか？」

美緒「そうだ、明日の午前からだ、場所は本島東側の海岸」

宮藤「いやつつたああああ！海だ、海水浴だ！」

宮藤以外「…」

宮藤「あれ？みなさん海嫌いなんですか？」

リーネ「芳佳ちゃん、訓練よ」

宮藤「訓練？」

美緒「そのとうりだ！我々は戦闘中何が起ころうとか対応できなければならん、例え海上で飛行不能になってもだ、それで海に落ちた時の訓練が必要なのだ」

宮藤「なるほど（がつくし）」

美緒「なんだ宮藤、訓練が嫌いなのか？」

宮藤「い、いえそうじゃないですけど…」

ミーナ「うつつふふ、集合場所はここ、時間はヒトマルマル時よ、いい？」

『了解』

ミーナ「宮藤さんは以上の内容を凜さん悠太さんシャーリーさんルツキーニさんに伝えてきて頂戴、シャーリーさんはハンガーにいますと思うわ、ルツキーニさんは……基地のどこかで寝てるわ、悠太さんたちは哨戒から寝出るから食事の際にでも教えてね？」

宮藤「はい！」

ミーナ「そうそう、宮藤さん、ずっと訓練つてわけじや無いのよ？」

宮藤「へ？」

ミーナ「つまり訓練の合間にはたつぷり海で遊べるつてこと」

宮藤「ミーナ中佐つ、行ってきます！、いこリーネちゃん」

リーネ「うん」

タツタツタ

ミーナ「元気ねえ」

美緒「シャーリーはまたハンガーか？」

ミーナ「ええ朝からずっと、そろそろ出てくる頃かしら」

美緒「ふう、うるさくなりそうだ」

通路

リーネ「明日の水着どうしようかなあ？」

宮藤 「持つてないの？」

リーネ 「去年のだから心配なの、入るかどうか……」

宮藤 「へえそんなに背伸びびたの」

リーネ 「あの、背じゃなくて……」

宮藤 「ふえ？」

ドガアアアン

宮藤 「きやつ、な、なに？」

リーネ 「ハンガーの中から」

宮藤 「行こう！」

タツタツタ

宮藤 「シャーリーさん」

シャーリー 「お、よおおどうしたんだ？二人してえ」

リーネ 「あ、あのさっきの音は……」

シャーリー 「お？これのことか？ふふこれはな」

宮藤 「う、ううう、もういいですわかりましたー」

シャーリー 「うん、いい感じだ」

宮藤 「あ、あのシャーリーさん」

シャーリー「ん？何言ってるんだ？」

宮藤「お、音がすごくて…シャーリーさあん音がああ、静かにしてくださいさあああああ  
い」

シャーリー「声が大きい」

宮藤「はっ、ごめんさい、ていうかなんですか？ハンガーで一体何をやってる  
んですか？」

ルツキーニ「うにゆるるさいなあ」

宮藤「うん？」

リーネ「あ、ルツキーニちゃん」

ルツキーニ「せっかくいい気持ちで寝てたのに芳佳の大声で起きちゃったじゃない」

宮藤「ああごめんね」

リーネ「ルツキーニちゃんあの音平気だったなの？」

ルツキーニ「うん！だっていつものことだし」

宮藤「いつも？シャーリーさんいつもこんな轟音立てて」

シャーリー「ストライカーのエンジンを改造したただだよ」

宮藤「エンジンの改造ってどういうことですか？」

シャーリー「おいで見せてあげる」

く滑走路く

宮藤「あのエンジンの改造って」

シャーリー「魔導エンジンの割り振りをいじったんだよ」

リーネ「割り振りって攻撃や防御に使う分のエネルギーを変えてるんですか？」

シャーリー「そういうこと」

リーネ「一体何を強化したんですか？」

シャーリー「もちろん速度」

ルツキーニ「シャーリー！」

シャーリー「おう！」

ルツキーニ「Go！」

宮藤「きやつ」

リーネ「きやつ」

轟音と共に滑走

ルツキーニ「いつけええ、シャーリー！」

宮藤「すごい、なんで加速」

ルツキーニ「まだまだ」

バルコニー

美緒「一気に上がったな」

ペリーヌ「高度1000mまで50秒今までにない上昇速度ですわ少佐」

ミーナ「ピーキーに仕上げたわね」

悠太「おう三人方向をやってるんだ？」

ミーナ「シャーリーさんの試験よ」

悠太「そういやエンジンとかいじってたな」

美緒「お手並み拝見だ」

シャーリー「いくよマーリン、魔導エンジン出力全開！」

リーネ「シャーリーさんまだ加速してる」

ルツキーニ「時速770km、780、785、790」

宮藤「す、すごい」

ルツキーニ「800km突破、記録更新だよ！」

ブブブン

ルツキーニ「いつけえええ」

シャーリー「もつとだ、もつとだ」

バルコニー

ペリーヌ「速度が止まります」

美緒「どこまでいった？」

ペリーヌ「800を超えたあたりから

美緒「そうか800を超えたあたりから伸びなくなるのか」

悠太「妥当だなあとというよりかよくそこまで速度が出るな」

ミーナ「妥当？」

悠太「妥当、レシプロで音速を越えるのは不可能に近いだろうな自分たちの世界でも特殊な機体で920kmがだな、それもレシプロと言えるか怪しいし」

美緒「どんな機体なんだ？」

悠太「まあロシア製の大型爆撃機だなこつちでいうオラーシャ製だな」

美緒「ふむ…」

ミーナ「やつぱりこれが限界なのかしらね」

美緒「音速はまだまだ遠いな」

滑走路

ルツキーニ「シャーリー記録更新だよ」

宮リ「すごかったです」

シャーリー「やったああ、あ、」

「ぎゃああ」

シャーリー「お腹減ったあ」

宮藤「これなんですか？」

リーネ「グラマラス・シャーリー新記録ってバイクの記録ですか？」

ルツキーニ「シャーリーはパイロットになる前はバイク乗りだったんだって」

シャーリー「ボンネビル・ソルトフラッツって知ってるか？」

宮藤「ボン…」

シャーリー「イベリオンの真ん中にある見渡す限り全て潮でできた平原さ」

リーネ「そんなところがあるんですか」

シャーリー「そこはあたしらスピードマニアの整地だ」

シャーリー「そこで記録を破った日耳にしたのさ魔導エンジンを操って空を舞う世界最速の魔女たちの話をね、その日にあたしは軍に志願して入隊、で今ここでこうやってるってわけ」

リーネ「だから任務のない日にスピードの限界に挑戦してるんですね」

宮藤「最速かすごいなあ、それってどこまで行けば満足するんですか？」

シャーリー「そうだな、いつか音速、マッハを超えることかな」

宮藤「へっ？音速ってなんですか？」

シャーリー「音の伝わる速度だよ、大体時速1200kmぐらいさ」



リーネ「そんな速度を出すなんて本当に可能なんですか？」

シャーリー「さあねでも夢を追わなくなったらお終いさ、今日はここまでつと」  
この後大事件が起こることを知らない

# 13話いっしょだよ

13話いっしょだよ

C-1 トレーダーコックピット

悠太「することねえな」

凜「うーむまあ飛ぶだけだし、民間パイロットなら基本オートだから辛いんだろうけど我々軍パイロットで手動には慣れてるからなあ…」

悠太「そういやC-1って操縦したことある？」

凜「あー…川崎川崎C-1の方ならよく載ってたけどレシプロのやつ2回ぐらいあるよ」

悠太「えー、日本に居たっけ？」

凜「いやさ、日韓の時にブラジルの空母機動艦隊きてたんじゃん」

悠太「あーきてたな」

凜「そんな時に観戦武官を輸送する時に日本って空母着艦機いなかったじゃん、んでブラジル海軍がトレーダーを貸し出してくれたのよね」

悠太「履歴書に書いてなかった気がするけどなあ…」

凜「あ、書き忘れてたのかも」

悠太「いつものかあ」

凜「テヘペロ」

悠太「なんかカチンときたな」

悠太「んーサーニヤの歌声が聴こて来たな」

凜「お、本当だならもうすぐだな」

悠太「ちよつくらミーナたち見てくるさね、ユーハブ」

凜「了解、アイハブ」

同Cー1機体

美緒「んうう」

ミーナ「不機嫌さが顔に出てるわよ、坂本少佐」

美緒「わざわざ呼び出してなにかと思えば予算の削減だなんて聞かされたら顔にも出

るや」

ミーナ「彼らも焦っているのよ、いつも私たちばかりに戦果を挙げられてはね」

美緒「連中が見てるのは自分たちの足元だけだ」

ミーナ「戦争屋なんてあんなものよ、もしネウロイが現れていなかったら、あの人た

ち今頃人間同士で戦いあつてるのかもね」

美緒「さながら世界大戦と言いたいがその犠牲者が2人も居るんだ」

悠太「まあ同じ人だろうと仲良くはできないさ」

美緒「おお、悠太、また悪いな操縦してもらって、宮藤もすまないなせつかくだからブリタニアの町でも見せてやろうと思ったのにな」

宮藤「私はその、軍にもいろいろな人がいるんだなーってあの、なんか聞こえませんか？」

美緒「ん？」

悠太「サーニヤの歌だよ迎えに来たようだな」

宮藤『ありがとう』

悠太「別に迎えに来なくても良いんだけどねえ…」

ミーナ「なんでかしら？」

悠太「一樣この機体、レーダーも武装も付いてるし、サーニヤと並走するなら出力もある程度、落とさないといけないからストールがこん？降下してい」

凜『悠太、前方10000敵機3確認！』

悠太『クツソこんな時にかよ、要撃に当たるからレーダー見といてくれ！』

凜『了解』

ミーナ「どうしたのかしら？」

悠太「前方10000に敵機3機確認出そうだ」

宮藤「えつと、どうすれば…」

悠太「とりあえずシートベルト付けとけ、」

と言いなからボタンをぼちぼちしてる

悠太「パイロンのミサイル異常ないな」

凜『ミサイル異常なし、ロック解除確認』

悠太『空対空戦闘準備は？』

凜『問題なしいつでもどうぞ』

悠太『ちよつと待ってろ、今銃座に座るから』

どっこいしよと言いなから座り

ボタンをぼちぼちし

悠太『敵機補足、FOX1』

凜『発射確認』

数分後

凜『1発目ヒット撃墜、2発目ヒット撃墜、3発目ハズレ』

凜『こちらC-1、サーニヤちゃん聞こえる？』

サーニヤ『凜さん聞こえます』

凜『とりあえずは戦闘は避けて、バルクホルン大尉達が上がって来てるから、もし戦

闘になりそうなら言いなさいいいね?」

サーニヤ《はい》

凜『敵機こちらを無視して別方向に飛行中』

悠太『うーむどうしたのか…』

と言いながら銃座から立ち上がりコックピットに戻る

悠太「まあ、んあ!」《サーニヤ、前方1000にもう一機確認、可能ならば遊撃戦闘にあたれ》

サーニヤ《了解です》

カチツと安全装置を外す

ズドンズドンと2発のロケットを放つ

数十秒後雲に大きな穴が開く

悠太「よくもまああんな小さい子が武装なもん振り回しせるよなあ…」

凜「同感だわ」

4 発放つ

悠太「んー反撃して来ないのか…」《こちら悠太、サーニヤ帰還せよ》

サーニヤ《でもまだ敵機が…》

悠太《君も見たいだろう? 一撃与えて反撃して来ないってことを、もう少しでバルク

ホルンが上がってくるはずだから大丈夫だよ、あと攻撃されてもこの子だと避け切れると思うし》

サーニヤ《了解です》

以下バルクホルン大尉

バルクホルン「あそこだ」

エイラ「サーニヤ！」

ペリーヌ「ちよつとエイラさん勝手なことを」

バルクホルン「いや良いだろう、戦闘は終わったようだ」

基地に戻り

バルクホルン「それじゃあ今回のネウロイはサーニヤ以外誰も見てないのか？」

悠太「うんにや、私と凜がリーダーで確認してるよ」

と窓から雨が降る外を見ながらいう

坂本「まあそれでも雲から出てないからな」

エーリカ「何も反撃して来なかったって言うけどそんな事あるのかな、それ本当にネウロイだったのかなあ…」

サーニヤ「うう…」

リーネ「恥ずかしがり屋のネウロイとか…無いですよね…ごめんない…」  
ペリーヌ「だとするとちょうど似たもの同士気でもあったんじゃないやなくて

エイラ「ベアー」

ミーナ「ネウロイとは何か…それが明確に何かわかっていない、この先どんなネウロイが現れるか不思議でもないわ」

バルクホルン「しそんじたネウロイが連続して出現する可能性は極めて高い」

ミーナ「そうね…悠太さん達の意見は？」

悠太「そんなことよりせめて服をだな…」

悠太、坂本、凜を抜く一同『えっ』

凜「あ、地雷踏み抜いたな」

悠太「あ、ちよバルクホルン（赤面）さん…そんな魔法力を出し殴らんで…いっつっただあああああ」

と殴られた宙を舞い地面に落ちる

ポワンと悠太の頭から秋田犬の耳が出てくる

宮藤「悠太さん！」

悠太「いっつったいなあ…」と立ち上がる



ミーナ「えっ…」

凜「久々に悠太が宙を飛んだところ見たわw」

悠太「いや、久々に思つくそ殴られたわ」

宮藤「治療を…」

悠太「安心せい治るから」

宮藤「いや治療しないと治るものもなおら…えっ？治ってる」

悠太「いやねえ…バルクホルン大尉？」

バルクホルン「…」

悠太「取り敢えず、本当にすまない」と頭を下げる

ミーナ「え？」

悠太「まあ完全に私が悪いですね、ええ…」

凜「マジでこいつ地雷踏み抜くこと多いからなあ…前の時は運悪くとあるパイロットの彼氏云々で殴られて30mぐらい飛んだし」

悠太「もうね、いいよ諦めてるよ」

バルクホルン「すまない…」

悠太「取り敢えず話を戻して、まあ緊急夜間哨戒を組むってことでいいかな？」

ミーナ「ええそうね」

凜「面子<sup>メンツ</sup>は？」

悠太「取り敢えず、メインた…有事の際の治療及び夜間飛行の訓練の意味も含めて、宮藤芳佳、サーニヤあとは…一様予備リーダー機として凜かな」

エイラ「はい、はい、私もやる！」

悠太「ならエイラもだな、と言うかなんで私が仕切ってるんだ？つてので隊長<sup>ミーナ</sup>さんあとはよろしく」

ミーナ「え、ええなら編隊長として悠太さんも参加ね」

悠太「了解」

ミーナ「解散よ！」

『了解』

翌日

悠太「(さあていくか)」

凜「編隊編成は？」

①

②③④

⑤

悠太「かな」

① 悠太

② 宮藤

③ サニーニャ

④ エイラ

⑤ 凜

凜「まあ悠太がメイン盾で、宮藤がサブ盾、サニーニャがメインリーダー、私がサブリーダー、てえてえ要員のエイラと」

悠太「なんか不純物がいるけどまあそんな感じ」

(途中にある三人のてえてえは特に描く気がって感じですよびません)

悠太「お?来たな」

みんな乗り込み

悠太「みなさんいいか?」

『はい』

宮藤「あの…手を繋いで…」

悠太「なら宮藤とサニーニャが交換で、エイラとサニーニャがエスコートしてやってくれ」

サニーニャ「え?」

エイラ「怖いのか?」

悠太「まあ宮藤は初めてだし怖いだろ？」

宮藤「は、はい」

悠太「良いか？サーニヤにエイラ？」

サーニヤ「わかりました」

エイラ「し、仕方ないんだな」

悠太「さて、離陸しますか」

凜『最後尾、離陸準備問題なしどうぞ』

悠太「離陸開始、ちゃんと手を繋いで登ってこいよ？」

宮藤達よりもすぐ分先に雲の上と出る

凜『こちら最後尾、もう少しで雲を抜けると思う』

悠太『了解、こちらは先に抜けて待機してるよ』

本隊も雲を抜け大空に

芳佳「すごいなあ！私一人じゃ絶対こんなところまで来れなかったよ、ありがとう

サーニヤちゃん、エイラさん凜さん！」

サーニヤ「いいえ、任務だから…」

その警戒をし特に接敵せずに帰還し

（1944年8月18日）

## 格納庫

悠太「はあ？16と27を整備するために一度ノイエに送るってえ？その間俺らの搭乗機どうするんだよ！」

秀太「その間はD0335F—RMに乗ってもらおうよ」

悠太「はあ、わかったよ、いつ頃整備終わるんだ？」

秀太「すまんがわからん……」

悠太「はあ、わかったよ、持つてけこつちも飛行中にエンジンが壊れて落ちても困るからな」

凜「まあそうだよなあ」

秀太「あきらめろ！ほいこれD0335F—RMだよ」とC—1トレーダーから木箱を取り出し開けてみせる

悠太「まあ、わかったよ」

秀太「ならこれにサインを」

悠太「と言うかなんでわしがサインするんだ？本来ならミーナあたりがするだろうし」とサインを書きながら言う

秀太「え？お前知らんの？501JFWの副司令だよ？」

悠太「え？え？」

秀太「知らされてないのか…」

悠太「はあいつかミーナを聞いたただすか」

凜「女性をいじめるな」

秀太「一樣君も副司令の補佐官だからね？」

凜「前言撤回、私にも手伝わせろ」

悠太「手のひらくるくるう」

秀太「よしなら帰るわ、さいなら」

悠太「さいなら」

凜「さいなら」

同時刻 リビング

ポンとある飲み物が置かれる

ペリーヌ「これは？」

宮藤「肝油です、ヤツメウナギのビタミンたっぷり目にはいいですよ」

エーリカ「すすすん、なんか生臭いぞ」

バルクホルン「魚の油だからな、栄養があるなら味など関係ない」

ペリーヌ「ハツハーいかにも宮藤さんらしい野暮ったいちよいすですこと」

坂本「いや持ってきたのは私だが」

ペリーヌ「あ、ありがたう、頂きますわ！」  
と肝油を一气飲みする

ルツキーニ「うええなにこれえ」

シャーリー「エンジンオイルにこんなのあつたな」

エイラ「つべつべ」

サーニヤ「・・・」

坂本「新米の頃は無理矢理の飲まされ往生したものだな」

ペリーヌ「おぎもぢおさつじじまず」

ミーナ「もういつぱい！」

エーリカ「ああ・・・」

バルクホルン「まずい・・・」

タツタツタ

ガチャ

悠太「何この状況」

ミーナ、坂本、宮藤以外机にうつ伏せ

と言うと無言で宮藤がかんゆのは一斗缶を見せてくる

悠太「ああ、なるほど」

凜「リーネいなくね？」と悠太に耳打ちする

悠太「確かに居ないな、まあ花摘みにでも行ってるんやろ」

サーニヤ部屋及び夜間詰所

宮藤「ねえーエイラさんとサーニヤちゃんの故郷ってどこ？」

エイラ「私、スオムス」

サーニヤ「オラーシャ」

宮藤「えつと…それってどこだっけ」

エイラ「スオムスはヨーロッパの北の方、オラーシャは東」

宮藤「そつか…ヨーロッパって確か殆どがネウロイに襲われたって」

サーニヤ「うん、私の住んでた街もずっと前に陥落したの」

宮藤「じゃあ家族の人たちは？」

サーニヤ「みんな街を捨ててもっと東の方に避難したの、ウラルの山々を超えてもつ

とずっと向こうまで」

宮藤「そつかよかった」

エイラ「何が良いんだよ、話聞いてないのかオマエ」

宮藤「だって今は離れ離れでもいつかまたみんなと会えるってことでしょ？」

エイラ「あのなオラーシャは広いんだぞ、ウラルの向こうつたて扶桑の何十倍もある



んだ、人探しなんて簡単じゃないぞ、大体その間にはネウロイの巢立ってあるんだ」

宮藤「そつか：そうだよね、それでも私は羨ましいな」

エイラ「往生だなオマエ」

宮藤「だってサーニヤちゃんは早く家族に会いたって思ってるんでしょ？」

サーニヤ「うん」

宮藤「サーニヤちゃんの家族だって絶対早くサーニヤと会いたって思ってるはずだよ」

サーニヤ「うん」

宮藤「そうやって、どっちも諦めないで居ればきつといつかは会えるよ、そんな風に思えるのって素敵なことだよ」

ガチャと扉が開き

凜「あれ？まだ起きてたのか、寝るぞ君たち」

宮藤「あの、凜さんの故郷はどこなんです？」

と宮藤が聞き

凜「日本：いや扶桑の宮崎だよ」とドアを閉め壁に寄りかかりながら言う

宮藤「家族の人たちは？」

凜「聞きたい？」

宮藤「はい」

凜「両親は死んだよ、姉妹がいるわけでもないから今は一人だけだよ」

宮藤「えっ：すみません、聞いてしまつて」

凜「良いや良いのさ、それよりも寝ような」

と言いながら壁に寄りかかりながら寝る

数時間後 ブリタニア上空

宮藤「ねえ、聞いて、今日はね私の誕生日なの！」

サーニヤ「えっ？」

エイラ「なんで黙ってたんだヨ！」

宮藤「私の誕生日はお父さんの命日でもあるんの、なんだかややこしくてみんなに言いそびれちゃった」

エイラ「バカだなあオマエ、こういう時は楽しいことを優先したつていいんだゾ」

宮藤「ええ、そういうものかなあ」

サーニヤ「宮藤さん、耳を澄ませて」

宮藤「えっ？」

宮藤「アレ？なんか聞こえて来たよ」

悠太「国際放送か」

サーニヤ「夜になると空が静まりからずと遠くの山や地平線から電波も聞こえる様になるの」

宮藤「へええ、すごいすごい、こんなこと出来るなんて」

サーニヤ「うん、夜飛ぶ時はいつも聴いているの」

エイラ「二人だけの秘密じゃなかったのかヨオ」

サーニヤ「ごめんね、今夜だけは特別」

エイラ「チエ、しようがないあ」

宮藤「え？どうしたの？」

サーニヤ「あのね」

エイラ「あのな、今日はサーニヤの」

サーニヤ「はっ…」

エイラ「どうした？ん？ナンダ？」

宮藤「これ歌だよ」

サーニヤ「どうして」

501 基地管制塔

ミーナ「これがネウロイの声」

坂本「サーニヤを真似てるってのか？サーニヤは？」

ミーナ「夜間飛行訓練中のはずよ、宮藤さん達と一緒に」

坂本「すぐ呼び戻せ」

ミーナ「無理よこのじょうたいしやどこに居るかも」

坂本「どうか、敵の狙いは」

夜間飛行組

サーニヤ「どうして…」

エイラ「敵か？サーニヤ」

宮藤「ネウロイなの？どこ？」

悠太「クソ、EA電子攻撃か」

凜「どうする？悠太」

悠太「どうするも何もECM電子対抗手段がある訳じゃないから何も出来んよ」

サーニヤ「四人とも避難して！」と言うとエンジンを吹かして上昇する

悠太「まずいつ！」と共にエンジンを吹かす

とこれを好機に見たのかネウロイがビームを放つ

サーニヤに当たると思われた瞬間

悠太がサーニヤを吹き飛ばしシールドで防御

防御仕切ったと思われたがそんな事はなく左エンジンに被弾

サーニャ「キヤツ！」

悠太「うがっ…」

エイラ「サーニャ！」

宮藤「サーニャちゃん、悠太さん！」

凜「悠太！」

悠太「へっへ、これで落ちるわけなからう」と言うのと被弾したユニットを切り離す

エイラ「バカ！一人でどうする気だったんだよ」

サーニャ「敵の狙いは私…間違えないわ、私からは離れて、一緒にいたら…」

エイラ「バカ何言ってるんだ」

宮藤「そんなことできるわけないよ！」

悠太「バカ言うんじゃないよ、一人だけ狙われてる？なら全員と殴ればいいんだよ」

宮藤「悠太さん！」

サーニャ「だつて…」

と言いつつエイラはサーニャから武器を取り

エイラ「サーニャは私に敵の居場所を教えてくれ、大丈夫、私は敵の居場所を先読みできるから、やられたりしないよあいつはサーニャじゃない、あいつはひとりぼっちだ」

けどサーニヤは一人じゃないだろ、私たちは絶対に負けないよ」

悠太「俺ら手伝わせろな」と言いながら胸のポケットからタバコを取り出し火を付けて啜える

サーニヤ「ネウロイはベカとアルタイルを結ぶ線の上を真っ直ぐこっちに向かってる、距離約3200」

エイラ「こうか？」

サーニヤ「加速してるもつと手前を狙って、そう、あと3秒」

エイラ「当たれよ！」と3発のロケットを打ち込む

悠太「当たってくれよ」と1〜2秒撃つ

ドルルルルルルと弾が放たれる

ロケットがドーンドーンと2発着弾し、最後の1発は大きな爆発を引き起こす

エイラ「外した？」

サーニヤ「いいえ、速度が落ちたわ、ダメージを与えてる、戻ってくるわ」

エイラ「戻ってくんナ」

とロケットを2発放つ

宮藤「避けた！」

エイラ「クソ、出てこい」ロケットを1発放つ

宮藤 「出て来た！」

サーニヤ 「エイラ、ダメ避けて」

エイラ 「そんな暇あるか」

悠太 「撃て」

と凜と同時に10秒間近くトリガーを引く

ドルルルルルルルルと20mm弾と30mm弾の雨がネウロイに襲う

悠太 「硬えな」

と言うと

宮藤がシールドを全面に貼る

悠太 「気がきくな、宮藤」

宮藤 「大丈夫、私たちきつと勝てるよ」

凜 「それがチームよ」

と言うとネウロイの装甲が剥がれ落ち始め核コアが見え、粉碎コブされてる

エイラ 「また聞こえる」

宮藤 「何でやつつけたんじゃ…」

サーニヤ 「違う、これはお父様のピアノ」

とエンジンを軽く吹かし上昇して行く

宮藤「そうか、ラジオか、この空のどこから届いてるんだすごいよー奇跡だよ」

エイラ「いやそうでもないカモ」

宮藤「えっ？」

エイラ「今日はサーニヤの誕生日だったんだ、正確には昨日かな」

宮藤「なら私と一緒に？」

エイラ「サーニヤのことが大好きなら、誕生日を祝うなんて当たり前ダロ？世界のどこかにそんな人がいるんならこんなことだって起こるんだ、奇跡なんかじゃない」

宮藤「エイラさんって優しいね」

エイラ「そんなんじゃないよバカ」

宮藤「バカって…」

サーニヤ「お父様、お母様、サーニヤはここにいます、ここにいます」

宮藤「お誕生日おめでとうサーニヤちゃん」

サーニヤ「あなたもでしょ？」

宮藤「へっ？」

サーニヤ「お誕生日おめでとう、宮藤さん」

エイラ「おめでとナンダナ」



悠太「おめでどう二人とも」

凜「おめでどう」

宮藤「…ありがとう」

翌朝

坂本「今回のネウロイは明らかにサーニヤにこだわっていた、行動を真似してまで」

ミーナ「ネウロイに対する認識を改めないといけない必要があるわね」

坂本「上の連中、この事をどこまで知ってると思う？」

ミーナ「さあね、私たちより多くの事を掴んでいるのかも」

坂本「うかうかしてられないか」

# 14話 密談、強盗、空襲、防空、魔女、子供

501基地早朝5時

悠太「行つてもいいか？」

凜「いいよー」

悠太「いくぞー」

と小型の貨物を牽引してるイベリオン製

のジープを走らせ数時間、

着 10:43分

悠太「さてここがブリタニア連邦の首都ロンドンだ、んでこつからナンバ<sup>首</sup>ー<sup>相</sup>10<sup>官</sup>に向

かうぞー」

とまた車を走らせる

門番憲兵隊「ここから先は立ち入り禁止です、お帰り下さい」

悠太「あーすまない」と軍隊<sup>身分証明書</sup>手帳を見せる

門番憲兵隊「ハッ！大佐殿でしたか、お入りください」

と門を開ける

悠太「おう、すまん」

と車を発進させる

車から降り建物内に入り首相室前に立ち

コンコン

悠太「安田悠太、及び安田凜来ました」

??「入れ」

悠太「お久しぶりですチャール首相」

チャール（以下首相）「ああ…座ってくれ」

悠太「話と言うのは？」

首相「話をしよう、マロニー一行の動きが怪しくてなついてだ」

悠太「マロニーか…」

首相「そうだ、501の解体を目論んで居るみたいだ」

凜「なんと！」

悠太「それは頂けませんね、他国との関係悪化に繋がりがねないのでは？」

首相「そうだ、我々はそれを危惧をしているのだ、ださら早期に手を打ちたい、それで君たちには内通者の役割を否ってほしい」

悠太「内通者？」

首相「内通者と言ってもマロニーが何かしたらだ、そのために基地近くに憲兵一個中隊を配備した、名前は『イギリス』だ」

悠太「ええ、わかりました、あとどうやって伝えればいいのです？」

首相「それに関しては無線を使って『太陽の沈まない帝国』と言えば速やかに動くだろう、出来ればその時にある程度情報が欲しいがな」

悠太「了解です首相あとは？」

首相「あとはだな：そういうえば今日、501のエーリカ・ハルトマンが250機撃墜で柏葉剣付騎士鉄十字章を受章でしたな」

悠太「たしかにそうですよ」

首相「個人からではあるがこれを持っていってくれ」と菓子箱を渡す

悠太「何と言ってお渡しすれば：」

首相「『ブリタニア首相からささやかなお菓子のプレゼント』かな」

悠太「お預かりいたしましたチャール首相、我々はこの辺で」

首相「このあとはすぐに基地に戻るのかね？」

悠太「そうですが何か？」

首相「いや暇ならば軽く街を観光して見ては？と思つてだね」

悠太「息抜きですか」

首相「そうだ、我々のために戦っているのだ少しぐらい休んでも怒られはしないだろう、あと〃もしブリタニア軍で気になることがあったら教えてくれ、対応する・

悠太「?ああ、了解いたしました、ではこれで失礼します」

凜「失礼します」

と部屋をで車に戻ると

胸ポケットに居るスマホが?ラウインノと鳴る

悠太「ん?」

と言うと胸からスマホを取り出し確認する

首相：久しぶりだな、安田悠太 私だ山川健二だ覚えてるか?

やまかわけんじ

悠太：そりや覚えてますよ、山川さんも亡くなったあとこちらの世界に?

首相：そのようだ、ひとつだけ言わせてくれ

悠太：なんです?

首相：首相するの疲れた

悠太：は?何言ってるの頑張れよ、じゃ

凜「なんて?」

悠太「首相は山川健二だったよ」

凜「???」

悠太「我々も同様、転生でこちらにきたみたいだな」

凜「山川健二って第一目国防大臣の？」

悠太「そう」

凜「山川健二と会ったことあるの？」

悠太「個人的に飲みに行くぐらい仲は良かったよ」

凜「初めて知ったよ」

悠太「まあ聞かれないからな、それより今から軽く買い物行くぞー」

凜「りようかーい」

ある程度車を走らせる

悠太「降りるぞ凜」と言いながら肩掛けバックをつけて右内腿にどこから入手したの

か不明のM9、腰には服で隠すようにグロック17が装備されている

凜「おけ行くか」と言う彼女と同様に肩掛けバックを付けている

悠太「最初は…あつたあつた雑貨屋」

凜「なら私は隣の服屋に行くわ10分後な」

悠太「服屋行くなら適当なジャンパーよろしくね」

凜「了解、ならそつちは…特にないやなんか適当に頼む…」

悠太「適當にってまあわかった」  
と言いだちらも店に入る

10分後

悠太「さて買うもん買ったな、ここで待ってるか」

凜「おーい悠太買ってきたよー」

悠太「お？どんなのだ？」

凜「ほいこれ」と茶色の皮のジャンパーを投げってくる

悠太「なんよこれ米空軍のA-2じゃん」

凜「良いのがそれぐらいしかなかった」

悠太「ほいこれおめえさんに」と茶色ヘアピンを渡す

凜「おお、ありがとうちよつと前の訓練でヘアピン飛んでったんだよな」

悠太「それならよかった、よし行くぞ」

凜「吉幾三ー」

と軽く歩き

後ろの方から「強盗だ、金を出せ！」っと声が聞こえる

悠太「どうする？やる？」

凜「やっっちゃうか」

と言うかと悠太は腰からグロックを取り出し凜はバックを開けステアーTMP（9 m mパラ仕様）を取り出す

人が逃げて行く中それを逆走する男女二人

銀行の近くまで行くと

悠太「凜は敵の増援が来るだろうからその対応を」

凜「了解、久しぶりの対人戦闘だ」

悠太「おい、クソツタレの強盗野郎さんよ、死になくなければ早よ人質を逃して出て来い」

とグロックを腰に戻し、銀行のドアの前に立つ

強盗「おめえみたいなガキの話、誰が聞くかバアカ、あとおめえは誰だよ」

とトンプソンを持ち黒服に黒いニット帽を被った白人男性は言う

悠太「通りがかかった一般人だよ」と言いながら銀行内に入る

強盗「それ以上近づいたらう、撃つぞ」と銃を向けながら言う

悠太「ああ、撃つても構わないさ」

と言った瞬間後ろからトラックらしき音が聞こえる

悠太「トラックが来たな、私のお仲間ではなさそうだな」

強盗「そ、そうだ俺の仲間だ」



悠太「やれ」大声で言う

数秒後にタンタンタンタンタンタンと言う音とともに叫び声が聞こえ始める

強盗「な、なに……」

悠太「さーて、多分君の仲間さんは死んだけどどうする？降参する？降参するなら銃をこちらに投げろ、そして手を頭の後ろにつけ伏せろ」

強盗「ふ、ふざけるな！」

と言いつつトンプソンをこちらに向けて打ち始める

が悠太はシールドをひらいで防ぐ

悠太「これで死ぬとでも思ったか？残念私は魔術師だ」  
ウィザード

強盗はそれでもリロードをし打ち始める

悠太「本当に死にたくなければ撃つのをやめて銃を捨てろ」

と言いつつ強盗は

強盗「丸腰のやつに何も言われる理由はねえ！失せろ！」

と腰からリボルバー取り出し打ち始める

悠太「（これ以上やると民間人に被害が出る可能性があるな）」  
と思い腰からグロックを取り出し

悠太「これならどうだ？」と銃を向ける

強盜「ガキが人に向けて撃てるわけがない！」

と言いつつ

悠太「はあ…穩便に済ませなかつたんだかな」と言いながら強盜の両膝にパンパンと撃ち込む

強盜がうがつ…と言いなから崩れ込む

悠太が近づき強盜が持つてるリボルバーを取り弾を捨てる

悠太「なんで強盜したかなあ…どうせあれだろ？軍からの落ちこぼれだろ？面倒ごと起こしやがつてめんどくせえ奴らだよ本当」

と言いなから魔法陣を出し強盜の両膝を治療する

強盜の両手を掴み銀行の外に出ると5人程度倒れている

悠太「凜、さて何人生きてると思う？」

凜「一様全員急所は外したと思うから全員かな…それよりも憲兵がもう来るよ」

悠太「あーあの車かな」

と大型トラックが3両ほどつき、強盜は？と話しかけてくる

悠太「これが強盜の一人ですよ」と強盜を押し付ける

憲兵①「えつとあなたは…」

悠太「ほいこれ」と軍隊手帳を見せる

憲兵①「なつ、501JFW所属のウィッチ…」

悠太「とりあえずそこに転がってる瀕死体の治療しても？」

憲兵①「治療？」

悠太「一様、治療魔法使えるので」と言うと大きな魔法陣が地面に描かれてそこに倒れてれる5人の強盗一味を同時に回復される

憲兵①「ふ、複数人を同時に治療…」

悠太「おいそこの憲兵、その犯人たち捕まえてくれー」

と強盗が全員捕まり

トラックに乗せられドナドナされてゆく

最後のトラックも行き

悠太「絶対ミーナ怒ってるよなあ…」

凜「うーん同感」

悠太「さーて昼飯でも食いに聞か食うのはクソまずいブリタニア料理だけだな、この辺に美味しい飯屋がないか、そこに交番があるから聞いてみるか」

と車を交番の近くに止め聞きに行く

悠太「あのその警察さん、この辺に美味しいご飯屋さんとか無いですかね」

警察「ん？なんだ観光客か？飯屋かあ…ならそこを右に曲がったところに…」

うううううううう

悠太「空襲警報！今日は来ないんじゃないやわなかったのかよ、警察さん、民間人の避難誘導を」

警察「お前は？」

悠太「あの飯すら食わせてくれないクソツタレなねうよいを落として来るのさ」

警察「なんだ？パイロットか？」

悠太「ま、そんなところかな」

と言いつつジャンパーを脱ぎ

ジープへと走り

凜「国籍不明機アンノンは高度5000mを今250ノットで飛行中、位置はロンドンからイギリス海峡側に向かって31kmぐらい、ちょうど真ん中だロンドン中心部まで約40分つてところ」とジープの後部座席積んである無線を弄りな言う

悠太「他の遊撃隊は？」と牽引していた貨物内に入っているD0335のユニットの出撃準備しながら聞く

凜「501もロンドン防空隊も間に合わないそうだ」

悠太「何と不運な、武装は何があつたつけ…」

と言ひ貨物庫の武器入れを見る

悠太「あー、MG42が2丁だ」

凜「なら私は良いや、スティーTMP相棒があるし」

悠太「マガジン数数は？」

凜「50拡マガが2と通常30発が5」

悠太「250か、足りるか？」

凜「MGで気を引いてこつちで撃つ」

悠太「わかった、取り敢えず先に飛べ」

凜「了解」と言いユニットに飛び乗り

凜「フェアリー、出る！」勢いよく飛び出る

悠太「行つてこい！」と言ひながら自分の発進準備をする

2分後

悠太「ふうサーヴァント、出る！」と勢いよく飛び出す

エンジンをフルで吹かし凜の隣につき

悠太「うーむどうするか」

と言ふと無線から

無線《あー消えるか？こちらロンドンタワーの誘導官だ》

悠太《聞こえる》

誘導官《貴機の所属は？》

悠太《501JFW所属だ、今日は運悪くこちらに買物に来ていてな》

誘導官《ネウロイ1機大型クラス、高度4000mに降下し速度は270ノットへと増速している、気をつけられたし》

悠太《了解、忠告ありがとう》

誘導官《遅延戦闘でもすれば貴機が到着後10分で防空隊が到着する》

悠太《了解、オーバー》

悠太「さて凧、敵機は見えてきたかな？」

凧『見えてきたよ』

悠太「作戦は？俺がヘッドオン仕掛けて凧がその間に攻撃してコアを探すか  
？」

凧『まあそんな感じ、あと15kmぐらいだ』

悠太凧『FOX2』

と言うと翼下に懸架していたミサイル計4発が放たれる

ミサイルを放った直後

凧は下に降下した

悠太「俺がヘッドオンしてる間に腹を上手く殴れよ」

凜「了解」

悠太「ミサイル命中、ネウロイは回復してるよ」

ネウロイとの距離1キロを切り

悠太が持つ2丁のMG42Sを撃ち始める

秒間計40発でネウロイの装甲を削り取る

悠太「今だ！」

と言った瞬間下からネウロイの胴体に9×19mmパラベラム弾が突き刺さる

凜「コア見つけた！」

と言いマガジンリロードし銃口をコアに向け10発近く打ち込む

パリンと言う音と主に小さな破片へと変わる

悠太《ロンドンリーダー官へネウロイを撃墜繰り返す、ネウロイを撃墜 オーバー》

誘導官《よくやったロンドン市民が大喜びだ》

悠太《了解、これより車両に戻る》

誘導官《クロイドン空軍基地に来てくれ》

悠太《車両は？》

管制官《交番の近くの車両でしょう？あれなら陸軍が持つて来るそうです》

悠太《了解》「凜聞いてたか？」

凜「うん聞いてたよ」

悠太「よしいくぞ」

数分後

悠太《クロイドンタワー、サーヴアント、着陸許可を求む》

凜《クロイドンタワー、フェアリー、着陸許可を求む》

管制官《こちらクロイドンタワー、2機ともリーダーで確認、着陸を許可する、ぶつ

かるなよ？》

悠太《訓練生じゃないだからそんなハマするかよ》

とゆっくり滑走路に近づき接地する

悠太《管制塔、ここを曲がればよろしいか？》

管制官《そうだ、そこを曲がれば格納庫があるからその中にユニット台がある》

悠太《了解》

曲がり格納庫内にユニットを止める

そして整備士が寄って来る

整備士「何だこの機体……」

悠太「ああ……カールスラントの新型だよ」



整備士「扶桑人がなぜカールスラントの新型を運用してるんだ？」

悠太「本来なら別の機体なんだが今整備のために本国に帰ってるんだ、だからその間にカールスラントからこの機体の実戦テストパイロットになってくれとの事だ」

整備士「何かわからないものがあるがこれは？」

悠太「あーそれは誘導ロケットだよ、詳細については機密事項だから、その予備は501基地にしかないから、今は燃料補給程度でいいよ、被弾してないし、彼女の機体も同じだから同じようによろしく」

整備士「了解です、あと基地司令が読んでました」

悠太「司令の所行くぞ凜」

凜「おう待て、靴履かせろ」

悠太「先に行くわ」

と格納庫から出てゆく

凜「待ってて言ったろ？」

と追いかけて来る

悠太「基地司令は何処かなあ…」

凜「無視すんなコラ」

悠太「ここかなあ」と白のコンクリートで出来たここに司令室ありますよ感を出す建

物内に入ってゆく

とドアを開けると少女が二人いる

悠太「そこのお二人さん、司令室知らない？」

①「…」と左手で右腕を隠そうとしつつ、右方向に右腕をで動かし指を刺している

悠太「右側？」

①「…」コク

悠太「んぁありがと（扶桑人だし何故ここにいる？何故喋らない？あとなぜ右腕を左腕で隠した？もしかして常習的な暴力か？）

コンコン

??「入りたまえ」

悠太「基地司令官でありますか？」

司令「第92飛行隊クロイドン司令のトーマス・ジャック大尉です」

悠太「どうも501JFW副司令の安田悠太大佐だ、よろしく頼む」

凜「同部隊所属の安田凜中佐ですよろしく」

悠太「何個か聞きたいんだが良いか？」

司令「何でもどうぞ」

悠太「どうしてロンドン市街にネウロイの侵入を許した？」

司令「この地図通りだ、この部分をリーダー艦とリーダー搭載機でカバーして発見したが要撃には出なかった、通報もしてない」

悠太「なぜ要撃に出なかった？あとここにウィッチは何人いる？（おいこいつ自分でボロ出したな）」

司令「4人だ、新兵なもので出せなかったんだ」

悠太「は？新兵だから出さなかった？もし我々が遅れてたらロンドンには火の海だ、わかるか？新兵だろう訓練はしているのだろうか？ならば別働隊が動くまでの時間稼ぎはできるだろう？」

司令「は、はあ」

悠太「ああ、おkそんな対応なんだわかった、お前は降格かクビだろうな」

司令「な、何だと貴様！扶桑人の貴様に何が出来る！」

悠太「さあ何が出来るんでしょうね、凜行くぞ」

凜「応」

ジープに戻り

悠太はスマホをポケットから取り出してとある人物に連絡する

プルルルル、プルルルル

?? 『はいもしもし』

悠太 「もしもさつきぶりだな山川健二改チャーチル首相」

首相 『要撃は見事だった、それで何だ?』

悠太 「第92飛行隊クロイドン司令のトーマス・ジャック中佐って知ってるか?」

首相 『知ってるが何か?』

悠太 「今日の空襲の際にネウロイを発見したにも関わらず通報もせず防空もしなかったそうだ」

首相 『は?マジで言ってるのか?』

悠太 「マジだ大マジだよあと、ウィッチに対する常習的な暴力もあるほい、これに関してはまだわからないが、出来ればこの部隊を私に貸して欲しい、居るウィッチをエース級に育て上げちやる」

首相 『ウィッチに対する常習的な暴力:周辺に第8憲兵隊が居るから通報する、あとそいつの取り決めは今からだ、多分死刑で満場一致だろうけどな、あとその子たちはどうする?』

悠太 「どうするも何も501に編入と行きたいがいけませんこっちは余裕がないからこの基地で私が凛が教育するよ」

首相『一つ話したいことがあるんだが良いか？』

悠太『いいぞ』

首相『マロニーを501JFW上官の座から引き摺り下ろした、でもこれに足して復讐する可能性があるから気をつけられたし』

悠太「は？マロニーを引き摺り下ろした？どうやって」

首相『色々さ』

悠太「これに対しての復讐があるだろうから気をつけるわ」

悠太「凜、もう少しで面白いことが始まるけど見る？」

凜「あのクズであろうジャックが捕まる所だろ？」

悠太「そうそう、と言ってる側からトラックが2台お出ました」

憲兵A「安田悠太大佐でしょうか？」

悠太「そうだがどうした？」

憲兵A「首相から指揮官は彼にしろとの事なので臨時指揮官を」

悠太「あー了解」

悠太『そのまま聞いてくれ、この基地のトップであるトーマス・ジャック大尉は国に対する反逆的行為とウィッチに対する暴力を行ってるみたいだ、許せないよなあ？』

と行く

「許せるわけがない!」「当たり前だ」「幼い少女に暴力を振るんなんてクズ以下のゴミだ」「ゴミに失礼だ」

悠太「私は臨時指揮官だがこれよりクズのスイープ<sup>掃</sup>を始める、まず準備にかかれ!」  
と言うと

憲兵隊がキビキビと動き出す

数分後

憲兵A「準備ができました」

悠太「さて行くぞ」と腰からグロックを取り出してメイン玄関のドアを開ける

悠太「女性隊員はウィッチの保護を、野郎は抵抗して来る整備士やらを押しさえつけろ、

凜ついてこい、司令室に行くぞ」

憲兵B「了解」

凜「わかった」

と悠太の横に並び相棒を出す

悠太がドアの前に立ちおもつきり蹴る

とドアは外れ倒れる

司令「な何だ! 貴様はさっきの!」

悠太「さて大人しく捕まれ」

凜「あなたウィッチに対する暴力もしてみたいじゃない」と高圧的な声で言う  
司令「し、してない！」

凜「ふーん、まあいいわとりあえず同行してもらおうか」と言う  
と司令はガバメントを取り出してこちらに向けて来る

悠太「今日についてねえな、銃を向けられるのは2回目だ」と言い拳銃を一発で撃つ  
パンと

司令「き、貴様撃つたな！」

悠太「撃つたが何か？」

司令「貴様がやつてゐることは国家関係を揺るがす行為だわかるか？」

悠太「残念ながら私の所属国は無いね、所属部隊はあるが」

司令「な、何を言っている、そんなわけは事はない」

と言うと憲兵が一人走ってきた

憲兵B「何ですか今の発砲音は」

悠太「アア、こいつが銃を向けてきたんで銃に向かつて撃つただけさあとこいつを捕まえてくれ」

と言うと呆気なく捕まった

その後はいろいろなことをして4時

司令室

凜「悠太、ミーナに連絡は？」

悠太「あっ……」

悠太「凜は連絡して、取り敢えず格納庫に行つて航空機借りようと走つて格納庫に行く」

悠太「誰かいないか？」

整備士A「どうしたんですか？」

悠太「なんか輸送機あるか？急ぎだ」

整備士A「ソードフィッシュならそこにありますよ」

悠太「使えるか？」

整備士A「問題なく飛びますよ、どうせ整備だけされて放置です使つていいですよ」

悠太「なら借りるな、あとユニットは木箱に入れてくれ」

整備士A「了解です、三番席に乗せときますよ？」

悠太「ああ、よろしく頼む」

と走つて司令室に戻る

凜が電話をかけている

??「はいもしもし501JFWのミーナ・デイトリンデ・ヴィルケです」



凜「あーもしもし？ミーナさん？今から帰るわ」

ミーナ「あらどうしてかしら？」（高圧的）

凜「いやその…色々ありました」（ゴニョゴニョ）

とその時ドアが開き

ミーナ「悠太さんかしら？変わってもらえる？」

凜「え、あ、はい」

悠太「はいお電話変わりました悠太です」

ミーナ「今までどこほつつき歩いてたのかしら？」

悠太「話長くなるけど良い？、帰ったらお説教は聞くから」

ミーナ「それほど色々あったんでしようね」

悠太「501の運命が変わる程度にはね」

ミーナ「っ！今すぐ帰ってきてください！」

悠太「了解です隊長殿」

と電話を切る

凜「あーそういえばマロニー引き摺り下らされたんだっけか」

悠太「そうだよ、だから運命が変わる程度にはってね」

凜「ウイツチちゃん達は何処に？」

悠太「今は憲兵本部で事情聴取とか色々してるはず」

凜「なるほど」

悠太「よし帰ろう」

と格納庫に歩き始める

格納庫につき

ソードフィツシユのパイロット席に座り

離陸の準備をする

凜「ソードフィツシユって初めてののだわ」

悠太「安心せい、私もだ」

格納庫から機体を出し

ブロロロロ

とと言う音とともに離陸する

一時間後

悠太《501タワー、サーヴァント、着陸許可を求む》

管制官《こちら501タワー、サーヴァント、行っても着陸して良い、風無し》

悠太《了解》

と3分後には着陸し格納庫内に入る

と格納庫の入り口付近に水入りバケツを入れたエーリカが立っている

悠太「(何だあれ絶対悪さしたやろ)」

と言いながらユニットを下ろしたり色々し

悠太「さてミーナの所に行くか」

エーリカ「…」ジーンとこちらを見つめてくる

凜「んあおけ行くか」

エーリカ「…」ジーン

軽く歩き

司令室へ

コンコン

悠太「安田悠太、戻しました」

凜「安田凜戻りました」

ミーナ「二人とも、入りなさい」

悠太「はい」

ミーナは二人とも椅子に座らせ言う

ミーナ「何があったかみつちりと聞かせてちょうだいね？」

悠太「まずは私達が首相と会ってた事は知ってるよね？」

ミーナ「ええ知ってるわ」

悠太「密会をした後に街に出て服やら何やらを買いそのあと飯食いにしようとしたら運悪く強盜に出会って取り敢えずその処理をして憲兵に押し付けた」

ミーナ「大丈夫だったのかしら？」

悠太「強盜以外は特に怪我してる人は居なかったから大丈夫、その後ほんとに飯を食いにしようと思うけどいかんせん始めてのロンドン、どんなお店があるか分からないから交番に行き、警察官に聞こうとした時：空襲警報が鳴って防空に出た、多分この話は誰かを通じて聞いてると思うけど？」

ミーナ「その辺は聞いたわ、その後の話よ」

悠太「第92飛行隊クロイドンって知ってるか？」

ミーナ「知ってるわ、ロンドン全面にいる部隊でしょう？」

悠太「そうだ、戦闘後にそこに着陸して、司令の話聞いた、そこが本来なら出れる筈にも関わらず出てない、発見したのに通報すらしてなくてな、それをとある人物に直談判したら憲兵隊を出してくれるって事でその憲兵隊の臨時司令として第92飛行隊クロイドンに入ったのさ」

ミーナ「どう言うことよ…」

悠太「(多分このことを言ったらミーナは怒るだろうなあ)」

悠太「ウィッチに対する暴力もあつたそうだ…」

ミーナ「は？今なんですって？ウィッチに対する暴力？」

悠太「そうらしい、細かい情報については…」

プルルルプルルルと電話がなる

ミーナ「はいもしもし501JFWのミーナ・デートリンデ・ヴィルケです…えっ

？悠太さんに変われ？」

悠太「はい、お電話変わりました安田悠太です」

憲兵本部『今日保護した扶桑の少女1名なんですけど喋れないみたいで女性の方と明

日来て貰えませんかね？』

悠太「はい？というかそちらに医者とかいるんじや…」

憲兵本部『医者でもお手上げで、治癒魔法が使えるところでしたのでお願いを』

悠太「わかりました、明日行きますよ」

憲兵本部『ほ、ほんとですか！』

悠太「私は少女を放置するほど鬼畜ではないですしね」

憲兵本部『なら明日お昼迄には来て頂ければ』

悠太「了解です」ガチャと電話を切る

凜「誰だった？」

悠太「憲兵本部から保護した扶桑少女が喋れないらしいから来てくれとの事」

凜「失語症か…」

悠太「多分な、そこまで酷い暴力だったか」

ミーナ「どうということよ？」

悠太「暴力等で脳の一部が損傷して”聴く話す読む書く”が出来なくなる症状のことを失語症って言うんだリハビリすれば治るけど、だからもしかしたら自分の治癒魔法で治るんじゃないかって」

ミーナ「ウイツチなら保護されてるから問題ないんじゃない？」

悠太「ウイツチじゃなくなったら？」

ミーナ「っ！」

悠太「そう言うことだよ」

ミーナ「治らなかつたらどうするのかしら？」

悠太「わからない、それでもまだ若いからリハビリすれば治ると思うけど」

ミーナ「わかつたわ、明日二人で行って来なさい」

悠太「あと一つ」

ミーナ「何かしら？」

悠太「マロニーが我々の上官から引き摺り下らされた」

ミーナ「!?」

悠太「今上官の席は空いてるらしい、あとこれに怒ったマロニーが何しでかすか分かるん、そこんところを注意せよとの事だ、なら私たちはお暇させてもらう」

ミーナ「わかったわ」

ガチャと部屋が出て

その後は飯を食べ

自室に戻る

悠太はスマホを取り出し

神に連絡する

悠太：ねえ、神？

神：何じゃ？

悠太：失語症の子ってどうやってたら直せる？後魔法力の復活

神：直してもいいが条件がある

悠太：条件？

神：その子を育ててあげろ

凜：それで治るなら安いと思う

悠太：わかった

神：後一つある、どちらでも31歳なったらもう一度転生させて欲しいんだがいいか？

悠太：まあ自分はそれでも良いかな

凜：私もそれで良いわよ

神：なら悠太、明日そのこと握手して魔法力を手から送ってやれ、それで治る

悠太：ありがとう、神

神：人類を救うのが我々の使命だ、気にするな

翌日

悠太「さて行くか」

凜「うーん眠たい」

悠太「寝てても良いよ、着陸時に起こすから」

凜「わかった、寝る」

1時間後

クロイドン基地に到着

悠太「おい凜起きろ」



凜「むにやむにやあと30分」

悠太「地獄のレンジャー演習でもするか？」

凜「は、ハイなんでしょう！」

悠太「よしいくぞ」

凜「はいい……」

ソードフィツシユから降り

自分の靴を取り

司令室のある建物へ入ると

警備員「悠太さんと凜さんですね？」

悠太「ああそうだ」

凜「そうです」

警備員「ではこちらに」

と食堂へと通される

食堂には4人の少女がいる

食堂に入ると四人が立ち上がり敬礼をしてくる

悠太「どうも今日はまあ事情聴取や確認に来た、安田悠太だ、よろしくな」

凜「その悠太の補佐をしている、安田凜だよろしく」

?① 「ヤング・アバです」

?② 「スミス・サツチャーです」

?③ 「ホレーシヨ・エミリーです」

?④ 「…」

悠太 「それで君がシユナイダー・空ソラかな？」（空の名前は以下カタカナ表記）

ソラ 「コク

と言うと別の子が

アバ 「この子喋れないから…」

悠太 「ああ知ってる」

アバ 「なら何で…」

悠太 「大丈夫、もしかしたら喋れるようになるよ、凜今のうちに他の子の話を聞いててくれ」

凜 「了解」

悠太 「さてソラちゃん、僕の目を見て、手を出して」

と言うとソラは手を出す

悠太はそれを握手する形で握り

魔法力を展開しソラに送り込む

悠太「(これで治るらしいけど……)」

と思ひながら魔法を送り一分が経つ

するとソラの足元に扶桑の魔法陣が出てくる

がその時空の身から抜けるように悠太に寄りかかる

悠太「おつとと、やっぱりか」

アバ「あ、貴方何したの！」

悠太「魔法力を送ったのさ体を守る為に休止状態になつてただけさ、何時間か寝れば治るよ」と言いながらお姫様抱っこする

アバ「ほんとかしら？」

悠太「医務室は？」

サツチャー「食堂から出て右にあるわ」

悠太「サツチャーかありがとうな、先に寝かせてくる」

と医務室に入り布団の上に寝かせる

悠太「君はよく頑張った、よく眠りなさい」とトントンとする

食堂に戻る

凜「取り敢えず階級はみんな軍曹で合ってるよね？資料間違えないよな？」

アバ「そうよみんな軍曹よ」

ガチャ

悠太「それならよかった、資料に間違えなさそうだな、あと事情聴取と言ってもただ自分の個人的な質問に応答するだけだからそんな思わなくてもいいよ、嫌なら答えなくてもいいしね、なら一つ目、ソラ軍曹以外に暴力等はされた？」

アバ「私はされてないわ」

サツチャー「…されてない…」

エミリー「…ない」

悠太「ソラ軍曹以外は暴言等のみ？、それともそれ以外もあつた？」

アバ「暴言ぐらいだつたわ、訓練で上手くいかなかつたりしたら…」

悠太「嫌なら喋らなくてもいいんだぞ？」

アバ「でも、みんなの為に私が喋らなきゃ…」

悠太「そんなに無理するな、心が壊れるぞ？（みんなのリーダー的存在なのか？）」

いろいろな質問をして30分

悠太「最後の質問だ、またウィッチとして空を飛んで、皆を守りたい？この質問は1

週間以内に考えときなさい」

悠太「さて質問はこれでおわりだ」

アバ「あ、あの！」

悠太「ん？どうした？」

アバ「私、皆んなを守りたいんです！」

悠太「よく言えたな」

サツチャーやエミリーも寄ってきて

「私も空を飛びたいです」と言う

凜「可愛い娘見たいね」

悠太「さて君達にはこの一週間は体を癒せ、防空に關しては安心しろ、別部隊が今展開完了している、さて私は医務室の様子でも見に行こうかな」

凜「私も行くわ」

医務室に入り

悠太「まだ起きてはいないな」と言いながら腕を取りソラの脈を測る

凜「どう？」

悠太「脈は問題なし」と言いながら医務室ないを見る

凜「なにかをお探し？」

悠太「いや起きてきてから心音を聞きたいから聴診器を探しているんだが…どうやらないみたいだな」

凜「憲兵から軍医でも呼ぶ？」

悠太「呼べるなら嬉しいが」

というとソラが起きて

ソラ「お父さんにお母さん？」

と言うか

悠太「うおっ！」

凜「いや違うんだが……」

ソラ「お父さんとお母さんじゃないの？」

悠太「違うよ？（記憶喪失か）」

ソラ「違うの？」ウルウル

悠太「お父さんだよ？（もういいや（諦め））」

凜「どうせ神に育てろって言われてるから諦めても問題ないか」悠太、あの子達呼んでくるわ」

悠太「おう」

ソラ「あの子たち？」

悠太「アバさんサツチャーさんエミリーさんの事だよ？覚えてない？」

ソラ「覚えてるよ？」

と言うと

アバ「ソラ！起きたのね！」

ソラ「うん、お父さんとお母さんが起こしてくれたの」

アバ「お父さんとお母さん？貴方のお父さんはダイナモ作戦の時に亡くなったんじゃない？」

ソラ「うんう、前にいるよ？」

アバ「??」

悠太「凜、アバ、話がある付いてきてくれ」

と外に出る

アバ「ソラはどうして、どうして……」

悠太「ソラの体が身の危険を感じて記憶からご両親のことを消したみたいなんだ、アバはご両親について何か知ってるか？」

アバ「ソラの両親はお父さんは空軍パイロットで母は軍医だったらしいわ、けど父はダイナモ作戦時に撃墜され、母は船でブリタニアに来る最中に沈められてたわ、それが7歳の時の話よ」

悠太「辛かったんだな……そのあとあのクソ野郎に殴られたり色々されたと……」

アバ「そうよ」

悠太「ならご両親の役を我々ができるか……」

アバ「うまくやれると思うわよ」

凜「こうなるならやるつきやねえな！、アバ、私の手伝いとして色々してくれるかしら？」

アバ「やるわよ、やるなど言われてもやるわよ」

と憲兵が一人走ってくる

憲兵「悠太さん、チャールズ閣下からお電話が！」

悠太「ああ、わかった、今行く」と言い司令室に向かう

司令室内

悠太「あい、お電話変わりました、安田悠太です」

首相『話が2つある』

悠太「何です？」

首相『えつとだな、第92飛行隊クロイドンの解体が決まった、所属ウィッチは特別第10飛行訓練隊に転属だ、新規の特別第10飛行訓練隊の基地は「イギリス」と同じ基地だ、第10飛行訓練隊の司令は安田悠太だ、よろしくな』

悠太「はああ？あと使用ユニット等は？」

首相『えつと確か資料がここに…あつたあつたこれ、グラスター ミーティア？つて機体』



悠太「よりに寄ってジェットかよ、なら6機+予備機でお願い」

首相『なんで6機?』

悠太「そんな古い機体私乗ったことあると思うかね?」

首相『機種転換慣熟訓練ってやつ?』

悠太「そうそう、あと501の事はどうすればいいんだ?」

首相『もうすぐで大陸反攻作戦があるからそれが終わってたからそっちに集中しても  
らえれば』

悠太「了解、あと娘ができた、と言っても義娘だな」

首相『ドユコトよ:』

悠太「失語症の子の治療して、その時に彼女の体を自分自身で守るために倒れたんですよ、それで起きたら俺と凛のことを両親だって言い始めた、理由としては身の危険を感じて記憶から両親のことを抹消して、俺と凛のことを両親だって思ってるぽい、取り  
敢えず責任持ってソラが自立するまで面倒見るよ」

首相「ソラって確か10歳よな」

悠太「みたいだね」

首相「悠太は15だよな?」

悠太「そうだよ」

首相『つまり25歳の時にその子が独立か』

悠太「まあ色々わかったあと、何かある？

首相『なし』

悠太「ならおわりかじやの」

ガチャときる

と食堂に戻る

悠太「取り敢えず全員、食堂に集まれ」

と3分後

悠太「悲しい話と嬉しい話がある」

凜「なんよ」

悠太「悲しい話は第92飛行隊クロイドンの解体、以降同部隊の基地は後続部隊に引き継がれる」

アバ「何ですって！」

凜「マジかあ（多分別の基地に移動だろうけど）」

ソラ「え…」

サツチャー「嘘でしょ」

エミリー「うそ…」

悠太「まあ焦るな」

アバ「焦るなって言う方が無理よ！」

悠太「嬉しい話の方は特別第10飛行訓練隊が再編成される、基地は○×基地だ、この部隊を丸々移転だ、仕様機体は新型ユニットミーティアだ」

アバ「移転しただけなの？」

ソラ「お父さんお母さんソラから離れるの？」

悠太「まあそうなるだろうな、いかんせん今もあつちに仕事抱えてるからなあ……」

アバ「あつち？」

悠太「あれ？所属基地言っただけ？」

ソラ「聞いてないよ？」

悠太「んあ言っでないのか、一樣言っとくか」

悠太「ストライクウィッチーズ第501統合戦闘航空団副司令 安田悠ただよろしくな」と敬礼しながら言う

凜「ストライクウィッチーズ同第501統合戦闘航空団副司令補佐 安田凜よろしくね」とお茶目な顔をし  
敬礼する

アバ「え？え？」

ソラ「え？」

エミリー「え？」

サツチャー「ええ？」

ドアが勢い良く開き

またもや憲兵が来る

憲兵「ミーナ中佐殿から連絡です、『第92飛行隊クロイドンが解散する事を知ったから輸送機をいま当基地に手配した、悠太さん達のユニットも輸送機に乗せてるから輸送機護衛してあげて、彼女達を501基地に移動させて』とのことです」

悠太「輸送機はあとのぐらいで着く？」

憲兵「あと5分程度です」

悠太「わかった、ウィッチ諸君に言う、総員荷物をまとめろ！」

「了解です」

5分後

輸送機が着陸し機体に悠太と凜が近寄る

悠太「ユニットはこれか？」と木箱に指を指す

パイロット「それです！」

と答える

その箱を格納庫へと持って発進台に取り付ける

悠太「凜そっちの準備は？」

凜「終わったわ」

悠太「さてあとは彼女ら待ちだな」

5分後

悠太「ウィッチ全員集まったな？」

アバ「全員集まりました」

悠太「なら機体に乗れ」

全員が乗り込み

タキシングを終わらせ

輸送機はゆっくりとお尻を持ち上げる

悠太《さて離陸したな？我々もいくぞ、サーヴァント、テイクオフ》

凜《フェアリー、テイクオフ》

その後輸送機の全面と後方に付き

護衛する

1時間後

501基地に帰還する

悠太「さて荷物は機内に置いときなさい」

「了解です」

悠太「さてこの基地の司令官に挨拶しにいくぞ」

と司令室前に立ち

コンコン

悠太「ミーナ、入るぞ」

ミーナ「いいわよ」

ガチャとドアを開け

部屋に旧92メンバーが入り自己紹介をする

悠太「以降は特別第10飛行訓練隊の所属になる」

ミーナ「それはブリタニア空軍から聞いたわ」

悠太「特別第10飛行訓練隊は501の補助の役割もあるため、隊長の顔ぐらい知らないとだからな」

ミーナ「悠太さんはこのあとどうするのかしら？」

悠太「どうするとは？」

ミーナ「所属よ」

悠太「嗚呼、所属はこのまま501だよ、一樣このあと10飛行訓練隊の基地の様子見してから来るが帰ってくるよ、一樣定期的に見にくつもりだよ」

ミーナ「取り敢えずみんなに紹介しないとね」

悠太「まあそうだな、お前らは先に外に出ててくれ」

ソラ「お父さんは？」

ミーナ「っ！」

悠太「ミーナと話があるから後でくるよ」

とソラたちが出て行った後

ミーナ「お父さんとはどう言うことですかね、安田悠太大佐？」

悠太「えつとですね、失語症のこの治療して、その時に彼女の体を自分自身で守るために倒れたんですよ、それで起きたら俺と凜のことを両親だつて言い始めた、理由としては身の危険を感じて記憶から両親のことを抹消して、俺と凜のことを両親だつて思ってしまったるんですよ！だから許して……」

ミーナ「ほんとかしら？、でも真剣な顔をしてるあたり本当見たいね？まあ彼女を頑張つて育ててあげてね、あと話つてのは？」

悠太「ゆ、許された……話は聞いているかもだけでももう少しで大陸反攻作戦が始まるみたいだ」

ミーナ「本当なの？」

悠太「本当だよそれが終わったら第10飛に正式に着任するよ、ではこれで失礼」

外で待ってた10飛と合流する

スピーカー「ウィッチは全員ミーティングルームに集合しなさい」

5分後

ミーナ「みんな集まったわね？501基地近くに新しい基地が出来るからその挨拶に来たわ、入ってきなさい」

と悠太、凜、アバ、ソラ、エミリー、サッチャーと部屋に入る

悠太「どうも、特別第10訓練飛行隊、司令の安田悠太だよ、まあ知ってるか」

凜「同部隊、副司令の安田凜だよ、知ってるだろうけどね」

アバ「ヤング・アバです」

ソラ「シュナイダー・空です」

エミリー「ホレーシヨ・エミリーです」

サッチャー「スミス・サッチャーです」

と501の皆が順繰り挨拶する

悠太「さて第10飛の子達は帰るぞ」

と言い〇×基地にゆく



## 15話 君を忘れない

15話 君を忘れない

宮藤 「いつもありがとうございます、お菓子作ってみましたですけど皆さんで食べてみてください、あ、あのこれ、扶桑のお菓子で」

整備士 「すいません、ミーナ隊長から必要最低限以外はウィッチ隊との会話を禁じられていますので」

宮藤 「えっ？」

テラスに移り

宮藤 「うわあ、今日は風が強いねー」

リーネ 「そうだね、洗濯物が早く乾きそう」

宮藤 「そうだ、リーネちゃん、さつき格納庫だね」

リーネ 「ん？」

リーネ 「へえ、そんなことがあったのお」

宮藤 「なんでミーナ中佐はそんな規則を作ったんだろう？リーネちゃん知ってる？」

リーネ「私も命令があるのは知って居たけど、あまり気にしてなかったから」

宮藤「こんな命令、変だよ、絶対変だよ、変すぎる、リーネちゃんもそう思わない？」

リーネ「私兄妹以外の男の人と話したことなくて…」

宮藤「ふーん、学校とかは？」

リーネ「ずっと女子校だったから」

宮藤「そうなんだ…」

リーネ「ごめんね」

宮藤「うんう、あつ！ほらあれ赤城だよ！」

リーネ「アカギ？」

宮藤「うん、私の乗って来た船、修理してるって聞いたけど治ったのかな」

凜「あ、居た、居た、よしかー」

悠太「ミーナが呼んでるぞー」

宮藤「あ、はい、なんだろう？」

客間のドアを開ける

宮藤「失礼しまーす」

??「宮藤さん、お会いしたかった」と宮藤に近寄る

ミーナ「こちらは赤城の艦長さんよ？是非貴方に会いたいとおっしゃって」と宮藤の

前面に出るように入る

?? 「杉田です、乗員を代表して貴方にお礼を言いに来ました」

宮藤 「お礼？」

杉田 「貴方のおかげで艦隊の大事な船を失わずに済みましたし、何より多くの人命が助かりました、本当に感謝しています」

宮藤 「いえ、私はなにも、あの時坂本さんと他の人たちが」

坂本 「たしかにあの時、お前が居なければ全滅していたかもしれん、誇りに思っても良いぞ、宮藤」

宮藤 「そうかなあ、へへへ」と若干照れながら言う杉田が手に持っているものを渡そうとしてくる

杉田 「全乗員話し合って決めました、これを貴方にとって」

ミーナ 「あらあらよかったわ」

坂本 「ありがたく受け取っておけ、宮藤」

宮藤 「あ、はい」

と受け取る

宮藤 「ありがとうございます」

杉田の柔かな顔からキリツとした顔になり

杉田「反抗作戦前哨として我々も出撃が決まりました」

ミーナ「ついにですか…」

宮藤「反抗作戦？」

杉田「ええ、今日はその途中で寄らせて頂いたのです、明日には出港なので、是非、船にも来てください、皆が喜びます」

宮藤「え、はい」

ミーナ「残念ですが明日は出撃予定がありますので」

杉田「そうですね、残念です」

リーネ「艦長さんって大佐だからミーナ中佐より偉いんだよ？」

宮藤「へええ、そんなに偉い人だったんだ」

リーネ「艦長さんが代表してお礼に来てくれたなんて、すごいね」

宮藤「うふふ」

少年「宮藤さん！」

宮藤「へっあ？」

と少年が手紙を渡そうとしてくる

少年「先の戦いでの宮藤さんの勇戦敢闘大変けん感動いたしました、船を守って頂き大

変感謝しています」

宮藤「ああ、はい、どういたしまして」

少年「あ、あの…そのですね…これ受け取ってください」

宮藤「え？」

リーネ「へえええ、」

リーネ「ラブレターじゃない？」耳打ち

宮藤「らぶれたー？」

リーネ「うん、受け取って受け取ってあげたら？」と良い宮藤の持っている荷物を取る

宮藤「え？え？」

と受け取ろうとした瞬間、強い風が吹き

宮藤「え？」

少年「まてえ、」と飛んでいったラブレター（仮）を取りに行く

リーネ「わあ、わあ」

とラブレター（仮）が石壁の間にピンポイントに刺さる

と取ろうとした瞬間手と手が当たる

ラブレター（仮）がまた風に吹かれ飛んでゆく

が飛んでいった先にはミーナ中佐がおりそれを取る

(中の人の感想としてはミーナさんよく取れたよな、あと欧州圏の城って石と石の隙があるにしてもピンポイントで刺さることってなくない?)

宮藤「ミーナ中佐」

ミーナ「このようなことは厳禁と伝えたいはずですが…」

少年「すいません、是非ともお礼が言いたくて」

宮藤「そうです、なにも悪いことなんてしてません」

ミーナがコクリと頷き

少年に近づくと

ミーナ「ウィッチーズとの必要以上の接触は厳禁です、したがってこれはお返しします」と取った手紙を渡す

少年「申し訳ありませんでした」

と言うと走り出す

リーネ「ミーナ中佐怖かったね」

宮藤「うん」

リーネ「手紙をなんだったんだろうね？」

宮藤 「うん」

リーネ 「芳佳ちゃん？」

宮藤 「ううん」

場面は変わり

窓の先にある大陸を見つめているミーナ、

坂本 「聞いたぞ」

ミーナ 「美緒……」

坂本 「手紙を突き返したようだな」

ミーナ 「そう言う決まりなもの」

坂本 「まだ忘れられないのか」

宮藤 「扶桑人形だあ」

リーネ 「かわいいい」

宮藤 「お礼、言いたいな」

翌日

ううううううう

ミーナ「ガリアから敵が進行中との報告です」

坂本「今回は珍しく予測が当たったな」

ミーナ「現在の高度は1万5進路はまっすぐこの基地を目指してるわ」

坂本「ルーチンの迎撃パターンでいけるな、今日の搭乗はバルクホルン、ハルトマンが前衛でペリーヌとリーネが後衛、宮藤は私とミーナの直掩、シャーリーとルツキーニ、エイラとサーニャ、悠太と凜は基地待機だ」

ルツキーニ「お留守番お留守番」

シャーリー「ユニットのセッティングでもするかなあ…」

サーニャ「スヤア」

凜「うーむ、なにするか」

悠太「良いのがあるぞ？」

凜「なあに？」

悠太「ランニングだ」

凜「久しぶりに走るか」

坂本「よし準備にかかれ！」

★☆



ユニットに飛び乗り

離陸する

ルツキーニ「いつてらっしやーい」

坂本「敵発見」

ミーナ「タイプは？」

坂本「確認する！ 300m級だ、いつものフォーメーションか？」

ミーナ「そうね」

坂本「よし、突撃！」

と降下してゆく

キューブ型のネウロイが分裂する

バルクホルン「なにい？」

坂本「分裂した？」

ミーナが固有魔法を起動して

ミーナ「右下方80、中央100、左30」

坂本「総勢210機分か、勲章の大盤振る舞いになるな」

ミーナ「そうね」

坂本「で、どうする?」

ミーナ「貴方はコアを探して」

坂本「了解」

ミーナ「バルクホルン隊中央」

バルクホルン「了解」

ミーナ「ペリーヌ隊右を迎撃」

ペリーヌ「了解」

ミーナ「宮藤さん貴方は坂本少佐の直掩に入りなさい」

宮藤「了解」

ミーナ「良い? 貴方の任務は坂本少佐がコアを見つけるまで敵を近づけないで」とブレイクし戦闘が開始する

ミーナ、バルクホルン、エーリカがどんどん撃墜する

エーリカ「これで10機い」

バルクホルン「こっちは12機、久しぶりにスコアを稼げるな」

エーリカ「こここのところ全然だったからね」

と背中合わせから離れる

ペリーヌ「良いこと？ 貴方の銃では速射は無理よ、引いて狙いなさい」  
リーネ「はい！」

ペリーヌ「私の背中には任せましたわよ」  
とタイブする

ペリーヌ「これを使うと後で髪の毛が大変なのよね、トネール」

と言うと固有魔法を展開し周辺にいる子機が粉碎される

ペリーヌ「ふうん、私にかかればこのぐら」

パリーンと後ろに来ていた子機が2機粉碎される

リーネ「はあはあ、」

ペリーヌ「な、やるじゃない」

宮藤「みんなすごい」

坂本がじつとコアを探している

宮藤「はっあ」

と4機の子機が上がってくる

ダダダダダと撃ち落とし

坂本「その調子で頼むぞ！」

宮藤「はい！」

ロールをしながらMG42Sを撃つエーリカ  
どんとんと撃墜する

敵機が後ろにつき

エーリカが身体を立ち上がりオーバーシュートさせ、それをバルクホルンがキルする  
バルクホルン「20！」

エーリカ「キリがないよ！」

バルクホルン「コアはいつたいたいドイツなんだ！」

★☆☆

キャラクター紹介

娘になった

特別第10飛行訓練隊

シュナイダー・空

年齢 10歳

1934年9月19日生まれ

使い魔 ヨーロッパオオカミ

固有魔法 不明

生まれ カールスラント バイエレン州

実の父は戦前はレヒフェルト航空基地のパイロット教官、戦中は同基地の戦闘機パイロットに  
ロツトに

なりる

ダイナモ作戦時に死亡

実の母は扶桑人の医者

ダイナモ作戦中に軍医として軍艦に搭乗、撤退中にネウロイに襲われ撃沈  
なおこの時ソラは先に撤退し母の知人宅にいた

☆☆☆☆

ミーナ「コアは見つかった？」

坂本「ダメだ」

ミーナ「まさか、また陽動？」

坂本「違うだろう、コアの気配はあるんだ、ただしどうもあの群れの中に居ない」

ミーナ「戦場は移動しつつあるわね」

坂本「ああ、大陸に近寄っているな」

上から子機が突っ込んでくる

宮藤 「はっあ！上っ！」

坂本 「むっ、クツソ見えない」

宮藤 「行きます！」

子機が攻撃してくるがシールドを防御する

ダダダダダと13mm弾を撃ち込む

坂本 「よし良いぞ、もう少し頼む！」

宮藤 「はい！」

突っ込んできた本体

坂本 「見つけた！」

ミーナ 「あれなの？」

坂本 「ああ、」

「了解」  
ミーナ 「全隊員に通告、敵コアを発見、私たちが叩くから他を近づけさせないで」

ミーナ 「行くわよ」

坂本宮藤 「了解」

と逃走したコアを追う

ミーナ 「いた」

とMG42Sを撃ちまくる

それに続き坂本、宮藤も打ち始める  
が虚しく海に着弾する

坂本「宮藤、逃すな、」

宮藤「はい！」

とコアを多い

撃つ、1発当たり跳ね、ネウロイはバランスを崩す、そしてそこに13mm弾が殺到して、撃墜される

パリンと共に破壊され破片になる

そして3人がシールドを貼る

がその一人である坂本美緒のシールドを破片が貫通し髪の毛を少し切る

坂本「っは」

ミーナ「美緒！」

リーネ「芳佳ちゃんすごーい」

と飛んでくる

ペリーヌ「なんなのマグレですわよ」

バルクホルン「いや不規則機動中の敵機に命中させるのはなかなか難しいだ」

エーリカ「宮藤、やるじーん」

宮藤「えへへへ、そ、そうかな」

宮藤「綺麗…」

坂本「こうなってしまうとな」

ペリーヌ「綺麗な花にはって言いますわね…」

エーリカ「自分のことかあ？」

ペリーヌ「な、失礼ですわね！、まあ綺麗って所は認めて差し上げてもよろしいですけど」

エーリカ「棘だらけってかあ？」

(個人的にエーリカの言い方好き)

ペリーヌ「くあああ、揚げ足取りばかりい」

エーリカ「やーい棘だらけー」

バルクホルン「ミーナ…」

エーリカ「つておいどこに行く」

坂本「待て、一人にさせてやろう」

バルクホルン「そうかここはパ・ド・カレーか」



ミーナが着地し、とある車のドアを開ける

ミーナ「はっ」

と車の中にある袋を見つめてる

☆☆☆☆

回想

?? 「オストマルクが落ちたよ」

ミーナ「ええ：私も最前線に配属になったわ」

?? 「僕も志願した」

ミーナ「貴方は音楽家に」

?? 「君もウィーンやモーツァルテウム音楽、美術、大学に行きたがってたじゃないか」

ミーナ「私はウィッチだから：みんなを守るのは務めだだわ」

?? 「君だけを戦わせてたくない」

ミーナ「だからって最前線に出るなんて！無茶よ…」

?? 「ミーナと一緒に居られるからね」

ミーナは歩き手に持っていた服を暖炉に投げ込む

?? 「ミーナ！」

車の中

?? 「ダイナモ作戦も順調らしい」

ミーナ 「ガリア全域からの撤退なんて可能なのかしら？」

?? 「大部分は南方から鉄道で避難できるそうだ」

ミーナ 「時間が足りないわ」

?? 「民間人だけでも逃がさないと」

ミーナ 「それ待てばここに釘付けね」

?? 「ああ、君達だけが、頼りだよ」

格納庫前

?? 「よし、準備完了だ、この基地は放棄する、戦闘後はその後ブリタニアに向かってくれ」

ミーナ 「貴方は？」

?? 「僕たちも後から行くよ、向こうで会おうれ」

ミーナ 「約束よ？」

?? 「ああ…」

とユニットを吹かし

飛ぼうとすると

?? 「ミーナ、後で渡したいものがあるんだ！」

ミーナ 「到着してない？」

エーリカ 「うん、誰も」

バルクホルン 「まで、今他の部隊が撤退支援している、魔力を消耗してる我々無駄だ  
！」

ミーナ 「あそこには！」

?? 「ごめんミーナ」

★☆☆

ミーナ 「うっ、うっ、」と手元に持っている手紙に涙を落とす

坂本 「もう良いのか？」

ミーナ 「ええ…基地に帰還します」

坂本 「うむ、了解」

基地に戻り

少年 「やっぱり来なかった」

と言うと後ろを5機のウィッチ達が通る

空母の上を綺麗な白線を5本線作り飛行する

少年「宮藤さん」

空母と並走し

宮藤「みんなありがとー、頑張つてねー、私も頑張るからー」

リーネ「芳佳ちゃん、よかったね」

宮藤「うん！ちゃんとお礼言えた」

坂本「世話になったからな」

リーネ「みんな嬉しそう」

宮藤「よかった」

坂本「そろそろ基地に戻るぞ」

「はい」

副官「艦長、無線が入っています」

杉田「ん？つなげ」

いとしのリリーマルレーン

杉田「むう、これは！全艦に繋げ！」

歌い終わると拍手が起こる

悠太「ブラボー」と言い拍手する

凜「とても良かったです…」

宮藤「とっても素敵な歌でした」

ミーナ「ありがとう」

エイラ「」

宮藤「うふううなにするんですか」

エイラ「サーニヤのピアノはどうしたあ？サーニヤの〜」

宮藤「とつても素敵でしたとつてもふてきでした」

エイラ「えい、もつと褒めろお〜」

宮藤「褒めてますつてはああ」

宮藤「ちよつと離してくだひあい」

エイラ「いいやまだまだダア」

宮藤「いた、痛いですうエイラさあん」

ふふふふと笑いが起きる

外を見つめるミーナ

コンコン

坂本「良い歌だった」

ミーナ「ありがとう」

坂本「見送りの許可を出してくれて感謝している」

ミーナ「貴方も行きたつたんでしょ？」

坂本「あつ、世話になつた船だからな」

ミーナ「あの人を失つた時本当に辛かった、こんな思いをするぐらいなら好きになんてならなければよかつてね、でもそうじゃなかった、でも今でも失うのは恐ろしい、それなら失わない努力をするべきなの」

といい腰からワルサーPPKを取り出し坂本美緒に向ける

つづく

次回

守りたいもの

お楽しみに

## 16話 守りたいもの

16話 守りたいもの

ミーナは坂本にワルサーPPKを向ける

坂本「なんだ？随分と物騒じゃないか」

ミーナ「約束して、もうストライカーを履かないって」

坂本「それは命令か？」

ミーナ「つな」

坂本「そんな格好で命令されても説得力がないな」

ミーナ「私は本気よ、今度戦いに出たらきつと貴方は帰ってこない」

坂本「だったらいつそ自分の手でって言うわけか、矛盾だらけだな、お前らしくもない」

ミーナ「違う、違うわ」

坂本「私はまだ飛ばねばならないんだ」

と外に向かつて歩き出す

とミーナは歩き出している坂本に銃を向ける

「ブルルルルトと夜間哨戒から帰ってきたサーニヤ  
ヨタヨタと歩き

とある部屋へと入る

そしてベットに倒れ込む

エイラ「痛え！むうう、なんだろうもう、今日だけダカンナ」

司令室

コンコン

坂本「ちよつと良いか？」

宮藤「よっこいしょ」

坂本「悪いな、便利に使って」

宮藤「いえ、このくらいへっちゃらです」

坂本「データだ、この前出たネウロイのデータだ」

坂本「8月16日と18日に襲来したネウロイだが奴の出現した時に各地で謎の電波  
が傍受されている、周波数こそ違うがサーニヤが歌っていた声の波形と極めてよく似て  
いる」

ミーナ「ええ、」



宮藤「歌？」

坂本「あのネウロイはサーニヤの行動を再現していたそうだな」

ミーナ「ええ」

坂本「分析の規模をもっと広げよう、しばらくは忙しくなりそうだ」

ミーナ「そうね」

坂本「バルクホルンやハルトマンや悠太や凜にも今のうちに知らせておきたいな、4人をここに」

宮藤「あの、バルクホルンさんなら今日は非番です、夜明け前に出て行きましたよ」

坂本「どこへ？」

宮藤「ロンドンです」

坂本「ロンドン」

宮藤「意識不明だった、妹さんが目を覚ましたって、バルクホルンさん、慌ててストライカーを履いて出て行くこうとするのをみんなですよ？いつもはあんなに冷静な人なのに、ふふっ」

ミーナ「無理も無いわバルクホルンにとって妹は戦う理由そのものだもの、誰だつて自分にとって大切な守りたいものがあるから勇気を振り絞って戦えるのよ」

宮藤「は、はい」

ロンドン

タツタツタ

看護師「病室ですよ、お静かに」

バルクホルン「あつ、すみません、急いでいたもので」

??「ふふっ」

と病室でベットの所で女の子が笑っている

バルクホルン「クリス！」

と近寄り抱きつく

クリス「お姉ちゃん、私がいなくて大丈夫だった？」

バルクホルン「な、なにを言う、大丈夫に決まっているだろう！私を誰だと！」

エーリカ「あーもう全然ダメダメ、此間まで酷いもんだつたよ、やけっぱちになつて

無茶な戦い方ばつかりしてさあ」

クリス「お姉ちゃん」

バルクホルン「お、おまえ、今日は見前に来たんだぞ！そう言うことは」

エーリカ「だつてほんとじゃん」

バルクホルン「ないない、そんなことないぞ、私はいつだつて冷静だ」

クリス「お姉ちゃんなんか楽しそう！」

バルクホルン「え？そうか？」

エーリカ「それは宮藤のおかげだな」

クリス「宮藤さん？」

エーリカ「うん、此間入った新人だね」

バルクホルン「お前に少し似ていてな」

クリス「私に？ハハッ！会ってみたいなあ！」

バルクホルン「そうか、今度来てもらおう」

クリス「お友達になってくれるかな？」

バルクホルン「はっはっは、かなりの変わり者だけど良いやつだ、きっと良い友達になれるさ、あ、似てると言っても突然お前の方がずっと美人だからな」

エーリカ「姉バカだねえ……」

病室出て車に戻る最中

ワイパーに2枚の手紙が挟まって居る

エーリカ「なんだこれ？」

バルクホルン「なんでこんなものが？ん？」

エーリカ「ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ殿と安田悠太、凜殿？」

バルクホルン「ミーナ宛と悠太凜宛？」

基地

ペリーヌ「(はつ、坂本少佐)」と廊下を歩いてゐる坂本を見つけると咄嗟に壁に隠れる

ペリーヌ「(私つたらなにをコソコソと堂々とすれば良いんですわ、堂々と、少し前までは坂本少佐の隣にゐるなんて当たり前前の事でしたのに、いつから私は物陰からコソコソと盗み見るような真似ばかりする様になつたでして?、そうよ、宮藤さんですわあのちんちくりんの豆狸が現れてからと言うもの)あの坂本少佐、今度私に左に練り込みを教えて頂くという約束を」

とある部屋に坂本が入つてゆく

ペリーヌ「ここは宮藤さんの…どういふ事ですか?、坂本少佐があちんちくりんの部屋に」

宮藤「あのお、お話つて?」

坂本「あ? 楽にしろ、自分の部屋だろ?」

宮藤「はい、」

坂本「ん、ごほん、よくやった、昨日の戦いだ、初戦果だろう?」

宮藤「あ、はい、でもそれもみんな坂本さんが鍛えてくれたおかげです、これからもいっぱい、色んなこと教えてください、よろしく願ひします」

と頭を下げる

坂本「ハツハツハツハツハ、よく行ったぞ宮藤、たしかにまだまだ尻の青いひよっこだ、初戦果など序の口に過ぎん！これからはより一層：ビシビシしばいてならんな、早速明日から訓練メニューを3倍に増やそう」

宮藤「え、えええ！」

ペリーヌ「(なんで羨ましい、くうなんなん)」

リーネ「あのお、」

ペリーヌ「どうしましたのリーネさん？」

というトアが開き倒れ込む

坂本「ペリーヌ、リーネお前たち何やってんだ？」

リーネ「えつとあの…ペリーヌさんが」

ペリーヌ「ガルルルル」

宮藤「どうしたのペリーヌさん？おでこ真つ赤だよ？」とおでこを触る

ペリーヌ「なになさって」

宮藤「ちよつと熱っぽい？」

ペリーヌ「ほつといてちようだい！」

坂本「さあさあ訓練の時間だぞお前達」

リーネ「そうだそれで芳佳ちゃんを呼びにきたんだっけ？」

坂本「ならさつきと準備に取り掛かれ！」

「は、はい」

ペリーヌ「宮藤さん、後ろを取られてましてよ」

宮藤「う、うん」

ルツキーニ「へっへえん、頂きー、んう？」

と左捻り込みしルツキーニの後ろにつくと撃つ

ペリーヌ「あの技は…」

ルツキーニ「ああ」

シャーリー「うおお」

びーーい

リーネ「ペリーヌ、宮藤ペアの勝ち！すごいよ芳佳ちゃん！」

ルツキーニ「やられたー、おつかしいなあ絶対後ろに付いてたのにいね」

シャーリー「大分成長してしたな宮藤」

宮藤「え？そうですか？」

と言うとルツキーニが背後をとり胸を揉む

ルツキーニ「どれどれ？」

宮藤「な、なにをするのー」

ルツキーニ「ざーんねん、こっちはちつとも変わりなーし」

シャーリー「見りやわかる」

宮藤「もーこらー、」

シャーリー「でも腕を上げたのは確かだ」

宮藤「ほんとですか？」

ルツキーニ「うん、でも高高度だったらこうはいかなかつたけどねー」

宮藤「私たち案外良いペアなのかもしれないね」

ペリーヌ「ご冗談を、真つ平御免被ります」

風呂

リーネ「すごいね芳佳ちゃん、この前入隊したばかりなのに、もう一人前のウイツ

チみたい」

宮藤「えへへ、そうかな、でもバルクホルンさんにはまだまだだつて言われちゃいそ

う」

リーネ「私なんでもつとまだまだだよー、羨ましいなー」

宮藤「私はリーネちゃんのこと羨ましいなあつて思うけどな」(リーネの胸を見ながら

リーネ「えーどこが？」

宮藤「どこがって……」

ペリーヌ「宮藤さん！いつのまにあんな大技を覚えたのですの？」

宮藤「あれ？ペリーヌさんいたんですか？」

ペリーヌ「ずっと居ましたわよ！左捻り込みは坂本少佐の得意技ですのに、なぜ貴方が」

宮藤「私はただこんな見てて感じかなあつて」

ペリーヌ「嘘おつしやい！あんな高等テクニク見様見真似でできたら苦労しません、内緒で坂本少佐に教えてもらつたんでしょう？卑怯ですわよ！」

宮藤「そんな、嘘なんて言っていないですよ」

ペリーヌ「あくまでしらばっくれますのね、良い度胸ですこと」

宮藤「そんなこと言われても」

ペリーヌ「宮藤さん！」

宮藤「は、はい」

ペリーヌ「貴方に決闘を申し込みましてよ」

宮藤「けつ、決闘!?!」

司令室

バルクホルン「悪いが中身は勝手に見させてもらった、深煎りは禁物これ以上知り



すぎるな”これはどう言うことだ？」

エーリカ「興味あるね」

坂本「卑しいことなどなにもしていないだろ？ミーナ」

ミーナ「え？ええそうよ、私たちはただネウロイのことを調べてただけで」

バルクホルン「それだけでどうしてこんなものが届く」

エーリカ「差出人に心当たりは？」

坂本「ありすぎて困るくらいだ」

ミーナ「私たちのことを疎ましく思う連中、軍の中にもいくらでも居るはずだから」

坂本「たがこんな品のない事をする奴の見当はつく、おそらくあの男はこの戦いの核心に触れる何かを既に握っている、私たちはそれに触れたんだろう」

バルクホルン「あの男って……」

坂本「トレバー・マロニー、空軍大将さ」

コンコン

悠太「失礼する」

凜「ああ、元我々の上官様か」

ミーナ「そうよ、悠太さんは手紙を受け取りに来たんでしょう？」

悠太「そうだ」

凜「差出人は？」

悠太「十中八九奴等だろうな、あとバルクホルン、これに関しては呼んだか？」

バルクホルン「奴等？ 良いや、読んでいない」

悠太「ある調べ物を頼んでね、今後のユニット開発要：いや既に普及した物を作った人物についてだな」

坂本「なんだ？」

悠太「宮藤博士の生死についてだな、これは機密事項でもあるため口にするなよ？、捜

査してるのはF B IとM I 6だ」

バルクホルン「宮藤博士は死んだって…」

悠太「死体を直接見たか？ なあ坂本さんよ」

坂本「確かに見てないな、警察の話だと完全に骨まで溶け切ったと…」

悠太「その可能性はないだろうな、もし本当に溶け切ったとしても骨粉程度は残るだろうな、さて人骨が溶ける温度はどのぐらいだったかなエーリカハルトマン」

エーリカ「えつと確か1600℃とかだったかな」

悠太「そう、1600。の炎で焼かないと溶けない、もつと言うなれば頭蓋骨なら2時間も3時間も焼かなければならないしかも、継続的に当て続けてね、そうなれば可能性的には頭蓋骨等の一部が見つからなければならぬのだよ、死ぬ間際にどこかに逃亡

した可能性がある」

ミーナ「逃げるってどこによ」

悠太「イベリオンのど田舎かブリタニアの山の中だろうな、それでこの手紙は何かどこに居るか糸口を見つけたか、本人を見つけたかのどちらかだろうな」

ミーナ「と言うか貴方がなぜそんな事を？」

悠太「まあブリタニア首相がね」

ミーナ「どのパイプより太く、硬い物を手に入れたわね」

悠太「ハハッ、ではこれで失礼」

凜「失礼しました」

と出てゆく、

悠太自室

悠太「さて開けてみてみるか」なになに宮藤博士の無事を確認、イベリオンの砂漠のど真ん中に新しい家を持ち、そこで新しいユニットの開発をしていたか、これは世界が大きく変わりそうだなあ……」

うろうろうろう

悠太「な！」

走り、監視塔に行く

ミーナ「グリット東23地区、単機よロンドンに向かうコースを」

ペリーヌ《中佐、私ですペリーヌです、その私と宮藤さんは訓練で飛んでいたところ  
です！このまま先行して》

悠太「なんだと、今日は飛んでなかっただろ！そんな予定聞いてねえぞ、そこで待機しろ！」

ペリーヌ「聞いている通りよ」

宮藤「ペリーヌさん、私行きます！ここで待つてたら逃げられちゃう」

ペリーヌ「ちよつと命令違反よ守りなさい！」

宮藤「心配しないでください、私にだって足止めぐらいはできます」

ペリーヌ「調子に乗るのも良い加減にしなさい！コラア」

管制塔

ミーナ「美緒！やっぱり飛ぶのね、見たのよ、此の前の戦いの時貴方のシールドは機能していなかった」

坂本「ふ、自分でも気づいている、私ももう20歳だ、魔法力のピークはとつくに過ぎた、日頃の訓練もウィッチの宿命からは逃れられないと言うだ」

ミーナ「だったらなぜ？」

坂本「私の戦士としての寿命は限界を迎えているたが私は飛ばないといけないんだ」

ミーナ「宮藤さんの事？時期に一人前になるわ、貴方はもう十分」

坂本「私はいつがもつともつと高く飛べるまたいつかみんなの後ろではなくみんなの前を飛ぶあいつの姿が見てみたいんだ、心配するな、それを見届けるまで私は」

ミーナ「美緒……」

宮藤「何処だろ？、大分近づいてるはずなんだけど」

ピキーン

宮藤「見つけた、あれ？」

とネウロイに近づくと

宮藤「ちつさいけどネウロイには違いないよね？」

とネウロイがヘリもびっくりな動きをする

宮藤がそれを追いかけると隣にくる

煽るように周りを飛ぶ

そして止まり打とうとするがセーフティーが掛かっており打てない

宮藤「うてない、あれ？安全装置が」

安全装置を安から火に会えると隣にいたネウロイが人型になっている

宮藤「ネウロイが人の形に……」

坂本「じゃあ宮藤は一人で向かったんだな？」

ペリーヌ「すみません、元はと言えば私が……」

悠太「その件は敵機を落としたからじつくりとだな」

ペリーヌ「はい……」

悠太「(余計なことすんなよ宮藤)」

宮藤「この前あつたネウロイはサーニヤちゃんの歌を歌つてたもしかしたら私たちがマ  
ネをしているの？もしかしたらもし……そうだとしたら」

人型ネウロイは宮藤を煽るように動きをぶつかりそうになるが止まり

宮藤と並走する

宮藤「あの、初めまして貴方は誰なの？あ、ネウロイだよ？それはわかってるんだ  
けど……」

ミーナ「宮藤さんがネウロイと接触してるしたのは間違えないわでも、そこから先

サーニヤさんはわからないわ」

サーニヤ「すみません」

エイラ「あいつまさか捕まったんじゃ…」

坂本「どう言うことだ、離れるようには言えないのか？こつちから呼びかけているが通じないんだ」

ミーナ《こちらもダメ、ネウロイが何かジャミングのような事をしているのかも》  
悠太「あんのクソアマガめんどくさいこと起こしやがって…」

宮藤「貴方達は本当に私たちの敵なの？」と聞くとネウロイは宮藤の近くで自分のコアを見せた

坂本「(まさか宮藤に罠を?)」

と魔眼を発動しネウロイと宮藤を見つける

坂本「(宮藤とは別にウィッチがいる、いやコアが見える、あれはネウロイだ!)」

宮藤がネウロイのコアを触ろうとするが

坂本《なにをしている宮藤!》

宮藤「坂本さん」と加速しこちらに向かっている

坂本「撃て、撃つんだ宮藤!!」

宮藤「違うんです！このネウロイは」

坂本「なにをしている、いいから撃て宮藤」

宮藤「ダメです！待ってください！」

坂本「惑わされるな、そいつは人じゃない」

宮藤「違うんです、そうなことじゃ…」

坂本「おのれ！」

と13mm機銃を打つ

とネウロイはそれに気がつき、上昇し、攻撃をし坂本はそれをシールドで守ろうとしたが突然ユニットが両足とと壊れレーザー範囲から離れる

少し前

悠太「クソ当たれ！」とハンドガンを構え高速で接近する悠太

パンパンと響き当たるその弾は見事にユニットに当たり坂本は落ちてゆく

悠太《すまない、シールドが貼れそうにもない。このまま突入する、さらばだ。ヴァルハラで会おう》と最後にいい

レーザーを頭に食い海に落ちてゆく

悠太《ソラに言っておいてくれ、あいつは空で生き、空で散ったと》

同時に暗転



暗転の少し前

ペリーヌ「坂本さん」

宮藤「坂本さん悠太さん」

凜「あのバカ、死なせねえよ」と言いながらエンジンをフルで回す

神「おお ゆうたよ しんでしまおうとは なにごとだ！」

悠太「ハハッ、でもこの感じ生きてるんだらう？」

神「まあ君にはこの世界を変えてもらわないとだからね、取り敢えず病室で目が覚めるようん」

じゃの！

戻り

落ちゆく坂本さんを宮藤とペリーヌでキャッチする

宮藤「少佐が少佐が、悠太さんに撃たれました」

ミーナ「なんだって！どう言うことよ、悠太さんは？」

凜「坂本を庇い頭に被弾です」

ミーナ「バルクホルン大尉、ネウロイを追いなさい！」

バルクホルン「しかし少佐と大佐が」

ミーナ「追って、命令よ！」

バルクホルン「わ、わかった」

と言うとミーナは泣いていた

サーニャ「ミーナ中佐」

ミーナ「美緒、悠太」

小島の砂浜で坂本と悠太が倒れている

回復魔法は悠太の方に枯れられてて

ペリーヌは坂本の方ずっと見ている

宮藤「悠太さん：目を開けてください、悠太さん悠太さああ」

つづく

次回

信じて欲しい

お楽しみに

## 17話 信じて欲しい

17話 信じて欲しい

ペリーヌ「坂本少佐、坂本少佐！私が私が付いています、返事してください、坂本少佐！宮藤さん！」

宮藤「はあはあ」息切れを起こしながら悠太に治癒魔法をかけている  
倒れかけペリーヌに支えられて

ペリーヌ「芳佳ちゃん！」

宮藤「悠太さん坂本さん……」と言いながら

悠太にさらに治癒魔法をかける魔法力を掛けすぎて倒れる

宮藤「離してください、離して！」

凛「落ち着け、宮藤」

バルクホルン「ミーナに凛さん」

と凛とミーナの後ろから医師と看護師走る

と悠太と坂本が乗った担架を押す

ペリーヌ「少佐！」と後を追いかけるが医療室のドアが閉まる

バルクホルン「宮藤」と宮藤が気絶する

リーネ「芳佳ちゃん、大丈夫？ 芳佳ちゃん！」と駆け寄る

宮藤 芳佳の部屋の中

リーネが椅子に座っており

そこで宮藤は目が覚める

リーネ「大丈夫？」

宮藤「あ、あれ？」と起き上がる

リーネ「芳佳ちゃん…よかった、」

！  
宮藤「ここは？…はっ、悠太さんは？ 悠太さんはどうなったの！リーネちゃん教えて

！  
医療室

前

ベンチにミーナとペリーヌが座っている

ミーナ「容体はどうですか」

医者「坂本さんも悠太さんもまだ予断を許さない状態です」

ペリーヌ「少佐…よかった…」

夕方になり

医務室のドアが開き

宮藤とリーネが入ってくる

ペリーヌが立ち上がり

宮藤の頬をビンタする

ペリーヌ「貴方のせいよ…何か言いなさい！今でのうのうと寝ていたんでしよう！」

リーネ「魔法力を使い果たして」

悠太「ああー見慣れない天井、いや今回で2回目だな、あと”おなご三人寄れば姦し

い”ってほんとなんやなって…」

ペリーヌ「貴方は黙ってなさい！」

リーネ「黙りません！芳佳ちゃんは全力で治療していたんです！」

ペリーヌ「そんなの当たり前です！」

宮藤「(坂本さん)」とまた治癒魔法をかける

食堂

ルツキーニ「大佐と中佐大丈夫かなあ…」

シャーリー「今は待つしかないな、いいからこれを食べ」とスパムを取り出す

ルツキーニ「ええまたこれえ？」

シャーリー「贅沢言うな！」

サーニヤ「でも芳佳ちゃん命令違反して大丈夫なんでしょうか」

エイラ「お？」

サーニヤ「どうしたの？」

エイラ「ミヤフジ占ってた」

サーニヤ「なんで出たの？」

エイラ「シニガミ」

エイラ以外「演技でもない…」

凜「おつす、なにしてんだ？」と聞くと

エイラが死神のカードを見せる

凜「死神の正位置かあ演技でもねえなあ、せめて逆位置にして欲しいな」

サーニヤ「え？凜さんタロットカードわかるんですか？」

凜「防大の頃少しやってたからねえ…」

シャーリー「ぼうたい？」

凜「防衛大学校、つまり軍隊のことを学んだりする大学だね」

シャーリー「大学ってお金持ちでめちやくちや頭良くないと入れなんじゃ…」

凜「お金はいらないよ、もつと言うなら防大は給料があるよ、頭は悠太には叶わないけどいいと思うよ多分」

サーニヤ「悠太さんって頭いいんですか？」

凜「一樣あいつ主席で通つたからな、多分この基地だと一番頭いいと思うよ」

シャーリー「主席！」

エイラ「主席ってなんなんダ？」

シャーリー「卒業生の中で一番頭のいいやつてことだよ！」

エイラ「え？あれが頭いいのか？」

凜「驚きだよなあ……なんでパイロットやってんだか、幹部になるのはめんどくさいだけか……懐かしいなあ……あの時の教師の顔ほんと”は？”って顔だったもん……」と言うとポロポロと目から涙が落ちる

凜「アア、あいつは絶対に死なないだろうな……ゴキブリ並の生命力だもん……」

バルクホルン「独断専行、命令違反、その結果上官を負傷させて、敵を取り逃すとは重罪だな」

エーリカ「もしかして軍法会議でバーン？」

バルクホルン「そこまでは言っていない！」

エーリカ「そうだよね、なんで何回も死んでるよねー」

バルクホルン「エーリカもうちよつと真剣にだな」

ミーナ「判断は坂本少佐と安田大佐が起きてからにします!」

エーリカ「はい」

バルクホルン「甘いぞミーナ」

医務室

ピピピピ

リーネ「芳佳ちゃん、心拍数が」

宮藤「坂本さん」

と掛けていると坂本が唸る

宮藤「坂本さん!」

ペリーヌ「坂本中佐!」

リーネ「私先生を呼んでくるから!」と言いが出て行き

宮藤「どうして、こんなに魔法をかけているのに」

ペリーヌ「神様」

宮藤「こんな時、お母さんやおばちゃんがいたら…」と治癒魔法をやめる

ペリーヌ「貴方がやらないでどうするの!お願い、少佐を助けて!貴方にしかできな



いの！宮藤芳佳！」

宮藤「わたしだけ…そうだ私にしか出来ないんだ、私しか」

ペリーヌ「そうよ」

宮藤「落ち着いて、集中して」

悠太「(さて起きるか、まあ起きて俺が撃った坂本の治療の手伝いでもするか)そうだ、

宮藤、その調子だ」

宮藤「えっ、悠太さん！」

と言うと悠太が経ちベットから降り宮藤に近づき

悠太「宮藤、落ち着いて治療魔法をかけろ」と両手を宮藤の肩に起き魔法力を込める

部屋が青白く光

医者「もう大丈夫です、この子の魔法のお陰です、あと悠太さんはなぜですか？」

悠太「ええ、三途の川の前に神が立ってまして、お前はまだやる事がると返されたん

ですよ」と笑なら言う

ミーナ「美緒…」

坂本がミーナの顔を見て頷く

翌日

宮藤が起き周りを見る

宮藤「あ、ああ！さ」

坂本がシーとする

そしてとある方向に指を刺すと

リーネとペリーヌが寝ている

宮藤「よかつた…」

坂本「宮藤、顔色が悪いぞ」

宮藤「えつ、」

坂本「ありがとう」

坂本「なぜ撃たなかった、あの時なぜお前はネウロイを撃たなかった」

宮藤「撃てなかったんです」

坂本「人の形だからか？あれはお前を誘い込む罠だ」

宮藤「私あの時なにか感じましたんです！」

坂本「ネウロイは敵だ」

ミーナ「宮藤芳佳軍曹、貴方は独断専行の上上官命令を無視、これは重大な軍記違反です」

宮藤「はい…」

ミーナ「この部隊における司法執行官、として質問します、貴方は軍法会議の開催を望みますか？」

宮藤「あ、あの」

ミーナ「返答がないので軍法会議の開催を望まないと判断しました、今回の命令違反、に対し、勤務、食事、衛生上已む終えぬ場合を除き、10日間の自室禁固を命じます、異議は？」

宮藤「あの、私ネウロイと」

ミーナ「改めて聞きます、異議は？」

宮藤「聞いてください！」

と言うとミーナの隣にいた悠太が机を思つ切り叩く

悠太「君は、重大なことを起こしたわかるか？軍法会議からの銃殺刑もありうるんだ、それを聞いて聞こうと、異議は？」

宮藤「ありません。」

ミーナ「退室してよろしい」

と部屋をで

リーネ「あ、芳佳ちゃん！坂本少佐もう大丈夫だつて！」

宮藤「うん…」

リーネ「よかつたね」

宮藤「うん」

リーネ「そうだ芳佳ちゃん、お風呂行こうお風呂」

宮藤「え？」

リーネ「ねっ？ほら早く早くう」

リーネ「来ましたー」

ルツキーニ「あはあ！こっちこっちー」

シャーリー「なあ宮藤い？自室禁固だつてえ？それで済んでよかつなあ！」  
凜「そうだなあ」

ルツキーニ「シャーリーなんか5回も禁固刑喰らってるもんねえー」

シャーリー「バカ言え、4回だ4回」

エーリカ「私6回！」

宮藤「みんな聞いて！私のネウロイに今までと違う何かを感じたのもしかしたらネウ

ロイと戦わずに済むかも」

バルクホルン「なにをバカなことを」

宮藤「でもあの時は…ネウロイと分かりわかり合えて…」

バルクホルン「今まで奴らがなにをして来たのか知ってるのか？人にあだなすことばっかりだ」

凜「君のお父さんだつてネウロイに殺されたんだらう？（まあ生きてるっぽいけどね）」

バルクホルン「お前はネウロイの味方なのか？」

宮藤「今回のネウロイは他と違います！」

バルクホルン「お前は違いがわかるほど戦ったのか？」

エーリカ「ニヤハハハ、人形が出たのは聞いたけど、だからってなあ」

エイラ「カウハバ基地のことか？所詮噂じゃん」

サーニヤ「此間の歌うネウロイは？」

エイラ「それが畏だつたじゃないカー」

と言うとルツキーニに宮藤の胸を鷲掴みし揉み始める

エイラ「少しは育ったか？」

ルツキーニ「やっぱ物足んなーい」

その後はリーネの胸に目をつけ追いかけるが母なるおっぱいには勝てずにシャーリーの所へと行く

ルツキーニ「やっぱりこれだねえ」

エーリカ「楽しいのかな…」

バルクホルン「バカだただけだね」

エーリカ「おりゃ！」とバルクホルンの胸を触る

バルクホルン「な、なんてことをするんだ！」

エーリカ「トウルーデって結構あるんだねー」

凜「中坊かよ…」

ガチャ

バルクホルン「いいな宮藤軍曹…必要な時以外は外室禁止だ」

宮藤「(どうして誰も信じてくれないの…あれは間違え…うんう違うよね…私どうしたらいいんだろう?やっぱり確かめたい)」

ペリーヌ「大体少佐はあの子に甘すぎるんです!今まで世界を守ろうと戦って来たの

は私達です、なのにあの子ったら突然やって来て、少佐に怪我までさせて……少佐が無事だったからよかったものの、たしかにあの子は少佐や大佐のために頑張りました、全力で魔法力を使つて、でも」

坂本「ペリーヌ！」座れと手で促す

ペリーヌ「はい」と座ると

ペリーヌの頭を撫でる

坂本「ペリーヌも付きつきりで見病してくれたそうだ、本当に感謝している」と頭を撫でる

格納庫

リーネ「芳佳ちゃん！」

宮藤「リーネちゃん……」

リーネ「今度出て行ったら禁固処分なんかじゃ済まないよ」

宮藤「どうしても確かめたいの」

リーネ「私ネウロイの事とかわからないけど、でもね芳佳ちゃんの事はわかる！諦めないところ、まっすぐなところ、だから……私も一緒に行く！」

宮藤「えっ？」

リーネ「すぐに支度するから！」

宮藤 「ダメ、リーネちゃん！」

リーネ 「どうして私じゃダメなの？」

宮藤 「違うの、これは私の一人でやるって決めたの、お願い！、ごめんね」と言うとしてリーネが振り向き宮藤に抱きつく

リーネ 「早く帰って来てね」

宮藤 「うん」

リーネ 「ずっと待ってるからね」

ドン

ミーナ 「宮藤さんが脱走したわ」

バルクホルン 「脱走！」

エーリカ 「やるなあ！」

悠太 「まあ薄々気づいてたよやるってね」

凜 「さてそろそろあいつが動き出しそうだから、連絡の準備するか」

バルクホルン 「あのバカ」

ミーナ 「これが司令部に知れたら厄介だわ」

ドルルル



ガチャン

ミーナ「はい、501と、はっは、閣下、ですがそれは…いえ、了解致しました」

悠太「撃墜命令か」

ミーナ「司令部から宮藤さんに対する撃墜命令が降ったわ」

リーネ「へっ!」

ミーナ「以上です、ペリーヌさんは少佐の看病をよろしくね、お待ちなさいリーネさん」

リーネ「はい?」

ミーナ「貴方は残りなさい」

リーネ「へ?」

ミーナ「今日一日宮藤さんの代わりに自室で謹慎していなさい!」

リーネ「はい!」

ミーナ「(まったく、扶桑の魔女って)」

坂本「へえーくしゅん」

ペリーヌ「だ、大丈夫ですか?坂本少佐」

坂本「いやなんともない、そうか宮藤が」

ペリーヌ「ええ、宮藤さんの所為で基地中大騒ぎですわ」

坂本「そうだな…ペリーヌ、頼みがある、お前にしか出来ない事だ」

ペリーヌ「あ、はい！」

宮藤「(そろそろこの間の場所、)」

ピキーン

と上から高速で物が落ちてくる

それは人形ネウロイだった

と目を合わせ数秒後人形ネウロイは動きだし

宮藤「あ、待って！」

着いて行く

エーリカ「居た！一緒にいるよ」

バルクホルン「ネウロイ、奴が坂本少佐を」

ミーナ「待って！」

バルクホルン「何故だ！」

シャーリー「なんだあれは」

ミーナ「ネウロイの巣よ」

エーリカ「前にも見たことある、あそこから奴らが来るんだ」  
バルクホルン「あれを破壊しようとする多くの仲間が攻撃した、誰一人攻撃する事ができなかつた」

ルツキーニ「芳佳が中に入って行くよ！」  
バルクホルン「なんだ！」

宮藤「はああ、雲の廊下みたい！」  
シャーリー「入っちゃった」

エーリカ「誰も入れなかつたのに」  
バルクホルン「奴らの罠か」

ルツキーニ「芳佳！」  
ミーナ「まちなさい！」

ルツキーニ「うっ、」  
ミーナ「様子をみましょう」

悠太「そうだな」

巢の内部

丸く広い部屋に出る

宮藤「これは…」

と足元にとある地域が映し出される

宮藤「コア…だよな？」

と近づき

宮藤「あの」

と目のまでに地球が写される

(中の人の感想、よく宮藤は地球だってわかったよな、少なくとも宇宙に行けてないはずなのに)

と都市を攻撃するネウロイの姿や

低空を高速で飛行し、ビームを避ける坂本美緒等が写される

宮藤「ネウロイの破片?、ここどこ?なにあれ」

宮藤「私だ」

と追いかけられる宮藤の映像を見ながら

とネウロイに手を向けしよとすが消える

宮藤「待って！」

エーリカ「さっきのやつだ！」

ルツキーニ「芳佳は！」

バルクホルン「居ない」

ミーナ「ブレイク散開！」

「了解」と全員が言う

エーリカとバルクホルンが上昇中に側面をなにか高速飛翔体が通り過ぎる

バルクホルン「なに!!」

と高速飛翔体は上昇旋回をし人形ネウロイに攻撃する

高速飛翔体は攻撃をし離脱する

人形ネウロイはこれに怒り、周辺のウィッチに対して攻撃を行う

ルツキーニ「こんなすごいビーム初めてだよ！」

シャーリー「きついねえ！」

エーリカ「さっきのは！」

バルクホルン「なんだあいつは！」

ミーナ「あれは、」

とそこには空中で止まり攻撃を弾く高速飛翔達がいる  
高速飛翔体が攻撃する

ルツキーニ「ビームだよ！」

シャーリー「あいつもネウロイなのか！」

とその攻撃は見事に人形ネウロイにあたり消す

その攻撃はネウロイの巢内部まで及び、そこにあったコアを消し去る  
宮藤「きやああ」とそのビームから回避する

エーリカ「あいつ、つよいぞ」

シャーリー「なんなんだあいつ、ウロイを一撃で」

バルクホルン「わからん」

と落下中の宮藤をルツキーニに見つけ

ルツキーニ「アア、芳佳あ！」

と降下して救出に向かう

シャーリー「宮藤い！」

ルツキーニと同様に降下して救出に向かう

と高速飛翔体は撤退して行く

悠太「ジェットエンジンか…」

凜「みたいだな、ミサイル2本しか積めない此方からすると厳しい相手だろう」

ルツキーニ「芳佳大丈夫？」

宮藤「う、うん、あ、あのネウロイは」

ミーナ「宮藤軍曹、無許可離隊の罪で拘束します」

宮藤「えっ？」

ミーナ「帰投します」

と前衛2人中衛2人後衛1人に護衛され帰還する

① ①

② △ ②

③ ③ ③

ルツキーニ「あれ？誰かいるよ？」

悠太「クソ、《こちら501、コマンダー、太陽の沈まない帝国、繰り返す、太陽の沈まない帝国、マロニーがやりやがった、》

コマンダー《こちらコマンダー了解》

マロニー「ご苦労様だったミーナ中佐」

と言うと後ろについ先程戦った、高速飛翔体がいる

エーリカ「さっきのだ」

と言うと近くにいた兵士全員がこちらに銃を向けてくる

つづく

次回

空へ

お楽しみに



## 18話 空へ

18話 空へ

宮藤「あれは」と後ろにいる高速飛翔体のことを見る

マロニー「ご苦労だったミーナ中佐」

ミーナ「まるでクーデターですねマロニー元大将」

マロニー「命令に基づく正式な配置転換だよ、ミーナ中佐、この基地はこれより私たちの配下である第一特殊強襲部隊 通称 ウォーロックが引き継ぐ事となる」

ミーナ「ウォーロック……」

マロニー「ウィッチーズ全員集合かね？君が宮藤芳佳軍曹かね？」

宮藤「はい……」

マロニー「君が軍記に背いて脱走した、そうだな？」

宮藤「軍記……」

マロニー「ふん」

宮藤「あつ、その後ろの」

マロニー「ふふ、ウォーロックのことかね？」

宮藤「私みました！それがネウロイと同じ部屋で実験室のような部屋で」

マロニー「な、なにを言い出すんだ君は！」

悠太「(黒だな)」

宮藤「でも私みたんです！」

マロニー「質問に答えたまえ、君は脱走をした、そうだな？」

宮藤「はい、でも！」

マロニー「中佐、脱走者を撃墜するように命令したはずだ？」

ミーナ「ですが」

マロニー「隊員は脱走を企てる、それを追うべ上官も司令部からの命令を無視を守らない、まったく残念だ、ミーナ中佐、そしてウィッチーズの諸君、本日をもって第501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズは解散とする」

ウィッチーズ一同「はあ！」

マロニー「各隊員は可及的速やかに原隊に復帰せよ、以上わかったかねミーナ中佐」

ミーナ「了解しました」

宮藤「(そんな、解散？ウィッチーズが?)」

マロニー「君の独断専行が原因なのだよ？宮藤軍曹」

宮藤「つえ、私でも…」

マロニー「安心した前、ネウロイはこのウォーログが撃滅する、ブリタニアを守るのにもう君たちは必要強くないのだよ」

と言うと

突然宮藤が倒れる

数十分後

宮藤は甦され起きる

リーネ「芳佳ちゃん、芳佳ちゃん、芳佳ちゃんよかったあ…」

宮藤「リーネちゃん？みんな…わたし…」

リーネ「さつき滑走路で倒れたんだよ？」

ミーナ「蓄積した疲労とシヨックで意識を失ったの」

宮藤「あのウォーログって何かおかしい、ねえ！今からみんなで調べれば…みんなそれは？」

とキャリーバッグを見る

リーネ「命令で私たちみんな、今すぐここを出なくちや行けないの」

宮藤「それじゃあやつぱりウィッチーズは…解散？」

リーネ「うん…」

宮藤 「ごめんなさい、みんな」と泣き始める

宮藤 「ごめんなさい、私…私のせいで…私のせいで…」

リーネ 「違うよそうじゃないよ」

ルツキーニ 「芳佳！元氣出せ」

宮藤 「ごめんなさい」

悠太 「宮藤、お前のせいじゃないぞ、元々あいつはここを解体する気だったんだ、それがただ多少早くなっただけさ、すぐにみんなが集まれる」

宮藤 「はい…」

荷物を止め

坂本 「行こうか」

宮藤 「はい」

と全員が国の帰路にたたっているが悠太と凜は違った

悠太 「さて作戦会議を始めろぞ、諸君」

憲兵A 「はい！」

悠太 「敵は20人程度、武装はステン短機関銃だ、まあシカゴ<sup>ト</sup>・タイプ<sup>ブ</sup>ライター<sup>ッ</sup>じゃないだけマシだな」

憲兵B「ですな、どうします？ 敵は殺します？」

悠太「いいや無力化で頼む」

憲兵A「突入タイミングは？」

悠太「多分もうすぐでウォーロックが出撃をするだろうからそのタイミングだな、特殊第10訓練飛行隊は出撃準備を、出撃の際には翼下に当たるかどうかawangが2発の60kg対ネウロイ徹甲爆弾を搭載しろ」

憲兵A「何故でしょう？」

悠太「同じコアを使っているならば乗っ取られてもおかしくはないだろう？」

憲兵A「なるほど…」

悠太「ウィッチーズの面々はどうしている？」

憲兵B「ウィッチーズは全員帰路に着きました」

悠太「わかった」

憲兵C「悠太さん、ご友人という方が来ました」

悠太「ん？ 誰だ少し待っててくれ」

と建物から滑走路を見るとD0335が2機止まっている

悠太「秀太か、お久しぶりだな、なにしに来た？」

宛坂「ああ、お前らの愛機を返しに来たんだ」

悠太「やつと整備が終わったのか」

宛坂「すまん」

悠太「武装の方も整備は終わったのか？」

宛坂「終わったさ、さて悠太、あのウォーロックについてはとお思いで？」

悠太「まあ失敗するだろうな」

宛坂「あと宮藤博士についてだが」

悠太「それについてはだな、”ウォーロックの研究を半強制的にやらされていた、それが怖くなり爆破して、逃げた”そうだ」

宛坂「なるほどな、今のいる場所は？」

悠太「イベリオンのだ真ん中の砂漠地帯でジェットストライカーやジェットエンジンの開発をしているそうだ」

宛坂「イベリオン政府は？」

悠太「政府どころか誰も知らなかったそうだ」

宛坂「FBIもMI6もか？」

悠太「みないだな」

宛坂「すごいなどうやってバテずに入国したのか」

悠太「わからんが、今は罪滅ぼしに我々に協力してくれるそうだ、そして出来たのが

このミーティアだ」

宛坂「罪滅ぼしなあ…死ぬよりマシか」

悠太「そうだ」

宛坂「じゃ俺帰るわ」

悠太「おう、元気だな」

とD0335に乗り込み飛んでゆく

と作戦会議室に戻る

凜「遅かったじゃないの？」

悠太「まあ世間話を多少な、あとユニットが帰ってきたぞ」

凜「マジが嬉しいな、これで対ウォーロック戦で優位に戦えるかも」

場所は変わり

?①「閣下、ウィッチーズ全員が当基地を離れました」

?②「全て順調です」

マロニー「どこが順調なものか、まったく想定外のタイミングだ、こちらの戦力はまだウォーロック一機しかない、表に出る時期ではなかったんだ」

?②「しかしもう、隠れて居るわけには…」

マロニー「そうとも、元はと言えば忌々しいあの扶桑の小娘、あいつがネウロイとの

接触をさえしななければ、こんな時期に我々が動く必要などなかったのだ」

②「扶桑に返してよろしかったのですか？」

マロニー「軍を離れ、ストライカーを失ったウィッチーズなどただの小娘に過ぎん、恐る必要性などない！」

空母赤城

ペリーヌ「さらばブリタニア、ですわね」

坂本「ペリーヌ、悪かったな、わざわざ扶桑まで付き合わせて」

ペリーヌ「はあいえ、どうせ帰る国のない身ですから、坂本少佐のお役に立てるなら」  
坂本「すまなかつたな宮藤、わざわざブリタニアまでお前を連れてきて、こんな形で返す事になるなんて思わなかった」

宮藤「そんな、謝らないでください、本当言うところやって帰ることやウィッチーズのみんなの役に立てなかつたのはとても悲しいです、でも、私もあの基地で居たことは全然後悔していません、あそこであつたこと、出会つたこと、私にとつてとても大切な時間でした」

坂本「そうか…」

ミーナ「やっと監視もなくなつたわ」



バルクホルン「このままカールスラントに戻って祖国奪還のために戦った方が良かったかも知ない」

エーリカ「へえ？」

バルクホルン「なんだ？」

エーリカ「トウルデーが戻ろうって言い出したんじゃん」

バルクホルン「それは！宮藤に借りがあるから……」

エーリカ「そうだねーね、たつぷりとね」

バルクホルン「つまりだ、あいつを失意のままに帰してしまつて良いのか、カールスラント軍人がそのような事で」

と言うとバルクホルンの口にミーナが指を当てる

ミーナ「はいはい、気持ちには十分よ！それに宮藤さんの言つてたことも気になつてるの」

エーリカ「ネウロイと友達になるだっけ？」

ミーナ「いいえ、ウオーロックがネウロイと接触してたつて話、宮藤さんがあの話をした時のマロニー大將の焦りは何か秘密があるじゃないかしら」

バルクホルン「報告義務違反でもあればこつちが攻めに回るきつかけになる」

ミーナ「そう言うこと」

バルクホルン「ああ」

ミーナ「問題はここからどうやって」

エーリカ「ああ、そのトラック、はああい？」

悠太「ミーナにバルクホルンにエーリカ、なにやってんのお前達」

ミーナ「え？悠太さんに凜さん？」

悠太「そうだよ」

凜「そだよー」

ミーナ「乗せていってくれない？」

悠太「旧501基地にだろ？」

ミーナ「え？」

悠太「ちようど憲兵隊と共に向かってる途中なんだ」

と後ろからトラックが1台増える

ミーナ「なににする気なのよ」

悠太「少しな、憲兵、少し席を譲ってやってくれ」

憲兵①「わかった、お前ら2人、二両目に行くぞ

憲兵イ「了解」

憲兵A「Ура<sup>了</sup>3<sup>解</sup>Ура<sup>で</sup>Мет<sup>す</sup>но」

ウウウウウウウウ

? ③ 「ウォーロック0号機準備整いました」

? ② 「これよりガリア地方制圧に向かわせます」

マロニー「うむ」

? ② 「ウォーロック0号機、発進せよ！」

? ④ 「飛行形態に変形完了」

? ⑤ 「ガリアへの進路を変更確認！既に亜音速に到達しました」

マロニー「ふん、どうだ子生意気なあゝの魔女達とは全く違う！ウォーロックこそ、我々のネウロイ研究の成果なのだ」

? ② 「技術主任は実戦投入にはもう少し出力レベルを整えたいとの事でしたが」

マロニー「そんなことは分かっておる、だがウィッチをした今我々が戦うしかないのだ、実績が実績が必要のだよ、ネウロイを全滅し、そして世界のイニシアチブ覇権を握るために！」

悠太「早速ガリア制圧か？」

バルクホルン「みたいだな」

エーリカ「大忙しだね」

ミーナ「軍上層部にウオーロツクの強さを認めさせないのよ、そして量産の支持を取り付けたい、それにしてもウオーロツクが1機しかないのに実戦なんて」

エーリカ「戦果を出して隠したいことがあるんじゃないのか？」

バルクホルン「奴らの化けの皮を剥がすチャンスだな」

エーリカ「シツシツシ」

バルクホルン「なんだ？」

エーリカ「やる気だねー、やっぱり宮藤為？」

バルクホルン「な、ど…」

ミーナ「ふふ、監視を続けましょう」

バルクホルン「あ、ああ」

基地

ドルルルルルルルルル

シャーリー「あ、ウオーロツクだ」

ルツキーニ「あの音好きじゃない」

シャーリー「もう出撃かよ」

ルツキーニ「いいー、やられちゃえ」

シャーリー「おいおい！」

空母赤城

宮藤「はっ！」

坂本「左デツキへ」

ペリーヌ「は、はい！」

坂本「ガリアへか」

ペリーヌ「早速ですわね」

宮藤「ネウロイの巣が」

坂本「一撃でネウロイを」

ペリーヌ「何という威力ですの！」

坂本「おかしい、何故ウォーロックはビーム兵器を使えるんだ」

宮藤「はっ！」

坂本「どうした宮藤」

宮藤「見たんです、ネウロイが見せてくれたんです、ウォーロックはネウロイとあつてたんです！」

坂本「ウォーロックがネウロイと接触していただと？」

ペリーヌ「有り得ませんわね、ネウロイは敵ですよ？それにネウロイの技術を手」

入れたのなら私達にも報告があるはずですわ」

坂本「本来ならありえないだが辻褄は合う、もし敵がネウロイだけじゃないとしたら、宮藤、お前の行動はあながち無駄ではなかったかもしれん」

宮藤「え？」

基地

?②「ウォーロックゼロ号機、ネウロイを撃破しました」

マロニー「ニヤツハハ、見るもはや、我々の力はネウロイを超えたのだ！」

?③「どうした、なにが起きて居る！」

?②「ネウロイが2機出現しました」

?④「いいえ、3機です」

?②「なに！」

マロニー「構わん、殲滅しろ」

と指示を出しウォーロックはネウロイに対し攻撃をする

一撃で粉碎するが

坂本「おかしい、ネウロイの攻撃パターンが今までと明らかに違う！なにがなにが起こってるんだ」

技術者「ウォーロックの処理能力は限界です」

マロニー「ケエ、コアコントロールシステムを作動させろ！」

技術者「しかしコントロールするには共鳴させるコアを持ったウォーロックが5機は必要です」

マロニー「むう…」

ジリリリリリリリリリ

担当者「コアコントロールシステムが勝手に動いています！」

マロニー「なにい？」

技術者「ウォーロック自らがコアコントロールシステムを稼働されたようです」

ペリーヌ「なにが起こって居るのです？」

坂本「ネウロイの数が半端じゃない！」

技術者「ウォーロックのコアコントロールシステム、正常に稼働しています」

？⑥「すべてのネウロイ、配下におきました、予想以上の成果です！」

と突然ネウロイ同士が打ち始める

坂本「バカなネウロイがネウロイを攻撃して居る！」

ペリーヌ「そんな、同士討ち」

坂本「まさかウオーロツクがネウロイを操って居るのか！」

ペリーヌ「そんなことって」

? ⑥「ネウロイを全滅しました！」

? ⑥「はっ！」

? ⑤「どうした！」

? ⑥「いえそれが…こちらからの制御が遮断されました！」

坂本「終わったようだ、ウオーロツクの勝利だ」

宮藤「でも…どうしてネウロイ同士が」

坂本「確かに攻撃し合っていた」

とウオーロツクの色が鼠色から赤と黒のカラーリングに変わってゆく

そして空母赤城の方に飛んでくる

ペリーヌ「帰ってきますわ」

空母副艦長「ネウロイと交戦していた機体がこちらに向かってきます！」



杉田「味方なのか？」

も空母赤城に対してウォーロックが攻撃をする

ペリーヌ「ウォーロックが私達を」

??「空母赤城をウォーロックの受けています！」

マロニー「なに！」

担当者「ウォーロック制御不能！暴走しています！」

マロニー「バカな」

副官「閣下！至急ウォーロックの停止を！」

マロニー「ならん！貴重なゼロ号機だ、今停止すれば海中に没する」

副官「しかし味方を攻撃する事態になっています！どうかご決断を」

マロニー「けえ、やむ終えん」

担当「ウォーロック、強制停止システム稼働準備！」

杉田「対空戦闘用意！」

副艦「対空戦闘よーい」

杉田「砲撃、はじめ！」

砲雷長「撃ち方はじめー」

と言うと12cm高射砲を打ち始める

担当「ウオーロツク強制停止システム稼働!!

マロニー「強制停止!」

と言うとウオーロツクは空中で静止し、シールドを貼らなくなり被弾するが即座に動き出し空母赤城の船首を攻撃する

その攻撃は旧501基地までに及ぶ

マロニー「なぜ、何故停止しない!」

バルクホルン「司令部が!」

エーリカ「あのビームどっから来たんだ?」

ミーナ「行きましょう」

悠太「あいよ!」

空母赤城

担当者イ「右弦後部デッキ被弾!」

担当者ロ「第二第三高角砲大破!」

担当者ハ「格納庫後部より出火」

担当者ニ「機関室浸水、隔壁閉めろー」

船が後部から沈んでゆき

宮藤「は、坂本さん！、手伝います！」と車椅子を押しているペリーヌを手伝うもつと沈み傾く

こちらも魔法を使い踏ん張る

坂本「二人ともすまない」

「そんなこと」

シャーリー「見ろ！」

ルツキーニ「何だろう？」

シャーリー「行ってみるか？」

ルツキーニ「へ？」

と降下してゆく

エイラ「ん？」

とサーニヤの固有魔法が発動する

サーニヤ「船が燃えてる」

エイラ「船？」

リーネ「あ、あれは！」

スピーカー「総員退艦！総員退艦！」

ペリーヌ「その船は沈みます！私達も早く！」

宮藤「そんな私たちに何か出来る事は？」

ペリーヌ「ストライカーもない私達になにが……」

坂本「まだだ、ペリーヌ肩を貸してくれ！」

ペリーヌ「ダメです少佐！」

坂本「まだ手は残っている、ここに！」

と言うと車椅子からストライカーユニットが出てくる

(どうやって入ってるんですかね)

宮藤「ストライカーユニット！」

坂本「援軍が到着するで私が出撃して時間を稼ぐ、その間に2人は避難しろ」

ペリーヌ「そんな、いやです少佐！私も行きます！」

坂本「無理言うな、ストライカーは一つしか無いんだ」

ペリーヌ「いやいや」

宮藤 「坂本さん！私が私が飛びます！」

つづく

次回

ストライクウイツチーズ

お楽しみに

## 19話 ストライクウィッチーズ

19話 ストライクウィッチーズ

スピーカー「総員退艦！総員退艦！」

ペリーヌ「その船は沈みます！私達も早く！」

宮藤「そんな私たちに何か出来る事は？」

ペリーヌ「ばかおっしやい、ストライカーもない私達になにが……」

坂本「まだだ、ペリーヌ肩を貸してくれ！」

ペリーヌ「ダメです少佐！」

坂本「まだ手は残っている、ここに！」

と言うと車椅子からストライカーユニットが出てくる

(どうやって入ってるんですかね)

宮藤「ストライカーユニット！」

坂本「援軍が到着するで私が出撃して時間を稼ぐ、その間に2人は避難しろ」

ペリーヌ「そんな、いやです少佐！私も行きます！」

坂本「無理言うな、ストライカーは一つしか無いんだ」

ペリーヌ「いやいや」

宮藤「坂本さん！私が私が飛びます！」

坂本「宮藤……」

宮藤「私が飛びます！」

坂本「ダメだ！これは上官の決定だ」

宮藤「私、諦めたくないんです！」

坂本「諦める？」

宮藤「坂本さんは坂本さんは死ぬ気です！でもそれって諦めるって事ですよね、私は諦めたくありません！私、護りたいんです」

坂本「護りたいか……そのセリフ何度聞かされた事か、ハッハッハッハッハ、宮藤、出撃準備だ！」

宮藤「はい！」

1期最終回

ストライクウィッチーズ

シャーリー「あれは」

ルッキーニ「扶桑の空母だよ、何でウォーロックにが攻撃してるの？」  
シャーリー「私にきくなつてーの、飛ばすぞ」  
ルッキーニ「あいよ！」

ペリーヌ「10時方向高度2000、ほぼ直上にウォーロックです！」

坂本「右のエンジンが始動時に咳き込みやすい、気にせずぶん回せ！」

宮藤「了解」

ペリーヌ「敵、きますす！」

坂本「宮藤」

宮藤「はい！」

と発艦しようとしている時上からウォーロックがビームを撃ち甲板に当たり宮藤は飛ばされる

坂本「宮藤！」

と上から降ってきた武器を坂本が取り

坂本「飛ばええ宮藤イイイ」

とエンジンを吹かし再度飛ぶ

ウォーロックが赤城を狙おうとしているが



力を貯めているところに

宮藤が突っ込み弾き武器を取ったペリーヌが撃つ

坂本「よくやったペリーヌ」

ペリーヌ「はい！」

シャーリー「なんだ？宮藤がウオーロックと戦ってるゾオ」

ルツキーニ「芳佳助けなきや」

シャーリー「おう、ああ、こいつ武装なんてしてないぞ」

ペリーヌ「宮藤さーん」手に持っている13mm機銃をぶん投げてる

とそれを宮藤はキャッチする

坂本「食らいつけ！宮藤！」

杉田「あれは宮藤さん」

マロニー「我々をどうするつもりだね？」

バルクホルン「どうする？ミーナに悠太」

悠太「そりゃロンドン塔送りだろうよ、憲兵、その馬鹿以外拘束しろ」

ミーナ「ウィッチーズを陥れようとして随分色々となさったようですね、元閣下、

ウィッチを超える力を得る為、敵であるネウロイのテクノロジーを利用、しかもその事

実を隠そうとして、ウィッチーズを無理やり解散に追い込もうとした、良い計画でしたが、宮藤さんの軍の理解を超えた行動に慌てて動いたのが失敗でしたね」

バルクホルン「もつと、もつと早く、宮藤を信じてやっていけば」

エーリカ「あ、おーい、大変だ、アカギが沈みそうだよ！あ、ウォーロツクとウィッチが戦ってる！誰だ？」

ミーナ「宮藤さんだわ」

バルクホルン「宮藤が？」

マロニー「ありえん！お前達のユニットはすべてハンガーに封印されているはずだ」

ミーナ「このユニットの波形は、美緒のストライカー」

エーリカ「うっそーん、やるなあ宮藤！」

バルクホルン「敵を欺かんとするならまず味方からかふふ、流石坂本少佐だ」

ミーナ「宮藤さん一人では時間稼ぎが精一杯よ、行きましょう、」

エーリカ「それもそうだな、」

マロニーを縛り終えた後

バルクホルン「お、待て待て待て」

悠太「なんか踏んだり蹴ったりだなマロニー……」

凜「可哀想に見えてくる」

悠太「さて行きますか」

凜「おう」

宮藤「(どうして、どうしてウォーロックは赤城を、それにまるでネウロイみたいな…ネウロイ!?)、もしネウロイだったら」と油断して攻撃されるがシールドで弾く

執事「あれはウイツチですか？」

リーネ「ええ…私の友達、一番大切な友達」

とウォーロックが宮藤の前に出て自らの心臓<sup>コア</sup>を見せる

心臓を取ろうと近づいた瞬間

攻撃した

宮藤「違う、これはあのネウロイじゃない!、これは敵なんだ!」

ウォーロックは逃走し

宮藤はそれを追う

二機は空に綺麗な白い雲の糸を引く

ペリーヌ「すごい」

坂本「ああ、あの化け物と互角と闘いとは」

と言うとウォーロックが空母に攻撃し二人は滑り落ちるがペリーヌが甲板の淵を握りギリギリ耐えている

基地

バルクホルン「つまりだ、宮藤がネウロイに接触しようとしたから奴らは慌てて、尻尾を出したってわけさ、わかるだろう？ ミーナ」

ミーナ「うーん、はいはい」

バルクホルン「わかるだろう？ エーリカ、悠太」

エーリカ「ああ、私の知ってるトウルーデじゃない」

悠太「せやなー」

ミーナ「エイラさん！ サーニヤさん！」

バルクホルン「お前たちなんで戻ってきたんだ？」

エイラ「あ、えいとあのー列車がさ、ほら二人とも寝てたら、始発まで戻ってきちゃって…仕方ないから、ここの様子でも見ようかなあつてなあサーニヤ」

サーニヤ「今、芳佳ちゃんが戦ってる、私たち芳佳ちゃんを助けにきた、」

エーリカ「素直じゃないなあ！」

ミーナ「私たちも同じよう」

バルクホルン「え、ちよ、違う、私は違うぞ」

エーリカ「そんなことよりさ、すぐに始めましょ？」

魔法力を出しH鋼を掴み

思っ切り持ち上げる

(1. 5トン近くH鋼を持ち上げるってヤベエ力だよなバルクホルンって)

悠太「(おれ、少し前にこれに殴れたんだよな)」と悪寒を感じたのはあまり知られていない話である

ペリーヌ「少佐、大丈夫ですか？」

坂本「もういいペリーヌはなせ！」

ペリーヌ「そのれ命令だけは絶対に聞けません！」

宮藤「坂本さん！」

宮藤「うりややややややや」

と近くにシャーリーが乗ったソードフィッシュが来る

ソードフィッシュからぬ動きをしレーザーを回避する

がそのレーザーの一発が空母に当たりペリーヌと坂本が落ちてゆく

落ちてゆく二人を見事にシマパフコンピがキャッチする

シャーリー「よっしやあ！、ナイスキャッチ！」

ルツキーニ「おっかえりー」

宮藤「やったー」

リーネ「(待つて待つて待つて芳佳ちゃん!今行くから)」

ルツキーニ「リーネー」

エーリカ「キタキター」

バルクホルン「遅いぞ、リネットビショップ」

ミーナ「おかえり、貴方が最後よ?」

リーネ「はい!」

宮藤の体力が尽きかけ、劣勢となり

ウオーロックが最後と攻撃と言わんばかりにレーザーを乱射してくる

もう、無理かと思われたその瞬間

距離約2280mから13.9×99m弾がネウロイの足に突き刺さる

ウオーロックは爆発四散し海面に置いてゆくところを9.4kgの分の魔法力を積んだミサイルが2発追いつちをかけ落下方向が、海面ではなく、赤城のいる方向に落ち

てゆく

宮藤「やった…」

リーネ「芳佳ちゃん！」

空母赤城はウオーロックと共に海中に沈んでゆく

杉田「赤城が…」

搭乗員A「沈んでゆく…」

シャーリー「おまたせ！」

ルツキーニ「芳佳！」

芳佳「みんな！」

坂本「よく耐えたな、宮藤」

宮藤「坂本さん！」

坂本「うむ、」

バルクホルン「これは必要なくなったようだな」

エイラ「そうでもないカモ」

サーニャリーネ「え？」

エイラ「ほら見て」

と海の方を見ると

死んだかと思われたウォーロックは空母赤城と合体し復活する浮上している

坂本「ウォーロックが赤城と」

悠太「こいつあ、あいつらを呼ぶ仕方ないな、《コマンダー応答せよ、》」

コマンダー《こちらコマンダーどうした？》

悠太《あいつらを飛ばせ、今すぐにだ》

コマンダー《了解》

坂本「ありがとう、ペリーヌ」とユニットを履き言う」

悠太「ブレイク！」

と言うとブレイクし飛行空母赤城を追いかける

ミーナ「美緒、いける？」

坂本「ああ、大丈夫だ」

ミーナと手を繋ぎ魔法力から得られる情報を双方に回す

坂本「な、何だこれは…」

ミーナ「ウォーロックと赤城が融合している、これじゃ手のつけようがないわね」



悠太「ある」

ミーナ「なん、なんですって？」

悠太「手のつけようがある、10分の時間と俺と凜を一時的に部隊からはずしてくれ」  
ミーナ「な…わかりましたらこれより安田悠太さん、安田凜さんを501から緊急的に外します」

悠太「ありがとう、凜行くぞ」

3分後

ブリタニア本土上空、

悠太「あ、居た」

アバ「隊長！」

悠太「飛行しながらで悪いが君たちの最初の作戦を言う」

一同『はい』

悠太「まずウオーロックと赤城について聞いたか？」

アバ「聞きました、ウオーロックと合体し空を飛んでるんですよ？」

悠太「よろしい、さすが戦闘隊長だ、空母赤城に対する対ネウロイ徹甲爆弾による高速空対空爆撃だ、良いな？」

一同『はい』

悠太「機体に、はなれたか？」

アバ「慣れました」

ソラ「うーむ微妙かなあ」

サツチャー「慣れたわ」

エミリー「私も慣れたわ、まだ速度に慣れてないけど」

悠太「お前からエンジンをフルで回せ、急ぐぞ」

バルクホルン「悠太達はまだなのか！」

ミーナ「もう少しよ我慢して」

悠太《こちら特別第10飛行訓練隊、遅れてすまない、代わりにプレゼントを持ってきた、突撃隊を編成し、突入に備えられたし》

ミーナ《了解》

ミーナ「突撃隊は空母の構造を知っている宮藤さんペリーヌさんと火力でリネットさん、お願いね」

宮藤「はい！」

ペリーヌ「わかりましたわ」

リーネ「はい！」

悠太「見えた、全機、縦2列に並び投下用意！」

『了解』

悠太「3<sup>サン</sup> 2<sup>ニ</sup> 1<sup>ヒト</sup> ナウ!<sup>今</sup>」

と言うと合計8発、総480kgの対ネウロイ徹甲爆弾が空母赤城に艦首に刺さり大爆発を起こし艦首を吹き飛ばす

悠太「特別第10飛行訓練隊は501隊と共に戦闘せよ」

一同「了解！」

ルツキーニ「やっちやえ！宮藤！」

ペリーヌ「行きますわよ！」

宮藤「うん」

リーネ「はい」

と突撃隊は艦内部に入つてゆく

ペリーヌ「隔壁が」

宮藤「リーネちゃん！」

リーネ「はい」とボーイズを撃ち込み隔壁を破壊する

と船内を進んでゆくと壁から攻撃され、リーネ、宮藤共に武器をロストする

ペリーヌ「武器を失うなんて！」

と進み

最終隔壁まで進む

ペリーヌ「この奥ね」

とブレンガンを撃つが対弾用で作られているためブレンガンの303ブリティツシュ弾はカラカラと言う音と共に無慈悲にも弾かれる

ペリーヌ「この銃では無理ですわね」

宮藤「そんな…」

リーネ「ここまでできたのに…」

と言うとペリーヌが銃を捨て隔壁に近づく

宮藤「ペリーヌさん？」

ペリーヌ「最後に取っておくつもりでしたのに」と言う自身固有魔法である

ペリーヌ「トネール」を使い隔壁を破壊する

隔壁内に入ると赤く綺麗に光るコアがある

宮藤がこれに近づく

リーネ「芳佳ちゃん？」

ペリーヌ「宮藤さん？何する気ですか？」

宮藤「リーネちゃん、ペリーヌさん、私を支えて！」と言い二人は両腕を持ち支える

そして宮藤は「ありがとう」と呟きユニットを逆進させ、ユニットから足を離脱させ、投下する

ユニットはコアに吸い込まれるように落ちてゆきコアを破壊する  
空母赤城は破片となる

シャーリー「やったな…」

ルツキーニ「アア、芳佳だ！

リーネ「芳佳ちゃん」と言うとペリーヌが離れ

リーネ「やった、やったよ、芳佳ちゃん！、芳佳ちゃんがやつつけたんだよ」

ペリーヌ「あ、あれは？」

坂本「ネウロイの巣が」

シャーリー「消えてゆくぞー」

ルツキーニ「うううかったー」

ペリーヌ「ガリアが私の故郷が…解放された」

リーネ「すごい、すごいよ芳佳ちゃん！」

宮藤「うん…」

坂本「終わったな…」

ミーナ「ええ、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ及び特別第10飛行

訓練隊、全機帰還します！」

『了解』

1944年9月ガリア地方のネウロイの完全消滅が確認されたこれを持って正式に第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズは解散した

第2章 ストライクウィッチーズ完

第1・5章 ブレイブウィッチーズ始

## 第一・五章 説明 ブレイブウィッチーズ

## 20話 その後

20話 その後

ウオーロック事件から半月後である9月20日隊長室にて

ミーナ「このあとは悠太さんと凜さんはどうするの？」

悠太「まあ特殊第10訓練飛行隊の教官でもするかな」

凜「私も同じように教官として出ようかなと」

坂本「ここに居たのか、その件については扶桑とブリタニアから手紙が来てるぞ」

悠太「手紙？」

凜「内容は？」

悠太「はあ…嫌な予感がする」

ミーナ「どうしたのかしら？」

坂本「扶桑の方は空軍を作るのと陸海空をまとめ上げた組織を作るから凜と共々きて欲しい、あと階級を少将にあげて凜を大佐にするそうだ、ブリタニアの方は特別第10

飛行訓練隊を扶桑へ譲渡とし、シユナイダー・空の名前を安田空に国籍を扶桑に変更するとの事だ」

悠太「扶桑の方はわかったがブリタニアの方はどう言う事だよ、部隊譲渡についてはわかるんだが、国籍については扶桑が許してるのか？」

坂本「扶桑外務省、扶桑内務省ともに許可している」

凜「なんでえ……」

坂本「さあな、たが一樣断ることもできるぞ」

悠太「まあ、受けようかな……凜は？」

凜「まあ受けるかなあ」

悠太「なんだかめんどくさいことになりそうだなあ……」

坂本「明日にはソラと艦艇で帰国するから準備しといてくれ」

悠太「ソラには伝えてあるのか？」

坂本「嗚呼、すでに伝えた」

悠太「行くのは確定だと思われてたのか……」

坂本「そうみたいだな」

悠太「と言うか陸海を統合したら反発があるんじゃない？」

坂本「陛下が身内での対立は見苦しいからやめてくれとってみたいだ」



悠太「嗚呼、なるほど、そしてなんで我々が呼ばれたのだ？」

坂本「それは異世界から来たのと異世界の国の空軍所属だから空軍官僚にするにはいいだろうとのことだ」

悠太「うげげげ」

朝6時10月4日新横須賀陸海空軍基地

悠太「んあああ疲れたあ」

ソラ「ついたー」

凜「ついたねー」

坂本「3人ともお疲れ様だな」

悠太「航空機乗りだから船は慣れんな」

坂本「ハツハツハツハツ」

凜「ここが新横須賀基地か」

坂本「すごいな陸海軍の装備が揃っているな」

??「坂本少佐殿お迎えに参りました」

悠太「この方は？」

??「ハツ土方圭助上等水兵であります！」

悠太「どうも安田悠太大佐だよろしくな」

ソラ「安田ソラ軍曹です！」

凜「安田凜少佐だよよろしくな」

土方「はい、お話は聞いています！」

悠太「これからどこに？」

土方「新扶桑空軍司令部です」

悠太「わかったって事で運転よろしくな土方」

土方「はい」

数分後

土方「到着いたしました」

悠太「ここが空軍司令部かなんか嫌な予感がするな」

凜「確かに」

坂本「嫌な予感？」

悠太「いいや、気にしないでこっちの話」

坂本「そ、そうか」

タツタツタ

坂本「ここが司令官室か」

コンコン

坂本「坂本美緒以下5名入ります」

司令「入れ」

『失礼します』

司令「ようこそ」

悠太「安田悠太、着任いたしました」

ソラ「安田ソラ、着任しましたっ」

凜「安田凜、着任いたしました」

坂本「坂本美緒、着任いたしました」

悠太「エ？」

坂本「嗚呼、言い忘れてたな、今日から空軍所属になったんだ」

土方「土方圭助、着任いたしました」

司令「着任を確認、とりあえず土方以外はここで待っていてくれ土方呼んできてくれ、あとこれ以上は硬いのは無しな、陸さんとは違うからな」

悠太「わかった」

数分後

タツタツタ

??「おう、悠太元気しとったか？」

悠太「なんで秀太が？」

宛坂「いやあネウロツク戦の後に扶桑軍にお誘いをもらってね」

悠太「あーなるほどなど言うかそれカールスラント怒ってない？」

宛坂「特に、カールスラントにお見上げを渡したからね」

悠太「嗚呼、んで秀太が作った新型機ってのは？」

宛坂「C—130擬とUS—2擬」

悠太「そうなるとエンジンは？」

宛坂「頑張って作ったさ」

悠太「うむ…一つ頼み事があるんだがいいか？」

宛坂「なんだ言ってみろ、そんな無理難題じゃなければやるぞ」

悠太「T—7, T—1, T—2が必要になってくるだろうから作って欲しいんだが…」

宛坂「喜べ既にできている！」

悠太「なんだって？」

宛坂「新型機を作るとしてその踏み台として作ったが倉庫に眠らせてるがな」

悠太「それをできれば生産できるレベルに落として欲しい」

宛坂「ああ、わかった」

司令「なんだね？さのてい—ふお—とかったのは」

悠太「戦後日本が作った初等、中等、高等練習機だよ」

司令「練習機なら赤とんぼがあるじゃないか」  
九三式中間練習機

悠太「時代は刻一刻と変わるもんです、あと6年、つまり1950年代になればレシプロエンジンの搭載機が消えはじまずよええ」

司令「それはないだろう？、最近カールスラントから届いたネ20噴流式魔導エンジンも組み立ては終わったが問題が山積みだと海軍が言っておったが」

悠太「それを解決するのが技術屋だろう？」

宛坂「おうよ、と言うかその問題は問題にならない、と言うかネ20よりもよいエンジンで最近は開発してる、まあ一人だから6機を組み立てるのに四苦八苦してるがな、なんなら機体も完成して調整するだけだけどね」

司令「なんと！どんな機体かね！」

宛坂「そこはもう少し秘密ですよ、悠太や凜には亡霊<sup>ツ</sup>IIと言えがいいかな？」

悠太「なるほどなあ……」

凜「まあ成功することを祈ってるさ」

悠太「それはいつ頃できそう？」

宛坂「特別第10飛行訓練隊分の機体なら再来週にはな、組み立て試験飛行するだけやし、来年までには生産できるといいなって感じだな」

悠太「早く無いか？それよりもうそんな時期…ん？今思ったが我々安田家に家なくないか？」

司令「ああ、それに関しては霞ヶ関周辺に買ったからそれを使ってくれ」

悠太「霞ヶ関か…了解です」

宛坂「久しぶりにお前の鍋が食いたい、行けたら年末に邪魔していいか？」

悠太「俺と凜は例年の事だからいいだろうがソラがイヤと言えば残念なら…」

ソラ「ソラはいいよー、おじさん面白そうだし」

宛坂「おう、なら邪魔するわ」

司令「それは置いておいて、今から航空予備学校に出向いて空軍にくるウィッチを探してくれ、あと聞いてはいるだろうがウォーロックについては機密だからな、あと安田一家は義兄妹って言えば問題なからう？まあ言ってもいいがな、あと特殊第10飛行訓練隊は再来週には到着予定だ、扶桑に到着したら特殊第10飛行隊の部隊名を変更、なんだが部隊名、通称をどんな物にすれば悩んでいたな、基地は横須賀を使ってくれ」

凜「了解」

ソラ「はい！」

悠太「了解ですよ部隊名は独立第1特殊飛行隊 通称はファルコンウィッチーズとかどうですかね？」

司令「特殊か確かにな、ファルコンウィッチーズは隼の魔女達か」

悠太「隼は鳥の中で最も早いですし、彼女達は各国のウィッチ部隊の中では最速でしょうし」

司令「どのぐらいなのだ？」

悠太「ざっと1020km/hぐらいですかね私や凜をいると凜の3300km/hが最速ですかねえ一様」

司令「なんと…悠太はどのぐらいなのだ？」

悠太「私ですか？私は確か2470km/hぐらいだったかな」

司令「なんと…今からの君たちの任務はなんだが」

悠太「なんです？」

司令「空軍に入るウィッチを探してくれ、だが選択は個人の自由だ、詰まる所は勧誘だな、あと悠太は扶桑皇国空軍副司令官になる、よろしくと言っても書類とかは我々や秘書がやる、副司令官補佐は凜だよろしく、宛坂は扶桑皇国空軍研究所社長だ」

宛坂「了解です」

悠太「了解」

凜「…了解」

司令「安田悠太大佐を本日付けて中将に任命する」

悠太「了解です、あの試験は？あと聞いてた話と違うんだか」

司令「少将に関してなんだがいざこざがあり中将になった、試験は内容が決まってるな  
くてな」

悠太「了解です」

司令「安田凜中佐を本日付で少将に任命する！

凜「ハッ了解！」

司令「宛坂秀太技術少佐を本日付けで少将に任命する」

宛坂「了解！」

次回

ウィッチ、探します？（発進します並感）

お楽しみに



## 第21話

21話 ウイツチ、探します？

司令「さて君たちにはもう行つてもらおう」

悠太「せめて回る基地ぐらいは」

坂本「そこは私が説明しよう、最初は横須賀予備学校、佐世保航空予備学校に行く」

悠太「なるほど、仙台、佐世保と距離があるが移動は？」

宛坂「C-130擬で行くよでも佐世保は離着陸出来るような飛行場がないから、悠太と凜を空挺投下、ユニットはLAPESで校庭に投下だ」

悠太「なんちな？」

宛坂「君たち二人空挺レンジャー持ちだろ？」

凜「なぜそれを……」

宛坂「市ヶ谷でも有名だぞ？あの夫婦は地上でも空中でも最強の夫婦だつて」

悠太「誰が言ったんや……国防空軍所属なのに陸軍の特殊部隊に行かされたのは絶対市ヶ谷の人間の所為なんだよなあ」

司令「その、話の途中にすまないが空挺レンジャーつては？」

宛坂「空挺レンジャーつてのはめちやくしちや厳しい訓練を完遂した連中のことだ、基本的には陸軍のみなんだがなぜか悠太と凜は国防空軍なのにも関わらずぶち込まれたんだ」

司令「めちやくちや厳しい？」

宛坂「山中で三日三晩食わずに行軍したり、フル装備で50kmを行軍したり、フル装備だと重さは」

悠太「60kgだ」

宛坂「え？そんな重いのか？40kgぐらいかと」

悠太「グスタフ抱えたりなんやかんや持てばそんなもん」

司令「な、何時間ぐらいで…」

悠太「1日ぐらいだったな」

坂本「そんなに必要なのか？」

悠太「まあ主な任務は偵察、通信所の破壊、交通要所の破壊、要人救出、投下誘導、レーダーサイトの破壊、車両集積所破壊等々の一般的な歩兵には無理そんな任務をこなすのが空挺レンジャーの主任務だ」

坂本「空軍が持つてなくても問題なくないか？」

悠太「そうなんだけど、なぜか送られたのさ、それはさておき、帰還はどうすれば良

いんだ？」

宛坂「それはユニットで帰ってこい」

悠太「何処に？」

宛坂「府中基地」

悠太「距離に換算すると大体900kmぐらいかマツハ2で飛べば25分程度で着く  
な、でLAPESはどうするんだ？」

司令「LAPESってのは？」

宛坂「ここは技術屋の私が答えよう、低高度<sup>L</sup>パラシュート<sup>A</sup>抽出システム<sup>S</sup>とは地面スレ  
スレでで荷物をパラシュート使い投下する方法だ」

悠太「割と危険なんだが秀太お前出来るんか？」

秀太「が、がんばりまひゅー！」

凧「嘘んだな、自分あれ得意だったなあ：今回の目標の写真とかある？」

坂本「一応あるが、どうしてだ？」とどっからか写真を取り出す

凧「まあ、すこしな」と言いながら写真を借りる

凧「うーむ、距離は500mと言ったところから、ギリギリだな、まあ侵入が海側か  
らマシだな、そして上昇の際に山があるのが怖いがフルフラップ、出力50%かな、ユ  
ニットはどのぐらいの高さから落としても大丈夫？」

宛坂「木の箱と緩衝材ギチギチにしてるから30サンマルぐらいなら大丈夫」

凜「30サンマルか、なら25フタゴで侵入だな」

悠太「先にLAPESしてから我々がダイブでいいのでは？」

宛坂「というと？」

悠太「先に俺と凜が操縦してLAPESをしてその後に操縦を宛坂ともう一人のパイロットに変えるって形」

宛坂「確かにそれの方が安全だな」

悠太「それで決まりだな、って事で行くか」

司令「あ、待ってくれ」と言い席を立ち、全員に紙袋を渡す

司令「新しい制服だよ、あと身分証、階級は変えてあるから基地に入る際に見せてやってくれ」

悠太「制服……と制服を見ながら言う

(空自の制服ぼいやつ)

司令「どうかしたか？」

悠太「いいやなんでも」

凜「悠太は基本つなぎしか着てなかったもんな」

悠太「そう……だな」

宛坂「そんなことより早く行かないと」

と言ひ強引に司令室から退出する

悠太「そーういや車両は？さつきはくろがねだつたけど今だとユニットやら秀太が増えたけど」

秀太「車両は空軍研究所のイベリオンの2トン半が入り口に置いてあるよ、既にユニットを積んである」

悠太「運転は？」

土方「私が」

悠太「なら坂本、土方が前で、我々は後ろだな」

坂本「嗚呼わかつた」

土方「はい」

と言ひ歩いてゆき

車に乗る

悠太「ほら、ソラおいで」膝に座らせる

ソラ「うん！」

凜「マジでお父さんみたいやな」

秀太「( )まで懐くもんなのか？」

悠太「全員乗車確認ヨシ、行つていいぞ」

土方「了解です」

と車が動き出す

宛坂「なあ、知つてるか？」

悠太「何が？」

宛坂「欧州で扶桑陸軍の戦車は使い物にならんつて話なんだが」

凜「そりやそうでしょうよ、チハならまだしも89式も居るんでしょ？」

宛坂「らしいんだ」

悠太「そいつはひでえな」

宛坂「それで基本的に貫徹が足りてないらしくてな、それで最近新しい砲弾を作つたんだが陸軍が取り扱つてくれなくて困つてるんだよな」と言いながらトラックに搭載してある木箱を開けとある物を2個取り出す

悠太「なんだこれ？」

と団栗見たいな砲弾と爪楊枝みtainな砲弾を見ながら言う

宛坂「57mm APFSDS弾と57mm HESH弾だよ」

悠太「APFSDS弾はある程度の口径がないとあんまり有効じゃ無いと聞いたが？」

宛坂「そこは魔法力を少し込めて撃てば変わる、込めずに撃つたら500m<sup>距離</sup>0°<sub>角度</sub>。230m<sup>貫徹力</sup>で、込めて撃つたら500m0°。500mまで伸びるんだ」

悠太「500m…十分じゃないか、何が弱点は？」

宛坂「AP<sup>通常</sup>弾と比べて少し砲身の削れが速くなる」

悠太「なるほど、で値段は？」

宛坂「聞いて驚け、AP弾と対して変わらない、若干作りづらいが陸軍が協力してくれば問題ない程度だ」

悠太「HESHもある程度の炸薬が居るだろう？」

宛坂「それに関しては小型ネウロイ用にだ」

悠太「わかった、取り敢えずは陸軍さんと話してみるさ、あと出来ればなんだが新型陸戦ユニットを作って欲しいんだ」

宛坂「一様戦車は試験車両なら完成してる、まあ試験車両だから色々やってるだけだよ」

悠太「お？まじか！生産は出来るか？」

秀太「できるよ」

悠太「そいつはいい、お？車が止まった？」

土方「あの前でトラックがぶつかったみたいです」

悠太「行つてくる」と言いソラを膝から退け荷台から飛び降り事故現場へと走つて行く

凛「あいつだけにいい所は見せれんよな！」と言い同じように車から降りる現場にゆく

秀太「ソラ、君もお父さんやお母さんの様に人の為に働けよつて言おうと思つたが既に人の為に働いてるな、あと君たち三人は待つとけ」同様に車から降り現場に走る

トラックに近づく

悠太「おいおい、嘘だろ…」

トラック同士が正面衝突を起こし運転席が原型を留めていない

凛「どうし…え？」

悠太「ウインチもつてこい」

凛「そんなものな」

秀太「我々のトラックに着いてる」と言う凛は来た道を戻る

悠太「おい、運転手大丈夫か？」

運転手A「ああ…ななんとかな…でも体が動かねえ」

運転手B「…」



悠太「一人は挟まって骨折って所かでもう一人は気絶か？生きてると良いが」

凜「土方さん、車でのトラックまである程度近づきてくれ」

土方「わかりました」

と言いつ車を近づける

秀太「よしトラックきた」と言い近づきワイヤーを取りぶつかつてる一両に引つ掛ける

秀太「悠太、凜」

悠太「いつでも！」

凜「いつでも」

秀太「あいよ」と言いウイーンと言う音と共にウインチが巻き上げられ車両が離れると運転席が離れ片方から血がポタポタ滴る

悠太「まずい、ストップ」

秀太「どうした」

悠太「腕が挟まって血管を圧迫してたが退かしたから血が回り始めて出血したみたいだ」と言い治癒魔法を運転Bにかける

悠太「おい、大丈夫か？」

運転B「うう」

悠太「不明か」

運転B「う、ういっち？」

悠太「そうだ、野郎だがな」

運転B「うう、視界が」

悠太「もう大丈夫だ、あとは輸血だが…何型だ？」

運転B「わからない」と言い残り倒れる

悠太「わからなかった」と血まみれの運転Bを抱え、少し離れたところに置く

凜「どうだ？動けるか？」

運転A「むりだ…」

凜「痛いと思うが少し我慢してくれ」と言い運転Aを引きずり出し担ぎ移動する  
道路に出て置く

凜「悠太そっちは？」

悠太「こっちは今治した、血液不足で気絶してるがな」

凜「こっち来てくれ、足と腕を骨折してるみたいだ」

近づき治療魔法を掛け直す

運転A「ち、ちまみれ」

悠太「ああ、気にするな、で？どうだ？動けるか？」

運転A 「う、動ける」

悠太 「治ったとはいえ、検査入院はしてくれ」

と言うと憲兵の乗ったトラックが来る

憲兵A 「どうした？大丈夫か？」と憲兵が一人近づいてくる

憲兵B 「ち、血まみれ！どうしたんだ？」

悠太 「嗚呼」と自分の青色のつなぎに真っ赤な血が付いている（イメージとしてはドイツ空軍の青つなぎに紺色のサーフパンツ

悠太 「その人を移動させた際についたんだ」

憲兵A 「なるほど、病体は？」

悠太 「血まみれの方は血液不足、手間の方は検査入院程度だ、もしかしたら手前の方も輸血しないといけないかも知れん」

憲兵A 「ああ、わかった」

事故処理を憲兵と確認したり色々して30分後

憲兵A 「貴様たち3人は一度横須賀予備学校に来て欲しいんだが」

悠太 「これまたなんで？」

憲兵A 「運転Bが横須賀航空予備学校の校長のご友人だったそうだ」

悠太 「嗚呼、わかった（階級言うとは絶対めんどくさいことになるじゃん）」

凜「格好は？」

憲兵A「羽織るものを貸す、あとこの車両に乗ってくれ」

悠太「少し待ってくれ、自分たちが乗ってきたトラックに少し話してきていいか？」

憲兵A「わかった」

トラックに走り

悠太「土方、坂本、すまんが憲兵が横須賀予備学校に来て欲しいから憲兵のトラックで先に向かうわ」

土方「ど、どうしたんですかの血は」

悠太「一人が大怪我をしててな、その血さ」

坂本「階級とかは言っていないのか？」

悠太「今言うとも色々めんどくさいからさ、あと憲兵のトラックに着いてきてくれ」

と言い切ると戻る

悠太「あのトラックが付いてくるがいいか？」

憲兵A「問題ない、早くトラックに乗れ」

と言うと悠太が乗る

憲兵A「行くぞ」

と言うと車は進み出す

10分後

憲兵A「到着だ、着いて来い」と降りて言う

凜「どうする？階級言う？」（小声）で凜に話しかける

悠太「校長室？に着いたらで良いと思うよ」（小声）

凜「わかった」（小声）

軽く歩き

コンコン

憲兵A「例の3人を連れてきました」

校長「入れ」

憲兵A「失礼します」

校長「あなた達が私の友人を救ってくれたのね？」

悠太「まあはいそうですね」

校長「自己紹介がまだでしたね、やまもとせいこ山本正子よ、階級は少佐、元ウィッチだわ」

悠太「安田悠太、階級は中将だ」

凜「安田凜、階級は少将です」

秀太「宛坂秀太、階級は同じく少将」

山本「え？安田さんと宛坂さんって今日訪問予定だった人ですよね？」

悠太「ええ、そうですよ」

コンコン

山本「はい、どなたでしょうか？」

坂本「坂本美緒少佐だ」

土方「土方圭介上等水兵です」

ソラ「安田ソラ軍曹です」

山本「入って」

ソラ「はい」入ると袋を3袋持ち近づいてくる

悠太「？あ、ああ服か」

凜「あ、どうも」

宛坂「どうも」

と各自袋から制服を出して、着ていた服を脱ぎ着る

悠太「さて、先に仕事をしますか、時間は…あと10分ぐらいだね」と腕時計を確認しなから言う

山本「ですね、急がなければ…」

体育館に行き

悠太「すっげえ人居るなあ」（小声）

凜「陸海軍共々のウィッチが居るんだっけか」(小声)

山本「そうね、航空ウィッチ陸上ウィッチ共に教育してるわ、あまり関係ないと思うけど陸上ウィッチも来てるわよ」(小声)

悠太「一様、戦車中隊を2個作ろうかなって考えてるから、居てもやってよかつたな」  
(小声)

山本が舞台上に立ち

山本「今日、皆さんにお集まりになった理由は、新しい部隊の編成についてよ」と言う

ザワザワとざわつき始める

山本「その説明等をしてくれる人を紹介するわ、安田悠太中将、安田凜少将、宛坂秀少将よ」

悠太「ご紹介に預かりました扶桑皇国空軍副司令官の安田悠太中将です」

凜「どうもご紹介された扶桑皇国空軍副司令官補佐の安田凜少将です」

宛坂「どうも、扶桑皇国空軍技術研究所所長、宛坂秀少将だ」

山本「えつと…何を話せば…」

悠太「説明といつても大してすることはないんだがな、簡単に言うと扶桑本土防空と欧州での近接航空支援<sup>C</sup><sub>A</sub><sup>S</sup>だ、個人的な考えで一様2個戦車中隊も考えてる、車両につ

いては、宛坂が後々話すだろうな、航空機についてもブリタニア連邦から新型ジェットストライカーを輸入する、とはいえ新型ジェットは現在空軍で開発中のジェットストライカーまでの繋ぎだ兼練習機だな、それでだ、国土防空のために約400人近くの戦闘機パイロット、ウィッチが必要だと思う」と言う

ざわつき始める

悠太「まあ近いうちに戦闘機でも簡単にネウロイを倒せる事になる、これだけでウィッチの負担は減るだろうが、それでもウィッチとは言う存在は大切だ、宛坂、車両についてだ」

宛坂「どうも、宛坂秀太少将です、技術屋だよ、今は新型ジェットストライカーユニットの開発をしてるよ、陸戦用のやつは大体できてるよ、砲は120mmで貫徹力は700mmと言ったところかな」

と言うと陸戦ウィッチ組の所が異常にざわつく

山本「聞きたいことがあるのなら後で時間を作るわ」

悠太「簡単な質問なら聞くが何か質問あるか？」

と聞くと人の子が手をあげる

悠太「はい、その子の」

生徒A「戦闘機でもネウロイを撃破出来るってどんなのなのでしょう？」



宛坂「そいつは誘導弾ってやつだな、航空機又はユニットから発射しネウロイを追尾し撃破する、ただそれだけだ」

生徒B「コアを破壊しなければ行けないのでは？」

宛坂「コアに向かって飛んでゆくのだ、高速で敵に刺さりコアに直撃し爆発だよ」

悠太「まあ、そんなところだ、でだ、興味があるなら所属を陸海軍から空軍に移転する書類を移転したい生徒は教官に相談して書類を貰ってくれ、今空軍にウィッチつて7人しか居ないんだよな、来年度からはここは陸海空軍横須賀予備学校になるらしいからな、以上だ」

山本「言ってもらった通り、気になる子は教官に話しなさい、ではこれで終わりです、この後は○×教室にて悠太さんや凜さんの経歴の話があるから興味のある人はききなさい、第二訓練所の方では坂本少佐が臨時教官をしてくれるわ、行きたい方に行きなさい、いいね？」

ウィッチ「はい！」

と言いつつ終わると生徒がぞろぞろと移動して行く

山本「なら私たちも○×室に行きましょう」

悠太「せやなあ」

と言いつつ移動を開始する

○×室前

悠太「集まったか？」

陸軍教官「はい」

悠太「いいか？」

陸軍教官「いつでも大丈夫であります」と敬礼する

悠太「もつと柔らかくなれよな陸軍は、海軍を見習ってくれよ……」

陸軍教官「ですが教官である以上……」

悠太「そこなんだよな、もつと柔らかくして欲しいんだよな、なら行くか」と言い部屋の前を開け入る

ガラガラガラと引き戸を開け3人が入ってゆく

教壇に立ち

悠太「さてもうもう一度自己紹介かな」

悠太「どうも、扶桑皇国空軍副司令の安田悠太中将だよ、気軽に悠太とも呼んでね」  
凜「はろー、扶桑皇国空軍副司令補佐の安田凜だよー、安田だとわからんから凜って呼んでね、階級は少将」

宛坂「ДобрыЙ ДЕНЬ、扶桑皇国空軍技術研究所長の宛坂秀太だよ、まあ宛坂でも、秀太でもどちらでも構わん、階級は同じく少将だよ」

悠太「まあ、なんて言うか、ついさつき中将になったばかりだから実感ないけどな」  
教官A「中将つてことはさつきまで少将とかだったんでしょ？」

悠太「残念ながら少将でもなく大佐だったんだよな、凜と宛坂は中佐だし」

教官A「え？本当なの？」

凜「本当だよ」

宛坂「だね」

悠太「さて、経歴の話をしようか」と言い異世界から来た話、そしてウィッチなんて居なかった、軍人で、人間同士の戦争なんかを話した

悠太「まあそんなところだ、半分ぐらいが信じてくれれば良いけどな」

教官「本当でしょうね：そんな真面目にいつてるところ見ると、私は信じますよ」  
教官B「信じるが人との戦争なんてそう簡単に起こらないのでは？」

悠太「さあな、簡単に起きてしまったんだ仕方ないだろう？」

凜「まあ色々あったのさ、なんでも良いから質問あるか？」

と聞くと陸軍側の一人の生徒が手を挙げる

凜「ほい、その君」

生徒A「新しいユニットの話が聞けると聞いたきたんですけど…」

悠太「そいつはな、秀太が知ってるよ」

秀太「お話変わりました、秀太ですう…新型戦車はね、試製09式戦車って名称予定だよ車種は中戦車ユニット」

と言うと「えー」と言う声上がる

悠太「まあ中戦車と言ったらそんな反応になるわな、華の重戦車じゃないし、取り敢えず聞けよ、タブンすごいと思うから」

秀太「タブンってなんやねん…データとしては主砲は44口径120mm滑腔戦車砲を搭載し、装甲に関してはユニットは関係ないとして一様、車体正面80mm、車体側面35mm、車体後部25mm、砲塔全周180mmとなってるよ薄いね」と口径や装甲厚を黒板に書いてゆく

と言うと

「え？」と言う声上がる

秀太「ん？あー厚いのか？」

悠太「正面はほぼ豹パンターと同じやぞ」

凜「いやそこじゃないと思うんやがな」

悠太「ん…ああ、主砲か」

秀太「あつ、主砲だな」

凜「この子達は駆逐艦と同じクラスの主砲を撃てるってことに疑問を持つてるよ」

秀太「すまない、我々の世界の戦車では大体が120mmだから勘違いをしていた、先程も説明した通りウィッチなんていなかったから普通の戦車だ、一樣その戦車の技術の一部応用しつつ、反動は魔法力で抑え。大きな関しては高さ150cm、幅は20cm程度だね、砲弾は専用の装甲付きリユックを背負うことをで解決、もし誘爆する場合は爆風が全て上に抜けるようにしてる」

と言うと一人生徒が

「速度とかどうなんだろう…」と言う

秀太「おつと、確かに速度については書き忘れてたな、速度は今の試験機でフル武装で50kmだ、主砲の持ち方については機関銃を腰ダメで撃つような感じだ」

読者諸君にはゲーム等のミニガンを持つような感じと言えればいいだろうな

悠太「その実物を見てないからわからんが装填法は？」

秀太「ちようど左右どちらか、まあ利き手次第だが、その利き手の方向にリユックの出っ張りがあるからそこにうまく接続するとクリップ式ライフルみたく5発装填されるから撃ち切ったら同じ子をしての繰り返しだな、クリップはリユックに5個入って

る、1リユックで25発、砲に最初から入れれば30発、リユックもスライドすれば別なものに変えられるから補給も簡単」

読者諸君に言うならば十一年式軽機関銃のマガジン部分を縦にして120mm用砲弾にした感じ

簡単に言うとう5発クリップがありバネで押し、うまく接続するとリユックの蓋が開き重力で落ちて装填される、この際弾を止めるやつは勝手に取れる

悠太「なるほどな、それってうまくやれば6クリップ行けるんじゃないやね？」

秀太「残念ながら無理、やると給弾不良が起こる可能性が上がる」

悠太「残念」

秀太「ま、そんなところだ」

凜「うーん：実際ネウロイを貫通可能からわからんし陸軍が購入してくれるとも限らないから、大量生産する前に空軍で運用するって事か」

秀太「買ってくれると嬉しいな」

悠太「まあうんそうだね、で、他の質問」

と海軍側の子が手を挙げる

悠太「ほいどうぞ」

生B「軍事とは無関係なんですけど、悠太さんと凜さんの関係性は？」

と聞くと後ろに立っている教官が確かについて顔をしている

悠太「あー…」

凜「元の世界だと一様夫婦だよ」

教官・全生徒「え？」

秀太「あ、言うのね、まあ本当に夫婦だよ」

海軍教官「なんかその、失礼ですが証拠とかは…」

陸軍教官「疑うのは本当に失礼なのですが、私も信じ難いと言いますか…」

悠太「なんで未来から来たって言うよりも信じてないんだよ！」と言いながら首からぶら下げているドッグタグを取り出す

とそこに指輪らしきものがついている

形は丸々ではなく六角形である

悠太「久々に外すなこれ」と言いながらドッグタグのチェーンを外す

チェーンを外しチェーンに通している指輪を取り出し

悠太「ならその海軍教官来てみ」

海軍教官「ハッ」近づいてくる

指輪の内側を見せる

海軍教官「本当に Y u t a & R i n とリベリオン語で書かれていますね…あと六角形な

のは何ででしょうか？」

と言いつけると戻ってゆく

悠太「ああ、六角形なのは元々こいつがナットって事だな」

教官「どう言う事です？」

凜「本当なら指輪を買うつもりだったんだけど、いかんせん戦争中だからその素材が大体軍に流れて、指輪屋さんとかに流れないから、買ってなかつたんだけど、それを知ったうちの部隊の整備長、通称“おやつさん”なんだけど、おやつさんがどっちもの搭乗機の廃棄予定のナットを盗んで勝手に作ってたって感じ」

教官「すごいわね…でもなんで認識票と一緒につけてるのかしら？」

悠太「操縦中に指に食い込むから外してるんだよ、手袋をつけてるとはいえ手前に引いたりすると食い込むから痛いよな」

教官「なるほど…」

ガラガラガラとドアが開く

悠太「おう？」

土方「悠太さん、少しこちらへ」と手招きして来る

悠太「少し場を任せるわ」と言い土方の方へとゆく

土方「予定の変更なんですけど…」



悠太「このあと12時には航空機で佐世保行きだろ？」

土方「それが、佐世保が中止したいと具申してきまして…」

悠太「あー、うんわかった、ならあとで模擬戦しても良いか許可取ってもらって良いか？許可が取れたまた来てくれ」

土方「わかりました」と敬礼し戻ってゆく

悠太も教室へと戻る

悠太「すまんすまん」と言いながら教室へと入る

凜「なんだった？」

悠太「佐世保行きが中止になって、このあと模擬戦することになった」

凜「応」

生徒が未来の機体とかなのかとかの推測が飛び交う

悠太「そうだね、未来の機体ではあるから楽しみにしなされ」

その後もいろいろな話をし

ガラガラガラ

と土方が来て

耳打ちで

土方「模擬戦をやってもいいとの事です集合場所は第一ハンガーとの事です」

悠太「わかった」

悠太「さて諸君、模擬戦の時間の前に小休憩だ、15分後には第一ハンガーに集まれの事だ」と言うのと

「姿勢、礼」

「ありがとうございました」と言い離席する

移動し

トラックならユニットを下ろす

悠太「毎回思うがユニットに履くとハツドH U Dみたいなの出てくるのすごいよな」と言いながらユニットに燃料ホースを繋ぎなら言う

凜「なんでなんやろな、あれ」

秀太「ぺちやくちや喋ってらんで手を動かせっちよ」

悠太「動かしてるよ、燃料給油完了」

凜「こっちも終わり」

秀太「発進ユニットもどっちも離陸できる様になってるよ」と言うのと二人とも飛び乗り

固有武装である

悠太「サーヴアント、出る」と発進ユニットから外れ、ハンガーの外に出る  
凜「フリー、出る」ハンガーの外に出ると初めて見る機体から、「何アレ」声が上が  
る

秀太《こちら、秀太、聞こえるか？》

悠太「異常なし」

凜「異常なし」

秀太《取り敢えずは誘導路の端に行ってください》

数分後

2機が滑走路の端に止まっている

秀太《風なし、滑走路異常なし、離陸後も無線はこのまま、音速はこえるなよ？》

悠太「了解」

凜「了解」

と言うとどちらもエンジンスロットルを入れて加速する

加速すると生徒たちから「おお」と聞こえて来る

どちらもが離陸しお互いが距離を取る

悠太《生徒たち聞こえるかな？》

教官《はい、全員聞こえています》

悠太《模擬戦のルールは簡単、1発でも当てれば良い》と言うとどちらも旋回を始め  
ヘッドオンになる

教官「ええ？」

秀太「さーて、始まりました、最初はお互いヘッドオンです」

どちらも近づき

秀太「いま、交差しました！どちらも上昇しています！おっと、ここで凧が後ろに着  
いた！」

凧が撃つが当たらない

秀太「おおっと、悠太失速か！凧がオーバーシユートした！悠太降下を開始したが純  
粋な速度勝負だと負けるが此処をどうするかが腕だ！」

秀太「ああ、凧がまたオーバーシユートしたあ！悠太撃った撃った！当たった当たっ  
た！」

凧「ウギヤアアアアアいつでえええ」

悠太「お前は速度を使って格闘戦を徹底するから当てやすいんだよ」

凧「(・ω・)」

秀太「おっと、あれはダメ出し食らってますねえ！」

教官「何ででしょう？」

秀太「おっと、ここで初めて発した教官、理由はですね、凜をあそこまで育て上げたのが悠太だからでしょうね」

教官「成程、人に教えてあのレベルまで育てあげるのには教え方が上手いんでしょうか？」

秀太「いや、それでも無い、才能を引き出すのが上手いんだ」

教官「才能ですか？」

秀太「そう、才能、あいつの部隊にいたウルリツヒ・ミヒヤエルっていう奴がいたんだがそいつは戦闘機乗りになりたいと言って乗ってたんだがあまり戦績を出せずにいたんだがそいつを無理やり攻撃機に乗せたら開花させたんだ、悠太曰く、あいつの血筋的に攻撃機しかないだろうってね、そんなわけないだろうにでもその後ほんとに活躍したよあいつは」

悠太《ウルリツヒ・ミヒヤエルとか懐かしいなおい！》

秀太「まあそれはさて置きどうだった？」

悠太《まあ、普通かな、ミヒヤエルの血筋は一樣魔王のはずだぜ？》

秀太《え？魔王ってあの閣下？》

悠太《そうだよ》

秀太《うせやろ…そんな事より戻ってきてくれ》

悠太《あいあい》

帰還後

13時

悠太「まあ、未来の戦闘ではないが、こんな感じだ、最新鋭の機体がいつ配備されるかわからないが気になれば来てくれ」

と終わり坂本たちと合流する

坂本「どうだった？」

悠太「まあ普通よ」

坂本「そうか」

悠太「このあとは？」

土方「特にないので新居の方をみては？」

悠太「それもそうだな、ならトラックに戻るか」と言い、トラックが止めてある方向かう

次回 会議

## 22話 会議

移動をし新居にやってきた一向、

土方「一樣ここみたいです」と木造一戸建ての建物を指さす

悠太「まあ俺らの居た時代の古い一軒家って感じか

秀太「まあ普通だな」

凜「木造一戸建てかあ……」

悠太「文句言うな、この時代じゃR鉄筋コンクリート造C造はまだ流行ってないもんな、S鉄骨鉄筋コンクリートR鉄骨鉄筋コンクリートC造でも

そも高層ビル向けだし」

凜「それもそうかあ……」

秀太「そういえば買ったと言ってたが名義は誰なんだ？」

土方「えつと……」と言いながらもらった資料を読む

土方「ありました、安田悠太さんですね」

悠太「ええ？一樣所有者俺なのか」

土方「みたいです」

悠太「取り敢えず確認したし、横須賀に戻るか」

土方「え？」

凜「まあだよな、何もねえもん、これなら横須賀の宿舎の方が今は良い」

ソラ「うん」

坂本「それそうだな」

と横須賀に戻り

司令「少し悠太、凜、秀太に来て欲しいところがあるんだが……」

凜「何でしょう？」

秀太「ナンジャラホイ」

悠太「まあ暇ですし良いですよ、土方、坂本、ソラは……様ついてきてくれ」

ソラ「うん！」

坂本「ああ、わかった」

土方「了解です」

司令「その行き先なんだが、陸海空会議なんだ」

悠太「全軍のトップの会議ですか……なら坂本達は外だな」

司令「そうだ」

凜「場所は？」

司令「旧大本営本部だ、今は扶桑軍本部だな」



悠太「市ヶ谷ですか…」

凜「市ヶ谷とか最後行つたのいつやるか…」

司令「前世だと言つたことあるのか？」

悠太「一樣国防軍の中央司令部の場所でしたからね、色々呼び出されてましたよ…」とため息を吐く

司令「まあうん…よし行こうか」と

市ヶ谷に向かう

着

悠太「旧大本営本部と本当に変わらんのかな」

凜「歴史資料で見た程度だな」

本部会議室へと向かう

司令がガチャとあけ、会議室に入る

悠太、凜、秀太は失礼しますと軽く頭を下げて、入る

椅子に座り数分

??「えーこれより、国防軍第3回定例会議を始めます、本日の司会は海軍庁より内川次郎うちかわ じろうです、本日は空軍さんより安田悠太、安田凜、宛坂秀太さん達が来てます、御三方挨拶どうぞ」

悠太「ご紹介預かりました安田悠太中将です」と頭を下げる

凜「同じくご紹介預かりました、安田凜少将です」と同様に頭を下げる

秀太「同じくご紹介預かりました、宛坂秀太少将です」と頭を下げる

終わると拍手が起きる

内川「三人については全員が知ってる通り異世界から来たらしいのである程度意見をもらえると嬉しいですね、本日の進捗最初は陸軍庁、東条英機」

東條「新型戦車ユニットについて、全く出来てない、航空ユニットについてはジェットストライカー及びジェット機の開発は難航してる、いつ出来るかもわからないぞうだ」

内川「次海軍庁、山本五十六くん」

山本「空母天城の解体について、新型空母大鳳型3番艦青龍せいりゅうと2週間前に竣工、1週間前に出港し、天城と入れ替わりました、信濃はまだまだです、ジェットエンジンについてはまだまだです」

内川「次空軍庁、川谷慎吾かわたにしんごくん」

川谷「新型航空ユニットは順調です」

内川「これより会議を始めます」

悠太「はい」と手をあげる

内川「安田悠太くん」

悠太「新型ユニット及び新型エンジンについては、目下開発中でおおよそ来週に飛行可能です」

と言うと「おー」と声があり

山本「そいつは艦上戦闘機化出来そうか？」

悠太「基本的な運用形態が陸海空軍全てが同じ機体を使う、が目標ですので可能です、性能については試験飛行時にお伝えします」

東條「ものによっては我々研究部門から出向など出すが必要かね？」

悠太「それには及びませんと言いたいですが、生産時には必要でしょう」

山本「海軍としては艦載機化にあたって何かすることは？」

悠太「もしできればなのですが、天城をジェット艦上機用に改造を施して欲しいのですが」

山本「どんなだ？」

悠太「具体的には飛行甲板を木材から耐熱モルタルへ、モルタルの下には装甲を、そして新型艦載カタパルトを搭載です」

と言うと山本は後ろにいる技術者であろう人物に聞いている

山本「カタパルト以外はすぐ可能そうだが、カタパルトについてはわからないとの事だ」

内川「ならば天城は解体ではなく改造ということでもよろしいでしょうか？」

東條「異議なし」

川谷「異議なし」

山本「許可する」

内川「次」

秀太をはいと手を挙げる

内川「宛坂秀太」

秀太「新型陸上ユニットについて、個人の開発で一様出来てますが、生産には至らないので不要な部分を切削していく予定です」

東郷「なんと、空軍は戦車すら開発するのか、それで性能は？」

と聞くと

秀太は数枚紙を出し、配る

内容は

試製09式中戦車

主砲 44口径120mm

実車装甲

装甲 車体正面80mm（傾斜）

車体側面35mm

車体後部25mm

砲塔全周180mm

速度 50km

悠太「いつの間に書類を作ったんだ？」と小声で聞くと

秀太「書類自体は最初からあったよ、枚数がないだけで」と小声で返される

東郷「素晴らしい！これを生産できるようにしてくれないか！」

秀太「それは良いですけどユニット型は出来てますけど、戦車本体は作れてないですよ」

東郷「いやユニット型だけで良い！戦車本体は相当重いだろうし、生産にもコストが掛かるだろうから、欧州に持っていくだけで相当時間がかかるだろうからな」

秀太「わかりました、ユニットの図面に関してはもう少しいらぬ部分を削って送ります」

悠太「大和型についてだが…」

山本「?!」

東郷「!?」

悠太「え?何か不味いことでも…」

山本「なぜ君は大和のことを知っている…あれは国家機密のでは…」

悠太「あれ?私が異世界から来た云々とか知りませんか…ね?」

山本「いやそれは知っているが、もしかして…」

悠太「ですよ?ただ我々の世界にはウィッチやネウロイが居なく、人間同士の残酷な戦争をしてるだけで大して変わらないのですよ?大和、武蔵までしか完成していませんけどね」

山本「その大和と武蔵の最後は…」

悠太「我々の世界ではアメリカ合衆国、こちらで言うイベリオンと戦争しており、大和は坊ノ岬沖で米軍、いやイベリオン軍の空母群に視認され、44本の魚雷と爆弾28発を食い沈没、武蔵はシブヤン海にて雷撃20本、爆弾17発、至近弾20発を食い沈没、戦艦の終焉です、そして少なくとも我々のいた2000年代で運用されていた戦艦は居ません」

山本「やはりか…」

悠太「山本さんは航空主兵論ですものね、個人的な意見ですと信濃も紀伊も空母にするべきでしょうな」

山本「それはそうなんだが、考えが浮かばなくてな…」

悠太「ならば、天城を基礎としたとした大型空母を作れば良いのでは？」

山本「確かにそうだな…だが予算が降りるかどうかは…」

悠太「予算に関しては大和型をもう2隻作るより安いでしょうから通ると思いますよ、秀太船のスケッチ描けるか？」

秀太「いけるよ、形的に言ってフォレストル風になると思うが」

悠太「問題なしだ、仕事増やしてすまん」

秀太「仕事なんてあるうちが花さ」

山本「そのスケッチが終われば海軍庁に来てくれ」

秀太「了解です、多分明日にはできません」

東條「もう一つあるんだが、ウォーロックの件国民にどう隠す？」

悠太「ガリアの巢にいたネウロイが突然同士討ちを始め、そこにいた大型ネウロイが巢を離脱し、赤城を攻撃これをもって、第501統合戦闘航空団が処理がネウロイの攻撃を喰らった赤城はダメージコントロール出来ずに搭乗員は退艦し沈没、巢はその後弱体化し、それを気に501が攻撃して破壊」なんてどうでしょう？」

山本「その案を採用しよう」

東條「なにか信憑性があるな」

悠太「9割の真実に1割の嘘を混ぜると人間はそれを信じるのです」

東條「確かにそうだな、書記、この部分は別の物に書いてくれ、それを私に渡してくれ」

書記「はい」

内川「ならばこれで会議を終了します」

と言うと全員が立ち上がり軽いお釈をし帰ってゆく

外に出て

ソラ「おかえりー」

と抱きついてくる

悠太「おう、ただいま」

それをそつと頭を撫でる

司令「と言うかマジで何でもできるな君達ち」

悠太「そんなできるわけじゃない」

秀太「嘘つけ、少なくともお前は何でもできるだろ」

悠太「そんなことより、秀太の研究所に行きたいんだが…」

秀太「まあ良いぞ、やってほしいことも少しあるからな」

悠太「まあ多少はいいだろうな…」



凜「ふああああ、眠たい」と欠伸をする

悠太「と言うかお前何にも喋らんかったな」

凜「いやあだつて海軍や陸軍のことわからんし」と言いながらもう一度欠伸をする

司令「研究所なんだが私もついて行っていいか？」

秀太「いいですけど、護衛は？」

司令「君達がいるからよかろう？」

悠太「ええ？と言うか研究所ってどこにあるん？」

秀太「俺のいた所」

悠太「なら土浦か？」

秀太「いえーす、ちょうど扶桑海軍が使わなくなった飛行場があったからこそを空軍の設営隊と共に滑走路をコンクリートにしたり色々した」

悠太「行き方は？」

秀太「府中からC—130で飛ぶ」

悠太「操縦は俺と凜か？」

秀太「すまんがそうだ」

凜「久しぶりにあの子を操縦かー」

秀太「そーういや凜、元は輸送機パイロットだっけ？」

凜「そうそう」

悠太「なら移動するか」

と調布飛行場に移動する

時刻は14時30分ごろ

調布飛行場入り口

??「ここは軍事施設だ、止まれ」

と車の前に立つ

秀太「すまん、こんな者だ」と軍人手帳を見せる

門番「はっ、宛坂殿でしたか」

秀太「すまんな、突然、少し飛びたくてな」

門番「わかりました、お通りください」

と車を格納庫前へと移動する

??「あ、秀太、久しぶりじゃけえ、元気し取ったけ?、何しに来よったよ」

秀太「おお、松田さん久しぶりちよつとあの機体を飛ばすから来たんよ」

松田「おお、あの機体飛ばすんか、目的地はよ」

秀太「土浦だね」

松田「百キロぐらいかね、まあ整備もしてるから問題ないよさ」

秀太「感謝感謝」

と、いい格納庫を開ける

悠太「さて、動かすか」

と言いつつながら凜と共に車から降りる飛行機に近づくと

秀太「せやな」

前部ドアをあげ機体に入り込み

コックピットへの座り計器弄り

悠太「APU補助動力装置スタート」

凜「APU了解」

悠太「秀太、聞こえる？」

秀太「聞こえてるよ」

悠太「トイングプリーズ」

秀太「トイングはどこまで？」

悠太「後部ハッチが格納庫から出来るか出ないかでよろしく」

秀太「了解、トイングスタート」

とゆつくりC-130が動き出す

数分後

悠太《トーイング、ストップ》

秀太《ストップ》

悠太「さて、後部ハッチ開けてくる」

凜「了解」

と言いつックピット座席から立ち上がり

後部ハッチへと向かい

開ける

開けるとそこには既に待機済みの2tハーフトラックがいる

乗車用のスロープを設置して

悠太「土方、ゆっくり進めー」

と言いつつゆっくりと進み

乗り上げ完全に乗り込む

悠太「ストップ」と言い車に近づき

悠太「お兄さん、お嬢ちゃん方は降りてどうぞ、降りたらその階段登ってコックピツ

ト室の中に椅子があるから座って待っててくれ」

と言いつながらタイヤ留めをつけたりしている

司令「わかった」

坂本「ああ」

ソラ「うん」

土方「何か手伝うことは…」

悠太「ないから行っていいぞ」

と言っている

キイイイイイインと甲高い音が鳴りは始める

と後部ハッチからトローイングカーが入ってくる

秀太「エンジンが付いたからトローイング乗せるぞ！」

悠太「ああ！」

秀太「固定はしとくからコックピットにもどれ！」

悠太「わかった」と言いコックピットに向かう

とコックピットに座り

悠太「エンジン回転数問題なし、燃料もなし、よしいつでも行けるな」と言っている

と

コックピット室のドアが開き、

秀太「後部ハッチも問題なしだ」

と言うと機体を動かし滑走路の端に行き

悠太「フラップフル」

凜「フル」

悠太「スロットルフル」

凜「フル」

と言うと加速して

滑走路のちようど真ん中あたりで機体を持ち上がり

悠太「さてこっからは上昇だな、高度3280」

凜「わかってるよ、長距離飛行じゃないからな」

5分後

悠太「ランディングギアダウン」

凜「ダウン」

悠太「フラップフル」

凜「ツーサウザンド」

数分後

悠太「接地、フルブレーキ」

凜「ブレーキ」と機体は少しずつ速度を落とす

その後格納庫前へと動かす

到着

悠太「到着したよ」

C-130から降り

秀太「やあやあ、皆さん我が研究所へようこそ」

と格納庫内へと案内する

そして格納庫の端に3機のユニットが置いてある

悠太「こいつらが練習機達か」

秀太「そうだな」

悠太「なら坂本がT-7、ソラがT-1、そして私がT-2か？」

秀太「いや悠太はこつちを乗ってくれ」と布が掛けてあるユニット発進装置を指さす

悠太「ならT-2は凜だな」

秀太「おつこらしよつと」と言いながら掛けている布を撮る

悠太「おお、あれか？ファントムI-I擬きか、か？」

秀太「御名答」

悠太「性能は？」

と聞くと一枚の紙を渡してくる

最大速度 M1.5

巡航速度 950 km/h

航続距離 約11,000 km (増槽有)

上昇率 200 m/s

武装

手持ち：20 mm多砲身機関砲 1門

胴体下：電探誘導噴進弾4発及び母体電探誘導噴進弾4発

翼下誘導弾パイロン：赤外線誘導噴進弾 4発

翼端：赤外線誘導噴進弾 2発

翼下パイロン：新型5 kg爆弾10発

悠太「本当に劣化ファントムか」

秀太「航続距離に関しては増槽有りでウィッチによって若干上下するが大体1万はあ  
るようにしてる」

悠太「この電探誘導噴進弾はSセミアクティブ・レーダー・ホーミング A R H っで事でもいいのか？」

秀太「AIM-7 っで所だ」

悠太「母体電探誘導噴進弾は？」

秀太「Sセミアクティブ・レーダー・ホーミング A R H だよこの辺の資料は後で渡す」



悠太「なるほどな、資料についてありがたい、そんでこの5kg爆弾は？」

秀太「ああ、それはウィッチ用爆弾だね、弾頭はトリトナールだよ、本来なら陸軍の奴だけど色々口出ししたのさ」

悠太「トリトナールだからトリニトロ<sup>T</sup>ロトル<sup>N</sup>エン<sup>T</sup>80%にアルミニウム粉20%の奴か」

秀太「そそ、この機体はまだテスト機だけど飛んでみてくれ」

悠太「わかってる、全員ユニットの装着完了したか？」と言いながらユニットに乗る坂本「ああ、問題ない」

ソラ「問題ないよー」

凜「なし」

悠太「なら坂本から行け」

と言うと一人ずつ離陸し30分後テスト飛行は終了した

悠太「音速侵入時に速度のずれがあるぽい、それ以外はなし」

秀太「速度のずれか：調査する」

凜「私は問題なし、曲芸飛行まがいなことしたけど」

秀太「機体にヒビとかは入ってないから大丈夫だな、まあエンジンはちゃんと見ないとだけど」

ソラ「ミーティアよりこっちの方が使いやすいー」

秀太「そりやどうも」

坂本「良かったが少し遅くないか？」

秀太「まあ零戦22型に比べると遅いわな」

悠太「いつ完成しそうだ？」

秀太「まあこの感じから言って今週には出来るよ」

悠太「わかった、取り敢えず今日はどうする？」

秀太「おれは残るよ、組み立てたり、スケッチ描かないとだからね」

悠太「ほんと色々すまんな」

秀太「いいよ別、好きでやってるようなもんだしな」

次回

初飛行、新人くん？

お楽しみに

## 22・5話 機体紹介

F-4

F-4ファントム／UF-4ファントム

この項目では、1944年に初飛行した機体について説明していません。現在F4Uと呼称されている機体については「F4U（航空機）」をご覧ください。

用途：マルチロールファイター 多用途戦闘機

設計者：宛坂秀太

製造者：宮菱重工業 戦後は各国の企業によるライセンス生産及びノックダウン生産

運用者：扶桑軍（1944年度）

初飛行：1944年9月29日

生産数：約1億機（戦闘機ストライカー型両方合わせ）

生産開始：1945年2月21日

運用開始：1944年（扶桑空軍第1特殊飛行隊ファルコンウィッチーズ）1945

年扶桑陸海軍

運用状況：現役（2010年現在）

コスト：1000万円（ストライカーユニット型）7000万円（戦闘機型）

仕様

F-4初期型

性能

最大速度：M1.7

巡航速度：950km/h

航続距離：約11,000km（増槽有り）

上昇率：200m/s

基本武装（F-4 初期型）

固定、所持武装 20mm多砲身機関砲 1門か各種ウィッチ次第

搭載兵装

胴体下：電探誘導ミサイル4発及び母体電探誘導噴進弾4発

翼下誘導弾。パイロン：赤外線誘導ミサイル4発

翼端：赤外線誘導ミサイル2発

翼下パイロン：ストライカー型は5kg爆弾10発 通常戦闘機型は1000lb爆

## 弾4発

## 各兵装紹介

## 電探誘導噴進弾

アクティブレーダー誘導ミサイル

制式符号 AAM-1A

ミサイル直径：12cm

ミサイル全長：1.5m

ミサイル全幅：0.94m

ミサイル重量：95kg

弾頭：徹甲榴弾5kg

射程：50-100km

推進方式：固体燃料

飛翔速度：マッハ1.5

誘導方式：(途中)レーダー誘導 (末期)赤外線誘導

コスト：200万(1945年)

赤外線誘導噴進弾

制式符号 AAM-2

ミサイル直径：10cm

ミサイル全長：1・50 m

ミサイル全幅0・40 m

ミサイル重量50 kg

弾頭：榴弾4・5 kg

射程：500 m | 500 m

推進方式：固体燃料

飛翔速度：マッハ1・5

誘導方式：対コア誘導

コスト：70万円

セミアクティブレーダー誘導ミサイル  
母体電探誘導噴進弾

制式符号 AAM-3

ミサイル直径：15 cm

ミサイル全長：2 m

ミサイル全幅：1 m

ミサイル重量：110 kg

弾頭：榴弾10 kg

射程：誘導レーダー次第

推進方式：固形燃料

飛翔速度：マツハ2

誘導方式：レーザー誘導

コスト：100万

ちなみに悠太、凜が最初にもらったのAAM-00

AAM-1の基礎となったミサイル

AAM-00は世界最初の空対空ミサイルとして一部の界限で有名である

運用国

扶桑皇国

リベリオン合衆国

ブリタニア連邦

ガリア共和国

オラーシヤ帝国／連邦

帝政カールスラント／カールスラント連邦共和国

ロマーニヤ公国

ヴェネツィア公国／イタル共和国

スオムス

主要国全てで運用しており、世界一著名な戦闘機と言われる事もある

一部機体は武装を下され民間気象観測機として南極大陸等で運用されて居る

1960年にはオラシーヤ、扶桑軍では主力を外れ、偵察や海軍訓練機として運用されている

2010年現在、リベリオン合衆国海軍、ブリアニア海軍、ガリア海軍、カールスラント共和国、統一ヴェネツィア共和国などの軍が未だ運用している、F-4艦上機としての汎用性の高さゆえ、各国での置き換えが機が未だ少ない

置き換えに成功したのはオラシーヤ連邦、MiG-29K、扶桑でのF/A-15シーイーグルのみであり、F/A-15は高価な為、大国でしか購入、運用されておらず、それに対してMiG-29KはF/A-15よりも安価であり、アフリカ諸国に人氣であるが性能が低いと言われている「要検証」

世界で最も量産されたジェットストライカー・ジェット戦闘機

F-4ファントムは世界で最も量産された戦闘機と言える、世界でライセンス生産も含めれば約1億機と破格の生産数を出しているの、1937年から運用が始まったカールスラントのメッサールフ109ですら5万機、対戦中期の1942年運用開始のノースイベリオンP-51で2万機と10万機を超えていないため大ベストセラーも言える



## 23話 初飛行と新人くん？

23話 初飛行と新人くん？

横須賀基地 早朝

「ついたわー」と3人の少女が下船する

サツチャー「着いた」

エミリー「うん」

悠太「おう、お前ら久しぶり」と凜と共に歩いてくる

アバ「あ、悠太さん凜さんお久しぶりです！」

サツチャー「久しぶりです」

エミリー「お久しぶり」

凜「うんうん元気やね」

悠太「寮に行くよ」

アバ「わかったわ」

サツチャー「はい」

エミリー「うん！」

アバ「そういえばソラは？」

悠太「あいつなら今秀太が訓練させてるよ」

アバ「訓練？」

悠太「いやな、昨日新型機の受領でさ、それで今乗ってるんだよね」

アバ「また新型機……」

悠太「まあミーティアと違って機動性も段違いにいいよ、そもそもミーティアは繋ぎとしての運用だからユニット自体はブリタニアに送り返す予定だし」

アバ「どんな機体なのかしら」

悠太「そいつは後での楽しみさ」

サツチャー「気になる〜」

エミリー「うん」

悠太「ここが部屋だよ。4人一人部屋だからソラも一緒だ」とソラたちの部屋の前へ立つ

アバ「悠太さん達は？」

悠太「凜も俺はこの前の部屋だよ、一樣、司令室も兼ねてるよ」

アバ「わかったわ」

悠太「なら荷物をばらして、一階の食堂に集まってくれ、ユニットの話と試験飛行が

ある」

「「はっ」」

食堂前

?? 「あのお…」とシヨタボで声をかけられる

悠太 「ん? どなた?」

?? 「第31飛行隊所属霧島きりしま 疾風軍曹です! 本日着任と言われたのですが…」

悠太 「?…凜、そんな資料見たか?」

凜 「うんによ、見てねえ、見たら言ってる」

悠太 「だよな…ちよつと待つててくれるか?」

疾風 「はい!」

悠太 「アバ達も待たせるかもだから凜居てくれ」と言う自室と司令室に向かう最中に

?? 「お、悠太さんじゃないかどうした?」

悠太 「ああ、玲司さん、なんか新しい子が今着任してさ、その書類を見てないから探

しに行くところ」

玲司 「そうかい、あんたも忙しそうな」

悠太 「多忙だよ」

と基地司令の合田ごうだ 玲司れいじにあつた

司令室のドアを開け

机を見ると机のど真ん中に「新規着任

霧島キリシマ

疾風軍曹ハヤテ

」と書かれた書類が置いてあ

る

悠太「(絶対今玲司が置いて行つただろ)」

戻り

悠太「あつたよ」

凜「お、どこにあつた?」

悠太「今さっき置かれたんだと思う」

凜「うわ、めんどいことやるんなあ…」

悠太「やめてほしいなあ」

疾風「えつと…」

悠太「霧島疾風軍曹、貴官を本日より第1特殊航空隊、通称ファルコンウィッチーズ

に所属とする!」

疾風「はい!」

悠太「そーいや君はウィザードなんだね?」

疾風「はいそうですけど…」

悠太「ウィザードってどのぐらい居るの？」

疾風「私の師匠曰く武装全体に10人程度しか居ないみたいです、世界的に見れば少ないみたいですけどね」

悠太「うーむ、だから前線でも見ないわけか」

疾風「ウィザードだとしても航空ウィザードに成れる可能性は適正したいですからね」

とそんなことを喋っていると後ろから

アバ「悠太さんその人は？」

アバ一向がやって来る

悠太「おう、お前らばらし終わったか」

アバ「うん」

エミリー「はい」

サツチャー「はい」

悠太「この子は今日新しく配属された子だよ」

アバ「ふーん、名前は？」

疾風「霧島疾風軍曹です、よろしくお願いします」と

アバ「よろしくね」と握手する

疾風「はい！」

悠太「疾風は空母着艦は？」

疾風「出来ますんなら得意です！」

悠太「そいつは良かった」

アバ「私たちも一樣できるわよ」

悠太「あれ？出来るの？」

アバ「こつちに来る時に訓練したもの、ねえ？」

サツチャー「やったよ」

エミリー「うん」

悠太「とりあえず椅子に座ろうか」

と座らせ

悠太「新型機についての講習をするよ」

「「はい」」

と機体の速度やら対G負荷率などを説明する

説明終わり

悠太「なら今からは実機飛行だな」

「はい」

悠太「すまん凜、凜のファントム借りていいか？」

凜「いいけどなんで？」

悠太「俺のファントムを疾風に貸そうと思ってるな」

凜「なるほどなら私は自分の機体で行くわ」

ハンガーに行く

ソラ「疲れたー」とその辺に転がっている

悠太「おっす」

秀太「おう、こいつはスジがいいな」

悠太「だろうな」

秀太「後ろの男の子は？」

悠太「今日から配属になった子だよ」

秀太「聞いてないけど？」

悠太「安心しろ俺も聞いてない」

秀太「うんまあ昔からそうだしいいか…そいつの分のユニットはないけど…」

悠太「俺のユニットを貸して俺が凜から借りる事にした」

秀太「なるほど、よかった、まだお前用にエンジン弄ってなくて」

悠太「あれ昔怒られた記憶しかねえんだよなあ」

秀太「まあエンジンの寿命を縮める行為だから仕方ないさ、だけどあれのおかげで何度も助かったろ？」

悠太「だな、取り敢えず疾風、こいつは宛坂秀太、一様我々の特別整備員だ」

疾風「霧島疾風です、よろしくお願いします」と頭を下げる

秀太「よろしくな」と疾風の頭をぼんぼんと触る

悠太「ならさ秀太、疾風の初等教育頼んで良いか？さつきアバ達と一緒にフアントムの説明したけど多分わかってないからさ」

秀太「了解ちゃん、ならこれ」と言い一つのクリップボードを渡して来る

悠太「ん？これは」と言い受け取り捲って確認する

悠太「なるほどソラの能力とかの書類か」

秀太「そう言う書類は作るの得意だからな、ユニットは俺のを使うからお前自分のフアントム使えよ？」

悠太「まあ昔頃から書類仕事手伝わせたしな、お前のユニット使うのな」

凜「悠太、アバ達の発進準備できたよ」と緑かった服を着て言う

悠太「すまん今行く、ならこいつを頼んだ」

秀太「トップエースに叩き上げてやる初期段階はしてやるよ、あとはお前が引き出してやれ」



悠太「んなむちやな」と言いユニットを履く

ユニットを履き、ハンガーを出る

悠太《こちらハヤブサー番、これより訓練飛行をする離陸許可をくれ》

管制《こちら横須賀管制塔、武装は？》

悠太《一様フル武装だ》

管制塔《了解、ハヤブサー番に続き他の機体も離陸を許可する》

悠太《了解、全機離陸開始》と言うと悠太、凜、ソラ、アバ、エミリー、サツチャーの順で離陸する

悠太《取り敢えず全機高度1万まで行こうか》

登り終え、訓練を開始しようとした瞬間

管制《こちら管制塔、ハヤブサー聞こえるか？》

悠太《こちらハヤブサー、1番聞こえる、どうした？》

管制《大陸上空に大型ネウロイ多数確認、急行可能か？》

悠太《大陸上空といっても場所は？》

管制《浦<sup>ウラジノストク</sup>塩付近だ、ルートは真つ直ぐ帝都に向けて一直線のコース》

悠太《対応可能だ》

管制《了解、以降の誘導は警戒機が行う、コールサインはミミズク6》

悠太《ハヤブサー了解》「全機聞いたか？」

凜「コピ<sup>了解</sup>ー」

ソラ「うん」

アバ「了解よ」

エミリー「わかったわ」

サツチャー「わかったよー」

悠太「取り敢えず全員電熱器の電源付けろ、冷えるぞ」と言うと言うと皆が自分の服を少しじり電熱器をの電源をオンにする

凜「あつたけえ」

ソラ「あつたかい…」

悠太「ないと死ぬからな、じゃ全機行くぞ」と言うと言うとA/Bを炊き、急行する  
約15分後

悠太「列島を横断したな、そろそろ海が見えて来るはず」

凜「海が見えた、ならそろそろだね」

??《こちらミミズク6、ハヤブサー聞こえるか?》

右の雲の中から飛龍の上部に円形のレーダーを搭載した警戒機が顔を出す

悠太《こちらハヤブサ1聞こえるどうぞ》

木菟《<sup>ミミズク</sup>ネウロイは今、大陸を抜け扶桑海に出た、そこからの直線距離は約300km、高度は約1万1千メートル、進入機の数5から10》

悠太《了解》

遅ればせながら今回の武装を紹介しよう

武装

所持武装 20mm多砲身機関砲 1門

胴体下：母体電探誘導噴進弾4発 AAM-3

翼下：誘導弾パイロン：赤外線誘導ミサイル4発 AAM-2

翼端：赤外線誘導ミサイル2発 AAM-2

AAM-3 計24発

AAM-2 計36発

と言う装備になっている

悠太《木菟6、ネウロイの速度は？》

木菟《すまない、そこまではわからないんだ》

悠太《了解》「凜わかるか？」

凜「んー範囲外だからわからんかも」と言い少し目を瞑る

数秒間目を瞑り

凜「ん？ 反応的に熊TU95に似てる、速度も750kmだし」

悠太「熊か？ なら最初はAAM-3でアウトレンジ、上昇して敵上方にいたらAAM-2を使ってコアの搜索、見つけ次第機関砲でキルだな、とりあえず1万2千メートルまで登るぞ」といい緩やかに上昇を開始する

6分後

悠太「凜、敵機との距離は？」

凜「もう100km切ったよ」

悠太「2凜, 3ソラ, 4アバ, 5エミリー, 6サッチャー 番機、各目標2発を目安とし打ち方用意」

「了解」

数秒後

悠太「射程内まで10, 9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1今、撃て！」

と言うとAAM-3がすこし胴体から離れブースターを起動しネウロイに向かって飛んでゆく

悠太「フォーメーションデルタ」

という綺麗なデルタ隊形になり

緩やかな角度で上昇する

ミサイルはというと見事に胴体先に命中し、不快な金切り声を上げ3機は粉々になる  
凜「ネウロイ3機撃墜」

悠太「全機、速度を500まで落として反転」

「了解」

と言うと綺麗なデルタ形を保ちながら旋回をする

少し進んでいるとネウロイが約1000m下を高速で飛翔する

悠太「目標視認、本当にベアだ、ケツには相手のケツには付く全機、ブレイクネウロイを落としてやれ」

「はい」と言うところら悠太以外が降下を開始して、ミサイルを放つ

ソラ「コアが見える？」

悠太「ソラ、今なんて？」と近づくと

ソラ「コアが見えるの」

悠太「ならどの辺だ？」

ソラ「あのあたり」と機体の中心部を指さす

悠太「厄介の位置だな、全機聞いてたか？コアは機体の中心部だ、一撃離脱でミサイルからのガンでやれ」

「了解」

悠太「ソラ行くぞ、着いてこい」とダイブする

ほぼ音速になる瞬間にミサイルを放ち、数秒後に機関砲撃つ、ミサイルが命中した瞬間に外殻が削れコアが見えた瞬間に機関砲が着弾して弾ける

悠太「ターゲットキル」

と言うともう一度上昇する

ネウロイの後方1kmを追いかけるように飛び

悠太「敵機は残り3機か、全員武装は？」

凧「AAM-2が4発AAM-3が2発」

アバ「AAM-2が1発、AAM-3が同じく2発だわ」

エミリー「同じく1発に2発」

サツチャー「3発に2発です」

ソラ「4発に2発」

悠太「おれが5発の4発だから行くか、久しぶりに凧行くぞ」

凧「あいよ」

と言うと凧は悠太の後方左5m程度に着き

凧「こんな位置に着くの久しぶりだね」

悠太「だな」

凜「やり方は？」

悠太「さつきと対して変わらん」

凜「コピー」

と言うと両方とも上昇しネウロイの上方について

悠太「アタック」と言うどどちらも降下してミサイルを撃ち、数秒後に機関砲も撃つ  
これで2機撃墜

悠太「ラストだな」と言いながら上昇しミサイルを放ち、着弾と同時に機関砲を打ち撃墜する

凜「全機撃墜、レーダーに感なし、終わり」

悠太《こちらハヤブサ、全機撃墜》

管制《了解、帰投せよ、勲章もんだな》

悠太《勲章なんて要らん、休みをくれ》「全機帰還する」と基地方向に飛行を開始する  
帰投 格納庫

秀太「おう、おかえり、大変そうだな」

悠太「はあ、訓練しようとしたら敵機の迎撃することになるとはおもわねえよ」

秀太「お前らどうだった？扱えたか？」

ソラ「うん!」

アバ「まあまあね」

サツチャー「こんな機体が配備されたら作戦の幅が広がるんだろうねえ」

エミリー「なんかサツチャーが頭良さそうなこと言ってる」

サツチャー「少なくとも貴女よりは頭は良いわよ」

秀太「なるほどな」

悠太「全員飯食いにでも行くか?」

凜「お?飯?なら私」

悠太「どうせ寿司だろ?」

凜「当たり前じゃん」

悠太「はあ:なんかソラたち食いたいのある?」

ソラ「んー特に無いかな」

アバ「扶桑らしいものかしら?」

エミリー「えーつとオスシだっけ?あれ食べてみたい」

サツチャー「生魚のあれね、美味しいのかしら?」

悠太「なら基地近くの寿司屋にでも行くか、なら秀太、疾風含めた全員、風呂やら着替えてこい、行くのは夕方6時に玄関な?」



秀太「あ？言つてええんか？」

悠太「いこうや、どうせ今から忙しくなるだろうし」

秀太「せやな」

悠太「なら解散！」

「はい」

18:00 玄関

悠太「揃ったか？」

凜「揃ったね」

悠太「さて、行くぞ」とぞろぞろ移動を始める

基地付近の寿司屋

ガラガラとドアを開け

悠太「大将、今やってる？」

大将「おや、悠太さんに凜さんじゃ無いかどうした？もう少しで締めるところだよ」

悠太「ならよかった、うちの新しい部隊の子がね」

大将「外国人さん？」

悠太「だよ」

大将「入りな、扶桑のうまい寿司を食わせてやらないとな」

悠太「なら」と言いながら入り、

秀太を一番奥に座らせ、疾風、エミリー、サッチャー、アバ、ソラ、凜、悠太の順で

座る

秀太「知り合い？」

悠太「んー司令の行きつけで何回か来てねそれでよ」

大将「よく来てるからもう常連よ」

悠太「そりやどうも」

大将「ネタはどうする？」

悠太「取り敢えずおまかせで」

大将「あいよ」と言うのと握り始め、順々に全員の前へ遠く

悠太「食べようか」と言うのと軽く手を合わせて食べ始める

皆が口を揃えて「美味しい」と言いパクパク食べ終わる

全員が食べ終わり

お会計を済ます

悠太「また、食べに来るわ」

大将「いつでも待ってるよ」

と出てゆく  
次回 サトゥルヌスのお届け物

## 24話 サトウルヌス（クリスマス）のお届け物

24話 サトウルヌスのお届け物

12月20日

ガチャとドアを開け管制室に入る

悠太「おう、山内いるか？」

山内「はい？お呼びですか？」

悠太「うちの子が帰還するとき第一会議室に来てくれって言っておいてくれ、今から会議なもんでな」

山内「第一会議室ですね？了解ですお任せください」

悠太「ありがとう」と言うと管制室を出る

会議室

ファルコンウィチーズのメンバーとその他空軍参謀やらが資料を見ている

参謀「先日502部隊基地が甚大な被害を受けたためその物資支援を行います、その輸送任務を行うのは独立第1特殊飛行隊が行います、悠太さん凛さんは変装してもらいます、このまんまの階級だと色々ありますからね」

悠太「もし行くとして航空機関士、航空航法が居ないと何だがなあ」  
と言うとドアが開き

秀太「お呼びかな？」

凜「なら秀太が航空機関士で航空航法は？」

疾風「一樣できます」

秀太「一応叩き込んだからなあ」

悠太「はあ：ならメンバーは護衛がソラ、アバ、サッチャー、エミリーで残りが輸送機だな」

参謀「機体はC-130DJ、飛行時間は約13時間、百里基地発、502基地着、物資を下ろした後にムルマンスクに向かいムルマンスク基地にて給油帰還でお願いします」

凜「うわあなっがないなあ」

悠太「ルートは？」

参謀「百里を離陸した後は一度給油をしてサンクトペテルブルクに向かって進路を取つていい、輸送荷物の重さは15tだ、このためにわざわざ各国からユニットの部品を貰ったんだ」

悠太「理解したよ、なら出発はオラーシャ時間の23日23時だね」

ソラ「オラーシャ時間ってことはえつと…」

凜「23日の17時だね」

悠太「取り敢えず解散かな、ソラ達、明日は休め良いな？」

ソラ「うん！」

参謀「では解散」

と言うと全員が立ち上がり部屋を出てゆく

1944年12月23日16時39分55秒

悠太「五、四、三、二、一、作戦開始」と言うとき、機体、ストライカーに乗り込

む

悠太「こちらC-130DJソアリ、トナカイバ離陸準備出来たか？」

アバ「トナカイ一番、離陸準備出来たわ」

悠太「全機続け」と言うとき、悠太の乗っているC-130DJが離陸を開始する

悠太「全機離陸完了後は高度1万メートルまで登るぞ」

「了「コピ解ー」」

扶桑海上空高度1万メートル

C-130DJを中心とし菱形に並んで飛んでいる

先方 アバ

後方 ソラ

左方 サツチャー

右方 エミリー

と見事な菱形をし速度約645kmという高速で飛んでいる

悠太 《そろそろオラーシャ上空に侵入する、レーダー見とけよ?》

アバ 《わかってるわ》

秀太 「オラーシャ空軍よりこのあと荒れるそうだが、方位を少しずらせとのこと」  
疾風 「ずらすとしたら若干ババロフスク方向です」

悠太 「わかった」 《トナカイ番、方位を少しババロフスク方向に寄せてくれ》

アバ 《了解、荒れるのかしら?》

悠太 《その通り、一様全機電熱線の電源付けとけよ、保護魔法で耐えきれなくなるからな》

《コペー》

凜 「お前ら、コーヒーだよ」

とコップにコーヒーを入れる

凜 そういや15t分の荷物って言うけど入ってるのは物資は10t分しかないのよ

ねえ」

悠太「だね、5分は我々のユニットの分だし」

一度給油を経て、12時間後 到着数十分前

《こちらオラーシャ軍、貴機の所属を教えろ》

宛坂《こちら、扶桑空軍、502FWFに物資を届けにきた》

《了解した、このまま緩降下で502基地に迎え、残念ながら502基地は前日のネウロイの襲撃にて管制塔が損傷したため、誘導は再度ここに無線をくれ》

宛坂《了解》「聞いてたか？」

悠太「当たり前、というか襲撃を受け損傷つてことは防空に出てる機体がない可能性があるから、トナカイは空中待機だな」《トナカイ全機、空中待機、もしネウロイを発見し自体二手に分かれ攻撃開始せよ》

《コピー》

凜「さて変装というよりか、まあ始めるか、よろしくお願いします、安田悠太准尉、宛坂秀太曹長」

悠太「よろしくな、飯田凜伍長」

秀太「よろしくなちよび髭」



凜「ンダとごら」

疾風「よろしくお願いします」

《もうそろそろ着陸しても構わない、滑走路は開けてもらったから着陸して良いぞ》

秀太《了解》

と言うと悠太が真剣な顔つきになり着陸を開始する

基地内

??「え？何あの機体」

と水色のセーターを着た少女が言う

????「何でしょう？私は聞いていませんけど…初めて見る機体ですしなにか国籍識別標

は扶桑軍のものに似ているけど何か違いますし」

と黒い服を着た金髪の少女

???「私も見たことないンダナ」

と水色の服を来た比較的高身長少女が発言する

????「私も見たことないわ…」

と同じような黒を基調とした服を着た少女が言う

????「あ、着陸しそうですね、着陸したらパイロットに聞きにいきましょうか」

コックピット

悠太「あのさあ、運が悪いのか着陸時にエイラみたいなのが見えたんだが気のせいかな？」

凜「同じく……」

と着陸する

悠太「もしかししたら階級明かすかもなあ」

と言いながら計器をいじる

凜「せやなあ」

と同様に計器をいじる

悠太「さて荷下ろししますか」と耳に無線をつけ、コックピットを降りて後部ハッチを開け、荷下ろしの準備をしていると

黒い服を着た少女に話しかけられる

???? 「あの、どちら様でしょうか？」

悠太「はっ、アレクサンドラ・I・ポクルイーシキン大尉殿でしょうか？」

サーシャ「はい、ですけど」

悠太「扶桑空軍所属安田悠太准尉であります、本日は扶桑軍より物資の輸送に来ました」

サーシャ「えつと聞いてないんですよ？」

悠太「え？あ？えつと12時頃にオラーシャ軍が通達したと…（は？うせやろ何で知らないんだよ）」

???「サーシャ大尉どうしたんだナ？」と水色の服を着た高身長少女が後部ハッチからこちらを覗く

???「あれ？悠太大佐お久しぶりなんだナ」

とそれに続き

????「お久しぶりです、悠太さん」頭を下げ言う

サーシャ「えつとお二人は知り合いで？」

エイラ「501の時の戦友なんだナ」

サーニヤ「そうよ」

サーシャ「え？エイラさんの言った階級と本人の階級が違うのは…」

悠太「あー待ってくれ、ややこしくなるから後で説明する、の前に荷下ろしだ」と言う  
うと機内に搭載してある車両を使い荷物を下ろしてゆく

1時間後

悠太《こちらソリ、トナカイ全機へ、帰還せよ》

アバ《了解よ》

悠太「独立第1特殊飛行隊の隊員集まれ」

「はっ」

悠太「秀太、機体が帰って来るから整備準備、凜は軽食と仮眠の準備しとけ」と言っている合間にも荷下ろしは続いている

秀太「あいよ」

凜「あいあいさー」

疾風「えつと僕は…」

悠太「疾風は秀太の手伝い」

疾風「はい！」お敬礼をし移動する

悠太も移動して一度コックピット内に戻り無線機やライトを取りコックピットを出て滑走に立ち空を見上げる

エイラ「サボってる奴がいるンダナ」

サーニヤ「ダメよエイラ、悠太さんはすることがあるんだらうから…」  
と聞きながら

胸ポツケからタバコを取り出し啜える

サーニヤ「悠太さん何してらんですか？」

悠太「出迎えをな」

アバ《こちらトナカイ、もうすぐかしら？》

悠太《こちらソリ、その位置なら降下しながら左旋回すれば見える》

5分後

アバ《見えたわ》

悠太《ならパスして基地を半周して着陸を開始しろ》

と言つて数分後レシプロユニットとは違う甲高い音とともに基地上空を一系列に並び飛行する

エイラ「うわ何ダ！」

悠太《そのまんま旋回して正面から入れ、着陸後は輸送機の後ろに止めて後は秀太達がいる》

アバ《了解》

????「今のは何かしらね？」と悠太と対して身長の変わらない女性が悠太の隣に立つ

悠太「強いていうならば私の教え子達ですかね」《そのままゆっくりな》  
着陸し

悠太《ナイスランディング、機内で軽食でも食え》

悠太「エディタールロスマン曹長：ですかね？何でしょうね私は今から拷問でもされるんでしょうか？されるなら震えが止まりませんかね」

と言いながら啞えていたタバコに火をつけ吹かす

ロスマン「さあわからないわ、場合によってはされるんじや無いかしら？」  
と言うと輸送機に歩き出す

それにエイラ、サーニヤ、ロスマンは追従してくる

車両行き来しているが後部ハッチから入る

ロスマン「入っても良いかしら？」

悠太「別に入ってもいいけど触らないでくれよな？」

ロスマン「ええ、もちろんよ」

悠太がパンパンと手を叩く

悠太「トカナイは食いながで良いがこれからの予定を軽く話す、明日昼頃に此処を離れてムルマンに向かう、時間は1時間半程度だね、着いたら輸送艦から燃料をもらい本土に帰還だ、これがもし何もなければ場合な？もし何かあった場合はここで年を越す予定になつてる、こんな極地で年越しは真つ平御免だがこれな仕事ならクソ高い給料分は働く」と言う少し笑いが起きる

悠太「もし何かあった場合は基地毎部隊を吸収しろと命令が来てる、空軍ではなく連合軍からな司令が俺で副司令が凜だそうだ」

ロスマン「何ですって！」と鬼の顔をして怒鳴ってくる

悠太「ロスマンさん、待ってくれ、その辺の細かい情報共有は後ですからこつちの話を見せてくれ」

ロスマン「ごめんなさいね…」

悠太「秀太、ユニットの整備は？」

秀太「全員分のユニットの整備出来てるよ、いつでも行けるよ」

悠太「よろしい、2機は出せる準備はしてくれ、あと全員やること終わったら機内でのんびりして良い、その時は後部ハッチ閉めるよ？寒いからな」

「はい」

悠太「ロスマン軍曹後でて良いから基地司令のグンドユラ・ラル少佐に合わせてくれないか？」

ロスマン「ええ、良いですよ」

荷下ろしが終わり3時ごろ

悠太「ならそろそろ行くか」と何本目かのタバコをポケット灰皿に入れ言う

ロスマン「はい」と悠太はついてゆく

凧「狼に会いに行こうかね」と紙袋を持った凧が来る

悠太「ソラ達は？」

凧「機内でココア飲みながら秀太達とトランプしてるよ」

悠太「で、お前は？」

凜「もしかしたら基地副司令になるかもだから現行の司令官の顔を見にね？」

悠太「そんなことするって偉いなあ（某）」

凜「でしょ？偉いっしょ？」

悠太「で？その紙袋の中は？」

凜「上着だよ」

悠太「一応着ておくか」と言うと紙服から上着とを取り出し着る

凜「一樣現行の階級なんだね」

悠太「みたいだ」と黄色に白星<sup>中</sup>3つ<sup>将</sup>の階級章を見て言う

と歩いていると

ロスマン「ここです」とドアの前へ立つ

とこちらへ振り向き「へ？」と言う顔をする

悠太「どうも」と上着のボタンをつけながら言う

コンコンコン

ロスマン「ロスマンです、輸送機のパイロット二人をつけてきました」とドアを開け

る

司令室の中には窓から外を眺めている



女性がいる

ラル「所属、名前、階級は？」

悠太「扶桑空軍”独立第1特殊飛行隊”安田悠太中将」

凜「同部隊所属安田凜少将」

ラル「中将、少将殿が何様でこんな前線基地に？」

悠太「さあ、輸送機のパイロットとして派遣されただけさ」

ラル「そうか…」

と言つてるとドアが勢い良く開き

サーシャ「ネウロイが！」

ラル「何だと！」

悠太「凜、仕事が入ってきたらしいがどうする？」

凜「クリスマスはホントついてないね」

悠太「だな」といいポケットから無線機を取り出し耳に取り付け言う

悠太《ネウロイが来た様だ準備出来るか？》

秀太《当たり前だ、何機準備だ？》

悠太《2機》

秀太《了解、出来てるから何時でも》

悠太《あいよ》

次回

クリスマスは例年通り付いてないお二人

## 25話 クリスマスは例年通り付いてないお二人

25話 クリスマスは例年通り付いてないお二人

悠太「我々がてるかな」

ラル「は？」

凜「仕事だな」

悠太「行くぞ」と出てゆく

ラル「サーシャ、彼らについて調べれるか？」

サーシャ「え？多分上に聞けば出てくると思いますけど…」

ラル「よろしく」

サーシャ「…」

悠太「秀太」

秀太「いつでも」

と言うと二人ともユニットをはく

悠太「ハヤブサー番出る」

凜「ハヤブサ2番出るよ」

離陸し

ネウロイまで10km地点

悠太「レーダーインサイト、数4、AIM-11A、2発撃方用意」

凜「ネウロイロック、撃方よし」

悠太「フォックスワン」

凜「発ビースト射レル」

と言うと各機から2発計4発のミサイルが放たれる

数分後

悠太「4フォース機プラツ破シュ壊」

悠太《こちらファルコンウィッチーズネウロイ4機撃墜、繰り返す4機撃墜》

ラル《さすが異世界の元住人だ》

悠太《はあ：上からですか？》

ラル《色々とすまないな》

悠太《なんですか？この後前の世界の話でもしますか？》

ラル《今はしなくて良い》

悠太《わかりましたよ、少佐殿》

悠太「帰ろう」

帰還

悠太「はあ眠い」と水筒で温かいお茶を飲む

とC—130の貨物室でと言っている

エイラ「ラル隊長が呼んでるんだナ」

悠太「はあわかった」

隊長室

悠太「失礼する」

ラル「本当に中将に少将だったんだなすまない」

悠太「まあ疑われるだろうな、ああ、あと持ってきた物資についてはアウロラ・E・ユ―テイライネン大尉の部隊にもあるから配分はそちらで、部品については買った物ですけど壊さないで使ってくださいよ？」

サーシャ「面目ないです…」

ラル「少し質問があるんだが」

悠太「なんです？」

ラル「なんで三人とも安田なのだ？」

悠太「前の世界から来たってのも知ってるし話で良いか」私と凛は夫婦ですかね、ソラに関しては養子、ソラに関してはあんまり探らないでくれ」

ラル「夫婦ってのはこっちの世界に来る前からって事なのか？」

悠太「そうだな、と言うか前の世界の話をするか、取り敢えずはこのメンバーだけだにな」と話し始める

話が終わり

悠太「あまそんなところだ」

と言っていると耳につけてる無線が

秀太《聞こえるか？》

悠太《聞こえるけど？》

秀太《ヨーロッパ方面総監部より、〃502基地、及び同部隊の整備等にあたれ、敵襲があつた場合迎撃せよ〃との事だ》

悠太《扶桑軍本部からは？》

秀太《上からは戦線維持に必要なため、滞在しろとの事だ、だけど明後日には帰還せよだ》

悠太《わかった》「とりあえずは明後日の早朝帰ることになった、その間にユニットの整備、基地の整備をすることみたいだ」

ラル「サーシャ、明日中にユニットの整備できるか？」

サーシャ「えっと…厳しいかと」

とドアが開き

秀太「俺が手伝うさ」と秀太が入ってくる

悠太「まあ部品組み立てぐらいなら俺もできるしやるよ」

サーシャ「御三方がいるならできると思います」

コンコンコン

??「夕食の時間です」

ラル「入れ」

??「隊長、夕食の時間です」

ラル「む、もうそんな時間か」

悠太「下原定子少尉かな？」

下原「え？はいそうですけど、えっと…」

悠太「安田悠太だ短い間だけよろしく」

凜「安田凜だよ、よろしくねー」

秀太「宛坂秀太だよ、よろしく」

下原「え、はい？よろしくです」

ラル「下原、食事は何人分ある？」

下原「隊長に言われた通り16人分作りましたけど……」

悠太「え？」

ラル「食事がある、食っていくか？」

悠太「用意したなら食べるしかないだろう……」

ラル「ならば行こう、紹介も兼ねてな」

食堂

ラル「全員いるか？」

ロスマン「居ます」

ラル「入れ」

と言うとファルコンウィッチーズの面々が入る

悠太「扶桑空軍、独立第1特殊飛行隊ファルコンウィッチーズ隊長、安田悠太中将だ  
けど呼びびは悠太でいい、まあなんやかんやで明後日まで駐留することになった、からよ  
ろしく」

ラル「と言うことだ、自己紹介に関しては各自でやれ、食おう」

次回 食事会



## 26話 食事会？

26話 食事会？

ラル「着席したな？では」と立ち上がり

ラル「ファルコンウイッチーズの輸送に感謝し<sup>乾</sup>ボースツ<sup>杯</sup>」

クルピンスキー、ロスマン「<sup>乾</sup>ボースツ<sup>杯</sup>」

サーニヤ、サーシヤ「<sup>乾</sup>ナズダローヴィエ<sup>杯</sup>

エイラ、ニパ「<sup>乾</sup>キツピス<sup>杯</sup>」

菅野、下原、ひかり「乾杯」

ジヨゼ「<sup>乾</sup>サンテ<sup>杯</sup>」

ソラ アバ サツチャー エミリー「<sup>乾</sup>チアース<sup>杯</sup>」

悠太、凜、秀太「乾杯」

飲み始める、といっても飲んでいるものは大体がジュースである

悠太が一口食べる

下原「えつとお口に合いませんでした？」

悠太「いやその逆だ、美味しい」

と食べ終わりコーヒーを飲んでいると

菅野「孝美はどうなんだ！」と荒口調で言ってくる

悠太「雁淵孝美か：彼女ならとあるウイツチの治癒魔法で大分回復したがまだ現役復帰には程遠いだろうな、主に精神的な面だな」

ひかり「よかった…」

菅野「よかったじゃねえよ、元はと言えばお前が…」

悠太「やめろ」

菅野「たが！」

悠太「言い方は悪いが、それが原因で自害するバカもいる、少なくとも友人にいたさ…」

菅野「…」

悠太「少し外の空気吸ってする」

と立ち上がり出てゆく

格納庫外に白い煙が立っている

悠太は格納庫の扉前に座りタバコを吸っている

悠太「(内田…お前の分まで生きてなくてすまん…)」と星空を見る

凜「内田さんの事でも思い出してるの？」と隣に座る

悠太「まあな……」

凜「内田さんと仲良かったもんね……」

悠太「ほんとにいい相棒だったよ内田は……」

凜「内田さんが死んだ時もこんな時期だったよね……」

悠太「だな、11月21日だ」

凜「あのパイロットを憎んでないの？」

悠太「憎んではいるけど……もう諦めるさ……国を守るのが軍人である勤めだ、致し方ないとはいえないがそれが仕事だ」

とタバコを蒸す

と

エイラ「親二人が外でタバコを吸ってるのとはどうかと思うンダナ」とエイラ、サーニヤ、ソラが来る

悠太「ああ、すまんすまん」と言いながらポケット灰皿に箱を捻じ込む

エイラ「そういう問題じゃないと思うゾ」

悠太「秀太やエイラたちが見ててくれるだろ？」

サーニヤ「雁淵孝美さんを治したウィッチは……」

悠太「もちろん、宮藤だよ」

サーニヤ「ですよね」

エイラ「あと階級ダナ」

悠太「それは、扶桑空軍ができたのは知ってるよな？」

サーニヤ「ええ、新聞に書いてありました」

エイラ「少しだけ話を聞いたんだナ」

悠太「ならいい、一応扶桑空軍の副司令官として今従事してる、前線勤務がしたいとは言っているんだな……」

凜「私は副司令官補佐だよ、飛行機に乗らない時が落ち着かんというかなんというかね……」

サーニヤ「えつと……」

悠太「つまりは飾り」

エイラ「階級が飾りとか意味わからないンダナ」

悠太「まあなあ……」

ソラ「なんか前より忙しそうだよね」

悠太「まあなあ……各種部署等とのヤツがあつたりするからな……」

エイラ「なんか忙しそうダナ」

悠太「飾りつて言ってもあるものはあるからなあ、と言うか戻るか」

エイラ「ナンダナ」

凜「ソラもしかしなくても眠い？」

ソラ「…うん」

と言うと凜が屈む

凜「おんぶするからおいで」

と言うとソラは無抵抗に乗る

悠太「身長あるっていいなあ…」（151cm）

エイラ「ナンダナ」（160cm）

サーニャ「ですね」（152cm）

凜「んだよ」（175cm）

悠太「まあ戻っておいて、多分アバたちを連れて戻るさ、流石に限界だろうし」

凜「わかったよ」

サーニャ「限界ってどのぐらい飛んでたんですか？」

悠太「大体12時間ぐらいかな、到着して空中警戒があったことも考えるに13時間は有に超えてる」

サーニャ「え…13…」

エイラ「いくらなんでも無茶させすぎナンダナ！」と少し声を荒らげる

悠太「俺も無茶させ過ぎだと思っただけどな仕方ないんだよ、こうするしかない」

凜「とりあえず戻ろう、寒いし」

エイラ「チツ、仕方ないんだナ」

凜「私は飛行機に戻って寝かしつけてくる、アバ達をよろしくね」

悠太「あいよ」

食堂

ラル「遅かったじゃないか」

悠太「まあ積もる話もあったし、許してく」

菅野「悠太って強いかな？」

エイラ「メチャクチャ強いんだナ、私の未来予知が効かないレベルなんだ」

悠太「お前が見えてるのは一つの未来ただけであって確実ってわけではないのさ」と  
ポケットからライターを出してエイラの頭に投げる

そのライターは弧を描いてエイラの頭に当たる

悠太「見えてたか？」

エイラ「ポケットに手をつ突っ込んだだけだと思ったんだナ」

菅野 「スゲエどうやったんだ？」

悠太 「感覚でしかやってないからわからん」

ニパ 「イツルの未来予知が効かないってすごい……」

菅野 「いつかやり合ってみたいぜ」

悠太 「取り敢えず、アバ達は戻ろう、眠いだろ？」

アバ 「うん……」

と飛行機に連れて戻る

悠太 「よし、寝たね」

凜 「ね、戻る？」

悠太 「まあ寝る旨を伝えて来るよ」

凜 「わかった」

悠太 「取り敢えず我々は先に寝ますね、明日は10時以降には空中哨戒予定かなでは  
良い眠りを」

ラル 「ああ」

エイラ 「お休みなんダナ」

その日は深い眠りについた

：

次回 27話 整備 帰還



## 27話 整備 帰還

27話 整備 帰還

早朝 6:30

悠太「総員起こし」

ドアが開き

凜「んーおはよう」と顔を出して言う

悠太「貨物室に行つとけ、飯あるから」

ソラたちも続々と起きてくる

貨物室兼食堂

悠太「全員揃ってるな？」

「はい」

疾風「エミリー、起きて！」

と机に伏せてるエミリーを揺らす

エミリー「んーあと少し」

疾風 「少しじやなくて今すぐ起きて！」

悠太 「疾風いいよ、話は聞いているだろうし」

疾風 「ですが」

悠太 「もし聞いてなさそうなら話が終わった後に聞いてみる、わかったか？」

疾風 「はい」

悠太 「7：00より全機スクランブル発進の用意をしとけそれだけだ」

「はい」

疾風 「悠太中将はなんて言ってた？」

エミリー 「7：00より全機スクランブルの用意って言ってたあ」

疾風 「本当に聞いているのか？」

悠太 「飯を食え、7：00までには食い終わつとけよ」

「はい」

と食べ始める

7：10

悠太 「もし緊急発信があるなら無線で連絡するからな、俺らは502基地のユニットの整備に行ってくる」

「はい」

## 格納庫

悠太「秀太来てたのか」

秀太「まあ先に確認しときたいことと部品をね」

悠太「必要なものは？」

秀太「うーん：軽く見た感じ変えしたいなあ」

悠太「ならサーシャさんと話しようか：オラーシャとガリアのエンジンあったかなあ  
…」

秀太「扶桑とカールスラントはあるよね？」

悠太「まあこの部隊自体その辺が多いから多めに持つてきてるはずだけど…」

秀太「オラーシャとガリアのエンジンはどっちもV12型だからカールスラントのエンジン部品で流用だな、と扶桑は無理だけど：頑張るか」

と雑談なんかをしていると

サーシャ「えっと、御三方集まっていますよね？」

悠太「ああ」

凜「集まってる」

秀太「早よ整備したいね」

サーシャ「やることはエンジンの整備……ですかね」

秀太「いいや、乗せ替えだ」

サーシャ「ですが部品が……」

悠太「あるにはあるよ」

サーシャ「あつたとして時間が足りないと思いますが」

秀太「足りるさ、少なくとも面倒な扶桑のユニットが壊れてないんだ、いけるね」

サーシャ「……では作業を開始します」

と言うと悠太達がお互いを見て

秀太「面倒と思うな、保護具が、身を守る」

悠太「確認は、人に頼るな、任せるな」

凜「危ないぞ、溶接火花が、火事になる」

秀太「ぬかるな段取り、ぬかす手順」

悠太「あぶないと、気づいたところ、すぐ直せ」

凜「あなどるな、ちよつとしたところ、慣れた事」

秀太「電気作業、しろうと判断、大禁もつ」

悠太「共同作業は、声かけよう、答えよう」

凜「安全は、週間ではなく、習慣に」

秀太「終わりまで、心のネジを、緩めるな」

悠太「はい、作業開始」

と整備を始める

数時間後

秀太「つし、終わった」

悠太「サーシャさん、今飛べるメンバー全員呼んできてくれる？」

サーシャ「は、はい」

とサーシャ、クルピンスキー、ロスマン、菅野、定子、ニパ、ジョゼ、ひかりと無関係だがニパ、サーニヤが集まる

秀太「取り敢えず言いたいことがある」

沈黙

秀太「予想以上にユニットの破損がすごい、主にクルピンスキー、菅野、カタヤイネンの三人だ」

クルピンスキー「そ、そんなかな」

菅野「うっせ」

ニパ「不運なのが…」

秀太「整備もお世辞にはいいといえない代物かつ、体たらくなパイロットが合わさり最悪だ、俺は色々な機体を見てきたけどここまでは最悪とは言わんがひどい、一番酷いのはそのバカ夫婦のやからした奴だ」

悠太「アレに関しては本当にすまないと思ってる…」

回想

谷間を飛ぶ1機のF-15E

悠太『見えた！三峽ダム』

凜『地对空ミサイル撃つてきてるよ』

悠太『わかってるさ』

と言いながらフレアを炊き最小の軌道でミサイルを避ける

ミサイルは後ろで爆発する

凜『垂直尾翼にダメージ、飛行可能』

悠太『投下準備』

凜『了解、左翼にダメージ、飛行可能』

ダムまで直線になった瞬間に国防軍により魔改造されたGBU-28が投下される  
機体を離れたGBU-28は即座にロケットエンジンに点火し高速でダムの水面ギ

リギリに命中し、突き刺さり大爆発を起こし決壊する

悠太『黒部のお返しぜ』

悠太『こちら龍神、こちら龍神、竜宮城をぶっ壊した、繰り返す竜宮城をぶっ壊した』  
 凜『ミサイルロック、フレア！後方に敵機多数、右翼にも被弾、そろそろやばいかも！』

ドン と爆発音になると機体は突然ロールをする

悠太「うおっ、ロールが…やばい…よーしいい子だ…」と突然ロールした機体を水平に戻す

凜「第二エンジン出力低下」

と言うとF-15Eは上昇角80度ぐらいで急上昇する

中国機は反撃を恐れているのか、手負だからなのか追尾をやめた

高度1万8千メートル

悠太『損傷箇所は…第1エンジン推力低下、まあ落ちてるな、第2エンジン停止、垂直尾翼、水平尾翼、両翼…生きてるのが不思議だな』

凜『良くまだ第一エンジン生きてるよねって、左翼の油圧はなくて、燃料は噴き出してるけど…大丈夫なのこれ…』

悠太『正直のところ見たくないね…あと3分も飛んでれば基地だ』こちら龍神、間も

無く、基地付近だ、追尾機なし」

《了解》

着陸前

悠太《こちら龍神、着陸許可願う》

管制《ツ…了解…》

悠太《うおつ》と着陸すると前方のランディングギアが沈み込み機首が地面と接触する

と地面と機首を擦り合わせること30秒機体は停止する

キャノピーを開け左翼を確認すると…そこには…何もない、右垂直尾翼も…

悠太「嘘だろ…」

凜「中国軍機が追ってこなかった理由って…」

秀太「…」

数時間後

秀太「お前ら、やってくれたな…」

悠太「ほんつつつとすみません…」

秀太「奇跡だよ本当に、左翼は失くすし、左垂直尾翼も失くす、おまけに第二エンジンにミサイルは刺さってるしさあ！」



凜「み、ミサイル？」

秀太「そうだ、ミサイルだよ！、お前らのケツにミサイルが刺さってたんだわかるか！」

悠太「いやその…」

秀太「どつかの誰かは、機体なんぞ消耗品、搭乗者が生還すりや大勝利だ」って言ったが、もう少しでパイロットが死ぬところだったんだわかるか？」

悠太、凜「本当に申し訳ありませんでした！」と二人して土下座する  
時は戻る

凜「まあはい…すみません…」

秀太「それはいいとして、最初にクルピンスキー」

クルピンスキー「ぼ、僕？」

秀太「そうだ、君はネウロイに近づきすぎだ、わかるか？エアインテークにネウロイの破片の粉末がこびり付いていたよ、その先のエンジンもだいたいぶ傷んでいたさ、そのおかげでエンジンを全とつかえ、取り敢えず応急的ではあるけど、破片が入りずらいように少し手を加えた、だがあまり近付くないいな？」

クルピンスキー「わかってるんだけどね…」

秀太「菅野、君もだいぶ近づいてるね、エアインテークにやっぱりこびりついて、整備のし易い零戦がびっくりするぐらい汚れてたようん、こっちクルピンスキー同様の措置をしたから多少はマシになるはず…」

菅野「ふん」

秀太「カタヤイネンくん、君は才能の持ち主だろうか？なぜ破損をしていないユニットを壊せるのだ？アレか？魔法力過剰か？そうなのか？じゃないとして整備士として教えてほしいさ」

ニパ「その…」

エイラ「ニパはツイテないんだナ」

悠太「してもついてないってレベルじゃないだろう…」

秀太「あとは…グンドユラ・ラルに言っておいてくれ、最後にユニット飛ばしたのいつだ？と、埃が溜まってて下手すれば燃えてるところだ」

サーシャ「わかりました」

秀太「それ以外はない、各自テストフライトしてくれ」

時は経ち 翌日 早朝

悠太「全員乗ってるか？」



悠太「凜と秀太は少し手伝え」

凜「了解」

秀太「おうよ」

とチエツクを済ませる

機体から降りる

凜「手伝いつてなんよ」

??「閣下、お待ちしておりました」

と士官用第一種軍装で丸坊主の壮年が声をかけてくる

悠太「君が日下敏夫くさかとしおくんだね？」

敏夫「はっ」

悠太「なら作業を開始するか」

と腕捲りする

敏夫「持つて来い！」

と言うとZ i S—13が4両くる

凜「？燃料？」

悠太「その通り」

凜「え？と言うかこれ1両あたり何リットルよ」

敏夫「えつとですね、2・5トンだそうです」

凧「え？10000L？こいつ40000Lだよな…往復だと時間が…と追加で4両くる

悠太「よし8両来たな、20000Lあれば帰れるからな、作業開始」

「了解」とせっせこせっせこ開始する

凧「足り…るか？」

悠太「んー50000フィートを半分の出力で飛べば足りる」

秀太「重量が軽くなる分楽になるな」

凧「と言うかこの時期のこの辺の海は全部とは言わないけど凍ってるんじゃない？」

敏夫「少しついて来ていただけますか？」

悠太「まあ行こう」

と3人で敏夫についてゆく

セヴェロモルスク港内を見渡せる丘に着く

敏夫「あれが私が艦長を務める特殊潜水艦イー400です」

と指を刺す

凧「イー400ですか…航空機の発艦も可能で？」

敏夫「もちろんです、今回は燃料輸送でしたので搭載はしてありませんが、通常時は

搭載予定です」

悠太「世界一大きい潜水艦か…」

敏夫「ですが、扶桑本国ではこれ以上のサイズの潜水艦の設計をしているとの話を聞きます」

悠太「はて、そんな話聞いたことないですね」

敏夫「ええ？閣下ですら聞いておられぬのですか？」

悠太「僕は空軍ですので、海軍の事情はわからぬのです」

敏夫「ですか…」

悠太「このあとはどこに向けて出港するんです？」

敏夫「このあとは東シベリア海を通ってパシフィス島に戻ります」

悠太「距離的に1万2000キロですか…」

敏夫「まあたった20日ちよつとです」

凜「船乗りじゃない私たちからすれば欧州から帰るだけで疲れたのに、船乗りつてすごいや」

敏夫「我々から見たら、飛行機乗りつてすごいですよええ、少なくとも空を12時間飛んでたわけですし」

悠太「まあお互い様ですな、では俺はこの辺で戻ろうかな」

数十時間後 扶桑 百里基地

悠太「タツチダウン、フルブレーキ」

と扶桑に帰還する

格納庫付近まで行き機体を完全停止させる

次回 年越し 楽しみに

## 27. 7話 年越し

27. 7話 年越し

朝11時

悠太「仕事納めがあるとは思ってなかったな」

凜「ね、てつきり無いものだと思ってた、休みはいつまでだったけ？」

悠太「明日明日から10日の10日間だよ」

凜「10日か…自宅の方に家具入れたし…今日することは？」

悠太「この資料片付けるだけで何も無いかな…ん？なんだこの資料」

と端に3枚の資料が置いてある、それを取る

「新型小銃、新型弾薬ノ試射ニツイテ」

「扶桑空挺旅団ノ運用??」

「新造扶桑空軍陸戦戦車隊??」

と書かれている

悠太「提出期限は…どっちも1945年2月か…凜、仕事ができた」

凜「え？内容は？」



悠太「新型小銃の試射だ、場所は東京砲兵工廠射撃場だ」

凜「どこよそれ」

悠太「軍部の近くらしい」

凜「軍部の近く…あつたけ？」

悠太「あるらしい、取り敢えず行こう」

凜「どうやって行くんだよ…」

悠太「一応免許ではないけど車両の許可証あるよ」

凜「で、ジープ？」

悠太「だね」

凜「ああ」

悠太「取り敢えず軍部に行くに当たって持って行くものあつたけ？」

凜「ないかなあ…あ、新居の方に食材が無いや」

悠太「確保してあるよ、あとは…ないかな」

凜「マジかありがとう、全員連れて行くの？」

悠太「個人的には全員連れて行きたいんだが…運転できるやつがなあ」

と机に突つ伏す

コンコンコン

秀太「失礼する」

悠太「んーあ秀太ってあれ？お前本部の技術部にいるはずじゃ？」

秀太「いや、今資料を渡しに」

悠太「なんだなんだ？仕事増やす気か？明日から休みだぞこっちは」

秀太「いや、そっちの手元の追加資料だ」

悠太「なんだ、よかつたって今からそっちに行こうとしてただけど…」

秀太「何用で？」

悠太「新型小銃の関連で」

秀太「お！試射してくれるのか！」

悠太「まあそんなところ」

秀太「そういえば、今日お前家で飯だったよな、メンバーは？」

悠太「うちの隊員たちだよ」

秀太「そいつは賑やかになりそうだ、移動はどうるん？」

悠太「今そいつを考えてたところさ」

秀太「ならうちの部下使う？」

悠太「何？来てるの？」

秀太「うん、ちようどトラックできてるし」

悠太「ならお言葉に甘えて使うかな」

コンコンコン

ソラ「失礼します？」

秀太「おう？ソラちゃんか」

ソラ「パパア、今日家に帰るってほんと？」

悠太「おう、ほんとだよ、着替えとか詰めて来て」

ソラ「ねえ、アバたちは？」

悠太「うちのみんなをだ」

ソラ「やったー」

悠太「だから、みんなに準備してって伝えてくれるか？」

ソラ「うん！」

と出てゆく

秀太「かわええ娘やなあ」

悠太「かわいいのは山々なんだがな…」

秀太「不満があるんか？」

悠太「自分の娘みたいなのがー軍人ってのは少しな」

秀太「それはしやーないとしかいえないな、本人が辞める気がないならな、しかも今

は戦時だ」

凜「戦争が終わったらやめさせる気はあるよね？悠太？」

悠太「戦争が終われば…な」

秀太「11月のマーケットガーデン作戦は失敗、ガリアを解放できたぐらいで、ライン川で停止だ、ガリア内にまだいるネウロイの撃滅に奔走してるようだし」

悠太「だから、我々も頑張らなければな」

凜「だね」

悠太「秀太、お前何で来た？」

秀太「おれは自分のトラックだ」

悠太「お前の部下のじゃなくてそれ使えないか？」

秀太「少し荷台を片付ければいけると思うが」

悠太「それで、みんなを乗せて一回自宅まで送ってくれないか？」

秀太「ああ、いいぞ」

数十分後

トラック前

悠太「んー」とトラックの後ろで座り込み顔を伏せ考え込んでいると

ソラ「パパ？」と体を揺さぶってくる

悠太「んあなんだ」

ソラ「揃ったよ？」

悠太「ん、ああ、全員荷物はこれだけか？」

凜「まあ10日程度だし、あっちにも多少置いてあるからね」

ソラ「うん」

アバ「そうよ」

サツチャー「だよー」

エミリー「んー」

疾風「はいぐらい言つてよエミリーさん、僕もこれだけだよ」

悠太「よいしよつと」と言いトラックの荷台に乗る

悠太「荷物渡してくれ、奥に詰めるから」

『はい』

と荷物を渡し、手際よく奥に詰め、奥から人に乗せる

悠太「取り敢えず全員乗ってるね」

とトラックの側面をドンドンと2度手の平で叩く

秀太「あいよ」

とトラックは動き出す

凜「射撃みたいだけどソラ達はどするの？」

悠太「少し撃ってもらいたいから同行だよ」

腕を組み幌にもたれかける

凜「撃てるか心配だ」

悠太「04式多砲身機関砲よりも反動は少ないさ」

凜「そりよ少ないだろうね、そう言えばバルカンそんな名前だったんだ、詳細には20mm多砲身機関砲って書いてあつた気がするけど」

秀太「20mm多砲身機関砲ってのは試作時の名前だ」 と運転席と荷台を遮る窓を上げながら言う

凜「帝国式なら試製20mm多砲身機関砲とかだと思うけど」

秀太「さあ、しらねえ、軍のお偉いさんが深く気に入ってもらつてな、これを対空とかで使えないかとかって聞いて来たし」

悠太「この時代の人間からしてみればだいぶ変なものを気に入ってくれたな、その人の名前は？」

秀太「確か雨宮だったかな」

悠太「雨宮？ 下の名前は？」

秀太「幸樹こうきだったかな」

悠太「…は？」

秀太「なんだ？知ってんのか？」

凜「同姓同名…？」

秀太「？」

悠太「雨宮幸樹…秀太は…知らないか」

秀太「??？」

悠太「元陸将、日本国防陸軍少将 雨宮幸樹 2017年3月死去、原因は心不全」

秀太「あああああああ」

と叫ぶ

ソラ「うるさい」

秀太「すみません」

悠太「やつとか…で何処にいるかわかるか？」

秀太「多分、本部にいますと思う…空軍の設立を後押しした人がもう1人いるって言っ

てたがその人かな…」

悠太「先にそっちだ」

秀太「わかった」

1時間後ぐらい

本部入口

守衛「ちよつと待て」

悠太「アポ無しだけど、雨宮幸樹さん居る？」

と階級章を見せながら言う

守衛「ハッ、安田空軍中将殿ですか、少しお待ちください」

悠太「安田って…まあいいや」

守衛「えつとですね雨宮さんの部屋に来てくれだそうです」

悠太「ありがとう、秀太行こう」

秀太「あいさ」

と車を駐車場に停める

凛「こんなじやり道じゃなくてアスファルトでも塗ってほしいね」

悠太「アスファルトはあるにはあるが、今は原油は戦術的物資だ、民間には降りてこ  
んよ、あつたとしても品質が低いからぼろぼろなやつが出来るさ」

と言いながらトラックから降りる

悠太「流石に8人は邪魔だし、ソラ達はここで待つてくれるか？」



『はい』

悠太「なら行こうか」

部屋

コンコンコン ガチャ とドアを開ける

雨宮「誰だね、アポイントメント無しで来る輩は」

悠太「わかってるでしょう？陸将」と3人とも敬礼する

雨宮「久しぶりだな、悠太大佐、凜中佐、宛坂少佐」

悠太「今は中将に少将ですよ、今の御階級は？」

雨宮「残念ながら大将だよ」

悠太「やはりですか」

雨宮「ふ、わかってたか」

凜「でもって陛下殿に進言できることを考えると皇族でしょうか？」

雨宮「よくわかったな、一応雨宮つてのは軍人としての苗字だからな、本当は梨本宮だ」

悠太「前世では普通の叔父様にしか見えませんでしたのに、こちらでは皇族ですか  
…新しく生まれるというのはすごいすな」

雨宮「やめてくれ、皇族も皇族で色々大変なんだ」

悠太「ええ、例の機関砲についての話を少しです」

雨宮「それについて陸軍軍人の1意見としては、チハなんかには搭載できないだろうか？」

秀太「内容としては？」

雨宮「まあ基地対空用として、レーダー車両でのネウロイの搜索、同車輛を使いネウロイを追尾、ネウロイへの攻撃だ」

秀太「チハ車体の事実上M163か？」

雨宮「M163？」

悠太「米軍が昔運用してた自走対空砲ですよ、M113の車体に20mmバルカンと追尾用レーダーを搭載したやつです確か」

雨宮「おお、そんなやつがいたのか」

秀太「はつきり言って無理です」

雨宮「理由は？」

秀太「全てです、チハの車体は大部分がエンジンで締められている為に、機関砲の弾薬、レーダー用の電子機器が搭載不可能です」

雨宮「そうか…なら諦めるしか？」

秀太「いや、それでも無いんですよ」

雨宮「なに？」

悠太「は？」

秀太「今ですね、新たな装甲兵員輸送車を開発中です、そいつなるば搭載可能かと」

雨宮「聞かせてくれ」

秀太「名前はまだです、装甲は零戦なんかでのおなじみジェラルミンを使い軽量化、エンジンには220馬力ぐらいだとちようどいいかと」

雨宮「220馬力程度でいいのか？」

秀太「ええ、問題ないでしょう、戦車のような武装を搭載してるわけではないので、軽くても問題は無いと思います」

雨宮「なら名前をM110兵員輸送車と名付けよう」

秀太「了解です、2月までには凶面を陸軍技術研究所に送ります」

雨宮「ああ、少し昔話に花を咲かせようじゃあないか」

悠太「一つありますね、“地上でも空中でも最強の夫婦”と最初に言ったのは貴方でしょー？」

雨宮「ははっ、バレていたか」

凜「まあ空軍所属だったってこと知ってたのは貴方と鬼塚さんぐらいですからね」

雨宮「下士官食堂でお忍び食事中に少し噂を聞いてそれを少し変えただけなのさ」

悠太「お忍びで食事は美味しかったですか？」

雨宮「忘れたさ、ただこの下士官食堂は非常にうまい」

凜「士官食堂は行かないのです？」

雨宮「皇族だのなんだのって言われるから嫌なんだよ」

秀太「大変そうだな」

雨宮「大変だよ、全くな」

悠太「そろそろ戻らないとだな」

凜「だね、ソラ達も待ってるし」

雨宮「そうそう、それで一つ話があるんだが、戦後はどうする気だ？」

悠太「どうするって？」

雨宮「だといえれば高女に行かせるなりだ」

悠太「まあ：いつ終わるかな：数年で終わって12だとしたら中学に進学させてるかな」

雨宮「そうか、中学か、文部省に友人がいるんだがそいつに、少し未来の話をしたんだが、そいつはとてもいい、上に案を出すと言ってるんだ」

悠太「なんです？」

雨宮「義務教育だ」

凜「義務教育か…」

雨宮「厳密に言えば6―3―3―4制だがな」

悠太「小学校、中学校、高校、大学か…そんな立派な教育制度を置いてくるになんて  
未だないだろうから、通るか怪しい気がするな」

雨宮「多分通ると信じたいな」

悠太「ですね、では我々はこの辺で」

雨宮「ああ、気張れよ」

悠太「ハッ」

と3人とも敬礼し部屋から出てゆく

秀太「雨宮さんが陸将だったとは」

悠太「まあな」

と車両に戻る

悠太「遅れてすまん」

と荷台に乗る

ソラ「遅い！」

悠太「だからすまんって」

疾風「でも本当に遅かったですけど」

悠太「新しい兵器とか作戦とかについて話してたな」

疾風「そうなですか…」

悠太「ソラ、後で美味しい料理作るかき、許してよ」

ソラ「ほんと?」

悠太「ほんとほんと」

ソラ「許す!」

悠太「ありがとう」

凜「わての分は?」

悠太「秀太、良いぞ」

秀太「あいよ」

凜「あれ?聞こえてない?悠太さーん?」

と車は動き出す

東京砲兵工廠射撃場 駐車場

悠太「ここか?」

秀太「そう、ここ」

悠太「ならパパッと済ませるか」  
と車を降りる

悠太「ソラ達も付いてきて」

ソラ「はい」

東京砲兵工廠射撃場内

秀太「ほいこれや」

とマガジンが抜かれているAK-47に似た銃を投げる

悠太「AK-47か？」

秀太「A R 宛板ライフル -1だ、それは兵士用で」

と凜にも投げる

秀太「そいつがウィッチ用のA R -1 ウィッチ・ユニット W Uだ」

悠太「弾は？」

秀太「弾は新造の5.56 x 45 F 扶桑だ」

悠太「これが新造の銃と弾と…マガジンは？」

秀太「これと…」

悠太「どうも」

とマガジンを刺しチャージングハンドルを引く

秀太「WUはこれ」

とドラムマガジンを渡す

凜「ほう、ドラムマガジンか、空戦の時にはこつち方が交戦時間が長くてありがたいだろうな」

秀太「ウイッチ用は専用弾が使えて、銃身を熱に強くしてあったり、と少しばかり違うよ」

悠太「弾数は？」

秀太「そつちは30発、WUは70発」

悠太「成る程ど」

と言いながら的に撃つ

秀太「作動はガス圧ロングストロークピストン、ロンチティングボルトだ」

と発砲音に負けずに叫ぶ

撃ち切り

悠太「射程は？」

秀太「そつちは500m、WUは1000mって言ったところだ」



悠太「魔法力ってすげえんだな」

秀太「これには俺も驚きさ」

と言っている和凛も打ち出す

悠太「ん？あっちの方が発射レート高い？」

秀太「おうよ、そっちは大体650発だが、WUは735発になってる」

悠太「マジで空戦に重きを置いた仕様なんだな」

秀太「ブローニング<sup>年</sup>に負けず劣らずの年数使ってもらいたいね」

悠太「そいつはどうだか……」

和凛は撃ち終わり

和凛「少し反動が強い気がするけどユニット使ってる時なら気にしないレベルかな、心配なのは弾の貫徹力だけ」

秀太「貫徹力は通常だと1000mで19mm程度でWUだと1000mで40mmだ」

和凛「えっ、1000mで40mmって12.7mmの徹甲弾以上じゃないの？」

秀太「そうだ、500mなら1000mm貫徹だ」

悠太「十分だな……だが扶桑ウィッチの一般的な20mmに比べると劣るがその分弾が数があることを考えると問題はないか」

秀太「通常の20mmならまだしも魔力のこめまれた20mmに勝てる奴なんてPa  
k50ぐらいだよ」

悠太「ならそれを持てるようにすれば？」

凜「確かに」

秀太「バカかと言いたけど…なしとも言えないな…そんなこたあ良いんだ次はこれ」

悠太「これは？」

秀太「GL-1、取り付け型のグレネードランチャー」

悠太「G L についてとか、詳細は？」

秀太「口径は40mm、重量は1.3kg、弾は二種類、榴弾と徹甲榴弾」

凜「徹甲榴弾はまだしも榴弾の使い用は？」

秀太「榴弾は魔法力を入れて撃ってやればTNT換算で1kg近くは出るよ」

悠太「となると小型ネウロイぐらいなら吹き飛ばせるか」

秀太「多分ね、徹甲榴弾の方は0.5kg程度で貫通してから内部でだから多分こつ

ちの方が実用的」

悠太「だな、ソラ、ここをこう持って撃つんだ、良いgut？」

ソラ「Ja」

と言うと的に向かって撃つ

撃ち切り

04式多砲身機関砲

ソラ「アレに比べたら撃ちやすい」

秀太「まあだろうな」

悠太「となるとこつちをメインとして使おうかなあ…取り敢えず全員撃つてある程度慣れてて良いよ」

『はい』

秀太「確かに04式多砲身機関砲はいいけどウイツチ用としては最適じゃないからなアレ」

悠太「何しろ反動が馬鹿にならないしな」

秀太「サイズが大きいから比較的反動制御はどうにかなるけど」

悠太「次のウイツチからはAR―1とGL―1持たせようか」

秀太「良いのか？」

悠太「良いよもう」

秀太「だとするとウイツチ用の04式が…」

悠太「あ…何丁ぐらい作ってる？」

秀太「04式は受注生産だから50丁ぐらいだけど」

悠太「何か使える方法は…」

凜「陸上ウィッチに持たせてみたら？」

秀太「え？」

凜「私やサーニヤちゃんみたいにレーダー見たいな感じの固有魔法持つてる子とかいるんじゃないの？」

悠太「そもそも固有魔法じゃないレアケースだったと思うけど」

秀太「うむむむむ……」

凜「そういえばソラ、コアが見えたって本当なの？」

ソラ「うん、あの時見えたの」

凜「なるほどねえ」

悠太「目標探知用は他のレーダーに任せて、人力で狙って打てば？」

秀太「だとして遠くの敵に当てるのは無理じゃないか？」

悠太「遠距離の敵は航空ウィッチに処理して貰えば良い、近接防空なら出来るだろうし」

秀太「となると土台となる陸戦用ストライカーが必要だな」

悠太「それは05式中戦車を使えば？」

秀太「だな、来月の会議で提出するか」

悠太「だな、で凜達はどうか？」

凜「まあみんなうまいよ、04式をネウロイ相手に撃つ訓練してるからだろうけどね」  
ソラ「アレよりも使いやすい！」

アバ「まあユニットと一緒に使わないと変わらないかな」

サツチャー「あんまり弾を撒けないから微妙かなあ」

エミリー「少し先の方が持ち辛い」

疾風「百式より使いやすい」

秀太「ユニットと使わんとわからんよな、弾に関しては頑張って100発ぐらい撃てるように作るわ、持ちずらいに関しては色々調整してるかはまって欲しい、百式と比べると持ちやすいだろうね」

悠太「総合すると？」

秀太「グリップの改善がメインかな」

悠太「とりあえずそれだけだな、そんな話をしてればもう1時だ、帰るか」

秀太「お邪魔させてもらうわ」

と片付けをして車に戻る

秀太「今日の飯はなんだ？」

悠太「まあすき焼きかな」

秀太「具材は？」

悠太「揃ってるよ、肉も前々から軍行きつけのところに頼んだし」

秀太「そいつは最高だ」

と車を走らせる数分

悠太「よいしょっと」

と下車し、家の鍵取り出し、扉の鍵を開ける

悠太「なら荷物入れようか」

と荷物を入れる

1時間後ぐらい

悠太「とりあえずいいかな」

秀太「とりあえず暇だしテレビでもつけようか」

とイベリオン製のテレビの電源をつける

悠太「大日本帝国じゃないからテレビは流通してるんやな、イベリオン製だけど」

秀太「だね」

悠太「少し庭を見てする」

ソラ「行ってらっしゃーい」

と庭へと通じる扉を開ける

悠太「？」

秀太「どうした？」

悠太「なんで陸王が？」

秀太「ああ、プレゼントだよ」

悠太「お、おう？」

秀太「使わん？」

悠太「うち3人家族やし……」

秀太「側車はついてるよ？」

凜「違うそうじゃないって顔してるよ」

悠太「どんな顔……大真面目に陸王より黒鉄とかキューベルワーゲン、ジープとかの方が良かった」

秀太「あ……」

悠太「まあ足があるだけで有難いけど」

秀太「うん……」

悠太「鍵は？」

秀太「側車の風防の裏に貼ってある」

と鍵を取り、エンジンをつける

悠太「んーいい音だな」

秀太「まあな、整備はきっちりしてあるから動くよ」

悠太「まあ鍋の準備するか」

と言いエンジンを切る

16時

悠太「いただきます」

とすき焼きを食べ始める

凛「はふはふうめえ」

ソラ「美味しい」

アバ「初めてだけど美味しいわね」

サツチャー「美味しい」

エミリー「美味しい」

疾風「美味しいです」

秀太「うめえ」

年も明け、皆眠りにつく

皆が眠りについた頃1時

悠太「(今後どうするかなあ)」

と外でタバコを吸っている



凜「ん、どうした？」

と廊下で眠たそうに目を擦る凜がいる

悠太「少しな」

凜「話ぐらいいは聞くよ」

悠太「悪いな」

凜「良いのいいの」

と隣に腰掛ける

悠太「俺たちこの後どうすればいいと思う？」

凜「どうすればいいとは？」

悠太「軍事においてもさ、30年は早くファントムは飛んでるし、74みたいな戦車居るしでさ、どう足掻いても歴史を壊してるわけじゃん、こっちの歴史とあっちの歴史は違うとしてもね」

凜「有機物なのか無機物なのわからない、奴に攻められてる訳で、しかも勝てるかどうかすら怪しいから神はこっちに送ったんだと思うよ」

悠太「そうか…：そうだよな」

凜「もしか元々勝てるようなら送らないと思うよ」

悠太「そう…：だよな」

凜「寝よ？」

悠太「だな」

と立ち上がると

凜が頬にキスをする

凜「どう？」

悠太「どうもこうもね」

凜「ちえ、損した」

悠太「可愛い妻にされて俺は嬉しいよ」

凜「…デレた？」

悠太「しばき倒すぞ」

凜「ごめんちやい」

悠太「まあおやすみ」

凜「おやすみ」

とお互いに寝床へ着く

終わり

次回

## 28話

スクランブル  
ブル  
発進

## 28話 スクランブル発進

28話 スクランブル発進

1月10日13時13日

凜「ふわああ…疲れたあ」と欠伸をする

悠太「書類はこれで終わり」と…」

コンコンコン

悠太「入れ」

秀太「おう、ユニットの状況についてだ」と書類を渡す

悠太「ああ、これね、えつとうちの部隊全員が定期メンテ中ね、それ以外はまだ配備始まってないと」

秀太「一部は中等訓練中だな」

悠太「もう少しか…」

コンコンコン

悠太「入れ」

「はっ、浦塩方面の電探所から通信、サハリン湾を抜け南下中の大型ネウロイ6機発見、

大凡は間宮海峡との接続域です、速度700km、高度12000mです、陸軍航空隊、海軍航空隊共に迎撃不可能だそうです、迎撃隊を上げてくれとのことですよ」

悠太「えあ？ユニットは定時メンテだし」

秀太「あと2時間はかかるぞ」

凜「なんか機体は…」

コンコンコン

？「宮崎です」

悠太「どうぞ、宮崎みやざきひろすけ艦長どうしました？」

宏介「天城の艀装の搭載が完了したので、それについてを」

悠太「それだ！」

宏介「え？え？」

悠太「まだ此処に1個中隊いるよな？」

宏介「一応最近訓練が終わりましたので行けますけども何か？」

悠太「浦塩方面から大型ネウロイが6機南下中らしい、迎撃に部隊として使いたい」

宏介「初の実戦は扶桑海上空ですか…了解です」

悠太「秀太たの」

秀太「1機と対Gスーツを2枚だろ？」

悠太「そうだ」

宏介「え？出るのですか？」

凜「偶には普通の機体にも乗らないと腕がね

悠太「だな、臨時隊員として参加しても？」

宏介「もちろんです、二人がいれば二百人力です」

悠太「なら13：35にブリーフィング室にだ」

13：34 ブリーフィング室

悠太「集まってるかな？」

中隊長「もちろんです」

悠太「では、サハリン湾を抜け、間宮海峡を通ってまっすぐ南下して居る、大型が6

機、速度は2

700km、高度は12000mだ」

A小隊長「高度12000から何するですかね？」

悠太「大凡、帝都空襲だろうな」

A小隊長「帝都空襲：それだけは防がなければ…」

悠太「予想戦闘地域の天候は曇り、武装はAAM-2を6発、AAM-1Aを4発、作

戦開始時刻は13：50、以上行動開始」

と言うと立ち上がりパイロットスーツを着に行く

悠太「さて行きますか」

13:50

5番機『こちら5番機、異常なし』

6番機『こちら6番機、異常なし、後ろに居るのは誰だ?』

悠太『こちら0番機、異常なし、離陸準備完了』

中隊長『え?悠太中将?!』

悠太『全機離陸完了、G o G o、3、4番機以降は後方気流に気をつけろよ』

中隊長『離陸開始』

と言うと2機ずつ離陸し行く

0番機の悠太が最後にA/Bを焚き離陸する

高度1万2000m

中隊長『このまま直進すればネウロイと当たる…上を取って攻撃だ』

と上昇を始める

悠太「着実なやり方だな」

凜「ね」

悠太「武装はAAM-2ね」

数十分後

中隊長『そろそろだ攻撃準備』

凜「レーダーで視認してるよ」

悠太「わかった」『先鋒は任せてほしい』

と言うと増速して先頭に出る

中隊長『0番機の突撃と共にゆくぞ』

『おうー！』

数分後

悠太「右に見えた」『降下開始する』

ロールして降下する

悠太「つてベア<sup>Tuig5</sup>かよ！FOX-2」

と打つとミサイルは見事にコアに命中する

悠太「ガンズガンズガンズ」

別の機体に先程ミサイルが当たったあたりに撃つとコアが露出し破壊

凜「2ターゲットロスト」



と上昇してネウロイ郡を見ると続々と攻撃している

悠太「4機目、5機目、6機目、オールターゲットロストかな？」

凜「でも無いかも、距離20km、オラーシヤ大陸から中型ネウロイ6機のお出ましよ」

悠太『オラーシヤ大陸側から中隊ネウロイのお出ました、落とされたら、直々に訓練だからな？全機ブレイク』

中隊長『そいつは勘弁願いたいね、行くぞ！』

悠太「なんだありや、MiG-19か？」

凜「どれどれ？あーそうぼいなあ…けどあいつは要撃機じゃ無いの？」

悠太「ネウロイだから関係ないんだろう、性能とかわからんか？」

凜「えーあつたこれこれ中華型だと最高速度1,540 km/h、最大上昇力150 m/sだね」

悠太「となると頭を取ってミサイルか、このパイロット達からすると危険そうだが…大丈夫だろうと信じるか」『頭を取って誘導弾だいいいな？』

中隊長『了解ですつせ、1番機参る』

と各機勢よく降下して行く

ネウロイは気づけなかったのか誘導弾の餌食になって行く

悠太「うーむ、秀太が育てたとは思えないぐらいに優秀だな」

凜「ファイターパイロットじゃないのに教官出来るってすごいね」

悠太『ネウロイ全機撃墜を確認、全機帰投するぞ』

中隊長『了解だ』

悠太「久しぶりに飛ぶがやっぱり飛行機はいいな」

凜「だね、ユニットで飛ぶのも良いけどこっちの方が楽しい」

と飛んでいると

ゴンツと言う鈍い音が鳴る

凜「ワンエンジンサージ」

悠太「イグニッションスタート」

凜《メーデーメーデーメーデー、こちら0番機、ワンエンジンフレームアウト、方位を変えずに降下する》

悠太「着かないな、エンジンカット」

秀太《メーデーコピー、やばいなら千歳海軍航空隊に着陸しろ》

凜《了解》

悠太「他の機体からエンジン周りを見て欲しい、

凜『だれか1番エンジン周り見てくれるかしら？』

中隊長『了解です』と後方に周りエンジンを見る

中隊長『第一エンジンエアインテークに血が付いてますね』

悠太『バードスストライクか、このまま基地に帰還する、ツーエンジンに異常はないからな』

と基地に帰還する

秀太「ありやあ…こいつはエンジン丸ごと交換だなあ…」

と腕を組ながら駐機しているフロントムを見る

悠太「どこぐらいかかりそうだ？」

秀太「エンジンは数時間で取れるとして、フレームの歪み、とかを手作業で見るとすと…2ヶ月だな、少なくとも離着艦訓練には間に合わんな」

悠太「それはユニットでやるからいいよ」

秀太「これに関しては帰ってきたことに感謝だな」

悠太「壊れ具合ってことか」

秀太「そう言うことと整備士やらの腕をな」

悠太「色々すまんな」

秀太「気にすんなって、おい、その水もってこい、血を先に取るぞ」

「了解です」

悠太「ユニットの方は？」

秀太「試験飛行とかはさつき済んだから出来上がってるよ」  
悠太「ありがとう」

次回 29話 離着艦訓練

## 29話 離着艦訓練

## 29話 離着艦訓練

悠太「10:00から離着艦訓練だよな？」

凜「だね、09:50から地上ブリーフィングって書類に書いてある」

悠太「天城の姿見たか？」

凜「いや、見れてないよ」

悠太「俺も見れてねえんだよなあ……いかんせん深夜出港だったしドッグに壁と天井が付けられたらしいから見れてないよなあ」

凜「大和型みたいになってるねえ……大和は呉だけどね」

悠太「5号ドックだろ？」

凜「らしいねえ」

悠太「6号ドックは信濃が入ってるし」

凜「そうそう、信濃で思い出したけど、信濃は空母って本当に空母“あかぎ”みたいだね」

悠太「まあフォレストタルぼく作ったらしいからな、新型の蒸気カタパルトが搭載されて

るらしいからな、3基だったかな」

凜「あれ？あかぎって3基だけ？4じゃなかったか？」

悠太「信濃は3基になってるよ、重量の問題があるからな」

凜「あーそうか、発艦数が少なくなるけど大丈夫かな」

悠太「さあわからんとしかな」

凜「だよ、そろそろ行こうよ」

悠太「だな」

と手元の資料を集めて収納する

悠太「よし、行こう」

と立ち上がり移動する

凜「空母着艦できるかなあ……」

悠太「凜は苦手もんな、ゆうて俺も得意って訳ではないけどね」

凜「ユニットの着艦って確か、ゆっくり入ってボバリングだよな？」

悠太「そうだな、あと緊急時のネットに突っ込むだな、まあ今回は普通の着艦だけ」

凜「ふうよかった……というか秀太は空母に乗ってるんでしょ？」

悠太「まあ乗ってるよ、カタパルトの調整なんかをやってるはず」

凜「ユニットはほぼ関係ないか」

悠太「いや、発艦時はカタパルトの発射機に乗せて射出だよ」

凜「うわあ、Gやばそう…」

悠太「おつと、ここだ」

とミーティング室に入る

悠太「ん？遅れたかな？」と腕時計を見る

??「いえ、遅れていません」

悠太「あーえつと」

??「日高初男です」

悠太「すまないね、よろしく」と手を交わす

初男「はっ」

悠太「うちの連中も揃ってるか」

と椅子に座る

座って少しすると

ガラガラとドアが開き一人の男性が入ってくる

男「全員集まってるな？」

初男「もちろんです」

男「まあ知ってるだろうが自己紹介をする、板谷茂少佐だ」

いたやしげる

とひと礼する

茂「これから新型艦上機による初の空母着艦する、母艦の位置は浜松沖32海里だ、離陸してから15分程度だ、内容は着艦し、格納作業だ、ウィッチも同様だ」

茂「格納後は発艦だ、全機発艦し、再度着艦だ、良いな？」

各員「了解」

茂「では各員、訓練開始！」

と部屋を出てゆき、着替える

滑走路 退避路

悠太《こちらハヤブサー番、ハヤブサ隊から先に離陸していいか？》

管制《了解、ウミネコー番からウミネコー3番はハヤブサ隊が離陸するまで待機せよ》

《ウミネコー番了解、全機待機せよ》

管制《ランウェイオールグリーン、ハヤブサ隊離陸を許可する》

悠太《了解、全機離陸開始》

と離陸を開始する

5分後

悠太《全機離陸完了、パイロット応答せよ》

《こちら1-1パイロット、聞こえている、225。方向に飛べ、巡航ならば数分で着く》



悠太《了解》

数分後 空母付近

《こちらパイロット、見えるか？》

とずんぐりむつくりとしたC-1トレーダーを流用した機体であるI-1パイロットが見える

悠太《見えている、空母に誘導してくれ》

《了解、訓練空母天城へと誘導する》

空母 上空 迂回旋回中

凜『これが天城改か…』

悠太『来月には空母が10隻体制になるんだからすごいよ、扶桑は』

凜『まあ信濃は1ヶ月は訓練期間になるみたいだから、9隻体制だけどね』

悠太『それでも十分さ、信濃は欧州派遣決定らしいからな』

凜『そろそろ着艦のタイミングかな』

悠太『だな、全機着艦用意』

数分後 空母後方2キロ

悠太『2機つつ降りよう、凜ソラの順番だ、俺は最後に降りる』

全員『了解』

と着艦を開始する

凜ソラ

アバサツチャー

エミリー疾風

と着艦を成功させる

悠太『最後の締めだな』

と空母にゆっくり近づき

ふらふらつと甲板上に行くときスロットルを0にしてストンと落ちる

悠太『着艦成功』

と少し滑走し艦橋横のユニット発進機にユニットを止める

秀太「おう、どうだった？」

悠太「まあ普通だな」

秀太「お、本命のご登場だ」

とF-4は着艦誘導灯で誘導され、着艦ワイヤーにうまく着艦フックを引っ掛ける

完全静止したF-4は前方エレベーターを使い格納される

秀太「やっぱり、効率が悪いな」

悠太「まあ訓練空母としてなら普通に使えるな」

秀太「それがな、上がこの空母を前線に出す気にいるらしい」

悠太「やつぱりか……だが発艦は甲板待機ですぐ出来るとして着艦は全機を格納するのに20分はかかる事を上は知らんのか？」

秀太「どうも空母赤城の損失分埋めたいらしい、本音は身のためなのかもしれないがな」

悠太「五十六さんに抗議するか」

秀太「そうしてくれると助かるな、F-4はエンジンの関係で、きちんとした設備ないと使えないし、野戦飛行場じゃ着陸すら出来ん」

悠太「小石を吸って終わりよ」

秀太「だな」

と話しているうちに6機の着艦が終わり格納されている

悠太「あと6機」

秀太「あれだろ？この16機は全機移転だろ？」

悠太「らしいね、信濃は結局何機積めるんだ？」

秀太「ウィッチとかも総合で？」

悠太「おん」

秀太「70機やな」

悠太「ほーあかぎに近いのか」

秀太「だな、ただしカタパルトが3本しかないのがどうなるかだな」

そんな話をしていると5機が着艦を終え収納されてゆく

悠太「最後の1機か」

と着艦しようとしているF-4を見て言う

秀太「いい着艦だな」

悠太「流石だね」

秀太「取り敢えず格納庫に向かおう」

と格納庫へと向かう

茂「全員見事な着艦だ、次は発艦し、訓練飛行だ」

「はー」

と動き出す

悠太「なら俺行ってくる」

秀太「おうよ」

とユニツトを履き、起動させる

エレベーターに集まり

悠太「全員準備できたな？」

「は、っ」

と手をあげ、エレベーターを操作してるやつに合図をする

悠太「離陸したら空中待機だいいいな？」

凜「空中待機後は？」

悠太「基地に帰還だ、戦闘機隊は着艦だな」

凜「りよーかい」

とエレベーターは甲板に到達する

悠太「全機、カタパルトには注意しろよ？」

とカタパルトにユニットを接続する

悠太「異常無し、いつでも打ち出している」

「3, 2, 1, Go」

と言うと勢いよく放たれる

レールと離れたらエンジンをマックにし飛行姿勢になり機体を持ち上げる

高度を500mまで取り、周りを見渡す

凜「やつほー」

と凜が来る

悠太「カタパルトの使用感は？」

凜「対して何も」

悠太「なるほどね」

と喋っているときとソラとアバがくる

ソラ「びつくりしたわ」

アバ「少し心臓に悪いわね」

サッチャー「楽しいかった」

エミリー「もう少し強いのかなって思ったけど普通だった」

疾風「僕もそうだと思ってた」

悠太「取り敢えず軽く空母の周りを飛ぼうか」

『コピー』

と高度を掛けずに空母付近を旋回する

悠太《こちらハヤブサ、今何機が発艦した？》

《こちらパイロット現在8機だ》

悠太《了解ありがとう》

悠太「後半分だけどうする？このまま帰る？」

凜 「せっかくだし見て帰ろうよ」

悠太 「だな」

と残り8機が発艦し終わり

悠太 《こちらハヤブサ、我々はこれより帰還する》

《こちらパイロット、少し待ってくれ》

悠太 《了解》

悠太 「少し待ってくれだよ」

ソラ 「なんだろうね？」

悠太 「さあ」

《こちらパイロット、少し上を向いてくれ》

悠太 《了解》 「全員上を向けて」

と上を向いていると

4つのダイヤモンドの形で飛行し、大きなダイヤモンドを作り、上を通り抜けてる

凜 「すごつ」

ソラ 「すごごーい」

アバ 「すごいわね」

サツチャー 「すごごいね」

エミリー「やばく」

疾風「さすがエース部隊です」

悠太《すごいものを見せてもらった、相当な訓練の賜物だろう》

《その旨をアビエーター達に伝えておきます！、では》

悠太「帰ろうか」

と帰路に着く

次回

二章

ストライクウィッチーズ ロマーニャ戦役



## 二章 ロマーニヤ戦役

## 30話 ロマーニヤ戦役

2章 ストライクウィッチーズ ロマーニヤ戦役

扶桑皇国 霞ヶ関

悠太「トラヤヌスが失敗か…そろそろ在ロマーニヤ扶桑軍も限界が来始めてるし、どうするべきか」

凜「本当にどうするべきか、新しい駐留部隊を送っているけどたったの10人だからなあ…在ロ基地は復活してるけど、人数がねえ」

扶桑皇国 横須賀

横須賀第四女子中学校

「仰げば とうとし、わが師の恩  
教の庭にも、はや 幾年」

「続いて卒業生挨拶、卒業生代表 宮藤芳佳」

宮藤「はい」

再び空へ

宮藤 「ふああ、すごいすごい桜吹雪だよ、ねーみつちやーん」

山川 「ねえ芳佳ちゃん、やっぱり卒業しても上の学校には行かないの？」

宮藤 「うん：私はうちの仕事を継ぐんだ、早くちゃんとしたお医者さんになりたいの」

山川 「もう一緒に帰る事も無いんだね」

? 「おーいみーちーこー」

山川 「あ、おじいちゃん！おーい」

おじいちゃん 「おーい、はっはっはっ」

とトラクターで来る

山川 「私ね、春から横浜の師範学校に行く事になったんだ」とトラクターの荷台に乗り言う

宮藤 「へー、みつちやんすごい」

山川 「ぜんぜんすごく無いよ」

おじ 「はっはっ、美智子は小さい頃から勉強が好きじゃったからな」

宮藤 「将来は先生だね」

山川 「芳佳ちゃんだって将来は診療所の先生でしょ？」

宮藤「あつ、そつか、先生かあ…あ、軍艦だ」

山川「へつ？ふああ、あれつて戦艦大和だ、全長263m最大出力15万3000馬力連合艦隊の旗艦だよ、すごーい」

宮藤「おつきい！」

おじ「確か欧州遠征に行くとかつて新聞に書いてあつたのう」

宮藤「欧州…あの船欧州に行くんだ」

おじ「ふん、うおお」急ブレーキをかける

山川「どうしたのおじいちゃん」

宮藤「はっ」と身を乗り出しトラクターの前を見る

宮藤「クマだ」と小熊が道路の真ん中に倒れている

おじ「こんな街の側にクマが」

山川「大変！怪我してる、はっ芳佳ちゃん！」と飛び降り怪我をした熊に走つてゆく  
宮藤を追う

おじ「お、おい、二人とも危ないぞ」

宮藤「大丈夫、すぐに直してあげるからね」と言い熊に治癒魔法をかける

山川「頑張れ芳佳ちゃん」

と言うと近くの茂みからガサガサと言う音が聞こえ見ると全長3m近くあるであろ

うツキノワグマが茂みから出て来る

山川「キヤアー」

宮藤「はっ…」

おじ「あれはきつと母グマじゃ」と言い美智子を掴み後ろに下がらず

山川「芳佳ちゃん、逃げてー」

と言うが今宮藤は逃げずに小熊に治癒魔法をかけ続ける

宮藤「まつて…もうちよつと…もうちよつとだから」

母熊が立ち上がり宮藤を襲うとする

「キユウウウ」とかわいいなぎ声をあげ小熊が立ち上がり治癒魔法を掛けている宮藤の

手を舐める

宮藤「はい、これでもう大丈夫だよ」

と言うと母熊は四つん這いになり小熊の首根っこを口で帰ってゆく

おじ「大した子じゃあ…」

山川「芳佳ちゃん！大丈夫？芳佳ちゃん」

と近づきしやがみ

山川「芳佳ちゃん？」

宮藤「アハハハ……あー怖かったあ……」と笑い始める

宮藤「お父さん……あたし、中学卒業したよ……これからはお父さんと約束した通り私の力をみんなの役に立てる為にこの診療所で頑張るから……坂本さんブリタニアの戦いが終わってもう半年も経つのか……みんなこの手紙から始まったんだよね」

山川「芳佳ちゃん芳佳ちゃん」と慌てて入って来る

宮藤「どうしたのみっちゃん？」

と聞くと手をお椀型にしてその中に倒れた雀が入っているのを見せて来る

宮藤「うん、大丈夫」と雀を受け取り少し治癒魔法をかける

と治癒し終わったら手を大空に出し、雀は飛んで行き

宮藤「あーよかったねみっちゃん」

山川「うん！ありがとう芳佳ちゃん」と二人で大空を見上げてる

宮藤「あれ？」とその空から光った物が降ってきて

ブルルルルオンと共に高速で地面に刺さる

山川宮藤「きやあああ」

宮藤「あれって」

??「ううう、いったああい」

宮藤「ウイツチ？」

??「あーあのワタクシ陸軍飛行第47中隊諏訪<sup>すわ</sup>天姫<sup>あまき</sup>であります」

宮藤「こ、こんにちは」

諏訪「えつと宮藤芳佳さんは」

宮藤「は、はい、私ですけど」

諏訪「ふあ…よかった…宮藤博士よりお手紙です」

宮藤「ふえ？へええええ、お母さん、お婆ちゃん！」と部屋に戻り開封する

宮藤「なにこれ」と中には青函が入っており

母「何かの絵かしら」

お婆「さっぱりわからんのお」

宮藤「あのこれどうしたんですか？」

諏訪「私は手紙を配送する様命令を受けただけで詳しい事は分からないんです…すい

ません…」

宮藤「うーん…そうだ！坂本さんならお父さんと一緒に仕事してたしわかるかも」

諏訪「養成学校の坂本少佐ですか？」

宮藤「はい！明日行ってみます」

山川「私も一緒に行く」

何処かの山小屋

ドン・テン・ドン・テン・カン

「出来た」と刀を見ながら言う女性がいる

横須賀陸海空軍基地

宮藤「坂本さんに会うのは久しぶりだなあ」

山川「すごいね、芳佳ちゃん、基地に入れてもらえるんだね」

宮藤「二様予備役扱いなんだって前に坂本さんが言ってた」

山川「へえー坂本さんってすごく怖い人なんですよ？」

宮藤「うんう、すごく厳しいけど優しい人だよ本当はもう、ここに来ちゃいけないって言われてただけだよ……」

山川「へっ？どうして？」

宮藤「わかんない……あ、あそこかな」と少し空いている格納庫に指を刺す

山川「……？」

宮藤「確かここで待ってって……うーん……はっ、これ……坂本さんのストライカーユニツトだ……」

と格納庫の真ん中には坂本が搭乗していた零戦が置いてある

山川「芳佳ちゃんグウィッチ隊に居た時はこれ履いて戦ってたの？」

宮藤「うん、なんか懐かしいな」

と言うと格納庫の電球が付く

??「お待たせしました」

宮藤「土方さん！」

土方「ご無沙汰しております、すみません、せつかく来ていただいたのですが少佐はしばらく留守にしております」

宮藤「へ？留守？どこ行ったんですか？」

土方「それはお答えで来ません、今年の頭にウィッチ養成学校の教官も退官され、今は定期的に私が連絡をとっています」

宮藤「昨日、父から手紙が届いたんです」

土方「宮藤博士から手紙が？博士はお亡くなりになったはずですが、どうして」

宮藤「私にもわかりませんが、坂本さんなら父の事良く知ってるしわかるんじゃないかと思つて」



土方「了解しましたこの手紙は少佐がお戻りなったら渡しておきます」

宮藤「あ、はい、お願いします」とお辞儀をする

山川「よかったね、芳佳ちゃん」

「宮藤さーん」

「お久しぶりでーす」

「この前の牡丹餅すごく美味しかったですよ！またお願いします」

山川「芳佳ちゃん大人気だね」

宮藤「そ、そんなことないよ…」

？「おーいバカども何やってるよ、持ち場に戻らんか！」

「あ、副司令補佐！」

と女性が一人近づいて来る

？「おう、宮藤じゃ無いか、久しぶりだな」

宮藤「え、凜さん」

凜「土方どうした？」

と格納庫内に入る

土方「宮藤博士からの手紙です」

凜 「ほーん、どれどれ？」 手紙を開け青図を見る

タツタツタ

「土方兵曹！ガリア軍司令部から緊急入電です！」

宮藤 「ガリア？」

土方 「どうした？」

「欧州のネウロイに異変が起きた模様です」

凜 「攻勢か？」

「不明です！」

凜 「おい、その三人、アレを出す準備をしろ、今すぐにだ！」

「「はいー」」

土方 「なんだって」

宮藤 「ネウロイ……」

無線室

「発ガリア駐留ウィッチ宛連合軍各司令部、昨日ベネツィア上空に出現したネウロイは以前より格段に強化されており、ベネツィアは当日陥落、その際ロマーニヤ北部防衛の第504統合戦闘航空団はこれと交戦し多大なる被害を受け、戦闘不能に至れり」

土方 「ロマーニヤの504航空団が戦闘不能だと、あそこには扶桑海軍のウィッチも

派遣されてたはず」

山川「ガリアって芳佳ちゃんの友達がいるところだよね？」

土方「こちら扶桑空軍の土方です！ローマーニヤの504部隊の状況を教えてください！」

??「こちらガリア軍令部、ブリタニア空軍のリネット・ビショップ曹長です」

宮藤「リネちゃん！」

リネ「詳しい情報はわかりませんが、ウィッチの援軍要請がこちらにも入っているのですが、派遣しようにもウィッチの数が不足していて、決行出来ないんです」

土方「そんな…いくらウィッチの数が足りないとはいえ」

リネ「それで」"ザー"

土方「どうしました、聞こえますか！リネット曹長」

「ダメです、電離層に乱れが生じていてこれ以上は」

土方「クソ、無理か」

宮藤「お願いします、もう一度繋いで下さい！今の娘、私の大切な友達なんです！」

土方「…もうもう一度通信を」

「やっています、こちら扶桑軍横須賀基地、ガリア軍令部、聞こえますか！」

と土方は宮藤に受話器を渡す

「（こ）ちら扶桑軍聞こえるかー」

宮藤 「リーネちゃん聞こえる？返事して」

ガチャンと言う大きな音と共にフックを押さえつける

?? 「宮藤、何故ここにいる」

宮藤 「さ、坂本さん、坂本さん、大変ですリーネちゃんがまたネウロイが出たって」

坂本 「それはお前に関係ない」

宮藤 「関係あります！リーネちゃんは友達です！」

山川 「芳佳ちゃん…」

坂本 「ふん、友達か…全くあいかわらずの奴だ、たが欧州の危機は我々扶桑軍に任せ  
て貰おうか、宮藤、扶桑軍人でないお前にここに居る資格ない、今すぐ出て行け！」

宮藤 「坂本さん…」

基地外へと連れてゆかれる

凜 「これより扶桑軍は緊急欧州救援作戦を開始する」

参謀A 「了解、何が居る？」

凜 「大量のユニット、その部品、食料だ」

参謀B 「たが我々は海軍ではないから船が無い」

?? 「飛行機だ」

参謀A、B 「副司令！」

凜 「悠太、遅かったな」

参謀B 「飛行機だろうと、航続距離が……」

悠太 「すまんな、ルートは鹿屋、ソコトラ、ソコトラ、ロマーニヤ各地だ、大体15万km時間だと約1日と2時間で着く、まあ給油も含めると1日半と言ったところだ、だから今すぐにC-130DJを集めろ！今すぐにだ、物資も同じ様にな！」

「了解」

坂本 「再び届いた博士からの謎の手紙、新たな戦いを告げるのか？」土方この手紙は宛坂少将のところに回しておけ」

土方 「ハッ！」

と移動に格納庫の扉を開ける

坂本 「これが新型の紫電改か？」

技術者 「はい、前の零式よりも魔導エンジンの出力が上がっています、でも良いんですか？テスト飛行しなくても」

坂本 「いい、急いでるんでな」

と発進機ごと格納庫から出す

と格納庫付近を甲高い音と共に大型と二式大抵に似た機体が着水する

横須賀陸海空軍基地が見える高台（空軍も居るが基本的に水上機とC—130D J  
のみ）航続距離延長型

山川「うわあでつかい飛行艇だね」

宮藤「（そっか、あの飛行艇なら1週間も掛からずに欧州まで行けるんだ…）はっ、ア  
レはストライカーユニット…新しい奴だ」

山川「どうしたの？芳佳ちゃん」

宮藤「飛ぶ気なんだ、坂本さんはまたネウロイと戦う気なんだ、もうシールドが使え  
ないはずなのに…」と言うと走り出す

二式大艇風の機体付近

土方「少佐、前の戦いで戦果を挙げた宮藤さんを何故返されたんですか？」

坂本「あいつはもう十分に戦った、勤めを果たしてくれた、それだけだ」

と言うとコックピットから「本当にそれだけか？」

と言うと声が聞こえる

坂本「誰だ？」

悠太「上官の声すら忘れたのか？坂本美緒少佐」

と悠太が出て来る

坂本「悠太！」

悠太「おう、久しぶりだな」

坂本「ですが何故コックピットから？」

悠太「この娘のパイロットだからかな、あと今回向かうルートはイベリオン周りだ」

坂本「なぜイベリオンから？」

悠太「まあ少しな、そしてだ、ひとつだけ言わせてもらおう、宮藤は絶対に欧州に戻る、ただそれだけだ」

坂本「何を根拠に……」

悠太「さあ、君と言ったみたいじゃないか？私の元にくるって、それと同じ感じじゃないか？」

「ストライカー発進ユニット積み込み完了！」

坂本「発進！」

悠太「APU」

凜「APU動いてるよ」

悠太「ならエンジン始動開始」

凜「了解、回転数徐々に上昇中」

悠太「フラップフル」

凜「フラップフル、確認」

悠太「出力最大」

と正しいスロットルをマックスまでするとキイイイインと甲高い音と共に機体が  
進んでゆく

悠太「離水、高度10000<sup>約3000</sup>ft」

凜「え？10000？」

悠太「どうせあいつが来るんだ、ユニットで来るだろう受け取りやすい高度に居るぞ」

凜「なるほどね、10000ft了解」

走り出した宮藤

宮藤「坂本さーん」

格納庫

「宮藤さんー！」

宮藤「はあはあはあ」



「ちよ、ちよっと」

と格納庫内にあるユニットへ走り飛び乗る

宮藤 「宮藤芳佳発進します！」

「ええ？」

「ダメだ宮藤さん！そんな命令出て居ない」

宮藤 「お願いです、坂本さんと一緒にいかせてください！」

「し、しかし」

山川 「芳佳ちゃん！」

宮藤 「はっ、」

宮藤 「みっちゃん……みっちゃん、私行かなきゃ……」

山川 「行ってらっしゃい、気をつけてね……」

宮藤 「うん！行ってきます」

「…正面ハッチ開け！」

「了解！」

「よっしゃ！」

ハッチが開き

「な、なんて魔法力だ」

「進路よし」

「風向きよし」

「ストライカーユニット固定ボルト、解除確認！発進準備完了！」

宮藤 「発進！」

と言うとブロオオオンと言う音と共に飛び立つ

US-2 コックピット

悠太 「見えるか？」

凜 「うーん…あ、居た今離陸したっぽい」

悠太 「1640ftまで上昇」

凜 「了解よ」

と操縦桿をゆっくり引き上昇する

坂本 「なんだ？あの桜は…まさか！」

宮藤 「坂本さーん」

坂本 「何しにきた！宮藤！直ぐに戻れ！」

宮藤 「お願いです坂本さん！私も連れて行ってください」

坂本 「ダメだ！お前はこの国でやるべき事があるだろ！」

宮藤 「でも、やっぱり私、私、守りたいんです！」

坂本「守りたい：ハッハッハッハッハッハ」

宮藤「坂本さん？」

坂本「来い、宮藤」

宮藤「はい！」

と乗り込み

宮藤「それより気になってたんですけど：なんで紺色の服なんですか？」

坂本「それはなコックピットに行ったらわかるぞ」

宮藤「？わかりました」

コンコン

宮藤「宮藤芳佳です」

悠太「ドアは開いてるよ」

宮藤「失礼ます」

悠太「よっ、元気か？」

凜「さつきぶり」

宮藤「悠太さんに凜さん、どうしてここに？」

悠太「まあ今日はパイロットとして従軍してよ、一様扶桑空軍で扶桑皇国空軍副司令

をやつてる」

凜「同じくパイロットとして、本来は副司令補佐だよ」

宮藤「ええええ？なら坂本さんは…」

悠太「そうだね、空軍所属ウィッチだよ、だから紺色の服なのさ」

宮藤「な、なるほど…」

数十時間後

イベリオンのとある州上空

悠太《へい、ミヤフシコントロール、こちらUS-2》

??《こちらミヤフシコントロール、貴機を確認着陸していいぞ》

悠太《了解着陸する》

悠太「もうすぐで着陸するから椅子に座りシートベルトをつけてね」

着陸

悠太「芳佳、お前に合わせたい人がいるんだがちと着いてきてくれないか？」

宮藤「へ？わかりました」

飛行機から降り格納庫へ

??「芳佳」

宮藤「え？、お父さん？」

一郎「芳佳、大きくなつたね」

宮藤「お父さん…うわああん」

と言いながら一郎に抱きつく

坂本「え？宮藤博士？」

一郎「お久しぶりだな坂本」

悠太「良かった芳佳、お父さんに会えて」

宮藤「うっ、うっ、」

一郎「今からは一緒に欧州に行くから話は飛行機の中で聞こう」

と言うと宮藤は一郎から離れるUS-2の機内に戻る

悠太「博士、アレは出来なのか？」

一郎「出来たよ、新型エンジンJ3魔導ジェットエンジン」

悠太「出来たか…どの機体に搭載予定を？」

一郎「まずはイペリオンのF<sup>ファイターユニット</sup>U-86、扶桑の震電改、キ-201です、空軍副

長官としてはどれを選びます？個人的にはイペリオンのF-86と震電改ですよ」

悠太「F-86と震電改で、F-86、震電改どちら攻撃機だけだね」

一郎「知ってますよ、わかりましたならその旨をノースリペリオンと九州飛行機に伝

えないとですね」

悠太「そんなことはさておき出発の準備は？」

一郎「ああ、すまない今行く」

一郎が搭乗した後

悠太「当機はこれよりイペリオン発ロマーニヤに向け離陸致します」

凜「時間は約1日と考えております」

1時間後

一郎「芳佳」

宮藤「ん？」

一郎「お父さん、悠太さん達と話してくるけどいいか？」

宮藤「うん、」

と言うと一郎はコックピットの方へと歩いて行く

コックピット内

悠太「眠てえな…」

凜「そろそろ交代する？」

悠太「うーむそうするか」

コンコン

悠太「誰ですか？ユーバブ」

凜「アイハブ」

一郎「宮藤一郎です」

ガチャ、

悠太「どうしたんです？」と言いながらパイロット席から立ちドアを開け一郎を旧機

関士席に誘導する

一郎「これからの話についてです」

悠太「これからの話と言うと？」

凜「ユーバブ」

悠太「えっ？、あ？アイハブ」

一郎「これからは在ロマーニャ扶桑空軍基地の技術者に成れと言われているんですが

…

悠太「あーその件か：それに関しては嫌ならブリタニアあたりの基地でもいいですよ」

一郎「そうじゃなくて芳佳と離れるのかと言う話で…」

悠太「あーわからんなあ：もしかし宮藤が軍属に戻るのなら所属が同じ空軍になり在口空軍基地所属のウィッチになるかも、最近は504空が壊滅したからそうして貰え

るとありがたいって言えばありがたいんですよね」

一郎「わかりました、あとなんですけど」

悠太「ホイホイなんでしょう？」

一郎「本当にいろいろありがとうございます」

悠太「まあはい、こちらこそありがとうございます」

1日後ロマーニヤ地方沿岸部

??「お腹減ったあ」

??「缶詰食うか？」

??「リベオンの缶詰やだー美味しい料理が食べたい」

??「無茶言うなよー大体こっつて補給ないんだぞー」

??「やだー芳佳の料理が食べたーいー」

??「騒ぐと腹減るぞー」

ズーズーと無線が鳴る

??「こちらイエーガー、なに、ほんとにか？了解、直ぐ向かう！、喜ベルツキーニ、扶

桑から補給がくるぞー！」

ルツキーニ「やったーご飯が飛んできたー！」



土方「現在アドリア海上空、間もなく在ロマーニヤ扶桑空軍基地に到着します」

坂本「ふむ」

宮藤「やつと降りられるー」

坂本「鈍ったな宮藤、この程度の飛行でもう弱音か」

宮藤「すいません…あ、そうだお父さんの手紙ってなんだったの？」

一郎「あれはね、新型ユニットの設計図だよ、今そのユニットは宛坂さんの所で目下製作中だ」

ブーブー

悠太「正面2万にアンノン1」

と言った瞬間レーザーが飛んでき、第1エンジンを破壊する

悠太「アンノンからの攻撃、敵と認定する、第1エンジン損傷、第1エンジン損傷」

凜「敵さらに接近中」

消火装置を動かし窓を見る

悠太「第四エンジンに愛着はないな？」

凜「なんだって？」

被弾の反動で第四エンジンのプロペラ全面に細長いゴムが剥がれかけている、それは主にプロペラへの着氷防ぐための物である

悠太「まずいこのままあのゴムが外れれば第四エンジンも飛ぶな」

凜「護衛が居ないから着水も無理」

坂本「ネウロイ確認、距離約1万2000m、奴らめ、もうこんな所まで来ていたのか」

悠太「回避運動開始」

と言うと機体は左に揺れる

宮藤「きやつ」

一郎「芳佳！」

土方「うおっ！」

坂本「ああ」

坂本「土方！」

と土方が機体の揺れで突起物に当たり、腹部を負傷し倒れている

宮藤「土方さん！」

と近寄り、治癒魔法を掛ける

坂本「(魔法力が安定している、成長したな、宮藤)」  
とまた機体が少し揺れる

坂本「今は回避だ、急降下してやり過ぎす！」

悠太「わかつてる」

と機体は急降下する

宮藤「坂本さん！」

と坂本がコックピットへと走る

坂本「どうだ、振り切れそうか？」

悠太「わからん、緊急出力全開」

坂本「頼むぞ」

宮藤「坂本さん……」

坂本「私が出撃するだけでも思ったのか？、安心しろ、今は回避して、地元のウィッチの援軍を待つ」

宮藤「はい！」

同時刻 近海の艦隊

船員A「前方、ネウロイ確認」

艦長「全艦、第3戦速、進路敵ネウロイ」

副艦長「全艦第3戦速、アイ！」

艦長「戦闘用意」

と言うとネウロイに向け、砲が向けられ、発砲する

砲弾はネウロイに当たる寸前に爆発し、破片を飛び散らせる

艦長「見たか、対大型ネウロイ用焼夷弾を、次弾徹甲」

坂本「なんだ？」

艦長「徹甲弾発射」

と発射されて、ネウロイに当たり大爆発を起こす

艦長「やったか！」

宮藤「すごい……」

坂本「ダメだな、あの武装では大型ネウロイは落とせない」

宮藤「っへ？」

坂本「目標が大きから一見当たっているが、コアには届いていない」とネウロイがレーザーを打つ

宮藤「はああ！」

坂本「駆逐艦がやられた、ロマーニヤのウィッチはまだか!？」

土方「少佐、ロマーニヤ第一航空団に出撃を要請しましたが。航続距離不足との回答です！」

坂本「航続距離不足だと…」

宮藤「はっ、まだ船が」

坂本「回避が遅すぎる、あれでは的だ」

土方「直近の504航空団は先日の交戦で…」

宮藤「はっあ！」と攻撃されている駆逐艦を見ながら言う

土方「戦闘力を消失しており、30分以内に到着可能なウィッチ隊はおりません」

坂本「30分だと？このままでは5分で全滅だ」

宮藤「全滅?!」

と言っている間にもネウロイはヴェネチア艦隊を攻撃する

回想

坂本が魔法を起動しする

坂本「やれ！土方！」

土方「ハッ」

と銃を向け

パン、パンと撃つ

それをシールドで防ぐが1発ほぎりぎり止まり、2発目は貫通し、こめかみの近くを通る

土方「はっ、少佐！」

と近寄る

土方「少佐、お怪我は」

坂本「もう、私のシールドはこんな弾つころすら守る力すらないのか」

土方「少佐……」

坂本「ネウロイのビームなど、防ぎようがないか」

と刀の置いてある方に行き、鞘から少し抜く

坂本「土方、私はしばく旅に出る」

現在へ

坂本「出るぞ！」

土方「了解！、出撃準備」

一郎「紫電53型、いつでもいける」

宮藤「ダメです、やめてください！」

坂本「どけ、宮藤」

宮藤「どきません！坂本さんはシールドが貼れないんですよ！お願いです、飛ばないでください！」

坂本「前にもお前にこんな風に止められたな…安心しろ宮藤、私はこんなところで命を落とす気はない」

宮藤「でも」

坂本「確かに、ハタチをシールドが使えなくなつた、だが私には新型ユニットの紫電改があるこいつがある、いちどお前に救われた命だ、そう簡単に捨てたりはしない、安心しろ、宮藤、私は戦える」

宮藤「だったらお願いがあります、私も一緒に戦います」

坂本「ふふ、ハツハツハツハ、よし行くぞ、宮藤」

宮藤「はい！」

坂本「宮藤、お前が閃光してネウロイをヴェネチア艦隊から引き離せ！、後方から私がコアを叩く！」

宮藤「了解」

とUS-2の天板が空き、ユニット発進装置が出てくる

坂本「飛べ宮藤！」

宮藤「行きます！」

と機体から離れた瞬間に

レーザーが飛来して、発射装置を破壊する

宮藤「坂本さん……」

坂本「やられたの発進ユニットだけだ！前を見る！次がくるぞ」

宮藤「はああ」

とシールドを出し防御する

悠太「すっげえや」

土方「なんて巨大なシールドだ！」



坂本「これが宮藤の力だ」

一郎「坂本、魔道過給器が損傷、紫電改飛行不能です」

坂本「なんだと！」

ルツキーニ「ごっはんごっはん」

シャーリー「ほつきゆうほつきゆう」

ルツキーニ「ふっそうのごっはん」

シマパフ「ほっかほっかご飯に」

ルツキーニ「カルパッチョのタコ丼」

シャーリー「うえ、タコは勘弁してくれよ」

ルツキーニ「ええ？タコ美味しいのに、たこー」

シャーリー「あんなうによししてるのよく食べれるなあ

ルツキーニ「うによしによしてえ、ペタペタア！くっ付くのが良いのにー」

シャーリー「いい：そこだけはよくわかんないなあ」

無線「全部隊につぐ、こちらベネツイア第一艦隊、現在ネウロイと交戦中、至急応援

願う、場所はグリット19」

シャーリー「聞いたか？急ぐぞルツキーニ」  
ルツキーニ「らじゃあー」

土方「危険です、少佐！、いまは自重して、紫電改の修理を待つべきです」  
坂本「その修理を待っている間にどれだけの人間が傷つくと思う？」

土方「はっ」

坂本「どうや宮藤の病気が移ってしまったようだ」

「駆逐艦ベニエル大破」

「機関出力低下、このままでは行き足が止まります」

艦長「くそお、何もできずに」

「艦長、ウィッチです！」

艦長「なに？」

艦長「あれは……」

「白地に太陽に月のマーク、あれは扶桑のウィッチです！」

艦長「扶桑だと？」

「ウィッチだ、ウィッチが来たぞ！」

「ウィッチの援軍だ」

「どこの部隊だ」

宮藤 「ははああ！」

とシールドを貼り、レーザーを弾く

艦長 「はああ…すごい」

宮藤 「私が引きつけている間に遠くに離れてください」

艦長 「馬鹿な…一人を残してはいけません」

「艦長、我々に反撃の手段は残っていません」

艦長 「むう…わかった、我々は足手纏いなだけだな、全艦、十六点回頭、全速退避」

と言うと艦隊は回頭を開始する

宮藤 「よかったあ…」

と安堵しているとレーザーが飛んでくる

宮藤 「早く、離れて…」

と太陽を背にUS-2が来る

宮藤 「坂本さん！」

坂本 「悠太、このまま突っ込め！」

悠太「死んだら憎んでやるぜ」

と上着を脱ぎ捨て、魔法力を起動させる

ネウロイがレーザーをため、撃とうとしている

宮藤「危ない！」

坂本「ふん」

と坂本はユニットもつけずに飛び起きる

刀を抜き

坂本「はああああ」

宮藤「坂本さん！」

とネウロイはレーザーを撃ち

坂本「必殺、烈風斬!!」

烈風斬でレーザーごと切り、

坂本「うおうりあああああ」

切りすすみ、ネウロイをコアごと貫通し、撃破する

宮藤「坂本さあああん」

と落ちてゆく坂本をキャッチする

坂本「すまん宮藤、紫電改が故障してな、来るのが遅れた」

宮藤「だからって無茶しすぎです」とお姫様抱っこしながら言う

坂本「どうだ、言ったとうりだろう？ シールドなどなくても私は戦える、この烈風丸があればな」

宮藤「(すごい、本当に本当に坂本さんはすごい人だ)」

坂本「ところで宮藤、烈風丸って名前どう思う？ 一晩中考えたんだかな……」

宮藤「っへ？ かつこいいと思いますよ」

坂本「そうか！ かつこいいか！ よーし、あつははは」

ルツキーニ「シャーリー、あれ！」

シャーリー「うん、ネウロイの破片だな」

ルツキーニ「きつと、ベネチア艦隊がやつつけたんだよ、やるジャーン」

シャーリー「ん、でもまだネウロイの気配があるんだよ」

ルツキーニ「え？ じゃあ他にいるの？」

着水しているUS—2

凜「1基死んでるけど、離水できんの？」

悠太「まあできるっしょ」

土方「お見事です、少佐、紫電改を出すまでもありませんでしたね」

坂本「手応えが無さすぎる」

土方「は？」

宮藤「きつと坂本さんが強くなったからそう感じるんですよ」

坂本「だと言いがな」

悠太「計算上だと：最大離水重量が40tで、発進ユニットが200kg…最大推力が1番エンジン損傷して使えなくなってるから13500shpでしょ…だとすると…25t未満ならいけるかな…」

凜「燃料がほぼ空っぽだし、もしヤバそうな、宮藤が押せばなんとかか？」

悠太「申し訳ないけどそうなるかなあ…」

と腕を組みながら粉になってゆくネウロイを見る

凜「なんか嫌な予感するのは私だけ？」

悠太「安心しろ、俺もだ」

と見ていると粉末が少しずつ上昇してゆく

宮藤「はっ、坂本さん！」

坂本「ふ、ネウロイが再生している？」

凜「え？」

悠太「真のコアってやつか？」

坂本「馬鹿な、コアが生きている」

宮藤「行きます！」

坂本「宮藤、コアは再生中の先端だ、ぶち抜いてとどめを刺せ！」

宮藤「はい！」

とネウロイを打つが、一向にコアに当たらない

坂本「なに、そうかそう言う理屈だったのか、宮藤！そいつのコアは移動している！今は右端だ、逃すな！」

宮藤「へっ？は、はい」

と打ってゆく

坂本「(くそ、弾を交わしている、しかも異常な再生速度、まずいぞ)、宮藤、弾着の直前にコアが移動している、同時多重攻撃を仕掛けるしかない！」

宮藤「同時多重？」

坂本「お前1人では無理だ、待ってる今すぐ行く、紫電改はどうだ？」

一郎「あと5分でなんとか」

坂本「飛べさえすれば良い、3分で仕上げろ！」

宮藤「坂本さん！」

とUS-2に飛んでくるレーザーをシールドを貼り弾く

宮藤「くっ、うう」

坂本「いかん、宮藤の魔法力が限界だ」

宮藤「(っ)、このまま守ってるだけじゃもたない…」

とエンジンを吹かしシールドで弾き続けたまま前進する

坂本「宮藤、無理だ宮藤！」

と芳佳は突っ込んでゆく

ガラガラガラと当て続けている

宮藤「見えた！」

とコアを視認するがコアは潜ってゆく

宮藤「きやつ、待って」

坂本「宮藤、後ろだ！」

宮藤「へっ？」

とレーザーが空中で一点に集まり、攻撃してくる

宮藤「きやあああ」



とシールドを貼るが弾き落とされる

宮藤「きやあああああ」

坂本「宮藤イイイイ」

と頭から無抵抗に落ちて行く

宮藤「し、シールド貼らなきや：へ？」

とキラリと光、ネウロイの装甲に食い込み、爆発する

宮藤「え？」

坂本「まさか！」

シャーリー「やつつほー」

と宮藤の隣をすり抜ける

宮藤「シャーリーさん」

ルツキーニ「ちやおーよしかー」

宮藤「ルツキーニちゃん」

ルツキーニ「見た見た？今の全部命中したでしよー」

ル宮「きやつ」

とレーザーを避ける

シャーリー「なんだこのネウロイめちやくちや硬いぞ」

宮藤 「シャーリーさん、ルツキーニちゃん、どうしてここに？」

シャーリー 「聞きたいのはこっちだよ」

ルツキーニ 「ていうか、そんな暇なさそう」

と散開する

ルツキーニ 「うえええ、さっきの効いてないのお？」

宮藤 「再生速度が速いの」

シャーリー 「火力が足りないか」

と言っていると対物ライフルクラス将球がネウロイに突き刺さる

ルツキーニ 「対装甲ライフルだ！」

シャーリー 「てことは！」

宮藤 「リーネちゃん！」

リーネ 「芳佳ちゃん」

宮藤 「リーネちゃん！」

リーネ 「きやはははは」

宮藤 「無事だったんだ…よかった」

リーネ 「うん、ガリアから今ついたの」

ペリーヌ 「感激している場合じゃありませんわよ」

宮藤「ペリーヌさん」

ジューーと言う音と共にネウロイが爆発する

ペリーヌ「ロケット弾！」

リーネ「見て！」

宮藤「エイラさん、サーニヤちゃん！」

ルツキーニ「きたきたあ！」

エイラ「じゃ、先に私が行くから」

サーニヤ「うん」

とロケット弾と共にバレルロールしながらゆく

坂本「あいつら…修理はまだか！」

一郎「あと1分」

悠太「ユニット持ってこればよかったな」

凜「乗らんやろ…」

「敵ネウロイはコア移動タイプ、再生速度は従来型の2倍を超えるわ」

「再生速度早く潰せば良いだけじゃん」

「全く、せっかくのクリスとの休暇が不意になった」

「ふっふふ、貴方が1番に来るって言ったのよ？」

????????????

「な」

「先に行くよ！」

「ま、待て！」

坂本「来たか！」

シャーリー「3人だ！」

宮藤「ミーナ隊長、バルクホルンさん、ハルトマンさん！」

ミーナ「左右に」

バルクホルン「了解」

ハルトマン「了解」

坂本「ミーナ中佐、総攻撃だ」

ミーナ「わかってるわ、フォーメーションカエサル」

「了解」

一郎「坂本、紫電改、いけます！」

坂本「わかった」

一郎「出力異常なし」

坂本「坂本美緒、出る！」

と発進する

ミーナ「攻撃開始！」

とネウロイに攻撃を開始する

ルツキーニが仕掛けるが、ダメージは少ない

ペリーヌが仕掛けるしかし、トーネードは再生速度に負けるが、そこに対装甲ライフ  
ル弾が刺さり爆発を起こす、ネウロイは雲の中へと退避するが、エイラ、サーニャが追  
撃をする

ネウロイは怒りの反撃をするが、全て避けるかシールドで防がれる

今度はエーリカがシュトウルムを使い、挟む

バルクホルンが近寄り、MG42Sを撃つが、弾切れ、銃身を握りハンマーの用に使  
い、殴る

バルクホルン「つおりやああああ」

宮藤「コアが出た！」

坂本「任せろ！」

宮藤「坂本さん」

ペリーヌ「あは」

ミーナ「美緒！」

坂本「手出し不要！」

とレーザーをエイラのように避ける  
バルクホルン「なんだあの機動」

シャーリー「攻撃を全部避けてるぞ」

エイラ「ん？」

サーニヤ「エイラみたい」

エイラ「無理だ、当たるぞ」

ペリーヌ「少佐あああ」

坂本「切り裂け烈風丸」

と極太レーザーを切り進む

坂本「くらえええ、烈風斬」

とネウロイをコアごと半分に割る

パリンとネウロイは粉へとなる

シャーリー「すげえ、一撃だ」

ルツキーニ「やったああ」

ペリーヌ「はああ、少佐あ、さすがですわ」

バルクホルン「ネウロイのビームを切るなんて、初めて見た」

エーリカ「やろうとした人がいないんじゃない？」

ネウロイの破片が降る中

坂本「ハツハツハツハ、ウイッチに不可能はない！」

艦長「あれがストライクウイッチーズか」

「えっ？ ガリアを解放したと言うあの、ウイッチ隊ですか」

艦長「ああ、501統合戦闘航空団だ、伝説のウイッチたちがアドリア海に降臨した」

US—2

一郎「無理です、悠太さん」

悠太「無理かあ……」

凜「取り敢えず飛ぶか試してみる？」

悠太「だな、博士、戻ってください」

一郎「ああ」

とコックピット内に入る

悠太「全員いいですか？」

「はい」

悠太「離水開始」

数時間後

リーネ「芳佳ちやーん」

宮藤「リーネちゃん！無事でよかったああ」

リーネ「うん、芳佳ちゃん来てくれたんだ」

シャーリー「まさか宮藤が来るとはな」

ペリーヌ「シャーリーさん達はアフリカのはずじや？」

ルツキーニ「ロマーニヤが心配で抜け出してきたー」

エイラ「私たちはスオムス行くはずかき、ちよつと列車に乗り間違えてアドリア海に出ちゃって…」

サーニヤ「エイラの占いで危ないって出たから」

ミーナ「すごい刀ね」

坂本「烈風丸、私が一対一対魔法力を込めて打った刀だ、刀身に術式が練り込んでお  
り、刀自体が協力的なシールドになっている」

ミーナ「それにしても無茶すぎるじゃないの？」

坂本「私は飛びたいんだ、あいつのようにな」

ミーナ「やつぱり、降りるつもりは無いのね…」

坂本「ああ！」

ミーナ「了解」



「悠太さん、凜さんお知らせが」

悠太「なんだ？」

「第一混成支援航空隊はクレタ島に撤退しました」

悠太「それは聞いている」

「それに基づき補填用の2機のF-4UとAK-74Uをこの基地に置いて、第501統合戦闘航空団に合流し、同基地の司令官及び副司令官に任命する、との事です」

悠太「それはどこから？」

「欧州連合軍司令部からです」

悠太「となると拒否権はなしか」

「はい」

悠太「わかった、搭載してる食材は？」

「501部隊によりしくお願い辞す」

悠太「了解です」

ミーナ「では、連合軍総司令部からの命令を伝えます、旧501メンバーは原隊に復帰後、アドリア海にてロマーニャに侵攻する新型ネウロイの迎撃、撃滅せよ、なお必要

な機材は追って送るが、それまでは現地基地司令官との協議の上調達するべし」

坂本「フツ、ハハハ、流石に手際がいいな」

ミーナ「ガランド少将のお墨付きよ」

エーリカ「無理矢理もらって来たんだよ」

バルクホルン「人間が悪いぞ、ハルトマン過程はどうあれ命令は命令だ」

エーリカ「はいはい」

宮藤「ねえねえリーネちゃんつまりどう言うこと?」

リーネ「えっと…」

ミーナ「わたくしミーナヴィルケ中佐以下、坂本美緒少佐、ゲルトルートバルクホルン大尉、シャーロットイエーガー大尉、エーリカハルトマン中尉、サーニヤリトビヤク中尉、ペリーヌクロステルマン中尉、エイライルマタルユーティライネン中尉、フランチェスカルツキーニ少尉、リネットビシヨップ曹長、宮藤芳佳軍曹、ここに第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズを再結成します!」

「了解!」

悠太「…忘れられてるんねえ…」

凜「そうね」

と基地司令室から下で再結成された501JFWのメンバーを見ながら言う  
悠太「どうする？」

凜「なら食堂に居てみる？」

悠太「それもそうだな」

### 食堂

悠太「お久しぶりだね、君たち」

シャーリー「凜に悠太!？」

ミーナ「どうして凜さんに悠太さんが」

悠太「そりゃここの基地司令だからさ」

ミーナ「ガランド少将は…」

悠太「そもそもこの基地はロマーニヤ扶桑基地協定で扶桑空軍の混載部隊の基地としての利用予定だったんだよ、それを連合軍が借り上げて、今の状態だよ」

ミーナ「だから食料があつたのね…」

悠太「ただ、風呂とかはまだないぞ、とりあえず受理書は？」

ミーナ「これよ」

悠太「どうも」とポケットから印鑑を出し押す

悠太「これで、どう基地所属の第501jfwの出来上がりだ」

ミーナ「貴方は…」

悠太「加わって良いなら加わるよ、基地司令としての仕事もないしな」

ミーナ「なら、安田悠太大佐、安田凜少佐を501JFWへ所属を許可します」

悠太「了解」

凜「了解」

エイラ「階級は下がるんだナ」

ミーナ「え？」

悠太「まあ…中将と少将はダメだろうし、下がっても良いさ、せめて中尉とか大尉が

イ良かったけどな」

ミーナ「そんなに上がってるのか不思議ね…」

悠太「そもそもその役職は空軍の副司令官とその補佐だし、強制的に上げられたのさ」

凜「しかも副司令官とかの仕事もないしね、あるのはファルコンウィッチーズの書類

とかだけだし」

ミーナ「そうね」

宮藤「ファルコンウィッチーズのメンバーは元気してました？」

悠太「まあ元気してるよ、そんなことより紹介したい人がいるんだが…どこにいった

のやら」

と言っていると警備服着て、A R ー ーを肩に下げた、守衛が走ってくる  
「ウィッチ隊の皆様すみません、悠太さん、正門に不審者が…」

悠太「あー…もしかしてメガネかけて少し痩せ細った人か？」

「はい、そのとうりですがなせ…」

悠太「とりあえず、通してここに連れてきてくれ、この基地で私と君を除くと彼が唯一ここに出入り可能な人間だろうか…」

「ハッ」

ミーナ「彼は…守衛よね？」

悠太「どうした？一目惚れでもしたか？」

ミーナ「そう言うわけじゃないわ、守衛にしては初めて見る武装を持ってたから気になっただけよ」

悠太「扶桑独立空挺旅団って知ってるか？」

ミーナ「噂で聞いたぐらいよ？」

バルクホルン「私も噂で聞いたぐらいだ」

悠太「扶桑空軍独立第1特殊飛行隊ファルコンウィッチーズの傘下の部隊の一つで今

はこの基地を拠点として警備が主任務だな、あの武装は武装の最新の銃器だ、主任務はネウロイ存在地への降下だ」

バルクホルン「なに大丈夫なのか？」

悠太「新型対ネウロイ擲弾RPG―2を運用しているから陸戦ネウロイなら撃破可能だ」

シャーリー「なんだその奴は」

悠太「あー…カールスラントにパンツァーフアウストあるだろ？あれの改良品だ、一応貫徹力は250だ」

話していると

??「ここであつてるのかな…」

悠太「来たか、全員適当な位置に座れ、紹介する」

宮藤「えっ？」

悠太「宮藤、まだ良いな？」

宮藤「は、はい」

悠太「全員座ったね？よし、どうぞ」

??「えつと…宮藤芳佳の父の宮藤一郎です、特殊ユニットの整備やユニットの改良の

ためにこの基地に派遣されました、よろしくお願いします」  
皆が驚く

ミーナ「本当に生きてたのね…」

バルクホルン「…」

エーリカ「ウ、ウルスラが聞いている驚くだろうな」

シャーリー「どうやったら速度を増やせるかが知りたいな！」

ルツキーニ「がんばれシャーリー！」

エイラ「なくなつたんじゃないやなかつたの力？」

サーニヤ「…」

リーネ「生きてて良かったね芳佳ちゃん」

宮藤「うん」

ペリーヌ「世界を変えた人が目の前に…」

坂本「博士…」

悠太「基本的には格納庫にある部屋で寝泊まりしてるから気になることがあつたら聞いてみてくれ、ユニットの調整とかな、良いだろ？ミーナ中佐？」

ミーナ「ええ、許可します」

悠太「で、博士なにしてたんです？」

一郎「少し、ユニットの部品を…」

悠太「だから、それは後数時間待てば来るって…はあ…良いです値段は？」

一郎「領収書です…」

悠太「ほお…こつちで出しとくよ、このあとは各自中にどうぞ、一応明日からこの基地は始動開始だからよろしく」

次回 ジェットストライカーは技術が必要



# 31話 ジェットストライカーは技術が必要

31話 ジェットストライカーは技術が必要

司令室

悠太「はあ…やっぱり軍役から離れてたから体力落ちてるなあ…」

へとへとになってるリーネ、宮藤ペリーヌを見ながら言う

凜「どうするよ？」

悠太「そこは坂本に任せるしかないだろ？」

凜「まあそうだねえ」

ミーナ「明らかに体力不足ね」

坂本「あの二人はブリタニアの戦いの後軍から離れていたからな、事実半年以上のブランクだ」

バルクホルン「午前中の飛行機訓練でもあの3人は問題が多かったぞ、少佐あのまま

だと実戦に出すのは危険だぞ！」

坂本「そうだな…起きろ二人共

宮藤「坂本さん！」

ペリーヌ「少佐！」

坂本「宮藤、リーネ、ペリーヌ基礎からやり直しだ！」

と坂本の指示でとある家にゆく

悠太「…凜、今日の飯担当って…」

凜「えっ？やばくない？流石にあの人の飯は食いたくないんだけど」

悠太「よし行ってくる、洗濯物は頼んだ」

凜「ラジャー」

食堂

悠太「チラ」

悠太「ふう、誰もいない…」

調理中

ルツキーニ「うじゅ？どったの悠太？」

悠太「飯作ってるだけだが？」

ルツキーニ「何作ってるの？」

悠太「秘密さ」

ルツキーニ「うじゅー」

シャーリー「お、ルツキーニここに居たのか」

ルツキーニ「シャーリー！」

シャーリー「なんで悠太が飯作ってるんだ？」

悠太「そりや宮藤とリーネが居ないからだろ」

シャーリー「そうか、居ないんだったな」

続々とメンバーが戻ってくる

悠太「よっし、配膳するか」

食事後 司令室

悠太「そつち終わったね？」

凜「終わってるよ」

悠太「明日は…南無阿弥陀」

翌日 第501統合航空団基地

ミーナ「あら？悠太さん達は？」

エーリカ「うん、さっき書類を持って行ったところ」

ミーナ「結局何時ごろに帰って？」

エーリカ「夜遅いって」

ミーナ「あら：困ったわね」

エイラ「どうしたんだナ」

ミーナ「昼食は私が腕を振るいましょうか！」

エイラ「エーリカ「えええ？」」

ミーナ「だって調理担当者が居ないんですもの」

エイラ「エーリカ「そんな、お手を煩わせることは…」」

ミーナ「いいのよ、好きでやるんですから」

エーリカ「久々にレーションが食べたいんだよー」

エイラ「ほらー、昔の気持ちを忘れないように！」

ミーナ「確かに初心は大切ね：じゃあ夕食にするわ！」

エイラ「エーリカ「悠太カムバック」」

悠太「ガランド少将、それはいささか無理は話では？」

悠太「正直私としては君がここに座って欲しいんだかな」

ガランド「君は中将だろ？敬語はやめてくれないか？」

悠太「貴方の方が年上でしよう？そう言うことです」

ガランド「はあ…でだ、扶桑軍の増援は？」

悠太「空軍は当分は無理ですよ、滑走路が原因でね」

ガランド「そうか…」

悠太「はあ…終わった終わった」

凜「昼飯はどうしようか」

悠太「その辺の飯屋で食べばいいさ」

凜「今頃エイラ達は何やってるかなあ…」

エイラ「昼は乗り切ったけど夜は避けられそうにないナ」

エーリカ「なんとかしないとね」

エイラ「問題は料理できる人間が居ないってことダ」

エーリカ「今あるカードでどうしろと…」

エイラ「仕方ない、未来を予測してなんとかうまく舵を取ろう」

エーリカ「飯屋がいた！」

エイラ「一人では大変ダロ？中佐手伝いに来たゾ」

ミーナ「本心はわかってます、私の味覚が少し変わってる事が心配できたんでしよう？」

エイラ「え？自覚してくれたのか!？」

ミーナ「宮藤さんの扶桑料理のおかげで味の見識が広がったんですから」

エイラ「エイリカ」おお！」

ミーナ「そう！臭いうまいってこと！」

エイリカ「(悪化してるんじゃないか)」

エイラ「心配するな、一言いいか中佐」

ミーナ「何かしら？」

エイラ「やっぱり臭いものほど美味しいよな！」

ミーナ「まあ！」

エイリカ「えええ!!な、何を…」

エイラ「だって宮藤の臭いまめに発酵したスープ、臭い魚とか美味しいじゃないか、臭いものほど美味しい、これは料理の真髄かもナ」

ミーナ「そうよね、そうよね」

エーリカ「だれかー」

エイラ「こんな時のために用意しました！ニシンの缶詰でいい匂いなんだ！」

エーリカ「どんな？」

エイラ「ちよつと生ゴミが腐り切ったよりキツイぐらいだな」

エーリカ「だれーかーきてえー」

ミーナ「缶詰だとレーションと変わらないわね、用意してたこれで味付けをしましよ  
う？」

ミーナ「アンモニア！」

エーリカ「ネウロイ！今来てえ！」

エイラ「この間は開けた時中身の汁が噴出するから注意だな」

エーリカ「せめてそんなもの外で開けようよ！」

エイラ「あれ？缶が変形してうまくハマらないなあ」

エーリカ「止めるチャンスだよ！」

ミーナ「あらこちらも硬くて開かないわ」

エーリカ「神様がやめろって言ってるんだってー」

エイラ「そうだ！坂本少佐なら容器をぶった斬れるじゃないか？」

ミーナ「そうね！二つまとめて頼みましょう？」

エーリカ「ねえ聞いてよ」

坂本「そんな刺激物をここで開けようとしたのか…」

坂本「落ち着け、ちゃんと断るから」

坂本「なあ、ミ」

ミーナ「美緒もきつと気にいるはずよ？」

エイラ「発酵食品が好きな扶桑の人に是非と思つて用意したんだ」

坂本「そ、そうか、では外で開けるか」

エーリカ「こ、断つてよ！」

坂本「私になつて言えないことがある…」

ミーナ「じゃあ美緒？お願いね？」

坂本「あ、ああ」

エーリカ「がんばーれーしようさー」



坂本「遠くないかハルトマン！なあ！」

坂本「じゃあいくぞ」

坂本「ピクピクピク」

悠太「ふああ…夜までには帰ってこれたな…つて坂本がし、死んでる」

凜「あの刀が刺さってるのジュールストレミングじゃない？」

悠太「ああ…」

翌日

ミーナ「観測班からの報告では、出現場所のヴェネツィアからアドリア海沿岸をバリー方向にまっすぐに移動してるわ」

坂本「直線的にしか移動しないタイプのネウロイだな」

地図に一本線を引く

坂本「迎撃地点は海上か」

ミーナ「それまでは陸地を擦るだけ、上陸はしなさそうね」

坂本「これなら緊急出動の必要はないか…いや！」

ミーナ「ここは…」

地図の唯一掠めてる部分を見て言う

坂本「まずい！」

数時間後

悠太「それで宮藤達が迎撃したと…無茶するぜ全く」

宮藤「ですけど！」

悠太「別に咎めてるわけじゃない、褒めることさ、アンナさんからも感謝の言葉があったらう？そう言うことさ、距離的に言えばうちのユニットなら間に合ったんだかな…」

ペリーヌ「ならどうしてですか？」

悠太「整備途中だったんだよ」

リーネ「そのユニットって前の部隊から譲渡され物だから整備されてるんじゃない？」

悠太「それがな、置いていったのは予備になんだよ、あと整備されたところで燃料がないわけ…」

リーネ「ええ？」

悠太「残念ながら本当なんだよね…って…ん？」

凜「ん？」

悠太「そういうや今日カールスラントからの新型ユニットの到着日だよな？」

凜「だっけ？」

宮藤「そろそろご飯なのでみなさん呼んできますね？」

凜「行つてらっしゃい」

宮藤「行こう？リーネちゃん！」

リーネ「うん」

数分後

格納庫

悠太「なんだなんだ？」

ミーナ「また勝負するみたいよ…」

悠太「はあ…何と何？」

ミーナ「カールスラントの試作ジェットストライカーよ」

悠太「つてことはシュヴァルベか」

ミーナ「そう、ME262V1よ」

凜「なら私のユニットで今から追いかけても追いつけるね」

悠太「そりゃ追いつけるさ」

ペリーヌ「一体なんの騒ぎなんですか？」

リーネ「バルクホルンさんとシャリーさんが勝負してるんです…」

ルツキーニ「最初は上昇勝負だよー頑張れシャリー！」

サーニヤ「シャリーさん、1万2000メートルで上昇が止まりました、バルクホルンさんまだ登ってます、すごい」

エイラ「ほへえ」

シャリー「といつ」

ジャガイモを取る

バルクホルン「くうう…」

シャリー「アツハハ、かったかったー」

バルクホルン「ふん、負けた腹いせか？みつともないぞ大尉」

シャリー「ふああ、うめえ」

ルツキーニ「シャリー！次は頑張つてね！」

シャリー「おお、任せとけて」

ガシャンガシャン

宮藤「そんなにいっぱい持って飛べるんですか？」

シャーリー「私のP-51は万能ユニットだからな、いざとなればどんな状況に立って対応できるんだ」

ペリーヌ「今度はなんですか？」

リーネ「搭載量勝負だそうです、重いものをどれだけ持てるかって」

ペリーヌ「それよりシャーリーさんは胸の搭載利用を減らしたほうがよろしいんじゃないかって？」

バルクホルン「待たせたな！」

と4門の中口径機関砲、1門の大口徑機関砲をもったバルクホルンが出てくる

宮藤「大丈夫ですかバルクホルンさん！」

バルクホルン「ふん、問題ない」

シャーリー「おいおい、そんなんで飛べるわけないだろう？悠太達だってそんなんで飛んでるわけじゃないんだし」

悠太「まあ基本的に中口径1門と翼下にミサイルだからぱつと見は少なく見えるよ

ねえ」

余裕で上昇するMe262を見ながらシャーリーが「嘘だろ」と呟く

バルクホルン「目標を確認」

と言うと4門の機関砲を的に撃つ  
的は爆散する

バルクホルン「すごい、すごいぞこのジェットストライカーは！」

シャーリー「マジかよ……」

宮藤「夕食は肉じゃがですよー」

シャーリー「私は料理のことはあんまりわかんないけど、宮藤の作るものはなんでも  
美味しいな、これ魚の出汁か？」

宮藤「鯉です、ウフフ、ありがとうございます」

ペリーヌ「それにしてもどうしてこんなに油臭いところで食事することになるのかしら

……」

?? 「いやはや、油臭いところですまないね」

とMe262のユニットの近くから一郎が出てくる

ペリーヌ「は、博士…」

エイラ「食べながら文句言うナ」

リーネ「芳佳ちゃん、バルクホルンさんとシャーリーさんのことが心配なんですよ」

宮藤「私にできることはこのくらいだから…あ、お父さん」

宮藤「ほら、お腹が空くと怒りっぽくなるって言うじゃないですか」

ペリーヌ「そうでしたっけ？」

宮藤「あの、バルクホルンさんもお疲れじゃないですか？」

お盆をもって言う

バルクホルン「ああ、そこに、置いといてくれ、今は少し休みたいんだ」

悠太「博士どうだった？」

一郎「正直まだ細かいところが見れてないからなんとも…本人の体調が優れないだ  
けって可能性も無いことはないですし…」

凜「でも異様だよな、あのやすれかたは…気が抜けたような感じ」

一郎「細かい整備もある程度はするので多少マシになるとは思いますけど…」

翌日

ルツキーニ「よいドン！」

言うのとシャーリーが前進し始めるが、バルクホルンがホバリングしたままルツキーニ「あれ？バルクホルン？どーん」

ギイイイン

バルクホルン「ふっ」

シャーリー「ふん？」

振り向くとバルクホルンがすごい勢いで通り過ぎる

バルクホルン「すごいぞ、まるで天使に後押しされてるみたいだ」

シャーリー「わ、私がスピードで負けるなんて…」

シャーリー「なんだ？」

バルクホルンが異様な動きをし、海に落下する

ペリーヌ「落ちた？」

バルクホルン「ん、んんう…」



エーリカ「あ、起きた」

バルクホルン「どうしたみんな：私の顔に何かついてるか？」

宮藤「バルクホルンさんよかったあ」

エーリカ「トルウーデ海に落ちこつたんだよ？」

バルクホルン「私が？落ちただと？」

ミーナ「魔法力を完全に使い果たして、気を失ったのよ、覚えてないの？」

バルクホルン「馬鹿な：私が初歩的なミスをするわけがない」

坂本「大尉のせいじゃない、おそらく問題はあのジェットストライカーにある」

ミーナ「はつきりとはわからないけど魔法力を著しく消耗させてるんじゃないかしら

…」

バルクホルン「試作機に問題はつきものだ、あのストライカーは素晴らしい、実践配備のためにまだまだテストを続けなければ…」

ミーナ「ダメよ？貴方の身を危険に晒すわけにはいかないわ、バルクホルン大尉、貴方には当分の間飛行停止の上、自室待機を命じます」

バルクホルン「ミーナ」

ミーナ「これは命令よ」

バルクホルン「了解」

ミーナ「現時刻を持ってMe262の使用を禁止します！」  
数日後

バルクホルン「くうううう」

パキーン

と鎖がちぎられる

リーネ「命令違反です、大尉！」

バルクホルン「今あいつを助けるにはこれしかないんだ」

宮藤「でもまだ体力が」

ミーナ「トルウーデ！」

バルクホルン「すまんミーナ、罰は後で受ける今は」

??「6分だ、いいな？大尉殿、6分だけだ！それ以上は命が持たない」

バルクホルン「博士、わかった」

シャーリー「ここだ！」

カチカチ

シャーリー「ジャムった！」

と多段式ミサイル型の弾頭部が分裂しシャーリーに攻撃しようとしてくるがズドンズドンズドンと腹に響くような爆音と共に片方のネウロイが爆散するシャーリー「えええ？」

ズドンズドンズドンとまた撃ち、ネウロイを破壊するシャーリー「バルクホルン！」

シャーリー「すげえ……」

と破壊されたネウロイを見ながら言う

ペリーヌ「ジェットストライカーは使用禁止のはずでは」

坂本「バルクホルンめ、無茶しやがって……」

エーリカ「ニツシシシ」

シャーリー「やったぞバルクホルン！、おい？バルクホルン？」

シャーリー「どうなってるんだ？バルクホルンのスピードが落ちないぞ！」

一郎「やばい！今すぐ緊急投棄させる！ストライカーが暴走しやがってる！このままだと大尉の命がまずいぞ！」

ミーナ「シャーリーさん」



坂本「バルクホルンが命令違反なんて初めてじゃないか？」

??「みなさん、どうもお騒がせしました」

坂本「なぜお前が謝るんだ？」

シャーリー「ハルトマンのせいじゃないだろ？」

??「いえ、私は」

リーネ「皆さーん、お腹空いてませんかあ？」

リーネ、宮藤、悠太が食事を持ってくる

宮藤「お芋がたくさん届いたので作ってみました、はい、ハルトマンさんどうぞ」

??「はい、いただきますね」

宮藤「あれえ？メガネなんかしてましたっけ？」

??「はい、ずっと」

エーリカ「おお、美味しそう！」

宮藤「あつ、こっちのハルトマンさんもどうぞってええええ！」

一同「え？」

??「お久しぶりです、姉様」

エーリカ「あれ？ウルスラ？」

一同「お姉様あ？」

ミーナ「こちらはウルスラ・ハルトマン中尉、エーリカ・ハルトマン中尉の双子の妹さんよ」

一同「妹？」

ミーナ「彼女はジェットストライカーの開発者の一人なの」

一同「へえ」

ウルスラ「バルクホルン大尉、この度はご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした、どうやらジェットストライカーには致命的な欠陥があったようです」

バルクホルン「まあ試作機にトラブルはつきものだ、気にするな、それより壊してしまつてすまなかつたな」

ウルスラ「いえ、大尉がご無事で何よりです、この子は本国へ持つて帰ります」

シャーリー「代わりと言つてはなんです、お騒がせしたお詫びにじゃがいもを置いていきます」

ペリーヌ「またこんなに」

ジャガイモの山を見ながら言う

一郎「はじめましてウルスラ中尉」

ウルスラ「えつと…」

一郎「宮藤一郎だ、よろしく」

ウルスラ「あの…宮藤理論の？亡くなったはずじゃ…」

一郎「色々とおつてね、例のジェットストライカーなんだけど、安全装置が動いてなかったよ、その安全装置は宛坂君が特許証ごと置いて行ったと聞いたがそれは？」

ウルスラ「あれは…そこまで使えそうになかったの…」

一郎「なに？あれだけ素晴らしいものが使えなかったか…彼に連絡を入れておこう、すまないね、邪魔して」

次回 愛は必ず勝つ お楽しみに

## 3 2 話 愛は勝つ

3 2 話 愛は勝つ

司令室

悠太「ふわああ、買い物？」

凜「そうね…特にないかなあ」

宮藤「わかりましたー」

と出てゆく

悠太「さあて、こんなに書類が溜まってるとは思わなかったな」

凜「ね」

と書類仕事を始める

バルクホルン「と言うわけで目覚まし時計を頼む」離れてゆく

宮藤「あ、はい…めざまし…」



エイラ「ミヤフジ!!」

宮藤「はっ?」

エイラ「枕だ!」

宮藤「え? 枕?」

エイラ「色は黒で、赤のワンポイントがあるといいナ素材はベルベットでなかったら手触りのいいやつナ! 木綿は水鳥の羽でダウンかスモールフェザー」

宮藤「ちよ、ちよっと」

エイラ「わかったか?」

宮藤「エイラさん、いっぺんに言われてもわかんないですよ!」

エイラ「仕方ないナア、書いてやつから間違えんなヨ?」

メモ帳を取り上げ書き始める

エイラ「いいカ? 忘れんなヨ? 絶対だゾ?」

リーネ「行つてらっしやーい」

宮藤「行つてきまーす」

リーネ「(無事に帰ってきてね…)」

数時間後

悠太「はあ？皇女を拉致った？」

ミーナ「…さようなら悠太さん…」

悠太「なんで俺に郵便が来るんだよ！来るとしたらガランドかミーナだろ？」

ミーナ「本当のところ言うとお咎めなしよ、代わりとしてパスタが空挺投下で落とされたわ…」

悠太「パスタか…何にして食べばいいんだ」

ミーナ「なにか支援物資とかないかしら？」

と話していると滑走路から甲高い音が聞こえる

悠太「今日扶桑から予定だったか…？」

ミーナ「その辺は貴方でしょ？」

凜「今通信入ったよ」

と部屋に入る

悠太「なんで？」

凜「臨時補給隊を送った、パスタだけじゃ味気ないだろう？つてさ」

悠太「どこから？」

凜「ソコトラ島からだって、一応山本五十六元帥閣下からだって」

悠太「はあ：見に行くか」

格納庫

パイロット「中将殿、こちらです」

悠太「ありがとう」

と書類を受け取る

悠太「食料と多少の航空用燃料か」

ミーナ「この燃料ウィッチ用じゃなくないかしら？」

悠太「ん？ああ、俺らのユニット用のやつだよこれ」

ミーナ「そう」

悠太「さあて、搬入開始するか」

坂本「空軍の偵察機が撮ってきた写真だ」

と高く聳え立つ一本の黒い柱の写真を見せる

バルクホルン「ノイズしか映ってないようだが」

坂本「これが昼間現れたネウロイだ、全体を捉えようとしたらこうなった、全長は3万メートルを超えると推測される」

バルクホルン「三万☒高さ30キロって事か？」

宮藤「えっと…それって富士山の…」

坂本「これが毎時10キロと言う低速でローマ方面に移動している、厄介なのはこいつのコアの位置だ、ここだ」

と先端を指差す

バルクホルン「てっぺん？」

坂本「ああ、私がこの目で確認した」

ペリーヌ「ですが、私達のストライカーユニットの限界高度は精々1万メートル…」

坂本「だから作戦にはこいつを使う」

と画像が切り替わる

坂本「ロケットブースターだ」

宮藤「これがあればコアのあるところまで飛べるんですか？」

バルクホルン「そんな簡単な話ではないはずだ」

ミーナ「そうね、ブースターは強力だけど、魔法力を大量に消費するから短時間しか飛ぶことはできないわ」

シャーリー「だったら私たちみんな誰かを途中まで運ばば良い」

坂本「そう言うことだ」

シャーリー「しっかし、3万メートル上空ってことは空気もないよなあ」

ルツキーニ「ええっ！空気ないの?!」

エーリカ「じゃあ喋っても聞こえないね」

シャーリー「おお、かもな」

ルツキーニ「ええ！聞こえないの！」

ミーナ「3万メートルの超高高度は人間の限界をはるかに超えた道の要域よ」

坂本「だが、我々はウィッチだ、ウィッチに不可能はない、そこで瞬間的火力かつ、広範囲にわたる攻撃力を備えるものとしてサーニャ、お前に頼みたい」

エイラ「うえっ？」

坂本「この作戦にはお前のフリーガーhammerによる攻撃力が不可欠だ」

エイラ「はいはいはい！だったら私も行くー」

坂本「ふう：：そうか、時にエイラお前はシールドを貼ったことがあるか？」

エイラ「シールド？自慢じゃないけど実戦でシールドを貼ったことなんて一度もないンダ」

坂本「なら無理だ」

エイラ「うん、ムリだなっえ？」

ミーナ「そうね：：こればっかりは」

エイラ「な、なんで！」

ミーナ「今回の作戦はブースターを使用する上に今日極限環境での生命維持、そして攻撃ととても多くの魔法力を消耗するわ」

坂本「となればサーニャには自分の身を守る余裕はないだからもう一人、サーニャの盾となり、守るものが必要となる」

エイラ「わ、私は別にシールドを貼れないわけじゃないゾ！」

坂本「たが実戦で使ったことはな」

エイラ「そのとうりだ！」

ミーナ「やっぱり無理ね」

坂本「むう……宮藤お前がやれ」

宮藤「は、はい！……え？」

坂本「最も強力なシールドを貼れるお前なら適任だ」

宮藤「は、はい」

いろいろあり

悠太「作戦結構日だな」

凜「エイラとサーニヤの件どうなると思う？」

悠太「さあな、俺たちは有事の際に備えて、地上待機なわけだし」

凜「お？打ち上げ準備完了かな」

悠太《第一打ち上げ班準備は？》

坂本《出来ている》

悠太《スリー ツー ワン リフトアップ》

と上昇し始める

悠太「第一打ち上げ班、離脱、ロケットモーター点火」

凜「種子島以来だね」

悠太「これは弾道ミサイルさ」

凜「第二打ち上げ班も離脱確認、あとはあの二人を待つしか…って？え？」

悠太「んって宮藤！どうし…ああ…エイラやりやがったな…」

凜「愛ってすごいね…」

悠太「ある意味歪んだ愛だろ」

悠太「ネウロイの消滅を確認っと」

凜「エイラはどうするよ？」

悠太「ミーナはしたいだろな、少なくとも1週間程度の飛行停止処分で終わるだろうけど」

次回 扶桑新型ジェットストライカー



## 33話 扶桑新型ジェットストライカー

33話 扶桑新型ジェットストライカー

早朝

格納庫

悠太「ふう…」

煙がひとつたつ

サーニヤ「どうしたんですか？悠太さん」

悠太「ん？まあ今からロンドンに行くから待ってるのさ、あそうそう今日の正午から浴場が解禁されるから時間が有ればお入りに」

サーニヤ「はい」

凜「あ、サーニヤン」

対Gスーツを着て出てくる

サーニヤ「あ、凜さんそ、その格好は？」

凜「ん？これ、これね対Gスーツって言って、新世代のパイロットスーツだよ」

サーニヤ「パイロットスーツって戦闘機に乗る時に使うんじゃないんですか？」

凜「そうだね」

格納庫の端に置いて大型のシートを被ったものに近づきシートを取る

悠太「よいしょっと」

サーニヤ「飛行機にしては変な見た目ですね…」

凜「F-4 ファントム扶桑の新型機だよ」

サーニヤ「扶桑の機体なのにリベリオン語なんですね」

悠太「まあな」

機体の近くにある発動機の電源を入れ、ファントムに接続する

サーニヤ「これって…ジェットってやつですか？」

凜「だね」

悠太「凜翼見てくれ」

凜「あいよー」

操縦桿を左右上下に動かす

凜「ロール問題なし、ピッチもヨーもオールおっけい」

悠太「了解」

ファントムを滑走路の真ん中に移動させる

凜「夕方には戻るから安心してね、まあミーナと坂本にも言ってるから大丈夫だろう

けどね」

サーニャ「はい」

悠太「ゆつくり休めよ」

凜は機体に乗る

凜「キャノピー閉じて、離陸準備は？」

悠太「チェックリストの読み上げも終わらせたらいけるよ、良い？」

凜「良いよ」

悠太「スロットルパワー90」

凜「軽装だけど、それで離陸出来る？」

悠太「少し離れたからパワー110、アフターバーナー点火、全力で加速するぞ」

凜「落ちそうだよおお」

悠太「安心しろもつち上がるさ」

滑走路の端まで行き機体は落ち込むが

海水を巻き上げながら上昇する

凜「怖っわ」

悠太「発艦好きだろ？」

凜「あれはカタパルトで押し出されるのが好きなだけだけえ」

悠太「このまま上昇してロンドンまで一直線だ」  
約1時間後

凜「クロイドン久しぶりに来たね」

悠太「ここで色々あったからなあ…」

着陸し、格納庫付近に停める

「悠太さんお久しぶりです」

と扶桑軍の整備服を着た男性が言う

悠太「機体を頼む」

「燃料だけで良いんですよね？」

悠太「ああ」

「了解です」

在ブリタニア扶桑皇国大使館

悠太「安田悠太中将入ります」

凜「安田凜少将入ります」

?? 「入りたまえ」

ガチャ

悠太 「五十六提督、お久しぶりです」

悠太 「物資の件についてはありがとうございます」

五十六 「いやいや良いんだよ、君たちが制空権を取ってくれるから我々は安全に海上を移動できるんだ、それよりどうしたんだ？」

悠太 「え？話というのは？」

五十六 「話？そんなものあったか？」

悠太 「え？」

?? 「すまない、呼んだは僕なんだ」

悠太 「栗林忠道大将、はじめまして」

忠道 「はじめまして、君を呼んだのは単純に話してみたかったからだ」

悠太 「はあ……」

忠道 「最年少で中將と少將になった奴がいると聞けばあつてみたくなるのが武人だろう？五十六くん」

五十六 「確かに最初はどんな子が来るか少し期待したが我々の少し下ぐらいか？という貫禄があるな」

悠太「前世と言いますか何と言いますか…その時は少なくとも30でしたからね…」  
忠道「それで大佐だろう？」

悠太「まあ…我々の世界の扶桑<sup>日本</sup>が最後に実戦に参加したのが敗戦したから約70年ぐ  
らい前ですからね、自分が運悪く戦後初の実戦経験者になつてしましましたからね…そ  
の影響で、です」

忠道「不運だつたんだな、少し質問なのだが…そちらの世界の陸軍というのはどう  
なつてたんだ？」

五十六「確かに敗戦後の世界というのは少し気にはなるな」

悠太「陸軍というと師団旅団数ということでしょうか？」

忠道「そうだ」

悠太「約20個師団、10個の旅団ですな、定員が最大で7600人ぐらいだったか  
な、その一扶桑「日本」には海外領土なんてありませんでしたので北部、東北、東部、中  
部、西部と5方面軍から成り立つてたと思います、あとは陸軍下に3個の海兵団、1個  
の空挺団とそこまで多くはないと思います」

忠道「こちらで言えば約22個師団といったところか少ないのか多いのか不明わか  
らんな」

悠太「正直な所言いますと平時であり、武装が違いますから」

五十六「70年も進めば変わるか：海軍はどうなっているんだ？」

悠太「前にお話ししたように戦艦はもろろんのこと巡洋艦が廃れほとんどいなくなるのはリベリオンが2000年台に入っても有事の際には動かせるようにならな博物館に置いてある形のみでしたね」

五十六「さすがあれだけの大国だな、となると駆逐艦がメインか？」

悠太「ですね、駆逐艦が最大で確か70隻、空母が1隻、潜水艦が約30隻でしたかな」

五十六「潜水艦がそんなに？そりやどうしてだ？」

悠太「我々の世界だと対艦戦闘がメインなので、魚雷：は…」

五十六「一応我々そんなものを作つてはいるが実用性がなくて横須賀基地に放置されてるな」

悠太「あるんですか：まあ我々の世界では魚雷というのは敵艦を追尾する能力があるわけで、水中から対水上の艦艇を狙い撃ちというわけです」

五十六「なるほど：ネウロイがもし水上航行をすればありではあるな、となると対潜と言うとは我々と同じくソナーか？」

悠太「はい、ソナーです」

五十六「ほお：やはりそこは変わらぬか、所で新しい機関について相談したいのだが」

…

悠太「技術面ではこそまでですけど、多少ならわかるかもしれません（なんだ…？原  
子力か？）」

五十六「ヴァルター機関って言うんだが…それについてわかることを少し話して欲しいんだ」

悠太「彘？」

凜「ヴァルターって過水が分解する時に出た蒸気とかを使ってタービンを回すやつだよね？」

忠道「おお、知っているか、それが今陸海軍の要撃機として計画されてるんだが…」

悠太「試製秋水、海軍だとJ8M、陸軍だとキ200、武装はホ155—IIを2門とこのぐらいですかね、細かな性能は覚えてないですね」

五十六「おお、手元にある性能表と同じだ」

忠道「そちらの世界にもあったか…活躍は？」

悠太「試作のみで終わりですよ、少なくとも本土決戦用でしたからね」

五十六「本土決戦か…考えたくないな」

忠道「となると、設計を中止し、別のものに切り替えるか？」

悠太「これに関しては私じゃなくて秀太に聞いてやってください、決めるのはあいつ



ですから」

五十六「だな」

忠道「ああ今日はありがとう、帰っても良い」

悠太「とはいえまだ10時ですよ？正直するのがないです」

忠道「まあ町周辺を見て回って見たらどうだ？なんならなんなら在ガリア大使館に連絡してガリアでもみて回るか？」

悠太「そこまでしなくてもいいですよ、13時頃までこの辺をうろついてますよ、では」

五十六「この国では君の立ち位置を知ってる人間は少ないだろうが、それでも気をつけるんだ」

悠太「ええ、分かっています」

凜「では、失礼しました」

大使館外

凜「こう言う時は大抵変なことが起きる」

悠太「起きないわけがない」

ロンドン市内

悠太「特になくてよかった」

凜「ね」

悠太「ん？あれ、ロスマンじゃ無い？」

凜「ほんとだ」

近すぎ

凜「お嬢さん、危ないですよ」

凜がロスマンの手を取る

ロスマン「え？」

凜「お久しぶりです、ロスマンさん」

悠太「同じく、お久しぶり」

ロスマン「お久しぶりです」

凜「あの人は？」

ロスマン「知らないわ」

悠太「ええ？」

クルピンスキー「先生え…忘れないでよお…」

悠太「うわびつくりした」

クルピンスキー「あと僕の先生に手を出さないで欲しいね！」

ロスマン「貴方のじゃ無いわよ…全く、お二人さんは何用なのかしら？」

凜「少し大使館にお呼ばれでしてその帰りだよ、逆にお二人さんは？」

ロスマン「買い物よ」

悠太「502基地の方は色々大変そうだね」

ロスマン「少なくともあの物資大変助かりました」

クルピンスキー「ブドウジュースが入ってなかったのは残念だけどね」

悠太「うち便利屋じゃな」

「じゃ無いんだけどな」と言おうとした瞬間、ドゴオオンと大きな爆発音がする

悠太「伏せろ！」

近くの車の影に隠れると近くに車の残骸が降ってくる

凜「車が爆発した…？」

ロスマン「…REAかしら…」

悠太「なんだ？知ってるのか？」

ロスマン「一年ぐらい前までいたテロ組織よ、ここ最近は全く姿を出さないってBB

Cラジオで言ってたわ」

悠太「REA…?」

ロスマン「知らないのね、エリン共和国軍よ」

凜「我々の世界じゃ居なかったやつなのかなあ…」

悠太「あ、もしかしてIRAか…正直関わりたく無いが…」

パンと聞き馴染んだ音が複数回聞こえる

凜「IRAなら納得だね、でもどうすんの?」

悠太「そりゃ、しばいて通るしかねえだろ」

凜「だね」

と鞆から銃を取り出す

ロスマン「え?」

悠太「ふうー、3、2、1、Goで飛び出すから3人は建物内に入ってくれ」

ロスマン「わ、わかった」

クルピンスキー「わかったよ」

凜「援護頼んだよ?」

悠太「3…2…1…Go go」

言うのと飛び出し、犯人側を撃つ

犯人「あっちだ!」凜達の方を何発か撃つ

悠太「こつちだよバーカ」

凜「走って早く！」

悠太「凜の方は良さそうだが…ぱっと見敵は10人は居たな…どうするか」

悩んでいるとキュラキュラキュラとキャタピラの音が聞こえる

??「悠太、むかえにきてやったぞ」

と緑色のM110が来る

悠太「秀太!?お前どうして？」

秀太「こいつの試験も兼ねて、これで大使館に来てたんだよ、その時に運悪くだ」

後部ハッチが開く

「中将殿、お乗りに」

悠太「良いつと、そこの建物の入り口にケツからつけてくれ」

秀太「凜が居るんだな？」

悠太「ほかに2人いる、ほぼ民間人だな」

秀太「あいよ」

装甲車を動かす

ガンガンと被弾するが装甲が凹む程度である

悠太「こいつ装甲いくつなんだ？」

秀太「ジュラルミンの40mmだよ、ぱつと見相手はシカゴタイプライターだから大丈夫だ」

悠太「対応とかは聞いてるんか？」

秀太「ブリタニア警察待ちだぜ！」

悠太「だろろうなあ」

秀太「そろそろやぞ」

悠太「ハッチ用意」

「ハッ」

悠太「ちよつと銃借りるぜ」

パチられた兵士「ええ？」

「ハッチ解放，3，2，1解放！」

と開けると同時に悠太がAR-1を持ち飛び出る

悠太「こつちだバカ共！」

と言い射撃する

凜「秀太、Go」

秀太「あいあいさー」

凜も車外出て

悠太の背中をトントンと2度叩く

悠太「あいよ」

M110を盾にしながら撤退する

悠太「ローディング」

凜「車内に戻る？」

悠太「ぱつと見で7人、どうする？」

凜「撤退…したいけど警察隊の被害がやばいことになるよね…」

悠太「車内に戻る」

ドンドンドンとM110の車体を叩くと後部ハッチが開く

悠太「どうも」

ロスマン「二人とも無茶しすぎじゃないかしら？」

クルピンスキー「そうだよ、流石に無茶だと思うね」

凜「無茶はしてなんぼでしょ？」

悠太「そうだな、秀太」

秀太「お客さんどうする？」

悠太「どうするもこうするもねえ…つとブリタニア警察のお出ませ」

とM8の砲塔を撤去した装甲車が角から出てき、警官らしき人が下車しM3を乱射する

秀太「どうする？司令殿」

悠太「あの装甲車の隣に停めるように移動してくれ」

と言うとM110は道路の真ん中を堂々と移動し、M8の近くに後ろを向け停める  
ドアを開けると

偉そうな警官がM3を向けている

警官「何者だ！」

悠太「やめろ、扶桑軍人だ」

と両手を挙げて言う

警官「扶桑軍人がいるとは聞いてないぞ！」

悠太「そりゃ突然オツパじまったからしってるわけねえだろ」  
とポケットから軍人手帳を出し見せる

警官「な…」

「隊長話が」

警官「先にこいつらから…」

「内務省からです…」



警官「なに？」

と無線のある方へ使う

警官「貴様らは待っている！」

悠太「早めにな」

悠太「秀太、ここになんの武器がある？」

秀太「なんだ？あいつらをやるのか？」

悠太「ちげえよ馬鹿、あのテロリスをやるんだよ」

秀太「そう言ってもあるのはA R — 1ぐらいだぞ」

悠太「車上に着いてるブローニングは？」

秀太「あるだけで弾が入ってねえ」

悠太「それ以外は？」

秀太「何もねえよ？…いや待て？」

と車内に戻り

秀太「ここに…あつた！」

ランボーよろしくR P G — 2を構えて出てくる

悠太「馬鹿、全部吹き飛ばす気かよ！」

秀太「そっかあ…」

警官「おい」

悠太「何です？」

警官「ちよつとこい」

悠太「はいはい」

警官「はいはい」

すると無線機を渡される

警官「変われと」

悠太「はいはい、《安田悠太ですがどなた？》

《はじめまして、内務省のマーチン・フィンだ、君の話は聞いているよ、扶桑軍の高官なんだろう？そしてその道のプロフェッショナルだとか？》

悠太《はあ…プロではないですけど、多少はできますよ多少は》

マーチン《なら、そこにいる部隊を傘下に加え、やってくれないだろうか？》

悠太《どんな普通にやればいいんです？手元にあるものを使えば建物を吹き飛ばし殺すことも可能ですか？》

マーチン《できれば平和的にだな…》

悠太《平和的に殺せですね、わかりました》

マーチン《あまり建物を壊さないでくれよ?》

悠太《了解です》

警官「:」

悠太「隊員を全員集めろ」

警官「り、了解」

2分後

悠太「今の状況は?」

「えっと、REAの連中は7人、全員あの建物で人質を取ってます」

悠太「なんか要求してるものは?」

「エリン地域の独立解放です」

悠太「はあ:人質の人数は?」

「逃げ遅れた人が5人です」

悠太「人質がいなければ吹き飛ばすんだかな:スモークグレネードとかはあるか?」

「ないことはないですけど:」

悠太「何個だ?」

「えっと10個ぐらいですかね」

悠太「全部もってこい、あと秀太の部下は集まってくれ」

「了解しました」

悠太「うちの小隊長は？」

小隊長「ハッ」

悠太「選りすぐりを二人」

小隊長「そればどう言った点で？」

悠太「近接戦闘だ」

小隊長「ではこの二人です」

「磯部いそべごろう五郎一等兵です！」

「川谷たにかわしんご新吾です」二等兵です！」

悠太「五郎、新吾、凜こっちへ」

五郎、新吾「ハッ」

凜「了解」

M110車内

悠太「武装は二人はA R—1、俺と凜は自分だ、やり方はこう、人質がいる場所にもークを投げ込み、突入開始、犯人は主犯格と思われる以外の犯人を射殺いいな？」

「了解」

数十分後

悠太「俺が先頭で、凜が一番後ろ、後方のシールドは頼んだぞ」

凜「わかってるよ、そっちもシールドミスって怪我しないでよ？」

悠太「わかってる、二人とも準備は？」

五郎「いつでもいいですよ」

慎吾「同じくいつでも」

悠太「3, 2, 1 状況開始」

と言うと建物内に入り、テロリストのいる部屋の前までゆく

悠太「3 2 1」

スモークを投げ込む

悠太「突入！」

五郎「確保じゃあ！」

突入してパン パン パン パン パン パンと6発の発砲が聞こえ終わる

悠太「あつさり」と終わったな

凜「ね、全員…生きてるよね？」

慎吾「ですね、見事に急所を外して撃たれてますけど…悠太さんですか？」

悠太「まあな…撃ち殺してもよかったんだが…な」

慎吾「まあいいです、警察隊呼びましょう」

と呼ぶ

ゾロゾロと警察隊が入ってくる

悠太「俺らは出よう」

M110 近く

秀太「怪我等は？うちの隊員を怪我させてるわけないだろうがな」

悠太「ないよな？」

五郎「ないです」

慎吾「同じく」

秀太「ならええわ、悠太達今からどうするんや？」

悠太「の前に、ロスマンさんとクルピンスキーのお二人さんは好きにしてどうぞ、色々巻き込んですまんね、あとで基地に何らかの物を送るわ」

ロスマン「ええ、では」

クルピンスキー「じゃねー」

悠太「俺たちはこのまま空港に行って基地に帰るが」

秀太「暇ならちよつと来てくれない？」

悠太「俺はいいが」

凜「私もいいよ」

悠太「なら行こう」

扶桑軍在ブリタニア基地

悠太「借りたつて話は聞いたが……」

秀太「だいぶ小さいだろ？」

悠太「中規模の倉庫と小さいヘリポートぐらいの駐車場だけで何があるんだ？」

秀太「自分で答え出してるのに聞くか？」

悠太「は？」

秀太は倉庫の大扉を開けるとOH-6の様な言うなればハエの様なヘリコプターが

1機止まっている

悠太「性能は？」

秀太「これだ」

と性能表を渡す

悠太「巡航は200km、航続は2,600kmか」

秀太「AH-6のような性能はしてないがそれでも十分だよな？」

悠太「だな、あとすつごい気になるんだが、そこにチヌ車にミツキーの耳つけた戦車は？」

秀太「ああ、あれか…あれな三式中戦車 A T Mだ」

凜「? A T M?」

秀太「今は外してるが本来ならあそこに有線誘導対戦車ミサイル、こつちでは有線誘導対ネミサイルが搭載される、正直、使い所に困る代物だよ」

悠太「ほーん…これ以外何かあるのか？」

秀太「ないな、ここはミサイル等の弾薬貯蓄地だからな、一応震電改を大和に乗せて輸送中だな」

悠太「豪華な輸送船だな」

秀太「まあしようがねえよ」

悠太「我々は帰るか」

秀太「おう、きいつけえや」

悠太「わかつてるさ」

凜「元気でねー」

秀太「おうおう」

クロイドン基地



悠太「おう、どうだ？」

「燃料満タンですよ」

凜「悠太、確認するよ？」

悠太「ちよいとまで、電源オンにしてっと、いくぞー」

凜「あいよー」

悠太「アツプダウン」

凜「なし」

悠太「ヨー」

凜「なし」

悠太「ロール」

凜「なあーし」

凜も機体に取り込み

悠太「エンジン点火、開始、RPS上昇してるな、タキシング開始するか」と滑走にて離陸する

501基地付近

悠太「ん？ 停電してる？」

凜「本当だ、どうしたんだろう」

悠太「さあ、基地の損傷がないから攻撃ってわけじゃなさそうだけどね」

凜「着陸すればわかるか」

と着陸する

悠太「本当に停電してんなあ」

エイラ「帰ってきんだナ！」

悠太「おうおう、勢揃いか、で？なにがあつたんだ？」

エーリカ「それが……」

悠太「はあ……ルツキーニが虫型のネウロイを持ってきて、それが停電を引き起こしたと……と言うかそれならミーナ達が復旧作業に急いでるんじゃないのか？」

エーリカ「ミーナはネウロイの倒し方の所為で、拗ねちゃって……トルウーデと少佐がなダメに言ってるけからさ」

凜「本当ひどいわね色々」

悠太「宮藤のおやつさんは居ないし……どうすつかなあ……」

凜「独立旅団の方に工兵居なかつたけ？」

悠太「それを使うか」

その日中に電力をは復活し、翌日にはミーナも復活した  
数週間後 7月 某日

悠太「む」と訓練中の宮藤達を見ながら言う

凜「む？」

悠太「む」

凜「なに？」

悠太「む」

凜「やばい、私の旦那が壊れた」

悠太「猛暑だからしょうがない、と言うか今宮藤おかしかったな」

凜「そんなに？」

悠太「突然エンジンが止まったような感じだったな」

凜「整備部にO/H要請する？」

悠太「んー、坂本も気づいてるだろうしそこに任せよう」

凜「了解」

その日の夜

悠太と凜の部屋

コンコンコン

坂本「少し良いか？」

ドアを開け

悠太「ん？何だ？業務連絡なら明日してもらいたいんだが…」

坂本「芳佳についてなんだが…あつ…すまない」

悠太「あー…」

ベツトで横になつてゐる凧を見ながら悩む

凧「んん…聞いているから…」

悠太「わかった、その椅子にどうぞ」

坂本「ああ」

悠太「んで、芳佳の件は？」

坂本「それが、ユニツトの方は特にないそうだ」

悠太「となると身体的なことが…」

坂本「医者言うには問題ないそうだ」

悠太「となれば安定するまで、安静にしろな」

凧「魔法力の減少とかは？」

悠太「あの魔法力バカでそんなことが起きるとも考えにくいだろ」

坂本「それについては賛同だな」

凜「なら逆とかは？」

悠太「と言うと？」

坂本「リミッターってことか？」

凜「リミッターじゃなくとも魔法量が多すぎるとかさ、前にバルクホルンがぎ、ユニッツが魔法力を吸いすぎて墜落したじゃん？あの時も原因は吸う量のリミッターが働いてなかったわけだし」

悠太「うむ：確かにある可能性もあるが：汎用性の高い零戦でそれが起きるのか？」

凜「わかんにやい」

坂本「そんなまさかな：では失礼する」

凜「おやすみー」

悠太「良い眠りを」

翌日 ミーティングルーム

ミーナ「連合軍司令部によると、明日にはロマーニヤ地域の戦力強化の為、戦艦大和を旗艦とした扶桑艦隊が到着する予定です」

宮藤「扶桑の港で見た事あるんだ。すつごく大きいんだよ」

リーネ「へえー」

と二人が話しているとジリジリと卓上にある電話機がなる

ミーナ「はい、ええつ、大和で事故!?!?!?!?!はい、了解しました」

悠太「何だつて?」

ミーナ「大和の医務室で爆発事故だそうよ、負傷者が数十名出てるわ」

坂本「な!ならばUS-2で輸送を」

宮藤「はい!行きます!」

坂本「なに!」

宮藤「包帯ぐらいなら巻けます!」

悠太「なら…」

リーネ「私もついていきます!」

悠太「わかった」

と電話を使い、整備部へ連絡する

ミーナ「わかったわ、宮藤さん、リーネさんは大至急大和へ向かってください」

宮リ「はい!」

ミーナ「悠太さん、凜さんも護衛に向かってちょうだい」

悠太「わかった」

凜「了解」

数十分後

戦艦大和にを旗艦とする連合艦隊と合流し大和へ着艦する

悠太「宮藤達早く行け」

宮藤「はい！」

悠太「甲板が本当に改造されて、カタパルトとコンクリートになってるな」

凜「こんな改造案誰が出したんだろうね」

悠太「さあ…」

放送「艦内放送 艦内放送 第501所属 悠太中将、凜少将は大至急第一艦橋に」

悠太「え？俺？」

整備兵A「コクンコクン」

悠太「誰か案内担当官を…」

整備長「私が…」

悠太「ああ、頼む」

艦橋

凜「安田凜、入ります」

悠太「安田悠太入ります」

??「ああ、入ってくれ」

悠太「ああ、お久しぶりです、杉田艦長に五十六提督、どのようなご案件で？」

杉田「早速要件なんだが、実は今回のお礼として宮藤さんにまた何か贈ろうと思うのだが、何か良い意見は無いかと思ってるな」

悠凜「え？」

五十六「こんな有事の際にすまないな」

凜「この船にも女性乗組員はいますよね？」

五十六「宮藤さんは情報統制のおかげで無名なのだよ」

悠太「あくゝ国民からすれば民間人を戦地に連れて行った挙句軍人にしたわけですから寝耳に水ですしな」

五十六「ああ…本人の意思だとはいえ、国民が聞けばどう思うかはわかるまい」

凜「前回は？」

杉田「扶桑人形だ。扶桑海の巴御前と名高い陸軍の穴吹中尉がモデルの精巧な一品だ」

悠太「(何でそれなんだよ!)」



凜「ならきよ」

「電探室より報告。方位2—1—0、距離40、000に中型ネウロイ反応あり！」

杉田「バカな！ここは安全圏のはずだぞ！」

五十六「最近は安全圏という言葉の信頼ができんな」

悠太「同感ですね、では」

艦橋を後にする

悠太「武装はA R—1のみか：マガジンは5か、足りんな、近々、リーネと宮藤も来るだろうから準備を、我々はお先にな」

と二人とも発艦する

凜「大和から発艦なんて夢みたい」

悠太「夢の方がマシさ」

数秒後

凜「ちよつと待つてよ、大型が2機なんて聞いてないよ」

悠太「この自体の電探技術なんてこんなもんさ、先に近い方から行くよ」

凜「あいよ」

と一気に近づき攻撃を加えていると

「千歳航空隊参上ー」 「千代田隊も参上ー」

甲高いエンジンと共に機関砲の発砲音が聞こえる

とEMB-314のような戦闘機が高速で通り過ぎる

悠太「何だありや」

凜「スーパーツカノぽいね」

悠太『攻撃の予兆あり、気をつけられたし』

言うのと戦闘機隊は各自散開し回避行動をとり、ほぼ全機が回避成功する

凜「腕も確かみたいだね」

『大和より通達主砲発射用意よし、甲板要員並びに航空隊は退避せよ』

悠太「全機退避開始」

と数秒の3基9門の46cm方が発光と共に砲弾を打ち出す

ドドドドドンと着弾するがダメージがあるようには見えない

悠太「流石に効かないな」

と話していると

リーネ「キャア！」

とリーネの叫び声が聞こえる

凜「そっち任せたよ！」

悠太「あいよ」

凜「リーネちゃん、大丈夫？」

リーネ「な、何とか大丈夫です」

凜『リーネの方は問題なかったよ』

凜「芳佳は？」

リーネ「やっぱり、不調みたいで……」

凜「やっぱり、芳佳が不調みたいだ」

悠太「チツ、『艦隊に通達、全艦退避を開始せよ』」

杉田「だが……」

五十六「わかった、全艦8点回頭」

その十分後 1機は撃墜し

悠太「リーネ、弾は？」

リーネ「まだあります！」

悠太「すまんが俺らは弾切れだ、ミサイルでも持つてこればよかったな」

少し気が緩んだ瞬間、ネウロイから超高威力のビームがリーネのシールドに当たり、

シールドを食い破りリーネを弾き飛ばす

リーネの悲鳴が聞こえる中、凜が急いで近づき、2射を弾くがその弾いたビームがの太腿を掠めてゆく

凜「イツ」

すると退避中の大和から悠太達の数百倍はあるだろう魔法陣が出現し、263mある戦艦大和スラをすつぽり覆う

ネウロイはそれを最大の脅威と見做したのか戦艦大和へと急行する

すると大和からシューーと言うとジェット戦闘機のような音と共に無線から

宮藤「よくも……よくもリーネちゃん達をツ」

と怒りの声が聞こえ、大型ネウロイに突撃をする

悠太「バカ！流石に」

言うのと一瞬で大型ネウロイは粉になる

宮藤「3人とも大丈夫!？」

凜「怪我をつてえ？」

悠太「通り過ぎた際にあつたのつて……」

宮藤「はい？」

凜「芳佳ちゃん、恐ろしい娘……」

## 基地

悠太「いやあ…凜予想が当たってとはな…」

ミーナ「それにしても、コレが扶桑の新型…：凄いわね」

坂本「J7W2 震電改だ、Me262と違って魔法力を吸い尽くすこともない新型のジェットストライカーだ、宮藤使い心地はどんな感じだ？」

悠太「本来ならば順応訓練をしないとイケないんだが…それ以外に動かせるユニットがないとなるとな…」

宮藤「速くなっただけであまり零戦と変わらないような気がします」

悠太「格闘性とか落ちてるはずなんだがなあ…」

宮藤「でもやっぱりあんまり変わらないような気がします！」

悠太「さいでつか…」

ミーナ「武装は変わらないのかしら？」

悠太「一応、受け取った資料だとミサイルが2発搭載可能とはあるが…」

ミーナ「宮藤さんが使い方を理解できない可能性があるかと？」

悠太「だな」

次回

ペリーヌ回？知りませんね、マルセイユ大尉参上！

# 34話 ペリー又回？知りませんね、マルセイユ大尉参上！

基地付近

悠太「ポイントアルファ通過、基地上空をパスして旋回着陸」

凜「後部ドアオープン？」

悠太「凜、後方に確認してきてくれる？」

凜「あいよ」

凜「ミーナさ…あれ？」

ミーナ「マルセイユ大尉がドアを開けて飛び降りたわ」

凜「大丈夫なのか？」

ミーナ「大丈夫よ」

凜「ならよかった」

いいなからドアを閉める

悠太「どうだった?」

凜「マルセイユ大尉が飛んだらしい」

悠太「どないこつちや」

凜「さあ」

色々ありブリーフィングルーム

坂本「ここで、選ばれたウィッチ二人が突入、

護衛のネウロイを倒しコアを破壊する、以上だ」

宮藤「だった二人ですか?」

坂本「この作戦では移動に潜水艦を使う、格納、射出ユニットは2機までだ」

ミーナ「では突入部隊のウィッチを発表します、まず今回の援軍として作戦に参加する事になった、第31飛行隊のハンナ・マルセイユ大尉」

バルクホルン「どう言うことだ!中佐、突入部隊は私とハルトマンのはずでは」

ミーナ「上層部からの指示です、我が501作戦に参加するのは1人のみ、バルクホルン大尉、貴方です」

ハンナ「無理だ、バルクホルンあんたじゃ私のパートナーは務まらない」

バルクホルン「何が:何が言いたいんだマルセイユ」



ハンナ「言葉通りさああなたの力量じゃ私と共に戦うのは無理だと言っているんだ」  
ミーナ「大尉？」

ハンナ「私の力量と釣り合うのは」エーリカの方へ視線を合わせる

エーリカ「ん？」

バルクホルン「どこを見ているんだマルセイユ、カールスラント防衛線の頃からお前  
の上官を上官とを思わないその態度、変わってないな」魔法力を起動し、マルセイユに  
近づく

宮藤「ど、どうしよう」

ミーナ「バルクホルン大尉」

ハンナ「今は同じ階級だ」同じく魔法力を起動し、2人の魔法力と体がぶつかり合っ  
て、辺りに振動やら衝撃を齎した

徐々に罅割れた床は、数秒もしないうちにクレーターへと変化し、その破片を辺りに  
飛び散らせた

エーリカ「ストーツプ！……私がマルセイユのパートナーをやるよ、それでいいだろ  
？」

501メンバー「え？」

ハンナ「OKだ、楽しみだな、ハルトマン」

悠太「二人の給料を減らして基地の修復に使わせてもらうよ」と後ろの席から立ち上がり前へ出る

バルクホルン「な、悠太!、マルセイユが我儘を言ったからであつて!」

ハンナ「それは聞き捨てならないな、手を出そうとしたのはそつちが先だ」

悠太「やった時点で同罪だよ」

ハンナ「バルクホルンと同じで石頭野郎だな、そもそも佐官じゃないだろう!」

悠太「佐官ではないな確かに」

ハンナ「だろう!」

悠太「将官ではあるけどね」

ハンナ「は?」

悠太「はじめまして、この基地の司令官だよ」

ハンナ「ミーナ!」

ミーナ「本当の話よ、彼は中将よ」

悠太「本来ならば、501の責任者であるミーナ中佐とストームウィッチーズの責任者である加東圭子少佐に責任がいくのだが…正直その辺りの手続きが非常にめんどくさい、だから直接給料の1割を抜かせた基地の修復に使う、いいな?」

ハンナ「ふん、勝手にしろ」  
バルクホルン「あ、ああ」

翌日

朝食

マルセイユ「あそこにある二人分は誰だ？」

宮藤「ああ、あそこは悠太さんと凜さんのところですね」

マルセイユ「何でいないんだよ」

宮藤「そろそろ降りてくると思いますよ、今日も早朝に飲み物取りに降りてきてましたし」

凜「あれ結局何なんだろうね」

悠太「まあ鼠じやないのかなああれ」

凜「殺鼠剤でも頼む？」

悠太「それも視野に入れつつ出来るなら基地内で対策するのがベストだな」

凜「とはいってもものないよねえ」

悠太「今日は報告無い、とりあえず食おう」

ジリジリジリと電話がなる

悠太「ハア…今日何度目だよ」

と電話を取り

悠太「はい、第501基地ですが…」

悠太「はあ?物資不足ですか…生憎こちらも物資不足なので無理ですね、では」

凜「どこだった?」

悠太「近くのロマーニヤ空軍基地が物資不足で分けるだとか」

戻ろうとした瞬間

ジリジリジリとまた電話がなる

悠太「…501基地ですが…はあ、ロマーニヤ警察が何用で…」

悠太「宮藤一郎と名乗る不審者ですか…すみません、うちの技術者です…今すぐうちの

の隊員を向かわせませんで」

悠太「内線の…これ」

悠太「第二警備?今ロマーニヤ警察にいる一郎を回収願う」

第二警備「了解であります」

悠太「では」

悠太「あんのバカ化学者が」

宮藤「なんか…すみません」

悠太「別にいいんだよ、そんなことよりめしを食おう」

悠太「やっぱり、基地全体の修繕費用が足りん…」

凜「また上に尋ねる？」

悠太「同じ答えしか返ってこないだろ」

凜「時報返信botでも使ってるんかね」

悠太「人力botだろ」

凜「botでも何でもないじゃんそれ」

悠太「確かにな」

凜「あの二人は良い具合に訓練してるね」

悠太「ああ、本当にエースではあるんだが…正直な所マルセイユ大尉が色々だね」

コンコンコン

宮藤「入ります」

悠太「どうぞ」

宮藤が入ってくる

宮藤「ミーナ中佐が1部屋とベットを2つ用意してと言われたんですけど、どこにありません?」

悠太「はあ:マルセイユの方か」

宮藤「え?わかるんですか?」

悠太「凜、何だと思う?」

凜「んー競争心が強いらしいから銃口向けたとかな?」

宮藤「当たり前です:」

凜「だよねえ:何となく想像できるもん」

悠太「はあ:作戦大丈夫かなあ」

凜「エースだし大丈夫でしょ」

悠太「そうだといいんだけどね:部屋は:奥の方にあつて、ベットは多分一緒のところ、2個ぐらいあると思うから見てきて、なかつたら第二倉庫に置いてあると思うから

呼んでくれ」

宮藤「わかりました」

大浴場

凜「はあ…今日も疲れたなあ」

エーリカ「お、凜じゃーん」

凜「エーリカとマルセイユ大尉か、ああ、この時間は二人が入れってなっただなあ」

マルセイユ「あいつの相方か」

エーリカ「じゃおっ先ー」

ハンナ「おい、まてハルトマン！私を置いて」

凜「マルセイユ大尉、少し話してみない？」

ハンナ「は？ならテイナでいい」

凜「短い間だけど、宜しくね」

ハンナ「ああ」

凜「どうしてB f 1 0 9 G—2なんか使ってるの？別にユニットが来ないってわけじゃないんだろ？」

ハンナ「FからG—0に乗り換えた時に墜落したんだ、それ以降ずっとF—4だった

んだが：周りに説得されてね、今のG-2に乗ってるんだ」

凜「事故かあ：でも軍をやめてないだけマシだよ、出来ればもっといい機体に乗って戦果を伸ばして欲しいんだけどね」

ハンナ「私はこの機体で最後まで戦闘するって決めたんだ、どんないい機体が出ようとね」

凜「冒険家じゃないねえ」

ハンナ「冒険なんてしなくていいのさ」

凜「確かにそうだけど正直、部品の兼ね合いもあるから変えた方が補給的にありがたいんだけどねえ」

ハンナ「ふん、高官らしくない言い方だな」

凜「そうかい」

作戦決行日

アドリア海

キングジョージ5世級戦艦



リットリオ級戦艦

ビスマルク級

ザラ級重巡洋艦

フレッチャー級駆逐艦大小数えて20隻入るであろう艦隊を横目にイー400潜水艦はネウロイの中核へと潜入する

ミーナ「ネウロイは地上で要塞化して手が出しづらいの、だから内側から潜水艦を使って、侵入して破壊する、二人とも準備はいい？」

ハンナ「いつでもいいける」

エーリカ「こっちもいいよ」

ミーナ「作戦開始」

エーリカ「敵数40ぐらい」

リーネ「40!？」

坂本「多いな」

ハンナ「違う38だ」

エーリカ「37だね」

と更新するごとに撃墜してゆく

悠太「宮藤」

宮藤「はい?」

悠太「新しいユニットはどうだ?」

宮藤「んーまだなんかフラフラします」

悠太「そうか…まだ微調整が必要だなあ」

そんな無駄話をしている間にも、世界の頂点に立つエース2人がコアに止めを刺した

宮藤「はっ、撃ちましたよ!」

坂本「ああ、撃ったな」

バルクホルン「あいつ…」

ペリーヌ「味方に向かって何とことを」

坂本「仕方ない奴らめ」

宮藤「何を呑気なこと言ってるんですか!実弾ですよ!」

悠太「二人はウィッチだろう?シールドがあるからあたりはしない」

宮藤「そ、そうですね」

凜「けど、二人の戦いはシールドを貼った方の負け、そして、弾が切れた時も」

お互いの能力は互角、ユニットはエーリカの方が優秀であるが、マルセイユは固有魔法の偏差射撃でほぼ拮抗になり、あとはいかにミスを少なく戦闘をし、弾が切れるのを

待つのみである

数分後 結果は双方の弾切れで終了した：

その後、エーリカが自分の部屋を掃除すると言う珍事があつたらしいが、詳細は不明である

## 35話 欧州の新たな光

ブリーフィンググループ

ミーナ「持てるすべての戦力でネウロイの巣ごとを破壊し、一気に形をつける、以上が最終決戦の内容よ」

バルクホルン「もし失敗したら？」

ミーナ「失敗した場合、ロマーニヤ全土をネウロイに引き渡し、501統合戦闘団も解散することになります」

バルクホルン「明け渡す！501が解散！そんな馬鹿な話があるか！ミーナ、そんな命令に納得して帰って来たのか！」

ミーナ「そんなわけないじゃない！、納得してるわけじゃない…でも、この先消耗線できただけの戦力があるわけじゃない…このまま戦いを続けても被害が増えるだけ、私たちにはこの方法しかないのよ」

宮藤「ロマーニヤを」

リーネ「明け渡す…」

ペリーヌ「そんな」

ルツキーニ「うえええええんいやーだー」

シャーリー「大丈夫、心配するな、ルツキーニの故郷をネウロイに明け渡すもんか」

サーニヤ「勝てばいいんでしょ？」

エイラ「そ、そうだ！勝てばいいんだよ！」

ペリーヌ「ですわね」

リーネ「うん勝とう！」

宮藤「絶対勝つよ！」

エーリカ「そう言うことだよ、トルウーデ、何弱気になつてのさ」

バルクホルン「ち、違う、たとえ最後の一人になつても戦う！」

ミーナ「一人になんてさせないわ」

ミーナ「私たち13人でストライクウィッチーズよ！」

宮藤「そうです！13人いれば絶対勝てます！」

周りを見渡すと坂本が少し俯いている

坂本「13人か……」

ガチャ

悠太「ただいま戻り……（何この微妙な空気）」

ミーナ「悠太さん？凜さんどこ行つてたのかしら？」

悠太「ちよつとね、話はあつちで聞いているからいいよ」

ミーナ「只今より第501統合戦闘航空団はこの地よりネウロイを一掃するために、オペレーション・マルスに参加します、我々の任務は連合艦隊旗艦、大和の護衛です、全員、出撃！」

総員「了解！」

大和と接続している空母出雲の甲板上スレスレを飛行する

バルクホルン「これが大和か」

シャーリー「でっけえなあ」

坂本「見えたぞ」

ミーナ「ええ」

ペリーヌ「見えてきましたわ」

リーネ「芳佳ちゃん」

宮藤「うん」

ヴェネチア上にある大型ネウロイを見ながら言う

宮藤 「あれがネウロイの巢」

ミーナ 「そうよ」

坂本 「それが敵の親玉だ」

艦隊

「間のなくヴェネチアに到達、ネウロイの防衛圏内に突入します」

「山和、ネウロイ化まで3分」

「駆逐艦ニコラス、被弾」

杉田 「総員、戦闘配置！」

ミーナ 「始まったわ。総員、大和がネウロイ化するまでの間、何としても守りきるの

よー！」

「了解」

各員が戦闘を開始し

数十分

「対ネウロイ用対空弾、全艦、砲撃開始！」

ネウロイが吹き飛ぶがその補填がさらにくる

それにペリーヌとリーネが囲まれる

宮藤「囲まれた！、リーネちゃん、ペリーヌさん！」

坂本「されるかああああああ」

宮藤「坂本さん！」

ミーナ「少佐！」

坂本「れっぷううううううざん！」

とネウロイを切ろうとするがダメージがなく、刀が弾かれる

ネウロイが坂本を攻撃しようとした瞬間、宮藤が割り込み、シールドを貼る

宮藤「大丈夫ですか、坂本さん」

坂本「(魔法力が…烈風斬が…効かない…)」

吹き飛ばされた刀は綺麗な弧を描き、大和の艦首甲板へ突き刺さる

「目標との距離、1万1千、ネウロイ化まであと30秒」

「魔道ダイナモ、起動準備」

杉田「追い込まれた人間の恐ろしさを思い知らせてやれ！」

「残り20秒」



「19, 18」

エイラ「クツソオオオオ」

ルツキーニ「はふうはふうはふう」

シャーリー「ルツキーニ頑張れ」

バルクホルン「まだまだ!」

エーリカ「もうしようがないな」

ペリーヌ「リーネさん、大丈夫でして?」

リーネ「は、はい!」

悠太「凜、弾は?」

凜「通常が3個!ミサイルはないけど!」

悠太「打ち切ったら帰還しろ!ミサイルは出雲にある」

凜「あいよ」

ミーナ「魔法力を魔法力を消耗したものは各自空母出雲に退避して」

坂本「もう、私は戦えないのか:誰も守れないのか」

「4, 3, 2, 1, 0, コアコントロールシステム改起動!」

「魔道ダイナモ、始動」

言うのと大和艦橋から徐々にネウロイと同じ模様になってゆく

バルクホルン「始まったか」

エーリカ「みたいだね」

サーニャ「見て！」

エイラ「本当にネウロイになってる！」

「大和、ネウロイ化完了」

「制御可能時間残り約9分」

杉田「大和、浮上！」

すると65,030トンはある戦艦大和が離水する

悠太「さらば地球よ」

凜「上昇角すぎ」

宮藤「大和が飛んだ！」

「全システム正常に始動中」

杉田「成功だ」

シャーリー「すつげえ」

エイラ「サーニャ、みろみろ」

サーニャ「もう見てるわ」

「敵ネウロイの巢を捕捉、目標の軌道に乗りました」

杉田「進路そのまま、大和最大船速」

ミーナ「任務完了、全員空母出雲に帰還して！」

ミーナ「少佐？、私たちの任務は成功したのよ」

坂本「にとつて、生きることとは闘うことだった、だが、もうシールドを失い、烈風斬も使えない」

ミーナ「貴方は十分戦ったわ」

大和はネウロイの攻撃をもろともせずにも巢へ突っ込む

「残り500」

バルクホルン「何で火力だ」

「300」

杉田「突っ込めえ！」

大和は巢へ着弾し、

杉田「今だ！主砲一斉射」

「斉射！」

杉田「我々の勝ちだ」

斉射の指示を送るが大和はうんともすんとも言わない

ミーナ「ど、どうして撃たないの」

坂本「まさか！」

「艦長！、火器管制システムが起動しません！」

杉田「な、なんだと」

「魔道ダイナモが停止しています！」

「ダメです！主砲打てません！」

杉田「なんでまだ」

ネウロイが出現し、爆撃してゆく

杉田「これまでか…みんな、よく戦ってくれた、しかし大和の魔道ダイナモが起動せず、主砲が打てない、作戦は失敗だ、失敗したんだ」

ペリーヌ「失敗！」

リーネ「そんな、負けちゃうの！」

バルクホルン「馬鹿な」

シャーリー「マジかよ」

ルツキーニ「うええええん」

悠太「後方に連絡」

宮藤「坂本さん」

杉田「全艦、16点回頭、戦線を離脱」

坂本「まだまだ！」

杉田「な」

坂本「まだまだ終わっていない！」

ミーナ「えっ」

坂本「終わっていないぞいな！この戦いも私もだ！」

とミーナを降り離し、大和へ突っ込む

坂本「私が大和へ乗り込み、魔法力で魔道ダイナモ再起動させる」

ミーナ「ダメよ美緒！」

宮藤「坂本さん！」

杉田「死ぬ気か！坂本少佐！」

ペリーヌ「ダメです！少佐行かないで！」

バルクホルン「無茶だ！」

宮藤「坂本さん！、無理です、坂本さんにはもう魔法力が」

坂本「知っていたか宮藤、そうだ、もはや私には飛ぶだけの魔法力しかない」

ミーナ「わかってるならやめなさい！」

坂本の前へ出てMG42Sを突きつける

坂本「ミーナ」

ミーナ「戻りなさい、少佐」

坂本「私が行かねば、誰が大和を動かせるんだ」

と銃身を握り、下へ下げ、

坂本「皮肉なものだ、まともに戦えなかった私ただ一人守ることすらできなくなったのだから」

ミーナ「少佐」

坂本「私は嬉しいんだ、こんな私にまだ出来ることができることを、501にいることができる、13人の仲間で」

ミーナ「美緒」

ペリーヌ「少佐」

ミーナ「お願い、必ず返ってきて！…命令よ」

坂本「了解した」

ペリーヌ「しようさおああああ」

宮藤「坂本さんダメです！」

リーネ「芳佳ちゃん、どこ行くの！」

宮藤「待つて！」と格納されてゆくユニットに走るが途中で転ける

リーネ「芳佳ちゃん！」

宮藤「リーネちゃん離して！」

リーネ「ダメだよ！、芳佳ちゃんだつてさつきの戦闘で魔法力を使い切ったんでしよう！」

宮藤「でも坂本さんさんが！」

話している合間にユニットは格納される

バルクホルン「無理だ、諦めろ、宮藤」

シャーリー「どつちにしろ間に合わない」

宮藤「でも、でも」

リーネ「芳佳ちゃん」

坂本「(すまん宮藤)」

数分後 大和の魔法ダイナモが復活し、46cm砲弾がネウロイの巣へと突き刺さり、大爆発が起きる

サーニャ「ネウロイの反応、消滅」

宮藤「坂本さんは？」

ペリーヌ「少佐」

「あの爆発では例え大和といえども」

ミーナ「美緒……」

エーリカ「あ！」

電探員「レーダーに感あり、大和です！」

杉田「おお！」

悠太「長門が21ktを耐えるんだから余裕なのかな」

凜「だろうね」

宮藤「坂本さん！」

バルクホルン「やったぞ！」

エーリカ「大和が無事なら少佐も無事だな」

ペリーヌ「はあああ」

シャーリー「やったな……少佐」



ルツキーニ「やったあああ」

宮藤「よかった」

ミーナ「おかしいわネウロイ化が解けていないわ」

がその持ち上げられた希望は絶望へと変わる

そう、大和が撃破したのは巢の一部であり、本体は健在しているのである、

大和の数倍はあるであろうコアが大和を吸収し、艦隊を攻撃する

「ネウロイから攻撃です」

杉田「全艦、全艦回避行動！」

エーリカ「戦艦が一撃だ！」

ミーナ「なんでは破壊力」

宮藤「あつあれは！」

と超巨大コアの上部の方に坂本がいることを見つける

宮藤「坂本さん！」

ペリーヌ「少佐！」

「少佐を救え、主砲斉射！」

戦艦の16発の砲弾がコアに直撃するように思えたが、その砲弾はコアに届かずに、

扶桑式の魔法陣により防がれる

「戦艦の砲弾がネウロイの寸前で停止」

杉田 「な、なんだと」

エーリカ 「シールドだ！」

バルクホルン 「ネウロイがシールドを貼った！」

シャーリー 「嘘だろ」

ミーナ 「あのシールド」

宮藤 「扶桑のシールド！」

ミーナ 「間違えないわ、ネウロイは少佐の魔法力を利用してるのよ」

艦長、こちらの攻撃が通用しません！」

杉田 「もはやネウロイがシールドを使うとは、こうなつては我々にどうすることもで

きん…」

宮藤 「そんな」

「リットリオ、撃沈」

エイラ 「こんなんじゃ、全滅しちまうゾ」

サーニヤ 「私たちにできることは…」

ミーナ 「何も無いわ、魔法力を使い果たして…もう飛べない私たちには…」

リーネ 「はっへ？ 芳佳ちゃん」

芳佳を探す

中央エレベーターが動き出し、

リーネ「芳佳ちゃん！」

バルクホルン「何している、宮藤」

ペリーヌ「宮藤さん？あなた」

ミーナ「何をしているの宮藤さん」

宮藤「坂本さんを助けに行きます」

ミーナ「無理よ、貴方だってまほうりよくはのこつ魔法力は残っていないのよ、例え飛べたとしても、あのネウロイは倒せないわ」

宮藤「倒せます！新烈風斬で！」

ミーナ「新烈風？」

ペリーヌ「それは少佐の技でしょう！」

ミーナ「それに烈風丸はないわ」

宮藤「あります！あそこに」

と大和を見る

そこには大和に突き刺さった烈風丸が光る

バルクホルン「あれは…烈風丸」

ペリーヌ「あんなところに！」

すると魔法陣が出現する

エイラ「うげ」

リーネ「芳佳ちゃん」

宮藤「発進！」

バルクホルン「ダメだ、魔法力が安定しない」

ミーナ「無理よ、飛べなくなるわ」

シャリー「飛んじまえええええ宮藤!!!」

ルツキーニ「いつけえ！よしかあ！」

エイラ「もうちよつと！」

サーニヤ「頑張つて芳佳ちゃん」

悠太「思つ切り吹かせ！」

凜「いけえ!!!芳佳あ！」

ミーナ「貴方達」

エーリカ「あつ」

宮藤が甲板につき、バウンドする

ペリーヌ「宮藤さん！思い出すのよ！」

リーネ「ストラライカーと一つになるの！」

宮藤「ハッ（ストラライカーを体の一つに、自分の足で一步前へ！）」

甲板と擦り擦りながら飛行甲板が切れ、海面へと落ちそうになるが水を立ち上げながら離陸する

宮藤「はあああああ」

と離陸する

ルツキーニ「やったあ！」

シャーリー「やりやがった！」

エイラ「やったぞ」

リーネ「芳佳ちゃん」

ペリーヌ「ほんと、呆れた人ですの」

ミーナ「飛んだ：なぜ宮藤さんが飛べたの」

バルクホルン「それが宮藤だ、ミーナ」

エーリカ「宮藤だけじゃないかもー」

とミーナが振り向くとそこにはフル装備の501面々が見ている

ミーナ「はっ、貴方達」

宮藤「坂本さん！」

宮藤の接近に気づいたネウロイが攻撃を仕掛けてくるが宮藤はうまくかわすが数が多い

宮藤も対向し射撃するが撃破され多分をネウロイは数を増やし補填する

宮藤「ダメだよ、大和に近づけない」

宮藤「うわあ！」

とシールドを貼るが吹き飛ばされる

また前進するが同じように吹き飛ばされる

宮藤「くう」

と発砲しながら弾かれる、その弾が坂本付近に直撃する

坂本「シールド！、まさか」

坂本「逃げろ宮藤！」

宮藤「坂本さん！」

坂本「無理だ宮藤、諦めろ！ネウロイは私の魔法力を使ってシールドを貼っている、倒すことなど不可能だ」

宮藤「ウィッチに不可能はありません！」

坂本「はっ」

宮藤「坂本さんがそう言ったじゃないですか！」

坂本「宮藤……」

宮藤「私絶対に諦めません！」

近くにいたネウロイが吹き飛ば

リーネ「芳佳ちゃん」

ペリーヌ「ワタクシたちも居ますのよ」

宮藤「はああみんな！」

ミーナ「行くわよ、フォーメーションビクトル、宮藤さんを援護します！」

「了解」

ミーナ「貴方の可能性を信じるわ、ネウロイを倒して！宮藤さん」

宮藤「はい」

前進するがネウロイが宮藤を囲む

シャーリー「ちやつちやと片付けちやおうぜ宮藤！」

バルクホルン「私たちが道をつくる、いけ宮藤！」

エーリカ「宮藤なら楽勝だよーん」

とシユトルムで吹き飛ばす

ペリーヌ「頼みわしたわよ、宮藤さん、トネール」

シユンシユンロケットを放ち、

サーニヤ「芳佳ちゃん、大丈夫」

と前進する宮藤の道をつるようにロケット弾が飛び、ネウロイを撃破する

エイラ「今日のお前はついてるぞ、宮藤」

ルツキーニ「いっけえ！芳佳！」

悠太「ユニットをぶっ壊してでもやれ！」

凜「絶対にやってね！芳佳！」

リーネ「頑張つて、芳佳ちゃん！」

大和に一気に近づき、武器を捨て、烈風丸を握り抜くとするがなかなか抜けない

宮藤「くう、抜けない」

魔法力を最大限に込め、ユニットがぶっ壊れそうになるまでパワーを出す

宮藤「頑張つて、震電改」と言い抜こうとすると震電改が付いてないはずのアフター

バーナーがついたように排気口から火を吹く

すると烈風丸のネウロイが弾けながら抜ける

宮藤「ふうう、うりやあああああああ」

坂本「宮藤」



バルクホルン「抜いた！」

宮藤「坂本さん！」と一気に近づき

坂本「やめろ宮藤！烈風丸はお前の魔法力を吸い尽くすぞ！」

宮藤「かまいません！」

先ほど無理しすぎたのか機体が突然落ち込む

宮藤「それでみんなを守るなら！願いが叶うなら！」

とコアの一番上に行き

宮藤「お願い、烈風丸、私の魔法力を全部あげる、その代わりにネウロイを倒して、私に新烈風を撃たせて！」

宮藤「くおおおおおおお」

とシールドを打ち抜き

宮藤「れっぷうううううざん！」

コアを切る

コアは消滅し粉へと返した

大和もネウロイ化から戻りながら海面へ落ちてゆく

サーニャ「ネウロイの反応、完全に消滅しました」

ミーナ「二人は？」

リーネ「あああ！あそこ！」

落下してゆく二人を見つける

坂本「宮藤」

宮藤「坂本さん」

坂本「宮藤、お前魔法力は」

宮藤「いいんです、みんなを守れたから、願いが叶ったから」

坂本「そうか、ありがとう宮藤、たが二人も飛べないぞ」

宮藤「？大丈夫です、私たちは13人なんです」

坂本「そうか、そうだな」

リーネ「よしかちやあああああああん」

エーリカ「宮藤ー」

バルクホルン「宮藤！」

ペリーヌ「しようさああああ」

坂本「ミーナ、命令通りだ、帰ってきた」

ミーナ「おかえりなさい、美緒！」

ルツキーニ「いやったああああネウロイが消えたよー」

凜「ん？」

悠太「どうした？」

凜「気のせいだと思いたいんだけど、オストマルク方面からレーダーに感ありなんだけど」

「こちら出雲、方位60から大型ネウロイ複数が接近中」

悠太「了解、よかった…」

ミーナ「何も良くないわよ」

「艦隊後方10マイルに高速飛翔体複数接近、ネウロイか否かは不明」

悠太「全機に到達、撤退開始」

「高速飛翔体、速度約3800km以上！」

杉田「バカな！」

悠太「杉田さん、安心してください、心強い味方です」

杉田「な」

??「杉田くん、お久しぶり」

杉田「な、南雲中将殿」

南雲「君たちがリーダーで確認したのは我々が放った新型噴進弾だよ」

杉田「そんなものが」

南雲「すまない、悠太くんスエズを通るのに少しばかり手間取ってしまったね」

悠太「いえ、空軍海上艦隊を運用していただけなのは光栄です」

南雲「僕だって、少し前まで仲の悪かった五十六くんと仲も取り合ってくれた、君には思しくない、恩を仇で返すようなことは扶桑軍人として如何なのだと思つてね、些細なことながら君の部隊を派遣させてもらったよ」

悠太「了解です」

ソラ「お父さん！」

悠太「お久しぶり」

アバ「先に仕事よ」

ソラ「うん、ミサイル着弾まであと2，1着弾」

と遠くに見えていた大型ネウロイが一撃で半壊する

ソラ「やっぱり足りないね」

エミリー「えー落ちて欲しかったなあ」

疾風「エミリー、行くよ」

ミーナ「こんなに凜々しくなったのね……」

悠太「半年以上は鍛錬してたからな」

と話しているうちに大型ネウロイを1機、2機と撃墜する

悠太「ファルコンウィッチーズ、帰還せよ」

ソラ「また後で！」

エミリー「ばいばい」

アバ「大型ネウロイ3機撃墜、ミッション完了よ」

1945年7月24日ヴェネチア・ロマーニヤ上空のネウロイの完全消滅を確認、正式に501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズが解散された

同年8月

悠太「4ヶ月ぶりの扶桑だな」

凜「あれ？博士は？」

悠太「明日帰国予定だよ、それと今日から1ヶ月夏休みだつてさ」

凜「お、やったー、どうするの？」

悠太「残念ながら仕事も入ってるんだなこれが、主任務は宮藤軍曹の経過観察と博士の手伝いやらだな、依頼主は軍部からだから断れんな」

凜「うへえ、なら挨拶に行くの？」

悠太「行かないとだろ」

凜「だよねえ」

悠太「行かないやならんのか」

と空母を降り

宮藤「あ！悠太さん、凜さん」

悠太「はじめまして、宮藤清佳さん、扶桑皇国空軍副司令官の安田悠太です」

凜「同じく初めまして、扶桑皇国空軍副司令官補佐の安田凜です」

と握手する

清佳「はい、話に聞いてます、今日から1ヶ月程度、止まるんですよ？」

悠太「はい、そうですね」

清佳「あと、一人いると聞きましたが……」

悠太「このあと軍部に戻りますので、その時に合流します」

宮藤「ソラちゃんもくるんだね」

悠太「当たり前だろ」

宮藤「残りのメンバーは？」

悠太「同じく休みだが、どこに行ったりするかは知らん、国内からは出ないようにと

は言っているが」

宮藤 「雑じやないですか？」

悠太 「そんぐらいでいいのさ」

## パンテレリア会談

1945年 パンテレリア島

ここに戦線の要である国家の重鎮たちが集まり今後について会議している

イベリオン代表 ハリー・S・トルーマン

扶桑代表 鈴木寛太郎

カールスラント代表 フランツ・フォン・パーペン宰相

オラーシャ代表 セルゲイ・ケレンスキー首相

ブリタニア代表 ウオルター・チャーチル首相

スオムス代表 ユホ・クステイ・パーシキヴィ首相

が集まっている

トルーマン「昨年のガリアにおける巢の破壊並びにオラーシャ北部のグリゴリ破壊と戦争の終焉が近づいてきた、それは各国の共通認識であろう、だが今回は戦後についてだ」

パーペン「トルーマン、就任おめでとう、そして我がカールスラントは未だ解放され



ていないと言うのに随分とお気が早いすな」

パーベンがトルーマンを睨む

トルーマン「ああ、それは失敬、たがカールスラント解放は着実に近づいているその上作戦計画も始まっている、そうだろう？」

パーペンは睨むのをやめ深く頷く

パーペン「扶桑から事前にもらった資料によると今後ネウロイのような脅威が現れた時、並びに世界の何処かで戦争又は紛争が起きた際それを調停する為にある程度の軍事能力を持った国が主要国で平和を守るための新たな枠組みを作るとこのこたが、それにまさか中小国であるスオムスを入れるわけではないでしょう？」

寛太郎「スオムスは十分な軍事力を持つ上にウィツチの質はこの集まってる国の中でもトップクラスと言える、経済は低いが入れるとして何かまずいことでも？私としてはロマーニャやヴェネツィアをお呼びになってもよかったですかね」

ケレンスキー「スオムスがもし新たな枠組みに入るとしたら我が国は良き友人として経済的に支える用意がある」

トルーマン「もちろん我が国も同様に支援する用意がある」

チャーチル「支援はしたいが……」

パーシキヴィ「感謝します……ですがなぜ我が国よりも強力なロマーニャやヴェネツィ

アは省かれるのでしよう？」

寛太郎「あの国は統一することを目標としてるそうなので、我が国が両国を支援し、位置統一国家として独立を支援しております」

トルーマン「おお、なんとそれはそれは、彼の国の船舶、火砲技術は非常に良い物だと言う評価がありますから期待できますな」

チャーチル「本題に戻ろう、その新たな枠組みと言うのは？」

寛太郎「こちらの資料をどうぞ」

トルーマン「ほう、国際連合か」

チャーチル「この場合はガリアは入らないのかね？」

寛太郎「いやガリアとロマーニヤ、ヴェネツィア、オストマルクは宣言後に入ってもらうことを想定してあります」

チャーチル「なるほどな：私はこれで賛成だがどうだ？」

ケレンスキー「ええ、我が国も賛成です」

トルーマン「もちろん、世界が平和になると言うなら我が合衆国は如何なる物にも賛成する」

パーシキヴィ「我が国も賛成ですが：本当に我が国程度が宜しいのでしょうか：」  
パーペン「やはりスオムスは：」

寛太郎「もしカールスラントが反対する場合は我が国からの新型ユニットの導入を停止すると言う強行手段を取り、スオムスに多く回すことになるがそれでいいと思うならば反対して結構」

パーペン「それは我が国に対する攻撃では？」

ケレンスキー「扶桑の提案に我が国も賛成だ、良き友人を攻撃する物には鉄槌を」

トルーマン「自由民主主義を犯す物には石油をも止めなきやならない法案を通さないといけないな」

パーペン「…ああ、わかったスオムスの加盟にも我々は文句を言わない、これでいいそれでいいだろう？」

寛太郎「最初からそれでいいんですよ」

トルーマン「会議はこれで終わりだ」

と解散する

## 番外編・空戦 　　実はやっていたマルセイユとの空戦

宮藤「多分、マルセイユさんが勝つも思います!!」

エーリカ「んーどっちだろう…」

ペリーヌ「まあ悠太さんの勝利だと思えますわね」

バルクホルン「機体性能で既に負けているマルセイユ大尉は厳しいだろうな」

坂本「そう言っているが格闘戦には弱いんだろう?」

ミーナ「悠太さん達と私達じゃ戦い方が違うもの」

リーネ「そんなに違うんですか?」

凜「基本的な戦術で言えば既存から全くもって違う、交戦距離がここまで近いのはウイツチになってからだよ」

ミーナ「それでも普通なら500mぐらいじゃ無いのかしら?」

凜「最低で1km、平均的に言えば5〜8km、最長は100kmって所かな」

ミーナにそれはあんまりじゃないかしら?」

凜「レーダーの探知距離が大体250kmだからそんなもんだよってミーナさん、二

人が位置についたよ」

ミーナ「そうね」

と発煙銃を上へ向け

パンと言う音とともに2機がヘッドオンからの上昇体制へ入り、2機が見事な螺旋上昇をする

悠太の操るF-16の方が圧倒的に有利のはずが、なぜがかマルセイユが操るBf109G-2が上昇力で勝っている、その理由は開始される数十分前

格納庫

悠太「ムムム：どうするかなあ」

凜「ん？どつたん？故障でもしてた？」

悠太「故障なんかはしてないさただ本気で挑んでいいものかと悩んでたんだ」

凜「別に良く無い？」

悠太「大人気ないような気がしてな」

凜「悠太はいつもそういうところを気にするのが悪いところなんだよねえ」

悠太「そうか：出力50%でやるか」

凜「ミサイル使わないんだし普通でいいと思うけどなあ」

悠太「ある程度縛らないと勝負にならないだろ」

凜 「確かにだけどさあ」

悠太 「さて離陸準備するか」

凜 「ニゲタナ」

時を戻し

マルセイユ 《ふん、そんなもんかその新型ジェットストライカーユニットってのは》

悠太 《ああ、そんなもんさ》

と今の高度は約7000mと言ったところだろうか

高度は高いとは言え悠太は既に後ろを取られており、バラバラとMG34から放たれる7・92x57mmペイント弾が横をすり抜ける

宮藤 「ほらこのままマルセイユさんの勝利ですよ！」

バルクホルン 「そうかもな……」

エーリカ 「ちえーだらしないなー」

バルクホルン 「それはお前だエーリカ」

シャーリー 「でもおかしく無いか？」

坂本 「確におかしいな、前はあれだけの高性能だったはずなのに今はこんなにも低い性能だ」

ミーナ「確かにそうね、不調なのかしら？、サーニヤさん、あの二人の無線を聴けるかしら？」

サーニヤ「はい…」

悠太《…》

と無言でスローロールを続けて、避けてゆく

マルセイユ《クツソ、チビだから当たらない！》

悠太は上下左右に機体を揺さぶり相手の狙いをずらしてゆく

マルセイユ《くそ！これじゃ弾が切れる、正々堂々戦えよチビが！》

悠太《…チツ…正々堂々で良いんだな》

マルセイユ《なんだ当たり前だろ！そうじゃなきゃ楽しく無い！》

凜「やばい…切れてる」

ミーナ「え？」

凜「あの舌打ちの仕方はまずい」

と言っていると悠太は出力を絞ると言っていたが、出力をMAXにしA/Bを炊き、

垂直上昇を開始する

マルセイユ《…クツソ追いつけない》

凜「1万、1万3千、1万5千…まだまだ登ってる」

ミーナ「キレるとどうなるのかしら？」

凜「びつくりするぐらい言動が荒くなるぐらいかな…本気でキレてるところ見た事ないからどうなるかはわからんけどね」

ミーナ「キレてる割にはそこまでなのね」

凜「基本的に優しい人だからね、高度2万、機体の性能的に言えばこれ以上は上げられない」

悠太《で？どうするマルセイユ大尉殿？》

マルセイユ《何が正々堂々だ！》

悠太《ほう？僕はわざわざ出力を絞ってでも正々堂々な戦いをしてたが？君がそこまです暴言を言うならば僕だって本気に成るさ、空戦中だから黙って見てたが流石に酷い言動だよ、わかるか？》

マルセイユ《はあ？私はただ本当のことを言ってるだけだ！》

悠太《はあ…懲りないやつだ》

とエンジンスロットルを0%にし降下を開始する

マルセイユ《やっと降りてくる気になったか！》



悠太の高度は見る見ると下がって居るが機体速度もマツハ1を越えようとした瞬間にエアブレーキを開く

マルセイユ《やばい！こつち来ている！》

とマルセイユも同じように降下を開始するがこちらはスロットル100%して降下しているため機体の限界速度が近づいてゆく

まだついてくる悠太に対し焦りを見せ始める

マルセイユ《なんだあの化け物！》

悠太《じゃあ死のうか》M61を片手に持ちグロック17を取り出し背面飛行し銃口を空へ向け加速しマルセイユの腹面を通り抜ける

マルセイユ《なっ…負けだ…》

ちようど心臓の位置にペイント弾がベツタリと付いている

悠太《は…流石に疲れるわ》言いながら勝利のロールする

凜《やり過ぎ》

悠太《あそこまで言われたらね〜やるつきやないよ〜》

次の瞬間、ユニットからミサイルロック警報がなる

悠太《バカヤロウ！》

ロールをやめミサイル回避軌道を取るがミサイルちゃんは賢いのでその回避軌道上に行くがその一手先に行くのが悠太、A/Bを炊き太陽の方へ向き、推力を落とすとミサイルは太陽の方に行き、燃料を使い果たし爆発する

悠太《ひえ：死ぬかと思った》

凜《思つてなくせに、ごめんね、マルセイユ大尉うちのバカが》

マルセイユ《二人は何者なんだ：》

ミーナ《うちの可愛い可愛い隊員よ♡》

## 番外編・雑談 不発？の爆弾

悠太「はあ…疲れるわあ…」

とブリーフィングルームにゆく

宮藤「あ、悠太さん」

悠太「おう、宮藤」

宮藤「どうしてんですか？」

悠太「ブレイクタイムさ」

ルツキーニ「うじゅ、悠太だ」

悠太「おう？ああ、もう5時で訓練終わるか」

時計を見ながら言う

宮藤「そういえば凜さんは？」

悠太「今日は夜勤だからそろそろ起きてくる時間だと思うけど」

宮藤「あ、今日は夜勤なんですね」

悠太「まあ扶桑本部からの何らかの書類も届くだらうし仕事には事欠かないさ」

シャーリー「おいっすう〜」

悠太「宮藤、コーヒー2杯頼めるか？」

宮藤「二杯ですかわかりました〜」

悠太「あ”あ”あ”つ”か”れ”た”」

凜「んんーおはよう、あれ？時間あつてるね？」

悠太「5時だから問題ないぞ」

宮藤「あ、起きてきたんですね、はいこれです」

とコーヒーを置く

凜「んーこれ何処のコーヒー？」

宮藤「えつと：：ネスレ？って所ですね何処の国でしょう？ガリア語ぽかったですけど」

悠太「ヘルウエティア連邦だよ、あそこはガリア語圏とカールスラント語圏の両方あるからな」

宮藤「へーそうなんですか」

ペリーヌ「そうですね、そのぐらい知識に入れておいても損はないですよ」

リーネ「ネスレってチョコ菓子も売ってますよね」

ペリーヌ「そうですわよ」

リーネ「キットカットっていうウエハースにチョコレートを纏わせた美味しいお菓子も売ってるんだよ」

宮藤「えー食べてみたいなあ」

凜「え〃？」

悠太「どうした？」

凜「いや、キットカットってネスレだったんだ…てつきり森永あたりが作ってるかと思ってたわ…」

宮藤「あ、森永ってキャラメルとかココアとか売ってる会社ですよね？」

悠太「だな、少なくとも俺らがいた時代にもあるな」

凜「だねえ、あそこのキャラメルはコックピットに何個か置いてたよ、空戦するとキャラメル内を飛び回るけどね」

悠太「それ毎度思うが危ねえよな」

凜「ダイジョーブ」

とコーヒーを啜る

凜「ん〜美味しい」

悠太「まあちつと違うが上手いな」

凜「何が違うんだらうね」

悠太「工法はスプレードライ法だらうけど、品質がまだイマイチだな、手軽に飲めるってことはすごいことだが」

宮藤「スプレードライ?」

悠太「あーなんだ…」

ミーナ「コーヒー液を気体中に噴霧し熱風で乾燥させ粉にすることを言うのよ」

宮藤「あつ、ミーナ中佐」

坂本「ハツハツハ、ミーナはコーヒー好きだからな」

ミーナ「嗜み程度よ」

バルクホルン「そうだな」

エイラ「コーヒーは苦手だな、あの苦い感じが嫌なんだな」

エーリカ「私はコーヒー好きだけどな」

悠太「こんなことをしているうちにほぼ全員揃ったのか」

ミーナ「何かあるのかしら?」

悠太「いいや特に」と言いながら立ち上がり伸びる

ルツキーニ「悠太ってき、小さいよね」

と言う色々な意味でやばい爆弾を倒壊する

宮藤「る、ルツキーニちゃん」

冷や汗をかきながら言う

凜「やばい…」

シャーリー「ルツキーニ、謝れほら早く…」

ルツキーニ「え？」

悠太「んー小さくて困ったことはないから別に気にしてないかなあ」

凜「え？」

悠太「逆に失礼なのは君たちだからね？別に気にしはしないけどさあ」

凜「でも前楓ちゃんにやったじゃん…」

悠太「あの時は初対面で言ってきたから上司としてやっただけ、確かにルツキーニも部下ではあるが別に初対面って訳でもないし怒る理由も特にないし、割とほんとに小さくて困ったことはいね、正直色々困ったのは凜の方じゃない？」

凜「まあ確かに困ったね…」

宮藤「え？なんでですか？」

凜「前世だと190cmはあったからねえ」

宮藤「え!？」

凜「今が175だから今より15センチ高いんだよ、本来ならファイターパイロット

じゃなかったんだけどねえ」

悠太「まあ特例ではあるがな」

バルクホルン「何かあったのか？」

凜「私さ、当時は輸送機パイロットだったんだよね」

ミーナ「輸送機から戦闘機なんて栄転じゃないかしら？」

凜「そう思うでしょ？でも航空機としての特性も違うし、一人であれこれしないといけないのでさ大変なのよ」

坂本「我々で言えばユニットから普通の機体へ乗り換えるってことか？」

凜「んーそうかも、それ以上に難しいのは対Gだったよ、わざわざ戦闘機用の訓練をしなきゃ行けなかったからね」

エーリカ「そっか、ウィッチだと薄い幕が貼られるけど戦闘機だとないもんね」

悠太「そのために耐Gスーツがあるんだ」

宮藤「耐Gスーツ？」

悠太「そう、洋服の中にホースを入れて、急激なプラスGが掛かれば自動的にホースを膨らまして下半身を押さえつけることで脳の虚血状態を防止するって訳だ」

エーリカ「そっかそうすればブラックアウトを軽減できるね」

バルクホルン「どう言うことだ？」



エーリカ「えっと、ブラックアウトは血液がプラスGによって下肢に移動するから脳に十分な酸素供給ができなくなつて貧血のように失神仕掛けるの、下肢に移動する血液を邪魔して頭に血を回させれば解決つてこと」

バルクホルン「…なるほどな」

悠太「さすがお医者様だ」

エーリカ「ニツシシ」

悠太「だが、非医療関係のバルクホルンはあまり理解していないそうだ」

バルクホルン「そ、そんなことは！」

悠太「別に知らなくても問題無いからいいけどな」

凛「話を戻して、戦闘機に乗る前に数ヶ月訓練してだの色々やつたんだよね」

ミーナ「そうよね、また訓練しないといけないよね…」

凛「そ、だから困つたんだよね：つともうこんな時間じゃん、風呂行つて来る」

悠太「俺は仕事に戻るさ」

立ち上がり、部屋に戻る

数ヶ月後

ロマーニャ解放直後

501基地 格納庫

悠太「はあああ…疲れたわ」

机に腰掛けて言う

バルクホルン「ああ、お疲れだったが、机に座るのはどうかと思うな、安田悠太中将殿」

悠太「ん? ああすまないすまない」

バルクホルン「コーヒーをどうぞ」

悠太「お、バルクホルン製か?」

バルクホルン「いや中佐特製だ」

悠太「こいつあ、レア物だな」

バルクホルン「おり言つて相談があるんだが…」

と悠太の隣の椅子に座る

悠太「話を聞こう、にしてもバルクホルン大尉が相談なんて珍しいな」

バルクホルン「その、バルクホルンつてのがなんかむず痒いんだ」

悠太「何だ? ゲルトルートでも呼ぶか?」

バルクホルン「いや、トルウーデで良い」

悠太「よろしく、トルウーデ」

バルクホルン「ああ」

悠太「相談はこれだけか？」

バルクホルン「ああ、カールスラント軍たる者この程度で悩んでいたとは情けないがな」

悠太「トルウーデらしくないな」

バルクホルン「少しな…もし…いや上がりは確実にくるが本当に来たら私はどうなるか心配なんだ」

悠太「別に軍をやめるわけじゃない、教官にも指揮官にも相談役何にでもなれるさ」

コーヒーをズズと啜る

バルクホルン「確かにそうだな…だよな軍をやめる理由なんてないな…」

シャーリー「おいつすつてこの組み合わせは珍しいな」

悠太「少し相談をな」

シャーリー「お？悠太が相談？聞かせてくれよ」

バルクホルン「残念ながら私の相談だ、リベリオン」

シャーリー「バルクホルンが相談!?! 槍でも降るんじゃないか?!」

バルクホルン「よくも言ってくれたナイベリオン」

と立ち上がる

悠太「トルウーデ、ステイ」

バルクホルン「な…」

悠太「君達二人の悪い癖だ、すぐにぶつかり合う、普通に会話はできないのか？」

少し切れ気味に言う

シャーリー「で、できるよなあ？バ、バルクホルン大尉」

バルクホルン「あ、当たり前だろ？シャーロット・E・イエーガー大尉」

悠太「ならばよろしい」

脅していると扶桑独立空挺旅団の隊員が走ってき

「中将、準備が整いました」

悠太「待っててくれ、もう少しゆっくりしてから行く」

「ハッ」

悠太「博士くそっちの準備はできました？」

一郎「もちろんできてる」

と台車を押しながらこちらに来る

悠太「乗るかなあ…」

一郎「ユニットよりかは軽いから乗るさ」

悠太「まあ…俺らのユニットがあるわけではないから問題ないか…」

一郎「そうだろう？」

ミーナ「コーヒーの味はどうだったかしら？」

と501メンバーが揃う

悠太「もちろん美味しかったさ、とりあえず総員揃ったな」

ミーナ「ええ」

悠太「7月27日、本日を持ちまして第501統合戦闘航空団を解散とする、ミーナ中佐、意義は？」

ミーナ「いいえ」

悠太「では解散！」

「了解ッ!!」

最後の別れをする

凜「悠太は悲しくないの？」

悠太「そんなわけないだろ、悲しいけど仕事だ、渾身の別れってわけでもないしな」

凜「それもそっか」

と一郎の荷物もC-1トレーダーに荷物を積み込み

悠太「回せ」

パイロットによってエンジンの点火する

悠太「宮藤、早く」

宮藤「は、はい、又いつか会おうねーリーネちゃん」

リーネ「うん会おうねー」

宮藤も乗り込み

悠太「シートベルトしろよ」

宮藤「はい、ここから天城に行くんでしたっけ？」

悠太「そうだ、地中海をスエズから出てそのまま扶桑だから1ヶ月かからないだろうな」

宮藤「次はいつリーネちゃんに会えるかな…」

悠太「さあな」

一郎「僕は宮菱に再就職が決まったよ」

悠太「そりやそりや」

次回

休み…？

ヲタノシミニ

## 番外編 とある建築画家の話

番外編 とある建築画家の話

時は1948年、戦争が終わりネウロイに爆撃をされない平和なロンドン市街

そこにはブリタニア元首相であるチャーチルが歩いている

市街地を歩いているとそこにはちよび髭を生やした男性が公園の木下で絵を描いているのを発見する、その男は前世の記憶を持つチャーチルが嫌でもよく知る人物であった、その名もアドルフ・ヒトラー、彼はウィーン美術アカデミー大学助教であった19

35年にヴィルヘルム3世下の完全独裁政権化での世界首都ゲルマニアの<sup>完成予想図</sup>パースで運悪くかよくかわからないが通ってしまった、ただそれは国内世論的に言えば悪であった

1938年、ヴィルヘルム3世は崩御し、ヴィルヘルム4世となり世界首都ゲルマニアは中止されたと同時にカールスラント国民による彼に対する誹謗中傷へとシフトし、彼は1939年2月に祖国カールスラントを捨てブリタニアに移住した

話を戻し

チャーチル「はじめまして」

ヒトラー「…はじめまして」

とこちらを見ずに絵に集中している

チャーチル「良い絵だな」

キャンバススタンドの前に立てかけてある建築画を凝視する

ヒトラー「冷やかしながら帰ってくれ、間に合ってる」

チャーチル「いくらだ？」

ヒトラー「15だ」

チャーチル「65だな」

ヒトラー「65？」

と絵から目を離れたチャーチルの方を見る

ヒトラー「え……」

チャーチル「はじめまして、チャーチルだ」

ヒトラー「元首相が……」

チャーチル「何と言われても、ただ絵を買いに来ただけさ」

ヒトラー「ならこの絵は無料ですよ」

チャーチル「ふふ、そうか、だがそんなわけにもいかないのさ、よし良ければ一つ取

引しよう」

ヒトラー「取引？なんだ？」



チャーチル「グラスゴーの方に別荘を作りたいんだがそのパースを書いて欲しいんだ」

ヒトラー「…どうしてだ、儂意外にもいいパースを書くものはいらるだろう」

チャーチル「いいや、貴方の この絵を見て思ったんだ、貴方なら後世に残る良いものを作れると」

ヒトラー「…わかった、どんな建物がいいんだ」

チャーチル「そうだな…私の生家であるブレナム宮殿とまでは行かないがそのぐらいの宮殿チックな建物がいいな」

この日を境に2人は仲良くなって行く

2015年 扶桑 東京テレビ

アナウンサー「本日はブリタニア元首相ウインストン・チャーチルと偉大な画家であるアドルフ・ヒトラーはどのように仲を深めて行ったのかと言う事について深掘りしてゆきます、歴史家の後藤輝樹さんよろしくお願いします」

後藤「はい、あの2人はがあつたとされるのは1948年の夏頃だとされています」

アナ「48年と言いますと、首相から離れていた時期となりますよね」

後藤「その通りです、チャーチルとある公園を通つた際に木陰でキャンパススタンドを立てて書いている際にとある絵に一目惚れして、頼み込んだと自叙伝で語っていま

す」

アナ「そうなんですか」

後藤「そしてヒトラーはとても無口で人前に出ることを極端に嫌ったとも言われています」

???  
???

「へーこんなことあつたんだ」

「知らなかつたな」

「何見てるんですか？」

「チャーチルとヒトラーの話さ」

「へー」

「興味なさそうだな」

「世界史は苦手なんですよ…」

「以外だな」

「扶桑史なら大好きですけど」

## 第三章 偶然の戦闘

## 36話 休み？

36話 休み…？

ヴェネチア・ロマーニヤを解放し、宮藤家を避暑地として利用中

ドォーン

悠太「博士え！」

一郎「またダメか」

悠太「博士、せめてね、本部の実験室でやりましょうよ」

一郎「専用の建物建てたならここでやったほうがいいと思うんだけどなあ」

悠太「多少の実験ならまだしも、爆発するぐらいは建物が耐えられませんよ！木造です

よ！木・造、わかります？」

一郎「そんな、吹き飛ばすようなことしないから大丈夫だよ」

悠太「はあ」

宮藤「どうでした？」

悠太「あいも変わらず爆発してたさ…」

宮藤「デスヨネー、あ坂本さん」

坂本「また今日も泊まっていたか」

宮藤「勿論です、でも良く来られますがお仕事とか大丈夫なんですか？」

坂本「悠太から資料を受け取るのも仕事の内だ」

宮藤「…私殺潰しだよね…」

凜「突然なに？」

宮藤「このまま過ごして行くのかなあって不安になつて…」

凜「つて言われてもねえ…待つか動くかしかないよ」

宮藤「デスヨネ」

数日後

悠太「俺でも対処できるって、俺は医者ちやうんぞ」

愚痴をこぼしながら宮藤診療所に続く坂を歩いて登る

診療所から

??「はい、ご活躍は聞いておりました！ぜひその時のお話を聞かせてほしいです！」

悠太「(なんだ? 来客?)」

悠太「ただいまー」

宮藤「おかえりです」

??「その方は?」

悠太「宮藤康ただよー」

??「え? 弟さん?」

宮藤「うん? うん」

??「服部静香です、よろしくね」

悠太「静香お姉ちゃんよろしくー」

宮藤「静香ちゃんはなんのようで?」

静香「そうでした、本日は」

悠太「お先にお茶をどうぞ」

静香「小さいのにお手伝いしてるんだ」

悠太「うん」

そこへ美千子がやってくる

美千子「え? どう言う…」

美千子の手を掴み、台所の方へとさらう

悠太「すまん、ちよつと遊んでる」

美千子「え? 静香ちゃんって子にはどうするの?」

悠太「すまんが話が終わったら、何も知らずに帰ってもらうしか…」

美千子「だよね…」

静香「改めまして、海軍兵学校から宮藤少尉に辞令をお持ちしました」

宮藤「え? 学校つてことは坂本少佐の教え子さん?」

静香「はい! ご活躍は坂本少佐からお聞きしております、ネウロイの巣を打ち倒す原動力だったとか!」

宮藤「なるほど、でヘルウエティアつて?」

美千子「えつとね、欧州三大医学校の1つで軍の招聘でも中々行けない超名門だよ」

宮藤「へえー」

美千子「芳佳ちゃん……」

清佳「そうですか、芳佳が欧州の医学校に留学ね」

静香「私が随員として同行するよう仰せつかりました」

宮藤「決めた、私医学校に留学する」

決意脱無職を固めた宮藤

静香「あともう一枚」と宮藤に渡す

宮藤「んー…康太くん？」

それをジーツと見つめ悠太に渡す

悠太「？」

宮藤「これ」

とその封筒を渡す

悠太「僕？」

受け取り中身は

「伝令、安田悠太氏ハ海軍本部へ招集セリ」

悠太「よいしよ」

立ち上がり

隣の実験棟兼安田家に入る

制服を着て、陸王に跨り

悠太「清佳さん、夜には戻ります!」

エンジンを吹かし、坂を降りる

宮藤「行つてらっしゃーい、坂本さん達によろしくねー」

静香「え?今のつて…中将の階級章…?」

と震えながら言う

宮藤「さっきの話の続きなんだけど…」

静香「待つてください宮藤さん!私とんでもないことを…」

宮藤「ん?今の原隊は…」

美千子「独立第一特殊飛行隊フルコンウイツチーズだよね?」

宮藤「あーそうそう、フルコンウイツチーズ、私と同じ元501メンバーの安田悠

太さんだよ、階級は見た通り中将」

静香「え?え?」

真つ青を通り越して真つ黒になりそうな顔をする

凜「ううう…やつと終わった、お茶もらいに…つと、何方?」

静香は真つ黒になりそうな顔をしながら硬直している

宮藤「あ、凜さん、お茶ですね、ちよつと待つてください」



茶飲み茶碗にお茶を注ぐ

凜「あいつ単車出してたけどどこに行くって？」

宮藤「悠太さんなら軍部の方に行きましたよ」

凜「そっかあ」

宮藤「なんか用があつたんですか？」

凜「ちよつと、買い物にでも思ったけど、まあ明日でも明後日でもいいしその時にするわ、でその子は今も硬直してるの？」

静香「…」

凜「ツンツン」

静香「はっ、行かなければ」

凜「無理だよ」

静香「えつと」

凜「初めまして、安田凜、さつき会つてたであろう安田悠太の妻だよ」

静香「先ほどのご無礼を謝りたいのですがどうすれば…」

凜「ご無礼？何やったの？」

静香「わたくし、海軍兵学校からきました服部静香と言うんですが、空軍中将の安田

悠太様に大変ご無礼を…」

凜 「別に謝らなくてもいいと思うよ、本人も楽しんでやってただろうし」  
静香 「ですが」

宮藤 「静香ちゃん、多分ね悠太さんも気にしてないと思う」

静香 「軍人としての…」

凜 「じゃあさ、私や宮藤にはないの？」

静香 「え？」

宮藤 「凜さん!？」

凜 「それなら私は一応少将だし、それはどうなるん？」

静香 「え？」

宮藤 「いや、確かに凜さんはそうですけど…」

凜 「宮藤は一応軍医少尉だし、服部は海軍兵学校飛行学生でしょ？今の私は長期休暇  
だけだよ」

静香 「いや…その…」

凜 「いや別に怒ってるわけじゃないんだけどね、いって言うのにしつこく言う  
のもね」

静香 「はい…」

ソラ 「ジー」

凜「ああ、ソラ」

宮藤「あ、ソラちゃん」

ソラ「ジー」

静香「その子は？」

凜「うちの子」

静香「え？」

宮藤「あつてるけど間違えですよね？」

ソラ「は…じめまして…安田ソラです…」

軍部

悠太「で、なんでしょう？わざわざ呼び出して」

五十六「すまないね」

悠太「要件はなんですか？」

五十六「宮藤少尉の件は知ってるか？」

悠太「ちよろつとだけ聞きましたけど」

五十六「なら話は早い、宮藤少尉の護衛を扶桑空軍第一艦隊に任せることに決まった

んだ」

悠太「護衛と言うと？」

五十六「扶桑からガリアまでの護衛船団の航空参謀だ、提督は南雲くんだ」

悠太「日程は如何程に？」

五十六「すまないが、1週間後だ」

悠太「わかりました」

五十六「ファルコンウィッチーズのメンバーには既に伝えてあるから安心したまえ」

悠太「了解であります、では失礼」

五十六「ああ、もう一つ」

悠太「はい？」

五十六「新型潜水艦についてだが…」

悠太「研究開発で躓いていると聞きましたか？」

五十六「いや、そこまで躓いているわけでないんだ、例のコアコントロールシステムを流用した画期的なものを思いついたものがいてだな、似たような物がそちらにもあるか気になってな」

悠太「はて。どのような仕組みでしょう？資料がなければ分かりかねませんね」

五十六「ああ、すまないね、これなんだが」

と見る人が見ればわかるであろう第一世代沸騰水型原子炉<sup>B</sup>の計画書である

悠太「…」

この時に悠太は「苦虫を潰したような顔をしていた」と戦後の書物で山本五十六氏は話している

五十六「わかるか？」

悠太「ええ：コアの熱エネルギーを使い、水を高温・高圧の蒸気として取り出し汽水分離器、蒸気乾燥器を経てタービン発電機に送り発電ですね：」

五十六「ということは似たようなのがあったということだな？」

悠太「ええ、もちろん：ですがそれは前世の国を一度敗北に追いやった原因でもあります」

五十六「なに？」

悠太「その物質は“ウラン235”と“ウラン238”と言います」

五十六「コアの物質名と数字が同じだな：」

悠太「それはいつ頃発見された物でしょうか？」

五十六「少し待ってれ」

と席を外し部屋を出てゆく

数分後

五十六「すまないね、これなんだが」

と書物を渡される、その中には“コア235及びコア238の発見と流用方”と書か  
れている

細かく読むと

「コア235は1935年にアーサー・ジェフリー・デンプスター氏が発見し、コア23  
8は同氏が1938年に発見した」

と記載されている

悠太「同じものと見て良いか…」

五十六「敗北に追いやっただって言ったがどういうことだ？」

悠太「はい、我々がイペリオンと戦争していたというのは覚えてますよね」

五十六「ああ、衝撃的だったからな」

悠太「その時の戦争で扶桑は敗北を重ね、本土決戦直前にウランを使った新型爆弾を

広島・長崎に投下されました」

五十六「広島：長崎：扶桑の主要港か…そして新型爆弾」

悠太「1945年8月6日午前8時15分、広島市上空約600m、その爆弾は破裂  
し太陽のような輝きと共に約3000℃という高温で家屋や建物を一撃で焼き払い、約  
9万—16万人が亡くなりました」

五十六「なんだと…」

悠太「同年8月9日午前11時2分、型は違えど系列の新型爆弾が長崎上空503メートル地点で炸裂、同じく太陽のような輝きと共に約3000℃で長崎を市を焼き払い、こちらで約7万人が亡くなりました、その後1945年8月15日、帝都東京で事実上の降伏宣言と共に武装解除及びイペリオン合衆国やブリタニアによる統治が開始され、統治時代は1946年から1952年まで行われました、少なくとも1960年ごろからは大国としての新たな国として国際的に認められました」

五十六「そちらの扶桑は如何なる苦痛も屈せずには国家としての威厳取り返した」と

悠太「そして：2018年6月12日12：01分、2度目と同じく長崎市にもう一度、別国製の爆弾が着弾、約25万人が死亡：軍人も約1万人と艦艇20隻、航空機200機が破壊」

五十六「時代は違えど扶桑に合計3度の攻撃か：」

悠太「その時の同盟国であるイペリオンの復讐により、その敵国の首都に投下され、それで約100万人と両国合わせ約150万人以上の死者負傷者が出ました」

五十六「なんと痛ましい：我々の世界では決して起こしてはいけないことだ：研究即時停止の嘆願書を書かなければな」

悠太「いや、研究は中止しなくて良いでしょう、我々の世界では原子力、いやコア力発電は主力となり、船舶等に搭載した原子力空母なる超大型船舶もあります」

五十六「ほう? 少なくとも話を聞けばこの発電には燃料が不必要なために航続距離をほぼ無限にできると…」

悠太「ええ、食料等の補給をすれば無限に航行可能です、少なくともこれを用いた兵器を新たに研究開発するのは断固として反対です」

五十六「都市を丸ごと吹き飛ばす兵器はもはやネウロイと変わらない」

悠太「理解いただき感謝です」

五十六「これを用いた発電はどのぐらいあるのだろ?」

悠太「まだ第一世代であるため少ないでしょうが我々の生きていた時代では165万kW程度あります」

五十六「なんだと…火力発電の数倍はあるじゃないか」

悠太「秀太が図面を書けるかは不明ですが、私が聞きましようか?」

五十六「ああ、例の爆弾については国内ひいては各国に圧力をかけてみせる、あと細かい情報はC研究に頼む」

悠太「ありがとうございます」

五十六「そちらも頼んだぞ」

と握手を交わし出てゆく

悠太「(少なくともヒロシマ・ナガサキのようなことは起こすまい…)」



と携帯を取り出し、秀太に電話をかける

秀太「んー？どうした？」

悠太「聞きたいんだが加圧水型原子炉いや加圧水型コア力炉の図面描けるか？」

秀太「は？原子炉？無茶な話だぜ、そのコア力の使い方もわかりねえし」

悠太「C研究つてところにいえば情報をくれるらしいが…」

秀太「何だその中国でも研究してそうな機関は」

悠太「コアのCだよバカ」

秀太「ああ、なるほどで、場所は？」

悠太「知らん、だれか大将に聞いてくれ、あと1週間後に俺たちは欧州に行くわ」

秀太「わかった、欧州は気をつけろよ」

悠太「あいよ」

1週間後

悠太「さあて、各員お久しぶりだな、急な仕事ですまないが、作戦は聞いてるだろ？」

アバ「突然招集されたから何かと思っただけど護衛任務なのね」

悠太「ああ、そうだ今や扶桑の英雄のミヤフジ少尉の護衛任務だ」

アバ「英雄さんねえ、きっちり護衛しなくちゃね」

悠太「そうだな、目的地はガリア、約1ヶ月半だ、航行ルート上にネウロイの観測は特に無し、言えば楽勝な航海だ」

アバ「でも油断は禁物じゃないかしら？」

悠太「その通り、とはいえ多少はラフに行かないと精神が破壊されるさ、そろそろ出港と時間だ」

ソラ「うん」

悠太「帽振れ準備」

準備する

アナウンス「総員帽振れ！」

と全員が帽振りを始める

横須賀港が小さくなること数十分

凜「おいつす」

悠太「ああ、おかえり」

宮藤「静香ちゃんほら早く」

静香「先日は…《航空参謀長及び航空参謀補佐は直ちに作戦室に集合せよ》

悠太「行くぞ」

凜「あいよ」

静香「えその…」

悠太「その辺をうろちよろするのはいいが触るなよ、機密があるからな、宮藤、ちゃん」と見とけよ」

と走ってゆく

宮藤「（静香ちゃんは運がないなあ…）」と心で思うのであった

### 作戦室

南雲「お久しぶりだな」

悠太「南雲司令長官、お久しぶりです」

凜「同じくお久しぶりです」

と二人とも敬礼をする

南雲「では始めよう」

と内容は航空機員のシフトについてだった

南雲「これで良いのか？」

悠太「ええ、問題ないでしょう、あの子は飛ばなくても十分ですよ、機密の部分もありますし」

南雲 「ああ、だが坂本少佐には是非使ってくれと、言われたんだ」

悠太 「訓練だろうと期待と性能差が大き過ぎます」

南雲 「それは仕方ないな」

## 37話 船旅

## 37話 船旅

## 凧 視点

二人の荷物を部屋に持って行き

静香「宮藤少尉、第一種軍装や第二種軍装はお持ちでないのですか！」

宮藤「え？無いよ？」

静香「仕立ててすらも無いんですか？」

宮藤「まあそのねえ……」

と凧の方を見て言う

静香「えっ？安田<sup>凧</sup>少将はなぜ士官用ではなく下士官用を？」

凧「一応、士官用はあるんだけどね、色々あつて下士官を着てるんだよ」

宮藤「あ、持ってるんですね」

凧「一回も来てないけどね、それ以外じゃパイロット用の作業服が多いかな、風通し  
良いしね」

静香「それでは軍規が乱れて……」

凜「そもそもここは空軍だよ？わかる？」

静香「ですが！」

凜「多少は緩く行かないと」

静香「はあ」

翌朝

静香「宮藤少尉！何やってるんですか！」

目を覚まし、隣を見ると本来居るはずの宮藤少尉がおらず、何人かの証言を基に厨房にやってきた静香

宮藤「あ、おはよー」

と食材を切りながら応答する

静香「おはよーではありません！宮藤さんは少尉なのですよ！」

凜「それ私にも言って〜」

ガシヤガシヤと洗い物をしながら言う

笑いが起きる

士官「悠太さんからご命令ですよねー、やらないと報告しますよー」

凜「やりますから〜」

また笑いが起きる

上の人間が現場にいると邪魔か高効率になるかの2択であるが自由な精神を持つ凛はある意味懲罰としてここに来ており、扱いとして軍曹と大差無いのであるに對して宮藤は元持つ朗らかな性格ゆえか、上手く現場に溶け込み、時には回す側となっている。だが所謂“堅物”の静香には宮藤がいることはダメなので厨房から手を引いて退出する

宮藤「凛さーんが仕事サボってたって言つときますね〜」

凛「あーやめて！ちゃんとやってるからー」

また笑いが起きる

宮藤「へへっならやつてたつて言つときますーす」

と退出し、別方向へと引つ張られる

宮藤「ねえ、格納庫行かない？」

静香「まあそれなら…」

格納庫

悠太「この場合の空戦の動きとしてはどう動くべきだと思う？」

疾風「ネウロイの隙を突き、AAM—Aを一撃離脱の要領で打ち込む、でしょうかか

？」

悠太「その通り、だがもし相手が上の場合はどのように攻撃をする？はい、エミリー」  
エミリー「A/Bを炊きながら突き上げの様にAAM-2と機関砲を使ってすれ違いざまに攻撃、その後は上に離脱して、逃走かな」

悠太「その通り、これはジェットだからできる技だ」

疾風「レシプロユニットでやったら失速して格好と的です」

悠太「お、お二人さんどうした？」

宮藤「何してたんですか？」

悠太「空戦の講義をな」

宮藤「うへえ……」

悠太「次は……だな、もし自分がネウロイに追つかけてる場合の対処法は？両機がいることを前提にだな」

宮藤「えっと……逃げて、両機に落とし貰う……ですかね」

悠太「それだと両機の攻撃が自分に当たるぞ」

静香「サッチウイープですよ？」

悠太「その通り、機織りのように互いにクロスするようにS字の旋回を繰り返せば敵機に後方を取られても

僚機がその敵機の後ろに付くことが可能だ、こうなればフレンドリーファイアも少な



い」

静香「?…悠太中将がなぜが空戦の講義などしているのでしょうか!」

悠太「部隊の管理をするのは俺の仕事でもあるからな、わかるだろう?」

静香「ですがそれは佐官や尉官がすれば良いでしょう!」

悠太「自分の腕は自分で確認しなきゃだよ」

静香「ですが」

南雲「君は彼を何だと思っっているんだね?」

静香「え?ハッ、南雲司令官殿」

悠太「ああ、南雲さん何ようです?」

南雲「ん?ああ、ただ寄っただけだ」

悠太「そうですか…」

南雲「話を戻そう、彼は元悠太といえただの大佐だ、それが気付けば空軍副司令官の立

場にいるのだよ」

静香「え?」

悠太「正直、あのまま大佐が良かったなあ…」

南雲「上がったものは仕方ないだろう?」

悠太「ですけど…何だかなあ、部隊の責任者どころか軍の責任者は流石に務まらない

ですよ」

南雲「なんだかんだ言いながら君は仕事をこなすだろう？いけるさ」

悠太「与えられた仕事をこなすのが任務ですからね」

南雲「君は自由人と言われながらも仕事はきっちりこなすと本部でも噂されてるんだ」

悠太「そうなんですか：つとそろそろ時間ですな」

南雲「ああ、そうかすまない、私は仕事に戻るもするよ」  
居なくなる

その日から数日たちシンガポール海峡ではなくスンダ海峡を通りインド洋へ出る  
ジージーとブザーがなり

艦内アナウンス《これより通常艦載機による離着艦訓練を行う、要員は訓練用意》

悠太「さて、行くか」

凜「だね、その前にあの子達連れてゆく？」

悠太「連れて行ってもいいんじゃない？」

凜「あとで連れてこようか」

悠太「なら先に行ってるよ」

凜「あいよ」

甲板 上

「発艦用意！」

静香「あの…私たちがここに居て良いんでしょうか…」

宮藤「まあいいって言うんだしいんじやない？」

凜「ここに居ても問題はないよ、あまり関係の無い甲板だしね」

宮藤「あ、凜さん」

凜「おう」

艦橋付近

悠太「一個中隊を上げるのに約1分30秒か…長いな」

南雲「そんなもんだろう？」

悠太「もう少し短ければ良いんですけどね、そうなるのは信濃以降でしょうけど…」

南雲「信濃が進水するまであと2週間程度か…」

悠太「問題がなければですけどね」

南雲「ああ、そうだな」

悠太「僕は艦載機格納庫に行つてきます」

翌日 インド連邦のとある港

「安田中将、宮藤少尉港の駐屯地より坂本少佐からお電話とのことです」

悠太「ああ、わかった」

駐屯地

宮藤が話したあと受話器を受け取り

悠太「坂本少佐お久しぶり」

坂本「安田中将殿お久しぶり、であの二人はどうだ？」

悠太「ギクシヤクしてるが表面上は問題ないよ」

坂本「そうなのか？」

悠太「まあ宮藤の軍人らしくない行動からでしょうな」

坂本「まああいつは軍人一家の娘だからな……厳しく育てこられたんだろう、に対して宮藤は普通の家庭からなわけだし」

悠太「まあ今はは女の子らしく後ろの露店で買い物してます」

坂本「ハツハツハ、それは良かったでは」

悠太「では」

と受話器を置き切る

悠太「どうした、欲しいものがあつたか？」

宮藤「これ買わないくないですか？」

となんというか、時代を先取りしたようなブサカワのお土産を手に取りいう

悠太「…い、いやあ。欲しいのそれ？」

宮藤「そうですけど…」

悠太「んでお金持ってるの？」

宮藤「あつ…」

悠太「はいはい、出しますよ、HI」

店員「コンニチワ」

悠太「ああ、扶桑語か、円払いできる？」

店員「ハイ、デキマス」

悠太「服部は？」

静香「え？あ…これを…」

店員「1エン20セントです」

悠太「ほい」

店員「アリガトゴサイマス」

静香「あの…後でお返ししますので…」

悠太「別に返さなくて良いさ」

静香「お金の貸し借りは…」

悠太「僕は部下に物を奢った、ただそれだけ」

凜「悠太が奢ることなんてそうそうないんだから貰つときなく」

悠太「そつちはあつたか？」

凜「もちろん、各種食材を相当数確保したよ」

宮藤「ウィッチ用航空燃料不足だーって整備の人が嘆いてましたけど…軽油？とかどうするんですか？」

静香「軽油じゃなくてガソリンじゃ？」

悠太「軽油でもなくガソリンでもなくジェット燃料だね、それは別で目処が立ったから問題ないよ」

宮藤「あつ、そうなんですか、それってどこからなんですか？」

悠太「国家機密…ってことも無い、ソコトラ島って知ってるか？」

宮藤「…？」

静香「アデン湾の出入り口にある島ですよ？でもなんでソコトラ島なんですかブリタニア領ですよね確か」

悠太「そう、ブリタニアから租借してる精油施設があるんだ、そこから燃料を速吸で

運んでもらうんだよ」

静香「え？でも速吸って16ノットだからこちらの18ノットには追いつけませんよ？」

悠太「ああ、まだ聞いてないのか最近の改修で新型機関のガスタービンガスタービンを搭載したんだよ、そのおかげで巡航速度が最大積載で20ノットに増加してるからな」

静香「そうだったんですか」

凜「特徴的な航空機回収クレーンやカタパルトも無くなっちゃってるしねえ…なんかこう寂しくなったような気がするわ」

悠太「補助空母は別の艦がすることが決まったらしいしおいおい降ろされてただろうね」

凜「それもそうだよね、つとそろそろ戻ろう」

悠太「そうだな、行くぞ二人とも」

静香「はい！」

宮藤「はい」

艦に戻り

静香「悠太さん、少しお話が…」

悠太「あの話だろ、別に怒っちゃいねえ」

静香「謝罪ぐらいはしなればと…」

悠太「なら一言だけ言わせてくれ」

静香「何でしょう？」

悠太「オフはオフ、オンはオン、わかるか？」

静香「はい…」

数日後 モーリシヤス沖約400海里

《これより、速吸による物資補給、燃料補給を実施する、担当官は即座に配置につけ、これは訓練ではない》

補給を開始し数時間

《各補給完了》

補給が完了し速吸は減速しながら左へ回頭をはじめを始める

艦隊はケープタウンを通り過ぎようとした頃

ズールー時刻16時・現地時間18時



ウイツチ・女性用食堂兼ウイツチ待機所

宮藤「この感染症の場合はどうすればいいんだろう?」

悠太「まあ大抵はペニシリンGの投与だろうな」

宮藤「ペニシリンGは…非経口ですよね?」

悠太「基本的には筋肉だな、梅毒とかは静脈だったと思う」

宮藤「え?そんなんですか?」

医学書をペラペラめくり

宮藤「あつほんとだ、化膿性髄膜炎・感染性心内膜炎・梅毒を除く感染症は点滴静脈注射って書いてありますね」

そんな話をしてしていると静香が二人をじっと見る

凜「そんな話を見つめてどうしたの?服部軍曹」

メモ帳に何かを書きながら言う

静香「え?いやなんでもないです」

凜「ふーん…」

??「はー…お腹減った、ご飯ご飯♪」

トレーに食事を持ち歩いている

凜「あ、波子ちゃん」

波子「あ、悠太さん達居たんですね」

宮藤「おはようございます、波子さん」

波子「おはよう、芳佳ちゃんは何やってるの？」

言いながら芳佳の隣の席に座る

宮藤「医学書の復習中です」

波子「ほー」

と覗き込む

宮藤「波子さんから見てここが違うつてところあります？同じ軍医として気になるんですよね」

波子「んーぱつと見はないかな…」

宮藤「はー…よかったです」

波子「にしても芳佳ちゃん字が綺麗だよね」

宮藤「え？ありがとうございます？」

凜「今は…②勤務か」

波子「ですよー…だからこんな時間ご飯を食べなきゃならんです…」

凜「お疲れ様、」

波子「いやはや疲れますよ…頂きます」

と飯を食べ始める

波子「んー…味噌汁が五臓六腑に染み渡る〜」

悠太「君の食べっぷりを見てると見ているこつちまで幸せになりそうだよ…」

凜「だね〜」

奈美「そふてふか?」

凜「落ち着いて食べなさいよ」

こくんと頷く

そんな話をしていると

ジリジリジリジリと警報がなり

『早期警戒機が艦隊に向かうネウロイを捕捉、距離9万7千、到達まで25分、迎撃は発艦準備、悠太中将、凜少将は直ちに航空指揮所へ』

静香「ね、ネウロイ?!」

それを聞いた全員は立ち上がり即座に各員の配置準備に就こうとする

医務室付近

悠太「包帯とかの在庫は?」

波子「倉庫にぎつちりと詰まっています」

悠太「なら宮藤は甲板に」

宮藤「了解、静香ちゃん、もしダメそうなら戻って良いよ」

が、服部にはこれが「居ない方がマシだ」と言う受け取り方をしてしまい

静香「だ、大丈夫です！宮藤さんは宮藤さんが出る仕事をしてください」

ただ、この発言は心配してくれた上官に向かって言う言葉では無いだろうと、発言した後に気づく、が時既にお寿司、宮藤は既に倉庫の方へと走っている

航空指揮所

悠太「状況は？」

通信員「ネウロイ、いずれも接近中、距離8万切りました」

悠太「近くに戦闘機は？」

電探員「それが、戦闘哨戒機の交代タイミングでの侵入で近くに戦闘機は一機もいません」

悠太「ならウィッチ隊を上げろ」

航空管制官「了解」「ウィッチ隊、用意が出来次第発艦開始」【戦闘機隊は空中待機せよ】

戦闘指揮所

南雲「全艦、対空用意」

佐官「対空戦闘」

と復唱すると対空戦闘の用意が始まる

「南雲司令、ウィッチが発艦しました」

南雲「そうか、しっかりレーダーを見とけよ」

「了解」

数分後

航空指揮所

アバ《ネウロイ目視で確認》

悠太《了解、兵装使用自由を宣言する、暴れてこい》

アバ《了解》

数分後、戦闘が開始され有利に進みネウロイを撃墜し帰還する

航空格納庫

悠太「よく無被弾で帰還した流石だ、これ以降特にないから戻っていい」

アバ「わかったわ」

ソラ「みんなで甘いもの食べに行こ？」

エミリー「ならさっそくいこー」

数週間後

冰山にぶつかり、芳佳がいつもの悪い癖を出し最新鋭空母一隻を沈め掛けたが無事生還、芳佳と静香の関係性は冰山になっているなかそんなことを知らない、船員たちは飛行甲板上でいつものように一列に並びゴミを探す

悠太「よしこれで終わりだ」

凜「このあと数時間でパ・ド・カレー？」

悠太「何もなければ」

凜「陸酔いしそうだ…」

悠太「そんなときはそんなときさ」

数時間後

飛行甲板上でゆっくり日向ぼっこをしている2名の上を素早いレシプロエンジンの音が通り過ぎる

そのエンジンの音色は悠太と凜そして芳佳には聞き覚えがあるものだった

宮藤「リーネちゃん！ ペリーヌさん！」

芳佳が2人の姿を認めると同時、リーネが飛行態勢のまま芳佳に抱き着いた。結構な勢いでモルタル製の甲板を転がった2人は、お互いを抱き抱えてニッコニッコで会話している。

静香「つてこの人がリネット・ビショップ軍曹?!」

ペリーヌ「相変わらずですわね、たった2ヶ月会ってないだけで」

静香「あ、貴方は、お会いできて光栄です、ペリーヌ・クロステルマン中尉、私は扶桑海軍軍曹、服部静夏と申します」

ペリーヌ「聞いておりますわ、服部軍曹、疲れたでしょう、宮藤さんと一緒だと」  
静香「いえ、そんなことは…」

悠太「お二人ともお疲れ様」

リーネとペリーヌにラムネを渡す

凜「芳佳とリーネは背中とか痛くないの？」

芳佳と静香にラムネを渡す

宮藤「…」

リーネ「芳佳ちゃん？」

宮藤「少し背中擦ったかも」

リーネ「ご、ごめんね？」

宮藤「うん、大丈夫」

悠太「ならこつちこい」

宮藤「はい」

悠太の前に立つ

悠太「あつち向け」

背中を向けと勇太の固有魔法である回復魔法を使い直す

静香「えっ!?!」

ペリーヌ「悠太さんが他人に回復魔法を使つてるところ初めて見ましたわね」

リーネ「そうですね」

悠太「基本使わないからな」

宮藤「前より断然上手くなってますよね」

悠太「そりゃアンタの母や祖母にきつちり仕込まれたからな」

静香「えつとその…?」

ペリーヌ「なんです?この人がウィッチだつてことを知らなそうな反応ですわね?」

静香「え?」

ペリーヌ「もしかして本当に知らないとか言う話ではないですわよね?」

凜「そーいやその手の話してなかつたけか…」



ペリーヌ「そう言うことを曹操に言うべきじゃありませんの？」

静香「つてことは凜さんも？」

悠太「一応ウィッチだな、最後に飛んだのはいつか覚えてないが」

凜「そもそもユニット積んでんの？」

悠太「一応あるにはあるが艦載機じゃないから奥の方にシート被って放置してある」

静香「あの不可解なシートつて!？」

悠太「誰にも触るなつて指示出ししてたし」

ペリーヌ「そんなことはどうでもいいですわ、これが扶桑の新型空母天城ですね」

悠太「まあ既に最新式ではないけどな」

ペリーヌ「そうですねの？」

悠太「まあな」

静香「あの：安田中将とクロステルマン中尉は知り合いなのでしょうか？」

ペリーヌ「いまさつきまで知らなかったつてことは居たことですかね…」

静香「???」

ペリーヌ「501所属で隊長でしたわ」

悠太「基地司令ね、501隊内ではただの下っ端隊員だよ」

ペリーヌ「そうですね、でも事実上の隊長ではありませんでした？」

静香「…」

膝から崩れ落ちる

悠太「そんな倒れる事か？」

ペリーヌ「男性が501なんてあり得ない事だからしょうがない気がしますわ」

悠太「はあ…」

ペリーヌ「そういえばお手紙ですわ」

悠太「ありがとうございます」

ペリーヌ「私たちはこれでお暇させてもらいますわね、リーネさん行きますわよ」

リーネ「はいっ、芳佳ちゃんまたねー」

宮藤「またねー」

と二人は飛び立ってゆく

悠太「なんの手紙かな」

要約すると各JFWから増援要求である

凜「なんだって？」

悠太「捨てても良いゴミだって」

凜「ああ」

宮藤「なんなんですか？」

そんなこともあり、宮藤服部コンビは欧州の地へと踏み入れた、そしてこの凸凹コンビの旅は始まる

次回！欧州での戦闘 お楽しみに！

## 38話 欧州での戦闘

上陸し、宮藤の件の書類を確認後

悠太「ペリーヌ・クロステルマン中尉、これにサインを」

ペリーヌ「わかりましたわ、これでよろしいので？」

悠太「どうも」

ペリーヌ「静香さんはバルクホルン見習いって言った所ですわね」

悠太「下手すりやあいつより上かも」

ペリーヌ「そうですね、宮藤さんには甘いですわね」

悠太「だな、まあよろしく頼む」

ペリーヌ「ああ、あとこれですわ」

と車両から中くらいの箱を出す

悠太「なんだこれ？」

ペリーヌ「開けてみたら良いですわ」

木箱を開けるとそこにはクロステルマン家の家紋が入った短剣が2本入っている

悠太「これは短コンバットナイフ剣か」

中には鞘に入った短剣が入っており、その鞘はベルトに着脱可能なものとなっている  
ペリーヌ「そうですね、あとこれですわ」

手紙を2枚渡す

悠太は受け取り、中身を見る

内容しては書いてはいないが、悠太と凜が給料のほぼ全額を寄付した合計すると約1万円、現代価値に置き換えるならば1,000万円程度である橋を復旧する際の寄付金と物資支援の感謝を綴ったものであった

もう一枚は孤児達からの感謝を込めた言葉であった

ペリーヌ「本当によかったんですの？」

悠太「なんだ？もつといるのか？」

ペリーヌ「そんなことはありませんわ、1ヶ月分もなくてよかったですの？」

悠太「別に給料なんてほとんど使わないさ、肥やしになるぐらいなら役に立てて欲しいんだよ」

ペリーヌ「そうですね…」

悠太「なら気をつけていけよ、俺は船に乗せる物資の搬入の方に行ってくる、宮藤も服部も怪我すんなよ」

宮藤「あ、悠太さんさようならー」

悠太「おうよ」

と船の方に戻る

凜「あ、サボりから帰ってきた」

悠太「サボってないっての、ほいこれ」

先ほどの箱を渡す

凜「なにこれ」

悠太「ナイフだな」

凜「ふーん、良いじゃんこれ」

悠太「近接戦にはちょうどいい、ユニットの整備は終わったか？」

凜「うん、終わったよ」

悠太「なら再出港するまで暇だな」

凜「やつとゆっくりできるね」

悠太「だな」

翌日

悠太「にしてもガリアは扶桑に比べて過ごしやすいな」

凜「ねー」

「入ります！」

悠太「どうした突然」

「グリッド3Dにて断絶的な無線信号並びに赤色照明弾が打ち上がったとの報告です」

悠太「スクランブル！緊急出撃だ」

「り、了解」

悠太「凜いくぞ」

凜「あの子たちは」

悠太「上空待機を指示だ、俺らだけで急行する」

凜「わかった」

数十分後

凜「大体50km前方に複数の友軍機の反応、みんな見覚えのあるウィッチと一機だけ水偵がいるよ、その先にネウロイ反応あり…地面から続いている塔型の大型と小さいのが数百、それ以上」

悠太「先を急ごう」

少し飛ぶと

凜「ネウロイ消失、ウィッチ隊は到着寸前だけど…」

と話しているとソニックブームよりもはるかに強い衝撃波が2人を襲う

悠太「うわぁ…大丈夫か？」

凜「問題なし、そろそろ合流する、1人だけ初めて見るの子だけどって宮藤の魔法力が復活してる！」

悠太「嘘だろ！つてやばい上からだ」『エースパイロットの諸君、上を気に気をつけずに何をしてる？』

とミサイルを放ち撃墜する

ミーナ「悠太さん！」

悠太「おいつす、総員戦闘開始しろよ！勲章の祭りだぜ」

と機関砲を撃ちながら言う

ハイデマリー「この方は」

悠太「自己紹介終わってからだ」

坂本「受け取れえ宮藤い！」

と水偵から馬鹿でかいまるでパンカゴのようなものを投下する

宮藤「はい！」

と宮藤は震電改を受け取り飛ぶ

静香はと言うと体力を魔法力を使い切ってしまい、坂本が操縦する水偵に掴まり飛行している



悠太「聞きたいことはぎょうさんあるが…まあミーナ中佐殿」

ミーナ「総員、フォーメーションユリウス。目標、前方の超大型ネウロイ！」

「了解！」

と各員散開して戦闘に移るが大型ネウロイは多様な子機を放ち妨害する

悠太「本体に隙がないな」

凜「ねじ込みたいけど子機の壁が厚すぎ」

ミーナ「撃墜はしているけど本体まではまだ遠いわどうにか解決方は…」

と言っている

なんとライン川を遡上してた戦艦大和より対小型ネウロイ弾式対ネウロイ燃料弾燃、  
対ネウロイ徹甲弾徹の三種の弾が3発ずつ叩き込まれ、本体のコアをあらわにする

宮藤「行きます！」

と特大のシールドを貼り、他のメンバーのシールドそして、ルツキーニ、シャーリーの固有魔法を使い、子機もろとも超大型ネウロイ吹き飛ばす

悠太「本来なら2个方面ぐらい必要になる量をウィッチでとはやはりすごいな」

凜「同感」

ハイデマリ「あの、ミーナ中佐、今カールスラント国境付近で、新たなネウロイの兆し有りとの報告を受信しました」

ミーナ「聞いたわね皆、新たな脅威に対し、我々が成すべき事はただ一つここに50  
1統合戦闘航空団ストライクウィッチーズを再結成します！」

「了解!!」

悠太「許可されるのやら…」

数週間後 サントロン基地

翌日 夕方

パ・ド・カレー

悠太「ハルトマン、運転お疲れ様」

エーリカ「ソナナコトナイヨ」

ペリーヌ「帰りの船はあれですわね？」

悠太「ああ」

と現代の航空母艦を思わせる見た目をしているのは信濃型航空母艦“信濃”である  
リーネ「大きいですね、前見た大和と変わらないぐらいですね」

悠太「そりゃ、大和型ベースだからな」

エーリカ「何機ぐらいかは…機密か」

悠太「戦闘機、攻撃機、戦闘脚、輸送機、早期警戒機、空中誘導機丸々ひつくるめて  
80機だな」

エーリカ「はちじゆう！何それ小さい基地じゃん」

ペリーヌ「搭載してる機体は最新のジェットですわよね？」

悠太「輸送機と早期警戒機、空中誘導機を除けばな」

エーリカ「そりゃベルリン奪還に扶桑艦隊が三艦隊もいる予定なわけだ」

悠太「参加する艦は二隻がジェット搭載だからな、一隻は補助だが」

ペリーヌ「流石は扶桑ですわね」

士官「あの安田悠太中将殿少しお話が」

悠太「ああ、わかった、少し待っててくれ、凜来てくれ」

と少し離れ

士官「それで」

悠太「ほう」

士官「今朝川谷慎吾空軍大將が交通事故で亡くなりました…」

悠太「はあ?!本当か」

士官「はい、大量出血で死亡したとのことです、それで次官である悠太中将が大將に階級が上がると…ただ所屬が空軍ではなく欧州派遣軍司令官としての地位になると報告が」

悠太「…嫌だな…」

士官「え？」

悠太「いいや、気にしないでくれ、それで？」

士官「欧州派遣軍司令部のあるロンドンに来てくれと」

悠太「わかった、凜もか？」

士官「はい、大将補佐として中将になるそうです」

凜「うごご」

戻り

悠太「すまんすまん」

エーリカ「聞いていいかわかんないけど結局なんの話だったの？」

悠太「階級がまた上がるって話さ」

ペリーヌ「え？大将になるってことですか？」

悠太「ああ、元大将が交通事故で亡くなってな、空軍司令官としてではなく欧州派遣

軍司令官としてだが」

ペリーヌ「いろいろ災難ですわね、おめでどうですわ」

リーネ「おめでどうございます」

エーリカ「おめでどう」

悠太「ちよつとロンドンに行ってるわ」

と飛行機でロンドンに向かう

欧州派遣軍司令部

悠太「はじめまして、安田悠太と申します」

凜「同じく初めまして安田凜と申します、以後よろしく願います」

陸軍将官「こんな若造にながが大将だ……」

悠太「（こつちもなりたくてなったわけじゃねえよぼけ）今の発言は見逃しますが次はないですよ、正直言うなら自由にしてください、ぼくからの注文はそれだけです」

数週間後

悠太「お久しぶりミーナ中佐」

ミーナ「お久しぶりね、安田悠太大将殿」

悠太「宮藤方は？」

ミーナ「短期留学の方は順調だそうよ」

悠太「そうか……良かった、にしてもなんで大将になったんだろう」

ミーナ「優秀だからじゃないかしら？」

悠太「俺より優秀なやつなんて五万といるだろ」

ミーナ「そうかしらね」

コンコンコン

ハイデマリ「失礼します」

ミーナ「どうぞ」

ハイデマリ「あ、悠太さん」

悠太「おう、お久しぶり」

ハイデマリ「はい、ミーナ中佐、哨戒飛行の資料です」

ミーナ「毎度ありがとうございます」

悠太「ネウロイは以外にも減ったか」

ミーナ「そうね、どこか別のところに集中してるのかしら」

悠太「さあな」

次回 ベルリン奪還

## 第四章 ベルリン解放戦役

## 39話 ベルリン奪還

対陸軍通信兵「09式戦車各全長 9.50 m

車体長 6.80 m

全幅 3.20 m

全高 2.30 m

重量 40 t

懸架方式 トーションバー式

行動距離 250 km

主砲 51口径105 mmライフル 砲砲安定装置有

副武装 九七式七耗七同軸機銃

12.7 mm M2ブラウニング重機関銃

装甲 車体正面60 mm傾斜

車体側面25 mm垂直部

車体後部20 mm 垂直部

砲塔全周150mmお椀型

速度 前進52km/h

後進10km/h

エンジン 宮菱重工業 六式 2ストロークV型12気筒ターボチャージド・ディー

ゼル 800PS/2100rpm

排気量 19,800cc

乗員 4名

種大体連隊及び旅団の準備完了とのこと」

対海軍通信兵「連合軍の令さえ下ればいつでも開けます」

対空軍通信兵「逐次輸送準備完了」

カチカチカチ

悠太「サン、ニ、イチ、ヴィクトリア開始」

対連合通信兵「連合軍司令部より打電、作戦開始、ラーテ、ティーガー1、09式前進開始、数分後には戦闘地域に入るそうです、各ウィッチ隊も離陸」

海軍「艦隊、バルト海並びに北海への展開完了、空母信濃率いる艦隊も数時間後には北海に到着予定です」

悠太「空軍第一艦隊は？」



空軍「プリテン本島より約250哩地点で待機中です、にしてもよかったですのでしょうか？」

悠太「なんだ？」

空軍「連合軍には黙って一個艦隊を北海方面に展開してもよろしいのかと」

悠太「連合軍が言ったのは“各国海軍艦艇の総力を結集してだ”わかるか？」

空軍「はあ…分かりますけど」

悠太「ついでに言うなら嫌な予感がするんだよとてもな」

空軍「嫌な予感…ですか」

悠太「虫唾が走るほど嫌な予感がな」

陸軍「ラーテ隊、戦闘状態に入れとの事です！付近に展開中のウィッチ隊と共闘しつ

つ、戦闘中」

連合軍「各地域戦闘状態に入れり、全地域で優勢であります!!」

悠太「空軍、航空戦力ほどの程度輸送に割れる」

空軍「護衛め含めれば約1割から2割程度差し引きで輸送に回しても問題ないと思わ

れます」

海軍「緊急時には3割程度ならブリタニア本土在中の海軍航空隊で穴埋めも可能で

す」

悠太「そうか、輸送に回せ、海軍航空隊はイベリオン陸軍の重爆群の方に回せ」

海軍「そうすればブリタニア本土がガラ空きになりますか」

悠太「そこは空軍第一艦隊で補填予定だ」

海軍「了解しました、打電します」

陸軍「緊急に入電！ラーテが半球上のネウロイにより封鎖されました！」

悠太「なんだと！ウイッチ隊は！」

連合「ウイッチ隊は脱出できたそうです」

悠太「ウイッチ隊に通信繋げるか！」

連合「もちろんできますどうぞ」

悠太『ミーナ中佐、無事か？』

ミーナ『っ！悠太大将、私たちは無事ですがラーテが』

悠太『わかってる、現状位置は？』

ミーナ『ベルリン・グリッドA―1Sです』

悠太『ちよつとまでよ』

と地図を広げ、ジツと見る

悠太『そうか…地下道だ！それを使え』

ミーナ『地下道!?無線も通じずらい上に道をだれも知らないから危なくて…』

バルクホルン「ミーナ！私ならわかるぞ！」

ミーナ『なんですって』

バルクホルン『クリスが地下鉄が好きになってそれで私も覚えたんだ』

悠太『バルクホルン先導で行け！内部がどうなってるか正確に不明な今、これ以上待つとやばい可能性がある急げ！』

ミーナ『了解！』

悠太「連合軍本部に通達しろ！」

数分後

サーニヤ『こちら救助隊、聞こえますか』

悠太『感度良好、バツチリ聞こえてる』

数分後

連合「ドームが一瞬薄くなったそうです」

悠太「救助隊が世界首都ゲルマニアのようなネウロイと接敵したと聞いたがもしかして……」

連合「ネウロイの一部をドームに回していたのでしよう」

悠太「もう一度繋げ」

連合「はい」

悠太『サーニヤ中尉、忙しいところすまない、ネウロイはどうなっている」

サーニヤ『世界首都のドーム部分を攻撃すると上が薄くなるそうです…』

悠太『了解ありがとう』

連合「坂本少佐が乗るB-17が薄くなったドームに対して対ネウロイを投下するよ  
うです！と同時に地下ドームに足しても一斉攻撃を行うようですよ！」

数分後

連合「宮藤芳佳の魔法力が復活したそうです!!」

悠太「なんだと！」

連合「地下のネウロイが急激に減少」

悠太「宮藤の魔法力に釣られたんだ」

連合「ウィッチ隊、地上に戻るようですよ！」

悠太「ドームは」

連合「サーニヤ、エイラ中尉によって破壊するそうです」

連合「ドームの消失を確認！と同時にウィッチ隊は宮藤芳佳に合流」

悠太「これで終わり…か？」

連合「だといいんですが…」

連合「入電！街がベルリン上空に出来たようです!!」

悠太「ウィッチ隊は」

連合「これよりコアの捜索になるそうです！」

悠太「空軍第一艦隊に発艦準備命令！」

連合「コアらしきものを発見が上昇し逃走中とこのこと！」

悠太「宮藤がやってくれるはずだ」

連合「コアの破壊を確認!!街も分解したそうです！」

ミーナ『こちら501、敵ウォルフの完全消滅を確認！ベルリンを…奪還しました!』  
と無線が終わるとその場は湧き上がる

悠太「だがネウロイはまだ残っている、喜ぶのはまだこれからだ…」

1946年3月21日

カールスラント北部を侵略していたネウロイの巢、ウォルフが消滅、ベルリンは解放された

翌日 将官テント

士官「あの悠太大将殿、居ますでしょうか？」

悠太「どうした」

士官「各地域点在していたネウロイの巣が突如と爆発し、消えたと言う話が」

悠太「なんだと!?!偵察機を上げろ!本部にすぐ行く」

士官「はっ」

司令部

士官「RF-4によるますと、各地域点在していたネウロイの巣は見つかりませんでした、当直のものが消える瞬間の写真を撮っていたのでそちらを」

と見ると一つのキノコ雲が出来上がっている

士官「研究者によりますと、ウォルフがネウロイ本拠地であったのではないかとの事です」

悠太「連合軍はどのように？」

士官「まだ返答はありません」

1946年4月1日 連合軍司令部発表

先日のネウロイの巣が爆発し消えた地域には瘴気は確認されず、これにて第二次ネウロイ大戦は終結

これにて第二次ネウロイ大戦は終結をした

次回 大戦の終結

## 40話 大戦の終わり

士官「一部ネウロイは謎大陸方面に逃走したとのことですが」

悠太「オラーシャ軍と扶桑軍でカバーできる範囲だな」

士官「ですね、本土からは6月をめどに一部を除いて扶桑軍各部隊撤退を開始とのことです」

悠太「俺も引き上げるよ、ここに至って何にもならないわけだし」

士官「そうですね、短い間でしたがありがとうございます、貴方の元で学べて感謝です」

悠太「水臭いこと言わないでくれ、凜は知らないか？」

士官「凜さんならウィッチ隊の方に」

悠太「俺もそっち行つてくることは任せた」

士官「連合軍からこれを」

悠太「501の解体かわかった」

悠太「おうおう、元気か？」



ミーナ「悠太さん！」

ソラ「お父さん！」

とソラは抱きついてくる

悠太「で、お前らはどうするんだ？原隊に復帰するのは確定だがその後だ」

ミーナ「私は指揮官としてカールスラント軍に残るわ」

バルクホルン「私もそうだ」

エーリカ「えー私もそうしようかなー」

ルツキーニ「マツマとパツパのところに帰るの！」

シャーリー「私は軍をやめてイベリオンに戻るかな」

サーニヤ「私は両親を探しに」

エイラ「私もサーニヤについて行くんだナ」

服部「私も軍に残ってまだまだやる必要があります」

ペリーヌ「ワタクシも軍をやめてガリアの復興に努めますわ」

リーネ「私は軍に残ります、芳佳ちゃんは？」

宮藤「…私も軍に残って世界を護りたいです、みんなのために」

悠太「ほお…よく言ったな、連合軍司令部より通達、ミーナ・デイトリンデ・ヴィ

ルケ中佐以下12名 第501統合戦闘団『ストライクウィッチーズ』 4月1日 日本日

をもち解散とする」

「了解！」

ミーナ「皆んな、これからも元気でいてね、私からの最後の命令よ」

「はい！」

みんな最後の挨拶をし、帰路へと向かう

悠太「さて、帰ろう」

凜「ソラ行こう」

ソラ「うん」

宮藤「そういえば悠太さん、私の原隊って」

悠太「ファルコンだよ、と言っても今いるメンバーは俺ら合わせて4人だが」

宮藤「次はいつ皆に会えるかな」

悠太「さあ、だがこれが最後ではないな平時だし」

宮藤「ですよね」

悠太「5日の夕方にはここにまた来てくれ、それまでは自分の荷物やらをやっけて良

いぞ」

宮藤「えっと…荷物は少し前に持ってきてたので」

悠太「そうか、なら今でも帰れるのか？」

宮藤「はい」

悠太「そうか少し待っていてくれ」

本部

悠太「俺関係の書類は……」

士官「ああ、全部輸送機に乗せてありますよ」

悠太「なら俺は本土に戻っても良いのかな」

士官「その筈です、後の撤退は現地指揮官が行うので」

悠太「では」

と敬礼をしでてゆく

悠太「凜、荷物載せてあるよな？」

凜「乗ってるよー」

悠太「なら俺らは飛行機に乗って扶桑に帰るだけだな、お世話になった欧州の地も最後か」

機体に取り込み離陸する

悠太「あっさりだな」

凜「だね」

ソラ「ねえお父さん、扶桑に帰ったら私どうするの？」

悠太「どうするって何がだ？」

ソラ「私も軍やめないといけないの？」

悠太「強制ではないけど俺が思うに軍をやめて学校に通って知識を身につけてほしいな」

ソラ「そしたらパパ的に嬉しいの？」

悠太「そりやもちろん」

ソラ「なら学校行ってみようかな」

悠太「行くのは13歳からだな」

宮藤「来年から6—3—3制つてのが始まるんですけどつけ？」

悠太「だな」

ソラ「それで良いなら私行くよ！」

悠太「頼むな」

以降は年表と少しの会話である

1946年

5月1日 扶桑空軍参謀総長に安田悠太氏が就任

同月同日 扶桑空軍参謀副総長に飯田凜氏が就任

凜「おめでとう」

悠太「凜こそおめでとう」

宮藤「おめでとうございます」

9月1日 内務大臣として松川大吾氏が信任

10月26日 国際連合が発足 この時点での常任理事国はリベリオン合衆国、扶桑皇国、帝政カールスラント、オラーシャ帝国、ブリタニア連邦、スオムスの6カ国である

1947年

1月1日 ロマーニャ公国、ヴェネツィア公国2カ国が統一 イタリア共和国の誕生

同日 イタリア共和国、ガリア共和国、国際連合に加盟 扶桑が太平洋諸島、南洋島を破棄 同日独立

1月2日 イタリア共和国がバルカン地域を破棄、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、コソボ、アルバニアが一共同体としてユーゴスラビア連邦共和国として独立

1月3日 オストマルク崩壊、ポルスカ共和国独立、チェルコ・スロヴァキア共和国独立、オーストリア・ハンガリー合衆国独立

1月19日 帝政カールスラント崩壊、カールスラント連邦共和国成立 旧ポルスカ

領土をポルスカ共和国が確保

4月1日 扶桑皇国6―3―3―4制導入

4月7日 安田ソラ 中等教育学校に入学

悠太「ソラ、入学おめでとう、楽しみか？」

ソラ「うん、楽しみ！」

1948年

1月6日 リベリオン合衆国 ロイヤル陸軍長官が「扶桑はネウロイに対する鉄壁になるだろう」と声明

3月17日 ブリタニア、ネーデルラント、ガリアにより、ネウロイに対するブリュッ

セル条約締結

6月20日 カールスラント、ライヒスマルクに替えて、カール・マルクを導入

9月9日 浦島の西南の半島に2個のネウロイの巣を確認

9月10日 ネウロイの巣の名前をゴルフ、タンゴとし半島を高麗半島と名づける

1949年

1月1日 扶桑皇国、皇国制を破棄、ブリタニアと同じく立憲君主制へとシフトチェ

ンジ、国名を扶桑国とし、首都を東京とした

扶桑軍を扶桑国防省と改め

扶桑陸軍、扶桑海軍扶桑空軍、海兵隊、国家警備隊、長距離戦略打撃群の創立

独立組織として扶桑情報局を創設

安田悠太大将が空軍参謀長へ就任する

飯田凜中将が空軍参謀副長に就任

同時にオラーシヤとの問題となっていたシベリア地域をオラーシヤに譲渡、浦島について特別都市と定めた

4月4日 リベリオン、扶桑、オラーシヤ、ブリタニア、イタル、スオムス、ガリアを中心とした世界条約機構を調印、WTO発足

世界条約機構

9月7日 カールスラント連邦共和国、正式発足

同日 カールスラント共和国 WTO加盟

12月29日 インドネシア、ネーデルラントから独立

1950年

6月25日 日曜日

.....

次回  
新たな戦争



## 設定集（ネタバレあり）

AR—1（史実AK—74）

種類：軍用ライフル（ウィッチ用銃）

製造国：扶桑皇国

設計：宛坂秀太

製造：宮菱重工業

種別：アサルトライフル

口径：5.56mm

銃身長：415mm 210mm（AR—1WU）

使用弾薬：5.56mm×45F

装弾数：30発／70発（70発はドラムマガジン）

作動方式：ガス圧ロングストロークピストン式 ロテイトイニングボルト

全長：AR—1 943mm AR—1WU 735mm（銃床展開）490mm（銃

床折畳み）

重量：3, 300 g 2, 710 g (AKS-74U)

発射速度：600—650発/分 650—735発/分 (AR-1WU)

銃口初速：975 m/s

有効射程：500 m

ウイツチ用：1000 m

## 歴史

1944年から扶桑空軍陸戦ウイツチの装備として運用されて以降2010年現在各国政府機関、軍隊で運用されている

一部はテロリストに流れ、テロとしても使われている

扶桑軍では1970年に完全引退しており後継者は同じく宛坂秀太の設計した銃であるAR-41を運用している

## 概要

AR-1は1944年に扶桑空軍で採用された突撃銃で、従来の歩兵や陸戦ウイツチが運用する九九式短小銃や一〇〇式機関短銃に変わる当時最新鋭の小銃である

現在における突撃銃の元祖と言える

同時期の銃にStG44があるためどちらとも元祖と言えるだろう

がStg44は1943年生産開始のためStg44の方が元祖と言えるがStg44はプレス加工された鋼材が使用されていたため、熱伝導率が高く、連射を続けると過熱して持てなくなる欠点があった、東部戦線での運用メインとなったが、AR-1は東部、西部戦線の双方で運用され、ベルリン攻防戦等にも投入された

AR-1は弾が5.56と小さく反動が小さいため未訓練のウィッチにも容易に扱え、空中戦でも使いやすいと評判であった

生産について

切削加工を用いて生産する、そのため大量生産が可能で生産台数は約2億丁と言われている

現在は扶桑での生産は終わっているもののライセンスを購入し各国が少なからず生産を続けている

1970年に扶桑では現役を退いた

LM130 (C-130) 蒼空そうくう

モデルC-130

乗員5人（操縦士、副操縦士、航法手、航空機関士、ロードマスター）

全長：29.79m

全高：11.66 m

翼幅：40.00 m

翼面積：162.00 m<sup>2</sup>

空虚重量：34,786 kg

最大離陸重量：80,000 kg

動力：宮菱・宛坂動力 T2-A-1 ターボプロップエンジン

最高速度：600 km/h

巡航速度：550 km/h

航続距離：5235 km

実用上昇：10,000 m

離陸滑走距離：1300 m (最大積載)

着陸滑走距離：560 m (最大積載)

1944年ごろに開発された大型4発輸送機

当時のイベリオン軍主力爆撃機であるB-17より大きくより早い大型軍用機であ

る

同機体は設計は宛坂秀太氏あり

今現在も運用されている※ 何年？

ヘリ―

モデルOH―6

主回転翼直径：8.05 m

主回転翼枚数：4枚

胴体全長：7.23 m

全長：9.24 m

全高：2.73 m

空虚重量：540 kg

最大離陸重量：1,200 kg

エンジン：宮菱・宛坂動力―250A1 ターボシャフト

全装備重量：1,100 kg

超過禁止速度：不明

巡航速度：200 km/h

実用上昇限度：4,000 m

航続距離：2600 km

乗員：1名（乗客3名）

1945年初頭に開発されたヘリコプター

A M 3 1 4      A 8 M 雷風らいふう

モデル E M B | 3 1 4

乗員：1名

全長：11.30 m

全高：3.97 m

翼幅：11.14 m (折りたたみ時10.00 m)

空虚重量：3,200 kg

有効搭載量：1,550 kg

最大離陸重量：5,400 kg

動力 T 6 A | 1 ターボプロップエンジン

最大速度：590 km/h

巡航速度：520 km/h

飛行時航続距離：2,855 km (3255 km 増槽有)

実用上昇限度：10,668 m

離陸滑走距離：900 m

通常着陸滑走距離：860 m

## 武装

固定武装 AN/M 2 12・7 mm 6門（弾数計2, 1000発）

500 kg 爆弾2発（イベリオン製 Mk 65）

7 mm ロケット弾12発（ブリタニア製 RP-3）

1944年後半に開発された扶桑海軍の艦上多用途ターポップ戦闘機である、当時現役であった零式艦上戦闘機に比べ航続距離は劣るが、上昇、加速、火力が上である、上昇は零戦二二型が14 m/s に対し、雷風は16 m/s であり、P-51Dと同レベルである

雷風は格闘戦が非常に苦手であり、中低速での空戦機動をすると機種が斜め下に落ちる癖があるため一部のパイロットには不評であったが、地中海の戦いでは千歳航空隊、千代田航空隊の全機が生き残り、ウィッチ隊との協力のもと大型ネウロイを一機撃墜している

その後の戦いでも小型ネウロイを複数撃墜している  
設計は宛坂秀太氏である

実験空母天城（改工セックス級みたいなもの）

退役間近に空軍の案を採用した艦艇である、

空母信濃の前身である

天城に装甲板を貼り世界初のジェットストライカー、ジェット機の運用を可能にした空母

改修は1944年10月23日から開始され、陸海空軍全軍協力のもと3ヶ月で終了主に訓練、実験を主とした空母になったが、

ロマーニャ解放時には部隊後方で航空監視支援を行った

本来ならば戦艦大和ネウロイ化計画を直接支援する予定でいたが、既に改造してある天城を改造するのは不可能とされ、イベリオンから購入したエセックス級ヴァリー・フォージ（出雲）を使用した

その時は後方からファルコンウツチーズを出撃させ、支援を行った

その後宮藤芳佳軍曹（当時）を輸送する為に欧州派遣された

運用可能機は16機、75機搭載していた頃とは大幅に縮小したが、搭載機が零式艦上戦闘機からF-4になり戦闘能力自体は大幅に向上

搭載ユニットも8脚から7脚に減った搭載ユニットはUF-4を搭載

13機1個戦闘飛行隊が在中している

C-1 トレーダー 1機 輸送機

E-1 トレーサー 1機 早期警戒機



I-11 パイロット 1機 空中誘導機

I-11 パイロット について

C-11トレーダーを元にも製造した空中誘導機である

空中誘導機 戦闘機隊やウィッチ隊を母艦まで誘導することを種とする機種である、パイロットとは操縦士の意ではなく水先人ことである

主な搭乗ウィッチ

ファルコンウィッチーズ

安田悠太中将

安田凜少将

安田ソラ軍曹

ヤング・アバ軍曹

スミス・サッチャー軍曹

ホレーショ・エミリー軍曹

霧島疾風軍曹

## 信濃型空母

大和型戦艦を船体を流用して建造した空母

船体設計には新型の傾斜甲板アングルドデッキを導入したりと世界初の現代空母と言える装備を搭載

している

運用可能機

F | 4      48機      2個飛行隊

F / A | 4      16脚      1個攻撃飛行隊

UF | 4      10脚      1個飛行隊

C | 1      2機

E | 1      2機

I | 1      2機

の合計70機である

空母化に当たって、両舷の装甲が減っている代わりとして艦載兵装を置いている

扶桑空軍第一艦隊

扶桑軍に存在した空母機動艦隊

空軍の艦隊である、所属艦は天城、足柄、妙高、初月、新月、若月の6隻であり、この編成は戦後の機動艦隊と同じ編成である

足柄、妙高、初月、新月、若月は艦隊に編入される前に大規模な改修されており、足柄、妙高は現代で言うミサイル重巡洋艦のように艦隊防空ミサイル発射器を搭載しており、初月以下3隻は初期型の電探管制04式多砲身機関砲や艦載型のAAM-1Aを搭載している

足柄以下2隻には艦隊防空用の“FDM-1 剣”が搭載されており、最大射程92 km、速度はマッハ3.2となっている

ただ、最大射程を出すにはウィッチまたはI-1パイロットによる誘導支援が必要である、誘導無しでは52 kmが限界である

足柄、妙高は現実においてジュゼッペ・ガリバルデイ（戦後改修後）に近い

ただそれよりも対空武装に力を入れている感じ

統合参謀艦隊 2017年に設立された空母打撃群、旧扶桑空軍第一艦隊と同じ艦隊旗を持つ艦隊である、ただ扶桑空軍第一艦隊と違うのはウィッチ専門艦隊であることである

2022/07/26更新分

魔女が純潔ではないといけない理由

主な理由としては男性の唾液又は精液が一定以上体内に侵入した場合、魔女として重要な細胞の破壊者となり、魔女としての能力が失われるが一部の血に置いてはそれが起きず、妊娠出産が可能である

魔術師は約1000万分の1程度とされており、居たとしても99.99%が生殖能力を損失している

が魔術師の場合は魔女との性行為をしても魔女の損失や魔術師としての役割を終えることはない

生殖能力の損失については不明な点が多く、主な要因に近いのは無精子症とされている

2022/11/27更新

戦略爆撃機 B-49 富嶽 モデルYB-60

乗員：13人

全長：50m

全幅：40m

全高：15m

エンジン： 宮菱重工 Mh | JF | 4 | B | 1  
 補助ロケット： Mh | Re | 1 | B | 1  
 最高速度： 1080 km/h  
 巡航速度： 880 km/h  
 戦闘行動半径： 19,572 km  
 爆装量： 40,000 kg  
 Mh 宮菱重工  
 JF ターボファンジェットファン  
 4 採用番号  
 B 爆撃機用  
 l 型  
 Mh 宮菱重工  
 Re ロケットエンジン  
 l 採用番号  
 B 爆撃機用  
 l 型

## 第五章 高麗戦争 1950 新たな戦争

41話 新たな戦争

1948年

3月17日 ブリタニア、ネーデルラント、ガリアにより、ネウロイに対するブリュッセル条約締結（WTOの前身）

6月20日 カールスラント、ライヒスマルクに替えて、カール・マルクを導入

9月9日 浦島の西南の半島に2個のネウロイの巢を確認

9月10日 ネウロイの巢の名前をゴルフ、タンゴとし、半島を高麗半島と名づける  
1949年

1月1日 扶桑皇国、皇国制を破棄、ブリタニアと同じく立憲君主制へとシフトチェンジ、国名を扶桑国とし、首都を東京とした

同時にオラーシャとの問題となっていたシベリア地域をオラーシャに譲渡、浦島については特別都市と定めた

4月4日 リベリオン、扶桑、オラーシャを中心とした世界条約機構を調印、WTO

発足

世界条約機構

9月7日 カールスラント連邦共和国、正式発足

12月29日 インドネシア、ネーデルラントから独立

1950年6月25日 日曜日

扶桑空軍の指揮官に値する安田悠太、安田凜夫婦は寝室で眠っている時間

ジリジリジリジリと非常呼集のアラームと共に叩き起こされる

悠太「はいもしもし、ああ、国防省だな」

凜「ゴルフの件だろうね」

とメモ帳に何かを書きながら言う

悠太「今日何年何日だ」

凜「1950年6月25日 日曜日今の時間は…5時11分」

悠太「なるほど、さあ行こう」

国防省

職員「ゴルフ、タンゴからネウロイを多数確認したと戦略航空偵察隊が確認しました」

悠太「サイズは？」

職員「コアあり小型です」

悠太「福岡、山口、島根に緊急出撃命令をだせ、責任は俺が取る」

職員「了解」

だっだっだ

職員「入ります」

悠太「そんな急いでどうした」

職員「一部ネウロイが海を渡り扶桑本土に向けて進行して居るのを海上保安庁巡視艇

“まえやま”が確認との事です！」

悠太「海保に連絡、すぐに下がれと！」

職員「了解」

悠太「首相官邸に連絡回せ、緊急事態宣言の発令と戦時体制の発令それにウイツチの招集だ、直接首相官邸にだ、国防大臣がいるはずだ、それでオラーシャ、イベリオンに情報を回せ」

ジリジリジリジリ

「国防省 より デフコン スリー が

発令されました」

悠太「B-49、BK-49を空中待機、B-49には新型の対ネウロイ爆弾を最大

積載、BR-49もだ！上げろ上げろ」



職員「ハイっ！」

山崎「おい、航空機飛ばせるか？」

悠太「さつき緊急出撃命令出しました、偵察機からの情報は逐次そちらにも回してますよ」

山崎「ありがとう、これから忙しくなる前に首相からお呼ばれだ」

悠太「林さんもですか？」

山崎「ああ、全員だ」

首相官邸

吉田「どうなってるんだ」

悠太「ゴルフにいたネウロイの一部が海を渡り扶桑の地を食い破ろうとしています」

吉田「な！」

悠太「デフコン3が発令された為、私の判断でB-49、BK-49、BR-49を離陸させました」

吉田「なに、一体何をしたのかわかっているのか？」

悠太「ええ、もちろんわかっていきますよ、ですがお役所仕事を通して時間があるならば扶桑は終わります」

吉田「…そうか、我々ができる支援は先ほど来た連絡通りなのか？」

悠太「そうです」

吉田「君…いやこの3人は政治には長けていない、だが私は軍事に長けていない」

林「は…?」

吉田「つまりは政治のことは我々に任せておけ、君たちは扶桑も守りあの半島を人類の手に取り返せ」

3人「ハッ」

国防省 空軍部

職員「信濃旗艦の第七空母群が横須賀を出ました」

悠太「東北にいる航空隊を逐次、護衛につけろ！」

職員「第21ウィッチ、ネウロイと交戦」

悠太「状況は」

職員「ネウロイXF-15型、時速 900km近くだそうです！」

悠太「流石に進化したか、だがミサイルのと組み合わせで打ち勝てるな」

職員「ネウロイXF-15型17機撃墜、損失無し」

悠太「よしよしよし」

外交員「失礼します」

悠太「どうした外務」

外交員「イベリオンからです」

悠太「なんだ？」

外交員「プリマス在中イベリオン軍第二戦艦艦隊並びに第七空母打撃群を派遣することです」

悠太「わかった、にしてもプリマスか、最低でも1ヶ月だな」

職員「ヴィルヘルムスハーフェン在中連合艦隊旗艦大和もイベリオン軍第二戦艦艦隊と共に出港するそうです」

悠太「太平洋に使える大型艦は」

職員「第七空母群、空軍第一艦隊のみです」

悠太「空母第一艦隊は今はアウストラリアのメルボルンに合流寄港中か」

職員「はい」

悠太「各基地の戦闘機隊の発進用意」

職員「ハッ」

「悠太さん飲み物です」

悠太「ああ、どうも」

コーヒーを渡され一気に飲み干す

悠太「今の各地域の戦況は」

職員「五島、佐世保、久留米、阿武、合計でネウロイが約100から200前後のことです」

悠太「交戦部隊は」

職員「第八航空戦闘団、第九航空戦闘団が戦闘に入れりとの報告です」

悠太「数週間は防戦一方だろうな」

職員「攻めるに値する艦隊、部隊は未だに欧州にありますからね」

悠太「陸の方はなんと？」

職員「それが大陸の地質、山岳の度合いは資料がないために上陸作戦とするならば一年半年は必要との事です」

悠太「ああ、それはわかるがこれ以上のネウロイが来たら我々はどうにもなくやられるだけだぞ…今やブリタニアと同じだ」

職員「ですが我が国の鹿児島、福岡、山口、大阪新潟、青森、北海道にはアレがあります」

悠太「ああ、わかってるだができれば使いたくない…そうだろうか？」

職員「ベルリンで少数使われたとは言えあの数を大量に打ち込めばどうなるかは…」

悠太「そうだ」

8月30日 WTO各国が部隊の派兵を決定

7月2日 扶桑空軍横田基地からリベリオンB―50、扶桑F―4が巢に対する攻撃を開始

その後WTO軍はネウロイに対して多数の爆撃作戦を展開する  
その後も防戦一方で半年、一年と時はすぎ

1951年 6月9日 8時14分

悠太「よし、資料終わりそれで各地域の戦況は」

職員「各戦域問題はありませんいつもの通りです」

悠太「D―DAYの準備は？」

職員「もちろん出来つつあります」

悠太「よしよし」

凜「こつちも終わったよー」

悠太「おう」

荒木「あの、お二人さんは食事しました？」

《荒木信雄 情報担当官長である悠太とは家族ぐるみもある》

悠太「いやまだが」

凜「私は事務員の子にパンを貰ったぐらい」

荒木「でしたらうちの女房が……」

と鞆から一つの風呂敷を出す

凧「え？道子さんの料理?！」

荒木「はい、お二人は食べてないだろうからって」

凧「やつはい、ココ最近まともなの食べてなかったんだよね」

悠太「おにぎりと飲み物だけだな朝も昼も夜も」

荒木「それは流石に不味いんじゃない」

悠太「爆弾級のおにぎりさ」

荒木「まあお食べになつてください」

凧「頂きます！」

悠太「頂きます」

と食べていると

士官「入ります、黄海に展開中の信濃から緊急入電」

悠太「なんだ？」

士官「ゴルフが突然大爆発したとの事です！」

悠太「はあ？久留米からFR—4を上げろ」

士官「既に、爆発する43秒前に同空域をリベリオンB—50が飛翔していたとの情

報も」

と言うとバアンと机を叩く

悠太「クソツタレのヤンキーがあれだけ釘を刺したのにやりやがって、諜報部の連中呼んできてくれ」

士官「は、はい」

凛「まさか…！」

悠太「その通りだろうよ」

凛「…」

悠太「長崎、佐賀、福岡、山口に対瘴気部隊を待機させるように大臣を仰げ」

別の士官「官邸に緊急招集とのことです」

悠太「ああ、わかったおい、諜報部の奴は首相官邸の方にもってこい、凛いくぞ」

凛「わかった」

首相官邸

吉田「ネウロイの巣が爆発事がわかる者は？」

悠太「はい」

吉田「なんだ？」

悠太「イベリオンの開発した新型コア力爆弾…だと思われます」

吉田「コア力爆弾？何だねそれは」

悠太「はい、コアを圧縮し、爆弾の中へ詰め、それを投下し起爆させるとコアが力ケラになる熱膨張反応を利用した対ネウロイ爆弾という物だとおもれます」

吉田「なに？本当にそんなものが存在するのか？」

悠太「扶桑でも可能です、近いものでコア力発電等がありますから」

吉田「人に対する被害はあるのかね？」

悠太「爆発と共に瘴気がぶちまけられるのでもしそれが気流に乗った場合扶桑各地域に降り注ぐ可能性があります、今回の場合ですと長崎佐賀福岡山口に既に空軍属の対瘴気展開命令を出しました」

吉田「おおそうか、やはり君は軍参謀本部長になるべきではないかね」

悠太「それは結構です、イベリオン軍に外交ルートを通じて2発目に対して抑制できることはありませんか？」

吉田「…あるな、最近は扶桑の家電がリベリオンでよく売れているたがそれはリベリオンだけではなくオラーシャやブリタニアでもそうだ」

悠太「つまりは…リベリオンに対する輸出制限ですかね？」

吉田「その通り、2発目を投下したら即時停止と通告する解散してくれ」

「ハッ」



吉田「ああ、悠太と凜は少し残ってくれ話したい事がある」

悠太「はい」

凜「はい」

吉田「そのコア力爆弾というものは武装でも開発可能なのだろうか？」

悠太「…首相御言葉ですが本当に言って折られるのですか？」

吉田「俺だつて開発はしなくないたがもしリベリオンが我が国にそれを投下すると脅してきた場合どうする？」

悠太「…ああ、そういうことですか、一つ言うならば可能です、ですが…どこかしらで実験をしなければなりません」

吉田「できるのができないのかだ」

悠太「もちろん現在研究ではありますが、ですが我が国はリベリオンの様な膨大な実験能力も持つ国ではありません」

吉田「そうかすでに研究中か…だがもしあの半島を手に入れば可能だと思うが」

悠太「…そうなれば可能だとはおもれます」

吉田「そうかそうならそうするか、もう一つ聞きたかったことについてだがD—DA—Yに本当に飛ぶのか？」

凛「当たり前です首相、せめて引退飛行ぐらいさせてくださいよ、引退はしませんけど」

吉田「ああ。わかった頑張ってくれ」

「入ります」

悠太「どうぞ」

「福岡、山口にて微量の瘴気を確認しました」

悠太「被害はどの程度になりそうだ」

「作物が枯れたりする程度だそうです」

悠太「…気象隊、今後の雨予想は？」

気象隊「…1週間は雨の予報はないですね、乾燥が強いかと」

悠太「大臣を通して九州、中国、四国に緊急非常事態宣言の発令を助言してくれ」

「既にやっております」

悠太「流石だ、今後は陸軍海軍とも協力しつつ除染に努めよ」

「了解」

悠太「さあ、ヤンキー共どう出る」

12時

ペンタゴン 会見

報道官《本日6月6日午前8時15分、我がリベリオン空軍第509混成群団所属B—50 スーパーフォートレスがネウロイの巣であるゴルフを破壊しました》

悠太「ほう：扶桑での被害についてはなしか」

13時

扶桑内務省 会見

《本日リベリオン空軍が投下した特殊爆弾により九州地方、中国地方、四国地方に緊急事態宣言を宣言します、理由としてはリベリオン空軍が投下した特殊爆弾は形状は不明ですが我が国ではコア力爆弾と言われるコアを使った爆弾とされており、起爆後瘴気が気流に乗り、一部地域に瘴気性降下物が降る危険性があります、瘴気性降下物の場合によつては健康被害を及ぼす可能性があるので、緊急事態宣言下に置きましては不要不急の外出・移動はおやめください、夏休みという期間ですが生死に関わる可能性があるのをお願いいたします。期間は本日より2週間を予定しております》

悠太「おい、諜報部、白家の様子は？」

「ちよつと待つてください…来ました…」

悠太「どれどれ」

「在イベ諜報員によりますとホワイトハウスは投下直後よりも慌ただしく動いており、複数の車両が出入りしていることのことです」

悠太「脅しの文章はいつ送ったと？」

「こちらの記者会見中に堂々と打電したとの事とです」

悠太「そうか…1週間が肝だな」

「だと思われませす」

1951年8月9日

悠太「…」

凜「…」

2人とも険しい表情で机に落ちてある書類を済ませている

「閣下、例の瘴気の詳細情報が上がってきました」

悠太「ああ、こちらに渡してくれ」

「はっ、にしてもこれだけの書類、終わるんですか…?」

悠太「終わるさ、きつと」

ダンドンダんと荒く強く、ドアをノックする音が聞こえる

悠太「…どうぞ」

「黄海に展開中の艦隊から伝令、タンゴがゴルフと同じように爆破したとのことです!!」

悠太「首相官邸に情報は？」

「既に」

悠太「わかった」

数時間後

扶桑内務省

「ネウロイの巣であるタンゴの破壊についてですが、リベリオンがゴルフと同様に破壊し、瘴気の発生が確認されているため再度緊急事態宣言を宣言いたします、期間は1週間としております」

扶桑外務省

「我が国はリベリオンに対して経済措置とし各種輸出規制、入国規制を行います」

扶桑国防省

「リベリオン軍の我が国に対する領土通過権を一方停に破棄し、扶桑空域を飛行する場合は警告後撃墜する可能性を示唆する」

リベリオン国務省

「扶桑国の1ドル360円へ固定をする、扶桑国に展開中のリベリオン軍を撤退命令を支持」

リベリオン極東・陸海参謀本部長

「我々はリベリオン軍から脱出し扶桑軍傘下へ編入する」

リベリオン国防省

「極東軍に対し戦闘放棄を命令」

扶桑国防省

「リベリオン極東軍に対し扶桑各地域にて補給許可を付与、今後の作戦に従事するように命令」

次回 クロマイト作戦

## 42話 クロマイト作戦

1951年8月24日 クロマイト作戦 前夜 深夜九州南部沖150海里 扶桑・極東軍連合艦隊 旗艦 戦艦大和以下、戦艦武蔵、アイオワ、ミズーリ、空母信濃、天城、出雲、オリスカニー、上陸用LST含め以下各種艦艇130隻

九州南部海域 上空15000m

悠太『久しぶりの自由だ』

凜『だねー、釜山上陸成功して橋頭堡を確保、増援を送ってるから大丈夫かな』

悠太『どつかとヤンキーどもが巢を破壊してるからネウロイは弱体化してるらしいからな』

凜『にしても極東陸海軍がこっちに寝返ってくるとはね、しかもマツカーサー元帥だし』

悠太『アレの使用を反対派の筆頭だとは思わなかったな』

凜『現世だと大賛成どころか朝鮮半島に落とそうとしてたわけだしね』

無線『こちら連合海軍、貴機へ注ぐ、同空域は現在飛行禁止空域に指定されているさ

もなくば撃墜するルート―2―2―6へ転進せよ、繰り返すこちらは》

悠太《こちらは扶桑空軍第404航空飛行小隊、空母信濃への着艦を許可もらいたい》  
無線《…了解した、我が艦は五島列島より南西へ150海里を航行している》

悠太《了解》『降下しよう』

凜『話がわかる人でよかった』

悠太『流石に上から命令な訳だから聞いてるだろ』

凜『そうだね、つと正面からお迎えが上がってきてるね』

悠太『ちとばかり早いな』

凜『…違う！ネウロイだ！クソ！あいつこつちと同じ波数で返してきやがった』

悠太『これが例のネウロイか、行くぞ凜』

凜『一丁大暴れだね！』

とF―16とSu―27は一気に降下を開始し、ネウロイに対して攻撃を仕掛ける

悠太『こいつが噂のX―19か？』

Ye―8らしき機体が2機に攻撃を仕掛けると回避する

凜『なんかMiG機みたいだね！』

離脱する、するとその2機は後ろをつける機首部分からビチュンと短いビームを乱射してくる



悠太『中、小型は機関砲のようなビームってことか、さあ、お遊びは終わりだぜ』  
と言うと凜は小隊を離脱、その間にも悠太はぐんぐん加速、ネウロイは凜の方は危険  
性がないと思っただのか悠太の方のみを追う

凜『危機察知能力低いのねあんたら』

と言いつつながらAR-1の5.56mm×45Fを後ろから叩き込み、撃破する

凜『もう一機はミサイルで』

と改良されたAAM-2Cを発射し、撃墜する

悠太『これで終わりだな』《こちら404小隊、X-19型ネウロイを二機撃墜》

無線《了解、既にそちらに2機援護を送ったためにそちらで合流し着艦せよ》

??『悠太さー……ん、凜さー……ん』

凜『この声は!』

悠太『そういえば……』

??『お久しぶりです、悠太さんに凜さん』

悠太『お久しぶり、宮藤芳佳中佐』

宮藤『はいっ』

??『あわわわ、宮藤さん、この方に敬語を使わな無いは……』

悠太『えっと……』

?? 『初めまして、信濃第1飛行隊第一小隊次席指揮官の  
 揮官の御無礼…』

神山こうやま 碧大尉あおいです。我が指

悠太 『そうか、宮藤、話してないのか?』

宮藤 『あ、えへへ、話してないです』

凜 『芳佳はこの歳になっても少し抜けてるなあ…』

宮藤 『あ、空母が見えて来ましたよ』《こちら第一小隊、着艦指示を》

無線 《風速横風2.2、波ほぼ無し2機ずつ着艦せよ》

宮藤 《了解》『碧行くよ』

碧 『は、はい』

と綺麗に着艦する

悠太 『あの宮藤上手くなったものだな』

凜 『そういえば信濃に坂本さんも乗ってるんだっけ?』

悠太 『らしいな』

無線 《404小隊、着艦開始せよ》

悠太 《了解》

と二機とも着艦する

整備士 「えっと…どうすれば」

悠太「とりあえず燃料だけで良いよ」

凜「私の方はA I M | 2 C、1発と燃料ね」

整備士「了解」

宮藤「あ、来た」

凜「おいつすう」

悠太「おうよ」

と10人や15人ぐらいのウイツチ達が並んで整列している

宮藤「ウイツチ隊、頭右」

と言うと無音だがビシツと音が聞こえそうなぐらい綺麗に悠太達の方を見る

悠太「えー…?」

宮藤「どうしました?」

悠太「すまん、何話すか忘れた」

宮藤「えっ?」

凜「…ごめん私もだ、なんかあったと思うんだけど…うん」

悠太「あー…明日から始まるクロマイト作戦に従事するウイツチに注ぐ、同作戦は各ウイツチ隊の連携、支援、能力全てに置いて全力を出すことが前提とされており、同作戦は明日の扶桑軍臨時傘下のアイオワ級戦艦2隻、扶桑海軍の大和型戦艦2隻による艦

砲射撃から始まり、その戦艦群を空から護衛するのが目的である、邀撃戦闘のみならず、観測射撃や早期警戒も任務の一つである、まだ戦争は終わってはいない。今回の勝利に満足することなく、今後再開されるであろう戦闘においても諸君らの奮戦を期待する」

と言うと少しざわつく

艦内アナウンス

「安田悠太大将、飯田凜中将、艦長室へおいでください」

悠太「最後に諸君、最後に一つだけ、僕はそんなに硬い人間ではない、上官ではあるが自分達の兄や姉のように接してほしいな、では」

凜「よろしくね、みんな」

宮藤「戻れ！」

艦内看板を頼りに艦長室へ向かう

艦長室

ガチャとドアを開ける

「お久しぶりです、安田悠太大将殿と飯田凜中将殿」

悠太「お久しぶりです、坪田艦長」

「何年振りですかね」

悠太 「2年ぶりぐらいですかね、それで呼んだ理由は？」

「それについてはですね、数時間前に同地域を飛行した偵察隊が撮って来た写真に違和感を感じまして、これなんですかね」

と一枚の白黒写真を見せる

悠太 「中央部の上陸予定地点ですね？それがどうして？」

「この川の部分を見ていただきたいんですが……」

と指差すとそこにはまるで橋のようなものが掛かっている

凜 「石橋……ですかね？」

悠太 「もしかしてこの地域に人が住んでいた可能性があると？」

「ここだけの話なんですけど、2人は異世界から来たと話を聞いておりそれで、あ、安心してください墓までこの秘密は持っていきますよ」

悠太 「……はあ……ええ、そうですね、そうですね、異世界の住人ではあります、この地域に人が住んだかと言われたYESとしか」

「なるほどありがとうございます」

悠太 「この事は機密ですから他言しないでくださいね」

「もちろんです、墓まで持っていきますよ」

悠太 「そういえばこの艦隊に何個脚隊居るんですたっけ？」

「一応6ですね」

悠太 「信濃に2個脚隊だったよな？」

「ええ、そうですが…」

悠太 「もし宜しければですけど明日の作戦時に信濃第1飛行隊の指揮権を移譲してくれませんか？」

「…は？」

悠太 「よければです、無理ならばそれで構いません」

「ちよ、私だけでは決めかねられませんので航空参謀の方に…」

悠太 「ええ、構いませんよ、なら少し格納庫の方に行きですね」

「は、はい」

と出てゆく

凜 「何考えてんの？」

悠太 「そりや飛ぶなら部下をこさえなきやだろ？」

凜 「…どこから？」

悠太 「はー…お見通しか水戸F u i Bからだよ」

凜 「水戸の連中か、内容は？」

悠太 「この近辺で確認されたHNについてだよ」

凜「え？HN居るの？報告聞いてないけど」

悠太「どうにも情報室だけで止まってたらしい、ネズミが教えてくれたら突いたらボロボロとな」

凜「やっぱり諜報部は信頼できないね」

悠太「ちつたあまともになったと思うんだがな」

凜「まあそうだけどさ」

と2人で艦内を散策してると

???「あれっ？ユウタじゃん」

悠太「は？」

凜「ん？ってエーリカじゃん、そっちこそどうして？」

エーリカ「対瘴気で連合軍に派遣されてたからそれで来たんだよ」

悠太「あー？そう言えばカールスラントとガリアから来てるって話があったな」

エーリカ「田舎で開業医ついでで瘴気の研究してただけど、元ウィッチでしょ？だから呼ばれたの」

凜「そっか、上陸作戦だもんね」

エーリカ「そうそう、限定的なだけ治療法もあるし」

悠太「結局治療法ってなんなんだ？」

エーリカ「ヨウ素剤で多少の対策ができるからね、扶桑で開発された新型の防護服もあれば多分大丈夫だとは思う」

凜「ヨウ素剤かくにしてもなんでこっちに？」

エーリカ「だってこっちは医療機器が揃ってるし」

悠太「そういうえばレントゲンやら細菌検知室があったなそれなら大和とか武蔵でも同じ設備はあると思うが」

エーリカ「そうなんだけど、信濃のほうが大きいんだよね、医者もこっちの方が多いし」

悠太「そうなのか」

エーリカ「知らない…の？」

悠太「そりや俺は空軍だし、前線に出てくることなんてベルリン以降初めてだぞ」

エーリカ「うっそお！」

悠太「本当だよ」

エーリカ「大丈夫なのそれ」

悠太「さあな」

宮藤「あ、居た居た」

エーリカ「ミヤフジじゃんどうしたの？」



宮藤「坂本さんが呼んでたんですけど」

悠太「なら行くか、エーリカも来るか？」

エーリカ「行こうかな」

宮藤の後について行く

格納庫の一角 待機室外

??「振る時はもつと腰に力を入れて1, 2, 1, 2, そうそうだ」

凜「坂本さんって声が聞こえる」

エーリカ「だね…」

悠太「あいも変わらずか」

宮藤「年齢以外変わってないように思いますよ私は」

ガチャとドアを開ける

宮藤「坂本さん、連れてきましたよ」

坂本「おお、来たか」

悠太「お久しぶり」

凜「同じくお久しぶり」

エーリカ「さつき振りかな？」

坂本「何年振りだ？2年ぐらいか？」

悠太「そのぐらいだな、それで話があるんだろ？」

坂本「ああ、ちよつとついてきてくれ」

と何処かへ連れて行かれる、ついた先は将官用の会議室だ

坂本「話についてなんだが、高麗半島上陸後の戦闘について少し気になるところがあつてだな」

悠太「どこだ？」

坂本「陸軍から情報を貰つたんだが、上陸時にネウロイの過半数は存在しないとあるんだが」

悠太「偵察機を飛ばして確認したがあまり確認はできなかつた、言えば上陸隊員を油断させないための工作だ、とはいえ、あの時、みたいに地下から現れる可能性もある、だから戦艦四隻巡洋艦五隻で艦砲射撃を行うんだ」

坂本「なるほど：地面を削りネウロイに少しでもダメージを与えさせれば最後というところか」

悠太「そうだ、運が良ければ損害ほぼなしで上陸できる、上陸後は機甲部隊を陸揚げして南下させ、釜山から出てきた部隊と合流その後各地域を占領、北上は北緯38度線で停止」

坂本「その後は？」

悠太「各部隊到着したら越境し、半島最深部にある川のラインで完全停止だ」

坂本「ネウロイがライン川の時のように出て来るんじゃないか？」

悠太「BU-47での写真偵察を解析したが付近一带にネウロイは確認されていない、巢の位置も内陸に500kmは行かないと確認はされてないからな」

坂本「そう言うことか」

悠太「念には念、さらに念を加えるために我々が来たと言つてもいいな」

坂本「!? 2人とも飛べるのか？」

悠太「もちろん、最後に飛んだのがいつかは覚えてないがな」

凜「本当にいつだろうね」

宮藤「二機だけで飛ぶんですか？」

悠太「それは今航空参謀に聞いてるらしい、艦長が」

宮藤「もしかしてうちの部隊を一部……」

悠太「何を言ってるんだ？ 信濃第1飛行隊をだが？」

宮藤「ええ！」

坂本「流石に無理だろう？」

悠太「さあ、わからん」

宮藤「いやでもあの航空参謀なら……」

凜「と言っても今回のウィッチ隊の仕事は防空のみだから渡してくれそうだけどね」  
宮藤「そうですね、流石に」

坂本「たがウィッチ隊がいなければ防空圏は薄くなるぞ」

悠太「そもそもネウロイ数は少ない上に作戦開始時刻の10分前には板付飛行場や大村空港から防空のF-4B/Cが飛んでくる」

坂本「確かにそうだが戦力の分散は不味くないか？」

悠太「別に別働隊として動くわけでもないんだ、動くとすれば俺と凜が上陸支援に二機だけで行くさ」

凜「そうそう」

坂本「そうか…」

エーリカ「と言うか私ここに居てよかったの？」

悠太「別に機密を言ってるわけでもないから良いさ」

エーリカ「そうだけどさー」

悠太「なんだ？機密でも言っただけじゃなかったか？」

エーリカ「今で十分お腹いっぱいだよ」

悠太「そうか」

と腰ポケットを軽く叩くと

カサと音が鳴る

悠太「ん？」

ポケットに手をつ突っ込んで確認すると……ここに来る前に飛行中にと渡されたチョコレートが入っていた

悠太「エーリカ、ほい」

投げ渡す

エーリカ「え？」

と慌てて受け取る

悠太「あげるわ」

エーリカ「つてチョコじゃんどうしたの？」

悠太「ここに来る前に坂付で飛行中にでも食ってくれって渡されてたやつ、結局は食べなかったあげるよ」

凜「私も貰ってたからはい、あげる」

エーリカ「…なんか意図を感じる」

悠太「そうか？」

凜「そう？」

エーリカ「…ああ、そういえばクリスマスちゃんが悠太に会いたって相談してきたんだ

けど」

悠太「クリス？バルクホルンの妹だったよな？」

エーリカ「うん、なんでも空軍パイロットになりたいんだってさ、でもカールスラントだと女性戦闘機パイロットは認められないから扶桑でって話なんだけど」

悠太「認められてないのか」

エーリカ「戦闘機はね、それ以外の役職だとあるんだけどどうしても戦闘機が良いって言ってるね」

凜「それなら秀太のところで見させれば？あそこだったら整備から飛行機、空戦機動論の全部が学べるしさ」

悠太「だな、あいつにも相談してるからまだカールスラントで勉強しといてくれて伝えてくれ」

エーリカ「わかったよ」

悠太「ただ、法的な問題と諸君理由で遅れそうではあるけどな」

エーリカ「本人は24歳には行ってくって言ってたよ」

凜「24？どうして？」

エーリカ「それまでにカールスラント国内のライセンスを取るって言ってた」

悠太「なるほどな」

凜 「確かにそれはいいね」

エーリカ 「と言うかもうこんな時間じゃん、私戻るね」

悠太 「ああ、俺らも戻りたいが…宮藤部屋どこだ？」

宮藤 「部屋は将官用のところなんですけど…知りませんよね」

凜 「知らんね」

悠太 「知らないな」

宮藤 「ならついてきてください」

と連れられて部屋にゆく

悠太 「凜と同部屋か」

宮藤 「まあ夫婦なんで良いかなと」

悠太 「宮藤提案か？」

宮藤 「い、いやそんなコトハナイヨ」

悠太 「まあいい、場所は覚えたしな」

「あの、悠太さんいらつしやいますかね？」

悠太 「なんだ？誰か呼んだか？」

宮藤 「航空情報官の神田さんがきてます」

悠太 「どうしました？」

「先ほどの話についてお二人とも航空参謀がお呼びに、宮藤さんもです」

悠太「少し待ってください」

と荷物をベツトに放り込む

凜「私もつと」

同じように放り込む

悠太「よし、行こう」

参謀部

「あの話についてなんだが…あ、宮藤さんは聞いてないか」

宮藤「いや、先ほど悠太さんから直で聞きました」

「なら良い、安田悠太大将の指揮下に入れ」

宮藤「了解」

「部隊への通達は明日の作戦開始前迄に伝えてくれれば構わない」

「それ以外は…特にないな」

悠太「戻っても?」

「かまいません」

その後入浴し翌日の作戦に備える

艦隊は空母艦隊と戦艦艦隊へ別れ、空母艦隊は戦艦艦隊の後方60海里に展開した



作戦開始まで20分の前 早朝4時50分

艦長『航空隊、作戦開始まで30分、各機全力出撃用意』

各役職が忙しなく動き始める

作戦開始直前

宮藤「傾注！」

悠太「航空隊各員へ通達する、この戦いは以降の全ての戦いへつながる架け橋だ、我々は艦隊を完全に防衛仕切り、上陸隊を速やかに上陸させる、それが我々の任務だ、この任務をこなせば貴君らは一人前のウィッチいや一人前の戦士となれるだろう、どれだけ英雄になろうとも絶対に忘れてないで欲しい我々は多数の屍に立っていると言うことを、総員時計合わせ3, 2, 1, 5:20ゴフタマル作戦開始」

と各員ユニットに乗機し甲板へ出てゆく、それは悠太、凜も同じである

悠太『第一航空隊は発艦後高度5000まで上昇』

宮藤『了解』

他の中隊長も反応をする

そして悠太から発艦を開始する

数分後 高度5000m

ドゴオオオオオンと遠くから雷鳴のようなものが複数聞こえてくる

悠太『直営航空隊、戦闘は？』

『こちら直営の225空、以前として航空ネウロイの存在はなし』

悠太『了解、5分後に貴機らは帰還を開始せよ後任は信濃1空が受け継ぐ』

『了解、感謝する』

225空と入れ替わり、滞空していると

凜「海兵隊が上陸を始めたね」

悠太「どれどれ」

双眼鏡を使い見ると各種揚陸艇が沿岸に向かい高速移動している

悠太「ネウロイはほぼなしか」

凜「あ、ネウロイ…あ」

と地面から一機ネウロイが出現したが即座に戦艦群に撃たれて破片へと化す

宮藤『あの、今後はどうするんですか？』

悠太『近接支援は別働隊、防空はほぼなしの状況ゆえにどうすることもできないな』

宮藤『そうなんですけどそれでもなんか無いんですか？』

悠太『と、言っただけでなあ定刻通りにことは進んでるわけだが』

大和『戦艦艦隊旗艦大和より各航空隊へ通達、これより平野一帯に広範囲射撃を行う、

退避せよ』

『220空了解』

『219空了解』

と戦域に展開中の各航空隊は退避を始める

宮藤『私たちは？』

悠太『艦隊の直上故に戻らなくても構わないだろう、もしかしたらこの隙について攻撃を開始されるかもしれんしな』

『こちら215、信濃1へ、艦隊防空は頼んだ各部隊は補給に帰還する』

悠太『信濃1了解』

大和『5，4，3，2，1，撃て！』

と言うと46cm砲18門、16in砲18門合計36発の対ネウロイ燃料<sup>燃</sup>料<sup>料</sup>弾<sup>氣</sup>が放たれる

その放たれた砲弾は見事な扇状で飛翔し空中で炸裂、地上に高度の熱が降り注ぐすると土の中から大型の母艦のようなネウロイが2機出現する

悠太『戦艦艦隊へ通達、信濃1空迎撃に当たる』

大和『了解』

悠太『総員戦闘の時間だ！』

『はい！』

宮藤 『ライン川で見た以来のこの型だ』

悠太 『こちら信濃1空、戦艦隊へ対ネウロイ徹甲弾の射撃を要求する』

大和 『こちら大和了解、専用弾のため装填に2分かかかる堆肥の時間も入れ3分後に砲撃する、小型ネウロイの排除を願う』

悠太 『了解、各員聞いてたか？』

『はい』

悠太 『小型ネウロイを掃討開始』

数百はいる小型ネウロイを約20人で掃討する

宮藤 『みんな、撃破したら何か奢るよ！』

悠太 『金は俺が持つてやる、宮藤も気張れよ』

宮藤 『はいッ！』

凜 『第三、第四中隊、私には続いて！』

三中隊長 『了解です！行くよ！みんな』

四中隊長 『了解、いっくよ』

悠太 『のこり1分30秒、残り30秒時点で各機は離脱せよ』

『了解！』

悠太『こちらの掃討は終わり、第一、第二中隊、第三、四と合流する』

凜『助かる、こっちは数が多くてねっ、33機目だよこれでッ』

悠太『これが終われば勲章のオンパレードだよおっお、くそ、ネウロイがアブねえだろ』

とA R—1を叩き込み撃破する

凜『金でもくれりゃあいんだがね！34機目ッ』

凜『あと三機だ！』

宮藤『一機撃墜！』

碧『私もこれで25機目ですッ！』

凜『碧ちゃん危ない！』

と碧に突っ込んで来てたをシールドバツシユシネウロイにユニットの噴進部を当てA/Bを炊き高温でコアを破壊する

碧『えッ、ありがとうございま』

大和『発射まで30, 29, 28』

凜『碧ちゃん手繋いで、一気に駆け上がるよ！』

碧『は、はい』と反射的に凜の手を掴む、と凜はそのS u—27の25, 000k f

gというぶつ飛んだエンジン推力で天空を駆け上る

悠太『後ろから来てるぞ!』

凜『ちえ!残った一機か!』

宮藤『3, 2, 1今です!』

と言うと凜は思っ切り左にロールする

そしてロールした瞬間宮藤の持つ50式改13mm機関銃をネウロイに叩き込むとネウロイは金切り声をあげ粉になるとほぼ同時に戦艦大和から砲弾が放たれる

その砲弾が放たれ10秒、15秒、そしてバゴオオオオンと着弾しネウロイを撃破した

凜『新たに戦艦の時代が来る?』

悠太『あるとすれば航空戦艦になるだろうなただ、空母には勝てそうにもないが』

宮藤『戦艦はすごいですけど戦術戦略的に足りませんねやつぱり』

悠太『だな、地上から現れる大型ネウロイにしか効果がない、航空機型には子機で防がれるからこうやって子機を壊滅させなければならぬな』

宮藤『それをやるだけなら伊勢や紀伊の航空戦艦を使えばできないわけではないかな』

悠太『結局、ヘリコプター収容艦として使われてるがな』

宮藤『ウィッチより優秀ですからね人員輸送に関しては』

悠太『そりゃそうだ』

宮藤『最近宮菱重工がなんとかスキーつてところを買収したんですよね？』

凜『シコルスキーエアクラフト1946年に扶桑が民間航空会社として宮菱重工が買収し、傘下した、同年シコルスキーが満を辞して開発したS-55を扶桑国内で初飛行させた、と同時に本社を扶桑へと移し本格的に開発を開始し1950年8月に艦隊配備が始まった、それがUHKであるだね、にしてもリベリオン政府はよく認めさせてくれたよね』

悠太『大した企業でもなく民間の航空メーカーだったからな』

凜『それだとシコルスキーエアクラフトを売ったんだ、残念なことしたなあのも』

悠太『まあ大してどの機体も売れてないしな』

大和『こちら大和、弾着観測を要求する』

悠太『了解、目標は？』

大和『そちらの一存で頼む、上陸部隊が上陸中であるため誤射には十分に注意願う』

悠太『了解』

と数十分程度弾着観測を行い帰還する

着艦し格納庫で少しゆっくりしていると艦長室へ召集がかかる

艦長室

悠太 「なんでしょう？」

「作戦は無事成功したとのことだ、やはり街の痕跡のようなものがあったと地上部隊から連絡があった、それで地上にいるとある人から救援要請が来たから行ってくれないか……いや違うな行ってくださいか？」

悠太 「ええ、了解です、移動手段は？」

「UH-1Kがちょうど一機は燃料物資輸送に戻るからそれに乗って行ってくれ」

悠太、凜 「了解しました」

「……許してくれ」

悠太 「なんですか煽りですか？」

「いや……上官相手にして良かったのかと不安で」

悠太 「私の階級は中佐であります」

「いや……え？」

悠太 「って言いながらきたかったです」

「つと、私は会議があるので少し」

と出てゆく



凜 「不思議な上下関係だった」

悠太 「俺にもわからん」

凜 「だね、さ行こ」

格納庫

宮藤 「あれ？どつかいくんです？」

悠太 「半島の方に呼ばれたからそれでだ」

宮藤 「気をつけてくださいね〜」

凜 「あいよ〜」

と甲板に通ずる階段を登って行く

するとUH-55Kが着艦開始している

凜 「あれ？」

悠太 「だな」

「お二人が艦長が言ってた方ですね、お乗りください」

と爆音の中声かけてくる

悠太 「ええ、そうです、ヘッドセットは？」

「こちらです！」

と渡し、ヘリに乗機する

パイロット『お二人とも乗りましたね、シートベルトお願いしますよ!』  
悠太『ああ、わかってるよ』

と言うと機体はゆっくりと持ち上がり、空母から離れて行く  
数十分後

高麗半島の上陸地点にある基地に到着する

????  
「あ、きたきた」

悠太「エーリカかどうした」

エーリカ「私が呼んだんだよ」

悠太「なんのために?」

エーリカ「そう怒らないでよ」

悠太「別に怒っちゃいねえよ」

エーリカ「そう?ならよかった、それでなんだけど」

悠太「おう」

エーリカ「ここに行きたいから護衛をお願いしたいんだけどいいかな」

悠太「こつから:10kmぐらいの所だな、何があるんだ?」

エーリカ「多分だけどアレがある」

悠太「アレがか?」

エーリカ「うん」

悠太「そんでアレってなんだ？」

エーリカ「え？」

悠太「なんのことは知らないが明らかにやばい所だろ？そもそもその情報源は何処なんだ、それがわからなきやいく気にもならん」

凜「同意、ただ一つ言えるのは戦友ともだかつてくかな」

エーリカ「あまり大きな声で言えないんだけど……」  
「コア」があるほいんだよね」

悠太「ほう、それをどうしたいと？」

エーリカ「……」

悠太「持って帰ってこいとでも言われたのか？流石にそれに加担はしない」

エーリカ「瘴気の研究に……」

悠太「それなら他を当たってくれ流石に」

エーリカ「だよね、でも見に行く価値はあると思うんだよね」

悠太「まああるな、だったら少し待ってけ用意するもんがある」

エーリカ「わかった」

と言うと悠太は本部の詰所へと行く

悠太「邪魔する」

「誰……ッ司令殿どうしてここに」

悠太「とある子に呼ばれてね、それより陸軍のM110借りていいか？」

「え？まあ構いませんが何用で？」

悠太「この辺の散策用でな、ついでに各種小銃と携行対ネウロイを借りてくな」

「ええ、そこにサインしてくれば構いません」

と言うときささつとサインを済ませ借りて行く

悠太「すまん 待たせた」

エーリカ「それって」

悠太「M110さ」

凜「ちやんとRPG-3とか持ってきた？」

悠太「あたぼうよ」

凜「ほら、エーリカ乗っていくんでしょ」

エーリカ「うん」

と乗り込み進み出す

道なき道を進み数十分

悠太「そろそろだ、凜」

凜「わかってるよ」

と言うとカチンとチャンバーが金属音を奏でる

悠太「正面に黒い霧があるが…もしかしてアレか？」

エーリカ「多分そうかな」

凜「エーリカは装着してるね」

エーリカ「うん、2人は本当に大丈夫なの？」

悠太「一応ウイツチだからな」

とGoogleをつけ使い魔秋の頭犬を軽く撫でながら言う

エーリカ「本当に見えなくなってるんだね…」

悠太「さあいくぞ」

とハッチを開け外へ出、ゆっくりとその霧に近づくと

悠太「吉と出るか凶と出るか、さあ」

霧の中へ一歩踏み出すとピンク色の明かりがうつすら見える

エーリカ「あれ…だよな」

悠太「だな」

と一歩二歩と近づくと

悠太「見えた、アレがネウロイのコアか…」

エーリカ「マジマジとネウロイのコアを見たのは初めてだ、数百も壊してきたのに」  
エーリカが近づいて行く

悠太「下がれ！」

エーリカの首根っこを引つ張り戻す

するとエーリカがいた辺りがビームで焼かれる

エーリカ「えっ」

靄の中からは人型ネウロイが一步二歩と近づいてくる

悠太「貴様は言葉がわかるのか？」

「キイイイイイイイイイ」

悠太「そうだよなお前らと和解するのは無理だよな、さらばだ」

AR-1を構えパンパンとネウロイの胸に2発、頭に1発叩き込むとネウロイ

は破片へと返す

エーリカ「あのコアは」

悠太「残ってるが破壊するか？」

エーリカ「お願い」

悠太「凜」

凜「あいよ」

とポーチからグレネードを取り出し投げ込む  
パアンと爆発し靄は消え去る

悠太「これは全域を探索するように瘴気部隊に連絡するべきだな」

エーリカ「だね、私の方は上に危険を伴ったので破壊したって言っとくね」

悠太「それで大丈夫なのか？」

エーリカ「まあこの部門でまともに研究してるの私だけだから大丈夫だよ」

悠太「もし何あがれば扶桑に來い、その手の研究は盛んだからな」

エーリカ「わかった」

その後はネウロイによる抵抗もなく目標地点に到着

1951年11月23日

連合軍は目標地点へ到着した

同年12月 東京

国際連合安全保障理事会決議88

高麗地域の安全と対ネウロイ防衛の取り決め

署名

1951年12月24日10時00分(FST)

署名場所

扶桑国東京湾 扶桑海軍戦艦大和の甲板上

発効

1951年12月24日

言語

扶桑語・武語

主な内容

高麗半島の扶桑国編入受け入れ受理

1951年12月24日 人類は新たに勝利した

その日東京上空には各国航空隊、ウィッチ隊が飛んだ

次回 新軍管区長とゴタゴタと国際演習



## 第六章 平和

## 43話 新軍管区長とゴタゴタと国際演習

43話 新軍管区長とゴタゴタと国際演習

1952年2月11日

悠太「お久しぶりだな」

? 「はっ、お久しぶりです安田悠太大将」

悠太「金こん いっせい 一星少将、元気だったか?」

金「はっ、見ての通りです」

悠太「どうだよっばりここの冬は寒いか?」

金「故郷に比べるとあまり変わらない気がします」

悠太「そういえば東北だったな」

金「はい、悠太さんは九州でしたよね? そちらこそ大丈夫なんでしょうか?」

悠太「魔法力つてのは凄くてな、—20℃前後でも半裸で過ごせるんだ」

金「そんなですか!」

悠太「まあ足は冷たいがな、そんなことはさておき、各部隊はどうだ?」

金「今は慶尚道、京畿道、平安道、咸鏡道で飛行場の設立に動いています、そのほかにも各地域で港の整備開発が軍主導の元進んでいます」

悠太「そうか、今日来た理由なんだが」

金「はい、お伺っております」

悠太「なら頼む」

金「来てくれ」

と言うとドアが開き「極秘」と書いてある厚めの資料が悠太の前へ置かれる

悠太「拝見する」

悠太「(コア力爆弾の試験場の選定を主としつつ各種鉱物の搜索か…) ああ、わかった  
これを本部にだな、では」

金「はっ」

その後は京城府にある臨時空港からD.H. 114 ヘロンを使い、東京国際空港へと降り立つ

東京国際空港内扶桑軍側

悠太「おう、秀太何やってるんだ？」

秀太「うわっ、びっくりした、輸出用の最終確認だよ」

悠太「そんでアレはどんな感じ？」

秀太「まあ来年頭いや、今年中には試験かな」

悠太「やつぱ難しいんか？」

秀太「んーまあ、せやなく俺も他の技術者も初めてだから難しいな、応用とはいえな」

悠太「さ、俺は戻るわ」

秀太「おうよ」

通商産業省

悠太「こちらがあちらで預かった資料です、くれぐれも損失しないように」

「え、ええ分かっています」

悠太「では」

本部

悠太「次の日程は……来週から3週間にわたり太平洋諸島の防衛演習か」

凜「あ、おかえり」

悠太「おう」

凜「それ、うちからの派遣部隊は宮藤の所だけけど」

悠太「だな、でも出席する予定になってる」

凜 「なら信濃で行くのかな？」

悠太 「多分な」

凜 「そういえば満州に部隊の派遣をするって話あったけどアレどうなってるの？」

悠太 「さあ、さしずめ外交で詰まってるんだろ」

凜 「元の国とはいえ他国の軍隊に踏まれたくはないだろうしね……」

悠太 「そんなこと言ったら在加扶桑軍と在伊扶桑軍、在武扶桑軍とかどうするんだって話だけだな」

凜 「欧州方面軍は同盟国だけど満州は同盟じゃないからそれもあるんじゃない？」

悠太 「だよなあ……」

伊太瑠 イタル

加留守欄所 カールスラント

武理谷合 ブリタニア

凜 「満州が許可くれたとして航空隊送るの？」

悠太 「一応、11空団と14空団それでFULLRSSGからB-49とBK-49だな」

凜 「あれ？BR-49は行かないの？」

悠太 「BR-49は許可できないだろ」

凜 「確かに……」

コンコンコン

「中東担当の山内です入ってもよろしいでしょうか？」

悠太 「入れ」

「入ります」

悠太 「どうした？」

「オストマンが崩壊しました」

悠太 「やっぱりか」

凜 「だよね〜ってことはアラビア半島は独立？」

「ええ、今のところ独立予定の国のリストがこれです」

悠太 「シリア、ハシミテ、イスラエル、サウジアラビアか」

「はい、それで旧ギリシア領土の返還です」

悠太 「凜、付近に空母艦隊は？」

凜 「ちよつと待ってね……付近に第三艦隊の飛龍、瑞鶴がいる」

悠太 「上からは何と？」

「第三艦隊には緊急出撃命令が」

悠太 『もしもし、私だ、ああ、中東にBR—49を飛ばして首相官邸に情報を回せ海

軍との情報は密にな」

凜「欧州の方は即時体制取らせとくね」「もしもし、欧州担当に回して、久米田さん？  
在欧州空軍に即時体制を発令時間は扶桑時間2月11日14：00で」

「では失礼しました」

悠太「おうお疲れ」

凜「おつかれー」

悠太「はー…忙しくならないといいが」

凜「当分は大丈夫だと思っけど」

悠太「まだ一次中東が起きてないのが不安だよ」

凜「さしずめ早めのアラブの春かな？」

悠太「どうだろうか」

凜「戦争は懲り懲りだよ、戦争が終わってからは国内経済は停滞気味だし活気はある  
けどね」

悠太「だな、最近ソラとはどうだ？」

凜「うん？まあ普通にやってるよ」

悠太「…最近嫌われててなあ」

凜「遅めの反抗期だよねあれやっぱり」

悠太「はあく…なんか悲しいよなあ実子ってわけでもないのにあんなに嫌われたら」

凜「初めて聞いたよ”お父さんの服と一緒に洗わないで！”なんて」

悠太「そんな臭いかあ…？」

凜「んな訳ないじゃん良い匂いだよ」

悠太「それはそれでやだな」

凜「確かに、さ仕事に戻ろう」

悠太「だな」

書類をし時はすぎ22時

悠太「はー、一息つけたあと1時間あれば終わるかな」

凜「だねー、にしても嘆願書系が多いね」

悠太「空中機動研究班、音楽隊、空中機動音楽隊…」

凜「これ重要そうだけど？」

悠太「西北航空方面隊の創立についてか、これどっから人員取ってくるんだ？」

凜「一応各部隊から抽出するみたいだけど大半が新規みたい」

悠太「となると設立までに時間を要するな、今は中部組が居るのならばこれを西北航空方面隊として運用すればいいと思うんだけど」

凜「だよなー…今はそんなことないけど今後もしかしたら国境沿いから来る可能性も

あるからね、どうかしないと」

悠太「陸軍の方は配備にどうなってるんの？」

凜「いや知らない」

悠太「あとで資料要求するか」

凜「だね」

コンコンコン

悠太「誰だ？こんな遅くに」

「人事の神田です、入ります」

悠太「神田かどうした？」

「…早くお帰りください」

悠太「は？帰りたい？なら帰れば良いじゃないか」

「上の2人が帰らないと我々も下に示しがつかないんですよわかります？」

凜「それはわかるけどこの時間まで残らないと終わらないしと言うかまだ残ってるし」

「それはわかります、せめて21時までにしてください本当に」

悠太「と言うなんでそんな怒って…」

「下から言われたんです、大将が帰らないと退庁出来ないと、それが何十件も苦情が来て



てそれで……」

悠太「わかった、5分待つてくれ」

と言うと陸軍宛の嘆願書、部隊展開情報の提示を求める内容のものを書き専用ボックスに投入する

悠太「凜」

凜「あいよ」

とバッグを投げ渡す

悠太「なら退庁しよう」

家

凜「ただいま」

ソラ「お帰り」

悠太「ただいま」

ソラ「……」

凜「ちゃんと言いなさいよ」

ソラ「ふん」

凜「ソラ！」

悠太「落ち着け落ち着け」

凜「でも……」

悠太「俺は部屋に箆つとくさ」

と部屋に備え付けのシャワールームを使う

悠太「(はあ……あの家から引越すしたけどあの家どうするかな)」

〃ピロン〃と数年ぶりにスマホが鳴る

悠太「(そういえばスマホもあつたな……内容は……)」

「あと8年、備えをするべし」

と神(笑)からである

悠太「(寿命は8年か……どう言う死に方なんかなあ)」

ピロンとスマホがまたなる

秀太「俺子供預かることにしたわ」

悠太「(は？ どう言うことだ?)」「どう言うことやねん」

秀太「知り合いの所に1歳半の子がおったからその子を」

悠太「バカかお前独身な上に忙しい身だろそんなことするぐらいならもつと……」

秀太「違うんだ、この子を預れて言われてる気がするんだ、子の詳細は明日資料送るからな！ お前の反対意見なんて聞かないぞ」

悠太「わかった、ただし後8年やぞ」

秀太「わかってるそれまでに立派な人に育てる」

悠太「絶対に不幸な子にさせるなこれがほんとに願いだよ」

神（笑）「そこのはきつと、いや絶対に強く生きるそれだけは保証しよう」

悠太「なんだお前の差し金か？」

神（笑）「さあね、もしかしたらそうなのかもしれないそれは神のみぞ知るだな！」

悠太「ハイハイ、神の味噌汁神の味噌汁」

神（笑）「＼＼??（?、?、?）?／／／／」

悠太「（なんだこいつ）」

と就寝し翌日早朝

悠太「朝飯だけ置いておくか」

凜「行こう」

登庁し朝礼も終わらせ仕事を始める

悠太「お、陸軍の情報来てる」

凜「どんな感じ？」

悠太「一応は即応装甲部隊が2高旅団、機械化歩兵2個旅団、基地高射砲連隊3個、偵察ヘリコプター部隊1個旅団、工兵連隊8個」

凜「4個師団程度…実働は1個師団と1旅団か…うちからも飛行場警備は結構送って

るよね?」

悠太「3個連隊送ってるよ工兵も2個連隊」

凜「こうなると工兵連隊は大活躍だね」

悠太「話だと陸軍工兵司令部の設置まで考えられてるんだとよ」

凜「災害が多いからあつても良いと思うね」

悠太「ルース台風もすごかったしな」

凜「あれで駆逐艦が着底したんでしょ?」

悠太「橘級駆逐艦や八重が大破着底、矢竹やだけが中破らしいな」

凜「機関損傷で動けないところにつて話だもんね…」

悠太「八重は新造艦で8月に就役したばかりの船だったから痛手だろうな」

凜「マジか、武装はなんなの?」

悠太「主装備は09式連装12cm高速砲2門、電探管制10式多砲身機関砲、個艦防空用FDM-2短刀たんとう、発射機2基だな」

凜「うわあ、次期主力駆逐艦がでしょ?」

悠太「発生直後は海軍部は大荒れだったみたいだな」

凜「そりゃ荒れるよ」

悠太「俺らは何もできないがな」

凜「だね、あ、そうそう坑道はどのようなの？」

悠太「坑道探掘の資料を渡してきたから12月にやると思う」

凜「そう考えると今年の12月は忙しそうだね」

悠太「あー…少なくとも三件大きな仕事があるのか」

凜「本土で2件、半島で1件だね」

悠太「今ですら忙しいのにな」

凜「だね」

コンコンコン

悠太「誰だ？」

秀太「防衛開発局の宛先秀太少将であります」

悠太「どうぞ」

秀太「はっ」

悠太「それで？」

秀太「資料を」

悠太「ああ、ありがとう」

秀太「お昼ごろ時間空いてます？」

悠太「空いてるが例の話か？」

秀太「ええ」

悠太「わかった」

秀太「では」

と出てゆく

凜「勤務中は真面目だね」

悠太「勤務中と言うか場所が原因だろ」

凜「確かにそうかも、資料の中身は？」

悠太「例のユニットの開発状況の定期報告だとよ」

凜「どんなもんだって？」

悠太「一応順調に進んで本試験は12月だつて」

凜「やっぱりその具合になるよね」

悠太「試験を複数するからそこで何か見つければ延期かな」

凜「にしても何で夏にしないの」

悠太「そんなこと言われてもな」

凜「暖房装備も開発するんだよね確か」

悠太「運用構想的に作らないといけないからなあ」

凜「つて言つたて既存の改造で済むかな？」

悠太「たぶんな、魔力バッテリーの方は…きてない？」

凜「あ、それなら私の方にあるよ」

と渡す

悠太「ありがとう」

と流し読みする

凜「あつちの方に主力人員割いてるからゆつくりになってるけど試験の評価はぼちぼちみたい」

悠太「大型つてのが問題か」

凜「やっぱりニツケル電池なのがね」

悠太「だよな、さあ仕事しよう」

凜「だね」

と仕事を開始して数時間

悠太「12:30、約束してるし行くか」

凜「ちよつと待ってこれだけ終わらす」

悠太「早よしろよ」

凜「…終わった！」

悠太「ほい荷物」

凜 「ありがとう行こう」

将官食堂 一角

秀太 「待ったぞ」

悠太 「すまん すまん」

凜 「ごめんね、すこし資料をね」

秀太 「それで昨日の話なんだけど」

凜 「子供の話でしょ？ほんとにやるの？一歳半ってマジですごいからね？」

秀太 「身勝手なのはわかってるでもあの子を見ると何かやらないとって思うんだ……」

悠太 「あーわーったわかったから俺らも手伝う、それでいいだろ!？」

秀太 「え？」

凜 「診断とか面倒見てくれそうなところもあるしね、そんな畜生じゃないから見捨てないよ」

悠太 「それにしてもその親には何があったんだ？」

秀太 「それなんだが……一年ぐらい前にウィッチレイプ魔事件があったろ？」

凜 「ツモしかして」

悠太 「……」

秀太 「被害者の一人まで最後まで降ろさないと行ってたんだそれで出産と同時に……」



悠太「そう言うことか……書類関係は任せとけやってやる」

秀太「本当か!? 1日2日の休みじゃどうにもならなくてな……」

悠太「とりあえず引越す準備しろ」

秀太「え？」

凜「だね、そんなら今ご飯食べてる暇はないよ、ご馳走様」

と食器を持ち立ち上がりどこかへゆく

悠太「だな」

と立ち上がり

悠太「食事中で悪いんだけど生活課の方いる？」

「はい?..なんでしょう?..」

と如何にも公務員らしい40前後のお姉さんが立ち上がる

悠太「相談でな、食べ終わったらでいい来てくれ」

と食事を終えこちらに来る

悠太「えつと名前はと所属は？」

??「たかさきあきこ高崎昭子生活課生活支援科です」

悠太「親1人子1人の場合で官舎入れる？」

昭子「入れますけど、その方の階級と所属は……？」

秀太「防衛開発局で少将なんだが」

昭子「え？あ、宛坂さん…え？子？」

悠太「まあ色々あってな、その場合はどうなる？」

昭子「そうなれば官舎じゃなくて平家の賃貸がありますね」

悠太「広さは？」

昭子「えつと…2人ですから2LDKですね」

悠太「わかった、ありがとう、呼び出してすまないね」

昭子「いいえ、お役に立てたらそれで十分です、もしまだあるようでしたら是非お越しください。一等兵でも参謀長でも軍人生活で困ったことがあるならばいつでもお越しください。では失礼しました」

と去ってゆく

凜視点

凜「(出て行く時に生活課の人を呼んだから私が行くべき場所は…防衛開発局だね)」  
と早歩きで部署へ向かう

コンコンコン

「だれや」

凜「飯田凜ですけど」

「ふ、副参謀総長、来るのならば先にお教えいただけばお迎えに……」

凜「急用でね、宛坂秀太を明日から1週間程度午後休にするからその辺の資料よろしくできてる?」

「えあ、わかりましたが……理由は」

凜「ことが終わったら報告するから待ってて」

「分かりました、本人も今日ソワソワしてたので……」

凜「理解してくれる言い部下がいて良いな、じゃ私は」

悠太視点

悠太「とりあえず戻るぞ」

秀太「ああ……」

悠太「いつまで泣いてんだよいくぞほら」

司令室

悠太「そこに座つてろ」

秀太「ああ……」

凜「ただいま」

悠太「どうだった?」

凜 「秀太、明日から1週間ぐらい午後休ね」

秀太 「!?」

凜 「子育て等のものを揃えるよほら」

悠太 「そっちは頼んだこっちはさつき回って来た書類やってく」

凜 「あいよ」

翌週 厚木基地

悠太 「なら秀太を頼んだよ」

秀太 「安心しろ俺も立ち直ったさ」

宮藤 「本当ですか？」

凜 「まあ安心しなさんな」

宮藤 「まあ凜さんもありますし、周りに色々な人がいますから大丈夫だと思えますよ」

秀太 「ああ」

悠太 「行ってくる」

UH—2CKに乗り込む

悠太 『回せ』

R—1820—84が唸りを上げ始める

宮藤 「案外静かですね」

悠太「比較的な」

宮藤「どのぐらいの時間で空母に着くんですかね？」

悠太「1時間ぐらいだな」

宮藤「暇ですね」

悠太「外でも見とけ」

宮藤「見飽きましたよ流石に」

悠太「そうか？俺はいまだに楽しみにみだぜ、

宮藤「そりゃ飛んでないからじゃないてますか」

悠太「そうだなあ…俺は軽く寝るさ」

突っ伏せる

宮藤「おやすみです？」

約1時間後

宮藤「起きてください悠太さん」

悠太「んあ…そんな寝たか？」

宮藤「目の前にありますよ」

悠太「ンんほんどだ」

と空母信濃を中心に改秋月型駆逐艦北風、早風

を側面に、前衛には改大淀型巡洋艦仁淀にとよを後方には摩周型補給艦子吉こよしを配置した空母機動群が大海原を堂々と進んでゆく

悠太「こりやすごいわ」

宮藤「最近編成された艦隊なんですよね？」

悠太「だな、先頭にいる仁淀なんて去年終わりに改修から帰って来た船だぞ」

宮藤「どんな改修だったんですか？話は聞いたけど内容は知らないですよ」

悠太「使えもしないカタパルトを下ろして、ヘリ甲板を搭載、長10センチ砲を電探管制10式多砲身機関砲に変更、主砲を一基下ろして短刀を装備、機関を変更して馬力数が150,500shpになって39ktになったんだよ」

宮藤「色んなところが変わってるんですね…」

悠太「まあ語るところは色々あるさ」

パイロット「そろそろ着艦です」

悠太「ああ、宮藤シートベルトしてるか？」

宮藤「してます」

パイロット「いいけどなあ、揺れますぞ」

宮藤「私たちはいいベッドって言いますねッ！」

ドンと見事な着艦をする

悠太「ナイス着艦だ」

パイロット「いえいえ、まだまだです」

ガラガラガラとドアが開き

「空軍司令官に捧げ銃！」

「お二人ともこちらへ」

艦長室へと連れて行かれる

杉田「お久しぶりです、悠太さんに宮藤さん」

悠太「お久しぶりです、杉田艦長」

杉田「私は歳をとつても艦長のままだが君らはすごいな……」

悠太「杉田さんほどの艦長が上に上がらず残つてることが重要なんですよ、それは

海軍総司令官

山崎さんもわかつてるんだと思いますよ」

杉田「こんな老人にまだ鞭を撃たせるとはなあ」

悠太「とはいえあなた準艦長ですよね？」

準艦長 要は教官役

杉田「ハハッ、知ってたか」

宮藤「つてことは本艦長は？」

本艦長 生徒側

杉田「宮本くんそろそろ来るんじゃないか？」

とガラガラとドアが開く

宮本「も、申し訳ありません遅れてしまいましたっ!!」

悠太「来たか話をしよう」

宮本「ええ」

悠太「宮藤」

宮藤「はいッ」

艦内参謀部

「安田司令に傾注!」

悠太「太平洋合同演習だが」

参謀「リベリオンからは空母機動艦隊が1個、ファラウェイラントから巡洋艦2隻、アウスオラリス駆逐艦5隻、ニューゼーラント駆逐艦1隻、満州1個航空隊です」

悠太「海軍歩兵は？」

参謀「イベリオン、満州、ブリタニアが1連隊到着しております、わが扶桑艦隊も先陣の駆逐艦艦隊に属しています第5海軍歩兵が大隈が輸送を中途のことです、明後日ヒトフタマルマル頃に合流予定です」

悠太「わかった」



参謀「お二人の今後の予定は」

悠太「特にないかな」

宮藤「ないですね」

その後艦隊と合流し上陸演習海軍空軍の垣根を超えた様々な演習をこなす一ヶ月となる

悠太「演習と言っても見栄えが変わらぬものだな」

宮藤「ですね、でも久しぶりの船でしたね」

悠太「そうか、最近はずっと地上勤務だったな」

宮藤「はい、新人訓練ですね」

悠太「最近の新人はどうだ？」

宮藤「どうだって…まあみんな優秀ですよやっぱり」

悠太「不足してるか？」

宮藤「平時の要件は満たしてますね一応は、少し空母艦載機が足りてないですけど」

悠太「満たしてるのに足りて無い？」

宮藤「みんな艦上勤務より地上がいいんですよね…」

悠太 「艦上勤務は月月火水木金金だもんなあ」

宮藤 「良いところは給料ぐらいいしか無いですからね」

悠太 「新造部隊のためにウィッチがある程度人員が必要だな」

宮藤 「陸？空？どっちです？」

悠太 「魔法出力は0・5だな」

宮藤 「0・5？そんな中途半端なんですね、ギリギリ飛べるかどうかですよ」

悠太 「その中途半端を拾うんだよ」

宮藤 「陸の人がいい顔しませんよそんなの」

悠太 「ガスが多いんだから構わんやろ」

次回 新技術・パイロット見習いの初来訪

## 44話 新技術・パイロット見習いの初訪問

44話 新技術・パイロット見習いの初訪問

1952年12月5日 扶桑 国防省 総司令部

時刻は24時前、正確に言えば57分、そこには扶桑軍関連の重鎮達が集まって居た、安田夫婦も例外ではなく、重苦しく、吐き気を催す異様な空間に腰を落として居た。いつもと違い、誰も喋らず、時計の音のみがチクタクチクタクと鳴っている

そして：時計は24時を指した

「爆発を確認」

という声と同時に安堵の声が各所から漏れた

高麗半島 某所

自然多い谷のその中に白い、人工的な塔が建っている：が突然爆発で吹き飛ばすもくもくも爆煙が広がった

翌日

悠太「コア力爆弾の試験は成功、軍最高司令部は兵器化を指示した“か…”と机に置いてある新聞を読む

凜「まるで北朝鮮だよこんなの」

悠太「人に使おうとしないだけ綺麗だな」

凜「だけどさ…」

悠太「まあましき色々とな」

凜「なんか悲しい気分だよ」

悠太「来週は豊後水道で船の試験だよ」

凜「だね、伊700潜だっけ？」

悠太「だな、19日には例のあれだ」

凜「ほんとにうまく行くの？」

悠太「さあな。でも試験をするってことはそういうことだろ」

凜「なんだろうけどさ、巡航ミサイルの開発はどうなってるの？」

悠太「全く持って進んで無いらしい、牛歩だそうだ」

凜「だよね、航法装置の問題もあるだろうし」

悠太「弾道ミサイルの方もまだまだだ」

凜「もしかしてこの時期が一番何もない？」

悠太「忙しいが暇だな」

凜「だね、パイロットは21日だっけ？」

悠太「のはずかな」

凜「さ、そのペーパーケーキを食べよう」

悠太「リバースしたいよ」

凜「できないね」

数日が経ち

12月15日 扶桑 国防省 空軍部

悠太「伊400潜のコアのみによる航行を成功させた」との事だ、艦長は「本艦、原動力にて航行中」ってさ」

凜「おお、流石だ」

悠太「大して何もないがな」

凜「だけど楽しみじゃないかの演習」

悠太「出てこないだろ」

凜「かなあ。観艦式は？」

悠太「海軍のことはわからん」

凜「だよなー」

悠太「クソみたいいなそのペーパービルを解体するぞ早く」

凜「あいあい」

12月19日 扶桑 国防装備庁霞ヶ浦試験場

秀太「お久しぶり」

悠太「おう、アレは？」

秀太「最終点検中、本当にお前乗るのか？」

悠太「当たり前だ」

秀太「凜は？」

凜「え？いやパスかな寒いし」

悠太「他の隊員は？」

秀太「専用服に着替えてる」

悠太「どんなの？」

秀太「飛行服をベースに電熱やらなんやらを仕込んだ物だよ」

悠太「手袋類は？」

秀太「電熱の入った革手袋で細かい作業もできるようしてある、見た方が早いんじゃないか？」

無いか？」

悠太「だな」

秀太「ついてこい、男性用はこっちにある」

悠太「らじゃ」

秀太「最初はタイツ類にするって話だったんだが試験時に寒いって言われてな…」

悠太「そうか、通常のストライカーユニットだと足は亜空間にあるわけだしな」

秀太「こっちは靴だからなほとんど」

悠太「よくそこまで小型化したよ」

秀太「と言つても馬鹿でかいもん背負うぜ」

悠太「武装も含めりゃ小さいだろ」

秀太「そりゃそうだが：もつと小型化したいな出来れば」

悠太「半導体でもありゃな」

秀太「あるにはあるんだぜ、まだデカいだけで、それを使う機器もありゃしないが」

悠太「せいぜい無線ぐらいか？」

秀太「だな、あとは大型計算機つついた、その中に入ってるから着替えてこい」

悠太「おう」

専用の服に着替える

悠太「まんま飛行服だな」

秀太「だろ？中身もほとんど変わりはない、強いていうなら機関の排熱を使うから腰のパイプを繋げなきゃならんことだな」

悠太「夏場は？」

秀太「夏場は薄い格好になるさそりや」

悠太「被弾とかは？」

秀太「安心しろ、シールドが貼れる」

悠太「はあ」

秀太「お前今信頼できんと思つたな？」

悠太「んなこたねえよ多分」

秀太「多分かよ、そろそろユニットを履きに行くぞ」

格納庫の前に4人の魔女が集まっている

「ねえちよつとあれ誰？知ってる？」

「え？知らないよ」

「男？誰でしょ？うちの世代は居ないと思うけど」

「えっわかんない」

悠太「君たちがテストウイッチか、初めまして」

秀太「君たち、準備できたから来て」

倉庫を開けるとそこにストライカーユニットのように見えるが何か違う、物が置いて

ある

秀太「これが水上用ストライカーユニットだ、どうだ？」



悠太 「どうだつと言ってもな、資料で見た通りとかかなんとか」  
「あの、秀太さん、この方は？」

秀太 「うえ？自己紹介は？」

悠太 「え？初めまして、小梅大夫とも」

秀太 「ブツハ！オ、おまえどうしてそれをツ」

悠太 「失礼、改めまして、扶桑空軍総司令部より来ました安田悠太、と思います、階級は…：そうだな軍曹だなよろしく」

「え？や、安田悠太って司令じゃ…」

悠太 「軍曹ですども」

「ええ…」

秀太 「お前の装備だよこれほら」

ゴテゴテ色々なものがついたヘルメットを渡す

悠太 「案外つけるの多いのな」

秀太 「陸や空と違って目標物がないから、レーダー類をつけるほかないんだよ」

悠太 「の割には軽い」

顎紐を結ぶ

秀太 「4人ともいいか？」

『はいー。』

秀太「悠太はよ」

悠太「箱も背負ったからあとは靴だよ」

秀太「いつもの要領で飛び乗れ」

悠太「マジかよ」

と魔法力を発動させ飛び乗る

推進装置は通常歩くことも可能だ

悠太「マジだ」

秀太「武器だ」

悠太「試製55式12・7mmかARSR-1Uか」

秀太「ARSR-1がサイドな」

悠太「らしや、VLSの発射は？」

秀太「目標をセンターに入れてスイッチ」

悠太「そう言うこと、出撃準備完了、安田悠太出撃する」

と海面に飛び込む

悠太「うおっと」

少しバランスを崩すがユニットのスタビライザーにより安定する

悠太「スタビが強いなこれ」

秀太「少し強くしすぎたかなとは思うんだが」

悠太「航行しないとわからんな」

秀太「ということで、腰のポーチに演習ルート表を作ったそれで行ってくれ」

「指揮は」

秀太「中尉、頼んだぞ」

中尉「悠太さんですかね？」

秀太「当たり前だ、行ってこい」

中尉「了解、少尉、曹長、軍曹、悠太さん、要いいはいいいね？いくわよ！」

艦隊(?)は一列に並び進み始める

秀太『最初の目標は基地内に使わなくなったオレンジ色のチハだ』

中尉「了解」

軍曹「見つけました、6時の方向です」

中尉「各員、主砲用意」

中尉「方位180、各員1発撃て」

号令と共に5発の76mm艦砲相当の威力を持つ12.7mm弾が放たれ、チハに命

中する

通常の12.7mmですら厳しいとされるチハは耐えれず爆散する

中尉「攻撃やめ、目標撃破、さすがね」

少尉「方位90、高度2000<sup>メートル</sup>、距離15<sup>海里</sup>目標機多数確認、こちらに向かってきます」

中尉「レーダー補足、数10、各員ミサイル2発用意」

中尉「撃て！<sup>サルボー</sup>」

とランドセルのような箱から小さな2発ミサイルが真上に発射され、目標の方へと指向する

ミサイルは目標機に吸い付くように命中する

が一発は途中で推進が途切れ、落ちてゆく

中尉「主砲弾種切り替え、VT用意」

言うど全員が銃のセレクターをいじり、VT弾に変更する

中尉「主砲撃方はじめ」

目標機めがけ発射される

そのうちの1発が命中し、目標機を粉碎する

中尉「攻撃やめ、弾種通常戻し」

その後のデモンストレーションは艦隊を組みの航行訓練等を行いクライマックスへと突入する

少尉「方位180、高度3000、距離10、10飛翔中、速度おおよそ500」

中尉「ミサイル撃方用意」

悠太「方位300、高度10、距離8、5飛来中、高速で接近物あり、即時性高、独断でARS—1Uによる妨害射撃開始する」

55式を手放しARS—1に持ち替え、射撃体制を取る

中尉「少尉、軍曹そちらは頼んだ、曹長、悠太さんの方を行くわよ、ウエ<sup>兵装使用自由</sup>ボンズフリー、回避運動開始」

八の字航行をしつつ迎撃を開始する

悠太「ラジャー」

低高度で突っ込んでくる目標機に対し撃ちまくる、ユニットから吸い上げた水を使い銃身を冷やすARS—1Uは300発あるマガジンを余裕で打ち尽くす

悠太「リロード！」

軍曹「カバー！」

中尉「一機撃墜、主砲のほうがお楽かも知れないわね！」

悠太「戻り！回避軌道取らせないことには撃墜も出来んよ！」

軍曹 「一機撃墜！」

少尉 「4機撃墜、残り6いや4」

悠太 「一機撃墜、こっちはあと3」

中尉 「チツ、海面でVTが反応するッ！」

悠太 「当たれつての！ヨシッ撃墜、残り2」

軍曹 「いや残り1ですっ！」

中尉 「いや無しね！」

と最後の1機もギリギリで撃墜する

悠太 「そっちは！」

少尉 「オールエネミーロスト」

中尉 「電探反応無し、対空用具納め」

「了解」

中尉 『演習終了』

秀太 『終了を確認、いやあ、お疲れ様、にしてもよく悠太も気づいたね』

悠太 『ありやレーダーが反応してねかったよ』

中尉 『居なければ大変なことになってましたよ…』

悠太 『あれはどう言う挙動の予定だったのか…』

秀太『想定としては激突さ』

悠太『マジかよ』

中尉『げ、激突そんなことされたら…』

秀太『ネウロイならしくると思つてな』

悠太『確かにして来そうだが』

秀太『基地にはよう戻つてこいな』

と基地に帰還する

悠太「いやあ疲れた…なんか変なところ使うなこれ」

秀太「感覚で言えばアイススケートに近いって考えだな、海の上をスイスイ言ってるからな特に波がないところをな」

凜「アイススケートね、これなんかスポーツでもやってみる？」

悠太「やめとけ死ぬぞ色んな意味で」

凜「同意、おじさんおばさんには辛いね」

秀太「やめろやめろ、耳が痛い」

中尉「み、皆さん若いじゃないですか…」

悠太「そうなんだけど…ねそれでもさ」

秀太「とりあえず各種データの方も引き出せたから今日は終わりだな」

中尉「では、お疲れ様でした」

と敬礼し寮に戻る

秀太「そう言えばあの子は21よな？」

悠太「それがさ、一応は民間機パイロットとしての教育のための留学ってことになったんだわ」

秀太「あや？」

悠太「カールスラントとの関係が拗れてるからそれが原因なんだが」

秀太「あー、もうそれはしやーないよなあ俺らにはどうにもならんっちゅうか」

悠太「せめて軍事面だけでもと思うんだがいかんせんな」

秀太「このくにや、大丈夫かよ」

悠太「イベリオンにカールスラント…ほんまにあ」

秀太「全敵外交ってわけでもないから問題はなさそうだが…」

凜「依然としてブリタニア、ガリア、イタルとは仲良いもんね、最近は在カールスラント軍は身動き取れないしさ」



悠太「年始には航空戦力を除いて順次引き上げを開始するらしいからな」

凜「その穴埋めは？」

悠太「オラーシヤがするらしい、航空戦力はこつちが引き続きだ」

秀太「ポルスカの方はどうなんだ？」

悠太「ありやミニナチさ、ゲツベルス、ヒムラー、フェーゲライン、アイヒマン……酷いもんさ」

秀太「思った以上に煮詰まってるらしいな」

悠太「俺は疲れたよ……」

凜「つてそろそろ戻らないと絞られる、行くよ悠太」

悠太「あいあい」

と引つ張られてゆく

21日早朝 東京国際空港一角 扶桑空軍ハンガー

凜「どつから飛んで来るの？」

悠太「ベルリンのブランデンブルク空港からだな」

凜「機体は？」

悠太「新鋭の宮菱ジェット700だ」

凜「確か、航続距離10,000km級の旅客機だよな」

悠太「そうだな、元々はボーイングとの共同だったんだが政治的にな」

凜「最近そんなのぼつかり、どうにかならんかな」

悠太「カールスラントとは多少雪解けし始めだけ最近になってようやく」

凜「結局さ、カールスラントとはなんでこうなってるの？いまいわからんんだけど」

悠太「カールスラントが高麗半島の扶桑による支配を嫌がったからだな」

凜「そりゃわかるけど：それでカールスラントが対扶桑に石炭の禁輸でしょ？」

悠太「その反撃で武器禁輸」

凜「その反撃は特に居なく、兵器の枯渇を心配して雪解け？」

悠太「あつてる」

凜「悠太は何かと言えば軍屋より政治屋だよな」

悠太「政治なんてクソ喰らえ」

凜「まあ、知ってたかな、おお！でかいのが来た!!」

悠太「あれがそうだろうな」

扶桑航空株式会社

FAL機が着陸コースを取っている

秀太「迎えに行くぞ」

ジープで迎えに来る

悠太「あいあい」

タラップ付近

悠太「国家間が悪くても旅客はすげえな」

秀太「だなあ」

???「居た居たー三人ともお久しぶりー」

2人のカールスラント系少女が降りてくる

悠太「おお、お久しぶりエーリカ」

凜「お久しぶりくえ？でもどうしたの？」

エーリカ「扶桑で学科会があつてさーそれについて来たんだよ」

悠太「年末なのに忙しそうやな」

エーリカ「それはお互い様じゃない？つてほら！」

???「え、えつと」

悠太「初めまして、クリスマスバルクホルンよろしく」

クリス「はい！」

悠太「とりあえず税関行ってこい」

エーリカ「はい」

数十分後

エーリカ「クリス、頑張つてねー、私はここでお暇するよ!」

クリス「はい、エーリカさんありがとうございます」

エーリカ「うん」

秀太「一応はここ周辺で民間機のパイロットととして動いてもらうからな」

クリス「はい!」

秀太「ええ返事や、早速だが…」

??「ふあああ、おはようございます」

悠太「おそよう、宮藤中佐」

宮藤「っ!?悠太さんに凜さん?!どうしてここに…」

凜「仕事だよ」

宮藤「つて、その方は?」

悠太「前話したろ?」

宮藤「あ!?!クリステイアーネ・バルクホルンさんですね?」

クリス「はい、つてことはお姉ちゃんが言つた宮藤芳佳さんですか?」

宮藤「うん、クリステイアーネちゃんよろしく」

クリス「クリスでいいですよ」

宮藤「私は芳佳でいいよ」

悠太「芳佳、クリスは軍人じゃないからな、旅客機のパイロットだ良いな？」

宮藤「はい、わかってますよ」

悠太「寮とかは」

秀太「こつちで用意してあるよ」

悠太「そういや、宮藤って来季4月から所属変わるんやっとな」

宮藤「ですよ、正式に秀太さんの部下になります」

凜「あれ？ ここ 属属になるんだ」

航空開発実験集団隷下飛行開発実験団

宮藤「そうですね、ってクリスさんはどうなるんですか？」

秀太「クリスは民間パイロット、つまりはうちで預かるだけさ」

宮藤「あ、いろいろ理解しました」

悠太「よろしい」

宮藤「取り敢えず、日課やってきますね」

秀太「おう」

凜「クリスちゃんは食事は？」

クリス「お腹減ってます」

凜「ならどっか飯行こう、へい、秀太近くのご飯屋さんは？」

秀太「そこに食堂が」

凜「パス、それ以外」

秀太「あー…あ？あー…わからん」

凜「使えねえ」

秀太「しゃーないやろ最近はずっと自炊や」

凜「知ってる、芳佳ちゃんに聞けばよかった」

クリス「良ければなんですけど…お寿司食べてみたいなって…」

凜「この時間開いてんのかなあ…」

悠太「寿司か…なら良いところある空いてると思うし」

凜「あるっけ？」

悠太「あるある、先に荷物置いてきな」

クリス「はい」

悠太「さて、どうして2人は居るんだ？」

秀太「交流を深めなければなって」

宮藤「これから仕事をする仲なので」

悠太「おい、宮藤目が泳いでるぞ」

宮藤「ソナナコトナイデスヨ」

悠太「さいでつか、では行きますよみなさん」

とその後は築地で美味しいお高い寿司を悠太支払いで食べ解散する

悠太「(くそたけかった)」

## 45話 問題児との対談

45話 問題児との対談

1953年2月

扶桑国 国防省 応接間

悠太「はじめまして、ポルスカ共和国 内務省第一部課長アドルフ・アイヒマン」

アイヒマン「こちらこそ初めまして扶桑空軍総司令官安田悠太大将」

悠太「ええ、エージェント諜報員が私に何のご用で？」

アイヒマン「少しばかり、軍事支援のお約束をと思ひまして」

悠太「ええ、それが？」

アイヒマン「主に航空機関連をお願いしたいのですが」

悠太「なぜ？その理由を私まず知りたいんですが、貴国には今5ヶ国が防衛のために航空隊を設置しております、軍部としてはそんな地域に置こうとは思いません」

アイヒマン「我が国を見捨てると言うのですか？」

悠太「いいえ、もし何かあれば在カールスラント航空団が対応するでしょう」

アイヒマン「チツ使えんイエローモンキーが」



と小声で言う

悠太「使えない猿に嘲笑われるように拒否されは貴方達は猿以下なんでしょうね」  
ドン

机を叩く

アイヒマン「ふざけるな、何が猿以下だ！」

悠太「ほら暴力的で、自己中心的だやはり猿以下では無いだろうか？あなたが前言撤回すれば私も同じように謝罪をしようする？」

アイヒマン「このクソガキが！」

鞆から小さな銃を取り出し向ける

悠太「流石諜報員、暗殺はお手のものつてことかな？ここで殺したところで犯人は君以外に居ないからこの国からの脱出すら厳しいと思うがな」

アイヒマン「この国には我が諜報員が居るのだからだろうか？」

悠太「最近ポルスカ系人の不審死が多くてなあ警察の方からなにかわからないかって軍部の方に問い合わせが来てな、我々も困ってるんだ知ってるか？」

アイヒマン「何だと！」

悠太「本当に増えてるんだ困ってるんだよ、と言うかそんな物騒なもんしまえよ」

アイヒマン「…」

悠太「君はカールスラント系と聞いていたが、カールスラントの人々は勤勉で生真面目、それでいて秩序を重んじるとよく聞くが違うだな」

アイヒマン「…ああ、すまない」と銃をしまう

悠太「こちらこそすまない、空軍に関しては可能な限り検討する、もし可能ならば貴国の兵士が我が国で航空訓練することも検討しよう、一つ言えることは我が国は他国語はブリタニアの教育が多少あるぐらいでな、難しいのだよ」

アイヒマン「…感謝する、見返り等はわからないが検討している」

悠太「ええ、帰る時には気をつけてくれ自分がした行動を考えるんだ」

アイヒマン「ええ」

悠太「では僕は会議があるので」

喫煙所

悠太「ふう」

山崎「どうだった？」

悠太「ああ、山崎さん、どうもクソも銃を突きつけられましたよ」

山崎「はあお前」

悠太「和解しましたよ、秘密にしてくださいね？」

山崎 「あ、ああ相手のお願いは？」

悠太 「航空隊を置いてくれとき」

山崎 「はあ？あの辺5ヶ国は航空隊居るだろ」

悠太 「それでも置いてくれと、反論したら見捨てるのかなんだと」

山崎 「めんどくさい奴だなそりゃ」

悠太 「それでぼそつと使えないイエローモンキーがですって」

山崎 「ハハッ傑作だな」

悠太 「使えない猿に嘲笑われる方達は」と言ったら銃を突きつけられましたよ、その後にも私も相手も謝罪して平和に終わりましたよ人に銃を突きつけられるのは疲れま  
すねやつぱり」

山崎 「お前は肝座ってるよ」

悠太 「肝座ってなきやパイロットなんてなれませんかよ簡単にはね」

山崎 「お前に言われると妙に納得できる」

悠太 「そうですね？パイロットに必要なのは一にも二にもクソの度胸ですよ、自分はそのそろそろ会議の時間ですね」

灰皿に押し付け行く

## 46話 家出

46話 家出

1955年 2月 安田家 夜

悠太「芳佳、どうしてうちなんだ？」

宮藤「えつと…」

優「義理の兄のようや存在だからです」

凜「つてことは私は義姉か」

宮藤「というよりかは上官…」

優「二人で幸せな家庭を築いていきたいと思つていますので、娘さんとの結婚をお許してください！」

凜「うちの子をよろしくね」

と泣いたふりをしながらいう

悠太「ああ、頼んだ」

優「ありがとうございます」

数秒沈黙する

悠太「ブツツハダメだ笑ってしまおう」

凜「だめw笑うってしまおう」

優「ふざけないでくださいよ司令」

悠太「ふざけるも何もなあ：笑ってしまおうんよ」

宮藤「アハッーダメ堪えたけどダメだった…」

優「芳佳も!!」

悠太「そういえば宮藤の両親は？」

優「これからです」

悠太「そうかつて行っていないのかよ！てつきりいったかと思ってたわ」

優「これからです」

悠太「?というか確か婿養子だよね？」

優「はい」

悠太「そうだよね」

凜「宮藤が一人っ子だからか」

宮藤「ですね、優さんの方はえつと」

優「4人兄弟です」

悠太「男ばかり？」

優 「はい、私は三男です」

悠太 「はー大変そうやなあ男だけって」

優 「親父とお袋には色々迷惑かけたので何らかで親孝行したいんですそれで何かありませんかね」

悠太 「親孝行ねえ…」

ソラ 「お母さん!!一緒に洗わないでよ!」

凜 「洗つてないよ、お客さん居るって言つたよね?」

ソラ 「知らないよ!もういい、出て行く!」

凜 「は?何言つてんの?」

ソラ 「もう耳遠くなつたの?家出て行くわかつた?」

という自分の部屋に戻る

凜 「はあ?」

悠太 「凜、落ち着け、あいつももう二十歳だ、好きにさせてやれ」

凜 「でもさ」

悠太 「やりたいことがあるんだろう、あの感じだな」

優 「反抗期…ですかね?」

悠太 「まあだな」

宮藤「拗らせちゃったというよりかなんか別なような気がする」

悠太「なんとなく理由はわかるだから好きにさせるんだよ」

宮藤「血のつながった本当の親探しかな…」

悠太「そうだろうな…多分」

ソラ「帰ってこないから絶対」

と玄関の方に歩いてゆく

悠太「待ちなさい！」

ソラ「は？嫌なんですけど」

荷物を持ちいう

悠太「待て！渡すものがある」

机引き出しから通帳とパスポートを取り出し一枚の紙を挟み渡す

悠太「帰って来なくとも構わない、だが怪我だけはするなよ」

ソラ「はあ？するわけないじゃん何いってんの」

奪う様に取り玄関の方へとゆく

そして力強くドアが開きボタンと力強く閉まる

凜「通帳パスポート、紙は何？」

悠太「少しな」

凜「捨てなきや良いけど」

悠太「大切な事が書いてあるんだ読むだろ」

宮藤「本当に読むと良いけど……」

悠太「大丈夫だよ本当に、親孝行ねえ」

凜「その話に戻る!？」

悠太「嫌だつてねえ、あ!やる事思い出したわ」

電話の方に行き

凜「なに？」

悠太『もしもし、お久しぶりです、例の話なんですけど、はい、お願いしますでは』『よし終わり』

凜「誰に？」

悠太「諜報部」

凜「諜報部ね……諜報部!？」

悠太「まあうん、もしかしたら出て行くか持つて小室さんに話したら」ならもしものために付けましようか?」って言われてね軍事機密は漏らさないだろうが誘拐でもされたら困るからさ、お願いしたのよ」



凜「そういう事…なら先に言つてよ…」

悠太「その話したの4日前だよ、時間なかつたん」

凜「4日前か確かに時間なかつたね…安心できるや、にしても親孝行ねえ」

優「結局戻るんですね」

悠太「一安心ではあるし」

宮藤「なんか心配だなあ」

悠太「心配なのは俺もそうだよ、それでもあの子がしたい様にことをさせるべきだし、未成年ならまだしももう未成年じゃない、それは本人の意思だしようがないだろ？」

宮藤「そうですね…」

悠太「まあ大丈夫さにしても本当に親孝行つて孫ぐらいだろ」

宮藤「ヴッ」

悠太「ご予定があるかは聞かないが早い方がいいだろうなあの人いつ死ぬかわからんことしてるし」

宮藤「ダヨネ…」

凜「そういえば式いつ？」

宮藤「まだ決めてません」

凜「そっか」

悠太「夜飯食う？」

宮藤「あ、食べてきました」

悠太「あらそう、酒は車やもんな」

宮藤「はい」

とその後も話し込み夜は更けて行く翌朝

空軍本部 司令室

悠太「結局どこに向かったんだ？」

と資料を読みながら漏らす

コンコンコン

「悠太司令、居ますでしょうか？」

悠太「どうぞ」

「入ります、昨日の件なんです」

悠太「おお、それで？」

「やはり推測通りブリタニアの方に行きました」

悠太「うんだよね、その後は」

「カールスラントバイエルンの方に行きましたね」

悠太 「そうだよね…探しに行くよね一応宿の方はこっちで指示したけど」

「あとM I 6とB N Dの連中に応援を頼りましたけど…」

悠太 「M I 6はいいにしろB N Dは怪しいな」

「ですね」

## 47話 再会

47話 再会

扶桑国東京都 東京国際空港

4人のカールスラント人女性が飛行機のタラップを降りる

?? 「扶桑って初めてだけどこんな所なのね、少し蒸し暑いわ」

と赤髪の女性が言う

?? 「宮藤が言ってた通りだな」

と茶髪で身長170はあるであろう女性が言う

?? 「またミヤフジ？」

と金髪の少女が言う

?? 「旦那さんに言い付けるよ？」

と茶髪の160ぐらいの少女が言う

?? 「うっ、やめてくれ、少し前にミヤフジのことを熱く語ったらお灸を据えられたん

だ…」

?? 「ふふふ、でも扶桑は久々だなあ」

?? 「なんだ？ クリスは初めてじゃないのか？」

クリス 「うん、仕事で来たことあるんだ」

?? 「前から思うんだけどクリスは何の仕事してるのー？」

クリス 「秘密です、エーリカさん」

エーリカ 「ちえ、秘密ならしょうがないなー」

?? 「扶桑に来る仕事ってどんな仕事とかしら…」

クリス 「ミーナさんは知ってるでしょう？」

ミーナ 「ふふ、それもそうね」

話しているとダツジ3/4tが来る

?? 「おう、元気しとったか？」

ミーナ 「悠太さん、お久しぶりね」

悠太 「お久しぶりだな」

?? 「久しぶりだな」

悠太 「トルウーデも久しぶり」

エーリカ 「私は…そこまでだね」

悠太「高麗戦争の時は色々と世話になったな」

エーリカ「良いよ良いよ」

ゲルトルート「そうか、ハルトマンは高麗の時にこっち来てたのか」

悠太「初めましてではないね、クリスさん」

クリス「お久しぶりです、悠太さん」

悠太「一つ Wilkommen in der Hölle」

クリス「ハイ…」

ゲルトルート「なんだ？地獄？」

悠太「ええ？話してないのか？」

クリス「はい…」

悠太「話す気があるなら話しとけ、車に乗ろう」

ミーナ「みんなもう来てるかしら？」

悠太「いや、だれも来てないよ」

ミーナ「そうよね」

悠太「扶桑組は凜以外は東京都に居ないしな」

エーリカ「そんな忙しいの？」

悠太「いや、大して忙しいわけじゃないんだが、出張が重なってな」

エーリカ「ふーん、つて事は凜やミヤフジは居ないわけ？」

悠太「凜は書類の確認とか、坂本は旦那<sup>士方</sup>と佐世保で優秀なウィッチを見繕ってる、宮藤は新型ユニットの試験飛行中、服部はしらん」

ミーナ「知らんつて随分な言い草ね」

悠太「尉官の予定なんて覚えてるわけなからう」

ミーナ「それはそうね」

エーリカ「にしてもひよつこだったミヤフジがもう中佐なんてすごいよねー」

悠太「いま大佐だぞあいつは」

エーリカ「うそー、やるなあミヤフジは」

と飛行場内を少し車を走らせ、1つの格納庫扉の前に車を停める

ミーナ「どうしたのかしら？」

悠太「ちよつち待ってろ」

と魔法力を出し、格納庫扉をドンと叩く

ミーナ「えっ、何やって」

悠太「おう、居るか？」

と大声で言う

??「ああ、すまねえ」

と格納庫の扉が開く

ミーナ「秀太さん！」

秀太「おお、今日だったげな」

悠太「一応な、でだ、何が欲しい？」

秀太「そりゃ新しいパイロットよ」

悠太「ほー、だつてさクリステイアーネ・バルクホルンさんよ」

クリス「はい！」

と車を降りる

ゲルトルート「ちよ、クリス」

クリス「お姉ちゃん、行ってくる」

悠太「クリスは前からパイロットになりたがつてたからな、カールスラントである程度学ばせてから、扶桑に来るようにカールスラント軍と色々と話し合った結果だ」

ゲルトルート「…クリスはもう24歳なんだ…怪我はするなよ？」

クリス「はい、姉ちゃん」

と話していると

??「久しぶりです、姉様」

エーリカ「ウルスラ！」



悠太「ほ？」

秀太「ああ、一昨日、こっちに来たんだ、それで少し研究室を覗きに来たみたいだ」  
ウルストラ「はい、扶桑に用事があつてです」

悠太「んー…そんな資料読んだ記憶があるような無いような…」

ウルストラ「空対空誘導弾の研究についてです」

悠太「ああ、思い出した、AAM-2Kの発展改良型についてのやつか」

ウルストラ「はい、AAM-2KAシユランゲについてです」

秀太「とりあえずは新型のAIM-9の技術移植を考えてるんだかな…つとそろそろ時間だ」

悠太「お？そろそろか」

とキイイイインと甲高いエンジン音と共に滑走路に1機のユニットが着陸し、こちらへと向かってくる

ミーナ「新型機かしら？」

ゲルトルート「ミヤフジか！」

宮藤「あつ、バルクホルンさんにミーナさん、エーリカさん、お久しぶりです!!」

ゲルトルート「ミヤフジ！」

宮藤「ちよつと待つててください！」

と格納庫の奥へと消えるから

悠太「まだあの機体の開発してるのか？」

秀太「まあな、宮藤がああ機体は絶対に必要になるって豪語してるから開発してるのさ」

悠太「だいぶ予算は削られたのによくやっていけてるな」

秀太「実際、厳しいがコツコツ頑張るしかねえもでな」

と秀太はユニットに行く

ゲルトルート「クリス、本当にパイロットになるきか？」

クリス「うん、そう決めたの」

ゲルトルート「むむむ…」

悠太「俺には兄弟はいないけど、時には後押しするのも重要じゃないのか？」

ゲルトルート「そうだな、クリス、目一杯頑張つてこい、さつきも言ったが怪我はするなよ？」

クリス「うん！わかった」

紺色のジーンズを履いた宮藤が出てくる

宮藤「秀太さん、今日は午後休日貰つてるので帰りますね」

秀太「おうよ、ちゃんと書いたか？」

宮藤「走り書きですけど書きました、細かいのは明日以降飛んだ時に書きます」

秀太「わかった、あいつにもよろしく伝えといて」

宮藤「わかりました」

秀太「楽しんで来なよ」

宮藤「はい行つてきます！」

とこちらへ走ってくる

宮藤「そういえば悠太さんは各国お偉いさん方との話し合いじゃありませんでしたっけ？」

悠太「それは来月、今日は丸々休みを貰ったんだ」

宮藤「なるほど」

ミーナ「宮藤さんは元気そうだけど、ソラさんは元気かしら？」

悠太「それがなあ……」

ミーナ「え？」

宮藤「喧嘩して出て行つたんですよね」

ミーナ「今どこに居るかは……」

悠太「知ってるよ、リネット・ピシヨップ中佐の家にいるよ」

ミーナ「え？リーネさんのところに？」

悠太「喧嘩した後にすぐブリタニア行きの飛行機に乗ったみたいだからFUBIからM I 6に頼んで保護してもらって、保護先にリネット家が受け入れてくれたって形だよ」

エーリカ「喧嘩の理由はなんで？」

悠太「わからん」

ゲルトルート「わからない訳ないだろう？」

宮藤「その時現場にいたんですけど本当にわかりません、突然怒って、出て行っただけです」

エーリカ「たとえば悠太の不倫現場を見たーとき」

悠太「しとらんし、もし女引っかけられる時間があるなら仕事して早う寝るわ」

エーリカ「それもそっか」

悠太「リーネなら話を聞いてるだろうし、来たら聞くよ、まあ二十歳を超えたから自由にして良いんたがせめてどうしたいのか話を聞きたくてない」

宮藤「ですね」

悠太「そういえば宮藤、彼は？」

宮藤「ん？優さんは今は佐世保ですよ」

悠太「んー…ああ坂本達のパイロットとして行ってるんだったな」  
ゲルトルート「優とは？」

宮藤「私の旦那です」

ゲルトルート「ほう？（ ?? ）」

悠太「おっと、宮藤の姉の顔してる」

ミーナ「そうね、でも私も気になるわ」

悠太「元凶の俺が言うのもなんだがやめてやれ、困ってるだろ」

宮藤「えへへ、あ、悠太さん、私の家寄ってくれませんか？」

悠太「おう」

と家の前に停める

ミーナ「ソラさんのことは本当にわからないの？全く？」

悠太「全くわからないわけではない…」

ミーナ「やっぱりね」

悠太「うちのネズミがお邪魔したかな？」

ミーナ「そんなことないわ、お茶をしたぐらいよ」

ゲルトルート「ネズミ？お茶？なんの話だ？」

悠太「ネズミはうちの捜査員課さ」

ミーナ「お茶は会合よ」

ゲルトルート「捜査員と会合？」

悠太「ソラの本物のご両親と親族についてだな」

ゲルトルート「両親は撤退戦で亡くなったんだろう？」

悠太「両親についてはそうって事を確認してるんだが親族については不明だ、それを探しに行つたんだろうな」

宮藤「遅れました、すみません」

綺麗な服を着てやってくる

ゲルトルート「おお！綺麗だ！」

宮藤「そ、そんなことないですよ……照れながら言う

悠太「さて、このあとはどうする？正直この車に14人は無理だが？」

宮藤「だから防衛庁に行ってくださいい54式いすゞTSS/TWトラックを借りましたから」

悠太「わかりました、大佐殿」

ミーナ「本来なら大将殿がやる事でしょう？」

悠太「クソミテエな政治屋と殴り合ってる時にそんなことあできるかよ」

ミーナ「軍人が政治に関わって良いのかしら？」

悠太「ちげえよ、予算関連だよ戦争が終わったからって5/1にするとかほざきや

がつて：あーやめだやめ、機嫌が悪くなるだけだ」

ミーナ「大変そうね…」

悠太「政治屋じゃないのは首相ぐらいだよ」

ミーナ「鳩山さんだっけ？」

悠太「鳩山一郎だよ、少なくとも政治屋じゃねえなあれは」

ミーナ「そういえばみんな来るのかしら？」

悠太「来るよ多分」

ミーナ「多分って何よ」

悠太「いやあ…オラーシヤ政府がなあ…」

ミーナ「オラーシヤは最近荒れてるものね…」

悠太「正直政治とは関わりたく無いけど、少しばかり手を貸してもらったよ」

ミーナ「そんなになのね」

悠太「色々と手出しして、家族と国外脱出をな」

宮藤「え！良いんですかそれ」

悠太「良かあねえな、とはいえオラーシヤ軍部もちつと嘯んでるからセーフに近いかもな」

ミーナ「誰よ…」

悠太「パーヴェル・ジーガレフだよ」

ミーナ「つて、空軍参謀長じゃ無いの」

悠太「そうさ、あとはちっとばかりし人を借りたのさ」

ミーナ「それで、どうなったから知ってるのかしら？」

悠太「カーペーオKBÖの連中に追っかけられてるそうだ」

ミーナ「となると今はヘルウエティアに居るのかしら？」

悠太「いや、すでにこっちに飛び立ったと聞いたよ」

ミーナ「ならよかったわ」

悠太「あとはシャーリーがな」

エーリカ「え？シャーリーなら一番最初に来そうなんだけど」

悠太「あいつにも色々あるのさ……」

ゲルトルート「そうか……そうだな」

悠太「女性には俺にはわからんことが多いのでな、詳細は凧が知ってるさ」

宮藤「本来なら迎えも凧さんでしたもんね」

悠太「二人とも休める予定だったんだがな」

宮藤「最近、志願者が多いですからね、うちの部隊にも新米ちゃんが5人ぐらいきて

ましたし」



悠太「どれもこれもどこぞの坂本がな」

ゲルトルート「大空のサムライ」だったか？扶桑では大ヒットしてるんだろう？」

悠太「扶桑以外でもさ、最近じゃ翻訳版がイベリオンで売り始めたらしいし」

ミーナ「そうね：一回読んでみたいわね」

悠太「そう言つてもなあ：扶桑語版ですらあまり売つてないんだ」

ミーナ「え？」

宮藤「私とある友人と探したんですけど全然置いてないんですよ」

悠太「人気に対して部数が足りて無いんだ、常に増加生産してるっていう割には扶桑

人以外も買つて行くからな」

ミーナ「そんな人気なのね」

悠太「つとそろそろつくぞ」

防衛中央省

山川「あ、芳佳ちゃん」

宮藤「あ、みつちゃん」

山川「はいこれ、鍵」

宮藤「うん、ありがとう」

山川「後ろにいるのって」

宮藤「そっだよ」

ミーナ「ん？」

悠太「どうした？」

ミーナ「あの子が私たちのこと熱心に見てくるけど何かしら？」

と宮藤と喋ってる女の子を見る

悠太「ああ、山川か」

ミーナ「知り合い？」

悠太「…部下かなあ…？」

ゲルトルート「なぜ疑問形？」

悠太「とにかく事務系の娘だな」

ゲルトルート「そうならなぜ疑問形だったんだ」

悠太「なんとも言えないからだな」

ゲルトルート「そうか…」

宮藤「お待ちしましたってどうしたんですか？」

宮藤が運転し、トラックを持つてくる

悠太「ンああなんでもない、それより全員乗ろう」

54式トラックに乗り込む

ゲルトルート「宮藤が運転するのかわ？」

宮藤「え？そ当然了けど」

悠太「安心しろ事故は未だ起こしてないからそうだよな？」

宮藤「ハイ、ソウデス」

ミーナ「本当かしらね」

悠太「本当だよ、今時間は…10時か微妙だな」

宮藤「凜さんは何時ですか？」

悠太「昼以降だな…一応空港に戻るかな途中で飯は…ないしなあ」

宮藤「空港にならありますよ、美味しいところ知ってます」

悠太「ならそこだな、11時には誰か来るはず多分」

ミーナ「多分って…」

悠太「知らねえもん」

宮藤「私も聞いてないんですよね…」

悠太「とりあえず行こう」

宮藤「ですわね」

と宮藤の運転する車は東京国際空港を目指す

到着しロビーの食事所の一角にゆく

悠太「好きなのを適当に選んでくれ、俺は…ドリンクだけでいいかな」

宮藤「出してくれるんですよね？」

悠太「そりゃ出すよ」

宮藤「なら私この、ラーメンで」

悠太「重いもん行くなお前」

宮藤「最近腹減りがすごくて…」

悠太「燃費悪くなってるのお」

宮藤「何ですよお」

なんやかんな食べ終わり話しながらゆっくりしている

と窓をふつと見るとヘルウエティア 航空のM700宮菱が着陸をしている

悠太「あれだな」

宮藤「700ですね」

ゲルトルート「何がだ？」

悠太「多分あれに誰か乗ってたと思う」

宮藤「えっ？」

ゲルトルート「あれはヘルウエティアだぞ？」

悠太「乗ってるはず、ふああ行ってくるか」と鞆を持つ

宮藤「なら私も…」

悠太「ここにいっても構わんぞ」

ミーナ「みんなで行きましょう」

ゲルトルート「誰が来るかわからんが行ってみるか」

宮藤「ですってよ悠太さん」

悠太「ああ、わかったよ」

国際ロビーへゆく

それで一番出口で待っていると重武装の警備員が4人ほど歩いてくる

ミーナ「にしても警備が頑丈ね」

悠太「色々物騒でな」

と言いなから警備員に近づくと

「はっ、お疲れ様です」

悠太「どうだ？」

「この通りです」

悠太「だな、参加しても？」

「ええ、相手さんたつての希望ですから」

悠太「そうだったな」

腰からハンドガンを取り出す

宮藤「何やってるんですか!？」

悠太「仕事だよ」

宮藤「でも！」

悠太「落ち着け、色々あるんだこつちにも」

宮藤「でも…」

悠太「もうすぐわかるだから落ち着けな？」

宮藤「わかりました…」

エーリカ「どうしたって悠太？」

悠太「静かに」

兵士の方も持っていたUZIを本格的に構え始めると民間人らしき人が少し集まり始める

悠太「さあ来るぞ」

待っているとエイラ、サーニヤ、サーニヤの両親だろう人物と共に初老を少し過ぎ、ツルツル頭の男性が最後尾を歩いている

エイラ「な、なんなンダお前ら」

サーニヤ「え？」

悠太「ヴォロージヤさんとアンナさん少しどいてください」

ヴォロージヤ「あ、ああ」

アンナ「え？」

悠太「こんにちは、パーヴェル・ジーガレフ元帥」

パーヴェル「お久しぶりだな安田悠太殿」

と正面に立つ

悠太「ご入国のご理由は？ピザはお餅ではない？」

パーヴェル「ご入国の理由：亡命だな」

悠太「元帥閣下が亡命!? いやはやこれは面白い冗談だ」

パーヴェル「そうだろう？ 私もこのジョークは気に入っているんだ」

悠太「私も好きですよそう言うジョークでもそう言うのを言うとかバカが出るわけですよ」

パーヴェル「例えば？」

悠太「あなたの後ろに方とかね？」

言うとかパーヴェルがしゃがむと同時に悠太は後ろにいた拳銃を持った人間に対し一

発、二発と叩き込む

悠太「熊漁の開始だ」

周りにいた隊員がパーヴェルを守るように陣形を組み別の方へと歩いてゆく

悠太「さあこれで本当に休暇の開始だ」

宮藤「い・ま・の・こ・れ・なんですか!!」

悠太「熊を冬眠から起こすための茶番だよ」

エーリカ「パーヴェルさん本当に亡命!?!」

悠太「さあな、安全のため保護だ」

宮藤「本当に! こう言うことするから…」

悠太「こつちだつてわざわざこの三人を脱げ出させるためにわざわざヘルヴェティアとかスオムスまで飛んだり色々したんだよ結果金魚の糞が付いたからそれを振り落とすたそれが今回のこれだわかるか!」

エイラ「だから私まで一回オラーシヤに飛ぶハメになったの力?」

悠太「最初の予定は三人とも別のところから出てヘルヴェティアで合流、その後飛んできてもらう予定にしてたんだがエイラを使えばどうにかしてパスポート類を無視できるもんでな、すまんな使わせてもらつたよ、それでお三方は亡命希望でよろしいですね?」



ヴオロージヤ「はい、ピアノを自由に弾けなくなってしまうた祖国に絶望しました……」  
アンナ「私も同じく」

サーニヤ「はい、お父様とお母様が安全なところなら」

悠太「手続きが終わり次第わが国も出て行つても構いません、当分は諜報員が付きま  
すが」

ミーナ「当分も言うほどのくらいになるのかしらね？」

悠太「身の危険性が減れば……かな」

ヴオロージヤ「どのぐらいの期間なんでしょうか」

悠太「さあ……大体5〜6年でしようね」

ヴオロージヤ「そんな物ですか」

悠太「まあそんな物です」

凜「おーいきたよー」

悠太「ちよつと早いな」

時計を見ながら言う

凜「あ、初めまして、飯田凜です」

ヴオロージヤ「サーニヤの父のウラジーミルです、ヴオロージヤとお呼びください」

アンナ「妻のアンナです、アーニヤでもアンナ構いません」

凜「ヴオロージャさんとアンナさんですね、私の部下がお連れしますがどうします？」  
ヴオロージャ「なら行きます」

凜「わかりました、お待ちくださいでは後ほど」  
と凜はどこかへゆく

悠太「さあまた暇な時間だ」

エーリカ「この時間どうにか何ないの？」

悠太「ムリダナ」

エイラ「なんだ？みんなが来るまで待つのか？」

悠太「とはいえあとシャーリー、ルツキーニ、リーネだな、リーネの方は分かるんだが2人がな」

エイラ「シャーリールツキーニは同じ飛行機でくるんじゃないか？」

悠太「かもしれないが…少し怖いことがあるんだよな」

エイラ「なんなんだ？」

悠太「喋れないレベルのものさ」

エーリカ「管轄が違う？」

悠太「そんなところだ」

エーリカ「めんどくさそー」

悠太「めんどくさくない訳ないだろ」

エーリカ「だよねー」

凜「来たよ」

悠太「おっ」

凜「ヴオロージャさん、アンナさん、着いてきてください」

悠太「凜、よろしく頼んだ」

凜「あいさ」

悠太「終わった奥の飯屋に居るから」

凜「コピー」

食堂にゆき

悠太「2人とも好きなの頼むといい」

エーリカ「なら私このパフエで」

悠太「お前」

サーニヤ「えつと、いいんですか？」

エーリカ「どうせ悠太払いだからね！」

悠太「そう言うことだ好きなもの頼め、あ夜のことも考えて多少空けとけよ」

サーニャ「ありがとうございます」

エイラ「ボルシチとかあればいいんだな」

悠太「残念からおいてないな、後エーリカ武装のパフエはイベントのサンデーに近いぞ」

????? 「そうですね、扶桑に来て一番それががっかりでしたわ」

悠太「うわあ」

ペリーヌ「お久しぶりですわね」

ミーナ「あら、ペリーヌさん来てたのね」

ペリーヌ「3日前に視察も兼ねて来てたんですわよ」

ミーナ「なんの視察なのかしら？」

ペリーヌ「扶桑のお米の育て方や耐震構造の家についてですわ」

ミーナ「ガリアでお米を育てるのかしら？」

ペリーヌ「そんなところですわ、にしても悠太さん探したんですわよ」

悠太「すまん、場所の事何にも考えてなかった」

ペリーヌ「本当ですわよ、にしてもリーネさんいつ頃到着かわかりますの？」

悠太「さあ、知らん」

ペリーヌ「ですわよね、そう言う事もあるうかと聞いて来ましたわよ」

悠太「流石お嬢様だ、で時間は？」

ペリーヌ「12時50分ですわね」

悠太「あと40分か」

ペリーヌ「ですわ」

悠太「とりあえず、サーニヤエイラは飯食べて構わんよ」

サーニヤ「え、あはい」

エイラ「扶桑のご飯は宮藤のしかわからないんだな」

宮藤「えつと…」

ペリーヌ「お二人はこのハヤシライスってのが私はオススメですわね」

サーニヤ「どんな料理なんですか？」

ペリーヌ「ビーフストロガノフにお米を入れたような料理ですわ、501時代に扶桑

のカレーを食べたしょう？あれに近いものですわ」

サーニヤ「なら私はこれで」

エイラ「ほんとにうまいノカ？」

サーニヤ「ダメよエイラ、ペリーヌさんがオススメだと言っててるじゃない」

エイラ「そうだけどサ」

サーニヤ「なら別の頼めばいいじゃない」

エイラ「うっ、わかったよ私もこれでイインダナ」

悠太「サイズは小で構わんな？」

サーニヤ「はい、エイラもそうよね？」

エイラ「小でいいんだな」

悠太「あ、すみません」

店員「ご注文はお決まりでしょうか？」

悠太「この、味わい深いハヤシライスの小を二つ、とおいいーりか」

エーリカ「えあ、このチョコパフェを一つお願いします」

とカールスラント語でもブリタニア語でもなく丁寧な扶桑語でいう

悠太「あと飲み物は？」

宮藤「えつとメロンソーダひとつ」

悠太「あとは…特にないね、最後コーラひとつで」

店員「ご注文のご確認です、味わい深いハヤシライス小を2点、チョコパフェを1点、ソフトドリンク メロンソーダを1点、コカコーラを1点でよろしいでしょうか？」

悠太「はい、お願いします」

店員「ではお待ちください」

と店員は去る

ペリーヌ「にしてもエーリカさん扶桑語出来たんですのね」

エーリカ「まあ扶桑の医学会にたまに参加してくれて言われて来るからね」

ペリーヌ「流石に人気者ですわね」

エーリカ「でしよー?」

凜「おいつす」

悠太「おかえり」

ペリーヌ「さっきぶりですわね」

悠太「で? どうだった?」

凜「まあ健康状態は今から、一番気になる点は精神的な状態かな、それ以外は特に」

悠太「あつちの方は?」

凜「あー…親族が気掛かりみたいね」

悠太「奥さんとかは…独身だったなそういえば」

凜「珍しくね、ご両親も亡くなつてるとはいえ何か引つかかるみたい」

悠太「それに関してはおいおい聞いていくか」

凜「その予定、ペリーヌから聞いたと思うけどもう少しで到着だけど?」

悠太「エイラとサーニヤが今から飯だよ」

凜「あと25分ぐらいだけど…問題ないか」

悠太「多分ね」

サーニヤ「えつとなら急いだ方が…」

悠太「いや、急がなくてもいいよ別に、遅れるようなら俺だけでいくし」

店員「お持ちしました」

エイラ「早いなダナ」

とサーニヤとエイラの前に置く

エイラ「オラーシャのものとは違うけど美味しいそうなんだナ」

サーニヤ「そうね、エイラ」

エーリカ「本当にサンデーっぽい」

ペリーヌ「でしょう？でも美味しいんですわよ」

エーリカ「頂きまーす」

エイラ「頂きますナンダナ」

サーニヤ「頂きます」

と食べ始める

サーニヤ「美味しいわ…」

エイラ「めちやくちや美味しいンダナ！」

悠太「凜、飲む？」



凜「何？」

悠太「コーラ」

凜「なら少し」

食べ終わりに会計を済ませようとし

悠太「支払いなんですけど」

店員「あ、少しお待ちを」

凜「そろそろ時間だけど：みんな来るの？」

宮藤「まあ行きますよね久しぶりですし」

ミーナ「そうね、久しぶりだから行くわよ」

バルクホルン「そうだな」

エーリカ「ねー」

ペリーヌ「当たり前ですわよ」

エイラ「行くに決まってるヨナ？サーニヤもだ口？」

サーニヤ「ええ」

凜「そっか」

悠太「案外安かったな」

と財布をポケットに突っ込みながらくる

宮藤「そう、美味しくて安いんですね」

悠太「さ、行くぞ、多分ここからはみんな連続で来ると思うし」

凜「ほんと？」

悠太「多分な」

とロビーに行き

待っているとリーネ、ソラ、もう一人ソラと同じくらいの年齢の男の子の3名が歩いて来る

悠太「ソラ、どうだった？探し物は見つかった？」

と悠太が問う

ソラ「首を横に振る

悠太「そうか…それでもうするの？」

ソラ「…ごめんなさい」

悠太「何が？」

ソラ「お父さんのこと無視したりしたことだ」

悠太「はーそんなことか、別に気にしちやいないさ、そんなんで気を落としてたのか？君はいくつもの戦友を失ってきたとにそんなことか本当に元ウイツチか？違うだ

ろ？ならそんなんで気を落とすな。一つだけ言おう、おかえりソラ」

ソラ「うん…たがいま」

とかけ寄り悠太に抱きつき涙をこぼす

悠太「大きくなったな…」

凜「ここでもうのも酷なんだけど…母さんについての話があるんだけど…」

ソラ「え？」

凜「不確定だけど生きてる可能性があるんだよね…一応」

ソラ「どういうこと!？」

悠太「は？」

凜「私の方だけで色々漁ってたんだけどね、ミーナとかバルクホルンとかは覚えてる

と思うんだけどあの当ダイナモ作戦時相当数の漁船がいたわけじゃん？」

悠太「ちよつと待て先に椅子に座ろう」

凜「わかつてる」

と椅子に腰掛け

ミーナ「確かに漁船は相当数いたと思うけれど…」

凜「乗艦グラフトンの船員の半分以上は他の艦艇に救助されたらしいんだけど、その中に女性が一命混じってたらしいんだよね、救助された後にまた戦線に出向いて軍医と

しての職務を全うして終戦まで生き残つてその後に軍役を修了して扶桑に帰つてきて  
るらしいんだけどそつからが不明なんだよね……」

ソラ「もしかしてお母さんが生きてるかもしれない……」

悠太「民間人の搜索となとなあ」

ペリーヌ「お名前はなんとおっしゃるの？」

凜「シユタイナー・美和子か柏木美和子のはず」

ペリーヌ「柏木美和子!?!」

宮藤「知ってるんですかペリーヌさん!」

ペリーヌ「知ってるも何も数時間前まで私がいた所の御婦人のお名前と同じですわ、  
もしかしてガリア語やカールス語、ブリ語が堪能な方ですか?」

凜「うん、カールスラント軍の記録だとカールス語、扶桑語、ガリア語、ブリ語の4  
カ国語が堪能だったと書かれてたはず」

ペリーヌ「目の下にほくろが?」

ソラ「あつたと思う……」

ミーナ「奇跡……ね」

バルクホルン「ああ」

エーリカ「案外奇跡じゃないのかもニツシシ」

悠太「どこに住んでるんだ？」

ペリーヌ「えつと長野県？の今井って場所のですわ」

悠太「長野か：新設された飛行場があるな近くに《ref》この世界では長野空港が1950年にできている《ref／》」

凜「その前に後3人待たないと…」

悠太「だな…」

ソラ「お母さんと会える：お母さんと…」

リーネ「よかったね、ソラちゃん」

ソラ「うん、リーネさんも今までありがとう」

リーネ「悠太さんに優しくするのよ？本当は苦しんでたらしいんだから」

ソラ「え？」

悠太「ほら吹くんならもうちよつとマシなこと言え、その3枚の舌は何のためについてるんだか」

宮藤「えつと…その子は？」

とリーネ後ろに居る子を見る

凜「宮藤、ね？わかるでしょ？」

宮藤「あ、わかりますけど名前…」

悠太「しやーないやろこんなアウエーな空間でまとも自己紹介できるかよ」

??「リー・ビショップです、よろしくお願いします」

悠太「oh…もしかしなくても？」

リーネ「はい、うちの末弟です」

悠太「あー…一つだけ言われてくれうちは厳しいぞ」

ソラ「そ、そんな関係じゃないから!!」

凜「手始めに空を飛んでもらうところからかな？」

ソラ「母さんも!!」

宮藤「機材ならうちから貸し出しできますよ」

ソラ「芳佳さんも! 違うから!」

リー「えつとその…」

とおどおどしていると二人組の黒服を着た男の片割れとぶつかる

リー「あ、すいません」

というが男は無視してゆく

ペリーヌ「なんです今の今の2人」

リーネ「リー大丈夫？」

リー「う、うん」

エイラ「イタル系の顔だったんだナ」

悠太「まあここにこんなな人集まってたら邪魔だしあっちの柱のほうに行こう」  
ペリーヌ「ですわね」

宮藤「行きましょう」

と正面ロビーから少し離れた柱の方へとゆく

悠太「凜」

凜「やっぱり？」

悠太「ああ」

悠太は腰に手を置き銃をいつでも取り出せる状態にする

凜は肩掛け鞆に手を突っ込みステアーツMPをいつでも取り出せるようにする

宮藤「…もしかして」

悠太「かもしれないはつきりとはしてないが」

ミーナ「ん？今って」

悠太「一般市民では無いな」

ミーナ「はら…」

と言っていると黒服の男たちが到着口へと集まってゆく

悠太「…はあことが起こらなきやいいが」

と背を向け、ミーナたちの方を向く

ペリーヌ「風の噂でイタルの第一、第二公女がお忍びで来扶って話でしたわよ」

悠太「そんなこと言ったら君もだろう?」

ペリーヌ「そんなこと言ったらここにいるみんなそうじゃありませんの?」

悠太「一番はサーニヤだかな」

サーニヤ「はい」

悠太「ここに旧501メンバーが集まることを知ってる子は諜報部の一部と軍のトツ

プ層ぐるいだよ」

ミーナ「空軍のトップ2人がいる時点でよね」

悠太「まあな」

リー「えっ」

悠太「どうした坊主」

リー「いま…」

悠太「?」

周りを警戒する

悠太「なんもないぞ少年…さてはリーネお前」

リーネ「え? 2人ともやめたんじやなかつたんですか?」



悠太 「三枚舌め：辞めたかどうかは君たちが勝手に判断してくれ」

宮藤 「何人が歩いてきてますけど？」

悠太 「荒事にはしたくないな」

と黒服の男5〜6人が悠太達の逃げ場を失わせるような位置に立つ

悠太 「違うなこいつら」

宮藤 「何がです!?!こんなのに」

悠太 「こいつらイタル国防情報局SIFARの連中じゃない」

宮藤 「ならなんやんです？」

悠太 「近衛兵プラエトリアニだよこいつら、銃の持ち方が諜報屋でも軍屋でもない」

? 「何やってるんだきみ達! 扶桑じゃ荒事は」

悠太 「見知った声だな」

凜 「だね」

宮藤 「警視庁の特殊警護科の人でしたっけ」

? 「誰かと思つたら：」 『彼は問題を起こすような人じゃない別のところ行つてくれ』

と周りにいた黒服の男達をどかす

悠太 「お久しぶり宮くん」

宮 「お久しぶりです悠太さん」

悠太「にしても彼ら銃を本当に持ったことあるのか？」

宮「訓練してると思うんですがね……ってお久しぶりです皆様」

ミーナ「え？初めてだと思っただけ……」

宮「まあ覚えてないのも無理ないですね、ロマーニヤ扶桑基地で守衛をしましてね、当時からすれば幾分歳を重ねたものでね、そういえばですが悠太さん」

悠太「なんだ？」

宮「そろそろ貴方達が待つてる人が来ますよ……ほら」

と到着ロビーの方を見ていると第一公女のマリア・ピア・デイ・ロマーニヤと第二公女のシルヴィーナ・アデライード・デイ・カリニャーノとその後ろには旧ロマーニヤ空軍のエースウィッチ「フランチェスカ・ルツキーニ」となぜかリベリオンのエースウィッチ「シャーロット・E・イエーガー」が歩いている

ペリーヌ「なんですのあの2人」

悠太「はあ？バカじゃねえの」

ルツキーニ「あ！悠太！」

悠太「すまん野暮用が……」

凜「私も部下の結婚式が」

ミーナ「待ちなさい」

ゲルトルート「待つんだな2人とも」

と言いながら首根っこを掴む

悠太「…凜」

凜「諦めよう」

悠太「だな…」

マリア「初めまして、安田悠太大将と飯田凜中将」

悠太「初めまして、マリア・ピア・デイ・ロマーニヤ第一公女、先ほどはお見苦しいところをお申し訳ない」

マリア「皆様楽しいそうで何より」

悠太「いえいえ」

シルヴィ「お久しぶりです、安田悠太さんに凜さん」

凜「お久しぶりですね」

シルヴィ「いつぶりかしらね？」

凜「十四五年ぶりだと思えますね」

マリア「では我々はここで」

と別の方向へ歩いてゆく

悠太「はあはあ…」

ミーナ「シルヴィさんには会ったことあるのね」

悠太「1945年の2月ごろにね」

ミーナ「そうなのね」

悠太「それよりだ、2人とも今から別件で飛行機に乗るんだけど」

ルツキーニ「なに？なに？」

シャーリー「なんだ？なんだ？」

悠太「ソラの血のつながった母親を見つけたらうれしいんだ、それで少し飛ぶ羽目に」

ルツキーニ「ソラの本当のママが見つかったの!？」

ソラ「うんみたいなの」

シャーリー「なら行くしかないだろ？」

??「おお、みんなここに集まってたか」

ミーナ「美桜！」

坂本「ミーナか久しぶりだな」

ミーナ「そうね」

土方「お久しぶりです」

ミーナ「ええ、元氣してたかしら？」

と少し土方の方を睨みながらいう

坂本「ハツハツハー、ご覧の通り元気だよミーナ」  
ミーナ「ええそのようね」

悠太「坂本、優いるか？」

坂本「え？まあ格納庫にいると思うが」

悠太「全員行くよ」

坂本「ちよ、なんなんだ？」

凜「話あとでだよ」

と格納庫へとゆく

悠太「優、いるか？」

優「あ、司令」

悠太「今から飛ばしたいんだが」

優「え？」

悠太「長野だ」

優「えあはいわかりました……」

ともう1人のパイロットを呼び出しに行く

坂本「な、なんなんだまだ一体」

ソラの話をする

坂本「本当なのか？」

悠太「ペリーヌの印象とソラ本人の印象が一致するものでな」

坂本「確かに確認するべきだな、あっちに車両の用意は？」

悠太「ないんだよな、でも地図的に歩いて数分だし構わんやろみんな元軍人やし」

リー「え僕……」

悠太「男の子だろ問題ない、やばけりや俺が背負ってやるよ」

リー「ええ……」

とゴタゴタしてらうちに飛行機は離陸し目的地へと進路を取る

2時間後

ペリーヌ「この家ですわね」

ソラ、悠太、凜、ペリーヌ、リー、リーネ、宮藤の7人でペリーヌがお邪魔していた

家までくる

残りは飛行場に置いてきた

ペリーヌ「美和子さーんいらっしやいます？」

と扶桑語で呼び掛ける

美和子「はーい？どちら様でしょうか？」

と裏庭に続くであろう小道から現れる

ソラ「お母さん……？」

美和子「空！空なの!？」

ソラ「うん。私だよソラ、シユタイナー・空」

美和子「ごめんね、ごめんね」

と抱きつきながら泣く

ソラ「うん、ただいま」

ある程度落ち着き

美和子「後ろの方々はペリーヌさん近いお初めてなんですけど……」

ソラ「えつと育ての親……？と友達？」

悠太「初めまして、安田悠太です」

凜「同じく初めまして安田凜です」

美和子「今までこの子を育てて頂いてたんですね……本当にありがとうございます、生みの親として本当に恥ずかしい限りです」

悠太「いえいえ、僕たちもほとんど関わられてません、本人の意思ですよ」

美和子「……どうして私のことを見つけれられたのですか……」

凜「ソラちゃんが去年の2月ごろに欧州の方に家出をしまして、その時に私の方でも旧カールスラント軍属の扶桑人を探してたら最近運良く見つけてそれでそのペリー

又さんに聞いてみたら知っていると云ってたものでそれです」

美和子「欧州に？」

ソラ「うん、知ってる人もいるからそれに会いに行くのも…」

美和子「私ずっとブリタニアにいます…」

悠太「47年には扶桑に戻ってますね」

美和子「ところで気になったのですが…お二人いやみなさんのご職業は軍人…ですよ  
ね？」

悠太「いや…その男の子以外がですかね？」

リー「い、や」

リーネ「リーは陸軍にいたよ、すぐ辞めたけどね」

リー「姉ちゃん！」

美和子「ソラはやっぱリウィッチとして」

悠太「ええ、ガリアの解放やロマーニャ解放、ベルリン解放作戦等々の確たる解放作戦に従事てしましたよ」

美和子「エースウィッチ…なのですか？」

悠太「ええ、折り紙つきのですよ、ねえ宮藤芳佳軍医少尉にリネット・ビショップ曹長」



美和子「宮藤芳佳ってラーターに搭乗したって伝説の衛生ウィッチ!!」

宮藤「え? まあそうですけど…」

悠太「(エースウィッチとしてじゃなくて衛生としてか)」

とさまざまな話をする

悠太「そろそろ時間か」

美和子「宜しければ待つてる人も一緒にうちの貸し屋で泊まれるんですけど…」

悠太「それは私一人じゃ決めきれませんし、本当に使ってもよろしいので?」

ペリーヌ「私が使ってたところ含め何件かありますわよ」

美和子「使つてないので使つてこの辺の空気を感じてもらうだけでも」

悠太「まあ兎に角残つてる連中に聞かなきゃな」

ペリーヌ「そうですわね」

と飛行場へゆく

悠太「すまん遅れて」

エーリカ「うへー」

紙袋を持っている

悠太「それは?」

ミーナ「もしよければこっちでも止まらないかかって話になったんだけれど…泊まると

ころが無くて」

ペリーヌ「奇遇ですわね、美和子さんが部屋を貸してくれるそうですわよ」

エーリカ「つてことは?？」

ミーナ「あとはま<sup>悠</sup>とめ役さん次第じゃないかしら?」

悠太「宿泊場もあるし飯もそっちで確保してるみたいだからそれでいいんじゃないか」

エーリカ「やったー」

悠太「どうしたんだそんなテンション高くて」

シャーリー「美味しそうなお肉が手に入って喜んでるんだよ」

悠太「まだまだ子供だな」

エーリカ「誰だつて肉を手に入れたら喜ぶでしょ!」

悠太「そりやそうかも特に俺の棒隣にいるでかい奴《凛》も」

と言いつつ瞬間悠太の頭に平手が襲う

悠太「いっつった」

凛「天罰だよ」

悠太「そりやねえぜ、というかみんな服…持ってきてるか確かに」

ミーナ「ええ到着したばかりだからね」

悠太「俺らは」

凜「何かの時のために持って来てるよ」

悠太「そういうところは準備周到だな」

凜「でしょ？」

悠太「さ、行こう食料品は後々だ」

美和子さんちへむかう

美和子「皆様が？」

悠太「ちよつと人多いですけど」

美和子「男性の方は？」

悠太「僕とリー、土方、優の4人ですね」

美和子「残りの」

悠太「13：おい待て1人足らん」

宮藤「あゝあゝ！静香ちゃん！」

土方「私の方で連絡しました、2時間程度で到着するようです」

悠太「流石坂本のツレ、優秀やっことで14人かな」

美和子「14人ですね、皆様もしかしてですけど」

悠太「はい？」

美和子「どこかの元部隊の方ですか？」

悠太「まあはいそうですね」

美和子「やっぱりそうですね…」

悠太「えっと部屋は」

美和子「あつ、すいません、この家の隣とその隣の両方です、奥の部屋の方が小さいので男性用です」

悠太「どうもありがとうございます、凜そつちは任せました」

凜「らじや」

その後は静香が合流したところで食事を始める

悠太「この面々が集まるのは懐かしいなあ」

坂本「いつぶりだろうか」

悠太「さあ、10年ぶり以上だろうか」

夜深くまでお酒を飲み

翌日は地元の人間も交え飲み交わす

## 第七章 ヲエトナム戦争

## 48話 ヲエトナム

48話 ヲエトナム

1958年5月

悠太「参謀、ヲエトナムに派遣した航空隊の状況は？」

参謀「一言で言うなら最悪です」

悠太「理由は？」

参謀「不安定な補給路、不潔、湿気による武器弾薬の不具合、どれを見ても地獄です」

悠太「木々が邪魔か？」

参謀「ええ、その様です、駐屯地を作るにも木々が邪魔でやはり厳しいです」

悠太「陸軍工兵司令部は？」

参謀「協力しているんですが時間がかかります」

悠太「辛いなあ、一応の現地司令部はラックザーだよな？」

参謀「はい」

悠太「戦線は北緯17度北緯17度線ベンハイ川より北はネウロイ支配下となってい

るで停滞、陸軍は補給状況的に動けないか……」

参謀「海路も大回りじゃないと危険ですなやはり」

悠太「なんかないかなあ……どうにか」

参謀「イベリオン軍を動かせれば……」

悠太「あの国は民意がないとまともに動けない動かないただのデブさ」

参謀「民意があつても動きませんがね」

悠太「は……どうすつかなあ」

参謀「そろそろ会議の時間です」

悠太「そんな時間か、行ってくる」

会議場

総理「ベトナムでの戦いについてはどうなっている？」

統合参謀総長「膠着が続いています、少なくとも半年、一年はこの状態でしょう」

総理「陸海空海兵隊からは？」

悠太「空軍ですが、既に爆撃機等を投じていますがやはりが被撃墜多いです」

総理「新型機開発は？」

悠太「原因は迎撃機の多さにあるためそこをどうにかするべく研究中です」

総理「そうか、海軍は？」

山崎「海軍も空母四隻を投入して迎撃型、爆撃任務に当たっておりますが損耗は空軍に比べ少ないです」

総理「どうして損耗が少ない?」

山崎「海軍は空軍に比べ飛行距離が短いゆえに疲労が少なくミスが少ないと思われるます」

総理「空軍はどこ発なのだ?」

悠太「B-49は飛行場が限られるゆえ那覇、硫黄島、小松、百里、三沢のみです」

総理「半島の方には?」

悠太「今の所ありません、計画は複数ありますが」

総理「それを急ぐことは?」

悠太「急いだところでB-49自体が足りません」

総理「そうなのか、増備はしているよな」

悠太「もちろんです、人員も時間があるんです」

総理「厳しい…のか、陸軍は?」

林「北緯17線は防戦一方であり、反撃は難しいものです」

総理「どうにかできないものが」

悠太「統合参謀、何ありません?作戦部でしたよね?」

統合参謀総長「一つあるのは後方強襲です」

林「それが可能ならすでに……」

悠太「林さん話聞きましょうや」

林「すまない」

悠太「具体的にはどのあたりに」

統合参謀総長「もし可能ならばブリタニア領のハーインアン島を利用して補給を支援するためだナンヤドンホイあたりがいいでしょう」

総理「もしするとして兵力は？」

統合参謀総長「海兵隊を7,000人ですかね」

林「そう言えば鷹常たかつねさんは？」

統合参謀総長「鷹常さんは訓練で遅れると」

鷹常「すまない遅れた」

悠太「このおっさんいつもちようどいいタイミングなのすごいな」

鷹常「悠太、殴るぞ？」

悠太「すみません」

鷹常「総理、遅れて申し訳ありません」

総理「構わない、新しい舞台を運用できて嬉しいんだろう」



鷹常「恥ずかしながら、そうであります」

総理「座つてくれ」

鷹常「はっ」

統合参謀総長「鷹常さんは、海兵隊を7,000人をダナンやドンホイに上陸させることは可能か？」

鷹常「我々のモットーをご存じない？ 敵がいるならば三途の川にでも上陸戦を仕掛ける”です”」

統合参謀総長「可能と？」

鷹常「なぜ我々が訓練を行っているのでしょうか？ ネウロイを地に叩き落とすためだ」

悠太「空軍は海兵隊の支援を約束する、囷にでも何にでもなつてやるさ」

山崎「乗つた、海軍も戦艦すら出して支援してやる。アジアの同胞を救<sup>はら</sup>わなきやだよ、忘れてたぜ」

林「ああ、もうお前：：わかつたよ支援するさ、全力で正面切つて戦うさ！」

総理「となると私は根回しをするよ、なあ津島くん」

津島「ええ」

総理「作戦はいつ頃になりそうか？」

鷹常「まず扶桑からですと遠いのでそれをどうにかするべきかと」

ダンダンダン

「会議中失礼致します」

総理 「どうした?」

「つい先ほどブリタニアがベトナムに駐留するネウロイに対し攻撃をすると発表しました!」

総理 「何? 本当か?」

「はい、明日現地時間7:00より航空攻撃を実施とのことです」

悠太 「地上部隊、艦隊の派遣等は?」

「現地部隊は守備程度、海軍も同等だそうで一から二ヶ月程度で本艦隊が到着するそうです」

悠太 「総理、ハイイナン島の件出来ますか?」

総理 「こうなりや楽だ、それより作戦はどうなる?」

統合参謀総長 「ブリタニア扶桑連合軍になればより負担を減らせるかと」

総理 「いつ頃可能になりそうだ?」

統合参謀総長 「年末までにはと言ったところです」

総理 「作戦実行日は来年1月30日予定だな」

悠太 「ベトナムの旧正月に合わせてですか…」

総理「喜ばしい日に実施されればなお嬉しい、そうじゃないか？」

統合参謀総長「そうかも知れませんが、作戦名はベトナム語で旧正月を意味する“テト”です。この作戦に我々は命を燃やそう」

総理「終わった時の暁には我々で酒を交わそう」

林「ええ」

山崎「高い酒をくださいよ？」

鷹常「うまいもんを食わせてくださいな」

悠太「やりましょう」

統合参謀総長「やったりしましょう」

とかくしてテト作戦についての準備が進められてゆく

1959年1月15日

作戦開始まで約2週間

凜「B-49は各方面から集めてせいぜい200機か…」

悠太「空中給油型やらも含めれば250機だ」

凜「他の航空機も含めれば総勢1500機は超えるこの航空隊を扱うのは補給含めて骨が折れるだろうね」

悠太「幸い、ブリタニアの参戦のおかげでインドやビルマの飛行場も使える、シヤム

口の空軍基地もだ」

凜「計画はF-4, F-105, A-1, A-4がシャム口の飛行場初だったよね？」

悠太「だな、洋上を通過して攻撃を開始、帰還時は陸をだ」

凜「にしてもクメールの上を通過してシャム口に帰還するって流石に」

悠太「もし協力しないのならば我が国は輸出を禁じる」だよ」

凜「いやあ…」

悠太「それにブリタニアも賛同したんだ無理だろ」

凜「まあねそうだけどさ」

悠太「海軍戦力はどんなもんだ？」

凜「空母6隻、戦艦2隻、駆逐艦16隻、巡洋艦6隻、補給艦2隻」

悠太「空母の内訳は？」

凜「攻撃型空母4隻、正規空母が2隻だね、攻撃型は瑞鶴、翔鶴、蒼龍、飛龍で正規が赤城、伊吹」

悠太「海軍の本気って感じだな」

凜「だねー海兵隊は揚陸艦2隻、ヘリ空母が1隻居るわ」

悠太「大艦隊というわけでは無いがそれでも流石だな」

凜「ねー、そういえば新型の攻撃ヘリどんな感じなの？」

悠太「試験評価の資料さつき見たな」

紙のケーキを漁り探す

悠太「あつたこれこれ、SAH-1 愛称なし、試験結果は良好、イベリオン製のAH-1 より速度は遅いものその分出武装、重装甲化可能であり、対ネウロイ装甲やシールドバッテリーが搭載可能”だつてよ”

凜「シールドバッテリーは実用化できるの結局は」

悠太「実用化はまではもう一歩らしいが展開が鬼門らしい」

凜「だよね自動展開するにしろね」

悠太「さて、仕事するか」

凜「だね」

1959年 1月29日 扶桑時間24時

作戦開始まで残り2時間

扶桑軍防衛省 本部

そこには鷹常を除く司令官クラスが集まっている

統合参謀総長「攻撃開始まで残り120分」

山崎「各空母発艦用意開始」

林「各部隊展開完了、攻勢いつでも」

悠太「戦闘機隊、攻撃機隊双方発進用意完了、重爆撃機隊は台湾島上空を飛翔中、目標まで120分」

時はたち1時59分50秒

統合参謀総長「10, 9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1, 0 攻撃開始」

作戦開始と同時にビンから始まりタンホア、ナムディン、ハノイ、ハイフォンをB-49が爆撃すると同時に海軍戦闘攻撃隊の支援の元に扶桑海兵隊・ブリタニア上陸部隊、約1万4千人がダナン、ドンホイに上陸をしかせる

陸軍は空軍と共に駒を推し進める

7:34

山崎「空母赤城より、鷹常隊ドンホイを解放とのことですよ！」

統合参謀総長「ダナンの方は？」

林「市街地戦でネウロイの動きがわからないとこのことです」

悠太「あと十分待ってくれ、BR-49が上空を飛び回って偵察を開始する」

林「地上部隊は通信隊を通じて航空偵察を受けよ」

8 : 4 2

林「ダナンを解放したと！」

1959年 ベトナムは一部の地域を開放し。新たな戦線構築を開始したがこれが最も地獄の幕開けであることは2人を除き理解していなかった

次回 墜落

## 49話 墜落

49話 墜落

1960年2月22日 夜

ヴェトナム共和国 ラックザー扶桑軍補給基地

悠太「明日だな」

凜「そうだね」

悠太「何だ？」

凜「本当に最後ののかなって…少しね」

悠太「大丈夫だよ」

と凜を抱きしめる

凜「ご、ごめん…」

涙を流す

悠太「ああ、大丈夫さ最後までもな、スッキリ行けるんなら問題ないだから泣けるだけ

泣け」

凜「うん…」



ひときしり泣き

凜「ありがとう…寝るね」

悠太「おやすみ」

凜「おやすみなさい」

2月23日 早朝

兵站司令部

「本当にゆくんですか悠太さん」

悠太「当たり前だ」

「すごく嫌な予感がするんですが…」

悠太「何だ？」

「わからないんですが予感がするんです」

悠太「嫌な予感…か大丈夫だろう」

「いやまあ…はい…機体は格納庫にあります」

悠太「護衛機は？」

「雷風がつきます」

悠太「わかった、飛ぶ機体は172だよな？」

「はい、気をつけてください」

悠太「わかつてる」

と部屋を後にする

悠太「2人とも、いいか？」

凧「うん」

秀太「ああ」

格納庫

セスナ172に乗り込みチェックを行う

悠太「これが最後かな」

凧「あいつ曰く次があるらしいじゃん」

悠太「次：ねえ、本来一つしかないものが二ついや三つになってるのが我々の何かを変えさせたんだろうな」

凧「怖いのは変わらないけど、何か踏ん切りがついた気がする私は」

悠太「秀太。お前は？」

秀太「ああ、瀬名息子には申し訳ないが決められた運命息子だ受け入れるしかない」

凧「瀬名くん元気で過ごしてほしいな」

悠太「同意だな」

凧「スターティングチェックリストワン、ミクスチャーリッチ、キャブレターヒート

コールド、エンジンマスタートスイッチオン、スイッチオフ、ビーコンライトオン」

凜「スロットオープン8分のline、プロペラエリアクリア、側方クリア問題なし、電源スタート」

凜「エンジンスタート」

というところエンジンがポコッポコッポコッ咳込み始動する

凜「ネクスト、オイルプレッシャーグリーン」

管制とやり問いを言い、滑走路にゆく

凜「テイクオフチェックリストコンプリート」

悠太『さて飛ぶぞ』

とセスナ172はぐんぐん加速し、離陸速度の55ktに到達し機種を上げ、目的地であるホーチミンに向け高度を上げる

『こちら護衛の第7飛行小隊です』

悠太『第7飛行小隊か了解』

1時間程度飛び、あと半分という時

木兔『こちら木兔15、左方20km迎撃型ネウロイ複数確認』

悠太『どうすりゃいい?』

木兔『方位120に転針せよ』

悠太『了解』

転針し飛行を続けていると

『ネウロイ、真下から突っ込んで入んできません!!』

悠太『ブレイク間に合わ…』

ネウロイは悠太達の乗るセスナ172に突っ込み爆散する

1960年2月23日 現地時間10時12分54秒 扶桑時間12時12分 悠

太達の乗るセスナ172はネウロイの衝突による空中分解を起こしバラバラになる

現地時間11時21分 救難隊到着 生存者捜索を開始

現地時間12時30分 機体の垂直尾翼と見られる残骸を発見

以降1週間程度捜索を実施したが遺体、遺留品等の発見は無かった

見つかった機体の一部も損傷が激しく遺体等も発見されたとしても破損が激しいと思われる

3月1日付で捜索は打ち切れた

1960年3月4日 安田悠太、安田凜、宛先秀太3名の葬儀が行われた。参列者には内閣総理大臣や各国首脳陣、元扶桑軍人、さまざま国籍の人が参列した

安田家 悠太の部屋

そこには遺品整理をしている安田空の姿があった

そして一枚のメモ用紙を見つける

「ソラへ、これを読んでるってことは俺と凜が死んだって事だな。大丈夫お前は強い女だ、こんな程度でへこたれるわけないよな？へこたれるとしたらもう一度ウィッチ訓練をするべきじゃないか？それを乗り越えて来たんだろ？それで今は支えてくれる人も居る、頼りなさい。そしてお前は人に迷惑かけて生きているのだから、人のことも許してあげなさい、これを肝に銘じなさい。最後に一つ元気で居なさいそれだけ俺の願いだ、ごめん、もう一つ瀬名くんのことなんだけどもしできたらお世話してくれ、元気でな。」

次回 エピローグ

## 50話 エピローグ

50話エピローグ

とある記者の話 1980年9月

40年近く前に第二次ネウロイ戦争があった

それを知らない者はいないだろう

そして今回は『扶桑を変えた男女』の事について調べた

男の名は安田悠太、1960年2月23日に飛行機事故で死去

女の名は安田凜こちらも同じく1960年2月23日の飛行機事故により死去

もう一人の男の名は宛坂秀太、同じく1960年2月23日の飛行機事故により死去

三人とも30歳だ

三人は死去前は大将であり死去後は名誉を讃え扶桑国初となる国家名誉元帥となる

20年前に世界を救った大戦の大エースと科学者が死去した、この3人は未来から来

た人と言われているがそれが真実かはわからない、それを調べるため、旧第501

統合戦闘航空団<sup>J</sup>(現第501ヨーロツパ<sup>E</sup>戦闘航空団<sup>F</sup>)の元メンバー<sup>W</sup>に取材しに行く

最初は死去寸前まで交流のあった扶桑空軍最高司令官である宮藤芳佳元帥の取材許

可が降りた

芳佳「質問？まあ良いですよ、立場が立場なので言える事と言えない事がありますけど何が聞きたいんです？」

「安田悠太元帥と安田凜元帥についてです」

芳佳「そうですね…安田悠太さん凜さんが亡くなってもう20年ですもんね…」

「それでなんですけど、あの2人が未来から来たと言うのは本当でしょうか？」

芳佳「まあ本当でしょうね、悠太さんや凜さんが乗っていた機体はご存知で？」

「ええ、確かイベリオンのF-16とオラーシャのS-U-27に近い機体でしたよね？」

芳佳「どちらもう少しで配備が始まる最新鋭戦闘機ですよ？1940年代に運用されてるされてました？」

「え？第二ネウロイ戦争中もあの機体だったのですか？」

芳佳「ええそうですね、ほら写真」

「と言いつつ1946年ネーデルランド王国にて撮影されたユニットの写真を見せる  
「本当だ…あとこれはベルリン奪還作戦後ですかね？」

芳佳「そうですね、よくわかりましたね、今はネーデルランド王国空軍戦術偵察隊の基地だったかな」

「そんな」と言つてよろしいのですか？」

芳佳 「問題ないしよう、公表されていますし」

「なるほど、それで2名のネウロイ撃墜数は本当に47怒3太機と46瀬9機であっているのです？」

芳佳 「ええ、公式記録ですよ、ベトナムにも参加してましたからね」

「ベトナム、もですか…」

芳佳 「彼らは率先して前線へ行つてましたね…いえば悪癖、なんじゃありませんかね」  
「越南、彼らの戦没地ですよね？」

芳佳 「戦没地…まあそうですね」

「芳佳さんは戦没地ではないと？」

芳佳 「…まあどうでしょうか」

「わからないと？」

ネウロイに撃墜されたって話だったと思うんだけど違う？

芳佳 「ええ、もし本人たちに聞けるならば聞きたいぐらいです、他に質問は？」

「旧501隊員に話を聞きたいんですが誰かいますでしょうか？」

芳佳 「そうね…手始めは坂本さんのところに行つたらどうですか？比較的身近ですしアポは私の方でとりましようか？」

「そ、そんな自分で取ります」



芳佳「そう、もし取れなかったら連絡をちようだい、私が交渉するから」

山川「芳佳さん、少し話が」

芳佳「何かしら…何ですって上の指示は？」

山川「まだ何も」

芳佳「ごめんなさいね、急用が入ったわ」

「は、はい」

1週間後 扶桑軍戦術研究部

坂本「悠太達の事が知りたいんだったな」

「はい」

坂本「とつてもなあ、時に優しく時に厳しく、それでいて笑いを起こさせる、上官と  
いうよりかは両親のような存在だったかな」

「両親のような存在と…」

坂本「ああ、何か包容力もあつた軍人というよりかは民間のパイロットの方が向いて  
いそうな人って思えるほどに軍人らしからぬ人間だったな」

「軍人らしからぬ人ですか」

坂本「そうだ、上官何も関わらず敬語は要らないと、それはウィッチ隊だと良くある

話なんだが悠太はそうじゃ無かった、空軍司令官になつてなお公務じゃなければ呼び捨てでも構わないと言つていた」

「そのような事をして怒られなかったのでしょうか？」

坂本「怒られたとかつていうのは聞いた事がないな」

「怒れなかったというわけではなさそうですね」

坂本「ああ、風通しが良かったから誰でも文句を言えた、それを改善して軍質をよくしていったんだ、それが今でも残っている、下の人間が中間を通さずに上にぶつけれる、これがあれば中間が問題を隠蔽をしづらくするという仕組みだ」

「流石ですね」

坂本「あの2人には頭が上がりなないなおっとそろそろ時間だすまない」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

次はエーリカハルトマンの所へ行こう、カールスラントで町医者をやっていると聞いて  
いる

翌月

カールスラント某所

からんからん

エーリカ「ごめんね、この時間診察してな、ごめんなさいね」

「あ、声をかけなくった私が悪いので」

エーリカ「それでなんだっけ？」

「安田悠太と安田凜、宛坂秀太さんについての」

エーリカ「あー、そうだったね忘れてたごめんね」

「エーリカさんは忙しそうなので」

エーリカ「まあ多少は忙しいけどね、あの三人かあ…秀太さんはほんとに変な技術者って感じ見覚えがあるなあって感じ」

「見覚えがあると云いますとウルスラハルトマンのことですな？」

エーリカ「うん、似たような匂いがしたね、2人に関しては何んとかかなんとも言えないなあ」

「なんとも言えない？」

エーリカ「何だろうね、みんなは両親って言うけど私は兄姉って感じて感じ」

「兄姉…ですか？」

エーリカ「本人も言ってたんだけど兄姉って感じて構わないって、それがすごくないだろうか…難しいな」

「そこまでですか？」

エーリカ「うん時に優しく時に厳しくはもちろんんだけど、戦闘の時は頼もしく、そ

れでいて冗談も飛ばし合う、不思議な存在だったかな、後々になれば上官らしくなるかなって思ってたけどやっぱり何処か適当でそれでも何かを理解していたような人間だった」

「そんな方だったんですね、あ、そろそろ時間です、本日はありがとうございました」  
エーリカ「別に良いよ、暇ならおいで、案内してあげる。ここは良い街だよ」  
「ええ、いつか来ます」

不思議な人間…また不思議が深まったわ

20XX年 扶桑 某所

「なぜあのあの3人が事故で落ちたのか徹底解説！2時間スペシャル！」

「何見てるんだお前たち」

「あ、隊長、扶桑軍英雄の3人が墜落した事故の話です」

「ああ、あれか」

「同姓同名じゃないですか！気にならないんですか？」

「んー…気にならないかなあ」

「隊長と副隊長の出会いって奇跡だと思いませんか!？」

「そうかもしれないな、もし奇跡なら神に感謝しなきゃな」

「持ってた物は対ネウロイロケット弾と対装甲ライフルでいいよね？」  
「だな」

「ねーこの2人物騒んだけどー」

次回 砂漠デザートの魔女達 プロローグ

## 砂漠の魔女達

### 5 1 話 砂漠の魔女達のプロローグ

5 1 話 砂漠の魔女達のプロローグ

地獄での出会い

ベトナム某所 1966年10月20日

とある塹壕の詰所

「私たちは<sup>ウイッチ</sup>こんなところ<sup>チ用塹壕</sup>で何やってんだろうね」

「洋子さんそんなこと言わないでくださいよ虚しくなります」

洋子 「って言ったってねえ事実だし」

「それだから瀬名くんが逃<sup>他</sup>げ<sup>部</sup>たんじやない行<sup>隊</sup>ったんじやないの?」

洋子 「そんなわけないじゃない、そもそも私がエースに推薦したんだし」

「え? そうなの?」

洋子 「そうよ、って本部から来たよ! 方位 200 距離<sup>キ</sup> 15 小<sup>ロ</sup> 5 中<sup>1</sup>」

「了解行くよ!」

洋子 「わかってる」

塹壕の中に置いてあるストライカーに乗り発射機で真上に打ち上げられ飛んでゆく

数時間後

同じ塹壕内詰所

「え？はい、わかりました伝えときます」

洋子「何だった？」

「洋子、おめでとう後方に下がってさ」

洋子「え？どうして？」

「さあね、知らない、明日交代員が来るから交代して下がってさ、明後日には私も下がるって」

洋子「わかったわ荷物まとめなきや」

「私もだな」

洋子「どこに行けばいいの？」

「ホー・チミンだつて」

洋子「ラックザーじゃないんだ」

「意外だよね」

洋子「ね」

翌日

洋子「貴方が交代員ね？」

「ハイっ！」

洋子「なら私が行っていいのかしら」

「行ってらっしゃい洋子」

洋子「うん行ってくるよ」

とストライカーを発進させ約1000km先のホー・チミン目指し飛行する

ホー・チミン近郊扶桑軍航空基地

「おお、来たか」

洋子「はっ」

「もつと気を楽しんでいるんだよ」

洋子「上官故」

「現場にいる君たちははしなくても構わないさ、我々と違つて血涙こぼしながら頑張っているんだ、敬礼したいのはこちらだよ大尉」

洋子「それが現場の兵士です、それでわざわざ私をなぜ呼び戻したのでしょうか？」

「君に会ってほしい人が居るんだ」



ふ

洋子「はあ…」

「最近、カールスラントからJG74が来るって話だったろう？」

洋子「ですね、わざわざ旧式担いで禿鷹が飛んでくるってとある上司が嘆いていましたね」

「あ…なんだ僕の手の届かないところにいる奴の愚痴をぶつけないでくれ」

洋子「失礼」

「それでだ、そのうちの1人を君の部下として飛ばすって話になったんだ急ですまない」

洋子「2人だけですか？」

「いいやもう1人イベリオンからだ」

洋子「新たな統合戦闘航空団でも作るんですか？厄介事はごめんです」

「似てるんだが試験できない多国籍部隊さ」

洋子「まあええわかりました、ここで集合ですか？」

「そうだ、明日の朝イチには皆到着するはずさ」

洋子「氏名等は？」

「それなんだが…」

洋子「もしかして明日一緒に飛んでくるとか言わないですよね？片方ぐらいなら着い

てると思うんですけど」

「…両方ともだ」

洋子「はあ…わかりました明日ですね…部屋とこです？寝たいんですけど」

「その子、彼女を連れて行ってやってくれ」

「了解です」

部屋

洋子「はあ…なんでこんなことになるのかしらツイてないわ…」

翌朝6時

洋子は訓練生時代伝統から怠素つていない朝練振をしている

「おはよう」

洋子「あ、おはようございます」

「やはりそれは癖か？」

洋子「もちろんです訓練生時代みっちりやらされましたから」

「さすが大空のサムライだ」

洋子「その教え子なだけですけどね」

「そうゆえば君の母親は陸軍だったな」

洋子「ウィッチ隊なんて海か空なんて大して変わりませんからね」

「そういえば今は着艦訓練もどちらもするんだったな」

洋子「空軍も海軍も何も変わりませんよ、来客さんはいつ oh…」

司令の後ろの方にある壁からちらつと2人ほど顔を覗かせる

「気づいたか」

洋子「ええ、でももう少しお待ちください残り50回なので」

「日課を先に済ませてくれその後でいい」

洋子「ありがとうございます」

と素振りを開始して50回をこなす

洋子「おわかりました、すみません」

「何構わんよ。それでその2人がだ」

洋子「初めまして。穴吹洋子、階級は少佐よ」

???「カールスラント空軍JG/74所属シユタイナー・ルイーサ階級は大尉」

???「私リベリオン空軍第435戦闘訓練飛行隊所属ジョーンズ・リリー階級は大尉」

洋子「えつと2人とも前線勤務はない感じ…?」

ルイーサ「私はアルジェリア アルジェリアにおけるWTO軍派遣 ガリア軍やカー

ルスラント軍が主導したネウロイ排除作戦「北アフリカにおける秩序維持作戦」 19

56年から1966年まで続いたに」

リリー「私は元は第83戦闘迎撃飛行隊でF-104だったのをF-5Aの両方に変えたんだ 第83戦闘迎撃飛行隊 リベリオン軍在外駐留部隊の一つでハイナン島所属であり北部湾事件の際に迎撃に当たった部隊である

洋子「ということは豊富ね？」

ルイーサ「多少かな…」

リリー「迎撃なら得意だよ、あのクソ塹壕以外は」

洋子「ルイーサさんのユニットは何かしら？」

ルイーサ「私もつい最近機種転換してMiG-21だ」

「すまないな、早速だけど話がある」

洋子「つてことは」

「ブリーフィングルームに行くよ」

洋子「了解です」

ブリーフィングルーム、そこにはヴェトナム方面司令部の亀田清がいる

洋子「お久しぶりです、亀田司令」

亀田「げんきしちよるか？」

洋子「見ての通りです」

亀田「そうか……」

リリー「？知り合い？」

洋子「まあ知り合いです」

亀田「それより任務についてだ、君たちは数時間後にココホーチミンからタンホアに対する強襲を行う」

洋子「この人数でですか？」

亀田「ああ、本来増員したいんだが人員不足なんだ」

洋子「ここからとなると燃料が足りません」

と少し怒りを表しながらいう

亀田「ああ。わかってる、だから用意したのだ」

洋子「なんです？」

亀田「イ—800潜だよ、新型の潜水空母さわざわざ本国から呼ばれてきたんだよ彼らは」

洋子「そんな！無茶です！この子達はまともに発艦訓練を受けてないですよ」

亀田「君は学生時代、学生長をしていたんだろう、彼女らを教育するんだよ、わかる

か？」

洋子「…2週間、2週間くださいどうかしてなりますよええ」

亀田「安心したまえ、作戦は12月22日発令だ」

洋子「1ヶ月半…いいや、その前に別の作戦があるんですよねどうせ」

亀田「そうだ、11月後半に想定されているビン奪還作戦に参加してくれ」

洋子「拒否権はなしですねどうせ」

亀田「当たり前さ、では私はここで、あいにくこの後も仕事が詰まってるものでな  
と出てゆく

リリー「なんか…ヤな奴」

洋子「普通の時はいい人なんだけどね」

リリーサ「ということとは…なんだ？」

洋子「発艦訓練だね…でも困ったなあ…」

リリーサ「何がだ？」

洋子「MiG-21とかF-5の訓練飛行を思ってたんだけど…」

リリーサ「なら発艦訓練と共にやれば…」

洋子「はあ…これだから空母のない国は…発艦案外難しいんだよ？」

リリーサ「そ、そうなのか」

リリー「あ、私は本国で訓練済みだよ、扶桑式のやり方さえわかれば問題ないよ」

洋子「ほんと?!それなら楽かも、着艦は地上に降りるみたいだからいいとして…訓練できる場所…」

リリー「ああ、私最初は海軍予定だったんだ、でも船酔いがひどくてね」

洋子「居るよねそんな人」

リリー「海が好きなんだけどね…」

ルイーサ「なら潜水艦も…」

リリー「潜水艦は水中だから揺れないよだから船酔いはしないよ、気圧で少し息苦しく感じるかもだけど」

洋子「取り敢えず潜水艦のところに行こうかな」

ルイーサ「知ってるのか？」

洋子「知ってるも何もここへんで停泊する場所は決まってるし」

とドアを開けると直属の上官である人がいる

「遅かったね、眠るところだったよ」

洋子「すいません」

「それでどこに行くんだ？」

洋子「ブンタウのほうに」

「ああ、イ800にか僕が送り迎えするよ」

洋子「え？知ってたんですか？」

「まあね、作戦の概要もある程度は聞いてるよ」

洋子「ならなんであのおっさんが」

「さあ、それは僕は知らないね…生憎あのクソオヤジには嫌われてるものでね」

洋子「でしたね、2人とも行く」

ルイーサ「ああ」

リリー「うん」

この日を境に洋子はただの上官ではなく教官として2人を一人前の母艦ウィッチとして教育していった

「オペレーション・スレッジハンマー」当日

リリー「初めて見たかも」

と対席でシップ・ストライカーの点検をしているウィッチ見ながらいう

洋子「結局航空要員3人、水上要員3人の6人か…ね

「そんなこと言わんといってくださいよ、私たちだつてびっくりしたんですから」と隊長格の子が項垂れながら言う

洋子「健闘を祈るわ、私たちはそろそろ時間ね」



と言うとジリジリジリとけたたましくアラームが鳴り響く

「航空要員は発艦用意、航空要員は発艦用意」

リリー「行くよ、洋子、ルイーサ

洋子「ええ」

ルイーサ「ああ」

ストライカーユニットをカタパルトに固定し

3, 2, 1

ブザー音と共にF-4E、MiG-21F-13、F-5Aは伊号潜水母艦 伊80

0から射出される

洋子はユニットの大きさと同等クラスのAGM-26 桜花を手に持ち度“10”

mを高速で飛翔する

リリー「洋子、本当に大丈夫？」

洋子「ファントムを舐めないで問題ないわよ」

ルイーサ「河口まであと60km切ったな」

洋子「ならあと70kmねッ」

1分、2分、3分半となったところで減速し

川の流れに沿って海面スレスレを飛行する、そして目標でもあるドーム型ネウロイが

見える

洋子「話の通り川の部分はドームがないのね！行くわよ2人とも」

ルイーサ「ああ」

リリー「近寄んな！ネウロイめ」

と銃撃しつつ速度をより落としたりドーム内に入り螺旋状に旋回上昇し目標であるハムロン橋中央に聳える鈴型のネウロイに対し桜花を投下

桜花の徹甲弾は鈴型のネウロイに突き刺さり500kgの炸薬量には耐えきれず粉末へと変わる

ルイーサ「やった！」

リリー「すごい、橋は壊れてないよ」

洋子「ええ、ほんとね」

リリー「ねえ、あれって」

洋子「迎えが来たわね」

と真っ白い塗装のB-49が高高度を我が物顔で飛んでゆく

「こちらムカイ01、聞こえるか？」

洋子「こちらハンマー聞こえます、作戦成功」

「こちらでも確認している了解、上昇しキャッチせよ」

洋子「了解」「2人とも行くわよ」

リリー「了解」

ルイーサ「了解」

と高度を上げ

その巨大なCU—49 CU—49 B—49をベースとしたウィッチ母艦、潜水

母艦から発艦したウィッチを空中でウィッチを回収し、遠方または近場の航空基地へと安全に下ろすための機体、休息用のベットの他、軽食用のレンジが搭載されている 乗員は6名に近づくくと腹部のハッチが開き緩い傾斜の付いた板がせり出てくる

洋子「ルイーサが先頭で行って」

ルイーサ「わかった」

と言うとCU—49の後ろにつきその板にユニットごと乗る、次にリリーが行い、最後に洋子が行う

「ようこそ、我が城へ」

洋子「初めまして」

「すまないが君たちには新たななが任務が来ているらしい」

洋子「え？」

「生憎私も知らないが、これより当機は進路をホーチミンではなく在イタル空軍基地さ」

洋子「どこの基地ですか？」

「アメンドラ基地さ」

洋子「欧州で何かあったんですか？」

「いいや、欧州で事があつたら君たちは呼ばれんよ」

洋子「はあ…なら尚更なぜ」

「シナイ半島にネウロイの巣が出現だ」

洋子「ネウロイの巣が!？」

「小規模の巣らしいが君たち含めた新規の国際部隊ができるそうだ」

洋子「結局か…所属はWTO属でしょうけど上は誰なんでしょうかね」

「長距離戦略打撃群の私に聞かないでくれ」

洋子「わかってますよ、気になっただけです」

「そうかい、ここから10時間ぐらいただか空腹は？」

洋子「2人ともお腹は？」

リリー「少し減ったかな」

ルイーサ「軽食があるならそれを」

洋子「聞きました機長さん」

「口に合いそうなのを複数持ってきてるよ、そのの棚の中あるから見繕ってくれ、温めた  
いならそののレンジを使っても構わない」

洋子「わかりました」

「奥に部屋があるから好きに使ってくれ、一応着替えも貰ってきてある」

洋子「ありがとうございます」

リリー「このの棚？」

「そうや、扶桑語わかるんか？」

リリー「少し」

「上手いな、そのの棚の下の方にコップもあるから使いな」

洋子「ありがとうございます」

「なあにこれが任務だ」

ルイーサ「これは？」

リリー「ブリトーだね、アステカ料理だよ」

ルイーサ「これはソーセージだな」

リリー「え〃え〃 ツ〃なんでこれが」

とりベリオン製のレーションが入っている

ルイーサ「リベリオンのレーションか？」

「ああそれか、交流会が少し前にあったんだがその時に貰ったやつだな、うちからは1型だよ」

とリベリオン語で言う

リリー「捨てないのか？」

「いや…複数もらって一つ毒味したんだがな？」

リリー「海に帰ったか」

洋子「1型あります？私それで構わないんですが」

「それならその棚に主食は鳥飯だけだったと思うがおかずはウインナー、コンビーフとか色々あるはずだ湯煎はその湯煎機湯煎機 B-49系列に搭載されている缶詰を湯煎する機械、水を入れ缶詰を固定器具に設置、蓋を閉める、それをする事によってある程度の空中機動もしても熱湯がこぼれる心配がないでやってくれ」

洋子「わかりました、なら私は鳥飯とコンビーフでいいかな」

リリー「私もそれにウインナーでいいかな」

ルイーサ「なら私はこのハンバーグと鳥飯で構わない」

「鳥飯人気なんだな」

洋子「扶桑レーションは地上じゃ大人気ですよ」

と言いなから湯煎機に入れてゆく

「まあ美味いからな」

洋子「2人とも部屋のほうに行ってていいよ私が持つて来るから」

ルイーサ「ああ」

リリー「うん」

と向かう

洋子「で？本当は話聞いているんじゃないですか？」

「へへっさすがだ」

洋子「なんなんですか？結局は」

「命令は元帥からだよ、さつきも言った通りWTOの空軍第552戦闘航空団の創設さ、指揮官を君に任命するんだと、俺が聞いたのはここまでさ」

洋子「つまり…は？」

「〃厄介ごとを押し付けられた〃だな、まあ君は扶桑一優秀なウィッチと呼ばれるわけだ、そんなことはないと思ってるさ」

洋子「思うだけなら無料タダなんですよ」

「そうなのか今初めて知ったぜ、湯煎終わってるよ」

洋子「あ、ほんとだ、そういうええあとのぐらいかかるんです?」

とお盆を取りながら言う

「あと10時間ぐらいいだな」

洋子「結構かかりますね」

「そりゃ巡航は850だからな、M700とかに比べりゃ遅いさ」

洋子「ですねでは」

出てゆき部屋へ向かう

洋子「2人とも持ってきたよ」

リリー「やっときた」

ルイーサ「ありがとう」

洋子「熱いからね」

お盆を置く

リリー「あつつつ」

洋子「言ったじゃん」

リリー「お腹減ってて…」

洋子「10分ぐらい待たないと冷えないよ」

リリー「はあい」



ルイーサ「にしても今どこなんだろうか」

洋子「ビルマかシャム口あたりじゃないかしら」

ルイーサ「結構かかるんだな」

洋子「10時間ぐらいだそうよ」

リリー「なら食べたら寝ようかな」

洋子「一眠りするのも構わないし起きとくのも構わないわよ別に」

リリー「眠たいから寝るかな」

ルイーサ「私も眠るか」

洋子「あら2人とも眠いのね」

ルイーサ「まあな」

リリー「魔法力消費して眠たくなっちゃった」

洋子「そう」

と缶詰を開けてる

リリー「いける?」

洋子「まだ熱いけど食べれるわよ」

リリー「いただきまーす」

約10時間後

在イタル扶桑軍アメンドラ基地

現地時間 19時

洋子「2人とも起きて、ついたよ」

リリー「ううむ…5分…」

ルイーサ「ああ…すまない」

洋子「リリー、起きて」

リリー「よーこ…だっこしてえ…」

洋子「はあ…」

ルイーサ「リリーッ！起きろ！」

リリー「サー！」

飛び起きる

リリー「ごめん」

ルイーサ「ちゃんと起きろ」

リリー「ほんとごめん」

洋子「まあいいじゃない、2人とも荷物持って行くよ」

とCU-49から降り、建物に入ると1人の軍人がいる

洋子「あ、三木少佐お久しぶりです」

三木「ああ、君かどうしたんだ？」

とメガネをかけたいえばイケメンな男がいる

洋子「何がこちらに呼ばれたらしいんですか…」

三木「ああ、あの件か待っててくれ」

洋子「わかりました」

リリー「何？ヨークの知り合い？」

洋子「まあそうね」

リリー「もしかして案外交流関係広い？」

洋子「どうだろ…広いかも？」

リリー「へー」

ルイーサ「参謀の人間か？」

洋子「そうね、在欧州参謀本部人事局人事課長とかじゃないかしら？」

ルイーサ「人事部の人間がなぜここに？」

洋子「まあ下見とかじゃないかしら？細かいことは知らないわよ流石に」

ルイーサ「そうだよな」

三木「三人ともきてくれと」

洋子「わかりました行くよ2人とも」

と司令室に案内される

洋子「お久しぶりです大塚おおつかうんしょう運昇准将」

大塚「ああ、お久しぶりだな穴吹少佐」

洋子「私達と呼ばれた理由は？」

大塚「新設のW T O 空軍第552戦闘航空団 通称デザート・ウィッチーズの話についてだな」

洋子「砂漠の魔女ですか：基地は？」

大塚「イスラエル連邦から借り上げた第17 航空基地だ」

洋子「場所は？」

大塚「タバから北西に16kmに位置する基地だ主な目標は周辺地域の防空、警戒任務」

洋子「三人だけですか？」

大塚「いいや、ガリア、ブリタニア、扶桑から1人ずつ来る、明後日の昼には基地に行ってももらう」

洋子「：了解」

大塚「それと現地は女性しか隊員はいない、現地指揮官は貴官に一任される」

洋子「了解」

大塚「ジョーンズ・リリー大尉にシユタイナー・ルイーサ大尉2人とも意見は？」

リリー「ありません」

ルイーサ「ありません」

大塚「もし何かあるなら言ってくれ」

洋子「了解。では失礼しました」

と三人とも出てゆく

リリー「新しい部隊かあ……」

洋子「嫌なら辞退もできると思うわよ？」

リリー「いや、楽しみだなあって」

ルイーサ「また故郷を離れて戦うのはいささか辛いが……」

洋子「妹さんに会いに行くかしら？ 休暇を作ることぐらいできると思うわ流石に」

ルイーサ「いまあの子に会うと正気を保てなくなりそうだな……」

洋子「そう……」

リリー「私も弟になー」

洋子「構わないけど……脱柵よ？」

リリー「だよねー…」

「えつと…扶桑軍第405航空隊のお三方、ですよね？」

洋子「ええ、そうですけど」

「仮眠室の場所を」

洋子「ならお願いできるかしら？荷物を置きたいわ」

「わかりました、ついてきてください」

と4人部屋に通される

「ベットの方は荷物置きとしてお使いください」

洋子「ええありがとうございます」

「いえ、小官はこれで」

出てゆく

洋子「2人とも眠れるかしら？」

リリー「まあまだ眠れるかな」

ルイーサ「眠れるさ」

洋子「そう、お腹は？」

リリー「んー減った！」

ルイーサ「私も軽食を食いたいな」

洋子「なら行きましょう」

ルイーサ「場所は…」

洋子「そこに案内板があつたわよ」

ルイーサ「そうか見てなかつたな」

洋子「まあ気にしないもの普通」

そんなことをしつつ

食堂に向かい食事をとり、就寝する

翌日 昼10時 談話室

洋子「はあ…」

と溜息を一つ付く

三木「ひとつ、幸せが逃げていったよ」

洋子「あ、三木少佐」

三木「コーヒーをどうぞ」

洋子「ありがとうございます」

三木「あの話を聞いたのか？」

洋子「ええ、部隊所属の話ですよね？」

三木「現地指揮官になるんだらう？となるど階級が上がるんじやないか？」

洋子「その辺は何も…噂じゃ作戦完了の褒美として少佐に上がるですからね…中佐になるのも勘弁です」

三木「指揮官となると中佐か大佐だぞ小規模とはいえ立派な航空団だ」

洋子「はあ…」

三木「また幸せが逃げていったな…彼…いや聞くことではないな」

洋子「未成年、しかもウィッチ相手に何聞こうとしてるんですか？逆に奥さんは？」

三木「いるわけないだろう？見ての通り出会いがないんだよ」

洋子「案外この基地女性多いですけどね」

三木「気の強そうな女性ばかりさ」

洋子「強そうではなく強いの間違えですよ今だつてほら」

「みーつーきー少佐ア！」

三木「oh…」

「その子ごめんね」

とどこかに連れ去られてゆく

リリー「あれ？さつきまでミツキ少佐？いたと思うけど」

洋子「拉致られたよ」

リリー「え？」



洋子「どっかいった」

リリー「ふーん…」

大塚「ああ君たちここにいたのか、三木くんは？」

洋子「気の強い女性ばかりだと言って誘拐されました」

大塚「ああ…階級の話なんだが」

洋子「司令室に？」

大塚「俺も飯に食いにきたついでだと思ってね、階級をWTO空軍所属の時のみ中佐に昇格だおめでとう、ついでにスレッズハンマー作戦を成功に収めたとして少佐に昇格試験を実施すると、試験内容は筆記のみだ、基地に郵送するとき」

洋子「やはり中佐ですか…」

大塚「まあわかってたことだろ？」

洋子「ですね、試験は…出来レースですかね？」

大塚「さあ、俺は何もいえないな」

洋子「はあ…」

と横を見ると何か欲しそうにリリーが壁を見ている

洋子「リリー、お腹減った？」

リリー「え…まあうん」

洋子「ならご飯行く？」

リリー「いいなら」

大塚「<sup>洋子</sup>きみは昔から思っていたが母親のようだな」

洋子「なんです？ 司令もそういうこと言うんですね」  
と悪魔的な笑顔で言う

大塚「いやこれはだな」

三木「はあはあ…やつと…戻って来れた…あ、大塚准将」

洋子「まあ気にしてませんから」

大塚「あ、ああ」

洋子「では私は、リリー行こう」

リリー「うん」

食堂

洋子「えつともうやっています？」

「あ！洋子ちゃん！お久しぶりやないの！」

洋子「あ、お久しぶりです」

「戻ってきたんか？」

洋子「いや、中継地としてです」

「そかあ…：そん子は？」

洋子「私の部下です」

「洋子に部下!?!成長したのお…」

洋子「そんなことありませんよ」

「いいや昔より大人になつとるね、何食べるんや？色々あるべ、その子はリベリオン系ばいからステーキとかどうや？」

洋子「あるんですか？」

「なければ言わんよ」

リリー「ステーキがあるの？ならそれで」

「あいよ、洋子ちゃんは？」

洋子「うどんで」

「釜玉？讃岐？」

洋子「えつと…：釜玉で」

「あいよ少しお待ちを」

少し待つと焼きたてのステーキと釜玉うどんが出てくる

「おまちどうさま」

洋子「ありがとうございます」

リリー「ありがとう」

と扶桑語でいう

椅子に座り食べ始める

洋子「どう？美味しい？」

リリー「うん美味しい」

洋子「よかった」

リリー「扶桑だとこれとお米を食べるんでしょ？」

洋子「人によるんじゃないかしら、私はお米と行きたいわね」

リリー「それもいつか食べてみたいな」

洋子「機会があればいいわね」

リリー「うん」

と食べ終わり皿を置き

談話室へと戻る

ルイーサがコーヒーを飲んでいる

リリー「あれルイーサがいる」

洋子「起きなのかしらね」

リリー「おはようルイーサ」

ルイーサ「あありりーに洋子かおはよう」

洋子「この時間まで寝てるって珍しいわね」

ルイーサ「カールスラント軍人たるもの寝れる時には寝ろなんだよ」

洋子「初めて聞いたわねそんなの」

ルイーサ「ああ今思いついたからな」

洋子「へえ」

三木「三人とも揃ってるか？」

洋子「どうしたんですか？」

三木「新たな隊員が2人到着してな」

洋子「もう1人の方は？」

三木「あと十分ぐらいらしいんだが天候が悪くてな」

洋子「より遅れるかもって話ですか」

三木「そういうことだ、兎に角来てくれ」

洋子「ええ、2人とも行こう」

格納庫の待機部屋に向かう

洋子「はあ：いろいろ疲れたなあ」

三木「そんなにか？」

洋子「作戦開始まで訓練漬けでしたよ…桜花の投下訓練やらなんやらの」

三木「そう、そういうえばあの作戦は完璧に成功したとき」

洋子「しないと困ります、無理やりこっちに連れてこられたんですから」

三木「実はな亀田には君たちがいなくなることを言つて無いんだ」

洋子「え？やめてくださいよそんなの後々コンタクトしてるめんどくさいじゃ無いですか」

三木「安心したまえ、彼な、少し前にちつと問題を起こしててなそれ関連で降格が決まったんだ」

洋子「何やらかしたんだが」

三木「機密さ、ここにいるんだよ」

ドアを開けるとガリア空軍の制服を着た子とブリタニア空軍の制服を着た子が座っている

洋子「この2人？」

三木「ああ」

「初めまして、ガリア空軍所属ルロワ・エマ 少尉です」

「同じく初めましてブリタニア空軍所属トーマス・ルカ、中尉です」

洋子「初めまして、扶桑空軍属穴吹洋子よ」

ルイーサ「カールスラント空軍、シュタイナー・ルイーサ、大尉だよろしく」  
リリー「リベリオン空軍、ジョーンズ・リリー、階級は同じく大尉」

三木「少し離席するすぐ戻る」  
とどこかへゆく

ルイーサ「2人とも使用ユニットは？」

エマ「私はダツツ・ミラージュ3」

ルカ「イングランド・エレクトリック・ライトニングです」

ルイーサ「そうか」

洋子「(話が続かないわね……)」

ルイーサ「にしても曇ってるな」

洋子「そうねえ……2人はユニット……じゃ無いわよね」

エマ「扶桑軍の機体が基地に迎えにきてくれたから……」

洋子「2人ともを？」

ルカ「はい」

洋子「原隊は？」

ルカ「私は第111航空隊にいました、基地はワティシヤムです」

エマ「第106航空隊です、基地はデイジョンです」

洋子「デイジョンって」

エマ「今は昔と違いますよ」

洋子「そうよね……」

待機室から見える外をじつと見ているとポツポツと雨が降り始めている

洋子「……降り出した……気象台に貰いに行かなきゃな……」

と扶桑語でポツリと言う

エマ「なんだ？」

洋子「え、あ、声に出てた？」

ルイーサ「出てたぞ」

洋子「あらごめんなさいね」

エマ「それでなんて言ったんだ？」

洋子「現地の天気予報が知りたくてね」

エマ「現地と言うと……」

洋子「タバよ、現地に扶桑の部隊はいないと思うけれど、イスラエルの部隊がいると思うから連絡しなきゃとね」

ルイーサ「アレクサンドリアの方に部隊は居るだろう？」



洋子「あそこは観測部隊もいるけれどシナイ半島とは気象条件が変わるから信頼できないらしいのよね：特にアラビア半島寄りの地域だし」

ルイーサ「そんなにか」

洋子「らしいわ、あの地域日は展開したことないからあまりわからないけどね」

三木「すまない、戻った」

と一人女の子を連れ戻ってくる

洋子「その子がですか？」

三木「ああそうだ」

「初めまして、扶桑海軍第831航空隊、雁淵香奈、階級は曹長です」

洋子「ええ初めまして、まあそこにかけて」

香奈「はいっ」

三木「洋子あとこれ」

とバインダーを渡す

洋子「各種書類ですね」

三木「とりあえず出発は3時には出れるなら行けるが」

洋子「エマ少尉とルカ中尉それに香奈軍曹は荷物はいつでもいけるわよね？」

ルカ「うん」

エマ「もちろん」

香奈「はい」

ルイーサ「私も荷物はあまり出してないから出れるな」

リリー「私も」

三木「ならその時間で構わないな、そう伝えとくな、出発までにここに荷物を置いて  
てくれ、この隣の格納庫からだ」

洋子「了解です」

……

……

1967年8月12日、新たなウイツチ<sup>主人</sup>が加わる

## 砂漠の魔女達 着任

「私から最後の任務はタバにいとされる見たな!?!の撃破だ」

「人型ネウロイですか…」

「ああ、そうだ。タバについては…そうかタバに半年ほど在中していたな」

「ええ…逃げた先ですが」

「棺桶以外で帰ってきてくれよ」

「極力そうします」

1967年8月 中東 タバより西北に16km、そこには小さな空港がポツンとあるその名もWTO空軍第17 航空基地、駐留部隊はWTO空軍第552 戦闘航空団通称 デザート・ウィッチーズ

ギンギラギンと太陽が打ち付ける中格納庫付近に2人の少女がいる

??? 「ねえ、中佐」

とブリタニア空軍の制服を着た胸が小さく金髪の少女が中佐と呼ばれた少女に声をかける

??? 「ん？何かしらルカ中尉」

と扶桑海軍航空隊の制服を着た高身長黒髪の少女は答える

ルカ 「結局どんな子が来るの？」

??? 「あまりわからないわ、わかっているのは私と同じ扶桑空軍属と言うとと階級、そしてここに来るまでの戦闘経験よ」

ルカ 「ならその階級は？」

??? 「軍曹よ」

ルカ 「うえ？軍曹？使えるの？」

??? 「…今までの経歴を見れば問題はないわ」

ルカ 「そっかー…ところで中佐はその子を見たことあるの？」

??? 「別の中佐呼びじゃなくても良いのよ？見たことはないと思うわ」

ルカ 「洋子…さん？」

洋子 「なんでそんなぎこちないのよ」

ルカ 「わかんない」

??? 「ああ、洋子中佐ここに居たのか探してたよ」

とカールスラント空軍の格好をした可憐な少女がバインダーでパタパタ仰ぎながらやってくる

洋子「あら、言つてなかつたら？」

??「聞いてないな」

ルカ「あれ？朝の朝会…には居なかつたね」

??「あいにく夜間哨戒だったからな」

洋子「それでどうしたのかしらルイーサ少佐」

ルイーサ「食料が少なくなつてきててな」

洋子「もう少ししたら来るわよ」

ルイーサ「そうか、それで缶詰生活にはならなくて済むな」

ルカ「香奈ちゃんがあレンジする缶詰好きだけどね」

ルイーサ「にしてもなんでこんな所に居るんだ？荷物ならすぐ降ろされるだろ」

洋子「その話はしたと思うけれど…」

ルイーサ「…もしかして新米が来るって話か？」

洋子「そうよ、今日よ」

ルイーサ「これで念願の6人体制が敷ける！」

洋子「ふふ、そうね」

とまるで聖女のように和かに笑う

ルイーサ「にしてもどんなやつなんだ」

ルカ「それがわからないんだって」

ルイーサ「わからない？ そんな事あるか？」

洋子「1963年12歳の時にベトナム戦線、負傷し、一度本国に帰還、その後64年13歳でキプロス、65年14歳でローデシア又もや負傷し、前線復帰その後本土帰還、療養しそしてここに配置されたらしいわ」

ルカ「え”？」

ルイーサ「階級は…大尉ぐらいか」

洋子「いいえ、軍曹よ」

ルイーサ「え？」

洋子「理由わからないけど、階級が上がってないみたいなの、一応知人伝では素行が悪かったって話だけど」

ルイーサ「素行が悪いと言っても階級が下がるほどならもう退役やめさせられてるだろ」

洋子「そうなのよ、だから謎なのよ」

ルイーサ「つまりどうしようもできない子だからここに投げと…はあ…」

洋子「まあいいじゃないの」

ルイーサ「まともながらいいんだかな」

??「あの、三方飲み物を持ってきたんですけど入りますか？」

扶桑空軍の制服を着た黒髪の子が飲み物を4本抱え持ってくる

洋子「あら、貰おうかしら、香奈ちゃんありがとうね」

香奈「ルカさんもルイーサさんも要りますか？」

ルカ「貰うねー」

ルイーサ「ああ、ちょうど喉が乾いてたんだありがとう」

香奈「いいえ、いつも指導してくださってますから」

アカバ海 上空高度2万2000ft 扶桑海軍C-130S コックピット内

??「…後どのくらいですか」

機長「まあ10分ぐらいだな」

??「そうですか、先ほどのブリトーは本当に良かったのですか？」

機長「別に良いさ、まあ俺の娘が君と同じくらいの年齢でね、反抗期なのかわからんがあまり相手してくれないんだ、それもあって同じような年頃の子には優しく接したくてね、しかもそれが軍人とならばね。」

??「もしその娘と話ができるのなら父親は大切にしたいですね、自分自身父親が居なくなっしまいましたし」

副操縦士「ああ、君が8歳の時に亡くなったんだっただよな？」

?? 「ですね」

機長 「にしても数時間前から喋ってて思ったんだが、君は女の子と言うよりかは男の子に近いな」

?? 「何を言ってるんですか僕は男ですよ？」

機長 「な？」

副操縦士 「うそだろお？」

航法手 「まじか！」

航空機関士 「おいおい冗談だろ」

?? 「付いてるけど見ます？」

機長 「遠慮しとく」

副操縦士 「俺も遠慮しとく」

航法手 「俺はそんな趣味してないからパス」

航空機関士 「俺もパス」

機長 「見えてきたぞ、あれが17基地だ」

?? 「思ってたより大きいですね」

機長 「大きく見えるが中は552航空戦闘団とその補助しかないんだ、ざっと10人程度だな」



?? 「10人？そのうちウィッチは何名なんです？」

機長 「6人、君も含めれば7人になるな」

?? 「4人ぐらいしか男性は居ないんですか…」

機長 「いいや、男は元からないな」

?? 「と言うことは今まで女性のみで構成された基地だったと？」

機長 「どうだ？珍しいだろ？」

?? 「確かに珍しいですけど…よく女性整備士を集められましたね上の連中は」

機長 「どうにもイスラエル連邦から連れてきたらしくてな」

?? 「イスラエルですか、確かにあの国なら女性も徴兵の対象と聞きますし納得ですね、それより私が生活する空間はあるのだろうか…」

機長 「それは問題ないと思うぜ、ここの基地は基本小部屋でその上にシャワー室までついてる、問題なく生活はできるさ」

?? 「なら安心だ」

機長 「つとそろそろ着陸準備だな、シートベルトつけろよ」

?? 「わかってます」

ルカ 「いつ聞いてもうるさいや」

ルイーサ「ジェットエンジンとはまた違ったうるささだな」  
香奈「どんな子かなー」

??「よいしょつと、この鞆だけかな」

航空機関士「機長、全下ろしですよね？」

機長「そうだぞ」

航空機関士「フオークリフト来た来た」

とC-130に積んである荷物を下ろしてゆく

??「機長さん、ありがとうございます」

機長「きばれよ」

??「ええ、そちらこそ」

一礼した後部ハッチが降りてゆく

ルカ「あ、あの子じゃない？」

扶桑空軍の制服を身につけて、左手に革手袋を着け、右手に鞆を持った子がこちらに向かつて歩いてくる

ルイーサ「随分と可愛らしい子だな」

香奈「身長は…私より小さいですかね」

洋子「そんな小さい子なのかしら？」

バインダーに合わせてた目線を上に上げる

洋子「え？…」

手元につけていたバインダーを落としてしまう

ルイーサ「どうした洋子」

洋子「ご、ごめんなさいね…少し驚いてしまつて」

??「お久しぶりです、洋子大尉、いや中佐」

洋子「お久しぶりね」

??「申告致します。第1航空艦隊第二航空隊第1小隊より宛坂瀬名<sup>せな</sup>は昭和42年8月10日付けを持つて世界条約機構空軍第552戦闘航空団に転属を命ぜられました」

と一枚の紙を渡して敬礼をする

洋子「わかりました、本日1967年8月14日付で貴官を世界条約機構空軍第552戦闘航空団の配属を確認しました」

敬礼を返す

瀬名「はっ、あと本部よりこちらを」

と2枚のファイルを渡す、一枚は昇格許可ともう一つは??と書いてあるファイルであ

る

洋子「：わかりました、行きましよう、自己紹介を兼ねて昼食食べましよう」

パチンと両手を合わせる

軽く自己紹介をしながら向かう食堂へ向かう

香奈「瀬名ちゃんは好き嫌いある？」

瀬名「まあ特にはいいですかね」

香奈「納豆とかも大丈夫：だよね？」

瀬名「問題ないですよ、苦手なものといえばシユールストレミングぐらいです」

香奈「しゅーるすとれみんぐ？」

ルイーサ「バルトラントに昔から伝わる塩漬けのニシンの缶詰だな、宛坂はそれを食べたことがあるのか？」

瀬名「瀬名で構いません、まあコンゴに居た際にバルトラント軍人にお薦めされて食べたら1週間は臭いで動けませんでした：」

香奈「そんなに?!」

瀬名「非常に表現しづらいんですが：あ、腐った豆腐って嗅いだことありますか？」

香奈「昔やらかして腐った豆腐の匂いを嗅いだけど1日匂いが取れなかつたなあ」

瀬名「あれの10倍ぐらいの匂いです」

香奈「あ“あ“あ”」

瀬名「そういうことです」

??「その方が、新しい方？」

瀬名「はじめまして、扶桑空軍の宛坂瀬名と申します」

??「初めましてガリア空軍所属のエマだよ、よろしく」

洋子「あれ？リリーは？」

エマ「あれ？さつき起こしたのにもお」

来た道に戻って行く

瀬名「…（大丈夫かなこの部隊）」

洋子「いま、大丈夫かなこの部隊って思ったでしょ、安心して私も心配だから」

瀬名「本当に人の心読むの得意ですね、洋子さんは」

洋子「にしても君だとは思わなかったよ」

瀬名「何年振りですかね」

洋子「2年いや3年かしら」

瀬名「僕があの時、12歳の時なので4年振りですよ」

洋子「そんなかしら、そしてここが我が部隊の中心地、食堂兼ミーティングルームよ、

そしてあなたの部屋はその扉を開けて通路をまっすぐ行ったところよ、荷物はどうし

てそんな少ないのかしら……」

ドアを開けると左側に小さな調理スペースがあり、その反対側には黒板、中央には長机と椅子が置いてある

瀬名「ユニットのパレットに載せてますからね」

入ってきたドアの反対側にドアがありそこを突き当たりまでゆけば自分の部屋だ

洋子「そういうことね、香奈ちゃん？」

香奈「待つてください冷蔵庫に入れてあるので」

瀬名「ここには冷蔵庫完備か、よかった」

洋子「宮菱電機製のエアコンもあるわよ」

と言いながら瀬名の対角線の椅子に座って行く

瀬名「アフリカに比べると一億倍はマシだ……流石WTO空軍下で作られた所だ……」

エマ「よいしょ……ほらリリー起きて新米さんだよ」

リリー「んん……」

瀬名の対面の席に座る

エマ「ほら挨拶してよまったく」

リリー「……え？どうして男が？」

ゆっくり顔をあげそう言う

エマ「男ってほら瀬名さんに失礼じゃん」

瀬名「別に失礼じゃありませんよ、実際男ですし」

香奈「ふえっ？」

ルカ「うそ！」

ルイーサ「ほっ？」

エマ「え？」

洋子「嘘に見えるけど男だよ瀬名は」

ルカ「とうかかなんで隊長それ知ってるの？」

洋子「まあ色々あったのよ」

瀬名「個人的には深く掘らないでほしいですな色々」

ルイーサ「ああ、触れないでおこう、それよりも腹が減った」

香奈「ああ、すみません配膳しますから待っててくださいね」

鯖缶の炊き込みご飯とサラダが出される

瀬名「この手の基地はウィッチが作るケースが多いんですかね」

ルイーサ「そうだな、私もいろいろなところ行っただけどウィッチが作ることが多いな」

香奈「よしっと」

洋子「なら頂きます」

「頂きます」

と復唱され食べ始める

香奈「瀬名：…さん？味はどうです？お口に会います？」

瀬名「非常に美味しいですよ、私はちゃんでも何でもくんでも構わないです、その辺気にしないで」

香奈「ほっ、よかった」

と一安心したような顔をすると食べ始める

瀬名「ん、ご馳走様です」

香奈「食べるの早や！」

洋子「瀬名くん、いつもの通り食べるの早いわね」

瀬名「僕の数少ない特技の一つですから、洗い物はどうすれば？」

香奈「流し台に置いて、洗うから」

瀬名「わかりました」

と流し台に起き、先ほどの椅子に戻る

瀬名「…」



左手を顎に当てながらジツと洋子の方を見る

洋子「ご馳走様、ねえ瀬名軍曹」

瀬名「なんでしようか中佐どの」

洋子「その革手袋はなんなのよ」

瀬名「見せたくないものです」

洋子「そうね…」

リリー「なんのユニット使ってる？」

瀬名「F/A-15です」

リリー「なんだそれは」

洋子「ゲホゲホゲホ」

ルイーサ「洋子？大丈夫？」

洋子「だいしょゲホゲホ」

ルイーサ「本当に？大丈夫？」

洋子「…う…んゴホン、って瀬名F/A-15ってあの？」

瀬名「そうですけど？」

ルイーサ「扶桑の新型機だったか？扶桑国内のみの運用だと聞いたが」

洋子「そのはずなんだけど…どうして瀬名が」

瀬名「??の方に書いてあるんじゃないですか？」

洋子「…後で読んでみるわ」

ルイーサ「もしよければ瀬名くん後でも模擬空戦しない？」

瀬名「わかりました、ユニットは何をと使いに？」

ルイーサ「M i G | 2 1 F | 1 3 よ」

瀬名「フィツシユベツトですか…」

ルイーサ「いいだろう？」

瀬名「フィツシユベツトは見たことがないんですよね…」

ルイーサ「え？」

洋子「M i G | 2 1 がベトナムで運用されたのは65年以降よ？」

ルイーサ「?確かにそうだな」

洋子「取り敢えずちゃんと自己紹介ね、知ってると思うけど穴吹洋子よ」

ルイーサ「ルイーサ・シユタイナー、少佐だ、よろしく」

香奈「雁淵香奈曹長です」

とキツチンから洗い物をしながら言う

ルカ「トーマス・ルカだよ、階級は中尉よろしく！」

エマ「ルロワ・エマ、少尉ですよろしく」

リリー「ジョーンズ・リリーだよろしく」

エマ「リリーは大尉ね！」

瀬名「皆さんよろしくお願いします」

洋子「瀬名くん、もう一ついいかしら」

瀬名「なんです？」

洋子「本日より、宛坂瀬名軍曹を曹長に命じる」

瀬名「はっ」

香奈「よろしく！」

瀬名「はい」

洋子「さてみんな自由にして良いわよ」

瀬名「あの格納庫に行きたいんですけど」

洋子「香奈ちゃん、洗い物はしとくから瀬名の案内をしてもらえる？」

香奈「あ、わかりました」

タオルで手を拭きながら言う

リリー「私もついて行っていいか？」

瀬名「ええ、別に構いませんけど……」

ルイーサ「なら私も同行させてもらうかな」

ルカ「私も〜」

エマ「私もよろしいのでしょうか？」

瀬名「ええ、別に構わないですよ」

洋子「なら交流も兼ねて行ってきてね、私は洗い物終わったら司令室にいるから」

瀬名「了解です」

香奈「じゃいこう！」

瀬名「はい」

香奈「さっき来た道の左側にあるこれがシャワー室、残念だけどお風呂はついてないけどね、その隣が洗濯場ね、洗濯物はー」

瀬名「出しても問題ないなら出しますよ？シャワーに関しては自室にあるものを使うので」

香奈「わかった、それで右の方が倉庫、使っていないから開けて良いかな」

瀬名「空き部屋ですか？」

香奈「多分」

瀬名「なるほど」

香奈「そしてここが格納庫だよ」

と少し重そうなドアを開けるとF-4E、F-104C、F-5A、MiG-21F  
MK、ライトニングF-6、ミラージュIIIC、F-4DそしてF/A-15がユニッ  
ト発進機に備え付けられている

瀬名「こんなちゃんとした機体が置いてあるの久しぶりに見たな…」

香奈「あの、白の機体がF/A-15だよね？」

瀬名「ですね」

リリー「スターファイターとどちらの方が早い？」

瀬名「2・5は出るのでこちらの方が早いかと…」

リリー「2・5!? 武装は？」

瀬名「9を4本、7を4本ですね、F-4と変わりませんよ」

リリー「格闘性能は？」

瀬名「まあ：MiG-21より少し高いぐらいですかね」

リリーサ「そんな化け物を扶桑は作ってたのか…」

瀬名「黄海、扶桑海で時々見られるX-52型ネウロイを追尾撃墜するために開発さ  
れたと聞きましたね」

リリーサ「X-52型と言うと1946年ごろにベルリンで見られた極音速型ネウロ

イの進化型とされてるネウロイだったか？」

瀬名「ですね、格闘戦性能、速度性能、対ミサイル性能が格段に上がったとされるために専用のミサイルまで開発中らしいです」

ルイーサ「さすがは扶桑だな」

リリー「うちの国も買ってくれないかな」

瀬名「これはまだ試作型ですけど、正式量産型となれば買うんじゃないですか？ 一応は艦上戦闘機ですし」

ルイーサ「なに？ こいつ艦上機なのか？」

瀬名「ええ、機の方は多用途艦上機みたいですよ、偵察から爆撃までなんでもこなす予定だそうです」

ルイーサ「いやはや：ほんとに扶桑には驚かされるな」

整備員「あの…」

瀬名「はい？」

整備員「この小銃なんですけども、皆さんが使ってる物と勝手が違ってですね…」

64式狙撃銃に64式用狙撃眼鏡が付いたものを見せてくる

瀬名「あ、少し貸してください」

整備員「あ、はい」

受け取るとささっと分解し中を確認する

瀬名「銃の整備はあまり他人に任せたくないなので自分でもしても？」

言いながら組み立てる

整備員「わかりました」

瀬名「どうも」

言うどパパッと元に戻す

そして構えながら一連の動作を行う

ルイーサ「なんだその銃」

香奈「64式狙撃ですね、私も少し使ってみたいんですけど少し反動がきつくて結局

44式小銃Mにしました」

瀬名「それなら64式小銃にすれば良かったんじゃないですか？」

香奈「それが私の部隊に64式小銃が未配布だったんですよね」

瀬名「そういうえウイツチ隊は後々に配布でしたね…普通優先されるのに」

香奈「本当に今でも変えられるなら変えたいな…」

洋子「ねえ、瀬名曹長」

瀬名「なんですか？」

洋子「これについて説明してください？」

と原隊についての情報が書いてある紙を押し付けてくる

ルイーサ「扶桑語ね」

香奈「…」

青ざめた顔をしている

瀬名「い、いやあ…わかりません」

ルイーサ「どうした、香奈」

と香奈を見ると青ざめた顔で首をプルプル横へ振る

洋子「どうして、原隊が“秘匿”と書かれているのかしら？」

瀬名「ならそう言うことでは？」

洋子「そうね…でもこれに関しては説明してくれるかしら？」

??に承認と押された紙を見せる

瀬名「…」

と紙を凝視する

洋子「それでどう言うことかしら？」

瀬名「その通りですよ」

洋子「…本当なのね」

ルイーサ「洋子、どう言うことだ？」



洋子「これは彼の口からしゃべってもらわないと行けないわね」

瀬名「ここだとまずいので食堂に行きましょう」

洋子「ええそうね」

食堂

瀬名「昔話ですけどいいんですか？」

洋子「しなさい、上官命令よ」

そして瀬名はゆっくり話し始める

事の顛末はこうだ、航空学校入学と共に優秀なヴィサードがいることを知らされていた空軍関係者により卒業後に洋子の推薦もありフルコンウイッチーズに入隊させられベトナム戦線へ、負傷し扶桑に帰還した際にF u I Bの秘密ウイッチ部隊に編入、キプロスではなくキューバそしてコンゴ・ローデシア在バルトランド軍に対する諜報作戦、通称オペレーションオリオンに従事し、その後負傷で本土に帰還、空軍で新型機の運用ノウハウを獲得するため空軍復帰

F u I B内での階級は軍で言う大佐と同等である

洋子「…スパイだったと言うことね？」

瀬名「…もうF u I Bとは関わりはないです」

洋子「そうね…」

ルイーサ「ちよつと待て、そもそも2人はどう言う関係なんだ？おかしくはないか？」

香奈「確かに、瀬名さんって私よりも年下ですよね!？」

瀬名「失礼ですけど今…?」

香奈「15です!」

くくと豊富な胸を張るく

瀬名「えつと…16なんですけど」

香奈「えつ?」

ルイーサ「はあ?」

リリー「…」

エマ「うっそ」

ルカ「えー」

香奈「それでもどうして隊長と?」

洋子「同じ航空学校扶桑軍航空学校 1950年に設立されたウィツチ養成学校 空

海軍双方の航空ウィツチを教育しているの12期生よ」

香奈「えつ?もしかして12期生に10歳ぐらいの小さい子がいたって話は…」

瀬名「多分私の話ですね」

香奈「ええ…」

瀬名「…？」

洋子「まあもつと言えば私の幼馴染？見たいな物よね…」

瀬名「…洋子さんから見れば弟もしくは妹じゃないですか？いずれにせよ私の母のよ  
うな存在の方が非常に忙しい人ですからね」

洋子「まあそうですね、にしても元気してるのかしら？」

瀬名「出て行つてからはやり取りは何も、風の噂で二児目が生まれたとかつて話は聞  
きましたね、どうかはわかりませんが」

洋子「本当に知らないのね…それはもう3年も前の話よ」

瀬名「…そうだったんですね」

洋子「色々あったのはわかるけどあなたも扶桑に帰ることがあるなら顔を出してあげ  
てね」

香奈「そうですよ！どんなことがあったかは知りませんが行くべきだと思います」

瀬名「…あ」

洋子「ん？どうしたのかしら？」

瀬名「雁淵でしたよね？」

香奈「そうだけど…」

瀬名「もしかしなくても孝美さんの娘さん？」

香奈「え？お母さんのこと知ってるの？」

瀬名「ええまあ少し関わりがありますよ」

洋子「あなた覚えてないのね」

瀬名「はい？」

洋子「5歳ごろに何回かあったと思うけれど…」

瀬名「恥ずかしながら5歳ごろは一番やさぐれでたもので…覚えてないので」

洋子「あら都合の良い脳みそね」

瀬名「の前にですね、オリオン作戦中に頭を怪我してしまつて一部記憶が飛んでるんですよね」

香奈「え？それってやばいんじゃない？」

瀬名「とある優秀なお医者様のおかげでご覧のとおり生きてますよ、怪我の跡すら残ってませんよ」

香奈「え、すご」

洋子「本当に大丈夫なのかしら？」

瀬名「まあ一部記憶が飛んでる程度で本当に大丈夫ですよ」

洋子「あの話については？」

瀬名「?もちろん覚えてますけど?」

洋子「できれば飛んでてほしかったわね…」

香奈「なんの話?」

瀬名「洋子さんの名譽に関わる話なので何も言いませんよ」

洋子「まあそう言うことにしておくわ、それでその手も怪我したもので良いのかしら?」

瀬名「ええ、…疑っているなら見せますけど…」

洋子「…お願いできるかしら?」

瀬名「ひどいものなので嫌なら見なくても結構ですよ、皆さん」

香奈「私はそんなひどいもの何度も見てきたし問題はないかな」

ルカ「私も気にしないな」

リリー「医者志望だから見ておきないな」

エマ「私はちよつと」

と言うと後ろを向く

ルイーサ「今後のために見ておこう」

瀬名「そうですか…」

と言いながらビリビリとパイルアンドフックを外し、革手袋を取る

すると真つ赤に爛れた手が出てくる

洋子「…」

香奈「うえ」

ルカ「こんな風になるんだ…」

リリー「ビーム出てきた火傷じゃないのかそれ？」

ルイーサ「私の友人もこんな風になって居たが治ったな、にしても痛くないのか？」

瀬名「特に痛くはありませんね、この怪我の要因はネウロイではなく人間ですからね」

洋子「人間って何をしたの」

瀬名「諜報をしていることをなんらかの理由でバルト<sup>B</sup>ラント<sup>I</sup>情報部<sup>S</sup>にバレましてテントで休眠中に焼身殺害されそうになった所を逃げましてね、その時の傷です…それ以外の場所は治ったんですけどね」

洋子「本当にスパイだったのね…」

瀬名「前の話ですけどね」

リリー「薬とか塗ってるのか？」

瀬名「ええ、ワセリンを塗れる時には塗ってますね」

リリー「ステロイド系軟膏は塗らないのか？あっちの方が効果があると思うが」

瀬名「小さい頃火傷してステロイド系軟膏で使った時ひどい炎症をしたのでそれ以降

は使つてないですね……」

リリー「そうか、それなら仕方ないな」

瀬名「ところで、ルイーサさん模擬空戦どうします？やるならやりますけど……」

ルイーサ「……それなら明日でも良いか？」

瀬名「もちろん構いませんよ、何時ごろに？」

ルイーサ「そうだな……昼食前に一戦だな」

瀬名「わかりました。では私は荷物を取りに行つても？」

洋子「ええ構わないわよ」

瀬名「では」

と荷物を取りに行く 格納庫一角

瀬名「あつた、これが無いと怖いですね……」

と言いながら腰にFNブローニング・ハイパワー用のホルスターを腰につけ、ベルトループを使い、あまり見えないように隠す

瀬名「よしこれで……」

ホルスターから拳銃をサツと抜き、戻す事を二回ほど行う

瀬名「それで、どうしたんですか？洋子中佐殿」

左足を軸にくるつと回るとそこには壁に寄りかかつてこちらを凝視している洋子が

いる

洋子「…ごめんね…」

瀬名「?どうしたんですか?」

洋子「…あの話については貴方は本当に良いの?」

瀬名「射撃場は?」

洋子「っ!そ、その扉よ」

瀬名「ありがとうございます、貴方も許諾したでしょう?したならそれで良いと思うんですよね、あと何年ですか?まあそれまでに僕が生きてるかはわかりませんがね」

洋子「そうね、そうよね…貴方は生きてるわよ、絶対にね、だから待つてるわよ」

瀬名「では僕は射撃訓練に」

とFNブローニング・ハイパワーと64式狙撃銃を持ち行く

射撃場

パンパンパン

瀬名「洋子さんなぜついてきたのでしょうか?」

洋子「貴方の射撃能力がどうなってるか気になつてね」

瀬名「あいも変わらず下手くそですよ」

ズドン、ズドンと7・62x51弾を的へ叩き込む



洋子「あの頃よりかは何十倍も上手くなってると思うわよ」

瀬名「ありがとうございます」

と言いながら—64式を手放しホルスターからハイパワーを取り出し《トランジション》カキンカキンと金属の丸い的に当ててゆく

瀬名「やつぱりハイパワーは使いやすいな」

リロードしセーフティーをかけホルスターに戻す

洋子「ライフルよりハンドガンの方が当たるのね」

瀬名「こっちで仕事してる方が長かったですからね、ライフルはでかいし重いしで近接戦での取り回しが悪いのが苦手になりましたね」

洋子「近接戦：まあそうよね、なら64式小銃にはしなかったのかしら？」

瀬名「オリオンの時もそうだったんですけどライフルは中距離以降の戦闘でしか使っていないですよ、近接なら回避つつハイパワーを撃った方が撃破率が上がってるんですよ」

洋子「なるほど、近接だとシールドの邪魔にもなって近づけないってわけね？」

瀬名「はい、固有魔法のこともあってそっちの方が良いんですよ」

洋子「それならまた新たに編成を考えなきゃね」

話しているとジリジリジリとネウロイ飛来のアラートがなる

瀬名「アラート待機は！」

洋子「今日は休みだから居ないわよ！出れるかしら？」

瀬名「もちろんです、許可さえあれば2分で出れます」

洋子「ならお願い」

瀬名「了解です」

格納庫にはリリー、ルイーサ、香奈が集まっている

香奈「あ、瀬名ちゃんが」

瀬名「ではお先に」

とガンラックに立て掛けてある自分のタクティカルベストを装着しミサイル未搭載のF/A-15に飛び乗り、エンジン点火し、離陸を開始する

リリー「おい瀬名ミサイル！」

瀬名「不必要です」

と機体が持ち上がるとA/Bを一気に噴かし284.28m/sと言う脅威的な上昇力で登ってゆく

瀬名《管制へ、こちら鷲1、ネウロイの位置は》

管制《鷲1：レーダーで捉えた貴機より北西に80km、数は91型が2機、巡航し友軍機を待て》

瀬名《了解》

巡航速度に落とし飛行する

リリー『お前ミサイル忘れてるぞ良いのか！』

瀬名『ミサイルなんてなくても十分です、無い環境で今まで生きてきましたからね』

リリー『この辺のネウロイは瀬名軍曹が戦ってきたネウロイの倍の能力は持つてるとされるんだ』

瀬名『わかりました、ネウロイ接触まで5分』

リリー『リリー、香奈で組め、瀬名、私と組め主導はそっち持ちだ』

リリー『了解、行くよ香奈』

香奈『はい！』

瀬名『了解』

リリー『香奈、ミサイル撃つわよ』

香奈『了解です』

リリー『3, 2, 1 FOX 2』

と言うと香奈のF-4DからはAIM-7EがリリーのMiG-21FからはR-3Rが放たれそのミサイルは91型ネウロイへと向かって行き

リリー『命中、案の定正面からじゃダメージは無いようね、行くわよ！』

リリー『こつちすぐ片付けるから待っててね』

ルイーサ『ええ』

瀬名『行きますよ!』

と言うと64式を手放し、ハイパワーへと切り替えグンと加速する

ルイーサ『ちよ、ちよつとお』

瀬名『接敵まで2分:ルイーサ少佐、離脱してください』

ルイーサ『あ?ああ』

と91型ネウロイに対しヘッドオンを仕掛ける瀬名を横目に即座に上昇をする

その瀬名は背面飛行をし91型の腹面に対し攻撃を仕掛けようとする

瀬名『良い子だよ91型』

と91型とスレスレなところを900km/h程度で飛行し、ハイパワーの9x19mm弾を交差する瞬間に中央部にバン1発目でうつつすらコアが見え、2発目で完全に露出、最後の3発目でコアが粉碎されてネウロイは破片へと姿を変える

ルイーサ『なに?あれを1人で?』

瀬名『少佐、あちらの方がやばいですよ』

64式狙撃銃を構え

ルイーサ『そうだ』

バン

と撃つとその7・62mm弾はネウロイへと刺さり、中でグレネードのような爆発をしコアを破壊する

ルイーサ『またあのネウロイを一撃：？しかもコアの場所を知らずに？』

瀬名『91型は機体の中央部を外壁に沿ってコアが移動するだけの型ですから私の場合はあそこに叩き込めば一撃です』

香奈『撃つんなら言つてよ！めちやくちやビびったじゃん！』

と2人ともこちらに移動しながら言う

リリー『にしてもすごい威力だったがRPG-7でも撃つたのか？』

瀬名『いいえ、少し特殊な弾を使った7・62mm弾です』

リリー『なんだ？』

とぐつと、顔を近づけ、興味を持ったように言う

瀬名『…えつと…APHEといえばかりやすいですかね』

リリー『その小さいのにAPHEか？信管は？』

瀬名『そこを魔法力でカバーして爆発力も同じようにですね』

リリー『弱点とかは？』

瀬名『魔法を結構食うことですかね』

リリー『それなら先に入れ込んだりして下準備すればいいんじゃないのか？』

瀬名『それだと空気中のエーテルに少しずつ吸われて約3日程度で効果が消えますね、専用の箱を用意すれば1週間程度まで延長可能らしいですけど…』

リリー『そうか…』

ルイーサ『だがあそこまで爆発力が大きくなるのはおかしくないか？』

洋子『それは彼の固有魔法のせいよ』

瀬名『せいって…』

洋子『あなたそれで何度も痛い目見てたじゃない』

瀬名『そうですけど…』

ルイーサ『瀬名には固有魔法があるんだな』

洋子『ええ、“弾頭威力増加”よ』

ルイーサ『名前の通りか』

洋子『訓練生だった頃それで何度も銃を暴発させてたんだから、その度私が治す羽目に…』

…』  
 瀨名『だからその件については何度も謝罪した上に甘いもの奢ったじゃないですか』

洋子『別に気にしてないわ、今思えば固有魔法の訓練にもなったわけだしね』

ルイーサ『どの程度の威力になるんだ？』

瀨名『口径にもよりけりですけど、この6.4式7.62mm狙撃銃の銃が壊れない範囲ですと、RPG—7前

後の破壊力が目一杯ですね、あれ以上行くと暴発で死んじやいます』

ルイーサ『それで徹甲榴弾とよく考えたな』

瀨名『ええ、ウルスラ大佐には非常にお世話になりましたよ』

ルイーサ『なに？空軍技術省のウルスラ少将にか？』

瀨名『え？あの方今少将なんですか…』

ルイーサ『数年までに上がったと聞いているが』

瀨名『そうだったんですね』

ルイーサ『にしても扶桑のスパイに我がカールスラントが関わっているとは…』

瀨名『別にスパイ道具ってわけではありませんよ、本当に対ネウロイ用です、ファルコンウィッチーズの狙撃手なんか配られていますし、生産コストが高いから一般部隊にはないですけど』

洋子『あなたのお父様の古い友人だものね』

瀬名『ええ、そうらしいですからね』

ルイーサ『君の父上はどんな方だったんだか…』

瀬名『どっちの父親の話ですか？』

小悪魔的顔で言う

ルイーサ『む、それは今話してた方をだな』

瀬名『そうですか…一言で言うなら機械類の設計士ですかね』

香奈『宛坂…宛坂…機械…ッ！もしかして！』

瀬名『流石に香奈さんは知ってましたか、その通り、宮菱重工傘下宛坂動力の創設者宛坂秀太の義子です』

ルイーサ『宮菱重工の宛坂動力って、私でも知ってる扶桑の航空設計会社だ、その創設者の息子が？』

瀬名『ええ、私が履いてるこの脚もF/A-15 02号機、F/A-15が開発当初に造られた機体です』

洋子『それってあの人が履いてた機体よね？』

瀬名『ええそうです、中身は多少なり変わってはいますけど外はあの当時のままのものです、塗装も含めて』

洋子『その機体ももうそろそろボロが来るんじゃないかしら？』



瀬名『正直、無理やり空戦はしたくありませんね、まだ受け取ってから日が浅いのでなんともですが』

香奈『…もしかして瀬名くんって芳佳大将の…』

洋子『あら、わかるのね』

ルイーサ『ヨシカってあの元501のか?!』

瀬名『宮藤芳佳、私の義母です、荒れていたあの頃の私を唯一、宥めてくれた命の恩人です』

ルイーサ『命の恩人?!』

瀬名『あの頃は学校でいじめられて、その上義父の死、色々重なって自傷行為に走っていたのを優しくしてくれたんですよ、もしあのままなら私がどこかで死んでたかもしれない、まあ今すぐにでも死にそうな場所にいただけ』

ルイーサ『そうか…』

香奈『…瀬名くんはどうやって生きる希望を見つけたの?』

瀬名『生きる希望…ですか、今まで考えたこともありませんね…強いて言うならば“傷ついた人、病気の人の、たくさんの人のために、自分の力を役に立てたい”ですかね…まあどれも守れてないんですが』

香奈『自分の力を役に立てたい…そんなこと思ったこともなかったなあ…』

瀬名『でも戦争は嫌いだ、でも自分はその中で育ってきた、そこからは永遠と抜け出せないでしょうね、この戦いが終わったら次は別のところで、命尽きるまで戦うと思えますね…』

リリー『…戦鬪狂…か？』

瀬名『それは…生憎、自分にもわかりませんが、わかるのはただ一つ自分は戦争が憎くて、戦争で生き、戦争で死にたいただそれだけです』

リリー『…』

瀬名『すみません、こんな暗い話をしてしまつて』

洋子『なら今日の夕御飯は貴方が作つてね』

瀬名『それは…』

洋子『命令よ』

瀬名『…了解』

香奈『えっ？瀬名くんが食事を？』

洋子『そう、彼の作る食事は絶品よ、期待してて良いわよ』

瀬名『勝手にハードを上げてきましたね…私はあまり料理はしないのであまり期待しないでくださいよ』

洋子『ふくん、もう一つ命令よ』

瀬名『なんですか？中佐殿』

洋子『あまり自分を卑下するのやめなさい』

瀬名『了解……しまし……た……』

香奈『へーなら期待しようかなー』

瀬名『しないでください』

リリー『即答か』

とくだらないことを言っていると

突然、無線機から

「かごめかごめ 籠の中の鳥は 一ついつ出やる」

と単調で、それで雑音混じりで聞こえ始める

香奈『え？』

リリー『なんだ？なんだ？この音』

ルイーサ『無線ジャックか？、本部聞こえるか！』

洋子『通信聞こえてるけどどうしたのかしら、この音は』

瀬名『少佐！全方位広域探査で捜索可能ですか？』

ルイーサ『ああ、可能だが』

瀬名『お願いします！』

ルイーサ『ちよつと待つてくれ』

と言うと青色の魔導針が現れ、その針が波をうちそして、赤く光る

ルイーサ『方位1—8—0真南、距離210kmと行ったところに小型ネウロイが一

機：それだけだ』

瀬名『皆さんは撤退してください、お願いします』

香奈『その位置なら別部隊がやってくれるよ』

ルイーサ『お前はまた！』

リリー『…』

??『大佐あ、貴方はいつまで経つても変わりませんねえ、悪いくせなのでしようけど

私は好きですよそう言うの！』

瀬名『チツ』

と舌打ちをする

ルイーサ『誰だお前は！』

??『おやおや、はじめまして、オラーシャ帝国参謀本部情報総局 第2独立特殊任務

旅団所属のアリーナ・アレクサンドラ・ヴォロシーロフ、階級は情報大尉よ』

洋子『それでグルー<sup>G R U</sup>の方がなんの御用？』

アリーナ『わたしも妨害無線を食らつてね、回線を試してたらちよつと繋がっただけ

だよ、別に盗聴してたわけじゃないさ、君たちから取れる機密なんてごく僅かだしな、それにしてもあのネウロイは何なんだい？突然詩なんて読み始めて』

洋子『そう、あれはカゴメカゴメっていう扶桑の民謡よ』

アリーナ『そうなんですか、にしても彼があんなに荒ぶってたのはどうしてですか？』  
と言うとキイイイインと妨害電波が発せされ耳を破壊するまいと高音を出す

ルイーサ「またか！」

香奈「うわっ」

リリー「ここまで来ると耳が痛いぞ……」

皆ホバリングの体制を取り、滞空する

瀬名「少佐、ネウロイの位置は？」

と近づき言う

ルイーサ「方位1—9—0、南南西にズレた、距離190だ」

瀬名「要撃部隊は？」

ルイーサ「特にいない……な」

香奈「えっ、その辺りに空軍基地あったよね!？」

ルイーサ「そのはずだが……おかしいな」

洋子『こ……ち……ら……7……基……お……せ』

ルイーサ『おい、聞こえるかこちら』

瀬名「無線通じませんか？」

ルイーサ「ああ、ネウロイの妨害電波だろうな」

瀬名「そうですね、なので……」

と言いなからポーチから一つのケーブルのついた無線を取り出してユニットに接続する

ルイーサ「だからそれは通じないと……」

瀬名『こちら扶桑マルイチ、17基地に繋いでくれどうぞ』

「こちらカイロ了解、少し待て」

瀬名「了解」

「もしかしてだが、16、17、18は特定帯域攻撃を受けている？」

瀬名「そのようです」

???「こちらHQ05、聞こえるか」

瀬名「こちら第552戦闘航空団第一小隊、聞こえますどうぞ」

HQ05「割り込みですまない、貴君の前並びに司令官名は？」

瀬名「小官は宛坂瀬名曹長です、指揮官はシユタイナー・ルイーサ少佐です」

HQ05「アテサカ！あの時の彼か！」

瀬名「はい？」

H Q 0 5 「コンゴ・ローデシアで助けてくれたツルツル頭の無線員だよ」

瀬名「ああ、あの時のお怪我大丈夫でしょうか？」

H Q 0 5 「問題ないさ、君がその部隊の指揮権を一時掌握すること可能か？それなら手っ取り早いんだが」

瀬名「無理ですねおおよそ」

H Q 0 5 「無線を変わる事は可能か？」

瀬名「可能です」

H Q 0 5 「では頼む」

瀬名「少しお待ちを」「少佐、H Q 0 5 と繋がってますから、少し手を拝借しますね」  
ルイーサ「え？あ、わかった」

と言うと瀬名はルイーサの手を取り魔法力を流す

瀬名「いつもと同じように話しても構いません」

ルイーサ「ああ」「こちらルイーサ少佐、聞こえるか」

H Q 0 5 「こちらH Q 0 5 感度良好、問題ありません、ルイーサ少佐、本部より伝令、同地域に存在する電子攻撃を行なっている特殊ネウロイを撃破せよ、可能ならば経験者の宛坂瀬名曹長を先行させよ」

ルイーサ「了解」

HQ05「頼んだ、通信終わりと切れる」

ルイーサ「それは一体なんなんだ？」

瀬名「魔力衛星通信です、知ってるでしょう？」

リリー「オラーシヤと扶桑で数年前に運用開始した特別回線だよな？」

瀬名「その通りです」

リリー「だけど正規部隊のほんの一部でしか運用されていないんじゃないのか？特に空母乗りつて話だが」

瀬名「それに付いてはユニットにその専用の装置を取り付ける必要があるらしいんですよね」

リリー「そうか、そう言うことか」

ルイーサ「？」

リリー「瀬名は新型ユニットだからその装置が備え付きなんだよ」

ルイーサ「ああ、そう言うことか、にしてもそのネウロイと戦ったことあるんだろ？ネウロイの性能は？」

瀬名「一言で言うならば近接戦あるのみです、長距離からの狙撃は“ヤツ”の速度機



動性共に非常に高く、短距離ミサイルは軽々と避けられます、中距離ミサイルは電波妨害でどつかに飛んで行きますね」

リリー「もしかしてだがあのバルクホルン大尉が戦ったって話のネウロイか？」

瀬名「超音速戦闘機型ネウロイの事ですかねあれに近いと思います、強いて言うならあれ以上の性能だと思います」

ルイーサ「あの方が撃墜して以降目撃情報はないとされてたが……」

瀬名「僕と戦ったことがあるのは2回で一度は逃してしまったのでその個体なのかもしれません、皆さんは周辺に集まってくるであろう雑魚の処理をお願いしたいです」

ルイーサ「大丈夫なのか？苦戦したんだろう？」

瀬名「それは僕の力不足とユニットの性能不足が原因です」

香奈「えっ、もしかしてF-4じゃ厳しい？」

瀬名「違います、当時は赤蜻蛉に九九でしたから」

香奈「え？赤蜻蛉ってT-3ですよね？」

瀬名「ええ、そうです」

ルイーサ「キュウキュウって扶桑のライフルだよな？なんでそんなものを」

瀬名「渡されたものですからね、それよりも向かいましょう、移動されたら困りますからね」

と瀨名を先頭とし移動を開始する

ルイーサ『ネウロイとの距離20km切った、数が…15に増えてる』

瀨名『…10…9…8…7…6…5…4…3…2…1…  
散開!』

と言うと全機散開する

瀨名と言うとその場で止まり、正面からネウロイが突っ込んでくるのをどっしり構えている

ルイーサ『瀨名!瀨名!回避だ!来てるぞ!』

瀨名『ええ』

ネウロイがキイイイイイイインと大きく金切り声をあげる、突っ込んでくるネウロイに対し瀨名はハイパワーを向け“バン”と一発撃つ、するとネウロイは大きく下方に回避をする

瀨名『避けるなよクソネウロイ』

と言い放つとネウロイの後ろに着きパンパンと撃つが軽々と避けてゆくするとネウロイが突然垂直になり瀨名をオーバーシュートさせる

瀨名『初めてですなそれは』

とネウロイに追いかけられる構図になりビームをシールドをで弾きつつ子機と本隊

が戦っている戦場から遠ざける

ルイーサ『瀨名！ 今後ろに…』

瀨名『逃げてください！ こいつとの戦闘は避けて』

ルイーサ『だが！』

瀨名『逃げろ！…これ以上仲間を失いたくないんだ…』

ルイーサ『わ、わかった』

ネウロイはそんなこと関係ないと言いたいのか瀨名に攻撃を更に加える

瀨名『…もう少し、もう少し』

ネウロイと瀨名の距離が50mを切る、瀨名への攻勢が断然強くなるすると突然左エンジンが止まる

瀨名『来た』

左エンジンの推力を失った戦闘脚はフラットスピンを引き起こす、たが瀨名はそれわかっておりフラットスピンの中ネウロイが上を通過する瞬間を逃すまいと64式7.62狙撃に持ち替えネウロイの腹部に銃の持つ限りの魔法力を込めた7.62x51弾を1発、2発、そして3発叩き込んだ瞬間、瀨名の体は今まで進行していた方向とは逆の方向に進み始める、その理由は少し廻りネウロイが瀨名を追いかけ始めた頃に戻る洋子『ネウロイと瀨名がこっちに向かってきてるわ！』

ルカ『ヘッドオンならこっちのポレツコツミサイルが当たりますよ！』

エマ『私のR530も行けるよ！』

洋子『行くわよ！』

と3人はA/Bを炊き、音速を超え、瀬名の支援へ急ぐ

洋子『えッ！瀬名が』

と瀬名がフラットスピンを始める

洋子『ルカ！手を貸して！私を加速させてちょうだい！』

ルカ『はい！』

とEEL、F-4のA/Bを炊き合計304kNを叩き出しそれでルカの固有魔法である加速魔法を使い洋子と共に加速し、速度はマツハ2.5、機体強度ギリギリに加速する

そしてさらにネウロイと瀬名に近づき

洋子『ルカ、離脱して！』

〃バン〃

ルカ『はい！』

〃バン〃

ルカが離脱した瞬間、ネウロイはコアをあらわにする

「バン」と最後の発砲音と共に小柄で小さな瀬名の体を洋子の大きな体で抱きかかえ、その余ったエネルギーを使い高高度へ一気に離脱する

するとネウロイは散り散りに散る

瀬名「はあはあ…」

洋子「バカ！」

パシンと洋子は瀬名の頬を叩く

瀬名「…すみません」

洋子「私が来なかったらどうなつててことか…」

瀬名「僕は洋子さんが来るってわかってました」

洋子「お見通しつてわけね…本当かしら」

瀬名「ええ、もちろんわかってましたよ」

洋子「飛行はできるかしら？」

瀬名「…燃料切れです」

洋子「はあ？ F/A—15って航続距離長いんじゃない？」

瀬名「えつと…あれをするために燃料を投棄してたので空っぽです」

洋子「ホツツツントバカね」

瀬名「面目ないです…」

洋子「子機も破壊したみたいだし合流するわよ、高度指定5500でよろしくね」

瀬名『こちら瀬名、合流高度5500、速度500km』

ルイーサ『瀬名！大丈夫なんだろうな！』

瀬名『ええ、中佐に助けて貰いましたから…細かい話は合流してからで良いですか？』  
ルイーサ『あ、ああ、5500の500だよな？』

瀬名『はい』

洋子「…後ろに回ってもらえるかしら？」

瀬名「え？あはい」

とハーネスを引つ掛け背中合わせで移動を開始する

洋子「にしても軽いわね…今幾つなのよ」

瀬名「…45ぐらいだっと思えます」

洋子「もっと食べなさいよ」

瀬名「軍医にも同じこと言われましたよ、ちゃんと食べてるつもりなんですけどね…」

洋子「食育って知ってるかしら？」

瀬名「食育…聞いたことはありませんね」

洋子「“体育智育才育は即ち食育なり”の意味わかるかしら？」

瀬名「体を健康にするには食事…って意味ですかね？」

洋子「そうよ、細かくは違うけれど何をやるにも全ての基礎は食事、教官が言っていたでしょう？」食うのも訓練、エネルギー消費が早いウィッチはぎょうさん食え！」つて」

瀬名「…たしかにそんなことも言っていましたね」

洋子「来たわよみんなが」

瀬名「こう言う時ってどう言う感じにすれば良いんですか？」

洋子「…わからないわ」

ルイーサ『瀬名、大丈夫なのか？』

リリー『特に怪我はしてないな』

香奈『…洋子さんの背中…』

瀬名『ユニットの燃料が切れたただけなので怪我はしてませんよ、ユニットの破損もないです』

ルイーサ『そうか、よかった』

洋子『あら、ルイーサがそこまで心配するって珍しいわね』

ルイーサ『んんん…少しな』

洋子『故郷くにに置いてきた妹さんと重ねたのかしら？』

ルイーサ『まあそんなところだな』

瀬名『お姉ちゃん！』

精一杯の少年声シヨウネンタでいう

ルイーサ『ん〃ん〃ん〃…ゴホン、瀬名軍曹、今は帰還中とは言え任務中だ』

瀬名『すみません…』

洋子『…もう一回…』

瀬名『…はい？』

洋子『なんでもないわ』

香奈『たしかによかったですけど…それよりさつきアリーナ…なんとかさんって結局

なんなんですか？』

洋子『それについて問い詰めたいんだけど？』

瀬名『ここで良いなら話しますよ大した物でもないのよ』

ルイーサ『構わないと思うが大佐って呼ばれてたが』

瀬名『WTO情報局第四百四四国際特別航空隊ってご存知…じゃありませんよね』

ルイーサ『WTO情報局第404国際特別航空隊？知らないな』

洋子『諜報部関係はあまり知らないわね…』

香奈『知らないなあ』

瀬名『主にウィッチ隊を編成している航空隊なんですけど、その情報大佐…まあ指



揮官で、色々なところを回ったので、先程のアリーナ・アレクサンドラ・ヴォロシロフは敵でもあり味方でもあった存在ですね、ユニットはM i G - 1 9 だったと思います」

洋子『情報大佐…ね』

ルイーサ『ちよつとまで、その話我々が聞いてもよかつたのか!?!』

瀬名『まあその部隊は解体されましたし、隊員も私含めて2名程度しか残ってませんし』

洋子『えっ』

香奈『え?』

ルイーサ『はあ?』

リリー『嘘だろ?』

ルカ『嘘でしょ?』

エマ『え…』

瀬名『エスピオナーズは殺し殺されのイタチごっこです、その中で僕は5人の戦友を亡くし10人以上をこの手で葬り去りましたが、そんなことをしても亡くなつた戦友は帰つてこないどころかまた狙われるだけって気づいたんです、だから上の命令を無視し現地部隊で対ネウロイ戦闘してたら元上官、今のF u I B長官に拾われ、空軍に移転さ

せられたんです……ただその長官の最後の命令、そして空軍総司令官から最初の任務を言い渡されその赴任先がこんなんです』

洋子『人を……殺した……？』

瀬名『滴る汗、硝煙の匂い、鼻にくる生臭い血……嫌なほど夢にまで出てくるほどの地獄、そして全てが嫌になり自決もしかけた……死んだ仲間たちのことを無碍にできない……でも誰にも何も理解されない恐怖……何もかも全てが怖かった……』

リリー『シエルシヨックか……』

洋子『……今はどうなのかしら』

瀬名『今はこの通り追いついて空戦できるまでに治りました、でも空軍復帰後1か月は辛かったです。その時に色々な方に助けてもらいましたからね、時々その夢は見ますけどやっぱり後悔はしています』

ルイーサ『そうか、もし辛いことがあったら言ってくれ』

洋子『そうね、私たちは君の戦友だからよ』

瀬名『戦友……』

と目から一粒の涙が落ちる

洋子『あら、珍しく泣いてる』

瀬名『いいえ、泣いていません』

と袖で涙を拭きながら言う

洋子『さ、そろそろ基地よ』

香奈『ですね、と言うか瀬名ちゃんなんで今飛んでないの?』

瀬名『燃料切れ…ですね』

香奈『え? そんな航続距離短いの?』

瀬名『あいつを撃墜するために燃料投棄してたんです』

リリー『ネウロイを落とせたとしてもヨーコが来てなかったら不味かったんじゃない

か? 流石に』

瀬名『ブレイクする寸前にレーダーで補足してたので大丈夫です』

リリー『計算済みでそこまでして最後は人頼みか…』

洋子『さ、着陸よ』

と着陸し食堂へと集まる、時刻は夕方4時

香奈『ご飯作らなきや』

洋子『なら夕食は7時頃でいいかしら? みんな』

ルイーサ『少し遅いがまあいい』

リリー『構わない』

エマ『いいよ』

ルカ「それでいいよ」

瀬名「香奈さん、手伝いますよ」

香奈「ん、ありがとうだけど包丁が」

瀬名「持ってきてるので」

と一度自分の部屋に戻り、荷物を開け愛用の軍用ナイフではなくその隣の革製の鞘に入った多用途ナイフを取り出す

香奈「包丁…じゃない?!」

瀬名「私愛用の多用途ナイフです、何をすれば?」

香奈「えつと、そこにあるじゃがいもを一口切りと玉ねぎの薄切り、できるの?」

瀬名「洋子さんの並には、アレンジはできますよ」

香奈「よかった…」

と瀬名は洗って置いてあるじゃがいもの芽を取り、皮を丁寧に剥いてゆく

香奈「上手…」

瀬名「自分で言うのもなんなんですけど、芳佳さんには“女の子”として育てられましたからね」

香奈「嫌だって言えなかったの?」

瀬名「別に悪い気はしませんでしたし、あの時はできることを少しでも増やしたかつ

たので何も、その時のことが今に通じてるってことはそれを見越して教えてくれたんだ  
と思ってます」

香奈「そっか」

瀬名「と言うかこの基地で料理できるのって…」

香奈「私と一応隊長」

瀬名「ですよね…」

香奈「隊長は少しできるんだけどレパートリーが少ないので同じものになりがちな上に扶桑食ばかりでみんな飽きてたね、ルーサーさんは全くできないらしく茹で卵と茹でじゃがいもでどうにかしてたらしいです」

瀬名「洋子さんはそれはもうアレンジ料理はすごいですからね」

香奈「そう、本当にそれ正直言うならもう…」

瀬名「わかりますよその気持ち」

洋子「ごめんなさいね！アレンジ下手くそで！」

とカウンターから顔だけを出し言う

瀬名「アレンジしなければ絶品だからそれでもいいと思う」

洋子「瀬名に言われるとなんか…」

瀬名「なんです？薄っぺらかったですか？」

洋子「違うの…なんかこう母性本能をくすぐられると言うかなんと言うか…」

瀬名「空母勤務の時の隊長にも言われましたよ、と言つても小林さんでしたけど」

洋子「小林ってあの？」

瀬名「ええ、小林梨沙中佐でしたよ」

香奈「梨沙中佐って私の元上官ですよ」

瀬名「え？香奈さんも海軍勤続に？」

香奈「はい、元は瑞鶴乗りでしたよ」

瀬名「となるとここにいる扶桑空軍ウィッチはみんな元空母ウィッチだったんだ…」

香奈「え？洋子さんも空母に？」

洋子「私も元は空母志願だったからね、乗艦は龍驤ね」

香奈「なら瀬名さんは？」

瀬名「僕は雲龍ですね」

香奈「雲龍って確か62年就役の新型のコア力空母だよな？」

瀬名「ですね」

洋子「そういうえば9月に加賀が就役よね？」

瀬名「らしいですね、最近はりペリオンとの建造競争が激化してますし」

洋子「はあ…人類同士で争つてるとネウロイを倒せないってのに何やってんだが上

は」

瀬名「ネウロイを倒すための競争ですよ、人同士でやりあうのは結構です」

香奈「確か秀太さんとかは大規模に人同士でやり合ってたって話じゃないんですか？」

洋子「あんなの出鱈目の噂じゃないかしら、ネウロイがないなんて有り得ないでしょう？居なかったらそれこそ平和よ」

香奈「そうなのかなあ、あ、瀬名ちゃん玉ねぎ炒めてくれる？」

瀬名「わかりました、今日はポトフですかね？」

香奈「いいや、コンソメスープだね、ここにソーセージとキャベツだけだね、あとは…どうするか悩んでるんだよね」

洋子「具材は何があるのかしら？」

香奈「色々あるのでどうするか悩むんですよね」

洋子「パンは？」

香奈「昨日の夕食がパンだったから出来ればそれ以外がいいと思います」

洋子「…米はさつき食べましたし」

瀬名「えつと牛乳、卵ってありますか？」

香奈「あるけど…というかそれデザート作ろうとしてない？」

瀬名「ならパスタは？」

香奈「なるほど、わかったやろう」

瀬名「はい」

パスタ、牛乳、卵、粉チーズ、ベーコン、コンソメ、黒胡椒そして余ったキャベツ、ここから導かれるものは…そうカルボナーラ

6:50 食堂

瀬名「できましたね」

香奈「いやあ、瀬名ちゃんが思った以上に料理できてびっくり」

洋子「ム…」

香奈「隊長ならキャベツを入れるって言う判断はしないとしますよ」

洋子「そうね、私ならあのキャベツはあのまま冷蔵庫にいくわ」

香奈「そしてコンポスターに行くと思いますね放置されて」

洋子「…」

瀬名「久しぶりに揺れなくてネウロイも来なくて自由に火が使える環境で料理しましたね」

香奈「本当にどこにいたの…」

瀬名「御国みくにの船とこの世の地獄ですかね」



香奈「と言うか船なら火に近い物は使えるところだけだ」

瀬名「陸にいるときは火を使うと煙でネウロイにバレるので毎日が缶詰飯でしたね」

洋子「いやあ、思い出したくない」

香奈「そんな…」

瀬名「リベリオン人からすれば地獄でしょうね」

リリー「なんだ？呼んだか？」

洋子「ベトナムの悪夢を思い出したのよ、あの缶詰地獄をね」

リリー「…その生活に戻れと言われたら自決する」

香奈「ええ？」

リリー「生ゴミの方とどっこいな食いもん食えるか」

香奈「そんな…」

ルカ「ごめんない遅れましたあ」

エマ「同じ遅れた」

香奈「続々とききましたね」

ルイーサ「すまん　遅れた」

洋子「ちようど揃ったわね」

「頂きます」

と扶桑式のやり方で食事を始める

リリー「ん？これ本当に香奈が作ったのか？」

香奈「え？」

リリー「いつもと味付けが違う」

香奈「そんなことないと思うけど…」

リリー「なら腕をあげたか？」

瀬名「確かにさつき食べたやつにしては味付けが雑かもしれないですね」

リリー「…もしかして瀬名が作ったのか？」

瀬名「もしそうだとしたら？」

リリー「私を嫁入りさせてくれ」

瀬名「生憎私にはその予定の方が既に居るのでご理解を」

リリー「なに？」

洋子「そんなこと言ってたわね」

残り「ええええええ！」

香奈「名前は？」

瀬名「その方からは」予定がある」と言うこと以外言うなときつく言われてますので」

香奈「気になる…」

瀬名「そう言うのが乙女心っていうんですかね、その辺がまいちわからないんですよね」

リリー「一応そうなるな、わかりやすくいえば…いやある意味独特な感性だからわからんな」

瀬名「理解し難い物ですねやはり、そんなことより冷めますよ」

リリー「そうだな」

洋子「そうね」

食べ終わり

各々は解散、残った三人はこの年代では珍しい扶桑松下電器産業製のカラーテレビであるパナカラーを見ている

瀬名「これが総天然色テレビジョンですか、初めて見ましたね」

リリー「扶桑ならもう各家庭にあるぐらいあるんじゃないか？」

洋子「そんなないわよ、お金持ちだけよあるのは」

リリー「そうか」

洋子「でも最近の扶桑はすごいわよ、リベリオンのニューヨークに負けないぐらいのビル街が出来つつあるわよ」

リリー「第二次ネウロイ大戦中は経済が落ち込んだ分ここについた…のか？」

洋子「まあそんなんじゃないかしら」

瀬名「銀行よきようなら、証券よこんにちは」でしたっけ？最近では赤字国債も発行し始めたらしいですし、上向きだって話しか聞きませんね、そんな中我々軍人は遠く異国の地で人類の為にやってるつとことを考えると…なにか悲しいですけど」

洋子「でも銃後を守ってもらえるだけありがたいわよ、あの時のガリアやカールスラント見たく」後には引けず全身あるのみ」ってわけでもないし」

瀬名「ですね…今後こう言うのが突然なくなるってことはあるんですかね、永遠に続くわけでもないでしょうし」

リリー「いわゆるバブル経済の崩壊か？」

瀬名「そうですかね」

リリー「それなら暗黒ウオール街大暴落の木曜日がそうだろう、一次ネウロイのために欧州から流入した資金で株をしてそれが29年10月24日にバブルのように弾け飛んだ、そうだろうか？」

瀬名「確かに、言われてみればそうですね」

リリー「扶桑のあの感じだとあの何十年は飛ばなそうだけどな、まあリベリオンとの関係は最悪だがな」

瀬名「高麗戦争直後よりかは良いと思いますよ」

リリー「あの時は一軍方面軍ごと亡命だからな」

洋子「外交的な問題なだけで国民感情は違うわよねやっぱり」

リリー「だな、だけど嫌ってる奴もいる、扶桑では“百人十色”って言うんだろ？」

洋子「そうね」

瀬名「そういえばこの部隊で吸う人っているんですか？」

洋子「え？」

リリー「なんだお前吸うのか？やめとけやめとけ」

洋子「そうよ、吸うならせめて二十歳超えてからにしなさいよ、空戦に影響でるわよ」

瀬名「吸えと言われれば吸いますよ、でも何もなければ吸いませんよ、情報を集める時には酒とタバコは必需品なんですよ、それで簡単に持ち運べるのがタバコってだけです。となると吸う人は居ないんですね？」

洋子「ええ居ないわよ、今のウィッチは8割が吸わないと思うけどね」

瀬名「別にウィッチが対象ってわけじゃないですよ、その辺の将兵はタバコと火を渡せば機密スレスレなことをポロリと漏らしたりします、我々はそこを狙ってたんです、硬い人は雑談だけで終わりますけどね」

洋子「もしかして尋問ってしないの？イメージ的にそんな感じだけど」

瀬名「尋問はしたことはありませんね、と言うかするんならちゃんとした設備がないと証拠隠滅できないですしそもそも正規軍人相手は無理だと思えますよ」

リリー「ブリタニアの小説家が書いたジェームズ・ボンドって作品をなんか読んだことがあるかあんな風にはならないか流石に」

瀬名「正直あの手の作品を読んでもうーんってなりますね…」

リリー「映画はまだみれてないが見れる暇があれば見たいな」

瀬名「そういえば明日のアラートは誰なんですか?」

洋子「それなら後ろの黒板に書いてあるわよ、明日はリリー、エマね」

瀬名「ああ、自分は…明後日で、香奈さんですか!？」

洋子「ええ、今までのバディはルイスだっただけだあの子夜間哨戒の任も背負ってるから休みよ、香奈ちゃんとは嫌だったかしら?」

瀬名「曹長同士は如何なものかと…」

洋子「あなたが隊長よ」

瀬名「ラジャ」

洋子「とはいえ翌週からは私とだけどね」

瀬名「と言うことは香奈さんは夜間組に?」

洋子「そうね、夜間飛行は80時間未満だから順応訓練も兼ねてね」

瀬名「あれ？でも航空学生なら80時間飛んでるんじゃないですか？」

洋子「私たちの時と違って20時間だそうよ」

瀬名「だから空母でも夜間離着艦訓練してたんですわね…」

洋子「そんなあなたは何時間ぐらい飛んでるのかしら？」

瀬名「まあ…2000時間前後じゃないですかね、それこそ夜間哨戒してましたし」

洋子「2000?!?!?私でも900時間よ!?!」

瀬名「乗つてた機体もT-3ですからね、哨戒の飛行時間はF-4のほぼ二倍ですよ」

洋子「実質1000時間って言いたいのかしら？」

瀬名「そう言うわけではないですけど、今の機体になつてからは夜間哨戒は非常に楽ですよ」

洋子「私たちには関係ないことな気がするわね」

瀬名「さあ、どうなんでしょうかね」

リリー「そんなか？」

瀬名「ええ、特別なヘルメットがあるんですがそれをつければ夜間でも見えやすくなるんですよ」

リリー「陸軍とかのNV<sup>ナイトビジョン</sup>Dか？」

瀬名「そちらで通じましたか、厳密には魔法力を使って増幅させて小型で尚且つ20

00m程度までは見えます」

リリー「歩兵装着型の物で100m前後なのにすごいな」

瀬名「そのヘルメット、機体リーダーも映してくれるので索敵しつつで非常に楽です」

リリー「確かにそれは楽そうだな」

瀬名「燃料の残量やら色々な者確認できるのでいいですよ」

洋子「そういうえば62式の新型ってあるのかしら？」

瀬名「いいや、聞いたことありませんね」

洋子「そうよね…あ」

リリー「どうした？」

瀬名「どうしました？」

洋子「そういうえば今日の書類の中によくわからないものがあつただけど見てくれる

かしら？」

瀬名「私に閲覧権限がないので無理ですね」

洋子「別に閲覧権限のクラス指定はなかったわよだか見ても構わないわちよつと待つ

ててね」

部屋に戻り一枚の手紙を持ってくる

その中には“3203210441220261126204854412”と何



か意味ありげな数字が羅列してある

洋子「わかるかしら？」

リリー「うわ何だこれ」

瀬名「ええ？」

洋子「その反応的に無理か：何なのかしらこれは」

瀬名「：いや？もしかして、メモ帳あります？」

洋子「え？わかったの？」

リリー「ほいメモ帳だ」

瀬名「もしかしたりですけどね：」

とペンを持ち

“あいうえお”

“かきくけこ”

と五十音をメモ帳に書いて行き、縦に1から0、横に1から5を書く

リリー「：あ、そう言うことか」

洋子「え？え？」

3  
2  
0  
3  
2  
1  
0  
4  
4  
1  
2  
2  
0  
2  
6  
1  
1  
2  
6  
2  
0  
4  
8  
5  
4  
4  
1  
1  
2

リリー「32がこれだろ？」

と“し”を指す

瀬名「たぶんですね」

リリー「扶桑語を少し学んでて正解だったな、ゴシユウオンって言うんだよな？」

瀬名「ですね」

洋子「ああ！そう言うことか」

瀬名「昔からですけどたまに飲み込み悪いですよねこの人」

リリー「機転が良いのに悪いからな洋子は」

洋子「お、思いたる節があるから何にもいえない……」

リリー「と言うか瀬名、これって扶桑の暗号じゃないのか？」

瀬名「違うと思いますね、自分も初めてやったので本当にあつてるかどうかすらも不

明です」

と解説を進める数十分して

リリー「“しんがたきはいびよてい” どう言う意味だ？」

瀬名「Scheduled deployment of new aircraft 新 型 機 の 配 備 予 定 ですね」

リリー「つまりは洋子たちに来るってことなのか？」

瀬名「いやわかりません」

洋子「来るんなら嬉しいけど、順応訓練にどのくらいかかるのかしら…」

瀬名「自分は3日から4日程度でしたからすぐだと思えます」

洋子「それはあんたがT―3だったからでしょ、私たちは多分2週間くらいかかるわよ」

瀬名「F―4の転換訓練も受けましたけどI5の方が楽でしたよ」

洋子「本当かしら？」

瀬名「こんなところで嘘ついてなんになるんですか…」

洋子「そうだけどさ」

瀬名「夜もふけてきたので私はお暇します、ではおやすみなさい」

リリー「遅くまで付き合ってもらって悪かったなおやすみ」

洋子「そうね、おやすみなさい」

瀬名「では」

と寝室に行き布団に入る

翌日早朝 5時30分

瀬名「298, 299, 300」

と持参した扶桑刀を使い素振りの連中をする

「あらっ？」

「あ」

瀬名「ん？」

と素振りを中断し声の主を見ると

洋子と香奈が竹刀を持ち歩いてくる

瀬名「あ」

洋子「やっぱりあの人の影響ね」

瀬名「当たり前です我々の師匠ですから」

香奈「瀬名さんも坂本さんから教わったんですか？」

瀬名「ですね、我々の教官でしたから」

洋子「元氣してるんかねえあの人も」

瀬名「さあ、結構なお年ですし辞めたんじゃないですか？」

洋子「そうねえ：佳奈ちゃんの頃はいた？」

香奈「話は聞いた事あるんですがいるかどうかまでは：ちよつと」

瀬名「ま、退官してそうですけどね」

洋子「いやでもあの人が残ってそうじゃないか？」

瀬名「あれ？　そういうえば私たちが終わる時に妊娠した云々って話をしたような…」

洋子「あ！そう言えばそうだったわね…」

瀬名「まあ僕は素振り終わったので戻りますね」

洋子「また朝食の時にね」

と瀬名は自室のシャワーを使い汗を流し、食堂にゆき白湯を呑みつつへブライ語の新聞を片手に「優雅な朝」と言う雰囲気を出している

瀬名「(空母でもらったコーヒーどこに入れたかな早く飲まなきゃな)」

ルイーサ「ああ、瀬名おはよう」

瀬名「ルイーサ少佐おはようございます」

ルイーサ「君は優雅な朝を迎えるんだな」

瀬名「ここにコーヒーと焼きパンでもあればもつと快適です、そして雀の泣く森の中ならもつとですな」

ルイーサ「ここは生憎何もない砂漠だかな」

瀬名「コンゴの方が緑豊かですよ」

ルイーサ「コンゴに居たならコーヒーは飲んだのか？」

とコーヒーを淹れながら言う

瀬名「ええ、非常に美味しかったですよ」

ルイーサ「何を飲んなんだ？」

瀬名「ロブスタ種でしたね、少し街に出るとすぐ押し売りの如く売って来るんですよ  
こっちがお金持ってそうだと思ったらね」

ルイーサ「生活のために必死なんだろうな」

瀬名「ちゃんとやらないとぼったくられますけどね」  
と白湯を飲み切る

ルイーサ「何飲んでたんだ？」

瀬名「白湯ですよ」

ルイーサ「お湯か…カールスラントだと水が不味くて飲めんな」

瀬名「どこの国も変わりませんね、美味しくないなら味をつけて飲めば良いって発想  
は」

ルイーサ「だな、幸いここはこの辺じゃ珍しく井戸水だ扶桑製のフィルターも相まっ  
てそのまま飲めるしな」

瀬名「ですね、水つてのはなんに置いても重要ですからね」

ルイーサ「にしてもヘブライ語読めるのか？」

瀬名「多少ですけどね」

ルイーサ「諜報にはそんなこともいるのか」

瀬名「隊員にヘブライ語圏の方が居たから少し教えてもらったんですよ」

ルイーサ「そうなのか、その子はやはり…」

瀬名「わかりませんが、別任務で亡くなってるかもしれない、僕からは調べようがありませんからねその子は唯一他の部隊に行きましたからね、きつと彼女の元には私は死んだって事になってるでしょうね」

ルイーサ「死んだ事になるか…」

瀬名「まあ彼女が未だ生きてるかは不明ですし何より確認する手段がありませんからね」

ルイーサ「確かにそうだが…どうにか見つけられないのか？」

瀬名「無理でしょうね、名前すら知りませんし」

ルイーサ「な、上官なら名前ぐらい…」

瀬名「敵だろうが味方だろうが名前は知られたらダメなんですよ、そろそろ食事の準備をしますか」

ルイーサ「そうなのか…」

キッチンに立ち朝食を作り始める

瀬名「ルイーサ少佐、本日やるんですよね？」

ルイーサ「ああ、当たり前だ」

瀬名「わかりました」

洋子「あら、率先して瀬名が料理してるじゃないの」

瀬名「この隊員の大半が料理できないことを知ったので率先して作らないと何食わされるかわからないですから」

洋子「んなこと言わなくて良いじゃないの」

瀬名「言いすぎましたすみません」

香奈「あながち間違えじゃないと思うんですけどね」

洋子「大半と言うか扶桑組しかできないの間違えね」

ルイーサ「なんかこう…すまない」

瀬名「そう言えば近くにお店とかってのは」

洋子ルイーサ「ないな（わよ）」

瀬名「ですよね…」

洋子「何か欲しい物でもあったのかしら？」

瀬名「いやまあ…あっても無くても良い物ですのぞ」

洋子「何かしら？」

瀬名「パンケーキでもと思ったんですけどね鶏卵とベーキングパウダーがないぽくて」



洋子「わかった来週の便で頼んでおくわ」

瀬名「…やらかした」

ルイーサ「今なんと？」

瀬名「独り言です気にしないでください」

洋子「バターとホイップクリームも必要よね?！」

瀬名「…まあはい…」

洋子「いやあひさびさに甘い物だわ！」

香奈「こんな隊長初めてみた…」

瀬名「甘い物ちらつかせるところなります…」

ルイーサ「この辺じや甘い物は溶けないチヨコクソツタレ耐熱チヨコプレートぐらだからな」

瀬名「あの、クソ硬い奴ですね…」

ルイーサ「あれは苦手だ、保管庫に腐るほど残ってるさ」

瀬名「ならそれを使ってチヨコ風味にでもしますかね」

香奈「果物類はありませんけど果物ジュースの粉でも入れれば良さそうですね」

瀬名「となると砂糖の分量を減らしても良いかな」

洋子「来週の日曜日は貴方の配属パーティーね!!!」

瀬名「洋子さん落ち着いてくださいあれの話しますよ」

洋子「やめて！やめるから！」

瀬名「さあ朝食作りましょう」

と料理に専念し始める

7時

「いただきます」と食事を開始する

食後

ルイーサ「なら瀬名の体力テストも込めて一応バデイ予定の香奈とランだ」

瀬名「了解です」

香奈「了解です負けませんよ！」

ルイーサ「07:50マルナナゴマルに格納庫集合だな」

格納庫

瀬名「ルートは？」

と腰にポーチをつけて瀬名には見合わない高級そうな時計を装着し言う

ルイーサ「ルートは誘導路だな」

瀬名「了解」

ルイーサ「2人とも用意はいいか？」

瀬名「はい」

香奈「はーい」

ルイーサ「サン、ニ、イチはじめ」

片道500mそれを11回程度し、滑走路の端に着く

香奈「はあはあ…瀬名さんまだ行くんですか」

瀬名「まだ5kmですよ」

と瀬名には不釣り合いとも言えるヘルウエティアの高級時計メーカーであるシャフハウゼンのパイロット・ウォッチを確認しながら言う

香奈「ちよつとま…」

とふらふらと熱くサラサラとしている砂の上に倒れ込む

瀬名「大丈夫ですか？」

香奈「ちよつとふらふらする…」

瀬名「無理について来なくてよかったのに、取り敢えずこれ飲んでください」とポーチから水筒を出す

香奈「え？」

瀬名「もしものために持ってきた物です、重湯です、少し冷えてますがね」

香奈「あ、ありがとう」

と軽く飲み切る

瀬名「手を貸してください、行きますよ」

香奈「ひやあ」

軽々と香奈を持ち上げ背負い

走り出す

香奈「おも」

瀬名「そんなこと言う物じゃありませんよ」

香奈「私より女の子ぽい」

瀬名「男女関係なく失礼に値しますよ流石に」

香奈「なんかごめん」

ルイーサ「大丈夫か」

瀬名「軽い熱中症です」

と格納庫内のベンチに横にさせる

ルイーサ「ならどうするべきだ？」

ルイーサ「どうした？足首でもやったか？」

瀬名「軽い熱中症ですね、とりあえず濡れたタオルで首を元を冷やすでしたよねこう

言う場合は」

ルイーサ「そうだな、エマ！扇風機あるか」

エマ「あるよー」

リリー「ちよつとこつちに持つてきてくれ」

エマ「はーい」

瀬名「濡れたタオル持つてきますね、あるイーサさんは団扇で軽く仰いであげてくだ  
さい」

ルイーサ「わかった」

とキッチンに走る

洋子「そんな急いでどうしたのかしら？」

瀬名「ちよつと濡れたタオルを」

洋子「え？何かあつたのかしら？」

瀬名「香奈さんが軽度の熱中症で倒れてしまつて」

洋子「え？大丈夫かしら？」

瀬名「軽度なので体を冷やしてやればいいと思います」

キッチンで濡れたタオルをボウルに入れ持つてゆく

瀬名「料理用のボウルで悪いですけど」

と軽く絞り両脇や足の付け根、首等の大動脈の通つているところに当ててゆく

リリー「手早いな」

瀬名「救難ウィッチの資格取りましたからね」

リリー「救難ウィッチと言うとパラジャンパーだよな？」

瀬名「リベリオン見たくそこまでのエースではないですけどね、医療も応急措置のみです、本来なら救難員の支援です」

リリー「それでもすごいさ、香奈、何本に見える？」

と指を立てる

香奈「一本」

リリー「なら大丈夫だ、少し横になっとけ」

洋子「香奈ちゃん大丈夫かしら？」

リリー「半日安静にすれば問題ないぞ、あとはちゃんと飯を食うことだな」

洋子「今日は休みにしとくわ、にしても瀬名はどのくらい走ったのかしら？」

瀬名「軽く5・5 kmですね」

洋子「香奈はそれについて行こうと？」

瀬名「ええ、それで終わりにしようとしたらですね」

洋子「今日はいつにも増して日が強いからね、それでも少し走りすぎね」

瀬名「はい、わかってます、昔の癖で走りすぎてしまつて」

洋子「模擬空戦するまで香奈さんのことを見てあげてね」

瀬名「了解」

と腕を組みつつ床に座る

リリー「大胆」

瀬名「別に恥じるような格好じゃありませんし」

リリー「それはそうなんだが…もつと無いのか？」

ルイーサ「ほら、椅子と机持ってきたぞ」

瀬名「え？ありがとうございます」

と椅子に座る

ルイーサ「瀬名、少しトランプゲームでもしないか？」

瀬名「え？」

ルイーサ「判断力の訓練の一つさ、リリーとエマもやるか？」

リリー「いつものか？」

ルイーサ「ああ」

リリー「なら参加する、エマもだろ？」

エマ「うん」

香奈「ジーン」

瀬名「なんです？香奈さん」

香奈「バレてる…」

瀬名「せめて1時間ぐらいは横になってください、明日の飛行に響きますよ」

香奈「ほ、ほら明日来るとは限らないじゃん？」

瀬名「もし来たらって話です」

香奈「…」

リリー「まあ派手に動かないんなら良いんじゃないか？顔色も悪くないし」

瀬名「医者のリリーさんが言うなら良いと思います」

香奈「やったー」

リリー「私は別に医者じゃあないんだがな」

瀬名「医者みたいなものでしょう」

リリーサ「なら始めるぞ」

とポーカーを開始する

数十分後

リリー「瀬名お前強いな」

香奈「うごおお」

瀬名「運がいいだけですよ」



さらに十分後

ルイーサ「今度は私だな」

洋子「で、結局勝ったのは瀬名なのね」

瀬名「こう言うのには無駄に運がいいのが困りどころです」

ルイーサ「本当に強いな……つとそろそろ模擬訓練の時間だな、こっちでは負けはしないぞ」

瀬名「ええ臨むところです」

上空

洋子「2人ともいいかしら？」

とホバリングしながら言う

瀬名「構わないです」

ルイーサ「いいぞ」

洋子「3, 2, 1開始」

と2人とも水平飛行に移り、加速を始め

交差と共に上昇を始める

上昇力では双発の瀬名の方が有利である

高度が10000、20000、30000、40000と数字を増やす中

ルイーサはペイント弾が詰まったRPKを撃ち、命中させようとするが瀬名はそれを巧みに交わしてゆく

ルイーサ「クソッ登らない」

瀬名が同然太陽に向かい飛ぶ

ルイーサ「クソ、太陽か！」

光で視線が遮れ瀬名を見失う、ルイーサは咄嗟に固有魔法である短距離三次元空間把握を使い瀬名を搜索する、使い始めた瞬間瀬名はインメルマンターンを行い加速し、ルイーサの方へと向かう

ルイーサ「なに！」

瀬名「甘いですよ」

ダン：ダン：ダン：ダンと乱雑にペイント弾が放たれる

ルイーサ「まずい！」

と下方に回避軌道を取るがそこはキルゾーンと言わんばかりにハイパワーを叩き込む

ペイント弾は左右のユニット、銃本体に命中している

ルイーサ「ああ」

瀬名「この戦術は対ネウロイでも使えますからね」

と左手には64式7・62mm狙撃銃、右手にはハイパワーを持った瀬名がホバリングでルイーサの前で止まる

ルイーサ「なに!?それを片手で!だから狙いが甘かったのかそれでも当たりそうだった」

瀬名「利き腕じゃないですけどね」

ルイーサ「それでもだ:」

香奈『瀬名ちゃん!!ルイーサさんに勝つなんてすごいよ!!』

瀬名「上昇中はヒヤヒヤものでした」

洋子「体に当てなかったのは貴方の心遣いってところかしらね、昔からわからないね」

瀬名「死ぬ死なないにしろ人は撃ちたくないものですね」

ルイーサ「いっそのこと胴体でフニッシュでよかつたんだかな:瀬名次は勝つからな」

瀬名「まだやるんですか?」

ルイーサ「今日は勘弁だ」

瀬名「ですよ、洋子さんやりますか？」

洋子「いいわよ」

位置につき

ルイーサ「2人ともいいか」

瀬名「いつでも」

洋子「いいわよ」

香奈『洋子さん頑張ってください』

リリー「お前はそつちなんだな、まあ私も洋子が勝と思うが」

ルイーサ「はじめ！」

パンと発砲音と共にどちらとも加速し“バゴオン”という破裂音と共に上昇を開始する、2人の上昇軌道はまるで織り機のように瀬名が左にゆくとそれに合わせ洋子が右から左へを繰り返してゆく

ルイーサ「すごい、あの洋子に食いついていつてる」

リリー「違う、瀬名が洋子を食い付かせてるんだ」

ルカ「洋子さんって扶桑1の現役ウィッチって言われてるんでしょ？」

リリー「らしいな、性能があるとはいえそれを食い付かせ、避けてる瀬名は洋子より

も強いと思うな」

香奈『あ、あの洋子さんが!?!』

リリー「ルイーサですら洋子からは逃げられなかったからな」

ルイーサ「私とは生きる次元が違うんじゃないかと思えるほどだ、でも瀬名はそれを優々と……」

洋子「瀬名! 本気出さない!」

瀬名「いやです」

と水平に水平飛行に移る

洋子「ならここで決めるわよ!」

と62式を乱射し100発入ったボックスマガジンを空にする

瀬名「こういうタイミングでリロードって落ちたものですね!」

と上半身を起こし頬当てもせずにはライフルつを撃つ

洋子「いいやまだよ」

バレルロールを使い弾を回避する

洋子「さあ反撃の時間よ!」

リロードを終えた洋子は問答無用で乱射してするが突然瀬名が視界から消える、だが

洋子はこれを知っていたのか上昇をする

瀬名「チツ、使えないか」

洋子「その技は悔しいほど覚えてるわよ！」

瀬名が消えた理由は

下方に対し体を垂直にし自機速度を急減速させ洋子をオーバーシュートさせるというウイッチだからこそできる技なのである

リリー「なんだあの動き?!」

ルイーサ「今のは…逆コブラ…とても言えばいいのか？」

リリー「洋子が高度を取ったという事はタイミングはわかってたのか」

ルイーサ「だろうな、そのための対策にみえる」

リリー「前にも食らったからその対策ってことか」

ルイーサ「多分な」

洋子「頬当ても無しで打ってくるのがあんたの癖なのよ！」

旋回時に上半身を起こし射撃する

瀬名「わかってるんですけどね！」

と回避しつつ牽制射撃する

洋子「ヴヴ曲がらない」

瀬名「機体が…」

ルイーサ「瀬名はどうして曲げないんだ？戦った感じだともつと曲がると思うんだが」

リリー「古い機体だからって言ってたからそれが原因じゃないか？」

瀬名は古い機の改良ゆえにあまり派手な旋回をすると機体が壊れる可能性があるが故に心配し曲げないのである

すると洋子が急減速し瀬名をオーバーシユートさせる

瀬名「しまった！」

オーバーシユートした瀬名は先ほどと同じように逃げの一手となる

そして数分逃げ

ルイーサ「2人とも弾が少ないだろうな」

リリー「瀬名の方はほとんど攻撃がない、もしかして切れてるのか？」

ルイーサ「それなら申告するだろう」

リリー「そうだよな」

直線に入り、数秒経過し

瀬名がコブラを行ったがそれはただのコブラではなくラダーを使い自分を横向きにし洋子が自分の腹に突っ込んでくる形になった、瀬名は即座にハンドガンに持ち替え、両肩に向けて撃つ洋子の反応速度も負けず劣らず、62式を構えて一発、また一発と発砲するが瀬名が放ったペイント弾が洋子の放ったペイント弾より先に左腕に着弾し、もう一発は銃を握っている右手に命中、瀬名に向けて発砲した弾は一発は左脚と右脚の間を通り、また一発はユニットに命中したのみで終わった

ルイーサ「洋子が負けた…?」

リリー「あの洋子が負けるって…」

香奈『洋子さんが負けたツ!?!』

洋子「負けたあ…」

瀬名「久しぶりにいい戦いが出来ましたね」

洋子「そうね、流石に貴方も腕を上げてるわ」

瀬名「ほとんど変わりませんよ」

洋子「なら私でも落とせろと思っただけだね」

瀬名「運がいいだけです」

洋子「そんな運に負けるなんて…」



瀬名「いつも運が悪いじゃないですか」

洋子「そうだけれど…」

リリー「良く、洋子に勝ったな！瀬名！」

瀬名「運が良かっただけです」

ルイーサ「運がいいだけじゃあんな機動しないだろ」

洋子「瀬名のユニットがちゃんとしてればすぐ負けてたわね」

瀬名「無理ですよ」

ルイーサ「瀬名、実は洋子と同じぐらいの実力なんじゃ…」

瀬名「もしそうだとしたらこんな所に配備されます？仮にも扶桑現役ウィッチ最強の

洋子さんがいるんですし」

ルイーサ「そうだが、それでも優秀な君がここに配備される理由がやはりわからん」

洋子「それは私も気になってるんだけどね」

リリー「いやあんな派手な動きよく出来たな」

瀬名「F/A-15だから出来た動きです」

リリー「それ、ウチにも来ないかなあ、洋子は肩とどこを被弾したんだ？」

洋子「右手に当たったわ」

リリー「痛くないか？」

洋子「全然だけど……アドレナリンが出てるせいかもしれないわ」

瀬名「痛みは残らないですよ、僕も空母にいた時に何発か手を撃たれたので」

洋子「そう……ってなんでそんなに撃たれたのよ貴方は」

瀬名「いや、船内でCCC戦闘訓練の教官をやってましてそれで……」

洋子「ほう……って教官!？」

瀬名「はい、艦長に実務経験がない者よりある者の方がいいって言われまして流されるように……」

ルイーサ「瀬名は流されるんだなよく」

瀬名「知つての通りあまり人と会話しないものですから」

洋子「最初のところに比べたらマシよ、学生時代なんて1ヶ月は“はい”ぐらいしか言わなかった上に小さい声だったからよく教官から怒られたわよ」

ルイーサ「そんなか」

香奈「よーこーさーあーん」

洋子「元気ね」

リリー「休んで欲しいんだかな」

洋子「元気があればいいのよ」

リリー「扶桑人はみんなその理屈だ」

瀬名「そんな物ですね」

と順に着陸して格納庫

香奈「瀬名さんってこんなに強かったんですね…」

瀬名「運がいいだけですよやっぱり」

洋子「その幸運で何回負けてることやら…」

瀬名「さあ」

洋子「私の勝ちの方が少ないわよ絶対」

ルイーサ「そんなにか？」

瀬名「そんなことはないと思います」

洋子「5回ぐらいしか勝ったことないと思うわ、その勝因も風邪ひいてたり、バード  
ストライクしかけたり、だったり和不運だったわけだしな」

ルイーサ「其れは本当に不運だな」

瀬名「バードストライクではリカバリーできそうだったんですけどね」

雑談しているとエンジン音が聞こえ扶桑軍のC-49が着陸する

ルイーサ「扶桑の爆撃機？どうしてここに？」

香奈「え？」

洋子「あっ！」

リリー「これって……」

瀬名「ですぬ、見に行きましようか？」

洋子「私も行くわ」

瀬名「ちよつと待つてくださいいね」

と荷物おきの方にゆきオレンジ色の板を取り戻る

瀬名「行きましよう」

洋子「ええ」

C-49はグランドパスを通り、こちらに向かいつてくる

瀬名「ここでいいかな」

格納庫の真ん前にたちオレンジ色の板を上上げる

C-49は次第に近づき、マーシャリングの前進せよを行うその後は速度を落とさせ  
つつ、ストップさせ、エンジンカットをさせる

数分待つと機体から3名降りてくる

輸送要員と思われる人物が

「お見事なマーシャラーだ」

瀬名「どうも」

「基地司令は…」

洋子「私です」

「ならばこれにサインを、到着確認票です、あとF/A-15の回収に」

洋子「わかりました、すこし時間を」

「大丈夫です、こちらの荷下ろしにもかかりますので」

洋子「ええ」

瀬名は走りで格納庫に戻り

ユニットを回収する用意をする

ルイーサ「なんだ？なんだ？」

瀬名「この古いユニットともお別れです」

ルイーサ「どうしてだ？」

瀬名「これの正式機がくるので」

香奈「いいなあ」

瀬名「香奈さんにもきますよ」

香奈「ウソツ!!」

瀬名「わざわざ嘘つきません」

香奈「ヤッター」

瀬名「(君もよく頑張ったね、お疲れ様)」

ユニットを優しく撫でる

「あのこちらのユニットですかね？」

瀬名「あ、はいそうです。この子をよろしくお願いします」

「瀬名様ですよ？とある方が直接渡せと言つてだ物です、あとユニット引渡しの際を」

瀬名「え？はいありがとうございます」

受け取り、ユニットはフォークリフトで運ばれてゆく

リリー「なんだ？その箱」

瀬名「さあ、とある方かららしいですけど普通の箱ですね」

リリー「心当たりは？」

瀬名「ありますけどこんなの出すような人間じゃないですね」

リリー「そうか」

瀬名「せっかくですし開けますか」

と腰からナイフを取り出し開ける

その中には写真と写真立てが入っている

リリー「瀬名と同僚と艦長？」

瀬名「ええ、ここにくる前に属してたら空母で撮った集合写真ですね」

リリー「と言うことは送り主は艦長さんか」

瀬名「違いますね多分」

と写真立てを手に取り裏返す

リリー「何もないが」

瀬名「いや、あるはず」

裏蓋を外すと折り畳まれた紙が入っている

リリー「本当だ、中身は手紙か？」

瀬名「多分」

広げると内容は

「おはよう、いやこんにちは瀬名、元気してるかしら？まあ元気してるでしょうね。例のユニットは回収させて博物館行きよ安心して、武器を複数送ってたけどみんなで分けて使つてね。第二航空隊のみんなも元気してるか気にしてたわよ、せめて手紙ぐらい書きなさい、もう一つ、洋子ちゃんも元気してるかしら？いや元気してるわよねそりや、新しい部隊の子達とも貴方なら仲良くなれると思うし、そうしてると思う、だからと言って無理しないことね。追記 ユニットや武器の指導をがんばってね 貴方の二番目の母より」

リリー「二番目の母と言うと宮藤元帥か？」

瀬名「そうですね、にしてもこんな文章書いたところ初めてみましたね…」

リリー「こうなんだ…感動とかは？」

瀬名「いや特に、確かに嬉しいですけど…」

リリー「薄情キリンだな」

瀬名「よく言われます」

リリー「にしても見てよかつたか？」

瀬名「特に構いませんよ」

そんなことをしているとユニットの入った木の箱や武器弾薬が運ばれてくる

「あの、宛坂瀬名様はいらっしゃいますかね？」

瀬名「僕ですけど…」

「ユニットと武器の受け取り指定が瀬名様なのでこれにサインを」

瀬名「あ、これですね、軍部と水戸からですか」

「上の連中と関わりがあるんですね」

瀬名「まあはい」

「あと何種類か来るので最後に…」確認を」

瀬名「はいわかりました」



リリー「さつき隊長がしてたサインは？」

瀬名「到着の有無のサインですなあれ」

リリー「そうなのか」

瀬名「受け取るのもめんどくさいんですよ」

リリー「基本的に上に立たないからわからんな」

瀬名「基本的には輸送機の到着の有無、武器の受け取りの有無、弾薬の受け取りの有無、そしてユニット到着の有無ですな」

リリー「なんだそれめんどくさいな」

瀬名「そんな物ですつと」

大小の箱の中から小さな箱を取り出し、開けると

瀬名「これが資料か」

資料の中には

「扶桑 64式小銃」

「カールスラントMG3」

「ベルギカ MAG」

「イベリオン XM207」

「オラーシャ 9K30」

リリー「X M 2 0 7? 初めて聞いたな」

瀬名「やっぱりですか? 自分もそれが気になって」

瀬名「これかな」

と木箱を一つ開ける

箱の中にはM 1 6 にているが少し違う銃火器が入っている

リリー「説明書落ちたぞ」

リリーが拾いあげる

瀬名「本当だ」

リリー「ストナー63、M 1 6をベースにコンポーネント式の銃火器、部品を変

えればA Rやカービンにもなるぞか」

瀬名「これはそのL M G仕様か弾数は幾つです? ドラムで100発程度ほそうです

けど」

リリー「75発だな、最大で150だな」

瀬名「それでも軽いですねこれ」

リリー「5・30だから洋子の持つてる62に比べると5kgも軽いのか」

瀬名「重いですからねあれ」

リリー「なら洋子に持たせるべきか?」

瀬名「それは本人が決めることなので」と残ってる箱も開ける

瀬名「これは64が2丁か」

リリー「こっちはMAGだな」

瀬名「それでこれが：9K30か」

リリー「なんだった？」

瀬名「ストレラー2ですよ、知りませんか？」

リリー「聞いたことあるな、でも当たらないって話だぞ？」

瀬名「多分これは扶桑で改造されてますね、ここの刻印見てください」

リリー「扶桑語だな：扶桑語!」

瀬名「そう言うことです」

リリー「送られてきたと言うことは折り紙つきか」

瀬名「多分そうでしょうね、それでこれが専用のマガジンか」

リリー「6発入りだったよな？」

瀬名「ですね」

リリー「ウィッチランチャーに比べると：だな」

瀬名「あちらは基本無誘導ですから」

リリー「良し悪しがあるか」

「あの、荷下ろしが終わりましたので確認を」

瀬名「あ、はい」

と手物と資料をもとに確認して行く

瀬名「間違えないですね、お疲れ様です」

「ハッ、それでは」

と出てゆく

洋子「この基地の副司令をやってくれないかしら？」

瀬名「階級が足りません」

洋子「そうよねえ…」

瀬名「そう言えばイベリオン製ですけどLMG来たんですけど使います？」

洋子「イベリオン製ってM60と言わないでしょうねえ？」

瀬名「それなら今と大して変わらないですよ、これですよ」

洋子「M16ベースか、弾は5・56ねって軽いわねこれ?!」

瀬名「名称はXM207で重量は5・3kg、弾薬は最大で150発、通常なら75

発です、ぱつと見大型ドラムマガジンが見つからないので75発か100発ですね」

洋子「もしかしてSTANAGマガジン付くのかしら？」

瀬名「みたいです、どうです？」

洋子「取り回しもいいしこれ持とうかしら」

瀬名「使い方は…資料ここに置いてあるので頑張ってくださいね」

洋子「わかったわ」

瀬名「あれ？香奈さんは？」

ルイーサ「あいつならトイレ行ってるよ」

瀬名「あはい」

洋子「え？これってコンポーネント式なの？」

瀬名「そう言えばそうみたいです、他パーツありませんけどね」

洋子「意味ないじゃないの…」

瀬名「軽いつて理由でしょうね」

ルイーサ「その大きな箱の中身は？」

瀬名「ああ、9K30ですね」

ルイーサ「オラーシャのか？」

瀬名「みたいですけど中身は扶桑生産品みたいです、刻印がそうでした」

ルイーサ「その隣二つは？」

瀬名「えっと右がMG3で左がMAGですね一応、使います？」

ルイーサ「MG3少し気になるな」

瀨名「ちよっとお待ちを」

箱を前の机に置く

瀨名「どうぞ、懐かしいんじゃないですか？」

ルイーサ「それがな、私の世代は使ってないんだ…」

瀨名「意外ですね、カールスラントのウィッチは軒並みあると思ってました」

ルイーサ「このサドルマガジンも初めてだ」

瀨名「今は実用的じゃないですからね…MG3も42も」

ルイーサ「重いな…」

瀨名「使われない理由はそれでしようね」

ルイーサ「レートも考えるとRPKの方が使い勝手がいいな」

瀨名「一般ウィッチは20m機関砲とか12m持ちが多い気がしますね特に空軍属は」

洋子「そうね、M61バルカンとかブラウンリングとか多いわよね、海軍だと搭載重量の観点から歩兵改良型だけどね」

ルイーサ「カールスラントだと過去の撤退戦の影響で補給が楽な歩兵用だったりするな」

香奈「戻りました…?」

瀬名「ちようどいいタイミングです、64式届きましたけど使います?」  
箱を開けながら言う

香奈「ほんと!?!」

瀬名「はい、これですわ」

香奈「もちろん使うよ!」

瀬名「使い方は…」

香奈「もちろんわかるよ」

瀬名「ならよかったです」

と渡す

ルイーサ「にしても面白い形してるな」

洋子「ねえ!瀬名!ちよつときて!」

瀬名「なんですか?」

と洋子の方に向かうと

瀬名「…なんでしようこれ」

と箱を開けるとその中にはいつも向かっている64式狙撃銃に似ているが機関部が

44式の系譜なのである

洋子「知ってる？」

瀬名「いや全く、その関連の資料は…ッ！もしかして」

洋子「え？知ってるの？」

瀬名「さつき機密資料受け取りませんでした？」

洋子「ええ、数枚受け取ったっけど」

瀬名「その中にあると思います」

洋子「ちよつと待ってよ」

瀬名「ええ」

瀬名は銃の箱に違和感を感じる

瀬名「もしかして…」

箱をどかすと

そこには全く同じサイズの箱が置いてある

瀬名「なんだ？」

箱を開けると中からは新素材のプラスチックでできたドラムマガジンが二つ入っている

洋子「あつたわよってそれドラムマガジンじゃないの」

瀬名「ええ、しかもめちやくちや軽いですよこれ」



と書類を貰い、マガジンを渡す

洋子「えう、なにこれおもちゃみたいじゃない」

瀬名「M300、AR-1をベースに7.62x51弾をフルオート射撃可能にした改64式狙撃銃、弾倉は最大で75発、使いづらいと思うが使ってやってくれby三木”つて書いてありますね」

洋子「狙撃銃…？」

瀬名「さあ…」

洋子「軽機関銃よねこれ」

瀬名「ですね、しかも反動がでかいので使いづらい思います」

洋子「使うかしら？」

瀬名「…なら使ってみますね」

洋子「あら」

瀬名「ユニットも本制式型になるので多少はマシに」

洋子「なってるのかしらね？」

瀬名「さあ」

香奈「ユニットはどうするの？」

瀬名「明日の昼に飛行訓練を行いたいですね、出来ればですけど」

香奈「やったー」

洋子「座学は…?」

瀬名「しますよ、しないと乗らせたくないですね」

香奈「ぎ、座学…」

洋子「うげげ」

瀬名「と言つて簡単なものですよ、詳細説明ぐらいます」

ルイーサ「おーい瀬名、このマガジンと弾薬、お前のか?」

リリー「多分瀬名のだと思うんだが」

瀬名「マガジンはそれですけど…弾薬は7.62x51<sup>の</sup>ですから汎用だと思うんです

けど…なんだこれ」

ルイーサ「弾頭が赤に塗られてるんだよな、その重そうな箱、二箱分だな」

瀬名「いや特にないんですよね…蓋の裏になんか書いてありませんか?」

ルイーサ「いや特に…ないかな」

蓋を持ちながら言う

瀬名「えー…」

リリー「あ!」

瀬名「どうしました?」

リリー「多分これだろ？」

瀬名「多分これですネ……どこにありました？」

と紙には「新型7・62mm弾試作品だけれど使ってね、弾種はAPHEよ」だそう  
ですネこれ」

リリー「いやあ、箱の内側に入ってたよ」

瀬名「そう言うことでしたか」

基本戦闘機機動

洋子「BFM教本とACM教本が入ってるわよここに」

空中戦機動

瀬名「教本？変わったんですかね？」

洋子「いや……と……特にないわよ」

瀬名「重りとして使えってことでしょうね」

洋子「私の方で保管しとくわね、後の検品頼めるかしら？」

瀬名「指名と言うのならば」

洋子「ならよろしくね」

瀬名「了解です」

2時間後

司令室

コンコンコン

瀬名「入ります」

洋子「ええ」

瀬名「検品が終わりました、ここにサインをください」

洋子「お疲れ様、明日の件のだけけれど」

瀬名「アラートですよね」

洋子「ええ、その時間に座学をやっても問題ないわよね？」

瀬名「え、まあ問題ないと思います」

洋子「ならその時に呼んでちょうだい行くから」

瀬名「なら10時頃にしますよ、来てください」

洋子「わかったわ」

その後は夕食をとり

眠りにつく

翌日10:00、待機室

瀬名「2人とも来ましたね、とりあえずこれをどうぞ」

と薄いパンフレットのようなものを渡す

洋子「えっ？」

香奈「薄い！」

瀬名「言ったじゃないですかF-4変わらないって30分で説明は終わりますよ、いいですか？まず最大負荷は…」

瀬名の言っていた通りほぼ30分で終わる

瀬名「終わりですお疲れ様でした」

洋子「本当、あつさりね…」

香奈「もつと多いのか思ってた…」

瀬名「あとは飛行ですが」

洋子「今するかしら？」

瀬名「許可があれば」

洋子「武装積んで飛ばばアラートも対抗できるわね」

瀬名「なら増槽を搭載するべきですね」

整備班に言い、短距離ミサイル4、中距離ミサイル4と増槽の最大武装でユニットを  
発進させる

瀬名「ん？」

洋子「えっ」

香奈「軽っ！」

瀬名「僕の乗ってた子より機体の推力が増してますね」

洋子「本当に軽いわね：F-4の比じゃないわよ」

香奈「これなら色んな武装詰めるんじゃないですか？」

瀬名「これでもフロントムとあまり変わりませんよ、左回りで迂回上昇しましょうと  
りあえず」

洋子「あれがタバよ」

緩やかに上昇してゆくと下方に綺麗なタバの美しい街並みが見えてくる

瀬名「綺麗ですね」

洋子「そうね」

瀬名「香奈さんは行ったことあるんですか？」

香奈「うん、今年の1月だったと思うけど、海軍の駆逐艦が1隻寄港するって話だから見に行ったんだ、その時に行ったよ」

瀬名「へえ……」

洋子「瀬名もいきたくなかった？」

瀬名「いや特に……行く方法は？徒歩ですか？」

洋子「いや、ジープがあるからそれよ」

瀬名「ああ……道が荒いんですか」

洋子「察しいいわね、そう言うことよ」

瀬名「そろそろ目標高度に近づいたので訓練開始です」

と瀬名の後ろを追うように空中機動の確認をしてゆく

最終項目が終わろうとした瞬間

無線からコール呼び出しがかかる

瀬名《こちら第552戦闘航空団第一小队どうぞ》

《こちら、アカバレーダー、方位360、距離160、高度50、中型ネウロイ1機を確

認、迎撃可能か?》

瀬名《了解》

《湾内低空を低空侵入なため友軍対空砲火に気をつけられたし》

瀬名《了解》「2人ともいいですか?」

香奈「問題ないよ」

洋子「ええ、やっぱり指揮に向いてるわね瀬名は」

瀬名「そう思うなら黙って着いてきてください、行きますよ」

とダイブする

高度100程度で水平に写り目視並びにレーダーでの搜索をする

香奈「レーダーにも反応ありませんね…」

洋子「本当にいるのかしら、

瀬名「場所が場所ですからこの辺は小型艦艇で監視してるはずなんです」

目視で40kmはである位置、アラビア半島側の水域で黒煙が一つ上がる

香奈「あつ！」

瀬名「そう言うことですかわかりました、2人とも高度を500まであげてください  
僕はこのまま行きます」

洋子「わかったわ、気をつけてね、香奈ちゃん行くわよ」

香奈「はいっ！」

2人が緩やかに上昇してゆく

瀬名「嫌な相手ですね本当に……」

いつも以上に光っている海面を見ながら呟き最近もらったばかりのM300のマガ  
ジンを少し青色で塗ってある物に変え、本来対地攻撃用の榴弾を手を持つ

瀬名《お二人さんそろそろ来ますよやっこさん》

と言ったと同時に“水中から”クジラのような巨体が現れる

洋子《何よこの化け物！》

瀬名《2人とも上から攻撃してください》

洋子《了解よッ！》



と瀬名はそのネウロイに対ししたから攻撃しつつ攻撃されたらシールドで受け止める形で戦闘してゆく

洋子《コアが見つからないわ!》

瀬名《こちらもないです、高度1500まで上がりましょう》

洋子《ええ》

ネウロイから離れ高度を取り合流する

洋子「大型ミサイルでもあれば撃破できそうなのだけれどね…」

香奈「でも場所が場所ですし…」

洋子「そうよねえ…」

瀬名「大型ミサイル…あつ」

洋子「どうしたのかしら?」

瀬名「これならいけるかも」

洋子「え?」

瀬名「少し上昇します」

と高度を上げる

瀬名《こちら第552戦闘航空団第一小隊、中型ネウロイ迎撃中、付近にS—125を装備してる防空部隊もしくは防空指揮所はいますか!》

《こちらオラーシャ陸軍第762防空大隊だ、聞こえるどうぞ》

瀬名 《アカバ湾上空のウィッチを照準レーダーで捉えられますか?》

《可能だが》

瀬名 《ならその目標に対し撃ってください!》

《な、何!? 本当にいいのか!? フレンドリーファイアになるぞ!》

瀬名 《構いません! 住民の命か始末書どちらがお好みですか? 私は後者です》

《わ、わかった、1分後に射撃をするやるんならちゃんとネウロイを落としてくれよ》

S—125

史実と違い末端誘導がARRH誘導になっているオラーシャ軍の大型地对空ミサイル

瀬名 《了解》 《2人とも聞こえますか》

洋子 《ええ聞こえてるわ、本当にやるの?》

瀬名 《やることかわりました、ええもちろんやります、だから2人は高度を取って攻

撃準備をしてください》

洋子 《: わかったわ、香奈行くわよ》

香奈 《はい:》

《発射まで残り30秒》

瀬名 《いつでも》

トウリードウヴァアジン ピイストレル  
 《3…2…1…発射》

号令と共にS—125は谷間にある重防空陣地から発射される

同時に瀬名は海面付近にいるネウロイに向かつて徐々に加速し始めるがS—125は最大マツハ3.3で飛翔するため振り切れない。

S—125の中間誘導が地上レーダーより機搭載レーダーへと変更したと思われる瞬間、機搭載レーダーが瀬名より大きいネウロイを捉えそちらに誘導が切り替わる。

瀬名は直後に上昇したとほぼ同時にS—125はネウロイに命中、貫徹400mmを超える直径340mmのHEATはモンロー・ノイマン効果でネウロイの装甲を侵徹し爆発を起こし大穴を開ける、それを見逃さんと洋子が攻撃号令をかける

洋子「攻撃開始」

香奈「了解ですっ！」

洋子「見えたッ！」

とXM207で撃ち込み内部の装甲を削り露出したコアを撃ち抜く、ネウロイは金切り声を上げ粉と化す。

瀬名《こちら第552戦闘航空団第一小隊、ネウロイ一機を撃墜、レーダーに敵影なし、RTB》

《撃墜を確認、中々な策士のようだ、無茶は禁物だぞ》

瀬名《ええ、わかってます》

洋子「はあ…本当かしら」

香奈「本当に無茶振りですよ瀬名ちゃん」

瀬名「これでも善処はしましたよ」

洋子「本当かしら？」

瀬名「ええ」

と言っていると上を赤色に塗られたC—130が通り過ぎる

洋子「郵政省の機体ね何かしら？」

瀬名「わからないですね」

《嬢ちゃん達、ようやった！》

香奈「戻ればわかるんじゃないですか」

洋子「そうね戻りましょ」

と基地に帰還する

「嬢ちゃん達と思つたが坊やも混じつてたか」

と1人の男性が格納庫前で立っている

洋子「なんのご様子ですか？」

「手紙だよ」

ルイーサ 「おい瀬名、電話だ」

瀬名 「えはい」

と電話の元へ行く

「久しぶりだな元気してるか？」

この声に瀬名は聞き覚えしかなかった、正体は榊原さかきばともなり智成扶桑情報局中東支部の職員である

瀬名 「お久しぶりです、私になんのご用ですか」

榊原 「例の件なんだが、レッドフラッグに近いうちに来て欲しいんだわかるか？」

瀬名 「…上官を連れて行っても？」

榊原 「いつか聞くだろうから構わないさ、どうせ彼女洋子だろ？」

瀬名 「多分ですが」

榊原 「じゃあ頼んだぞ」

電話が切れる

次回 手紙

# お手紙

お手紙

「やつと戻ってきた、君にお手紙だよ」

瀬名「ええ？僕にですか」

「ああ、君のお友達からじゃないかな」

瀬名「友達…？」

「差出人は不明なんだけど、発送元が元だから直接さ、ついでに洋子さんにも」

洋子「私もですか」

瀬名「差出人不明…」

と手紙を受け取り発送元を見ると「イスラエル連邦キリヤット・ハMEMシヤラ  
Kiryat Hameemshara  
キリヤット・ハMEMシヤラ、イスラエル連邦の政府管区、首相官邸や諜報機関を有す地  
区」と書かれているのを目にした瞬間、瀬名は唇を噛み締めその手紙をポケットに丁寧  
に入れる

洋子「これだけですかね？」

「ああ、そうさ、じゃあ僕は帰るよ」

と歩いてゆく

洋子「また次」

瀬名「洋子さん」

洋子「ん？」

瀬名「僕の休みっていつですか？」

洋子「えーっと…今日は水曜日だから…来週の月曜日が休みね」

瀬名「少し下に降りたいんですが」

洋子「ええわかかったわ、私が車出そうかしら？」

瀬名「わかりました、できれば朝早く行きたいんですが」

洋子「ええいいわよ、それにしても手紙は？」

瀬名「…見たいものではありませんでした」

洋子「友達からじゃないの？」

瀬名「…旧友ではありません」

洋子「そう…そろそろアラート任務は終わりよ部屋にもドブなりして構わないわ2人とも」

香奈「はいっ」

瀬名「了解です」

瀬名は部屋に戻り

机に座り突っ伏せ

数十分は過ぎただろうか、ポケットに入れた手紙を出し開封する

中には丁寧なブリタニア語で書かれた一枚の手紙が入っている

隊長、お久しぶりです。お元気ですか？

アピルいや、ブラツハ・シユピーゲルです。

WTO情報局第404国際特別航空隊  
あの部 隊は壊滅したと聞きましたがもし届けばと思つてこの手紙を書いてい

ます、きつと軍規や機密いろいろあつて捨てられてるかもしれないかもしれませんが小さな希望に託してイスラエル連邦からこの手紙を郵便に託しました、氏名はわかりませんがきつと届くことを祈つてます。もし届いてこの手紙を読んでいるなら送り返してくださいできるならばお返しください。

あなたの部下 ブラツハ・シユピーゲルより

読み終わる頃には瀬名の目からは涙が溢れ出し

づううううう

と小さな声で泣いていた



コンコンコン

洋子「瀨名、大丈夫かしら？」

瀨名「少し待ってください」

涙を拭きドアを開ける

洋子「泣いてたようだけれど……」

瀨名「入ってください」

と言うとドアを閉める

洋子「何があつたのかしら？あまり良いことではなさそうだけれど、辛いなら私が聞くけれど」

瀨名「いや……今回は嬉しいコトだと思えます比較的……」

洋子「そう……言いたくないなら言わなくても構わないわよ」

瀨名「いつか話すでしょうから話とききます」

洋子「そう」

瀨名「僕の部隊には1人、壊滅前に移転した隊員がいたんですが、その子から手紙が来ました」

洋子「唯一の生き残りってこと？」

瀨名「ええそう言うことになります」

洋子「よかったのかしら……」

瀬名「少なくとも生きてるかはわかりません……でも希望は持てました、一つ言うなら  
これが連中の罫謀報組織じやなければですが」

洋子「罫？」

瀬名「ええ、彼らは人を誘き出すなら拉致監禁全てをやる連中です」

洋子「そんなの」

瀬名「それですが休みについてなんですが」

洋子「そう、その話をしようと来たら泣いてて……」

瀬名「そうなんですか」

洋子「それで、目的地は？」

瀬名「えっと……レッドブラッグっていう扶桑人がやつてるお店です」

洋子「あーあそこね、わかったわ、それと」

瀬名「それと？」

洋子「あー……ごめんなさい忘れたわ……」

瀬名「しつかりしてください中佐どの」

洋子「……あーだめ本当に忘れたわ……あとで出直すわね」

とドアを開ける

ルイーサ「いや、これはだな洋子違くてだ…」

どうにも聞き耳を立ててたようだ

洋子「今回は不問にしますいいね？」

ルイーサ「ああ。感謝する」

瀬名「聞き耳と言つて後半でしょうけどね、洋子も理解してるのかな」

と心の中で思いつつ

送られてきた手紙の住所を送る手紙に写し書き始める

瀬名「(こう言うのってなんで書けばいいんでしょか…)」

ペンを顎につけ数分

ふと喉が渴き台所へゆく

香奈「あ、瀬名」

瀬名「夕食の時間…に早いですけど」

香奈「いやー何にしようかここで考えてたんだよね」

瀬名「ですねえ…野菜炒めとかはどうです？」

香奈「野菜炒め！それでいいね、それで瀬名ちゃんは？困った顔してたけど」

瀬名「え？」

香奈「感だけださっきの手紙？」

瀬名「ええまあそうですけど…」

香奈「返事に困ってるとかならありのままのことを書けばいいんじゃないかな」

瀬名「ありのまま…ですか」

香奈「だといえれば元気がどうかとかさ場所とかは…軍規で言えないけどさ、そう言うなんて言うんだろ…」

ルイーサ「今の気持ちじゃないか？相手がどんな関係の子はわからないがあと最近起きた出来事とかさそう言うのじゃないか」

瀬名「ありがとうございます」

と言いつつ部屋へ戻る

香奈「どつちでしょうね」

ルイーサ「さあ、例の相手とかではなさそうだな」

香奈「どちらかと言うと戦友に向けたって感じじゃないですか？反応的に」

洋子「はあ、あんた達ねえ」

香奈「あ」

お久しぶり、アピル軍曹そして初めましてブラッハ・シユピーゲルさん、ヒーローズ大佐だよ。

君は僕が死んだと報告が行ってるようだが僕は生きています。どこにいるかは機密があるから話せないけれど比較的君の近くにいると思う、僕の名前は宛坂瀬名これが本当の名前、また会える機会があるなら昔言ったように扶桑で美味しい扶桑茶を飲もう。

あなたの上司 宛坂瀬名より

手紙に同封し

司令室へとゆく

コンコンコン

瀬名「宛坂瀬名入ります」

洋子「どうぞ」

瀬名「手紙の郵送を」

洋子「わかったわ、それでさっきの忘れてた話だけれど夜間哨戒って1人でできるかしら?」

瀬名「まあ可能ですが」

洋子「そう、もしルイーサーが負傷とかしたら任せれるかと思ってね」

瀬名「ええ構いませんよ、言ってくればその日でも可能です」

洋子「そんなことはないと思うけれどもその時はよろしくね」

瀬名「了解です、では」

洋子「あ、日曜日のお昼、わかっているわよね？」

瀬名「はいわかってますよ中佐どの」

訓練、訓練と2日訓練を行い土曜日には洋子が頼んでいたデザートセットと各種食品が届く

香奈「瀬名ちゃん、何作る？」

とメモ帳を開きながら言う

瀬名「まあパンケーキ、サンデー、アップルパイ、シフォンケーキとかですかね？」

香奈「まありベリオン料理ばかりだね」

瀬名「それ以外割とめんどくさいものばかりじゃないですか？」

香奈「だよねえ…食べるのはだいたい昼？」

瀬名「昼食代わりにパンケーキ、アップルパイにして夕食を多少豪華にしてサンデー、シフォンケーキですかね、時間かかりますし」

香奈「だね、ならアップルパイとホイップクリーム頼める？」

瀬名「わかりました、アラート待機って誰かいましたっけ？」

香奈「えつと…特にないね、付近に第2艦隊がいるからそれに任せるって」

瀬名「了解です、いい時間なので僕はこれで」

香奈「だね、おやすみ」

瀬名「おやすみです」

翌日早朝 6時

瀬名は素振りを終わらせ新聞片手にもらったコーヒーを啜っている

香奈「ごめん瀬名、遅れた」

瀬名「まあ朝食つてからなのでもう少しはゆっくりできますよ」

香奈「あそつか？」

瀬名「ホイップクリームほどの程度作ります？」

香奈「んー夜の分で冷やしとけば持つかな？」

瀬名「持つと思います、そう言えばチョコレートってどこに保存してあります？」

香奈「持つか、それなら2kgぐらいかな、チョコレートはね冷蔵庫の一番下の奥だね、多分50個ぐらいあったと思うよ」

瀬名「そんなにですか？」

香奈「まあレーションをよく食べてた時期があつたからね」

頭をポリポリ掻きながら言う

瀬名「5kg…今回で使い切れませんね…」

香奈「サンデー用のアイスクリームも作らないとだね」

瀬名「ですね」

香奈「何時頃から始める？」

瀬名「まあ朝食を作り終えてからいいんじゃないですか？」

香奈「だね、じゃあ半には朝食つくろうか」

瀬名「ですね」

瀬名はコーヒーを啜り朝食作りを始めるまで時間を潰す

瀬名「香奈さん、コーヒー入ります？」

香奈「私はいいいかな、苦いの苦手なんだ」

瀬名「そうですね」

ルイーサ「ああ…2人ともおはよう、扶桑人は早いな」

瀬名「働き蟻の扶桑人ですよ」

ルイーサ「キリギリスのリベリオン…安田悠太が言った言葉だったか？」

瀬名「さあ、本人がそんなこと言ってたのかは知りませんよ」

香奈「そう言えば明日下に行くんだよね？」

瀬名「まあはい」

香奈「どこ行くの？」

瀬名「レッドフラッグってところです」



香奈「え？あそこに行くの？」

瀬名「ええそうですね、有名なんですか？」

香奈「この辺だと珍しい扶桑料理とかもやってるから私も一回行っただけですけど美味しくてね！」

瀬名「そうなんです、明日行くの楽しみになってきましたね」

香奈「いいなあ」

瀬名「アラート頑張ってください、何かお土産は買ってきますよ」

香奈「うんよろしく！」

瀬名「そろそろ時間ですね、作りましょ」

香奈「だね」

白米味噌汁の比較的軽めな食事を出す

朝食を済ませ、その他家事をし、10時頃から瀬名たちは昼食となるパンケーキとアップルパイ作りを始める

キッチンからはカッカカッと混ぜる音が鳴り響く

11時ごろ

瀬名「アップルパイ、もう焼きますね」

長方形のアップルパイを5つ作りレンジに2つ入れ、焼き始める

香奈「はい、私の方も少しで生地が出来るよ」

瀬名「そちらの焼き初めはいつ頃になりそうですか？」

香奈「そろそろかな」

瀬名「あと50分ぐらいで行けます？」

香奈「多分！」

瀬名「出来なさそうなら手伝いますけど」

香奈「いける！はず！」

と生地をお玉で掬い上げフライパンに垂らし焼き始める

ジュウウウウといい音といい匂いを立てながら焼かれてゆく

瀬名「期待してます」

とミルク類を取り出しホイップクリームを作り始める

カッカッカッカツと攪拌する音が心地よく聞こえ始める

香奈は一枚、また一枚と焼き上げ

昼食の始まる5分前に最後の一枚を焼き上げるとほぼ同時に瀬名の作っていたアツ

プルパイも出来上がる

瀬名「それが最後ですね」

香奈「うん、とりあえず出来上がりね、え？」

瀬名「どうしました？」

香奈「アツプルパイ5個なんで？4個じゃ？れ

瀬名「ああ、整備士さん達にですよこの分は少し大きいでしょう？」

香奈「ならホットケーキも……」

瀬名「ホットケーキは間に合わないから夜のシフォンケーキを渡そうと思ってたんですけど」

香奈「そっちの方がいつか」

瀬名「僕はそう思いましたね」

香奈「あ、そんなこと言ってないで持って行こう」

瀬名「はい」

とみんなが食卓を囲んでいるなか

香奈「みなさあんできめしたよお！」

香奈がホットケーキの乗ったお皿を置いてゆく

香奈「少し冷えてるかもだけどごめんねー」

と言いつつ配膳してゆく

し終わり瀬名は洋子の対面に座る

瀬名「バターも置いてあるので各自つけて食べてください」

洋子「では頂きます」

「頂きます」と復唱され食べ始める

洋子「ンンンンー美味しいわあ」

いつもの司令室での趣とは近い誰よりも美味しそうにアップルパイを頬張る

瀬名「もつと甘い方がいいですか？」

洋子「んー…まあ夜もあるんでしょう？」

瀬名「ええ」

洋子「それに期待するわ！」

瀬名「そうですか…」

洋子「甘いものってやつぱり最高ねツ！」

瀬名「左様ですか」

とパイを切り分け、洋子の前へ出す

洋子「え？瀬名は？」

瀬名「僕はいいですよ、中佐食べたそうですし」

洋子「ほんとに？」

瀬名「構いませんよ、そもそも僕甘いもの得意じゃないって何回も言ってたと思うんですがね」

洋子「え？」

瀬名「どうぞ食べていいですよ」

洋子「そう！貰うわね！」

瀬名「ええ」

瀬名は顎に手を当てホットケーキとアップルパイを頬張る姿を凝視している

洋子「？何かついてるかしら？」

瀬名「いいえ、よく食べるなあ」と

洋子「そんなことないと思うわ」

瀬名「はあ」

腕時計をチラッと確認する

瀬名「少し離席しますね」

香奈「あ、そろそろだね」

洋子「なにが？」

瀬名「整備のところにアップルパイ持って行ってきます」

洋子「ならいい時間ね」

瀬名「だからです」

とキッチンに行き、アップルパイを持って行き

「軽く温めてください」といい渡す

渡し戻ると食事はほぼ終わっていた

洋子「ごちそうさま」

と最後に洋子が食べ終わり食器を洗い

3時頃から夕食とデザートの準備を開始する

夜7時、いつもより豪華な食事を開始しする

洋子「本当にいつもより豪華ね」

リリー「わざわざ頼んで持ってきてたんだらう？」

エマ「え？」

瀬名「食材をですけどね」

洋子「私の友人が補給にいるからねそこから頼んだのよ」

リリー「前に言ってた人？」

洋子「ええ、そうよ」

瀬名「デザートもありますからね」

エマ「やったー」

洋子「本当はあなたの転属祝なのだけけどね」

瀬名「僕はみんなが食べてくれれば嬉しいですよ」

洋子「まあ嬉しいと思うんだけどね…なにかね」

瀬名「ほら食べないとみんなが食べちゃいますよほら」

と言っている傍からエマが肉を取ってゆく

リリー「お肉いただきー」

洋子「あつ」

瀬名「食べましょう」

その後もジューズを酒のように飲んで、デザートもたらふく食べ、全員が眠りにつく。

翌日早朝、朝食を作りアラート班の為に軽食を作り置きし、出かける用意をし終え少し優雅に飲み物を飲んでいる

香奈「楽しんで来てねー」

瀬名「ええ、アラート頑張ってください」

香奈「もちろん！」

洋子「準備はいいかしら？」

瀬名「ええもちろん」

ルイーサ「そんな時間か、気を付けろを二人とも」

洋子「ええ、ルイーサ基地は頼んだわよ」

ルイーサ「ああ、楽しんで来てな」

洋子「じゃ行ってくる」

瀬名「行つてきます」

香奈「行つてらっしゃーいーねーあ！お土産忘れないでねー」

瀬名「はいはい」

とジープに乗り込み動きだす。

整備されていない道をガタンガタンと揺られ数十分、タバの郊外の海沿いに建てられている二階建ての建物、バーレッドフラッグの駐車場に車を駐車し、建物内に入ってゆく。

「おお！ヨウコじゃあねえか」

洋子「あらお久しぶりです」

「来てなかったが？忙しいのか？」

洋子「ええ」

「だよなあ、マスターは今トイレだからカウンター席にでも座つときな」

洋子「そうさせてもらうわね」

と洋子はカウンター席に座る、瀬名も同じように座ろうとする際に壁にカンツと足が当たる

「その子は？」



洋子「私の部下よ」

「ほお……また増えたのか」

洋子「まあね」

???「お、来てたか」

洋子「お久しぶりです」

タオルで手を拭きながらマスターが来る

マスター「久しぶりだな、瀬名」

ドンとコーヒーを置く

瀬名「ええ」いつもの“連中はどうしたんです？死んだんですか？」

マスター「んなわけねえよ、この時間だから来てないだけさ」

瀬名「残念ですね、それで」

マスター「待って、彼女には……」

瀬名「……」

顎に手を当て数秒考える

瀬名「マスター、どこまで行けると思いますか？」

マスター「さあ俺に聞かないでくれ」

洋子「何があったのかしら？」

瀬名「えつとお：昔ここにいました、2ヶ月ぐらい」

洋子「え？どうして？」

瀬名「任務です」

洋子「マスターとの関わりは？」

瀬名「店主と客」

洋子「…本当に？」

瀬名「…」

瀬名を睨む

「じゃあ俺仕事だから」

と一人だけいた客が出てゆく

瀬名「…何でしょうね」

マスター「嘘下手だな女相手には」

瀬名「相手が悪いです」

洋子「それで本当は？」

マスター「俺はただのソー<sup>情報源</sup>スき、それでだ、瀬名これを渡せとさ」

封筒を取り出し瀬名に渡す

瀬名「はあ…これ如きのために呼んだですか？」

マスター「いいや、Xについても少しだ」

瀬名「!?」

いつもの表情からは想像できない驚いた顔をしている

マスター「わかったことはC A Pキャップのように動いてるってことだ」

瀬名「C A P戦闘空中哨戒ですか…どの辺の地域を？」

マスター「この辺りをだ」  
シナイ半島

瀬名「それじゃ無茶苦茶だ、任務規模を上げるべきだ…」

マスター「僕もそう思っ行ってたさ、でもな先日のアカバ湾のネウロイの時にそいつの約250後方のサファガで同じ波形のXが確認されたんだ」

瀬名「はあ連動してるって言いたいんですか？」

マスター「そうと結論付けたんだとよお上さんは」

瀬名「はあ…これだから連中から離反するんですよ、無茶押し付けて、無理な任務させて、こんな腐った納屋なんて解体させてF M I扶桑軍事諜報部に併合されちまえ」

マスター「そういう君も離反者だろ？」

瀬名「離反して縁を切ったつもりなんですけどね」

マスター「まあ君もあの人に恩義からあるから手伝ってるんだろ？」

瀬名「まあそうですけど、と言うかこの話を彼女の前でしたくなかったですね」

マスター「洋子ちゃんこれに関しては」

洋子「複雑な事情があると思うから私は知りません」

マスター「地位名誉名声全てを守るんならそれが先決だ」

瀬名「そういえばこんなのが」

と例の手紙を見せる

マスター「ふむふむ：なに!?あの子生きてたのか!」

瀬名「そうらしいんですがどう思います?」

マスター「どう思ってそりや驚きさあ：」

瀬名「奴らの罫課報組織だとは?」

マスター「送り元が少し怪しいな：こちらで調査しようか?」

瀬名「お願いします」

マスター「これの返信は?」

瀬名「軍郵便で同じところに送り返してやります」

マスター「それがいいどうせ検閲通るからな」

瀬名「小腹が空いたのでいつものお願いできます?」

マスター「あいよ、洋子ちゃんもいつもの?」

洋子「えうん」

瀬名「はあ…やだな…色々」

???「おおう！瀬名坊生きてたんか」

大柄で壮年白人が現れる

瀬名「あらら、生きてらっしゃったんですね」

???「アタ坊よ、百戦錬磨の超神兵のブルックだぜ」

瀬名「そんな大層な自称でも離反してる時点で同じですよ」

ブルック「クソみたいな勲章もらうぐらいなら俺は辞めたんだよ」

瀬名「本当なのやら」

ブルック「本当さあ」

マスター「ブルック、お前は？」

ブルック「そうだな…いつもので頼む」

マスター「わかった」

ブルック「トイレ借りるぜ」

マスター「ご自由に」

瀬名「にしても此処はいつものように離反者ばかりか？」

マスター「失礼な君たちみたいなの正規の人間も来てるさ」

瀬名「来るんですね、禁止されてそうなのに」

マスター「禁止なんて話は聞いたことあねえな」

瀬名「僕もないです、というか2階はいつものを？」

マスター「だな」

と話していると店の前に車が2両停止する

瀬名「あとのぐらい出てきそうですか？」

マスター「んーもう少しかかると思うな」

瀬名「できれば1ヶ月後ぐらいに延期ですかねっ！」

と洋子の首根っこを掴みカウンター内に投げ落とすとほぼ同時に止まった車のスラ

イドドアが開き、機関銃の射撃が開始される

洋子「きやあ」

瀬名はホルスターから拳銃を抜きシールドを貼りつつカウンターの上を滑りながら

カウンター内へ落ちてゆく

マスター「くそっ！またか！」

瀬名「今回は僕知りませんよっ」

と言いながらカウンターの入り口の方に転がり、伏せながらのリーン撃ちを行う

瀬名「にしてもこのカウンター何ミリなんですか！」

マスター「へへっ、特別に手に入れた複合装甲コンボジットアーマーを30mm、並の銃じゃあ抜けねえぜ」

瀬名「抜けなくても上からガラスが降ってくるんですよこれじゃあ意味ないです」

マスター「へへっそうだなあ」

とショットガンをギョウグ撃ちしながらいう

マスター「洋子の嬢ちゃんは？」

瀬名「隣で伸びてますよ」

マスター「瀬名坊、他にやり方あったんじゃないか？」

瀬名「無理ですよ」

ブルツク「んダアこりやだ」

とトイレの出入り口から顔を覗かせいう

マスター「誰かの大物客さあ」

ブルツク「瀬名坊お前か？」

瀬名「知りませんよっ」

マスター「瀬名、足元の棚にショットガンがあるから渡してやれ」

瀬名「わかりましたっあ」

とショットガンと自分のポーチからライターののような物を取り出し投げ渡す

ブルツク「センキュー、敵はご、ろ、な、は…九人か」

瀬名「決定打がないんですよこっちは」

ブルック「現役を離れたからって言い訳かあ？」

言いつつズドンと撃ち込む

瀬名「グレネードカミング！」

コロンコロンコロンと建物の中央あたりをグレネードが転がる

ドンツと爆発するが破片は装甲板と壁に防がれ誰も怪我をしていない様子

瀬名「クソツタレが」

マスター「このまんまじゃジリ貧だ」

ブルック「妥協案は？」

瀬名「裏口からに逃げるぐらいだろ！」

洋子「うう…せ…な？」

瀬名「うちの眠り姫が起きたのでいつでも、洋子、この指何本に見える？」

と一本指を立てる

洋子「いっ…ぼん」

瀬名「よしよし」

と言いながら洋子をお姫様抱っこの形で持ち上げる

マスター「なら3，2，1で行くぞいいな？」



瀬名「了解です」

ブルック「ケツモチは任せろ、瀬名から道具をもらったしな」

マスター「…3…2…1…GoGo」

シヨットガンを撃ちながら瀬名を裏口の方へ誘導してゆく

瀬名「あ“あ”ッ！」

シールドを張ったのにも関わらず左腕に1発命中するがよろめきなからもドアを抜け、外のガレージにたどり着き、車に乗る

ブルック「おい瀬名坊大丈夫か」

瀬名「僕の事は…後でいいのではやく車を…きてます」とポーチから止血バンドを取り出して器用に片手で巻いてゆく

マスター「ああ、わかってる」

ブルックとS35Pのエンジンが響き加速し大通りを走る

瀬名「洋子…大丈夫か」

と負傷していない腕で洋子の頭をポンポンとする

ダンツダンツと弾は車に命中するが軽度<sup>無</sup>に装甲がギリギリで耐えてくれる

マスター「ブルックさっさと撃ち返せ」

ブルック「撃ち返してるさ！でもな<sup>無</sup>こんなのじゃ無理だ何だよ！」

洋子「うう…うん…せ…な？瀬名？瀬名!?その腕！」

と止血バンドを見ていう

瀬名「大丈夫だよ…よかった無理やり投げたけど無事そうだ」

洋子「今魔法を…」

瀬名「いいや、まだ良いここは狭いから広いところである方が安全だ」

ハンドガンを取り出し窓から腕を出し追いかけてくる連中に向け発砲する

ブルツク「瀬名坊お前は休んどけ」

瀬名「この状態で休めって方が無理ですっ」

マスター「クソツ！正面から憲兵隊だ」

と正面に道路から数メートルの高さでUH-53がホバリングしている

瀬名「全力で突っ走ってください！」

マスター「それしかねえよお！」

と車は加速しヘリに近づくと

へりは危険を察知したのか上昇し、ドアガンを…後方にいる連中に対し撃ち込み始める

BrrrrrrrrrrrrrrrrrrとM134らしき射撃音が聞こえる

マスター「何でだ」

瀬名「止まって、彼等はは多分味方です」

マスター「本当……かあ？」

とボロボロに被弾した車を路肩に止めた瞬間に瀬名がドアを開け押してへりの方へ走ってゆく

洋子「待って！」

瀬名を追いかける

へりは機銃掃射を終え後部ハッチをこちらに向け着陸しハッチを開ける  
すると……そこには30代後半ぐらいの男が立っている

??「怪我してるじゃないか……」

瀬名「ええ、腕に1発」

??「そうか、にしても久しぶりだな瀬名大佐」

瀬名「ええ吉松中佐……いや……今は少将みたいだな」

吉松「おかげさまでね、後ろの彼等も含めて話があるんだ乗ってくれ」

瀬名「ああ、ありがとう、おい二人ともこっちきてくれ」

とマスターとブルックを呼ぶ

マスター「ッ！お久しぶりだな」

吉松「お久しぶりだな、そして初めましてジョン・ブルック大尉」

ブルツク「あんたどうしてそれを」

吉松「扶桑の情報屋を辞めないでもらいたいねまあと言つても今はF U I Bじゃないがね、生憎あんな腐った納屋を破壊するために動いてるのさ」

F M I

瀬名「何があつたんですか」

吉松「そんなことよりも乗り込め、そして君の治療だ、その子…穴吹洋子だったかな治療魔法持ちだろう？」

洋子「えはい…瀬名腕借りるよ」

と腕を取る

瀬名「あい」

と言うと銃を取り出しグリップを噛む

洋子「いくよ」

固有魔法を掛けると「ぐづぐづ」

叫びながら負傷した腕から弾の先つちよが銅色の弾が1発カランコロンと床に落ち、腕は治つてゆく

瀬名「チクシヨウ…」

ポーチから包帯を取り出し腕に巻く

吉松「ほー…直したのに巻くのか」

洋子「治したと言つても雑菌とか入ったりするんですよ、だから巻くんです」

瀬名「治したつてよりも縫ったつて方が近いと思いますの彼女の場合は」

ハンドガンを戻す

吉松「それで話の続きなんだが、F u I Bの連中は君も知つての通り邪智忘却なのは知つてるだろ？」

瀬名「ええもちろん、それに苦しめられてきましたから」

吉松「残念ながら現政権はそれ自由民主党を知らない」

瀬名「まあでしょうね」

吉松「だから俺達F M Iの連中が動いてるわけだそれで君に折り入つてお願いがある」

瀬名「いやです」

吉松「まだ何も」

瀬名「どうせF M Iに加われたでしょう？しかも閣下のくつて言うんでしょう？そんなの見え透いてますよ、だから嫌です」

吉松「閣下に対する恩はないのかね？」

瀬名「恩を作ってくれとは僕は言つてません、あそこで反逆罪で処刑されてても構い

ませんよ」

吉松「はあ…言つてた通り拒否られたな」

瀬名「わかつてたんでしよう？それでも来たつてことは何か別の案があるんでしよう？提示してくださいよ」

吉松「ああ、二つあるどちらかを呑むんで欲しい」

瀬名「中身次第ですよそんなの」

吉松「一つはとある空軍部隊に編入、もう一つは例X狩りに協力、このどちらかだ、1個目の部隊に編入は文字通り」

瀬名「どこの部隊ですか？」

吉松「扶桑独立空挺旅団だ、君も知ってるだろう？」

瀬名「もちろん、悪名高き部隊ですな」

吉松「そうだ、その所属になるかだ、もう一つは次の作戦への参加を約束して欲しい」

瀬名「はい？次の作戦への参加の約束？どう言うことですか？」

吉松「作戦開始の少し前には奴らは非参加になるだろう、それで君も呼ばれないと思うだからうちと共同として参加して欲しい」

瀬名「なら後者で、と言つても結局は作戦に参加させられるんでしよう？でも一つ

条件があります」

吉松「ほう、条件かなんだ」

瀬名「作戦終了後私は軍を退役します、それをスムーズに行けるように根回しをお願いします、最後の砦がなくなります」

吉松「…退役か…それは本気かね？」

瀬名「ええ、最後の砦が落とせなければ諦めます、でも作戦に参加するんでね根回しぐらいはしてください特に人事部」

吉松「ああわかった。君がそこまで本気なのはわかったが人事部を動かすのはめんどくさいんだ、作戦終了からもう少しかかるかもしれないがそれでもいいならな」

瀬名「ええ構いません、そもそも作戦完了時に生きてるかわかりませんが」

吉松「そんな冗談はやめてくれ、それでその穴吹洋子君にも話がある」

洋子「え？私に？」

吉松「君が長を務めるWTO空軍第17 航空基地に新規部隊を設置したいんだWO、扶桑空軍の許可は認可済み、あとは君のハンコ一つだ、んああ書類が増えるデメリツトはあるが運用機はF/A-15が一個小隊<sup>4</sup>といえ夜間哨戒の負担が減るんだ」

洋子「どこに駐留するんですか？」

吉松「基地格納庫の隣に即席の掩体を作るのさ、隊員は女性のみで構成させたんだそ

ちらを使わせてもいいだろう？」

洋子「それ以外の補助部隊は？」

吉松「女性のみで構成された整備隊が16人だな」

洋子「どこで寝るんですか？」

吉松「専用のハウスを建ててるんだ、いわゆるプレハブだよ」

洋子「料理人等は？」

吉松「隊内でやるとのことだ補給も週一で来るはずだ」

洋子「はい、わかりましたならサインを書きますよ」

吉松「交渉成立だな、ここに書いてくれ」

洋子「これでいいかしら？」

吉松「ああ、構わない、ありがとう」

洋子「いえいえこちらこそ」

ブルック「そういうええば襲ってきたのは誰なんだ？」

吉松「瀬名、君はどう思う？」

瀬名「まあ…Bバルトランド諜報部 Iインシャ Sシャ や Gグランド Rロイヤル Uユニオン に雇われた民兵か傭兵じゃありませんね、

おそらく直接部隊じゃないですかね」

と瀬名の体内から出てきた弾を拾い上げ言う



吉松「メツキが剥がれている？」

瀬名「ええ、最近どちらかの国で開発されたと言われている対ウィッチ弾ですね、タングステンメツキを使用してシールドをメツキと共に削り弾が抜けてゆく一般的なシールド量シールド量、基本的にシールドは質量があり12・7x99mm弾を防ぐ、ネウロイのビームが持続的に削ってゆくのでJ数は不明であるが約100〜150MJメガと言われている、やはりウィッチはすごいなら貫徹可能だつて技術の話です」

吉松「厄介だな…対策は聞いているか？」

瀬名「理論上での対策は二重シールドですね、メツキを一枚目で削りきれれば貫通力を失い二枚目で防げるはずですが二重シールドを使うのは能力持ちか努力したいです」

吉松「うむ…」

ブルック「瀬名坊のあれを持ってばいいんじゃないか？あれなら誰でも使えるだろ？」  
と脱出時にブルックに投げ渡したものを持っている

瀬名「これだとシールド量が足りません」

洋子「素人質問で悪いのだけれどソレってなんなのかしら？」

瀬名「素人…まあいい、コレは携行用のシールド発生器、ブルック持って」

ブルック「あいよ」

と手に持ち一歩、二歩と下がり

瀬名「ちよつと待っててくださいね」

ポーチから硬貨を取り出して

瀬名「行きますよ」

軽く力を入れその硬貨をブルックに投げる…と当たりそうな瞬間に本来ウィッチの  
みが使えるシールドが縦1・7 m横1 m程度の長方形で展開される

洋子「えっ!？」

瀬名「これが携行用シールド、この状態で約10秒

装置も一回のみで複数使えるわけじゃないし、ギリギリ7・62を耐えられるかで怪し  
いし」

吉松「これでも我々からすれば十分便利なんだかな」

洋子「いつの間になんなのが兵器搭載型知ってるけれど…」

吉松「まあ一部の兵科でしか運用してないみたいだからね」

洋子「これはどうやって魔法力を？」

吉松「ウィッチが入れるんだよ、兵器搭載型と同じただ違うのは漏れることだな」

洋子「エーテル空気に溶けるんですか？」

吉松「ああ、セナの魔法も同じだろ？」

瀬名「ええ、気づいたら溶けてますよ」

洋子「へー：不便そうね」

吉松「まあ使えるだけマシさ」

瀬名「ところで航空隊いつは来るんです？」

吉松「許可は今貰ったから：明日の夕方か明々後日の朝だな」

瀬名「敷設にそんなに時間かかるんです？簡易式でしよう？」

吉松「いや、掩体の方はすぐできるんだがな遠いところ来るんだよ連中」

洋子「そんなに？」

吉松「多分だがアウストリアの空軍基地さ」

瀬名「どうしてそんなところに：」

吉松「模擬訓練をと早速頼まれてな」

瀬名「はあ：」

洋子「約一万キロ：？」

吉松「そんなもんだったかな、アウストリアからインドで給油してこちらに飛んで来

るんだ長い道のりさ」

洋子「何時間程度？」

吉松「14時間だな補給も含めて」

洋子「うわあ…」

吉松「到着した日と翌日を休みにして欲しいんだが」

洋子「ええ疲れは十分わかるので休みにしますよ」

吉松「恩に着的、つとそろそろ到着だ」

瀬名「設営班を乗せた機体が上空待機ですか…仕事が早いですね」

吉松「まあ君たちが基地にいれば直接乗り込みにきてたからなよくも悪くも襲われてたもんでな」

瀬名「はあ…こう言う時運がないんですよね」

洋子「母も同じように運がないって言ってたわねね」

吉松「ははっ…」

と少し乾いた声で笑う

へりは着陸し格納庫付近で止まる

吉松「マスターとブルックは付いてきてくれるか？」

マスター「ええ、私もあのクソなFUIBには怒りです」

ブルック「おりやあ脅されたからな行くしかないよ」

吉松「ならよろしくな、洋子くんも瀬名くんは降りて設営班を頼むじやあまた数時間  
後来る」

と二人はおり格納庫は向かう

ルイーサ「おい洋子！」

洋子「…言いたいことがあるのはわかるけど待つてちようだい」

ルイーサ「はあ…」

リリー「瀬名!?!腕大丈夫か？」

と包帯で巻かれた腕を見ていう

瀬名「ええ大丈夫ですよ、洋子さんにやって貰いましたから」

リリー「そうか、数日は派手には動かないほうがいいかもな」

瀬名「そうですね…」

と二人で話している後ろで洋子とルイーサが言い争いをしている

洋子「だから新しい部隊が」

ルイーサ「だがこれ以上人数が増えるとだな」

洋子「来る部隊は女性のみ、の戦闘機で…」

ルイーサ「それはウィッチじゃないのか！」

洋子「普通の戦闘機乗りで…」

リリー「なにがあつたんだ？」

瀬名「得体の知れない連中に襲われてるところを扶桑軍の支援部隊が運良く通つて助

けてもらったんですよ」

リリー「最近噂になつてゐる連中のか？」

瀬名「いやわかりません」

リリー「セナが撃たれただけか……ん？」

話しているとC-49が降下し着陸体制に入り見事に接地し速度を落としてゆく

瀬名「来ましたね」

リリー「後ろで話してゐるあの二人のか？」

瀬名「飛行隊自体は明日の夕方以降に到着するので先に設営隊が設営するそうです」

リリー「すぐ建てれるものなのか？」

瀬名「いわゆるプレハブらしいので数時間で終わるんじゃないですかね、あの機体なら重機も輸送できますし」

リリー「航空機はどこに置くんか？うちの格納庫は入らないだろ？」

瀬名「それも即席で掩蔽を作るみたいですよ」

リリー「は……扶桑はすごいな」

瀬名「僕も驚きですよ」

飛行機から部隊の司令官と思われる人間が降りてくる

「司令の穴吹洋子中佐もしくは次席指揮官のシュタイナー・ルイーサ少佐か特務指揮官

の宛坂瀬名曹長のサインをいただきたいんですが…」

瀬名「特務指揮官…?」

「はい、一応そう聞いておりますが誰も聞いて居ないんでしょうか? 諸君理由で情報がまだ届いてないかも知れないと吉松司令はおっしゃられたので」

瀬名「えー…ならここにサインですかね?」

「宛坂瀬名さんでいらっしやいますよね?」

瀬名「ええ」

「かも知れないと思って居たんですが自信がなくて」

瀬名「良く言われます、ここにサインで?」

「あ、はいありがとうございます」

とそのまま飛行機の方に行く

リリー「特務指揮官に昇格おめでとう」

瀬名「昇格じゃないと思うんですよね」

リリー「どうなんだろうな」

と話しているとC-49から各種機材を積んだトラック等が降りてくる

リリー「早いな」

瀬名「夕方までには終わるんじゃないですかね、追加で他の機も着てるみたいですし」

と空を見上げいう

リリー「何人乗ってんだ？」

瀬名「えつと確か最大で400人とかなので半分の200人前後じゃないですかね」

リリー「400!?!2機いれば大隊規模になるのか…すごいな」

瀬名「早いですねえ…すでに測量が始まりましたね」

リリー「おい瀬名…セナ…」

瀬名「は…」

返事をしようとした途端がっしりと肩を掴まれるが瀬名はその掴まれた手を掴み横回しで前に倒しつつ腰のナイフを抜き突き立てる

ルイーサ「せ、せな…」

瀬名「ツ…すいません」

とナイフを戻し両者とも立ち上がる

ルイーサ「こちらこそすまない…戦闘してばかりで無理やり呼ぼうとしてしまつて…」

瀬名「…」

無言で頭を下げる

ルイーサ「頭を上げろ、それで洋子がなにも知らないと言っていたが」



瀬名「本当に僕も何も聞いてないですよ……吉松さんはまた来るとおっしゃったのでその時に資料を持ってくるんじゃないでしょうか」

ルイーサ「そ、そうか」

瀬名「すみません」

ルイーサ「いや本当にいいんだ……」

と去ってゆく

リリー「瀬名、そんなに怒ってるのか？」

瀬名「いや……そんなことないと思ってるんですがはあ……射撃場に行つてきます……」

リリー「怪我悪化されるなよ」

瀬名「わかつてます」

射撃場にゆき、負傷していない方の腕を使い射撃訓練をしていると。

洋子「あらここに居たのね、女の子を押し倒した瀬名くん」

瀬名「……わざとじゃありません」

返事しつつ一発でまた一発と撃って行く

洋子「ええそれは知ってるわ」

瀬名「冷やかしますか？ そうならお引き取りください」

洋子「違うわよ、さっきの特務指揮官になるって話についてよ」

瀬名「いや特に聞いて聞いてないですけど…近くで聞いてたじゃないですか」

洋子「そうよね…本当だとしたら指揮はできるかしら」

瀬名「まあ可能ではありますが」

洋子「ならよろしくできるわよね」

瀬名「喜んで」

洋子「それにしてもやっぱり怒ってるのかしら…」

と何か恐る恐る聞く

瀬名「いいえそんなことない…と思うんですがね」

片手のみでバンツバンツと撃って行く

放たれた弾は的のほぼ中心に命中する。

洋子「利き手とはいえよく当たるわね」

瀬名「当てるように訓練したんですから当たり前です」

洋子「そうよね…」

数分の沈黙…

瀬名「はあ…」

とやはり何かが気掛かりになるのか大きなため息をつく

洋子「…どうしたのかしら」

弾を撃ち切り落としたマガジンを拾い、弾を詰めて行く瀬名を少し離れた椅子に座り洋子が見る

瀬名「あの連中はなんなのか…なぜ襲撃したのか…誰が、何故、どうしてやったのか…」

洋子「そんなこと私に言っても…」

瀬名「わからない…」

洋子「」

こくりと頷く

??「君たちここに居たのか」

洋子「ええ、吉松さん」

吉松「迎えに居なかったがと思つたら瀬名の射撃を見てたのかどうだ？腕落ちたのか

?ああ座つてて構わないよ」

瀬名「はい、特にただ奴らが気になつて」

吉松「それなんだが我々が調査しても構わないだろ？」

瀬名「ええ、私にそんな権限はありませんからご自由に」

吉松「ハハッ、元情報部大佐がなにを」

瀬名「元ですよ」

吉松 「元だろうが経験者は違うんだよ、だから君に特務司令官をやってもらうんだ」  
洋子 「それです！その話について！」

吉松 「してなかったねすまない」

洋子 「書類とかはあるんですか？」

吉松 「ある、だから持ってきたんだよ、その前にだ」

洋子 「なんですか？」

吉松 「瀬名くん、君やってくれるかね？」

瀬名 「嫌だと言ったら？」

吉松 「そりや残念だでも命令だ」かな」

瀬名 「まあ拒否権はありませんよね知ってますよ」

吉松 「当たり前じゃないか、これは」お願い」ではなく」命令」だ」

瀬名 「喜んで承りますどうぞこれからもご贔屓にですかね？」

吉松 「ご贔屓か…よしわかった」

瀬名 「この作戦が終わり自体僕は引退を予定しているのでそれまでお願いしますね」

吉松 「一つお願いがあるんだが…まあそれは後にしよう」

瀬名 「早くしないと僕の気が変わって今すぐ辞退しますよ」

吉松「わかったわかった、作戦完了後にタバの市街地で予定されてる”WOT航空魔法音楽隊ルミナスウィッチーズ”の護衛任務を依頼したいんだかな」

瀬名「連中の護衛任務う？んな無茶言わないでください、アレらを護衛するには憲兵旅団単位が必要なんですよわかります？」

吉松「そりゃわかってるさでもな」

瀬名「でもな？」

吉松「君が出演してほしいとオフアアが…」

瀬名「…なんですって？」

吉松「だからその…な…君が出て欲しいと…」

瀬名「はあ…おちよくるのは後にしてもらえませんか？それで？」

洋子「瀬名が出て欲しいんだってさ」

瀬名「アホじゃないんですか」

片手で顔を覆いながらいう

吉松「俺も無理だと言ったんだが…」

瀬名「誰ですっけ…」

吉松「グレイス・メイトランド・スチュワード大佐だ」

瀬名「ああ、グレイス大佐か、あの人も長いんですからやめればいいんじゃないです

かねじゃないと次が育たないと思いますよええ」

吉松「後任は本人が育ててるらしいがね」

瀬名「受けるかはわかりませんが内容は？」

吉松「空軍の要員として共に飛んでほしい」だそうだ」

瀬名「ほんとにそれだけですか？」

吉松「もちろんだ、彼はその程度しかできないと釘を刺してきたんだぞ？こつちも」

瀬名「参加できるならしますよええ」

吉松「そうか…ありがとう、それで例の航空隊は明日の昼から夕方にかけてだそうだ」

瀬名「了解です、任務内容は共同夜間哨戒と」

吉松「付近で起こる戦闘のCAS任務だ」  
近接航空支援

瀬名「ラジャー…」

立ち上がりとふらつと少しふらつく

吉松「血が足りて無いんじゃないか？」

瀬名「かもしれませんが」

洋子「とりあえずゆっくりしててちょうだい」

瀬名「わかりました、ミーティングルームで横になつてるので建設作業が終わったら教えてください、自分も確認するので」

洋子「ええわかったわ」

ミーティングルーム

香奈「瀬名ちゃん大丈夫？撃たれたんだって？」

瀬名「問題ないですよ、出血しすぎてフラフラする以外は」

香奈「大丈夫じゃないじゃん、何か食べる？」

瀬名「あゝ…何か汁物を」

香奈「朝食の残りの味噌汁があるけど」

瀬名「お願いします」

香奈「はい」

瀬名「…はあ」

と机に突っ伏せる

香奈「何があつたの？」

瀬名「武装した輩に襲われたんですよ」

香奈「なんで？」

瀬名「なんでも言われても僕はわかりませんよ」

と突っ伏せながら頭を振る

香奈「ダヨネ…そういうえば新しい部隊が来るんでしょう？どんな人なの？」

瀬名 「いや知りません。突然指揮官として任命されただけですし」

香奈 「同じ機体使ってるって話だからってつきり知ってるかなあって」

瀬名 「誰から聞いたんですか？」

香奈 「誰ってさつき来たえーつと」

瀬名 「吉松？」

香奈 「そう、吉松さん：その人からF/A—15だつて言つてたけど」

瀬名 「口が早いですねあの人ほんと：それ以外何か言つてました？」

香奈 「その部隊の長が空母にいたつて話も：」

瀬名 「あゝつ：」

香奈 「やっぱり知ってる人？」

瀬名 「来ないとわからないですわね」

香奈 「だよー：はい、味噌汁と一応おにぎり」

瀬名 「ありがとうございます」

香奈 「その怪我をお相手さんが見たらどう思うんだろ：」

瀬名 「どうでしょうねえ：そんな怪我よりも手じやないですかね問題は」

香奈 「そっか：」

瀬名 「これに至つてはどうにもならないと思いますし」



香奈「だよねえ…あ。私今から午前の訓練行ってくる」

瀬名「頑張ってください」

香奈「はい」

瀬名「ごちそうさまでした」

と一人残りの食器を流し台に置き、窓際のソファ―に持参したタオルケットを羽織り仮眠をとる

暗転

1時間、いや2時間ぐらい経った頃

ガチャツとドアが開く音共に

ルイーサ「で、例の部隊は明日の夕方なんだろう？」

洋子「ええ、そうだけけど」

ルイーサ「本当に瀬名が指揮を取れるのか？」

と昼食をしに来た洋子とルイーサを薄目で確認しつつ

洋子「取れると思うけれど」

ルイーサ「ウイツチじゃないんだろ？」

洋子「そんなに心配なのね」

とくすくす笑いながらいう

ルイーサ「いやこれはだな、上官として…だな…」

少しおどおどしながらいう

洋子「あら？瀬名起きてるわね」

ルイーサ「う、うるさかったか？」

瀬名「いや純粹に目が覚めただけです」

ルイーサ「そうか？」

洋子「ご飯は食べるかしら？」

瀬名「まだ良いです」

洋子「わかったわ」

瀬名は立ち上がり自室に向かい、とあるものを持つてくる。

洋子「ラジオ？」

瀬名「東芝の10t11-429f<sup>トランジスタラジオ</sup>ってやつ

のウィッチミリタリーモデルですよ」

洋子「へー、通常のと何が違うのかしら？」

瀬名「ウィッチ用のインカムで聞き取りできます」

洋子「便利そうね」

瀬名「近くにないと使えないので微妙ですけどね」

とソファアの上にある窓の縁にラジオを乗せダイアルを少し弄るとどこかの国の音楽が流れ始める

瀬名「よし」

ソファアに寝つ転がる

ルイーサ「思つてた以上にそういう過ごし方するんだな」

瀬名「〃休みの日は寝るべきだ〃父がかねてより言つてましたから」

洋子「昔つから音楽ばかり聞いてたわよね瀬名は」

瀬名「そうですねっけ？」

洋子「訓練生時代もラジオのクラシックばかり聴いてたじゃ無いの」

瀬名「あー：言われればそうですね、交響曲第9番やボレロをよく聞いてたと思ひますね、対して今も流れては聞きますが」

ルイーサ「意外と感情豊かなんだな瀬名つてもっとそう言うのに無関心かと」

瀬名「失礼ですね、人並みにはありますよ腐つても」

ルイーサ「す、すまない」

洋子「懐かしいわねえ：無理やり映画に連れ回したりしわね」

ルイーサ「何を見たんだ？」

洋子「なんだったかしら：」

瀬名「ローマのウィッチ1945年にローマで起きたとあるウィッチと時のロマーニヤ皇女のマリアとの交流を描いた映画、ローマの休日と酷似している分は多々あるが原作者はどちらもタルトン・トランプ氏である、ローマの休日、大脱走アウストリア出身の小説家、ボーク・ブルックピルの原作の映画、地下室のメロデーですね」

洋子「よく覚えてるわね…」

瀬名「ローマのウィッチは自分が初めて見た映画ですからね」

洋子「確かに最初にあの映画見に行ったわね…」

リリー「香奈ごはん」

香奈「もう少しだから手を洗ってくださいね！」

リリー「あい、瀬名か腕は大丈夫か？」

瀬名「ええ問題ありません」

リリー「そうか、それでも明日ぐらいまでは休めよ」

瀬名「明日の夕方までは休みです」

洋子「そうね、明日の夕方からは書類仕事が残ってるわよ」

瀬名「はあ…いやですね」

洋子「まあ頑張るしかないわね」

香奈「皆さんご飯ですよ、瀬名くんは後で自分で用意するでしょ？」

瀬名「もちろん、昼過ぎに軽食を食べときますよ」  
その後はゆっくりと半日をを過ごし

次回 部隊の到着と夜間哨戒任務